— 茨城県土浦市 —

神立平遺跡

工場関連施設建設事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2009

日立建機株式会社土浦工場
土浦市教育委員会
神立平遺跡調査会

— 茨城県土浦市 —

神立平遺跡
（かんだつだいらいせき）

工場関連施設建設事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2009

日立建機株式会社土浦工場
土浦市教育委員会
神立平遺跡調査会

調査区全景

住居跡SI1完掘

口絵 2

出土縄文土器

出土土製品

序

土浦市は霞ヶ浦や桜川など、豊富な水資源に恵まれ、太古から人々が生活するのに適したところでした。そのため、市内には集落跡や貝塚、古墳など数多くの遺跡が存在しています。このような遺跡は、当時の人々の生活や環境を知る手掛かりとなります。また、現代に生きる私たちが、豊かな生活を送ることのできる先人の業績でもあります。

このような貴重な文化財を保護し後世に伝えることは、私たちの大切な任務であり、郷土の発展のために大切なことです。

この度、日立建機株式会社土浦工場の施設建設に伴い、工場敷地内に保存されていた神立平遺跡について、記録保存を目的とした発掘調査が行われました。

調査の結果は本文に記載されているとおり、多くの貴重な資料が発見されました。これらの資料が、土浦市の歴史の解明に役立つことができれば幸いです。

最後になりましたが、調査から報告書刊行にあたり、日立建機株式会社土浦工場をはじめ、関係者の皆様のご協力とご支援に対し厚く御礼を申し上げます。

平成21年11月

土浦市教育委員会
教育長　冨永　善文

例　　言

1　本書は日立建機株式会社土浦工場の施設建設事業に伴う、茨城県土浦市神立町506－1に所在する神立平遺跡の発掘調査報告書である。

2　確認調査は、日立建機株式会社土浦工場の協力を得て、土浦市教育委員会文化課と上高津貝塚ふるさと歴史の広場が2004（平成16）年3月に実施した。

3　発掘調査は、神立平遺跡調査会(会長 須田直之)が日立建機株式会社土浦工場から委託を受け実施した。担当者は発掘調査が大渕淳志（有限会社日考研茨城)、整理は小川和博（同)、大渕である。

4　発掘調査は、2004（平成16）年8月3日から11月30日まで行い、その後整理作業を行った。

5　本書の編集は小川和博と黒澤春彦（上高津貝塚ふるさと歴史の広場学芸員）が行ない、松本貴子（上高津貝塚ふるさと歴史の広場臨時職員）が補佐した。

6　本書の執筆等整理分担は下記のとおりである。

執　　筆　　第3章・第4章・第5章：小川和博　　第1章第1節・第2章：黒澤春彦
　　第1章第2節：大渕淳志　付編：西本豊弘　小林園子

図版作成　　小川和博

写真撮影　　遺構：大渕淳志　　遺物：嶋田圭吾　　航空写真：(株)シン技術コンサル

写真図版レイアウト：松本貴子　黒澤春彦

8　動物遺存体の分析は、国立歴史民俗博物館の西本豊弘教授にお願いした。

9　調査及び整理では下記の機関、方々よりご協力、ご指導を賜った。記して感謝の意を表したい。(敬称略)

日立建機株式会社土浦工場　日立コメック株式会社　独立行政法人国立歴史民俗博物館
茨城県教育庁文化課　神立コミュニティセンター
川島尚宗　小林謙一　斉藤弘道　常松成人　永嶋正春　松本貴子

10　本遺跡の資料は、上高津貝塚ふるさと歴史の広場が保管する。

凡　　例

1　神立平遺跡の記号は、神立に所在する神立平遺跡の略として「KK」と表記する。

2　遺構番号について、遺構の種別ごとに付したが、調査の過程で遺構でないと判断したものは欠番とした。

3　土層や遺物における色相の判断は「新版標準土色帖」（日本色研事業株式会社）を使用した。

4　各遺構の実測図は、原図、竪穴住居跡等1／20、付属施設1／10を使用し、縮尺1／3を基本とした。

5　実測図中の標高は、すべてm単位で示している。

6　本文・図版の記号は下記のとおりである。なお、原稿や台帳、遺物注記にもこの記号を用いている。

「SI」竪穴住居跡、「SK」土坑、「P」ピット、「K」攪乱

7　遺物図版中の実測遺物に付した番号は、遺構図や遺物出土状況図、写真図版の番号に一致する。

8　遺構図中におけるスクリントーンの指示は下記のとおりである。

焼土　　貝　(疎)　(密)

9　遺物の縮尺は1／3を基本としたが、大形遺物は1／4、小形遺物は1／2など、大きさにより変えている。

10　遺物実測図のスクリントーンは赤彩を示す。

神立平遺跡調査会組織（平成16・17年度）

会　　長	須田直之（土浦市文化財保護審議会長）
副 会 長	石毛一美（土浦市教育委員会教育次長：16年度）　日下部和宏（同：17年度）
理　　事	大塚　博（同市文化財保護審議会委員）
	来栖忠雄（土浦市都市整備部建築指導課長：16年度）　伊藤賢司（同：17年度）
	広瀬昌則（土浦市教育委員会参事兼文化課長）
監　　事	堀越昭二（土浦市文化財愛護の会会長）
	岩沢　茂（土浦市教育委員会参事兼青少年課長：16年度）
	久松一夫（土浦市教育委員会参事兼教育総務課長：17年度）
事務局長	宇津野利雄（上高津貝塚ふるさと歴史の広場館長）
事務局次長	三須洋一（同館長補佐：16年度）　塩谷　修　（同主査兼係長：17年度）
事 務 局 員	堀部　猛（土浦市教育委員会文化課主幹、上高津貝塚ふるさと歴史の広場主幹：17年度）
	比毛君男（上高津貝塚ふるさと歴史の広場主幹、土浦市教育委員会文化課主幹：17年度）
事務局員兼出納員	黒澤春彦（上高津貝塚ふるさと歴史の広場係長）

調　査　者　名　簿

確認調査　　関口　満　石川　功（上高津貝塚ふるさと歴史の広場）　堀部　猛（教育委員会文化課）

発掘調査

主任調査員　大渕淳志（有限会社日考研茨城）　小川和博（有限会社日考研茨城）

調　査　員　遠藤啓子（有限会社日考研茨城）　五十嵐聡江（筑波大学院生）

福田礼子（上高津貝塚ふるさと歴史の広場臨時職員）

調査補助員　松林秀和（明治大学学生）

猪野沙弥香　太田由紀　加納久美子　佐藤はづき　古矢勝重　水之浦和泉

（以上筑波大学学生）

整　　理

主任調査員　小川和博　大渕淳志

調　査　員　遠藤啓子　嶋田圭吾

事　　務　　鈴木ひと美

発掘調査作業員

新井栄子　泉　章子　市原　伸　入江一夫　上野百合子　海老原龍生　大久保敦子　大久保俶治
大坪美知子　小野　豊　小貫徹也　皆藤久子　加藤明美　加藤記代　川田光子　川村定義　木村時政
小松崎廣子　今野光恵　今野理恵　斉藤与志朗　佐賀　剛　佐賀　実　下山豊二　露久保三郎　寺嶋靖子
友部政夫　中島貞雄　中島とみ子　中島秀雄　中根とし子　中野富美子　中村　薫　長嶺道子　浜田久美子
廣瀬和子　藤井　操　益子幸子　増山千伊子　矢口　勇　矢口英夫　矢口みち　谷中　昌　横田利男
吉田みち

整理調査作業員

大久保敦子　大野美佳　大渕由紀子　小川知美　中野富美子

目　次

口絵
序
例言　凡例　神立平遺跡調査会組織　調査者名簿
目次　挿図目次　写真図版目次
第１章　調査の経緯と経過 …… 1
　第１節　調査に至る経緯 …… 1
　第２節　調査日誌 …… 1
第２章　環境 …… 3
　第１節　地理的環境 …… 3
　第２節　歴史的環境 …… 3
第３章　調査 …… 8
　第１節　調査の成果 …… 8
　第２節　調査方法 …… 12
第４章　遺構と遺物 …… 13
　第１節　住居跡 …… 13
　第２節　土坑 …… 136
　第３節　遺構外出土遺物 …… 241
第５章　総括 …… 246
付編　土浦市神立平遺跡出土の動物遺体 …… 253

挿　図　目　次

第１図　周辺の地形図…… 4
第２図　周辺の縄文時代遺跡…… 6
第３図　周辺の主な縄文後晩期遺跡…… 6
第４図　調査区位置図…… 8
第５図　遺構配置図…… 9･10
第６図　基本層序…… 11
第７図　グリッド設定図…… 12
第８図　住居跡SI01実測図(1) …… 14
第９図　住居跡SI01実測図(2) …… 15
第10図　住居跡SI01出土遺物(1) …… 16
第11図　住居跡SI01出土遺物(2) …… 17
第12図　住居跡SI01出土遺物(3) …… 19
第13図　住居跡SI01出土遺物(4) …… 21
第14図　住居跡SI01出土遺物(5) …… 22
第15図　住居跡SI01出土遺物(6) …… 23
第16図　住居跡SI01出土遺物(7) …… 24
第17図　住居跡SI01出土遺物(8) …… 25
第18図　住居跡SI01出土遺物(9) …… 26
第19図　住居跡SI01出土遺物(10)…… 27
第20図　住居跡SI01出土遺物(11)…… 28
第21図　住居跡SI01出土遺物(12)…… 29
第22図　住居跡SI01出土遺物(13)…… 30
第23図　住居跡SI01出土遺物(14)…… 31
第24図　住居跡SI01出土遺物(15)…… 32
第25図　住居跡SI01出土遺物(16)…… 34
第26図　住居跡SI01出土遺物(17)…… 35
第27図　住居跡SI01出土遺物(18)…… 36
第28図　住居跡SI01出土遺物(19)…… 37
第29図　住居跡SI02実測図…… 39
第30図　住居跡SI02出土遺物(1) …… 40
第31図　住居跡SI02出土遺物(2) …… 41
第32図　住居跡SI03,07実測図(1) …… 42
第33図　住居跡SI03実測図(2) …… 43
第34図　住居跡SI03出土遺物(1) …… 45
第35図　住居跡SI03出土遺物(2) …… 46
第36図　住居跡SI03出土遺物(3) …… 47
第37図　住居跡SI03出土遺物(4) …… 49
第38図　住居跡SI03出土遺物(5) …… 50
第39図　住居跡SI03出土遺物(6) …… 51
第40図　住居跡SI03出土遺物(7) …… 52
第41図　住居跡SI03出土遺物(8) …… 53
第42図　住居跡SI03出土遺物(9) …… 54
第43図　住居跡SI03出土遺物(10)…… 55
第44図　住居跡SI03出土遺物(11)…… 56

第45図　住居跡SI03出土遺物(12)…… 57
第46図　住居跡SI04実測図…… 59
第47図　住居跡SI04出土遺物…… 61
第48図　住居跡SI05実測図…… 63
第49図　住居跡SI05出土遺物…… 63
第50図　住居跡SI06実測図(1) …… 64
第51図　住居跡SI06実測図(2) …… 65
第52図　住居跡SI07出土遺物…… 66
第53図　住居跡SI08実測図…… 67
第54図　住居跡SI09実測図…… 69
第55図　住居跡SI09出土遺物…… 69
第56図　住居跡SI10実測図…… 70
第57図　住居跡SI10出土遺物…… 71
第58図　住居跡SI11実測図(1) …… 72
第59図　住居跡SI11実測図(2) …… 73
第60図　住居跡SI11出土遺物(1) …… 74
第61図　住居跡SI11出土遺物(2) …… 75
第62図　住居跡SI11出土遺物(3) …… 76
第63図　住居跡SI12実測図(1) …… 78
第64図　住居跡SI12実測図(2) …… 79
第65図　住居跡SI12出土遺物(1) …… 80
第66図　住居跡SI12出土遺物(2) …… 81
第67図　住居跡SI13実測図(1) …… 82
第68図　住居跡SI13実測図(2) …… 83
第69図　住居跡SI13出土遺物…… 83
第70図　住居跡SI14実測図(1) …… 85
第71図　住居跡SI14実測図(2) …… 86
第72図　住居跡SI14出土遺物…… 86
第73図　住居跡SI15実測図…… 88
第74図　住居跡SI16実測図…… 89
第75図　住居跡SI16出土遺物…… 90
第76図　住居跡SI17実測図(1) …… 92
第77図　住居跡SI17実測図(2) …… 93
第78図　住居跡SI17出土遺物(1) …… 93
第79図　住居跡SI17出土遺物(2) …… 94
第80図　住居跡SI18実測図…… 96
第81図　住居跡SI18出土遺物…… 97
第82図　住居跡SI19実測図(1) …… 99
第83図　住居跡SI19実測図(2) ……100
第84図　住居跡SI19出土遺物(1) ……100
第85図　住居跡SI19出土遺物(2) ……101
第86図　住居跡SI19出土遺物(3) ……102
第87図　住居跡SI20実測図(1) ……104
第88図　住居跡SI20実測図(2) ……105
第89図　住居跡SI20出土遺物(1) ……106
第90図　住居跡SI20出土遺物(2) ……107
第91図　住居跡SI20出土遺物(3) ……109
第92図　住居跡SI20出土遺物(4) ……110
第93図　住居跡SI21実測図(1) ……111
第94図　住居跡SI21実測図(2) ……112
第95図　住居跡SI21出土遺物……112
第96図　住居跡SI22実測図(1) ……114
第97図　住居跡SI22実測図(2) ……115
第98図　住居跡SI22出土遺物(1) ……115
第99図　住居跡SI22出土遺物(2) ……116
第100図　住居跡SI23実測図……118
第101図　住居跡SI23出土遺物……119
第102図　住居跡SI24実測図……120
第103図　住居跡SI24出土遺物……121
第104図　住居跡SI25実測図……122
第105図　住居跡SI25出土遺物……122
第106図　住居跡SI26実測図……123
第107図　住居跡SI26出土遺物……123
第108図　住居跡SI27実測図(1) ……125
第109図　住居跡SI27実測図(2) ……126
第110図　住居跡SI27出土遺物(1) ……127
第111図　住居跡SI27出土遺物(2) ……128
第112図　住居跡SI28実測図……130
第113図　住居跡SI28出土遺物……131
第114図　住居跡SI29出土遺物……132
第115図　住居跡SI29実測図……133
第116図　住居跡SI30実測図……135
第117図　住居跡SI30出土遺物……135
第118図　土坑SK01,02,03,04,05,06,25
実測図……137
第119図　土坑SK07A・B,08,09,10,11,12,13
実測図……139
第120図　土坑SK14A・B,15,16,17,18,19,20,
21,22実測図…… 141
第121図　土坑SK23,24,26,27A・B,28,30
実測図……143
第122図　土坑SK29,31,32,33,34,35,36,37,
39実測図……147
第123図　土坑SK38,40,41,42,43,44実測図 ……149
第124図　土坑SK45A・B,46A・B,47,48,49,50,51,
52実測図……151
第125図　土坑SK53,54,55,57A・B,59,62A・B
実測図……153
第126図　土坑SK56,58,60,61,63,64,65,67,191
実測図……155
第127図　土坑SK63,66,68,69,70,71,72,73
実測図……157
第128図　土坑SK74,75,76,77,78,79,91
実測図……160
第129図　土坑SK80,81,82,83,84,85,86,87,
88A・B実測図……163

第130図　土坑SK89,90,92,93,94,95実測図……165
第131図　土坑SK96,97,98,99,100,101,102
実測図……168
第132図　土坑SK103,104,105,106,107,108,
109実測図……171
第133図　土坑SK110,111,112,113,114,115,
116実測図……173
第134図　土坑SK117,118,119,120,121,122
実測図……175
第135図　土坑SK123,124,125,126,127,128
実測図……177
第136図　土坑SK129,130,131,132,133,134,135,
137実測図……179
第137図　土坑SK136,138,139,140,141,142,
149実測図……182
第138図　土坑SK143,144,145,146,147,148,150,
151実測図……184
第139図　土坑SK152,153,154,155,156,158
実測図……187
第140図　土坑SK157,159,160,161,162実測図…189
第141図　土坑SK163,164,165,166A・B,167,168,
169実測図……191
第142図　土坑SK170,171,172,173,174,175,176,
177実測図……193
第143図　土坑SK178,179,180,181,182,183
実測図……195
第144図　土坑SK184,185,186,187,188,189,
190実測図……197
第145図　土坑SK01,02,03,04,05出土遺物……198
第146図　土坑SK06,07,08,10出土遺物……199
第147図　土坑SK11,12,13出土遺物……200
第148図　土坑SK14,15,16,17,18,19,21,22
出土遺物……201
第149図　土坑SK23,24,25,26,27,28,29,31
出土遺物……202
第150図　土坑SK30,32,33,34,35,36,37
出土遺物……203
第151図　土坑SK38,39,40,41,42,43,44,45A
出土遺物……204
第152図　土坑SK46A,47,48出土遺物……205
第153図　土坑SK49,50,51,52,53出土遺物……206
第154図　土坑SK54,55,56,57A,58,59,60
出土遺物……207
第155図　土坑SK61,62A,63,64,65,66,191
出土遺物……208
第156図　土坑SK67,68出土遺物……209
第157図　土坑SK69,70,71,72,73,75出土遺物…210
第158図　土坑SK74,76,77,78出土遺物……211
第159図　土坑SK79,80,83,84出土遺物……212
第160図　土坑SK82,85,86出土遺物……213
第161図　土坑SK87,88A出土遺物……214
第162図　土坑SK89(1)出土遺物……215
第163図　土坑SK89(2)出土遺物……216
第164図　土坑SK90,91,92,93,96出土遺物……217
第165図　土坑SK94(1)出土遺物……218
第166図　土坑SK94(2),95出土遺物……219
第167図　土坑SK97,99出土遺物……220
第168図　土坑SK100,101,102,104出土遺物……221
第169図　土坑SK105,106,107,108,110,111
出土遺物……222
第170図　土坑SK109出土遺物……223
第171図　土坑SK112,114,115,117出土遺物……224
第172図　土坑SK119,120,121(1)出土遺物……225
第173図　土坑SK121(2),122,123,124(1)
出土遺物……226
第174図　土坑SK124(2),127,130,131
出土遺物……227
第175図　土坑SK129,132出土遺物……228
第176図　土坑SK133,134,135,136,137,139,142
出土遺物……229
第177図　土坑SK138,141,143,144,146
出土遺物……230
第178図　土坑SK145,147,148,149,150
出土遺物……231
第179図　土坑SK151,152,153,155(1)
出土遺物……232
第180図　土坑SK155(2),156出土遺物……233
第181図　土坑SK157出土遺物……234
第182図　土坑SK158,159,160,161出土遺物……235
第183図　土坑SK163,164出土遺物……236
第184図　土坑SK165,166A,170,171出土遺物… 237
第185図　土坑SK167,174,175,176,177
出土遺物……238
第186図　土坑SK178,179,182,183
出土遺物……239
第187図　土坑SK180出土遺物……240
第188図　遺構外出土遺物(1)……242
第189図　遺構外出土遺物(2)……244
第190図　遺構外出土遺物(3)……245
第191図　時期別住居跡分布図(1)……249
第192図　時期別住居跡分布図(2)……250
第193図　貝ブロック出土分布図……251
付図1　遺構配置図

写真図版目次

口絵1　調査区全景　住居跡SI1完掘
口絵2　出土縄文土器　出土土製品
PL.1　住居跡SI1完掘　住居跡SI2完掘
PL.2　住居跡SI3・7完掘　住居跡SI3入口施設
住居跡SI3炉跡　住居跡SI3遺物出土状況
住居跡SI4炉跡
PL.3　住居跡SI4完掘　住居跡SI5完掘
PL.4　住居跡SI6完掘　住居跡SI8完掘
PL.5　住居跡SI9完掘　住居跡SI10完掘
PL.6　住居跡SI11完掘　住居跡SI11炉跡
住居跡SI11遺物出土状況
PL.7　住居跡SI12完掘　住居跡SI12遺物出土状況
PL.8　住居跡SI13完掘　住居跡SI14完掘
PL.9　住居跡SI15完掘　住居跡SI16完掘
PL.10　住居跡SI17完掘　住居跡SI18完掘
PL.11　住居跡SI19完掘　住居跡SI20完掘
PL.12　住居跡SI21完掘　住居跡SI21炉跡
住居跡SI21遺物出土状況
PL.13　住居跡SI22完掘　住居跡SI23完掘
PL.14　住居跡SI24完掘　住居跡SI25完掘
PL.15　住居跡SI26完掘　住居跡SI27完掘
PL.16　住居跡SI28完掘　住居跡SI28炉跡
住居跡SI29炉跡
PL.17　住居跡SI29完掘　住居跡SI30完掘
PL.18　土坑SK89　土坑SK27　土坑SK41
土坑SK55　土坑ＳK135・137
PL.19　土坑SK151・152　土坑SK162　土坑SK155
土坑SK155遺物出土状況　土坑SK170
土坑SK173　包含層遺物出土状況
PL.20　住居跡SI1出土遺物
PL.21　住居跡SI1出土遺物
PL.22　住居跡SI1出土遺物
PL.23　住居跡SI1出土遺物
PL.24　住居跡SI1出土遺物
PL.25　住居跡SI1出土遺物
PL.26　住居跡SI1出土遺物
PL.27　住居跡SI1出土遺物　住居跡SI2出土遺物
PL.28　住居跡SI3出土遺物
PL.29　住居跡SI3出土遺物
PL.30　住居跡SI3出土遺物
PL.31　住居跡SI3出土遺物
PL.32　住居跡SI3出土遺物
PL.33　住居跡SI3出土遺物
PL.34　住居跡SI4出土遺物
PL.35　住居跡SI5出土遺物　住居跡SI7出土遺物
住居跡SI10出土遺物
PL.36　住居跡SI11出土遺物
PL.37　住居跡SI11出土遺物　住居跡SI12出土遺物
PL.38　住居跡SI12出土遺物
PL.39　住居跡SI13出土遺物　住居跡SI14出土遺物
住居跡SI16出土遺物
PL.40　住居跡SI17出土遺物
PL.41　住居跡SI18出土遺物　住居跡SI19出土遺物
PL.42　住居跡SI20出土遺物
PL.43　住居跡SI21出土遺物　住居跡SI22出土遺物
PL.44　住居跡SI22出土遺物　住居跡SI23出土遺物
住居跡SI24出土遺物
PL.45　住居跡SI27出土遺物
PL.46　住居跡SI28出土遺物　住居跡SI29出土遺物
住居跡SI30出土遺物
PL.47　土坑SK1出土遺物　土坑SK6・7出土遺物
土坑SK8出土遺物　土坑SK12・13出土遺物
PL.48　土坑SK30・34・35出土遺物
土坑SK46出土遺物　土坑SK13出土遺物
土坑SK45出土遺物
PL.49　土坑SK47・50・51出土遺物
土坑SK64・65・66出土遺物
土坑SK68出土遺物
PL.50　土坑SK82出土遺物
土坑SK80・83・84・86出土遺物
土坑SK71・75・87出土遺物
PL.51　土坑SK88A出土遺物　土坑SK89出土遺物
PL.52　土坑SK89出土遺物　土坑SK94出土遺物
PL.53　土坑SK90・91・92出土遺物
土坑SK97出土遺物　土坑SK93・96出土遺物
土坑SK99・101出土遺物
PL.54　土坑SK102・104出土遺物
土坑SK109出土遺物
土坑SK119・121出土遺物
PL.55　土坑SK120出土遺物　土坑SK124出土遺物
PL.56　土坑SK132出土遺物
土坑SK145・149・150出土遺物
土坑SK129出土遺物　土坑SK141出土遺物
土坑SK155出土遺物
PL.57　土坑SK155出土遺物　土坑SK157出土遺物
PL.58　土坑SK159出土遺物　土坑SK163出土遺物
土坑SK166A出土遺物
PL.59　土坑SK178・179・182出土遺物
土坑SK180出土遺物　遺構外出土遺物
PL.60　遺構外出土遺物

第１章　調査の経緯と経過

第１節　調査に至る経緯

2004（平成16）年２月４日、土浦市教育委員会文化課に日立建機株式会社土浦工場〔以後日立建機（株）〕より、工場増設に伴う埋蔵文化財の取扱いについての問い合せがあった。予定地は工場の敷地内であるが、1973（昭和48）年の工場建設時に、茨城県教育庁文化課の指導のもと神立平遺跡として登録され、グランドとして保存していた場所であった。その後日立建機（株）では、遺跡である旨を周知する説明版を建て保存を図っていた。

２月26日、日立建機（株）立会いのもと、市文化課と上高津貝塚ふるさと歴史の広場職員で現地踏査を行ない、確認調査の方法等、今後の進め方について協議を行なった。

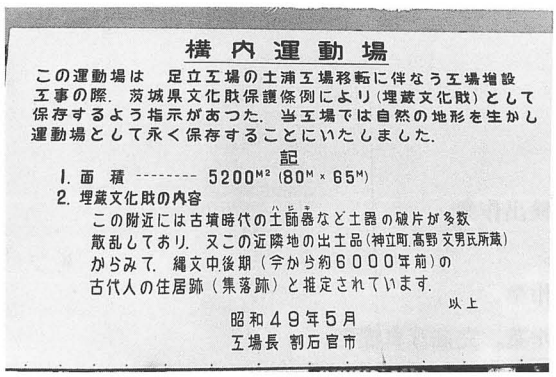
３月16日から19日まで、遺構の密度や遺跡の性格を把握するため、日立建機（株）の協力を得て確認調査を実施した。調査の結果、現況は盛り土により平坦であるが、旧地形は北東の谷に向かって傾斜し、集落は縄文時代後期から晩期のもので、地点貝塚の存在や、遺構は極めて濃密であることが確認できた。

５月から６月にかけて確認調査の結果をもとに協議を進めたが、現状保存が困難であることから発掘調査を行い記録保存することで合意した。

調査は神立平遺跡調査会（会長 須田直之）を結成し、有限会社日考古研茨城の大渕淳志、小川和博を主任調査員として実施することになった。発掘調査の委託契約は７月に締結した。表土除去は７月26日から開始し、発掘調査は８月３日から行なった。

文化財保護法関連では、日立建機（株）から出された57条の２を６月29日付けで、神立平遺跡調査会から出された57条は６月30日付けで、茨城県教育長宛に進達した。

（黒澤春彦）


構内運動場

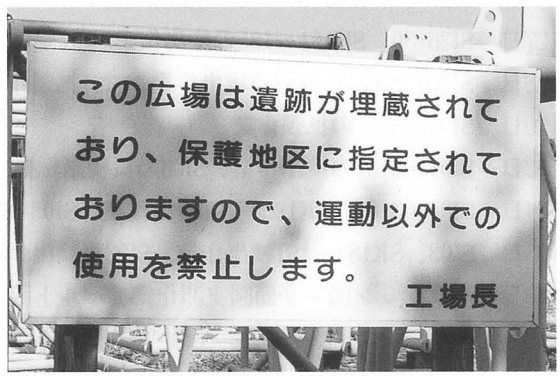
この運動場は　足立工場の土浦工場移転に伴なう工場増設工事の際、茨城県文化財保護条例により（埋蔵文化財）として保存するよう指示があつた。当工場では自然の地形を生かし運動場として永く保存することにいたしました。

記

1. 面　積 -------- 5200M² (80M × 65M)
2. 埋蔵文化財の内容
この附近には古墳時代の土師器など土器の破片が多数散乱しており、又この近隣地の出土品（神立町高野文男氏所蔵）からみて、縄文中後期（今から約6000年前）の古代人の住居跡（集落跡）と推定されています。

以上

昭和49年5月
工場長 割石官市



第２節　調査日誌

７月26日　重機による表土層（盛土層）の除去を行なう。
８月２日　器材搬入
８月３日　発掘調査開始　人力による遺構確認のための精査を開始する。
８月９日　遺構検出精査作業の継続。調査区全面のグリットを設定する。
８月11日　G－Ⅷ、G－Ⅹ区の遺物包含層の調査。
８月12日　H－Ⅷ、G－Ⅷ区の遺物包含層の調査。
８月13日～22日　工場休暇のため発掘調査休み。
８月23日　F－Ⅷ、G－Ⅷ、H－Ⅶ区の遺物包含層の調査。

8月24～28日　F－Ⅵ・Ⅶ、G－Ⅶ、H－Ⅶ、I－Ⅵ・Ⅶ、J－Ⅵ区の遺物包含層の調査。
8月30日　G－Ⅶ区のセクション遺物包含層調査・遺物出土状況図写真撮影。
9月1～8日　F－Ⅴ、G－Ⅴ・Ⅵ、H－Ⅴ、I－Ⅴ、J－Ⅴ、K－Ⅴ区の遺物包含層調査。
9月16日　本日より遺構調査を開始する。SK02～20検出作業。
9月17日　SK19～33検出作業。
9月18日　SK30～57、SI20・22の検出作業。
9月21日　SK50～66、SI20・21の検出作業。
9月22日　SI21、SI01の検出作業。
9月24日　SI01、SK63～90の検出作業。
9月25日　SK88～95、SI02・16・18の検出作業。
9月28日　SI17～199、SK93～100の検出作業。
9月29日　SI19・22の検出作業、SK99～120検出作業。
9月30日　SK118～130の検出作業。
10月1日　SK128～140、SI28の検出作業。
10月6日　SK132～152、SI28・29の検出作業。
10月7日　SI29、SI11、SK149～157の検出作業。重機による表土除去作業開始（駐車場部分）
10月8日　SI11、SK152～161の検出作業。
10月14日　SI06、SI11、SK152～169の検出作業。
10月15日　SI06・09・10、SK162～170の検出作業。
10月18日　SI08～09・15、SK172～179の検出作業。
10月19日　SI04・15、SK175～181の検出作業。
10月22日　SI04・30、SK176～183の検出作業。
10月23日　SI04・25・26・30の検出作業。
10月25日　SI26・30、SK180～182の検出作業。
10月27日　SI26・30、SK181～185の検出作業。
10月28日　SI30、SK184～187の検出作業。SI01拡張作業。
10月29日　SI01・03・07の拡張作業。
11月02日　SI01・03・07の検出作業、SI03の貝検出作業。
11月04日　SI01・03・07、SK185～191検出作業。SI03の貝検出作業。
11月05日　SI03、SK187～191検出作業。SI03貝検出作業。
11月08日　セクション図・平面図実測作業。ベルト除去作業。
11月10日　セクション図・平面図実測作業。ベルト除去作業。完掘写真撮影。
11月23日　平面図実測作業。清掃作業。完掘写真撮影。
11月25日　平面図実測作業。清掃作業。完掘写真撮影。遺物取り上げ作業。
11月26日　神立平遺跡調査会役員発掘調査現場視察。
11月29日　航空写真撮影。
11月30日　器材搬出作業。現場作業終了。

（大渕淳志）

第２章　環境

第１節　地理的環境

土浦市は茨城県の南部、霞ヶ浦土浦入りの西岸に位置する。市役所の位置は、東経140°12′、北緯36°04′である。北西方向には筑波山塊が連なっており、筑波山頂は市街地から北西に約18kmの位置にある。気候（平成19年）は最高気温38.5度、最低気温－2.6度、年平均15.3度、降水量は1,106mmと比較的過ごしやすい。東京からは北東約60キロの位置にあり、近世以降、陸運や水運の要所として栄えた商業都市である。北西の新治村と2006年２月20日に合併し市域が拡がった。交通網はJR常磐線、常磐自動車道、国道６号が南北に、国道125号、354号が東西に走っている。現在（平成19年）の人口は約144,000人、面積は約114㎢で、西に隣接するつくば市と並び県南の中心的な市である。農水業も盛んで、蓮根、グラジオラス、ワカサギなどが特産品となっている。特に蓮根は全国一の出荷量を誇る。

地形を見ると、市の中央に桜川が北西から流れている。桜川は栃木県との境、八溝山系に水源を持ち、筑波山系の西側から南側を流れ霞ヶ浦に注ぐ全長約50kmの河川である。ウルム氷期のころ、現在の桜川流域の低地は古鬼怒川（現在の鬼怒川と区別するため古鬼怒川と呼ぶ）が小貝川や桜川をあわせて流れていたが、古鬼怒川は２万2，3千年前頃、下館付近で西に流路を変え、土浦方面は支流であった桜川が本流となった。台地は古鬼怒川によって分断され、現在の桜川の北を新治台地、南を筑波稲敷台地と呼ぶ。本遺跡の所在する新治台地は、筑波山南麓からかすみがうら市にかけてひろがる台地で、標高は25～30ｍを測る。

本遺跡は霞ヶ浦に注ぐ境川水系の最奥部に面した台地上に立地する。境川は河口から北に向かって2.5km地点で、北（現神立都市下水路）、東（現白鳥都市下水路）、西（現中貫都市下水路）の３方向に分かれる。最も長い西の中貫都市下水路は、合流地点まで約5.5kmで、東の白鳥都市下水路は3.5kmである。本遺跡は白鳥都市下水路の支流の谷頭付近に所在する。この支流は水源から南東に向かって流れ、600ｍ先で本流と合流し、さらに西に向かって900ｍで境川と合流する。合流付近の谷幅は約60ｍ、比高差は約18ｍである。本遺跡の標高は約27ｍ、低地との比高差は約７ｍ、谷幅は約25ｍを測る。

地質は下総層群を基盤とし、下層から藪層、上泉層、上岩橋層、木下層、常総層、新期火山灰層（関東ローム層）、表土と続く。常総層は２層に分かれ、下層は砂や砂利、上層は粘土やシルトで形成されている。関東ローム層は２ｍ前後堆積し、部分的に漸移層がみられる。土浦周辺のローム層は比較的薄く、AT層付近まで削平されていることが多い。台地上ではローム層や漸移層上に表土が30～80cm程度堆積している。場所によっては、表土に下に包含層がみられる。

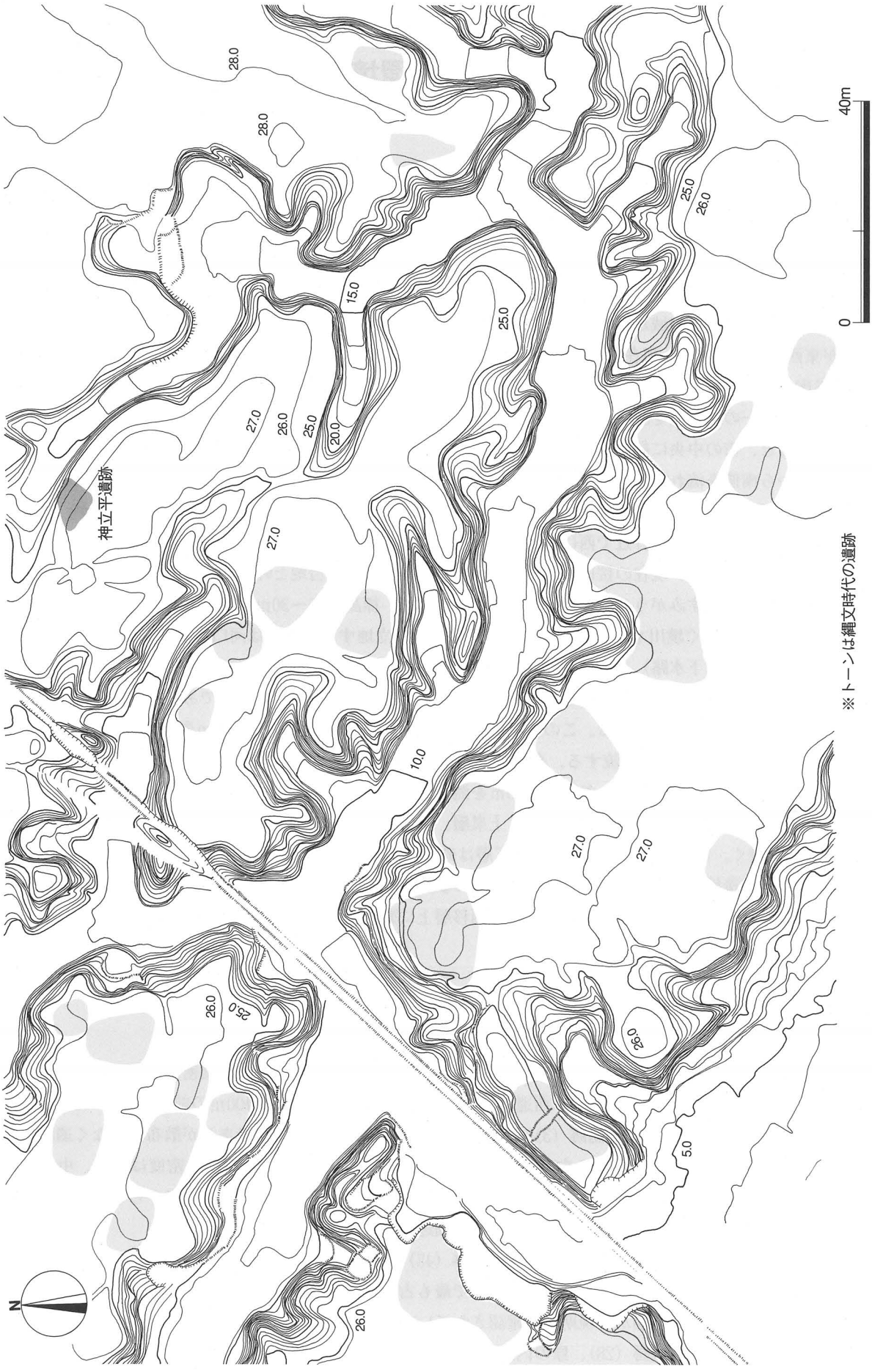
第２節　歴史的環境

本遺跡は谷津の最奥部に位置し、縄文時代後期から晩期の集落跡で遺構は極めて濃密に分布する。周辺の遺跡を見ると、南西約400ｍに所在する根本西遺跡（13）や根本東遺跡（14）、南400ｍの前原北遺跡（15）、北西700ｍの原口遺跡（2）、セイベイ山遺跡（3）などは縄文時代前期、中期の遺跡であるが散布は少なく遺構密度も薄い。（註１）　また神立平遺跡から白鳥都市下水路の合流地点までの流域は遺跡の密度は薄く、中台遺跡（19）や中台西遺跡（18）で縄文時代の遺跡が確認されている程度である。しかし合流地点から下流へ向かう左岸（南岸）には遺跡が多い。以下、縄文時代を中心に周辺遺跡を紹介する。

旧石器の遺跡は、南東の下郷遺跡（40）や寺畑遺跡（45）などで発見されている。寺畑遺跡からは炉跡が検出され、そこから出土した石器は３万年前で、市内で最も古く位置付けられる。

縄文時代の遺跡は多く、早期から晩期まで確認されている。

早期の遺跡としては大儘遺跡（28）、原の内遺跡（31）、ゴリン山遺跡（34）、中台遺跡（19）、手野天神遺跡（38）、金澤遺跡（49）がある。金澤遺跡からは沈線文土器が出土した。



第１図　周辺の地形図（1970年）

前期では黒浜式期や浮島式期が多く、中台遺跡、下郷遺跡、富士塚遺跡（32）、根本西遺跡などで確認されている。下郷遺跡からは花積下層式期や浮島式期の住居跡が検出された。

中期になると遺跡数は増加し、大型土坑を伴う大集落も形成される。本遺跡の北西600ｍに位置する神立遺跡（4）、南西２㎞の木田余台遺跡群である東台遺跡（23）、御灵遺跡（22）からは袋状土坑や住居跡が濃密に検出された。御灵遺跡からは大珠が出土している。神立遺跡からは、ハマグリやシオフキを主体とする地点貝塚が検出された。（註２）坪内遺跡も土器の散布が多い。

後期の遺跡としては、本遺跡の他、神立八幡遺跡（7）、花輪遺跡（12）、神立遺跡、東台遺跡、御灵遺跡、五斗落遺跡、大儘遺跡、ゴリン山遺跡、富士塚遺跡、新堀東遺跡（43）などがある。御灵遺跡からは称名寺式期から加曾利B1式期の遺物や土坑、住居跡が発見され、新堀東遺跡からは堀之内式期の土坑が検出されている。本遺跡は称名寺式期に集落が形成され始め、後期全般にわたっての遺構遺物が発見された。また、工場建設以前には亀形土製品、角鏃、骨製刺突具、土製耳飾などが出土した。（註３）

晩期になると遺跡は少なくなり、本遺跡からは、安行3c式期から前浦式期の遺構遺物が発見されている。

後・晩期の遺跡を桜川下流域やかすみがうら市の旧霞ヶ浦町でみると、桜川下流域では、上高津貝塚（C）、小松貝塚（E）、中台貝塚（B）などが存在する。上高津貝塚はヤマトシジミを中心とした大規模な斜面貝塚である。台地上には中期から晩期の集落が形成されているが、貝塚の中心は加曽利B式期である。小松貝塚は桜川左岸の河口付近に位置する。後期から晩期の貝塚で、貝層はシジミとハマグリで形成されている。中台貝塚（旧称下坂田貝塚）は後期から晩期の地点貝塚で、中心は加曽利Bから安行１式である。シジミ、ハマグリ、サルボウから成る。峰崎遺跡群（D）は花室川の支谷の最奥部に位置し、中期から後期の遺跡である。

本遺跡の東側にある旧霞ヶ浦町をみると、加茂八幡貝塚（F）、平三坊貝塚（G）、男神貝塚（H）、岩坪平貝塚（I）安食平貝塚（J）などが存在する。いずれも晩期の安行３式期頃まで継続する貝塚であるが、晩期になると規模が小さくなる。平三坊貝塚はハマグリ主体の貝塚で、前浦式や晩期後半の土器も出土した。2007年には筑波大学により環状盛土遺構の確認を目的とした発掘調査が行なわれた。男神貝塚はハマグリが中心で、貝層は加曽利B式期である。岩坪平貝塚はハマグリ主体で、加曾利B式が多い。安食平貝塚はハマグリ、シオフキ、オキシジミを主体としている。

この地域の後期集落の特徴は、遺跡数は中期に比べ減少するが、本遺跡や上高津貝塚のように貝塚を伴い、長期間継続する大規模な集落となる。また大規模集落からは製塩土器が発見されることも、この地域の大きな特長である。

本遺跡周辺に戻すと、縄文時代晩期後半から弥生時代中期の遺跡数は極めて少なく、再び集落が形成されるのは弥生時代後期になってからである。この時期の集落は宝積遺跡や下郷遺跡で確認されている。

註

（註１）前原北遺跡やその周辺は、過去３回試掘確認調査を実施した。結果、遺構は確認されず、遺物は縄文土器が数点出土した程度である。原口遺跡、セイベイ山遺跡も確認調査や発掘調査を行なったが、明確な遺構は確認できなかった。『上高津貝塚ふるさと歴史の広場年報』第12号・13号にて報告。

（註２）『上高津貝塚ふるさと歴史の広場年報』第12号にて報告。

（註３）1997　関口　満「神立平遺跡出土亀形土製品について」『土浦市立博物館紀要』第８号　土浦市立博物館

第２図　周辺の縄文時代遺跡　（国土地理院発行 1/25,000 に加筆）

第３図　周辺の主な縄文時代後・晩期遺跡（１／200,000）（国土地理院発行 1/200,000 に加筆）

周辺の縄文時代遺跡

No	遺跡名	時期・その他	No	遺跡名	時期・その他
1	神立平遺跡	中期～晩期	28	大儘遺跡	早・後期
2	原口遺跡	中期　散布少　遺構疎	29	弁ノ内遺跡	
3	セイベイ山遺跡	前・中期　散布少　遺構疎	30	薬師遺跡	散布少
4	神立遺跡	中期　地点貝塚　遺構濃密	31	原の内遺跡	早・中期　屋外炉
5	松山遺跡	前期	32	富士塚遺跡	前～後期
6	青木遺跡		33	天王後遺跡	中期　散布少
7	神立八幡遺跡	中・後期	34	ゴリン山遺跡	早～後期
8	天神平遺跡	中期	35	手野原口遺跡	後期　散布少
9	中道遺跡	早期	36	久保上遺跡	
10	蟹久保遺跡	中期	37	天王前遺跡	散布少
11	坪内遺跡	中期　散布多　地点貝塚	38	手野天神遺跡	早・前期
12	花輪遺跡	後期　散布多	39	田村向原遺跡	前期
13	根本西遺跡	前・中期	40	下郷遺跡	前期　住居跡
14	根本東遺跡	前期　散布少	41	清水遺跡	早・前期
15	前原北遺跡	中期　散布少　遺構疎	42	三夜原西遺跡	前期
16	前原遺跡	中期　散布少	43	新堀東遺跡	後期　土坑
17	榎下遺跡	散布少	44	三夜原東遺跡	前期　散布少　遺構疎
18	中台西遺跡	前・中期	45	寺畑遺跡	前・中期　住居跡
19	中台遺跡	早～中期　前期主　散布多	46	広月遺跡	
20	一丁田台東遺跡		47	前谷遺跡群	前・中期　住居跡
21	籾買場遺跡	中～後期	48	梨ノ木東遺跡	
22	御灵遺跡	前～後期　中期の遺構濃密	49	金澤遺跡	早・前期　住居跡
23	東台遺跡	中期　遺構濃密	50	石橋北遺跡	早・前期
24	宝積遺跡	中期	51	石橋南遺跡	前期　地点貝塚　集石
25	八坂前遺跡		52	平畑遺跡	散布少
26	立遺跡	散布少量	53	八幡梶内遺跡	前・後期　地点貝塚
27	五斗落遺跡	早～後期	54	船塚遺跡	

周辺の主な縄文時代後・晩期遺跡

記号	遺跡名	特徴	記号	遺跡名	特徴
A	神立平遺跡	後期初頭から晩期　製塩土器	F	加茂八幡貝塚	
B	中台貝塚	地点貝塚が点在	G	平三坊貝塚	ハマグリ主体
C	上高津貝塚	大規模な斜面貝塚　製塩土器	H	男神貝塚	ハマグリ主体　加曾利B
D	峰崎遺跡群	中期から後期	I	岩坪平貝塚	ハマグリ主体　加曾利B
E	小松貝塚	ヤマトシジミとハマグリ主体	J	安食平貝塚	ハマグリ　シオフキ

参考文献

1983　茂木雅博編　『土浦の遺跡』土浦市教育委員会

1987　柴　正　中根節男　第43集『霞ヶ浦用水建設事業地内埋蔵文化財調査報告書』(財) 茨城県教育財団

1991　小川和博　大渕淳志　『木田余台Ⅰ』土浦市教育委員会

1991　前田　潮編　筑波大学先史学・考古学研究調査報告Ⅵ『「古霞ヶ浦湾」沿岸貝塚の研究』筑波大学

1997　黒澤春彦　関口　満『三夜原東遺跡　新堀東遺跡　壱杯清水西遺跡』土浦市教育委員会

2000　平石尚和　第167集『一般国道354号道路改築事業地内埋蔵文化財調査報告書』(財) 茨城県教育財団

2000　塩谷　修　山田康弘　『国指定史跡　上高津貝塚E地点』土浦市教育委員会

2001　関口　満『下郷古墳　下郷古墳群』土浦市教育委員会

2001　筑波大学考古学研究室編　『霞ヶ浦町遺跡分布調査報告書―遺跡地図編―』霞ヶ浦町教育委員会　筑波大学考古学研究室

2005　工藤幸尚　「岩坪新屋敷・岩坪平貝塚の測量調査」『筑波大学　先史学・考古学研究』第16号　筑波大学人文社会科学研究科　先史学・考古学コース

2006　福田礼子他　『国指定史跡　上高津貝塚C地点』土浦市教育委員会

2007　関口　満　「神立遺跡」『上高津貝塚ふるさと歴史の広場年報』第12号　上高津貝塚ふるさと歴史の広場

2007　川島尚宗　「平三坊貝塚測量報告―環状盛土遺構検出の実践と課題―」『筑波大学　先史学・考古学研究』第18号　筑波大学人文社会科学研究科　先史学・考古学コース

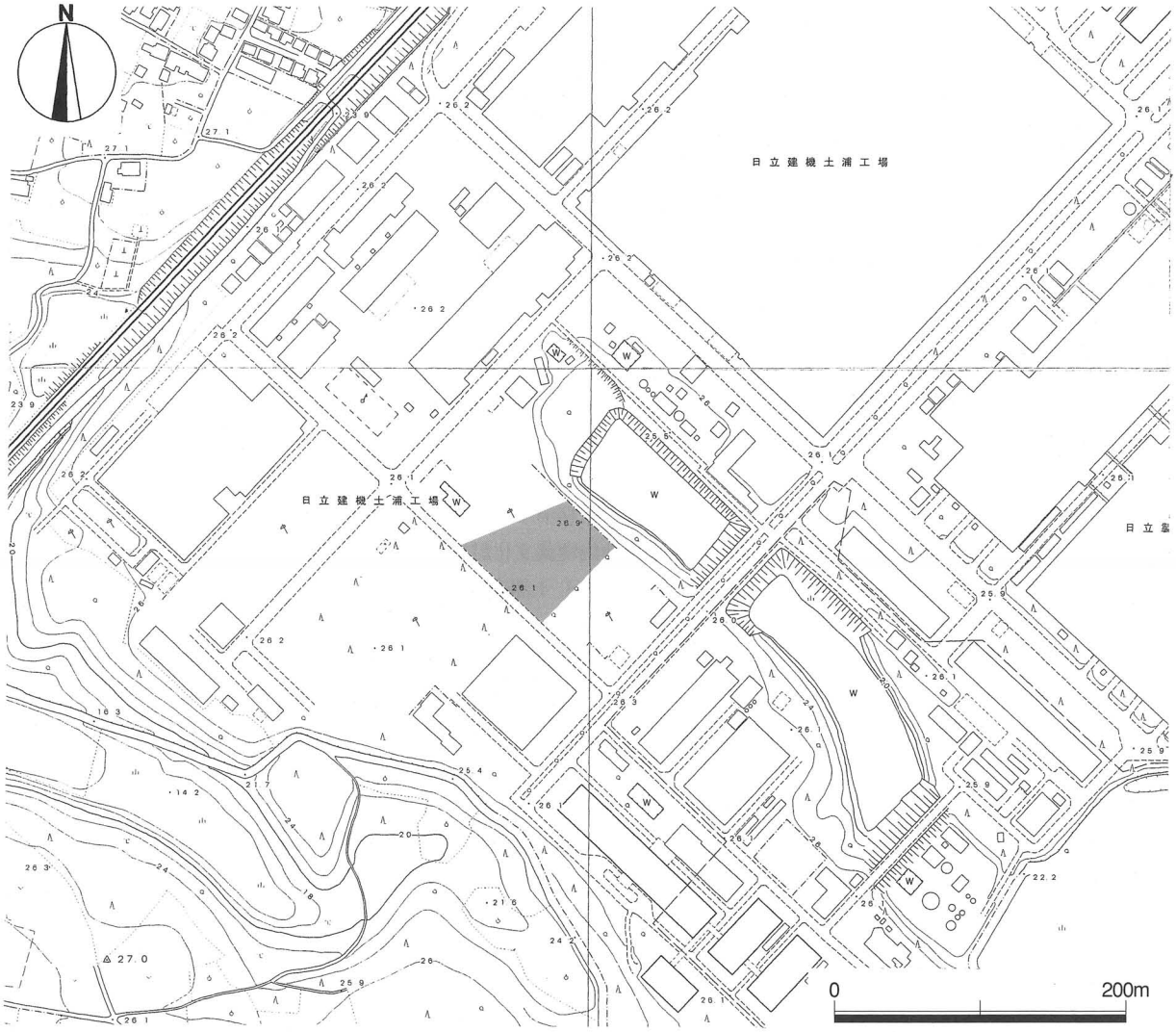
2008　川島尚宗・村上尚子・鈴間智子　「茨城県かすみがうら市平三坊貝塚発掘調査報告」『筑波大学　先史学・考古学研究』第19号　筑波大学人文社会科学研究科　先史学・考古学コース

(黒澤春彦)

第３章　調査

第１節　調査の成果

本調査はトレンチによる確認調査に基づき調査予定区域が決定された。調査前の地形はほぼ平坦面で、かつてはグランドなどに利用されており、ほぼ全面に砂利が敷かれていた。しかし、調査の結果南側が高く、北側が低くなる緩傾斜地であることが判明した。少なくとも地山面であるローム上面では南端部と北端部の比高差は1.65mもあり、低位面である北側へ盛土して平坦としていたようである。したがって、調査はその盛土の除去をいかに効率よく処理していくかによって、調査日程にまで大きく影響することとなった。幸い廃土場を隣接して設けることが可能となり、廃土の処理能力を低下させることがなかった。もうひとつの問題は大規模な土盛りが行われた地表面である。全面機械的な転圧が行なわれており、地面は締り、堅緻となっていることであった。これは遺構の検出および覆土除去にも最後まで影響した。こうした悪条件のなか、さらに調査区域全面遺構が密集し、その遺物の出土量の多さから大きな成果を挙げたにもかかわらず、調査の進捗は決してスムーズではなかった。



第４図　調査区位置図

SI4
SI26
SI25
SI30
SI24
SI15
SI9
SI8
SI10
SI28
SI29
SI23
SI11
SI14
SI6
SI17
SI16
SI12
SI27
SI5
SI22
SI19
SI18
SI2
SI7
SI3
SI20
SI21
SI1
▲ 貝ブロック
0
10m

第５図　遺構配置図

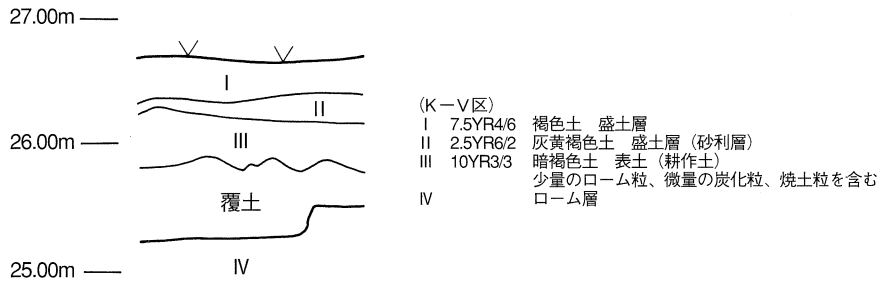
発掘調査は、確認調査に基づき実施することとなったが、盛土による整地のため少なくとも遺物包含層の上面までは重機による掘削を行なった。結果的に盛土は南側が薄く、北側に向かって厚くなることから、遺物の出土状況を観察しながら南側は慎重に、北側の上層は比較的粗く除去作業を実施した。しかし、基本的な土層（基本層序）は削平が全面にわたるため明瞭ではなく、南側で僅かに検出できた遺物包含層ですら、その判断は困難であった。こうした遺物包含層である黒褐色土を除去し、地山であるローム面を検出して遺構確認が可能となった。

遺構は調査対象区全域からは間隙なく検出されている。調査以前にも縄文時代の後・晩期の遺物が発見されており、とくに特殊遺物とされるものも含まれていることから、当然遺構・遺物の多さは予想できていたが、このように密集しているとは想定外であった。調査面積は4,000㎡に満たない限定された範囲の調査ではあるが、検出された遺構は竪穴住居跡30軒、陥穴を含む土坑199基である。これら遺構・遺物の時期は後期初頭から晩期中葉に及んでおり、その分布はほぼ全体的に拡散していた。

まず遺構では竪穴住居跡が纏まっている。大半は掘方が明瞭ではなく、壁柱穴といわゆる出入り口部と推定されている張り出し部がみられ、素掘りの炉跡を伴う。時期は後期が圧倒的に多く、とくに前半から中葉の堀之内１式期段階および加曾利B式期段階で半分を占めている。その形態はいずれも円形を基本とする。そして曽谷式期からは極端に減少するものの、晩期中葉安行3c式・前浦式期まで集落が存続する。全体的に掘形が確認できないものが多いなかで曽谷式期に比定される住居跡SI01は楕円形で東側にハの状に開く張り出し部を伴う典型的な住居跡となった。また晩期安行3b式期から安行3c式期に比定される住居跡SI03は重複が激しく掘形が明確ではないが、隅丸長方形を呈し、南側に張り出し部をもつ。ここから多量の土器と伴に小規模な貝層が検出された。土坑では縄文時代の前半に比定されている陥穴が９基確認された。出土遺物もなく、明確な時期は確定できないが、坑底部には逆茂木を埋め込んだ付帯施設を伴うものである。そのほか検出された190基の大半が後期前半の称名寺式期から堀之内１式期に相当する段階のものである。基本形は径１ｍ前後、深さ50㎝前後の円筒形であるが、壁面がオーバーハングする袋状土坑も検出されている。また曽谷式から安行１式に比定される井戸状の深度が深い特徴的な土坑が４基確認されている。なかでも土坑SK89およびSK94の２基は覆土中の遺物も豊富でとくに製塩土器が纏まって出土している。

以上これら多数の遺構内からは多量の遺物が出土している。その種類として製塩土器をふくむ縄文土器をはじめ、土製品として土偶・土版・耳飾り・土製円板・有孔球形土製品。石製品とし石棒・石刀・石剣・磨製石斧・打製石斧・石皿・砥石等があるが、これら器種は土偶等をみても時期ごとにその形態および製作・所有状況に変化がみられることはいうまでもない。

（小川和博）



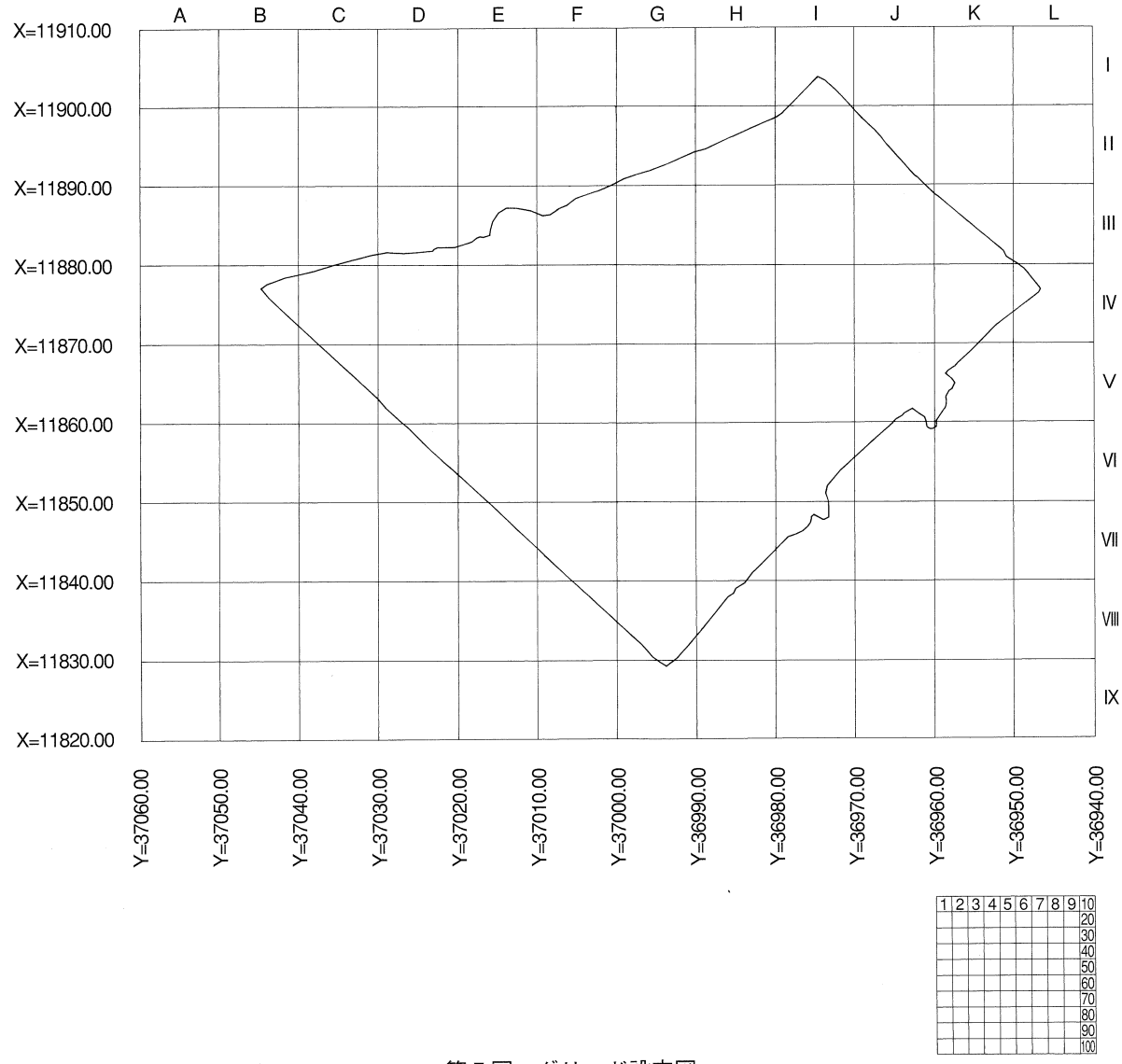
第６図　基本層序

第２節　調査方法

調査区の地区割りは、公共座標のX＝11850.00、Y＝36980.00を基点として、東西方向へ10mごとに西から東へアルファベットでA～Lの11区画に、同様に南北方向へ北から南へローマ数字のⅠ～Ⅸの９区画まで割付け、B－Ⅳ区のようにアルファベッドとローマ数字を組み合わせて大グリッド名とした。さらに大グリッド内を１m四方の小区画に区切り、100の小グリッドに分けた。ここでは大グリッドの北東隅を01とし、東へ送って10まで振り、南側へ移動して左端を11とし東側へ振る。これを繰り返し、南東隅が100となるように設定した。具体的にはB－Ⅳ区55グリッドと命名した。遺構の測量図の作成･記述および遺物取り上げの記録は、すべてこの座標値に基づいている。

なお、調査区全体が試掘調査において覆っている地表面が盛土であることか判明していたため、重機で盛土を全面除去し、遺物包含層を確認した段階で、人力による掘削を実施した。同時に遺物の取り上げのため、上記の公共座標の設定を行なった。基点はH－Ⅵ区100グリッドの南東隅に当たる。

（小川和博）



第７図　グリッド設定図

第４章　遺構と遺物

第１節　住居跡

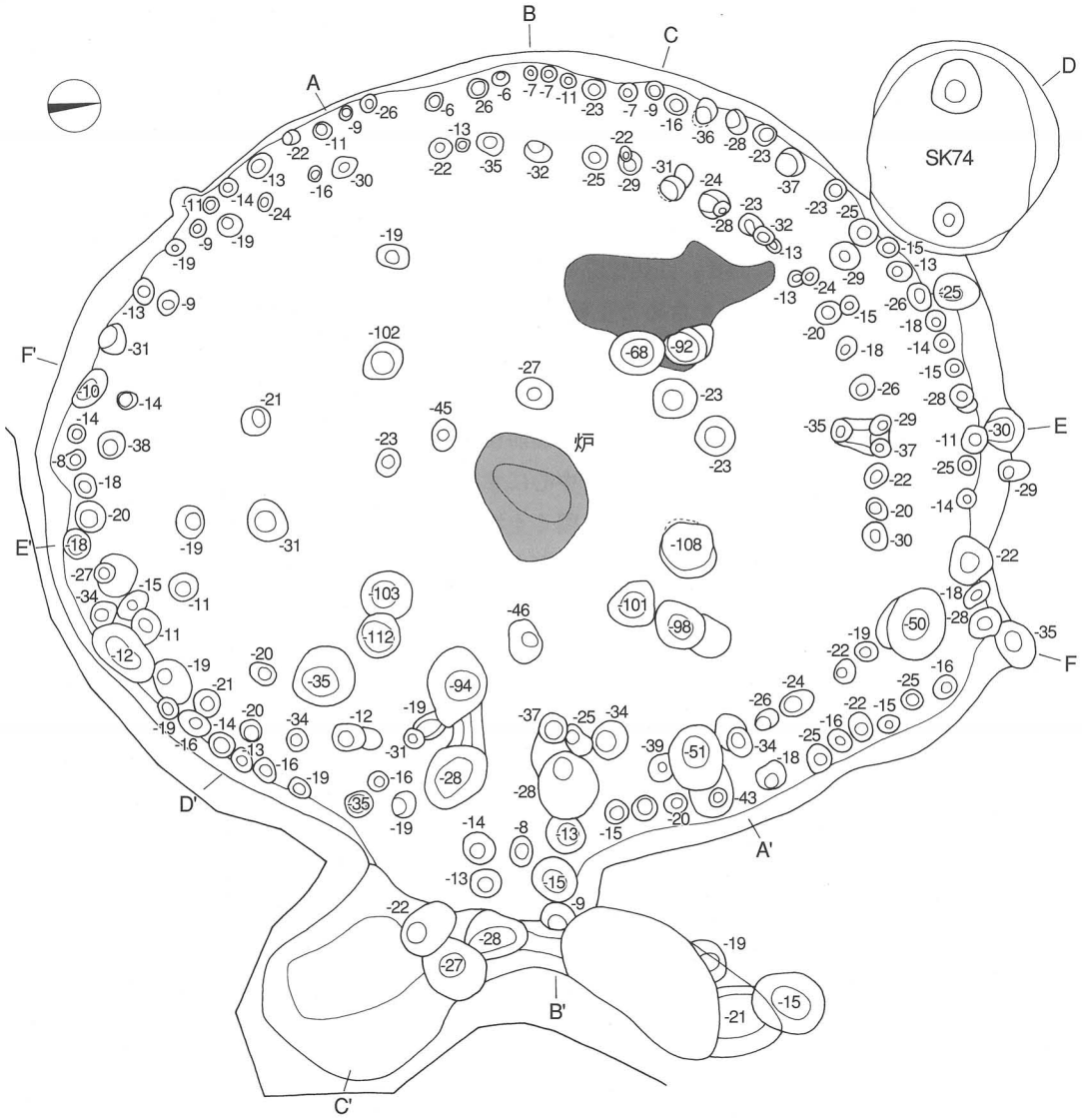
第１号住居跡（SI01）（第８図～第28図）

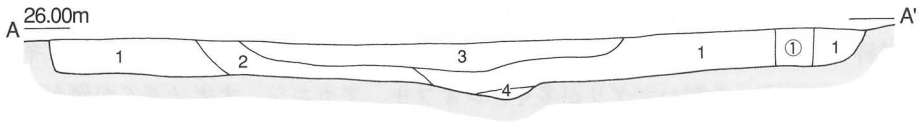
調査区南東側、H－Ⅵ・Ⅶ、I－Ⅵ・Ⅶ区に位置する。北西隅に土坑SK74が重複している。出入口施設とみられるハの字状に開く張出部が東側に向き、住居壁際の壁柱穴列が二列になっていることから拡張住居と推定される。外側新期拡張部の規模は張出部を含めた主軸である東西軸長7.29ｍを測り、居住主体部は東西軸6.44ｍ、南北軸7.23ｍと南北に長い楕円形を呈する。張出部と炉跡を通る主軸方位はN－84°－Wを指す。壁高は25.0～45.0㎝を測り、比較的良好な掘り込みである。柱穴は壁際に沿って密接する壁柱穴で76本検出された。大きさは径10.0～56.0㎝と幅があるものの、径15～20㎝前後を中心とする。また柱穴の深さは6.0～43.0㎝で、平均の深さは18.4㎝を測る。さらに居住内の炉跡を中心にする対角線上に深さ１ｍ前後の主柱穴４本が配される。張出部は２基の楕円形土坑が大きくハの字状に開く土坑状で、南側掘込みが長軸196.0㎝、短軸153.0㎝、深さ10.0㎝で、底面はほぼ平坦。北側掘込みは、楕円形を呈し、長軸152.0㎝、短軸122.0㎝、深さ21.0㎝を測り、底面は平坦である。この土坑に挟まれた通路にも３本のピットが穿たれており、出入口開閉部施設の設置が想定される。炉跡は住居ほぼ中央に位置し、遺存状態は良好である。大きさは長径100.0㎝、短径76.0㎝、深さは19.0㎝の不整楕円形で、掘形は鍋底状に掘り窪め、底面は丸底気味で起伏がなく、全面被熱により赤化硬化している。炉覆土は焼土粒を多量に含む赤褐色土（5YR4/6）で覆われていた。床面は全面堅く締まりほぼ平坦である。

また内側の古期住居は東側に溝状の出入口施設である張出部をもち、この張出部を含めた東西軸長6.10ｍ、居住部東西軸4.95ｍ、南北軸6.35ｍの南北に長い楕円形を呈し、張出部構造はピットを伴う平行する溝状遺構で、長さ63.0㎝をもち、幅40.0㎝の通路を有する。壁柱穴は52本検出され、規模は径10.0～50.0㎝の幅で径20㎝前後が集中し、深さは9.0～51.0㎝であるが平均すると25.78㎝を測る。さらに炉跡を中心に深さ１ｍ前後の主柱穴を４本対角線上に配している。南西側ピット１本は新旧共有するものの、他の３本はいずれも内側に設置していた。なお、炉跡は明瞭な新旧が判断できず、とくに旧炉跡の痕跡はまったく確認できなかった。

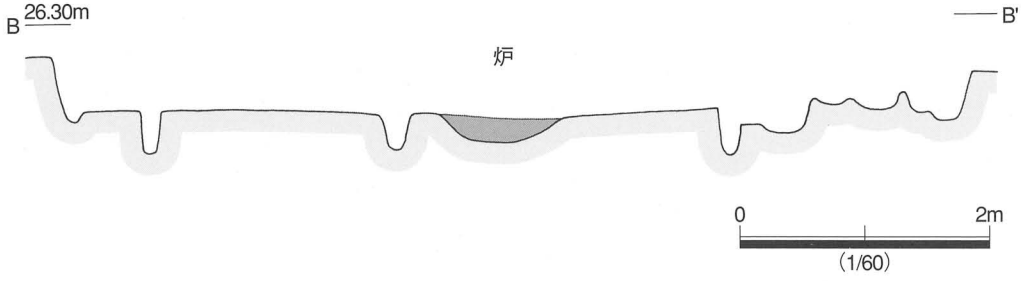
住居覆土は新期住居跡段階のもので、４層のレンズ状の堆積状態を示す自然堆積層である。また北西側には貝層が床面から若干浮いて検出された。確認された規模は南北170.0㎝、東西85.0㎝、層厚15.0㎝を測る。この貝層は大きく上下２層に分かれ、上部貝層と下部貝層の間には、黒褐色土を主体とした混貝土層が入り、その直下には細かく破砕された貝の層がみられる。上部貝層は層厚5.0～12.0㎝を測り、中型のオキシジミを主体とする貝層である。次いで中・小型ハマグリが多く、シオフキ、アカニシ、オオノガイが僅かに混入し、汽水産のヤマトシジミも５点ほど検出された。また下部貝層は破砕貝で、貝種の判別できるものとしてオキシジミ、マガキ、オオノガイの他ヤマトシジミが僅かに確認できた。

貝層中および覆土中より出土した土器は後期後半の土器で、加曾利B3式期から安行１式期であり、主体は曽谷式および安行１式期である。また製塩土器やミニチュア土器の出土も目立つ。その他土製品として土製勾玉１点、土偶10点、土器片錘３点、円板40点。石製品として石剣１点、打製石斧３点、凹石を含む磨石類11点、砥石２点、軽石製の浮子２点が出土している（第10～28図）。

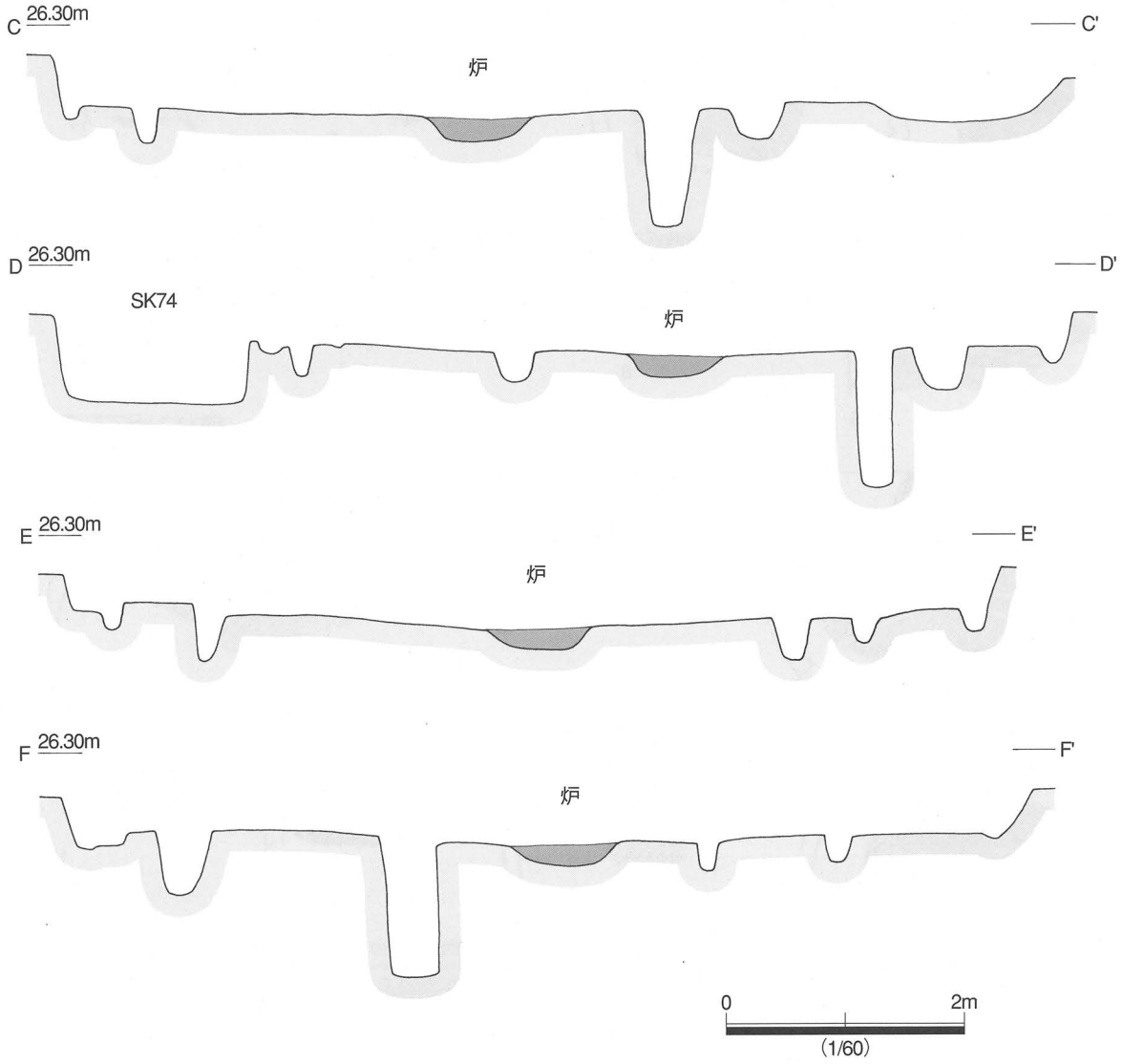




SI01
1 暗褐色土 10YR3/4 少量のローム粒、微量の貝片を含む
2 黒褐色土 10YR3/2 少量のローム粒、微量の貝片、焼土粒を含む
3 黒褐色土 10YR2/2 少量のローム粒、微量の貝片、焼土粒を含む
4 黒褐色土 10YR2/3 少量のローム粒、少量の焼土粒を含む
Pit
① 黒褐色土 10YR2/2 少量のローム粒を含む



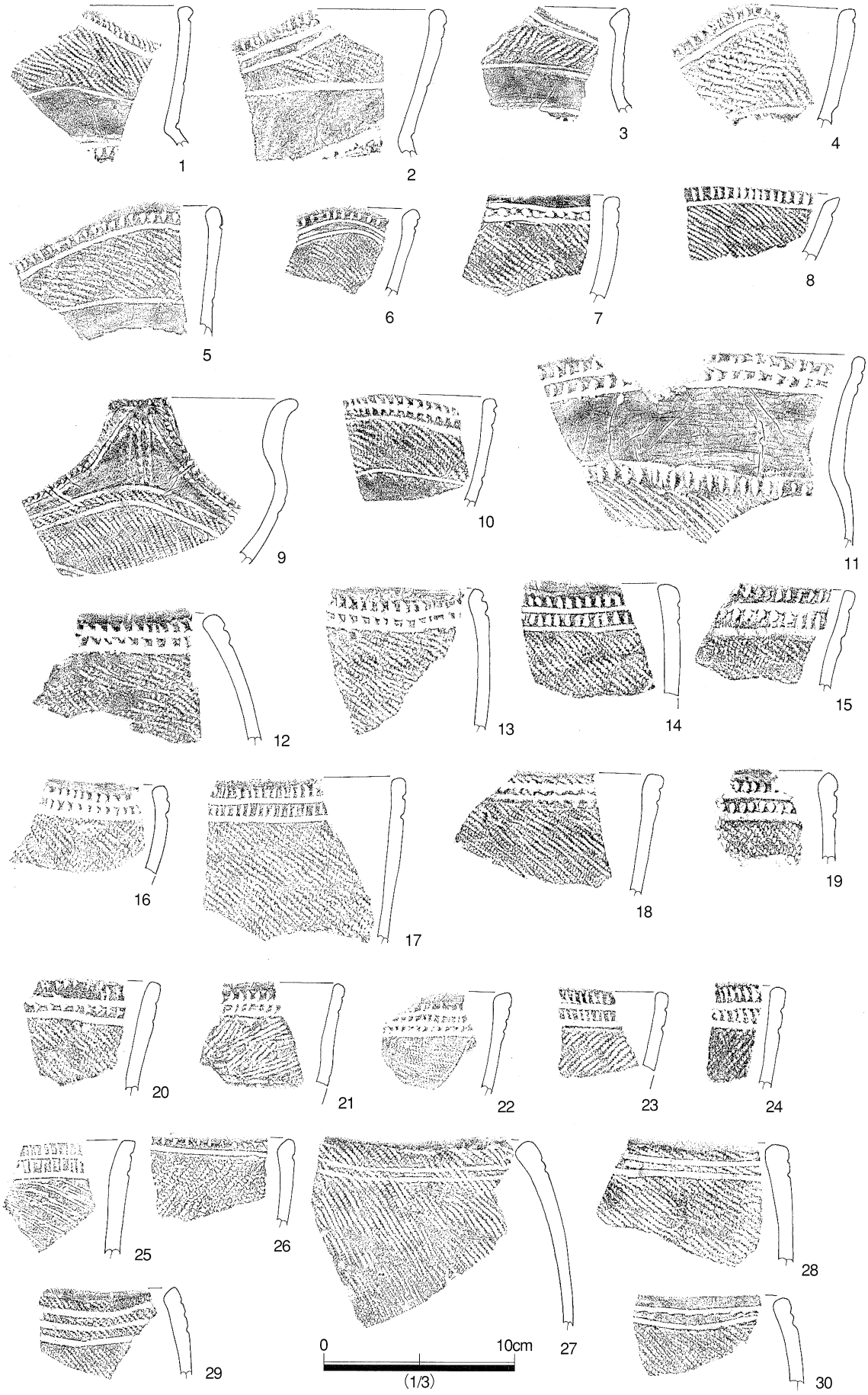
第8図　住居跡SI01実測図(1)



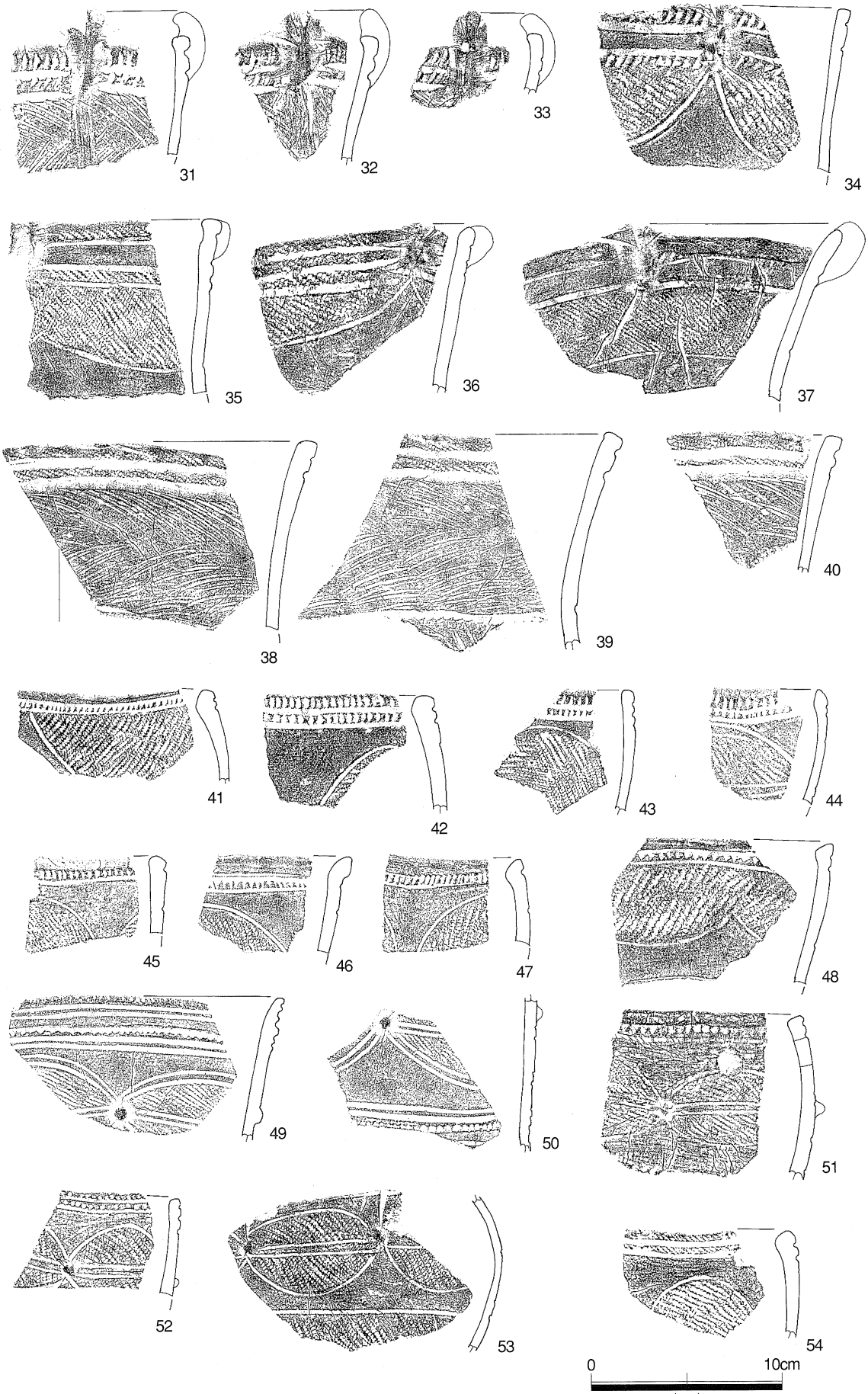
第９図　住居跡SI01実測図(2)

１～８は口辺部が１もしくは２条沈線文による区画内に一列の刻文帯が施文されるもので、さらに口縁部は縄文帯と無文帯をもつ深鉢である。１～６は波状口縁で、胴上部で括れ、７・８は平縁である。９は波状口縁の深鉢で、口縁部は内湾し、波頂部は外反する。また頂部は平らとなる。口辺部は沈線区画に連続列点文が施され、波頂部から３条の沈線が垂下する。口縁部は縄文地文に２条の沈線文により区画される。10～25は口縁上の刻文帯が２列になるもので、沈線で区切られているものもある。10は比高の少ない低い波状口縁で縄文帯と無文帯は沈線により区画される。11は胴上部で括れ深鉢で、口縁部は無文帯となり、胴部は連続列点文により区画され胴下部は斜行する条線文が施文されている。12～24は口縁部が縄文施文され、25は斜行条線文を施す。12～14、16・17の口縁部は内傾し、いわゆる瓢形の深鉢である。27～30は縄文地文の口辺部に２もしくは３条の沈線が巡るもので、いわゆる連続列点文が施文されない。いずれも口縁部は内傾する瓢形深鉢である。

31～33は同一個体であろう。平縁口縁部の上方へ突出する縦長瘤状突起を貼付し、沈線区画された連続列点文が巡る。口縁部は沈線による矢羽状文が施文される。34～37は口縁部に縦長の瘤状突起を貼付するもので、34は無文帯を挟み沈線区画された刻文帯による帯状文を繋ぐ。35～37は沈線区画された縄文帯を繋ぎ、頸部は34～36が半円弧状の磨消し文様を施し、37は沈線区画されたやや幅広の縄文帯を巡らす。38～40は口縁上に太沈線区画された帯状縄文が施され、頸部は細沈線による矢羽状文である。41～48は瓢形深鉢の典型で、口縁部



第10図　住居跡SI01出土遺物(1)



第11図　住居跡SI01出土遺物(2)

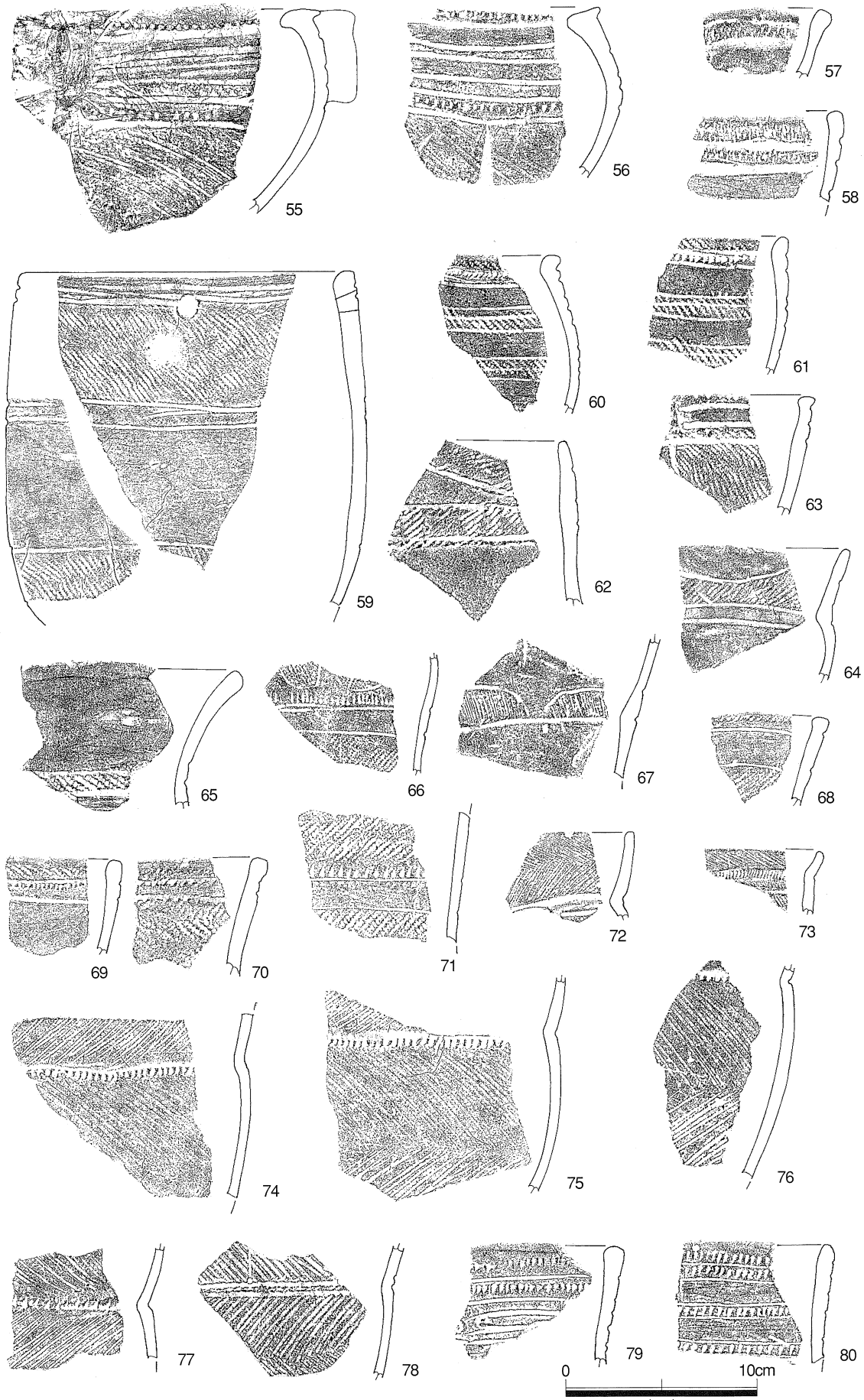
が内傾し、口縁上に1列もしくは2列の連続列点文帯を巡らし、口縁部に連弧状磨消文様を配する。49～53はモチーフの中央に無文帯の平行沈線を挟んで円形文を描出するもので、いわゆる遮光器状磨消弧線文が施されたものである。49・50は同一個体である。口縁部はわずかに外傾する深鉢。口縁上に沈線と刻文帯が巡り、磨消弧線文の接点には小貼瘤が付されている。また胴部中位にも刻文帯が巡り区画している。51～53は口縁部が内彎気味となる瓢形の深鉢。51・52は口縁部破片で、口縁上に51は1列、52は2列の刻文帯が巡り、小貼瘤の付された遮光器状弧線文が配される。53は胴部破片。大きく内彎した体部に遮光器状弧線文が施され、下位に帯縄文が巡る。54は口縁上が沈線区画された2列の幅狭い縄文帯が巡り、体部に磨消弧線文が施される。

55・56は同一個体である。縦長の瘤状突起に沈線区画された2列の刻文間に沈線文を充填させ、胴部は斜行条線文を施す。57・58の帯縄文は沈線区画のみで幅が狭い。59は内彎気味の体部が内傾して立ち上がる深鉢。口径17㎝を測り、最大径が胴部下部にある。口縁上に2条の沈線が巡る無文帯下に幅広い縄文帯、さらに2条沈線下は幅広い無文帯を配し、下半部は縄文帯が施される。口縁下に円形の貫通孔がある。60・61は口縁部が内彎気味に内傾し、口縁端がわずかに外反する。沈線区画された帯縄文が3段巡る。62は波状口縁の深鉢。口縁に沿って沈線区画の縄文帯と連繋するように平行する帯縄文が巡る。63は2列の隆起帯縄文は沈線区画され、縦位の貼瘤が付されている。帯縄文下は縄文施文である。64は胴部中位で括れ、口縁部が外傾する深鉢。口縁部は下向磨消弧線文を配し、平行沈線による区画文は無文帯となる。65は無文帯の口縁部が大きく外反し、頚部に帯縄文が巡る。66・67は深鉢の胴部破片。66は体部上部が磨消懸垂文を挟む円形文が配され、中位に刻文帯が巡り区画され、下部は沈線区画の無文帯、さらに磨消懸垂文が垂下する。67は弧線文内に縦位の条線を充填する。68は無文帯を挟み沈線区画の帯縄文が巡る。69～71は刻文帯が区画文となるもので、69・70は帯縄文に沿って刻文帯が巡る。帯縄文間は無文帯となる。

72～78は細沈線による矢羽状文が施されるもので、72は口縁部が外反し、口縁部に矢羽状文が施文され、73は口縁部先端が僅かに外反し、口縁括れ部に刻目が巡り区画文となる。口縁部は斜行する条線文である。胴上部で括れる胴部破片の深鉢で、括れ部に連続列点文を区画文とし、上下文様帯に細沈線による矢羽状文を施す。79･80は東北系の土器。口縁部破片で平行沈線間に縦位の刻目が施される。

81～105は口縁部が大きく内彎する瓢形の深鉢口縁部破片である。口縁下に隆起帯縄文が巡るが、81～85・100は隆起帯縄文を沈線により区画している。81･82は3段の帯縄文下に、2条の帯縄文を組み合わせた綾くり状の入組文モチーフを描出する。85の隆起帯縄文は2段であるが、上段が幅広く、下段が細くなっている。体部文様も綾くり状入組文であろう。86～96、98・99、101～105は隆起縄文帯とこれに沿って斜位の刻文帯が区画文となる。この隆起帯縄文は2段が主体を占めるが、89のように1段もある。また94では隆起帯縄文間の無文帯がなく、帯縄文が重畳する場合もある。なお、体部文様として86～91は磨消弧線文が施される。さらに92･93では貼瘤が付され、92では1段、93では2段である。97は沈線区画による隆起帯縄文で、上段隆起帯縄文から平行沈線文が垂下し、帯縄文上に刺突文が突かれている。

106～134は平縁の帯縄文深鉢の口縁部破片。基本的に口唇部内側が突出気味に肥厚し、口縁下に帯縄文と縦長の楕円形貼瘤を有する。しかも帯縄文はいずれも単節RL施文で、無文帯を挟み二段施される。また下位に無文帯を巡らせ、貼瘤文直下を起点に下向弧線文が左右に展開する。なお、106のように胴部括れ部には刻文帯による区画文が巡り、口縁部文様帯と胴部文様帯を明瞭に区画する。135～139は波状口縁を呈する帯縄文深鉢の口縁部破片である。135は波頂部が山形状を呈し、帯縄文は隆起帯となり、3段施され、波頂部から重畳する貼瘤が垂下し帯縄文を区画する。136・138は波底部で3段の隆起する帯縄文に縦長の貼瘤が区画文となる。さらに無文帯を挟み4段と5段目の帯縄文を区画文とし、頚部文様帯を区画する。頚部文様帯は縦位磨消を区画文とし矢羽状沈線を充填する。この矢羽状沈線文は143～147の頚部破片でもみられ、帯縄文が区画文となる。なお、138は胴部括れ部に刻文帯が巡り胴部を区画し、胴下半部は縄文帯となり、上限は横位の弧線文で区画される。148は帯縄文に貼瘤が付されるが、口縁下に円形の貫通孔をもつ。149は波状口縁の深鉢。隆起帯縄文に沿って区画する沈線文が貼瘤で結繋される。150・151も波状口縁の深鉢。波底部の破片で、円形の貼瘤が重畳し、4段の帯縄文が巡る。隆起帯縄文に沿って刻文帯と沈線が区画され、沈線は貼瘤で結繋される。152は平縁の深鉢で、2段の縦長の貼瘤上段頂部から突出し小突起を作出している。153～155は帯縄文に貼瘤が2段付け

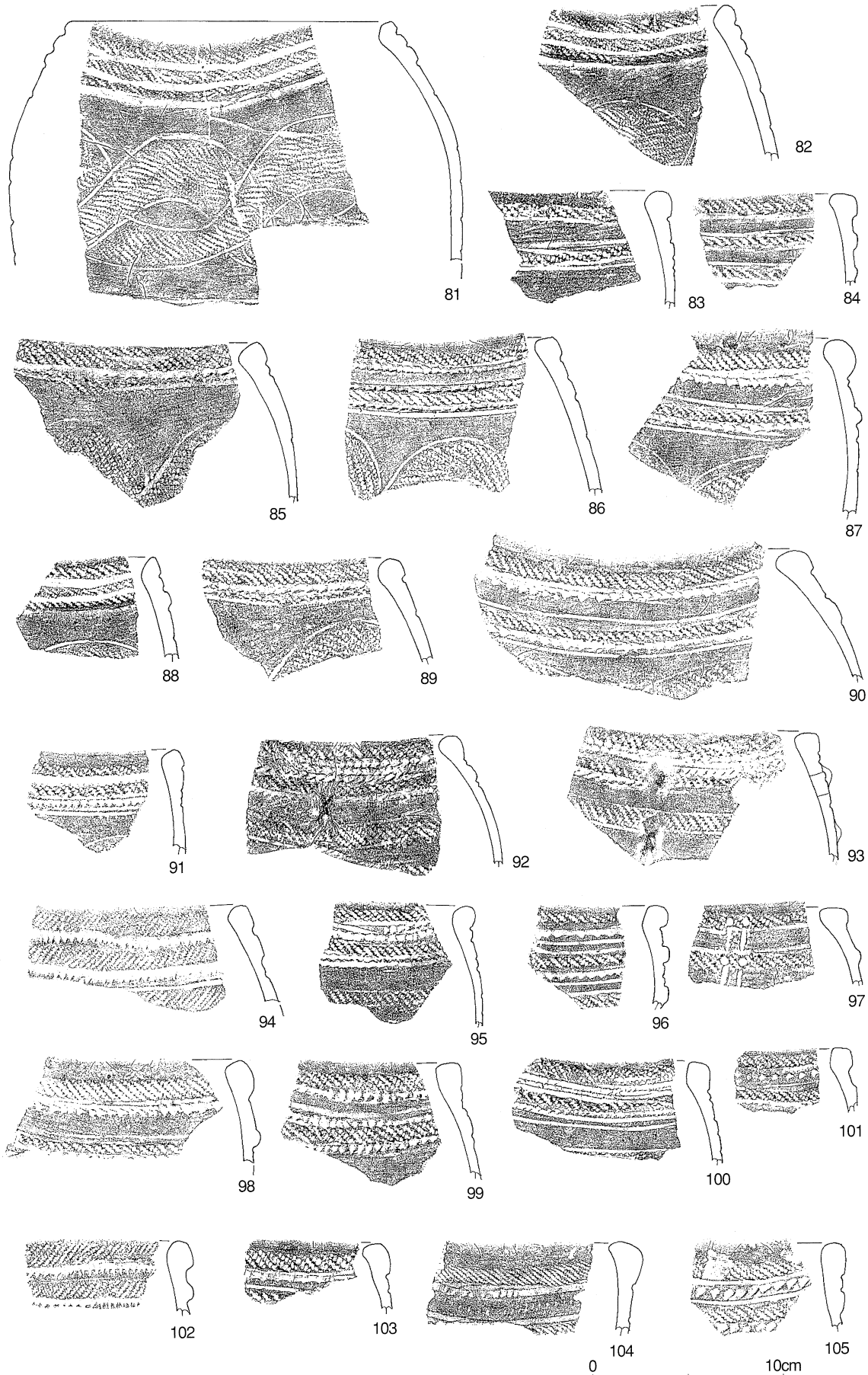


第12図　住居跡SI01出土遺物(3)

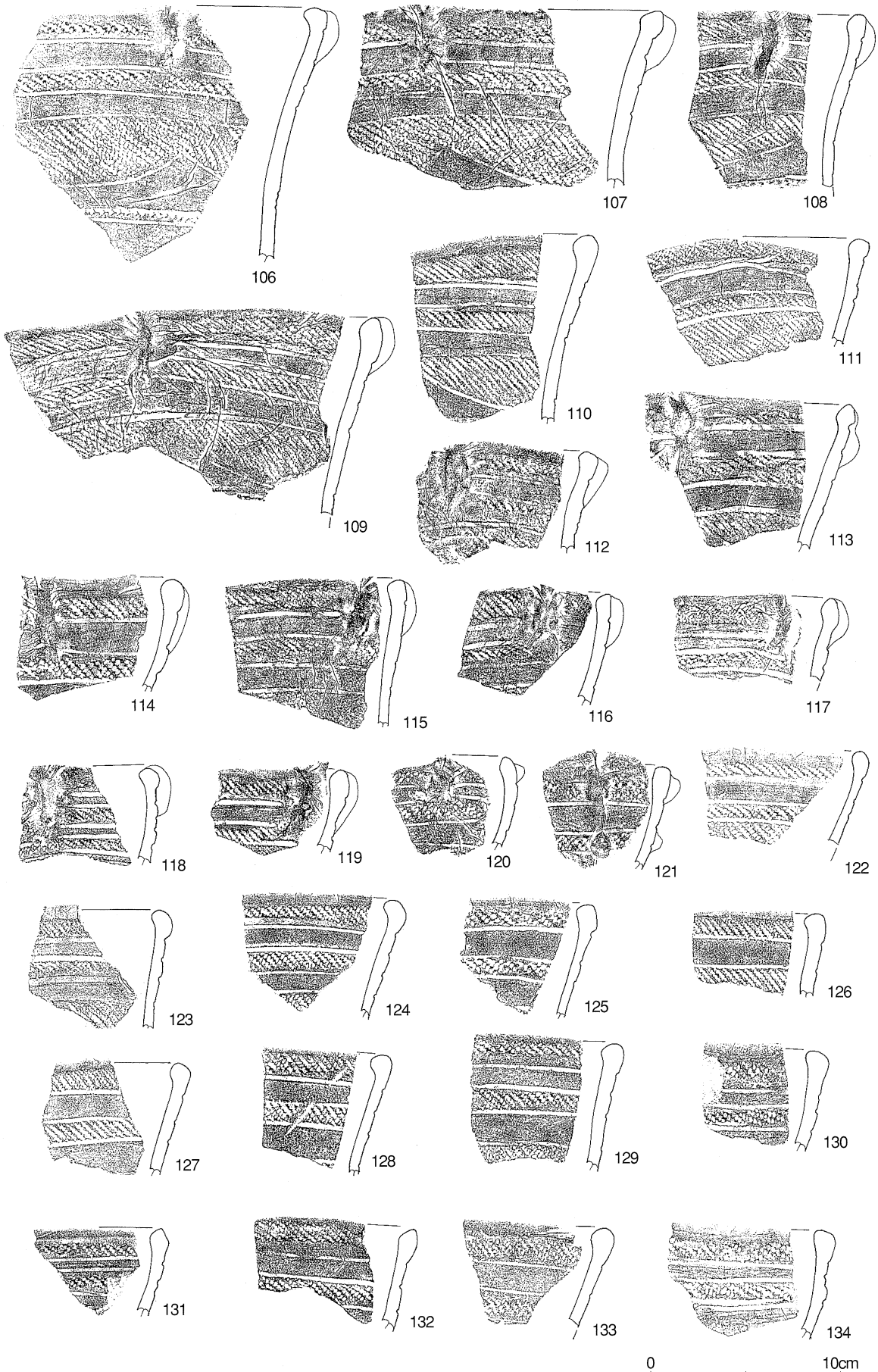
られている。156は口縁上に突出する貼瘤が付けられ、帯縄文に沿って刻文帯が施文される。157～185は隆起帯縄文の口縁部のうち貼瘤がみられない破片を一括した。157は２段の隆起帯縄文に下向磨消弧線文が２段巡る。158～160は上向磨消弧線文が施されている。161は隆起帯縄文に沿う沈線区画文が結繋されている。162～175は沈線区画による２段の隆起帯縄文。176～178･182は多段の隆起帯縄文が巡る。179は隆起帯縄文の区画が無文の幅広い凹帯となり、180は無文帯に横位の粗い沈線が充填される。181は刻文帯が施文される。184は狭小の帯縄文が２段巡る。185は隆起帯縄文のかわりに斜行条線が施文されている。186～189は胴部破片。187は縦長の貼瘤が付されている。188は１条の帯縄文の中央に沈線が施文され複段となる。189も複段の帯縄文に貼瘤が付されている。190は口縁部がくの字状に外反する壷形を呈する。191～227は深鉢の胴部破片。191～193は瓢形で、191は胴部区画文が刻文帯で、遮光器状の磨消弧線文。192～194・214・219・220は上下対向の磨消弧線文で、192・194は胴部区画文に刻文帯が巡る。195～198・200～205は胴部区画文に刻文帯が巡り、横位に連続する磨消弧線文が描出される。199・206～211・216・217は綾くり状磨消弧線文。213・215・225・226は幅狭い帯縄文が区画文となる。218・221は半円形の磨消弧線文が横位に連続する。228～233は深鉢の底部破片。233は底部下端がわずかに突出し帯縄文が巡る。234～239は台付鉢の脚台部の破片。234～238はドーム形を呈し、234は磨消弧線文が配される。239は円錐形の脚台である。帯縄文が巡る。

240～250は口縁部が大きく外反し、胴部中位から内彎気味に窄まる。脚部は検出されていないが、台付鉢である。いずれも口唇部は刻文帯が巡り、縦位の条線を施文する。胴部中位の括れ上部では沈線区画内が磨消され、括れ部上に刻文帯が施されている。括れ部以下の体部は下向弧線が施される。251～368は紐線文系の粗製土器である。251～265は口縁上に刻文帯を巡らせ、条線を施すもので、251は口縁上と胴部中位に平行沈線間に刻文帯が巡り区画され、体部の条線は間隔のある粗い縦方向の条線が施文される。252は刻文帯の下に沈線が１条巡り、条線は斜行する。また253～260、262～265の条線は右側が僅かに下がる上向条線。261は縦位方向の条線施文である。なお、264は口縁上が刻文帯、胴部中位は指圧痕の施された貼付け紐線文である。266～338は口縁上の紐線文が貼付けられているもので、紐線文上は指圧痕によるものである。なお、地文が縄文施文のものも多い。また条線は横位もしくは横位右下がりが主体を占めるものの、わずかに斜行もあるが、357～363の胴部下半部では胴部中位に紐線文が貼付けられ、条線はいずれも斜行する。399～356・364～368は口縁上、体部中位に貼付け紐線文が巡り、条線が施文されるが、体部上半部に縦位の平行沈線間を無文とする磨消懸垂文が垂下する。369～374は無文系で、369･374は浅鉢。370～373は深鉢。なお、372は口唇部が内削状で、折り返しによる二重口縁を呈している。373は口縁に円形の貫通孔がある。375～399は底部を一括した。376～390は底面に網代痕を残置している。400～413は製塩土器である。外面はヘラケズリの後ヘラナデ、内面はヘラナデで整形されている。400～407は口縁部破片で、400・401は口唇部が肥厚する。402・403の口唇部は丸みをもつ。404は内削状に面取りされ、405・407は口唇部を指頭によりつまみ、先尖状を呈する。また406の口唇部はヘラ状工具により平坦に面取りしている。408～411は胴部破片、412・413は底部破片である。狭小の平底であるものの、底部に木葉痕を残置している。414～418はミニチュア土器である。414はヘラナデによる整形のみの鉢で、口径12.1㎝、器高4.2㎝である。415は瓢形を呈し、帯縄文に貼瘤が付されている。416は帯縄文の鉢で、口縁部上に縦位の貼瘤が付され、沈線区画による二段の帯縄文が巡る。417は丸底の椀形を呈する。口唇部にB突起をもち、沈線による入組み状文を器面全面に施す。418も丸底の椀形。平縁で、沈線による意匠文を施す。419は壷形を呈するが、注口土器となろう。内彎する体部に口縁部は直行し、やや内傾する。口縁上と頸部に刻文帯が巡り、胴部は磨消弧線文が施文される。

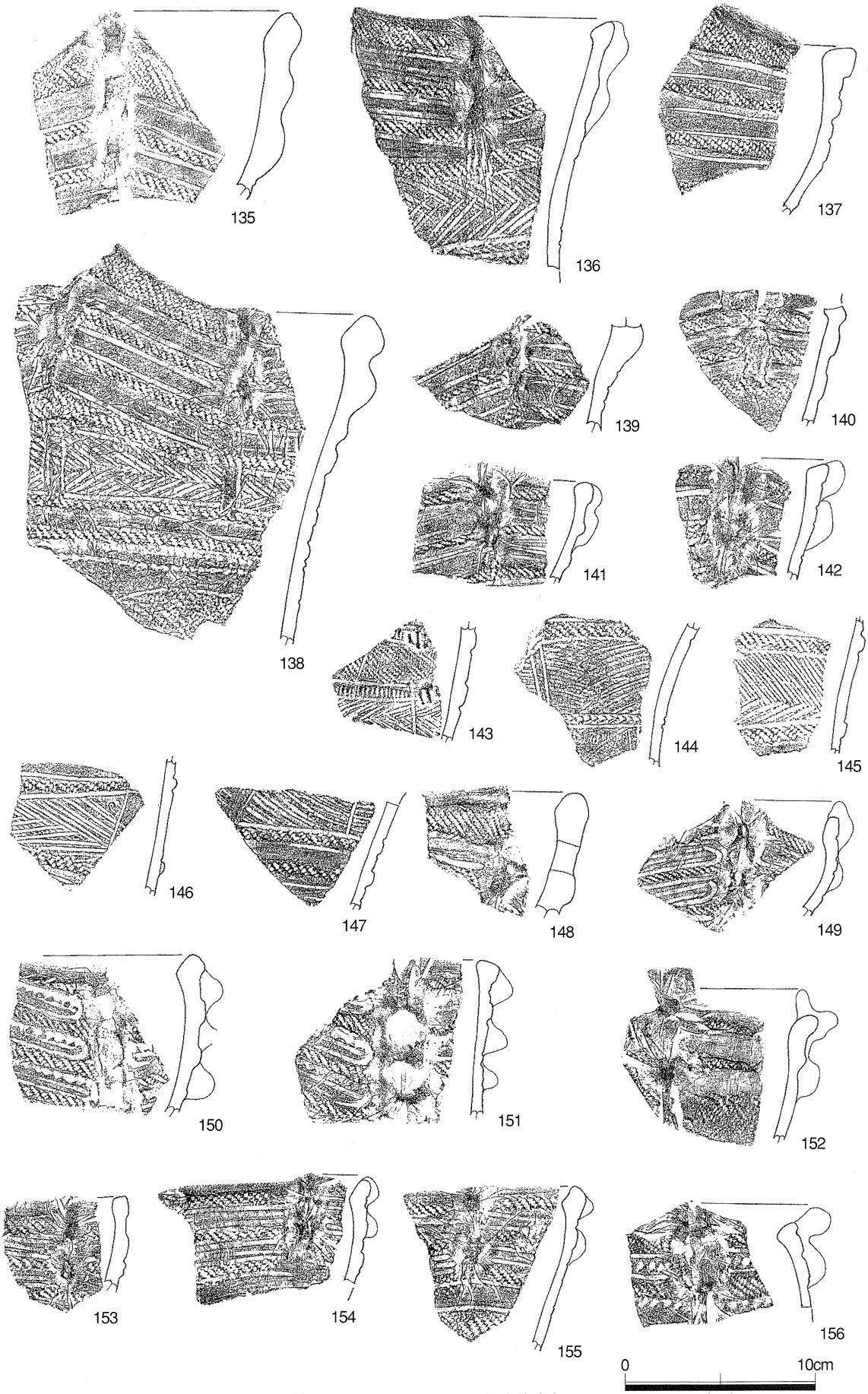
420は隅丸長方形の小型土版である。図下端を欠損する。文様は表裏対称で、縄文地文に対向弧線文が２段施文されている。上部２ヶ所に貫通孔を施している。長さ5.249㎝、幅3.366㎝、厚さ0.765㎝、重量18.78ｇ。421は土製垂飾品である勾玉状を呈する。完存品で尾が先細りし、頭部の穿孔は一方向から貫通させている。全体的に粗い仕上がりである。長さ2.696㎝、幅1.076㎝、厚さ0.903㎝、重量3.80ｇを測る。422～431は土偶である。422はハート形土偶の頭部片。右部頬部、鼻部の一部を欠損し、現況は横長の楕円形を呈している。眉は目周辺を窪ませて表現し、鼻部は大きく高く、目は沈線により抉り周囲を隆起させている。また顎を前に突き出し、後頭部は板状で直接頸部に繋がる。現存長4.94㎝、幅6.72㎝、鼻から後頭部の厚さ4.55㎝である。423は



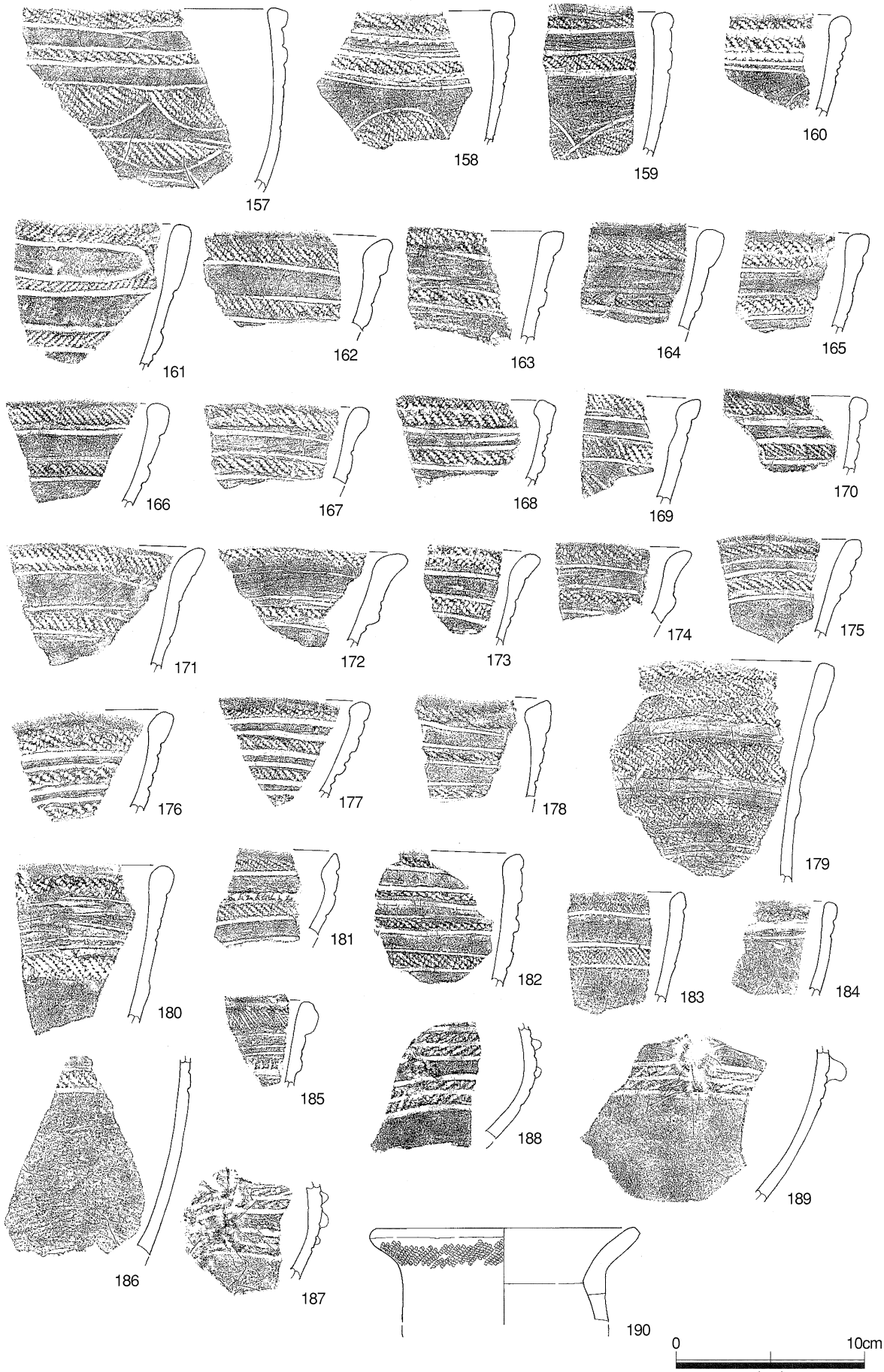
第13図　住居跡SI01出土遺物(4)



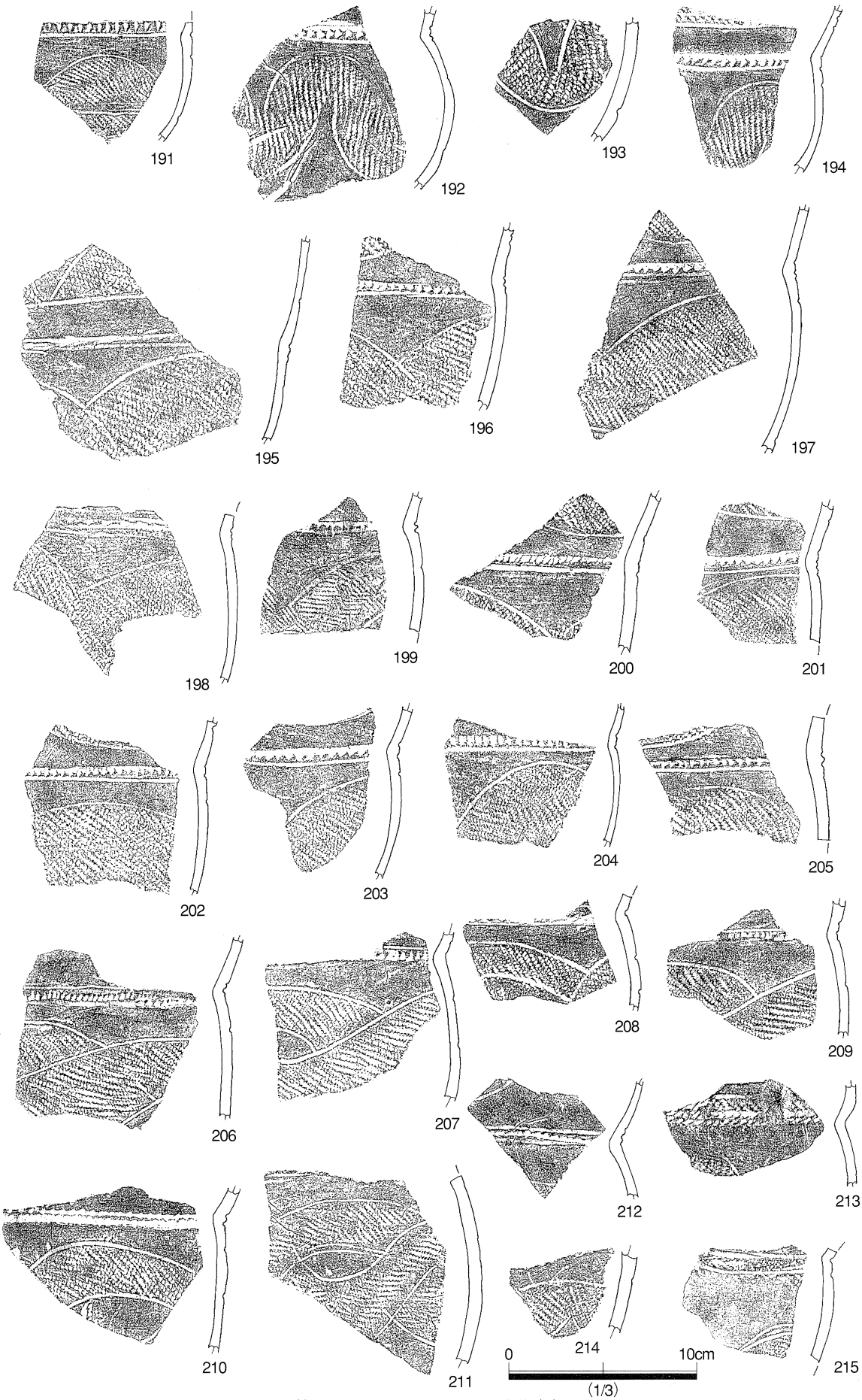
第14図　住居跡SI01出土遺物(5)



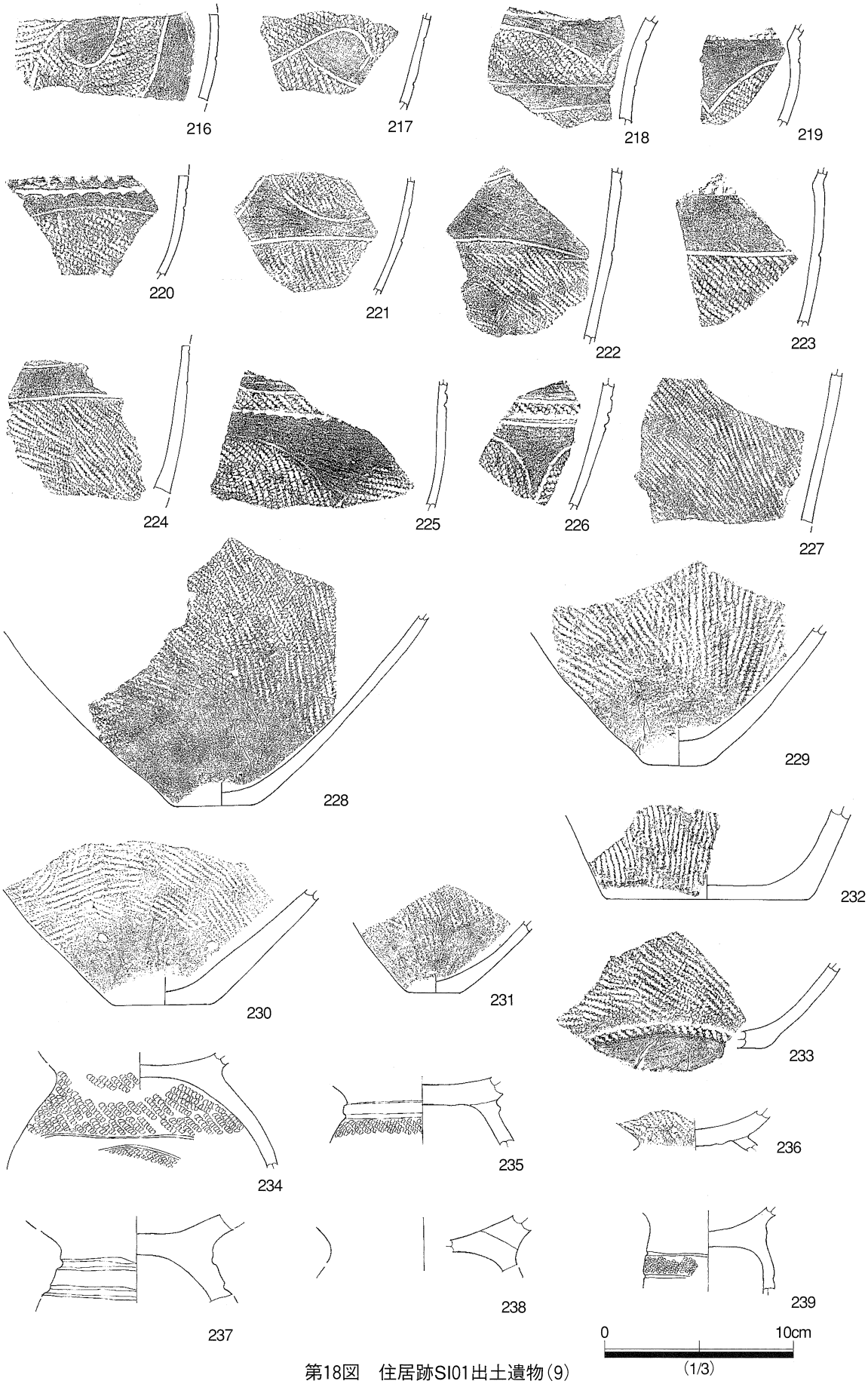
第15図　住居跡SI01出土遺物(6)



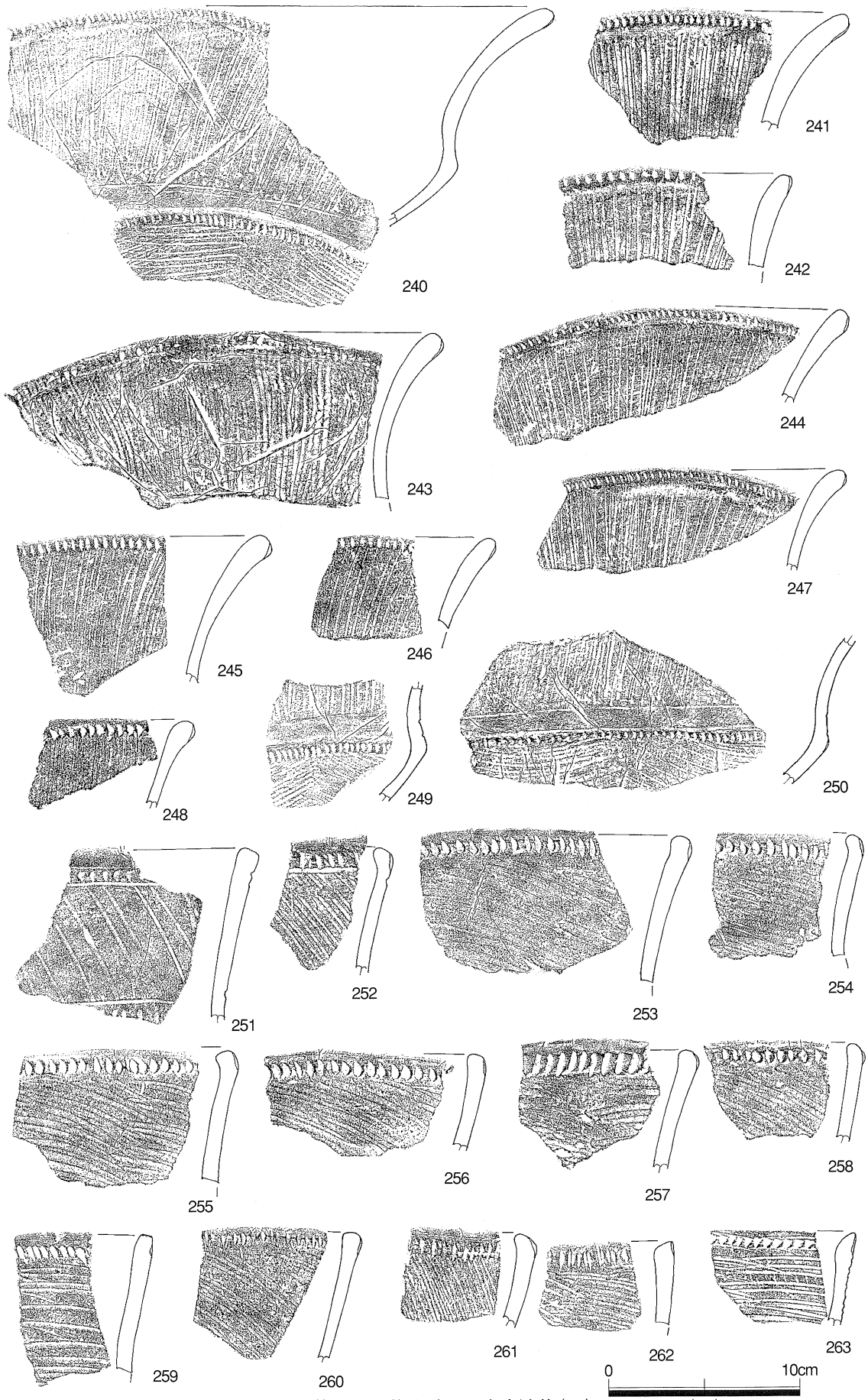
第16図　住居跡SI01出土遺物(7)



第17図　住居跡SI01出土遺物(8)

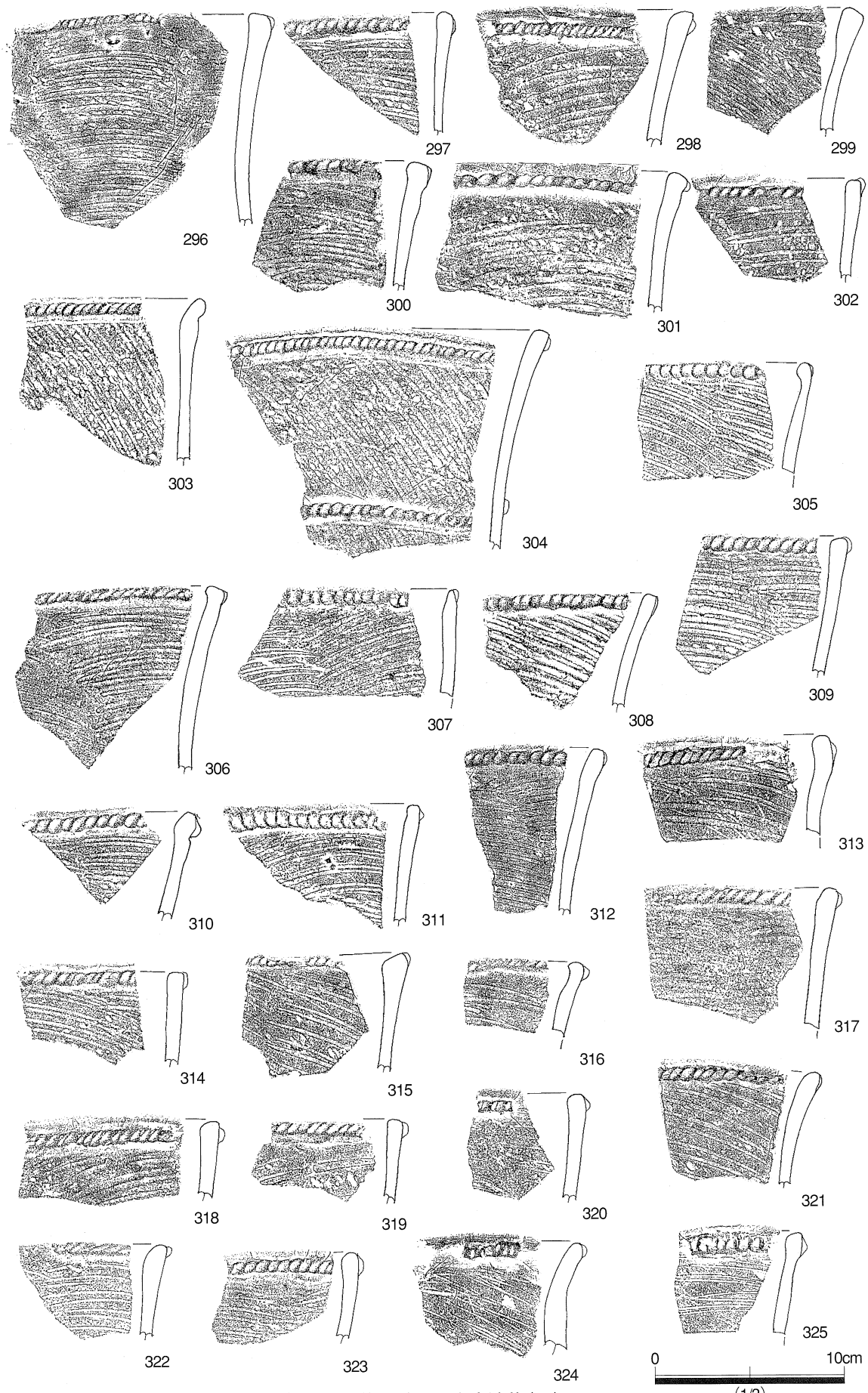


第18図　住居跡SI01出土遺物(9)

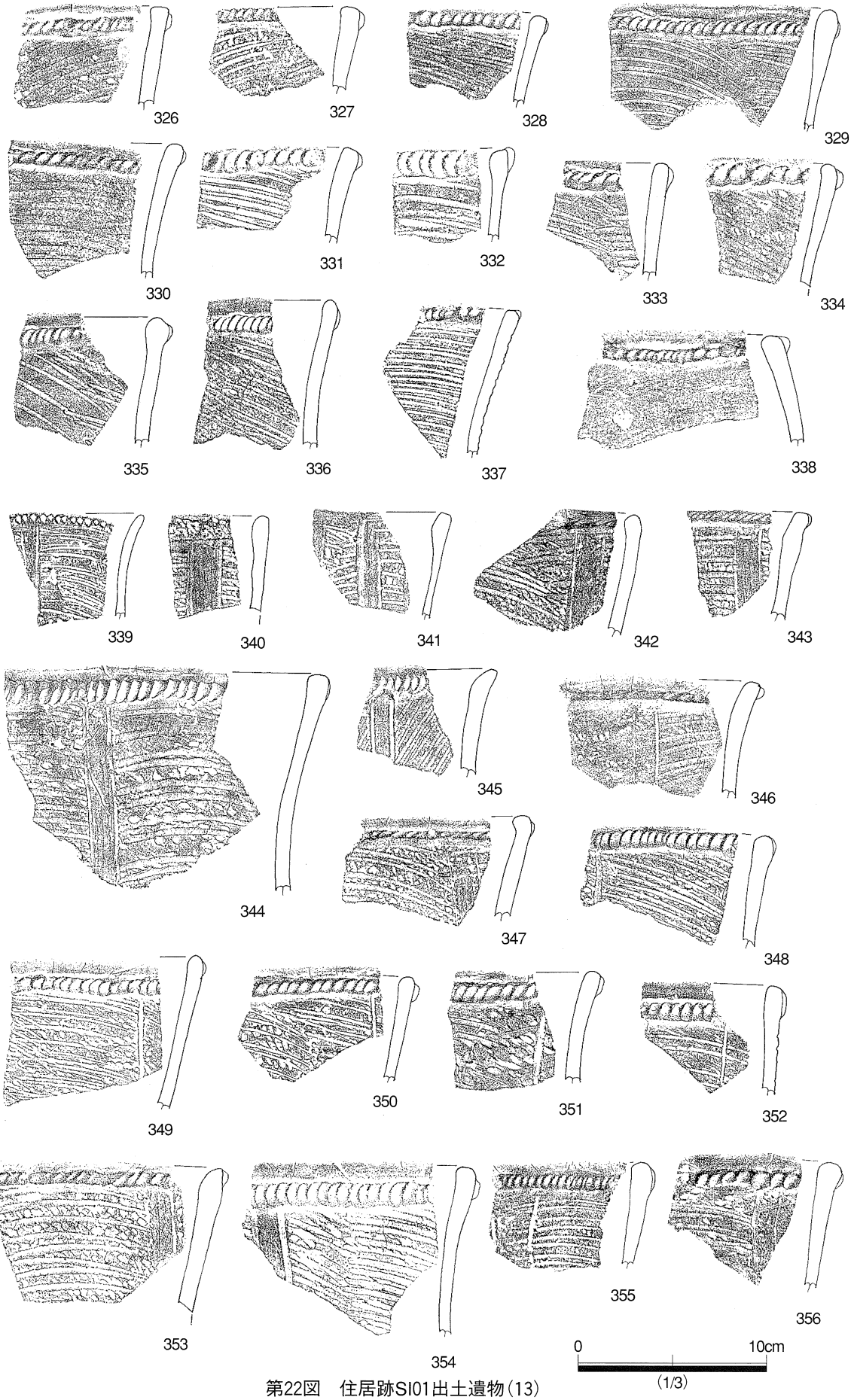


第19図　住居跡SI01出土遺物(10)

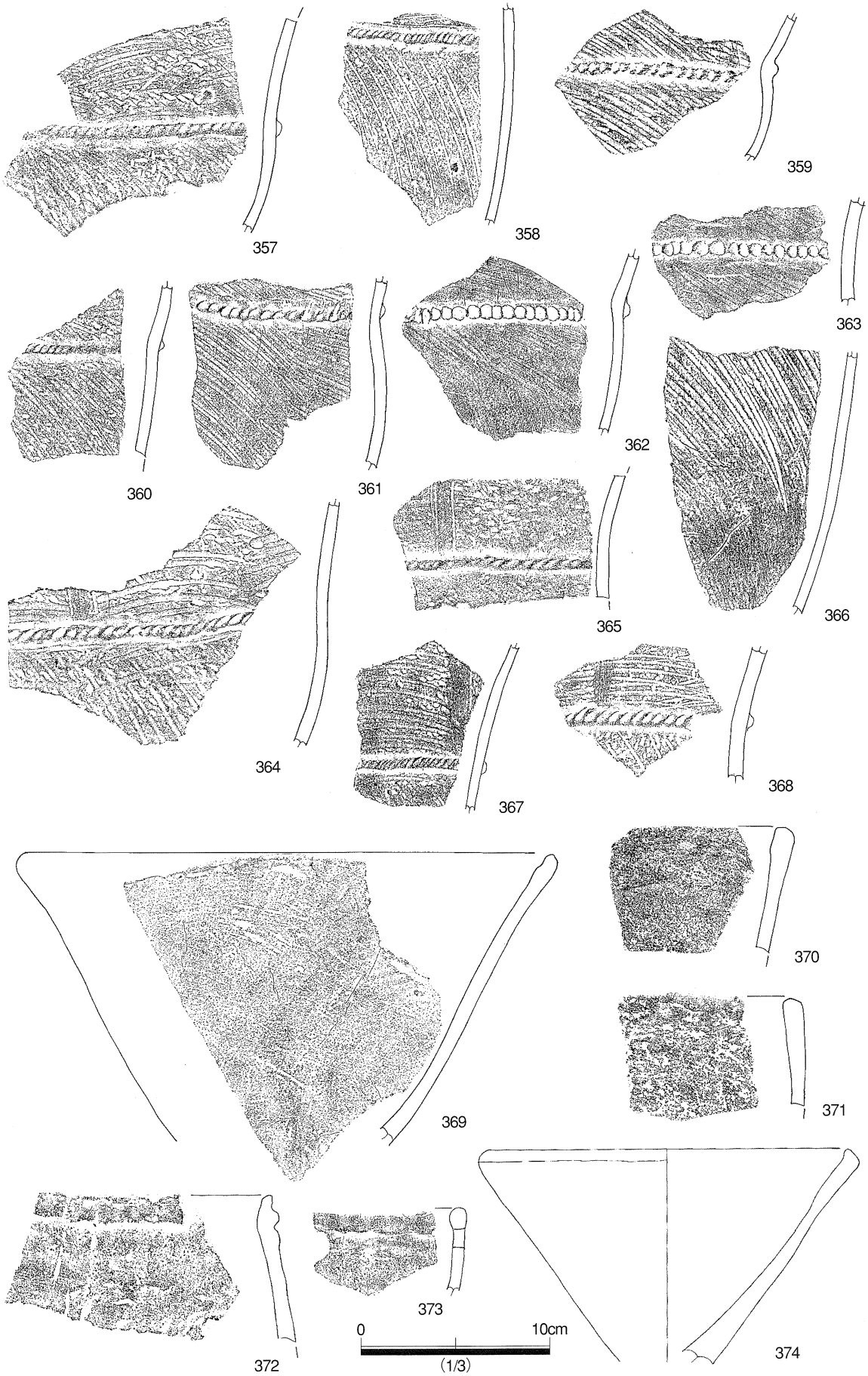
第20図　住居跡SI01出土遺物(11)　(1/3)



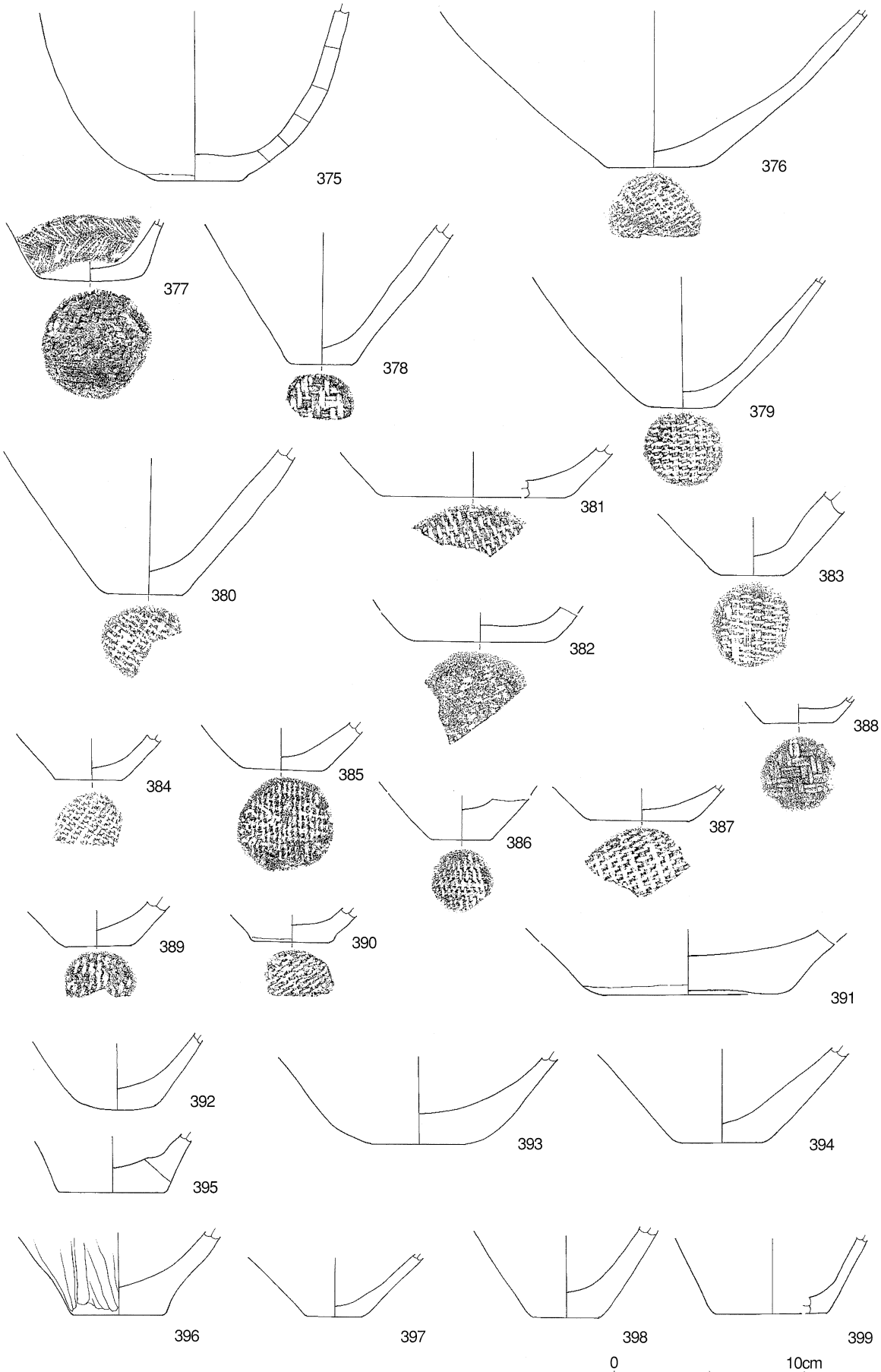
第21図　住居跡SI01出土遺物(12)



第22図　住居跡SI01出土遺物(13)



第23図　住居跡SI01出土遺物(14)

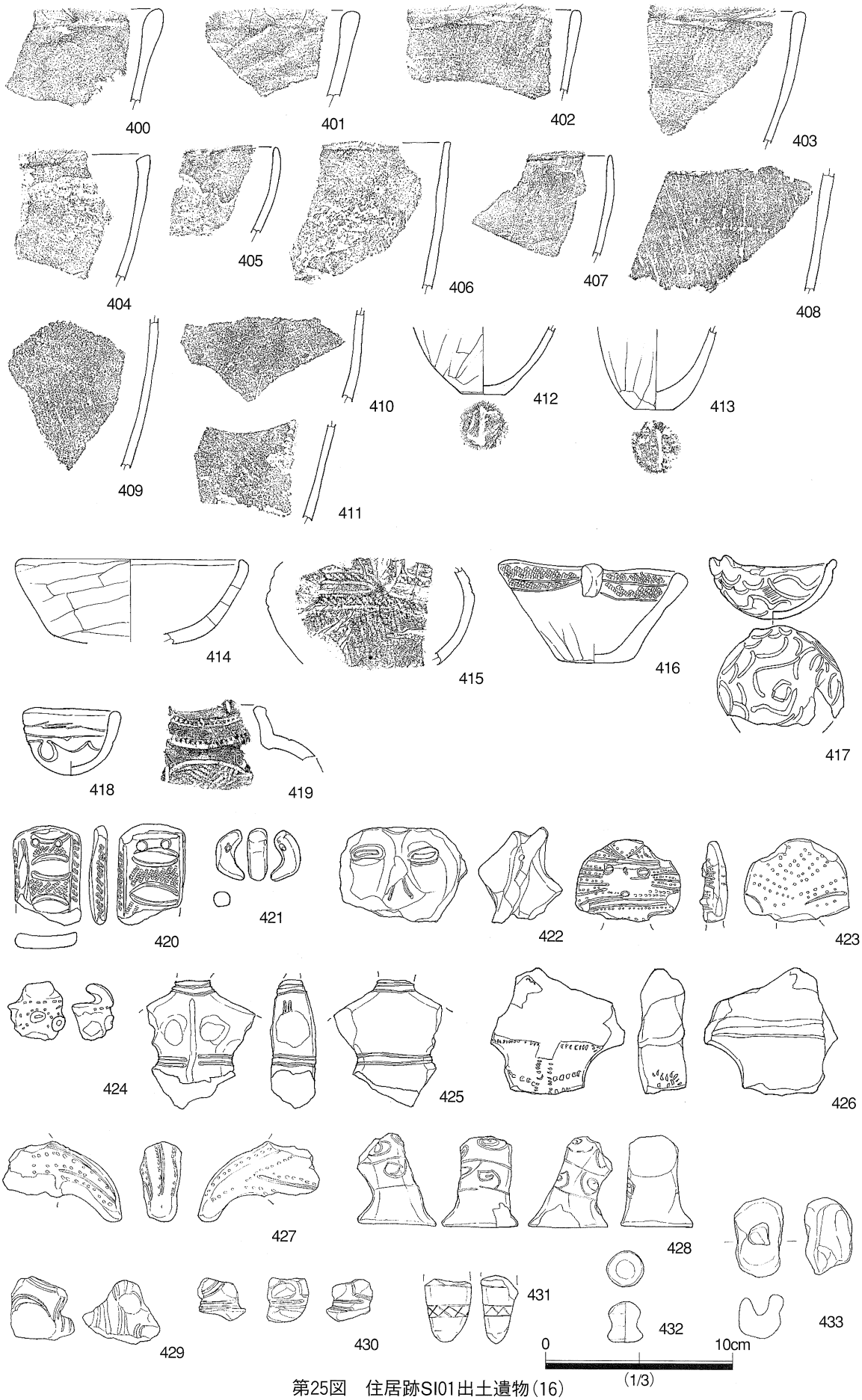


第24図　住居跡SI01出土遺物(15)

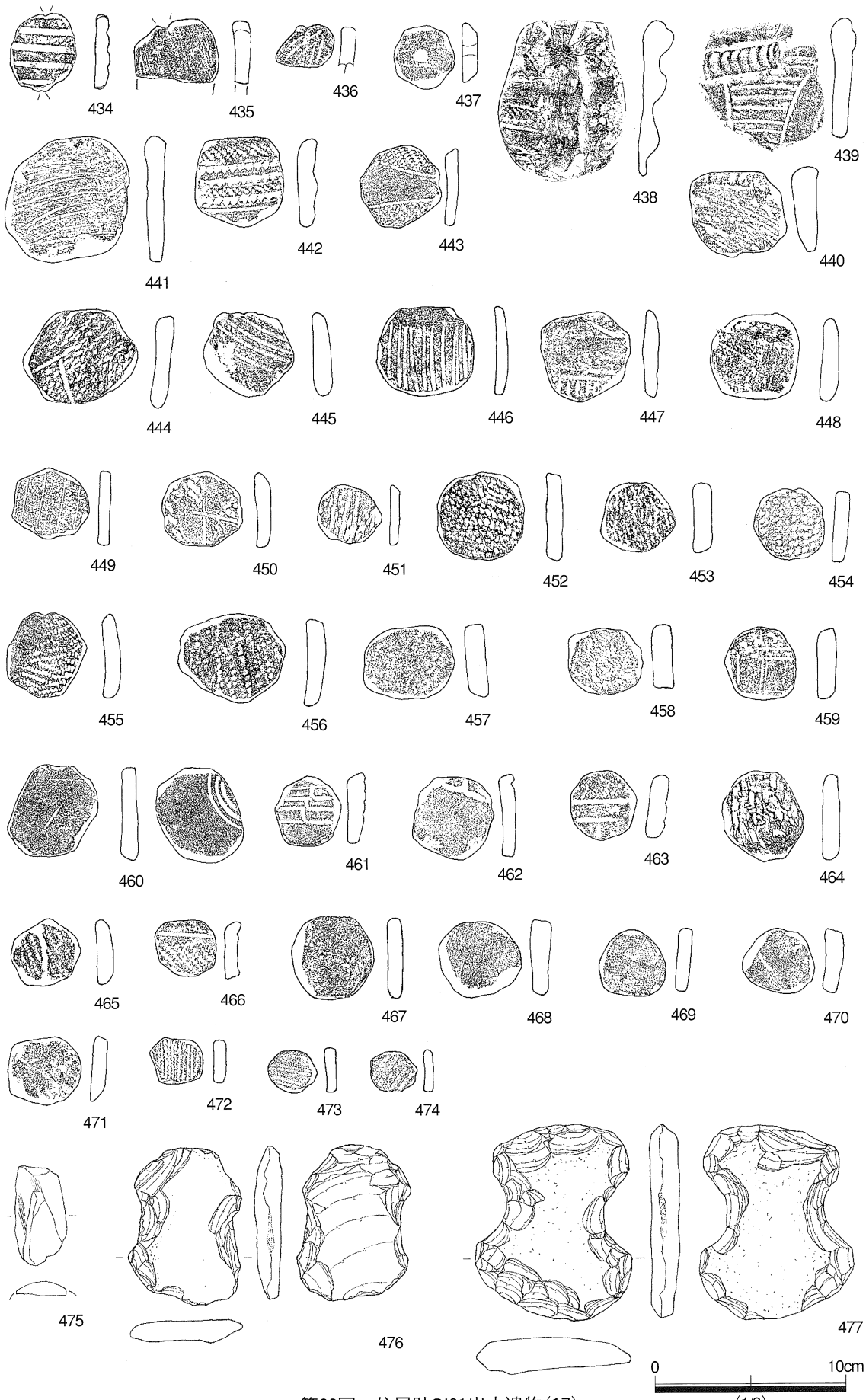
山形土偶の頭部片。半円形の山形を呈する。眉は直線的な眉上隆帯で表現し、鼻は眉中央で小さい瘤状に貼り付けられ、目も眉に接して瘤状に付されている。また口下部の顎状隆帯も直線的な横位隆帯が貼付けられ、中央に円形刺突による口がある。額および左右の頬には沈線間に刺突列が施されている。また後頭部は突起はなく平坦で刺突列が放射状に施されている。現存長4.39cm、幅5.63cm、厚さ1.45cm。424は小型の中空土偶の頭部片。目は小瘤状の貼付けで表し、顔面は刺突文が施されている。現存長3.142cm、幅3.10cm、厚さ2.14cm。425・426は山形土偶の体部破片。425は頸から腰部で、両手も欠損している。頸周りは二重沈線が巡り、胸の両乳房は欠落している。頸下から腹部かけて隆帯による正中線が垂下する。腰にも二重沈線を巡らす。現存長6.03cm、幅5.31cm、厚さ2.26cm。426は胸部の破片。左上腕が僅かに残存している。また乳房の周囲も剥落している。胸周りおよび腰周りに有節沈線文が巡り、さらに胸から臍部まで粘土紐の貼付けによる隆帯が中心線として垂下し、隆帯の両脇に沿って有節沈線文が垂下する。背中には横位の隆帯が貼付けられている。現存長6.71cm、幅7.12cm、厚さ2.52cm。427は左腕破片。肩から湾曲しながら先細りする。沈線に沿って刺突列が施文されている。現存長4.18cm、幅6.49cm、厚さ2.19cm。428はハート形土偶の左脚部。足底は平坦で安定している。沈線区画内に渦巻文が施文される。現存長4.80cm、幅4.12cm、厚さ3.90cm。429はみみずく形土偶の頭頂部であろう。装飾突起の小破片で沈線により表現されている。現存長3.22cm、幅3.99cm、厚さ2.96cm。430もみみずく形土偶の左腕破片。沈線が施文されている。現存長2.31cm、幅2.53cm、厚さ2.17cm。431は山形土偶の脚部片。足先は細くなる。沈線間に×字文を充填する。現存長3.72cm、幅2.31cm、厚さ2.0cm。423は耳栓状を呈した耳飾り。キノコ形とも呼ばれているもので、中央が凹み、先端は丸みをもち、下端は平坦である。長さ2.18cm、幅1.85cm、重量7.40g。433は粘土塊に指先を差し込んでいるもので、焼成粘土塊であろう。長さ4.19cm、幅2.56cm、厚さ2.49cmを測る。

434～474は土器破片を再成形・調製したもので、土器片錘（434～436）、土器片有孔円板（437）、土器片円板（438～474）がある。法量は下記のとおりである（単位cm、g）。

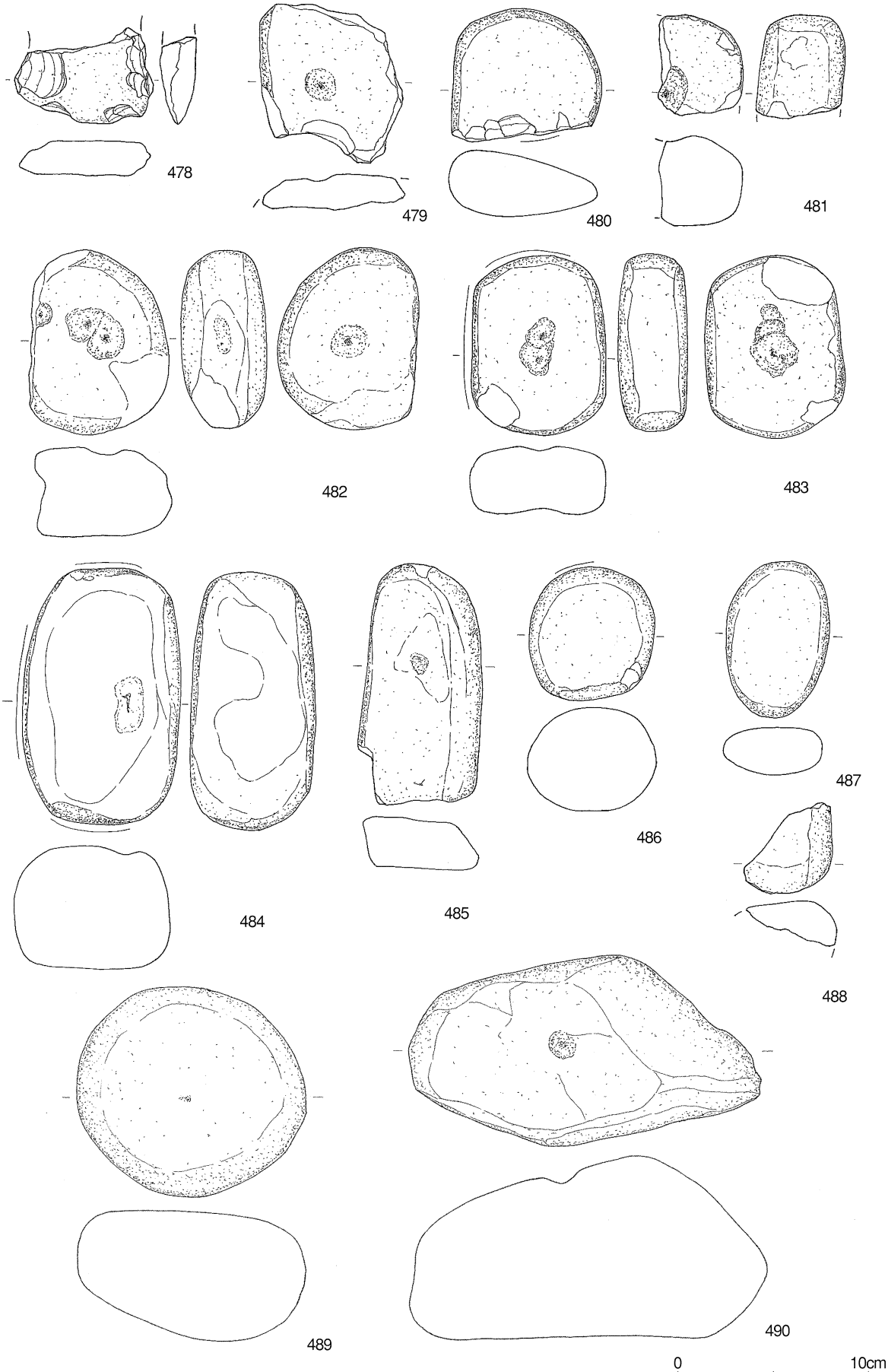
図版番号	長さ	幅	厚さ	重量	研磨状況	図版番号	長さ	幅	厚さ	重量	研磨状況
434	3.951	3.395	0.612	10.24	打欠	435	3.360	4.305	0.802	13.92	打欠
436	2.136	2.873	0.924	5.74	全周	437	3.236	3.193	0.666	8.24	打欠
438	8.245	5.935	1.056	24.12	全周	439	6.405	5.980	0.965	65.00	全周
440	4.252	4.675	1.299	29.10	打欠	441	6.154	6.828	1.090	46.62	打欠
442	4.560	4.262	1.203	25.20	全周	443	4.045	4.197	0.503	11.48	打欠
444	4.930	5.705	0.785	26.38	全周	445	4.325	4.564	1.002	21.26	打欠
446	4.590	4.952	0.553	18.92	全周	447	4.380	4.423	0.605	14.60	打欠
448	4.420	4.675	1.120	21.04	全周	449	3.710	3.820	0.576	10.54	打欠
450	3.826	4.018	0.693	14.74	打欠	451	2.903	3.227	0.993	5.92	打欠
452	4.505	4.401	0.745	19.86	全周	453	3.725	3.798	1.030	16.58	打欠
454	3.538	3.654	0.693	11.80	全周	455	4.304	4.112	0.654	15.56	打欠
456	4.585	5.320	0.842	24.52	全周	457	3.909	4.757	1.020	20.08	打欠
458	3.364	3.701	1.006	17.78	打欠	459	3.802	3.695	0.865	15.72	打欠
460	4.915	4.490	0.640	17.62	打欠	461	3.336	3.167	0.765	11.20	打欠
462	4.247	3.781	0.675	15.20	打欠	463	3.236	3.314	1.021	13.70	研磨
464	4.520	4.215	0.823	18.50	全周	465	3.495	3.605	0.785	10.96	打欠
466	2.962	3.168	0.687	8.24	全周	467	4.190	4.155	0.890	15.78	研磨
468	3.921	4.198	0.887	17.30	全周	469	3.320	3.294	0.673	9.26	研磨
470	3.136	3.639	0.892	13.30	全周	471	3.399	3.788	0.853	13.02	打欠
472	2.112	2.522	0.822	6.30	打欠	473	2.055	2.330	0.514	3.48	打欠
474	2.392	2.039	0.490	3.14	打欠						



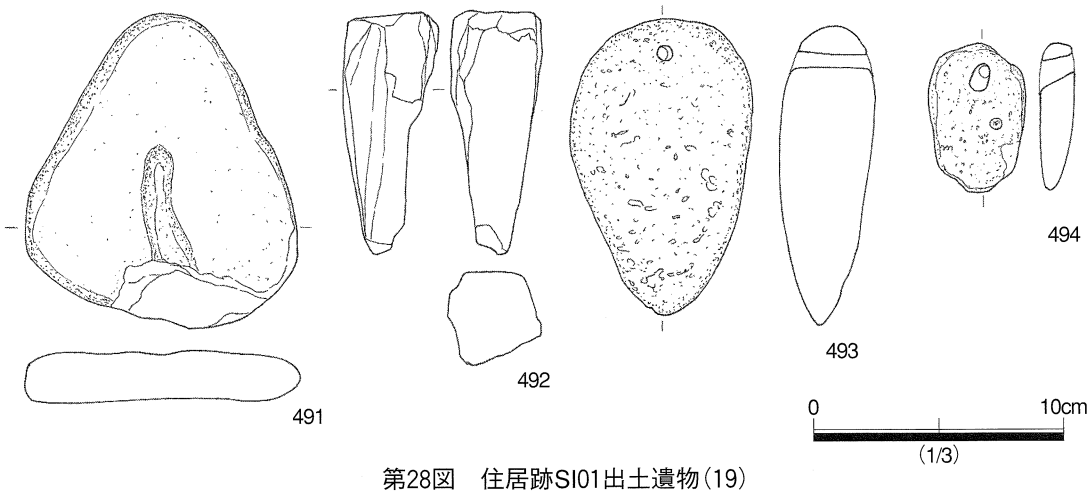
第25図　住居跡SI01出土遺物(16)



第26図　住居跡SI01出土遺物(17)



第27図　住居跡SI01出土遺物(18)



第28図　住居跡SI01出土遺物(19)

475～494は石製品である。475は断面楕円形の石剣の身部破片であろう。表面は比較的丁寧な研磨が施され、研磨痕が明瞭である。476～478は分銅形の打製石斧である。476は正面に原礫面が残置し、刃部調整は比較的粗いが、両側縁の抉り部のみやや丁寧に施されている。477も完存品である。表裏面には原礫面が残るものの、刃部調整は比較的丁寧であるが、とくに抉り部はまめに施されている。砂岩製。478は欠損している。479～489は磨石である。482は凹孔部を表裏および側面にもつ磨石で、左側面は破損後研磨され、赤彩痕が付着していることから磨面もしくは敲き面として使用している。483はいわゆる石鹸形を呈する典型的な磨石。表裏面に凹孔部をもち、6面全面磨面が認められる。486は磨石であるが、下端の敲打面が研磨され再生されている。490は自然礫の表面中央に凹孔部を1ヶ所もち、他面を含めて使用痕は認められない。491・492は砥石である。491は略三角形を呈し、中央に溝状の研磨痕がみられる。493・494は軽石製の浮子である。頂部に穿孔部がある。法量は下記のとおりである（単位cm、g）。

図版番号	石材	長さ	幅	厚さ	重量	図版番号	石材	長さ	幅	厚さ	重量
475	粘板岩	5.220	2.681	0.689	12.50	476	緑泥片岩	8.220	5.783	1.240	78.50
477	安山岩	10.259	8.025	1.758	191.0	478	砂岩	4.639	7.320	1.835	79.50
479	凝灰質砂岩	7.411	7.286	1.898	141.0	480	砂岩	6.906	7.490	3.398	293.0
481	安山岩	5.042	4.517	4.515	158.5	482	砂岩	9.604	7.315	4.588	518.0
483	安山岩	9.459	7.057	3.563	411.0	484	砂岩	13.611	8.067	6.373	1232.0
485	砂岩	12.556	6.381	2.698	351.0	486	砂岩	7.169	6.634	5.326	361.0
487	安山岩	8.234	5.306	2.542	123.0	488	安山岩	4.453	4.708	2.172	41.0
489	安山岩	11.097	12.103	6.587	1361	490	凝灰質砂岩	18.70	9.862	9.444	2041
491	軟質砂岩	12.217	10.740	2.340	259.0	492	凝灰質砂岩	9.647	3.400	3.590	107.0
493	軽石	11.763	7.221	3.458	76.00	494	軽石	5.877	3.972	1.785	11.55

床面上から住居の時期を明示する遺物としては曽谷式から安行1式期が中心であり、また住居の形態や炉の状況などからみて、本住居は曽谷・安行1式期のものであると判断できる。

第２号住居跡（SI02）（第29図～第31図）

調査区南東側、H－Ⅵ区に位置し、北西側でSI16と西側でSI18と接している。入口施設と考えられる張出部は南側に向け、張出部を含めた主軸である南北軸長4.64ｍを測り、居住主体部は南北軸長3.91ｍ、東西軸長4.28ｍの東西に長い楕円形を呈する。張出部と炉跡を通る主軸方位はＮ－15°－Ｗを示す。柱穴は壁際周縁に27本検出され、規模は径15.0～67.0㎝と幅がみられるが、径20㎝前後が集中している。また柱穴の深さは7.0～59.0㎝で、平均の深さは31.22㎝を測る。また住居内の炉跡周囲にも柱穴がみられるが配置には間尺が整わないものばかりであり、いずれも主柱穴ではないであろう。南側は溝状の張出部施設で、外側に開閉施設を有するコの字状施設となろう。開閉施設には２基の土坑状施設を設置し、掘込み内には小規模なピットが穿ってあり、通路は幅50.0㎝を測る。壁高は北側で15.0㎝程、西側で17.0㎝の高さを有す。西側の出入口とみなされる張出部は、外側へ向って高まっていく。炉跡は中軸線上やや張出部寄り（南側寄り）に設置され、遺存状態は良好である。規模は長径75.0㎝、短径68.0㎝、深さは12.0㎝の円形を呈し、掘形は浅い皿状に掘り窪めてあり、底面の平坦部は狭小で被熱により赤化硬化している。焼土粒を多量に含む明赤褐色土（2.5YR5/6）で覆われていた。床面は全体的に堅く締まり炉跡周囲はとくに顕著であった。覆土は浅いものの黒褐色土（10YR3/1）が床面上に堆積していた。明瞭ではないが自然堆積層である。

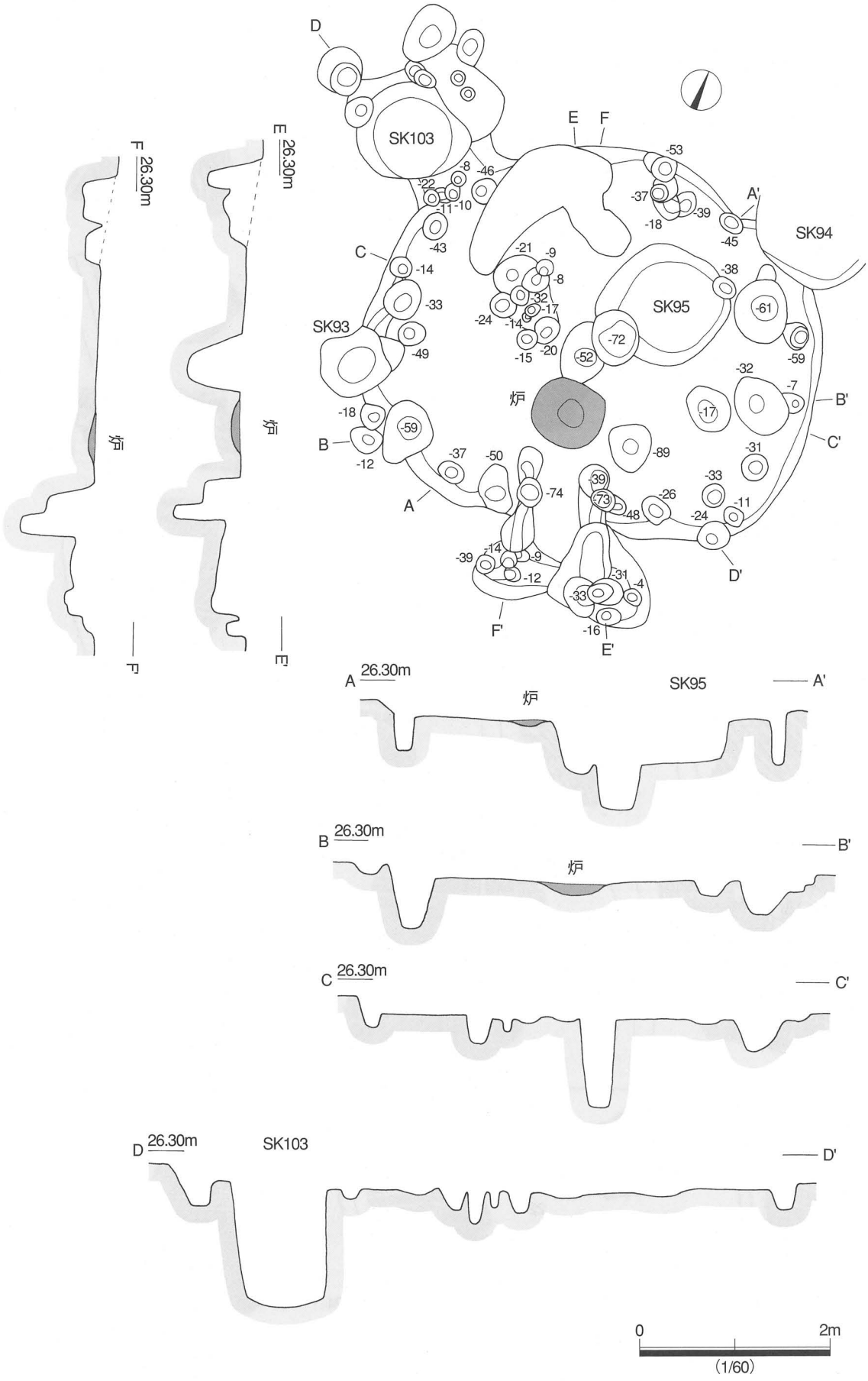
住居の東側の覆土中から堀之内１式の口縁部と胴部の深鉢形土器がまとまって出土した。その他堀之内２式もわずかながら確認された。さらに土製円板２点、石製品として石錘１点、石剣１点、磨製石斧１点、磨石類２点が出土している（第30・31図）。

１は朝顔形深鉢で、口辺部に縦位の沈線が施され、口縁部は円形貼付文から沈線文が垂下する。２は口縁部が外反し、口辺部に隆帯が巡り、口縁部は無文帯となる。３は波状口縁で、平行する隆帯文が波頂部から垂下する。４・５は胴部破片。円形刺突文を中心に沈線による幾何学文が施され、垂下する隆帯上に刺突文が連続している。６は波状口縁の深鉢、口辺部を無文帯とし、縄文地文に櫛歯状工具による条線を口縁に並行させ、さらに懸垂文として垂下させる。７は口縁部がわずかに内彎する深鉢。縄文地で口縁上から条線を垂下させる。８も縄文地に３条の沈線を垂下させる。９は口縁部がくの字状に短く外反する。10～14は縄文施文のみの深鉢。10は波状口縁で、波頂部に盲孔が施されている。15・17・18は沈線のみによる意匠を施している。16は条線を垂下させている。19は縄文地に曲線文。20は波状条線を垂下させる。21～25は堀之内２式。21はやや小型の深鉢。波状口縁を呈し、口縁下に２条の紐帯を巡らし、紐帯を跨ぐように８字状貼付けを付し、胴部に横位磨消楕円形文を配する。22は２条の紐帯に微隆帯が跨り、胴部は縄文帯が巡る。23は口縁上を開け、押圧を加えた紐帯を巡らし、沈線区画された縄文帯が巡る。24・25は深鉢胴部破片。半截竹管によって重畳する三角文を施す。26～37は深鉢の底部破片を集成した。いずれも深鉢であろう。

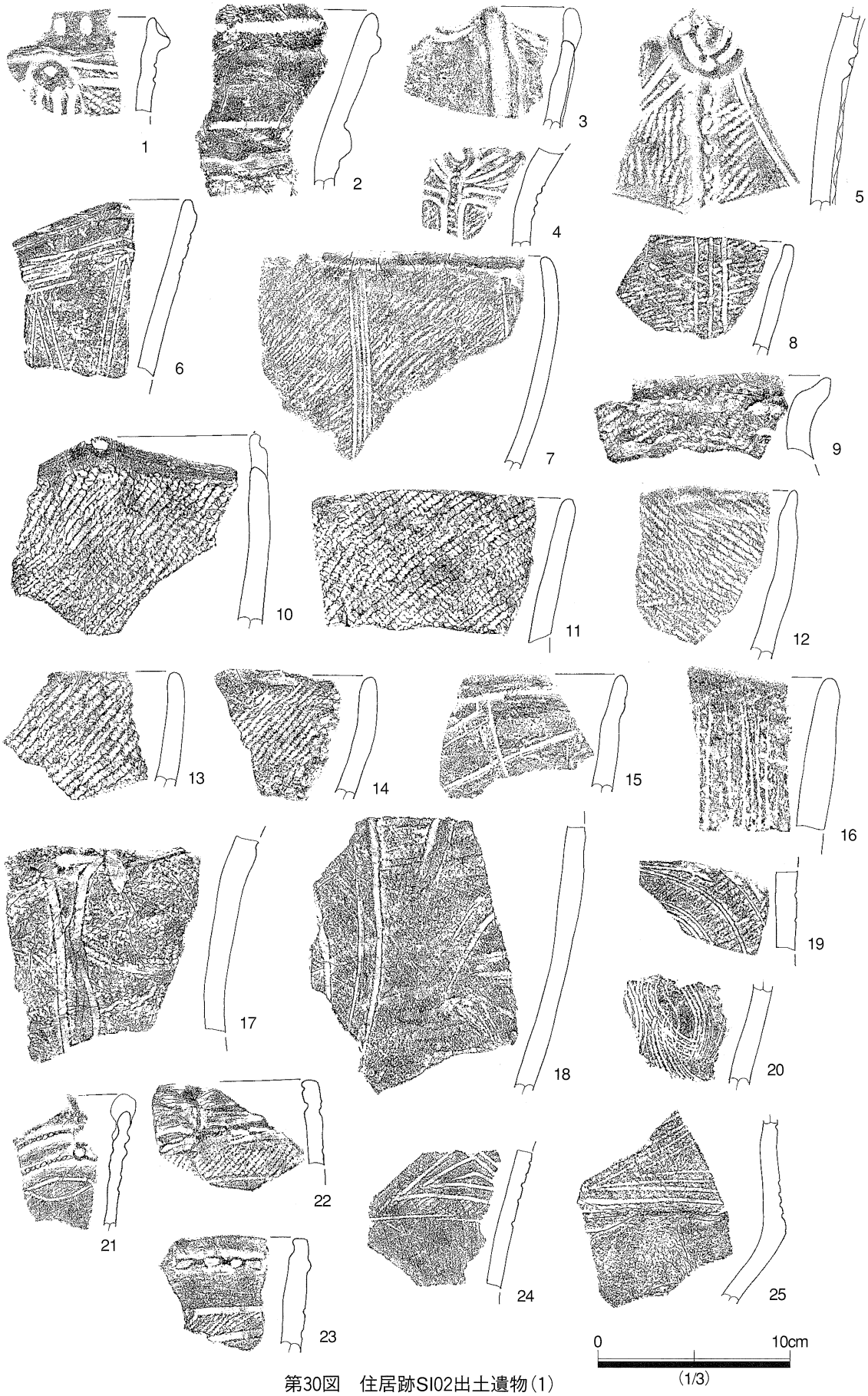
38～44は土製品および石製品である。38・39は深鉢の胴部破片を楕円形に研磨した土器片円板である。38は楕円形を呈し、ほぼ全周比較的粗い研磨が施されている。法量は長さ4.55㎝、幅3.41㎝、厚さ0.8㎝、重量17.16ｇを測る。39も楕円形を呈し、全周比較的丁寧な研磨が施されている。法量は長さ4.56㎝、幅3.96㎝、厚さ0.62㎝、重量15.27ｇを測る。

40は粘板岩製の石錘である。楕円形の自然礫の両端に擦切り溝を設けた、いわゆる「切目石錘」で、長さ5.618㎝、幅4.054㎝、厚さ0.966㎝、重量31.5ｇ。41は断面楕円形の石剣の身部破片である。砂岩製。幅2.921㎝、厚さ2.087㎝。比較的丁寧に研磨調整を施している。42は頁岩製の磨製石斧で基部側破片である。全体的に研磨が丁寧に施されている。現存長7.836㎝、幅5.523㎝、厚さ2.802㎝。43・44は磨石類の破片である。43は安山岩製で磨面が明瞭ではない。現存長1.93㎝、幅4.74㎝、厚さ3.06㎝、重量68.0ｇ。44はホルンフェルス製で楕円形を呈し、表面に磨面が認められる。現存長5.264㎝、幅3.0㎝、厚さ4.24㎝、重量55.0ｇを測る。

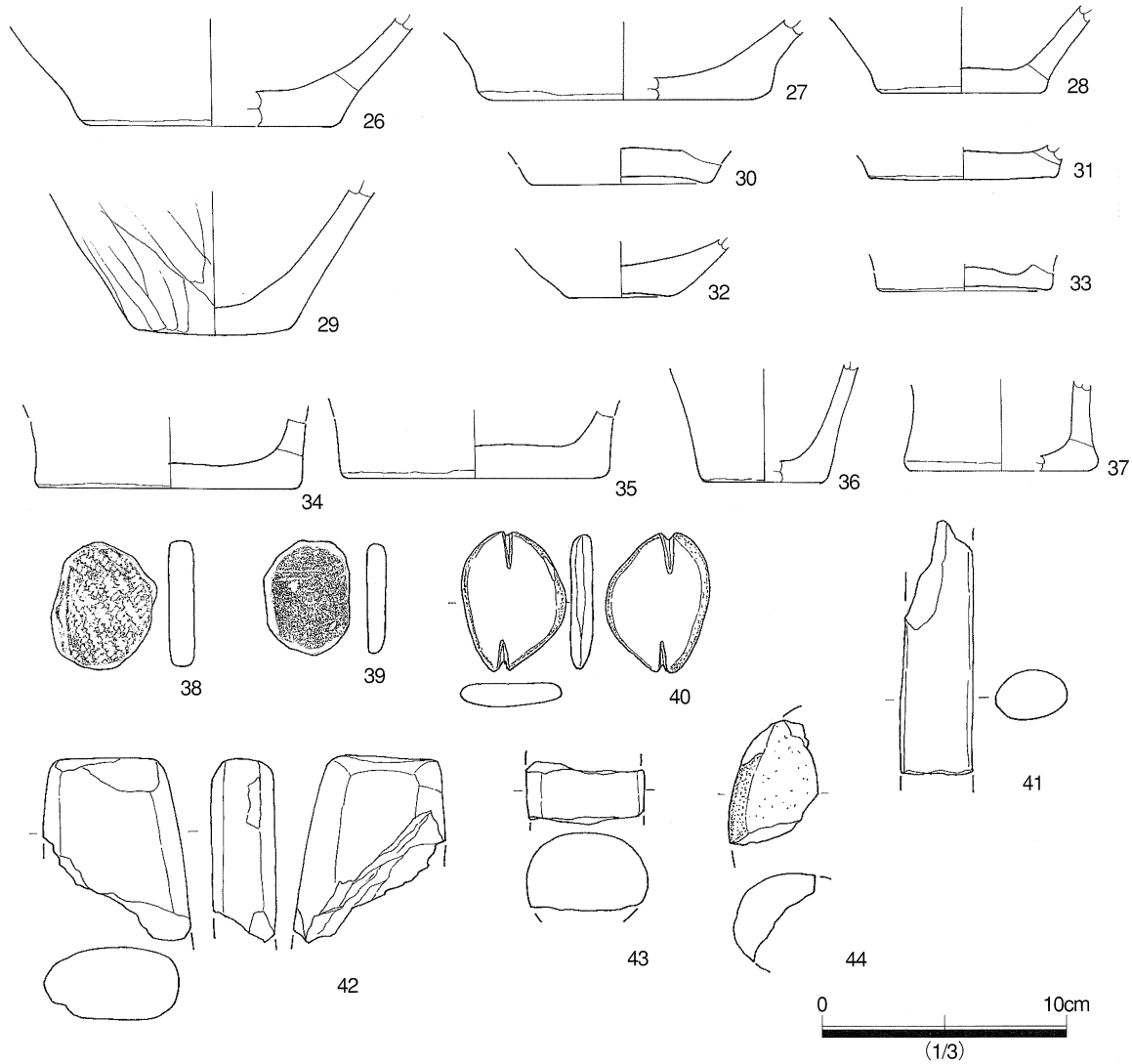
床面上から堀之内１式期とわずかながら堀之内２式期の土器が出土していることから、本住居の中心となる時期は堀之内１式期と判断できる。



第29図　住居跡SI02実測図



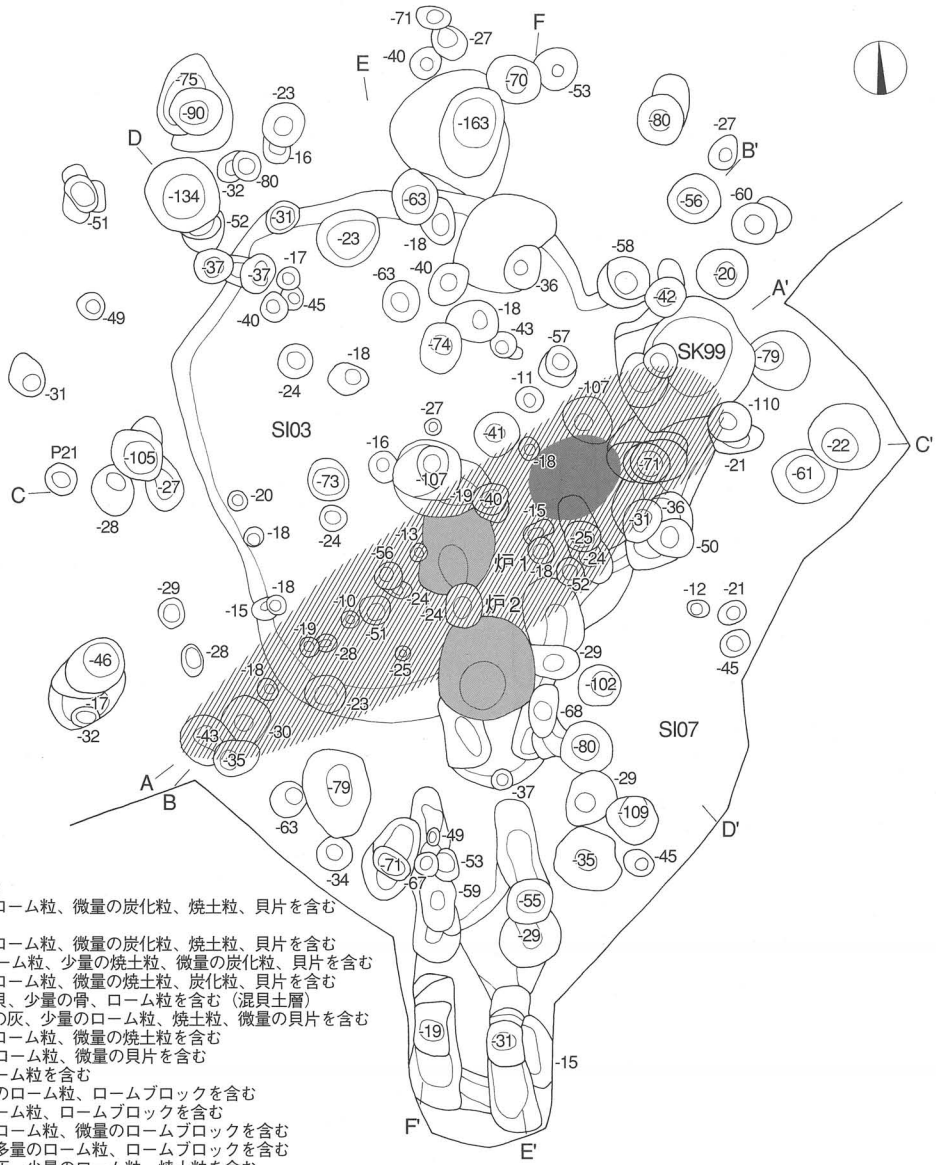
第30図　住居跡SI02出土遺物(1)

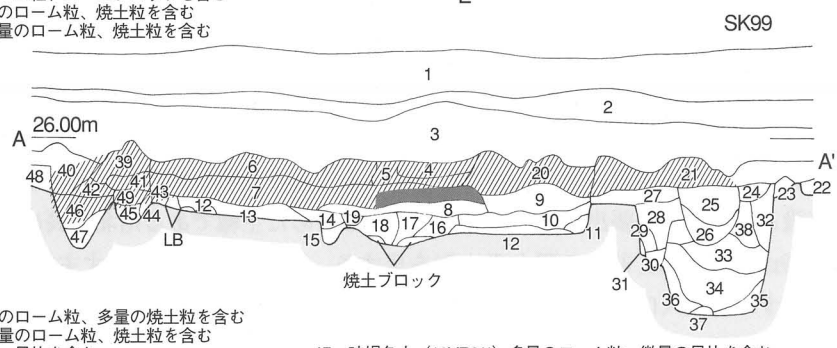


第31図　住居跡SI02出土遺物(2)

第３号住居跡（SI03）（第32図～第45図）

調査区南東側、J－Ⅴ、K－Ⅴ区から検出された。住居跡SI07のほぼ中央を切って構築している。なお、本跡は貝層を伴いさらに南東の保存区域に延びていることが判明したため、３ｍ南東に拡張して調査を実施した。入口施設と考えられる張出部を南に向け、張出部含めた主軸である南北軸長は4.84ｍを測り、居住主体部は南北軸4.09ｍ、東西軸3.37ｍの隅丸長方形を呈する。張出部と炉跡を通す主軸方位はN－８°－Wを指す。張出部は平行する溝状入口部で、溝内にはピットを伴う。東側列は２本のピットを伴うもので明瞭であるが、西側列については溝の南側一部が確認できるだけである。また外側は掘り込みによる開閉部があり、通路の長さ128.0㎝、幅28.0㎝を測る。壁高は西側で17.0㎝、東側で16.0㎝であり、南側入口部は、外側へ向って高まっていく。明瞭な壁柱穴はなく、住居内に柱穴49本が検出され、うち炉１を囲み深度が51.0～107.0㎝の５本が主柱穴で、その他は間尺に合うものはなく支柱穴であろう。支柱穴の大きさは径11.0～76.0㎝、深さは10.0～107.0㎝で、平均の深さは36.8㎝を測る。炉跡は中軸線上に２ヶ所検出されているが、炉２は切り合いあるいは貼床など明確ではないが、古期のSI07の主炉とした。そこで本跡の炉跡は住居跡ほぼ中央に位置する炉１とすることができる。大きさは長径61.0㎝、短径57.0㎝前後の楕円形を呈し、深さは10.0㎝である。掘形は浅い皿状に掘り窪めてあり、底面の平坦部は狭小で起伏がなく被熱により赤化硬化している。焼土粒を多量に含む明赤褐色土（2.5YR5/6）で覆われていた。床面は全体的に堅く締まり検出しやすかった。覆土は４層から20層の17層





1　盛土、褐色土（7.5YR4/6）
2　砂利層、灰黄色土（2.5YR6/2）
3　暗褐色土（10YR3/3）少量のローム粒、微量の炭化粒、焼土粒、貝片を含む

SI03

4　黒褐色土（10YR2/3）少量のローム粒、微量の炭化粒、焼土粒、貝片を含む
5　褐色土（7.5YR4/6）少量のローム粒、少量の焼土粒、微量の炭化粒、貝片を含む
6　黒褐色土（10YR2/2）少量のローム粒、微量の焼土粒、炭化粒、貝片を含む
7　黒褐色土（10YR2/2）多量の貝、少量の骨、ローム粒を含む（混貝土層）
8　灰黒褐色土（10YR5/2）多量の灰、少量のローム粒、焼土粒、微量の貝片を含む
9　黒褐色土（10YR2/2）少量のローム粒、微量の焼土粒を含む
10　暗褐色土（10YR3/3）少量のローム粒、微量の貝片を含む
11　褐色土（10YR4/4）多量のローム粒を含む
12　明黄褐色土（10YR6/6）多量のローム粒、ロームブロックを含む
13　褐色土（10YR4/4）多量のローム粒、ロームブロックを含む
14　暗褐色土（10YR3/3）多量のローム粒、微量のロームブロックを含む
15　にぶい黄褐色土（10YR5/4）多量のローム粒、ロームブロックを含む
16　灰白色土（10YR7/1）多量の灰、少量のローム粒、焼土粒を含む
17　灰黄褐色土（10YR6/2）多量の灰、少量のローム粒、焼土粒を含む
18　灰白色土（10YR7/1）多量の灰、少量のローム粒、多量の焼土粒を含む
19　灰黄褐色土（10YR6/2）多量の灰、少量のローム粒、焼土粒を含む
20　黒褐色土（10YR2/2）微量のローム粒、貝片を含む

SI07

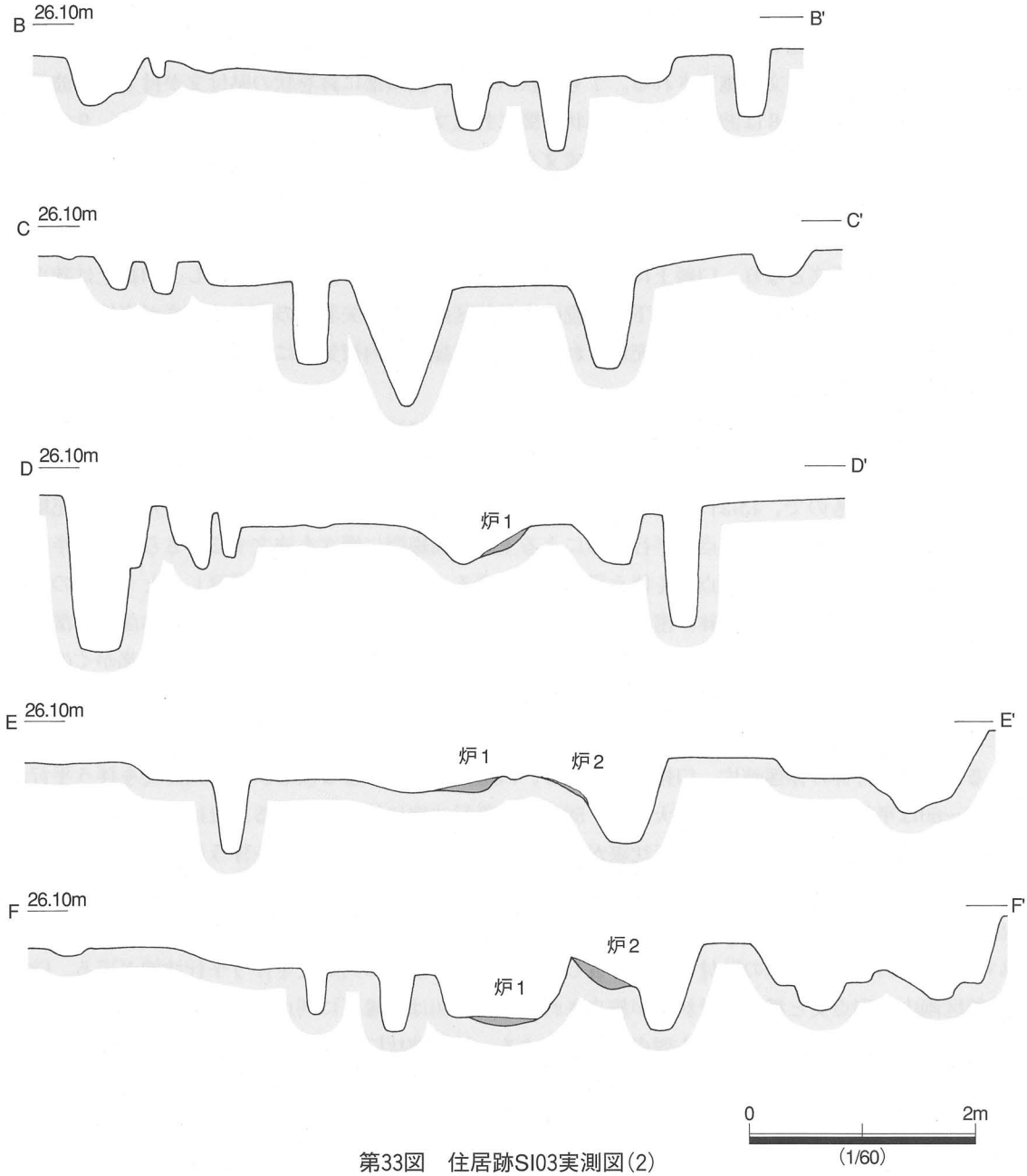
21　黒褐色土（10YR2/2）微量のローム粒、焼土粒、貝片を含む
22　褐色土（10YR4/6）多量のローム粒を含む
23　褐色土（10YR4/6）少量のローム粒を含む
24　暗褐色土（10YR3/3）少量のローム粒、微量の炭化粒を含む
25　黒褐色土（10YR3/1）少量のローム粒、微量の炭化粒、焼土粒、貝片を含む
26　暗褐色土（10YR3/3）少量のローム粒を含む
27　黒褐色土（10YR2/2）少量のローム粒、微量の焼土粒を含む
39　黒褐色土（10YR2/3）微量のローム粒、少量の焼土粒、貝片を含む
40　黒褐色土（10YR2/3）微量のローム粒、微量の焼土粒、貝片を含む
41　黒褐色土（10YR3/1）少量のローム粒、焼土粒、微量の貝片を含む
42　黒褐色土（10YR3/1）少量のローム粒、焼土粒、貝片を含む
43　暗褐色土（10YR3/4）多量のローム粒を含む
44　暗褐色土（10YR3/4）多量のローム粒、少量の貝片を含む
45　褐色土（10YR4/6）多量のローム粒、少量の貝片を含む
46　褐色土（10YR4/4）多量のローム粒、微量の貝片を含む
47　暗褐色土（10YR3/4）多量のローム粒、微量の貝片を含む
48　黒褐色土（10YR3/2）多量のローム粒を含む
49　暗褐色土（10YR3/3）多量のローム粒を含む

SK99

28　黒褐色土（10YR2/3）少量のローム粒、微量の焼土粒、少量の骨片を含む
29　暗褐色土（10YR3/3）微量のローム粒、少量の貝片を含む
30　褐色土（10YR4/4）多量のローム粒、少量の貝片を含む
31　褐色土（10YR4/4）多量のローム粒を含む
32　黄褐色土（10YR5/6）多量のローム粒、ロームブロックを含む
33　褐色土（10YR4/4）少量のローム粒、微量の焼土粒を含む
34　暗褐色土（10YR3/3）微量のローム粒、焼土粒を含む
35　暗褐色土（10YR3/3）少量のローム粒、ロームブロックを含む
36　暗褐色土（10YR3/3）少量のローム粒、微量のロームブロックを含む
37　暗褐色土（10YR3/3）多量のローム粒を含む
38　褐色土（10YR4/4）少量のローム粒、焼土粒を含む

0　2m
(1/60)

第32図　住居跡SI03,07実測図(1)



第33図　住居跡SI03実測図(2)

が確認された。上層および中層は黒褐色土で覆われ、床面上の下層は褐色土が堆積しており、いわゆるレンズ状を呈する自然堆積層である。また炉跡の北東側には貝層が床面から若干浮いて検出された。黒褐色土が混じる混土貝層で、確認された規模は南北35.0cm、東西52.0cm、層厚25.0cmを測り、中型のハマグリとオキシジミを主体とする貝層で、僅かにシオフキ、小型のアカニシ、サルボウが混入し、汽水産のヤマトシジミも検出された。また貝層中にはイノシシおよびニホンジカが纏まり、魚骨としてスズキ、タイ、ハゼ、ウナギ類が検出された。ここはちょうど保存区域との境であったため、３ｍ南東に拡張したものの、貝層の中心部は大きく撹乱を受けていることが判明した。

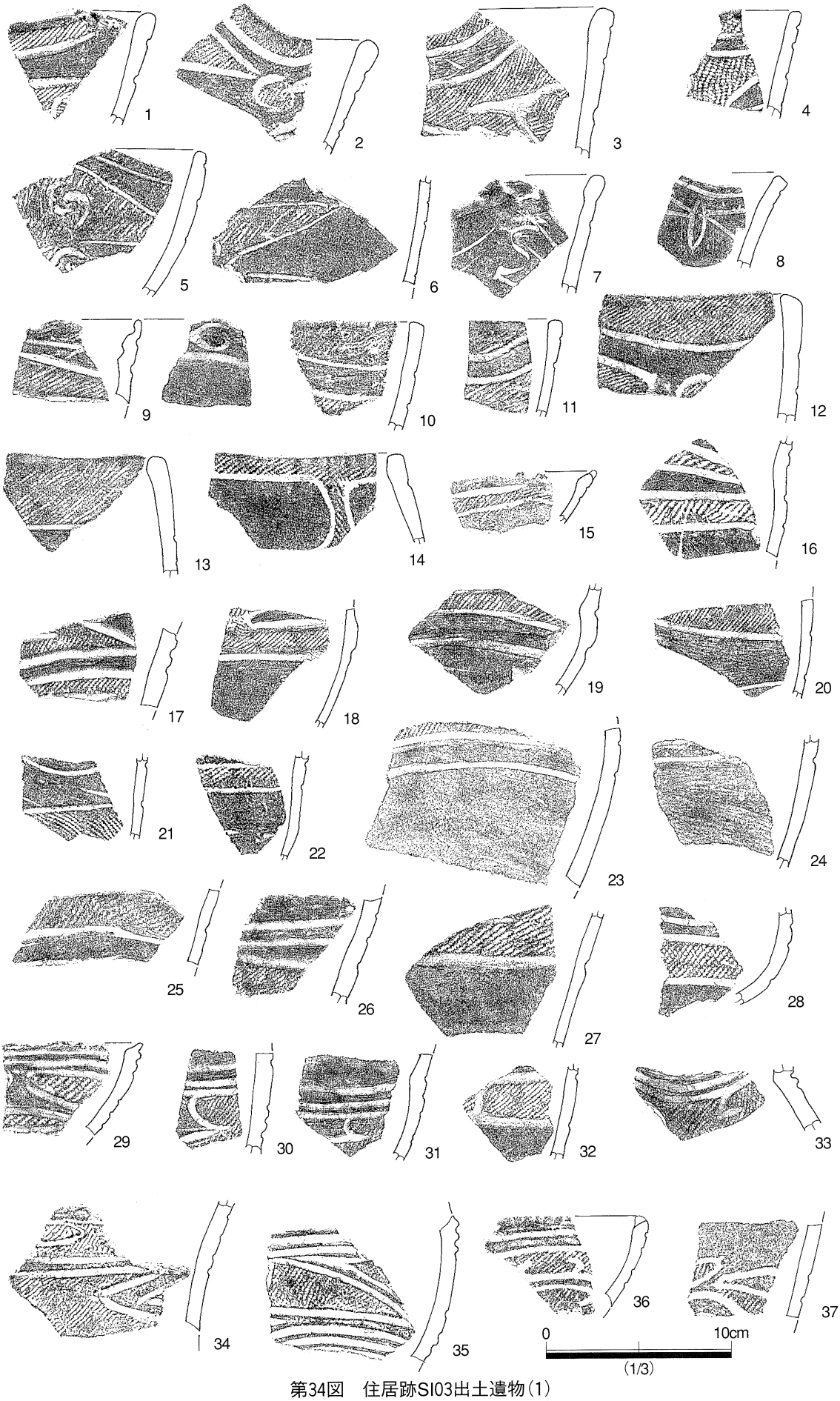
また覆土および床面上より出土した土器は晩期前半から中葉の土器で、安行3b式から安行3c式および前浦式期であり、主体は安行3b式期である。また製塩土器やミニチュア土器の出土も目立つ。その他土製品として土製勾玉１点、土偶10点、土器片錘３点、円板40点、石製品として石剣１点、打製石斧３点、凹石を含む磨石類11点、砥石２点、軽石製の浮子２点が出土している。(第34～45図)

１～11は口縁部に沿って沈線区画の縄文帯が巡るもので、磨消帯を介する。１・４は波頂部の低い深鉢で、

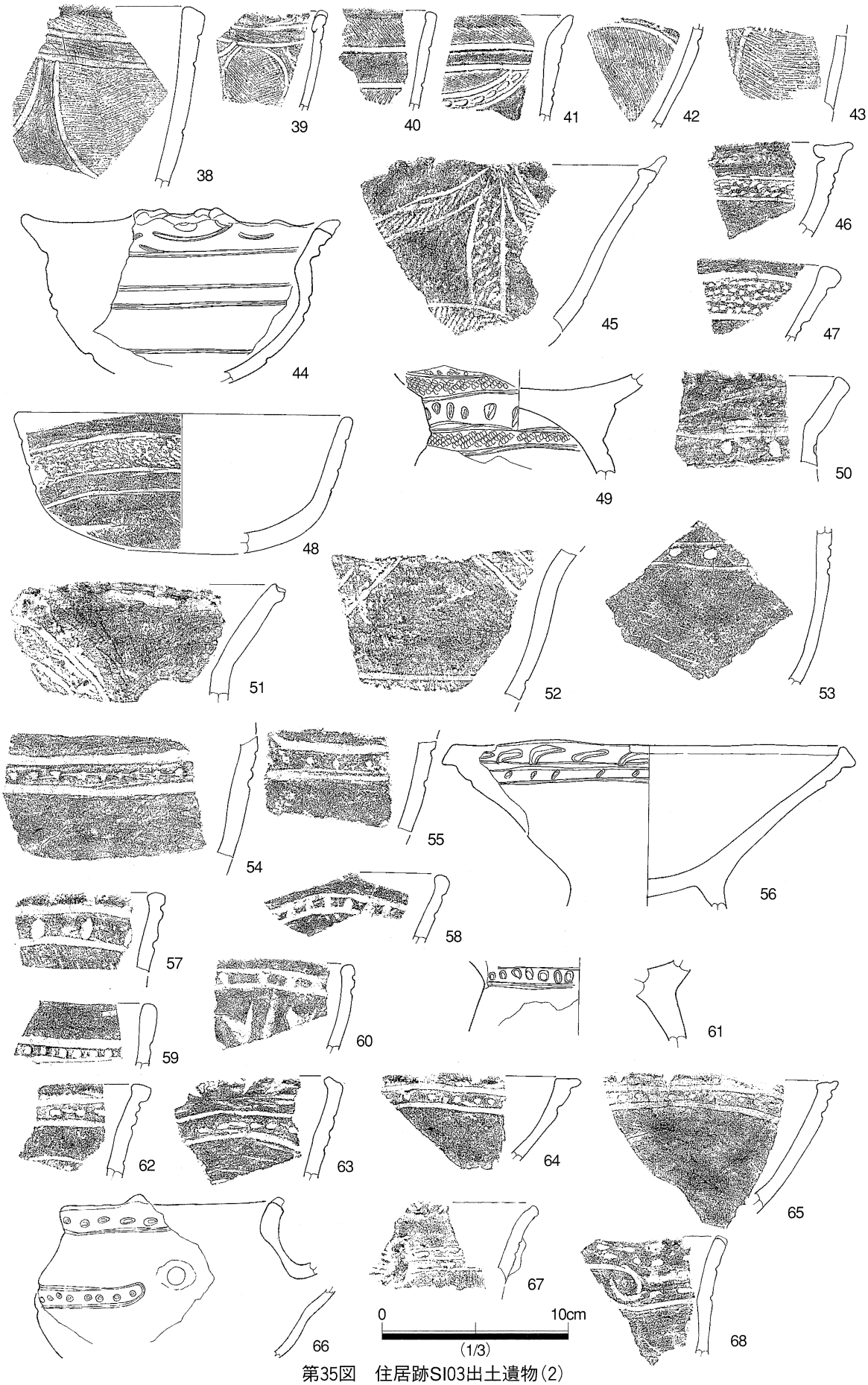
口縁部に沈線区画の縄文帯を巡らし、磨消帯をもつ。2・3は波状口縁で、菱形状文の間に円形文を配する。3は菱形状文内に三叉文が施される。5・6は同一個体。波状口縁で、口縁部が内彎気味に立ち上がる。また波頂部下の菱形状文内に入組文が施文される。7も波状口縁で、波頂部に鉢巻状の貼付文が付され、波頂部下から蛇行懸垂文が垂下する。8は波底部下に菱形状文間に対弧文が配する。9～11は平縁の深鉢。9の口縁内面波頂部下に入組文が配される。12～14は枠状構成文を有する平縁の深鉢である。15は浅鉢の口縁部破片。口辺部にB突起が付され、縄文帯が1条巡る。16～28は胴部破片で、縄文帯と無文帯が交互に施文される。16～18菱形状文。20・21は弧線磨消文である。38～43は細密沈線文が施文される深鉢。38～41は口縁部破片。口縁部は平行する沈線が区画文となり、口縁上に細密沈線文を施し、口縁部に貼付隆帯を有し、口縁上は狭小の無文帯は沈線区画され、刻文帯が巡る。口縁下は縦位の半月状区画文内に矢羽状の細密沈線文が充填される。42・43も弧線区画文内に矢羽状細密沈線文が充填される。39は口縁部が内彎気味に外傾する深鉢で、口唇部に二瘤状貼付文が付され、口縁部は無文である。

44は波状口縁の鉢。丸底状で体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部はくの字状に外反する。口唇部に貼付け突起を有し、口縁部は沈線区画文に波頂部下は上向き弧線、胴部は平行沈線を巡らす。45～70は平行沈線間に列点文が施文されるもので、45は口唇部にB突起をもつ浅鉢。口縁部上から平行沈線間に列点文を充填した懸垂文を垂下させ、同じ口縁上を起点に平行沈線による上向き弧線間に縄文を施文する。さらに胴下半部に縄文帯を巡らす。46・47は口縁部に列点文を伴う平行沈線が巡る。いずれも口唇部は肥厚し、とくに46の口唇部は凹帯となる。48は椀形を呈する浅鉢。密な刺突文を伴う平行沈線を巡らす。49は台付鉢の体部と脚部の接合部の破片。接合部に列点文を伴う平行沈線が巡り、その上下に縄文帯が施文される。50は口縁部がくの字状に外反する深鉢。括れ部に平行沈線間に列点文が施文される。51・52は同一個体。口縁部がくの字状に外反し、口縁部上から平行沈線が斜行し、胴部には沈線区画文が巡る。53～55は深鉢胴部破片。平行沈線間に列点文が施文される。56は台付鉢の体部破片。口唇部は肥厚し、口縁上に沈線による波形状文に列点文を伴う平行沈線が巡る。57～60は平行沈線間の列点文が大きく、58～60は平行沈線に接続している。61は台付鉢の体部と脚部の接合部の破片。括れ部に列点を伴う平行沈線が巡る。62～65は口縁下に列点文を伴う並行沈線が巡るもので、62は口唇部が肥厚する深鉢。63は口縁上が短く内傾する。64・65は浅鉢で口唇部が肥厚する。66は注口土器。口唇部に小突起を有し、口縁部上に列点文を巡らし、沈線区画され、胴部中位に列点文を伴う平行沈線が施されている。67は口縁下に縦位の貼付け突起を有し、突起を挟むように列点文を伴う平行沈線が巡る。68は口縁部の沈線区画内に列点文と横位釣針状文が施文される。69・70は口縁下に列点文平行沈線が巡り、ここから左右に斜行する平行沈線と弧線文内部を列点文で充填する。71は波状口縁の深鉢。波頂部から口縁に並行する弧線文と入組み三叉文が配される。72は口縁上が幅狭く外反する。沈線による菱形文および三叉文が施文される。73は波状口縁で、波頂部から平行する弧線文が施文され、内面にも沈線文が施されている。74～79は無文地に沈線による弧線文、菱形文が施文される。80は入組み文に平行沈線間に縦位の短沈線が充填される。81は口唇部にB突起が付される浅鉢である。細沈線で口縁に沿って平行沈線が巡り、対峙する円形文が配される。82も浅鉢。口縁上端に小突起が付され、口縁部は沈線区画内に円形文、下向き弧線文を連続させる。83は浅鉢で、沈線区画文に平行する上向き弧線文を施文する。84は細沈線による上向き平行弧線文。85は口唇部にB突起を付し、口縁に沿って平行沈線が巡る。86は台付鉢の脚部破片。平行沈線が巡る。87・88は同一個体。深鉢の胴部破片。平行沈線が巡る。89～97・99・100は枠状文が施文されているものであるが、89・91のみ明瞭な枠状文で、他は平行沈線である。なお、89は口縁上の内面内側を肥厚させる。92・95は口縁部を内傾させる。98は浅鉢で、口縁上が短く外反し、境に沈線が巡る。101は平行する曲線文。

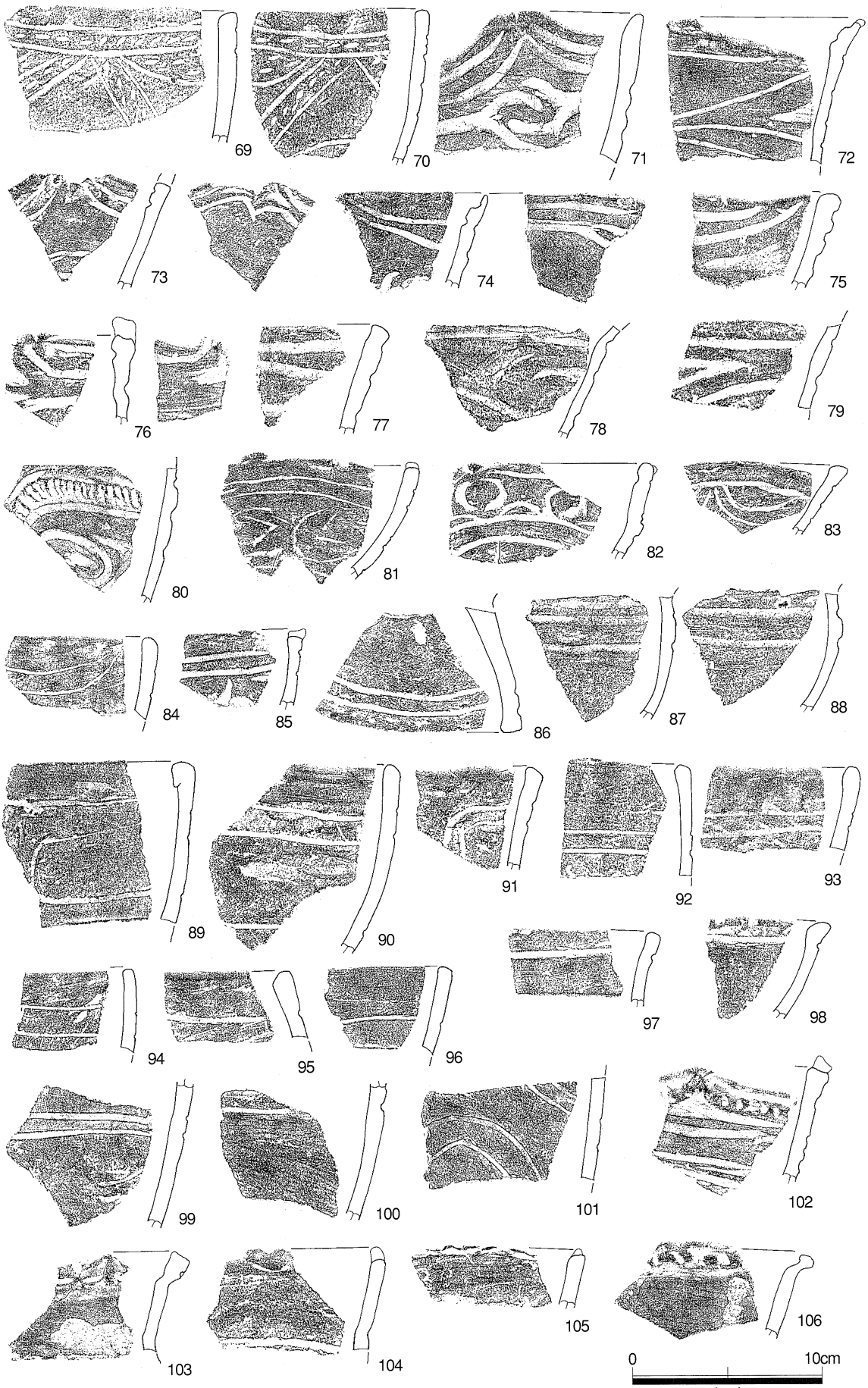
29～37、102～122は大洞系に比定される一群で、29～36・112～114は雲形文等を施している。29・36は椀形の浅鉢口縁部破片。36はK字状の磨消モチーフが描かれる。102・103は山形の波頂部をもち、102は口縁に沿って刻みを有する隆帯が巡る。口縁下は横位の沈線。104～106は口縁部を無文帯とし、104はB突起が付され、105・106の口唇部は刻目が巡る。107は体部が球形を呈し、口縁部が短く外反する小型の壷。体部に縄文を施文する。大洞C1式段階に比定される。108～110は浅鉢の口縁部と体部の屈曲部破片。屈曲部に隆起帯が巡り、隆起上に刻みが施され、108の体部に沈線による同心円文と枠状文が配される。111は縄文施文に沈線による工



第34図　住居跡SI03出土遺物(1)



第35図　住居跡SI03出土遺物(2)



第36図　住居跡SI03出土遺物(3)

字文を施文する浅鉢。115は口唇部に小突起をもち、口縁部は縄文帯に入組文を施す。さらに胴部に網目状撚糸文を施文する。117は縄文地文に平行沈線間に截痕をもち、胴部は縦位の条線を施文する。118・119は縄文地文に入組み三叉文が施文される。120・121は沈線間を短線で截痕した連続刻目文を施文した鉢であろう。122は口縁下に平行沈線を巡らす。

123～125は台付鉢の体部と脚部の接合部破片。123は隆帯が巡り、貼付け瘤が付く。124も隆帯が巡る。126・127・129・135は口縁部破片で、無文系。126は口縁上に小突起を付す。127は口縁部が外反し、口唇部にB突起をもつ。129・135は口縁部がわずかに外反する。

128・130～134は内彎気味に立ち上がる体部に口縁部がくの字状に外反する壺。粗いミガキもしくはナデ調整されている。133は口縁内面に沈線が巡る。134は口唇部が凹帯を呈している。

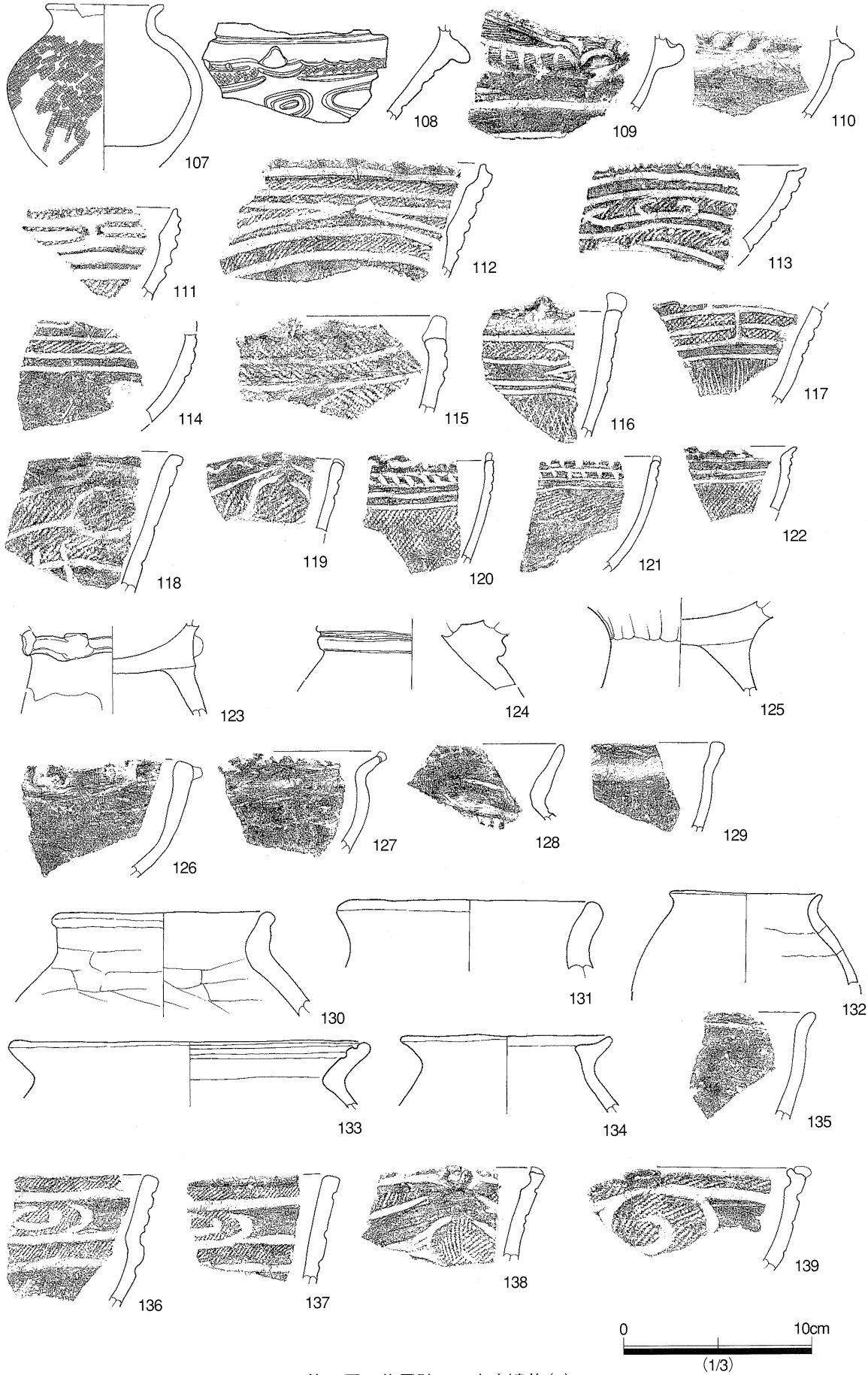
136～190は幅広の深い沈線と、隆起した縄文施文の前浦式土器である。「の」の字文、三叉文、菱形区画文、縄文帯があり、縄文部が磨消縄文による。138～144は口唇部の携帯が内面に突出し肥厚するものをまとめた。138・139は波状口縁。波頂部に貼付け瘤が付され、138は入組み三叉文、139は「の」の字文。140は「の」の字文、141～144は三叉文であろう。149～157・174～178は口唇部が内削状で、凹帯を呈する。176・177は小突起をもつ。149～153・156は「の」の字文。155・157は菱形文である。なお、151・154～157・174・178は内面文様が施されている。136・137・158～163・179～182は口縁部の形態が平坦もしくは丸みをもつものである。136・137・162は平縁で、沈線区画による三帯の中間に「の」の字文。158・160・161・180～182は菱形状文、159は横長の楕円形文であろうか。163・179は縄文帯。145～148・164～173・183～190は胴部破片。145・165～168・188～190は入組文、146は「の」字文。その他は菱形文であろう。なお、146・147は浅鉢の底部破片である。

191～205は無文系の浅鉢である。191～195は口縁部および底部に沈線が巡るもので、191は口縁上に平行して3条、底部に2条の沈線が巡る。192～194は口縁上に2条の沈線が巡る。196・197・199は体部が内彎気味に開き椀形を呈する。198は口唇部に小突起をもつ。204も口唇部に小突起を有し、肥厚する。

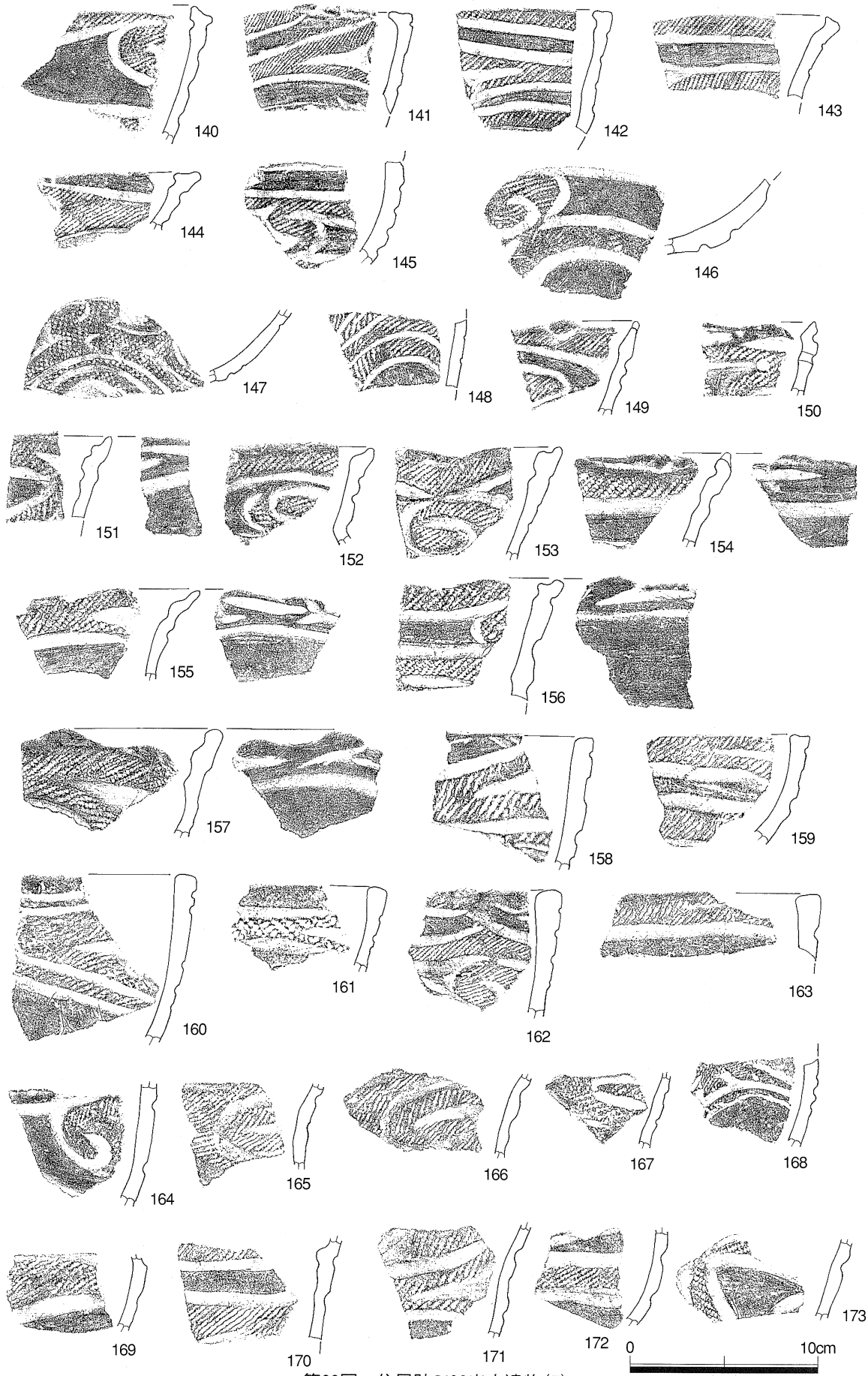
206～308は紐線文系の粗製土器である。206～208は口縁上が折り返し口縁で、206は紐線上が指頭による圧痕文。207・208は無文帯で、208は櫛歯状文が垂下する。209は口縁上に沈線が巡り、櫛歯状文による弧線文。210～215は平行する蛇行文もしくは押引き文が垂下する。210は口唇部が外削状を呈し、210～215は口縁上に横位の条線を巡らし、半截竹管状工具によるコンパス文を垂下させる。211は口唇部が丸みをもち、上向弧状の条線上にコンパス文が垂下する。212～215は胴部破片で、横位の条線上にコンパス文を施文する。

216～222・224～260は平縁で体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部が内傾する深鉢。地文に弧線文が施すされるもので、上向弧状を呈する条線が比較的密に施文される。また261～270の上向条線は間隔があり沈線状を呈する。273～275は条線が縦位方向となる。276～278は口唇部が肥厚するものの面取りされている。223・279～290は口縁部が垂直気味に立ち上がるもので、上向き弧線状の条線が施される。291は口縁上がくの字状に短く外反する。292～308は胴部破片である。292は縦位の条線に横位の沈線が加わる。293も間隔のある縦位の条線に横位の条線が施されている。294・295は上向弧状の条線。296～299・303・304は縦位の条線。300～302は横位の直線的な条線。307・308は肋骨文のように下向条線に平行沈線文が垂下する。306は底部破片。309～333は無文系の粗製土器。309～317は口唇部が肥厚し、丸みをおび、口縁部が内傾する。318・319は口縁部がほぼ直立する。320・329・330は口縁部が内傾するが、口唇部の肥厚が目立たないもの。321は口縁部が外反するもの。322・327は口縁部が内彎気味に立ち上がる。323～326・328・331は口縁部が外傾する。332は小型の深鉢で、丸底の底部から体部が直線的に外傾する。333は口唇部に小突起を有する。334～344は底部破片。334・338・340は丸底で、とくに338は尖底に近い。他は平底であるが、いずれも安定した底部を呈していない。345～372は製塩土器である。外面はヘラケズリの後ヘラナデ、内面はヘラナデで整形されている。345～358は口縁部破片で、345・346・358は口唇部が平坦に面取りされている。347・351は口唇部を指頭によりつまみ、先尖状を呈する。352は口唇部が肥厚し、ヘラ状工具により平坦に面取りしている。353～357は口唇部が丸みを呈している。359～361は胴部破片、362～372は底部破片である。362・363・365は尖底状を呈し、368・371は丸底。364・366・369・370・372は狭小の平底である。

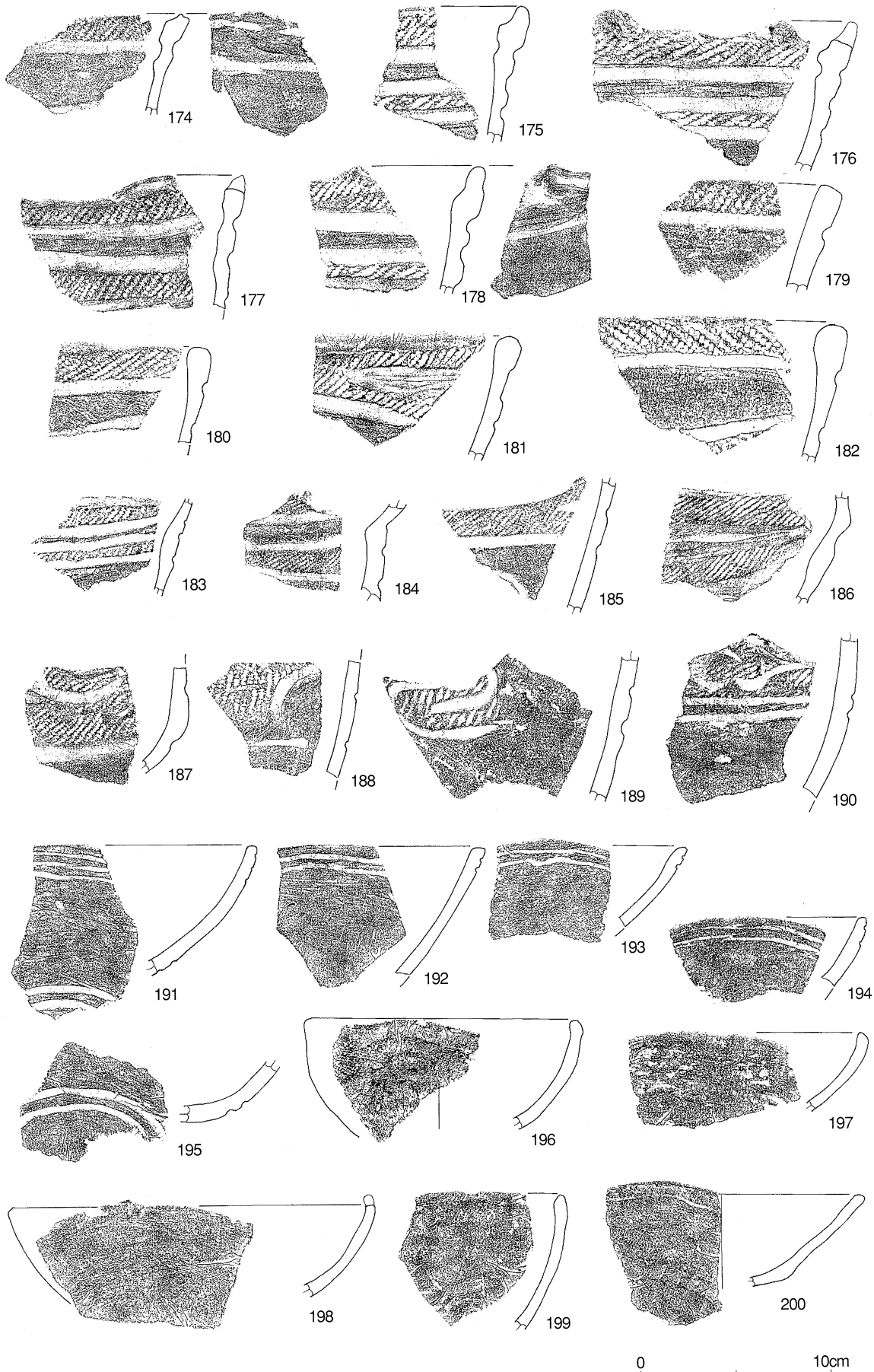
373～379は土製品である。373・374は土版。373は破片であるが、表裏および側面に同一文様を施す。部分的



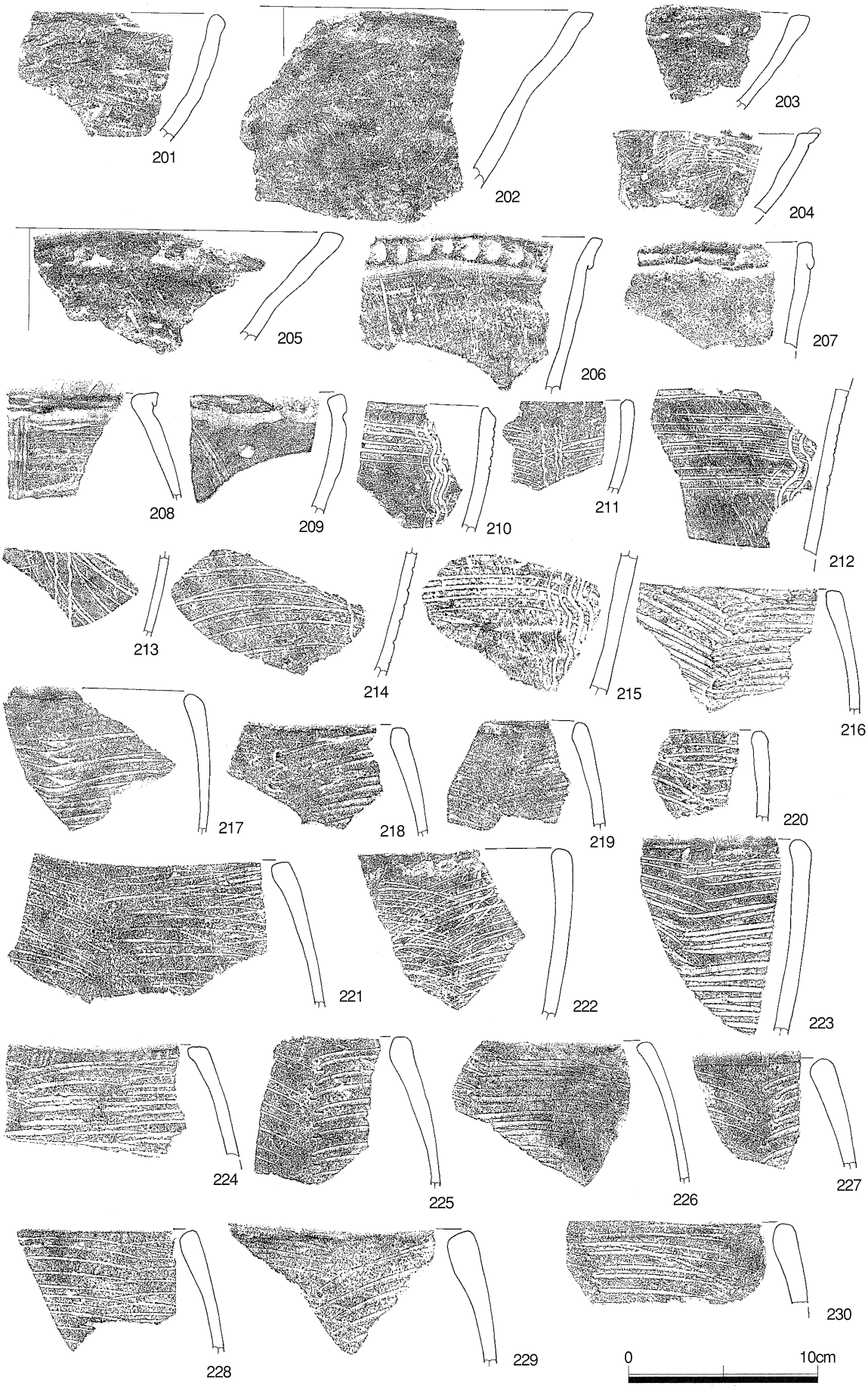
第37図　住居跡SI03出土遺物(4)



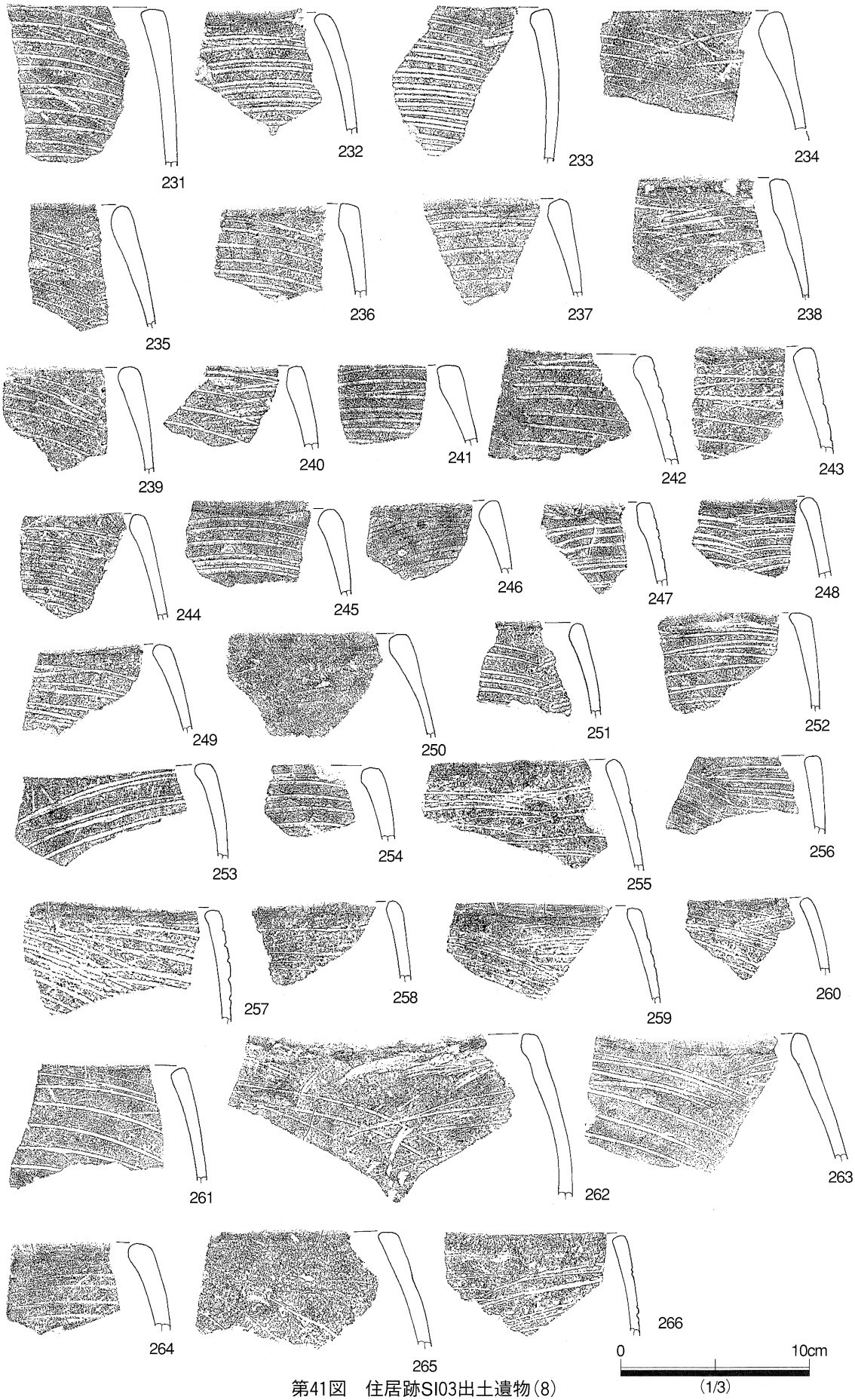
第38図　住居跡SI03出土遺物(5)



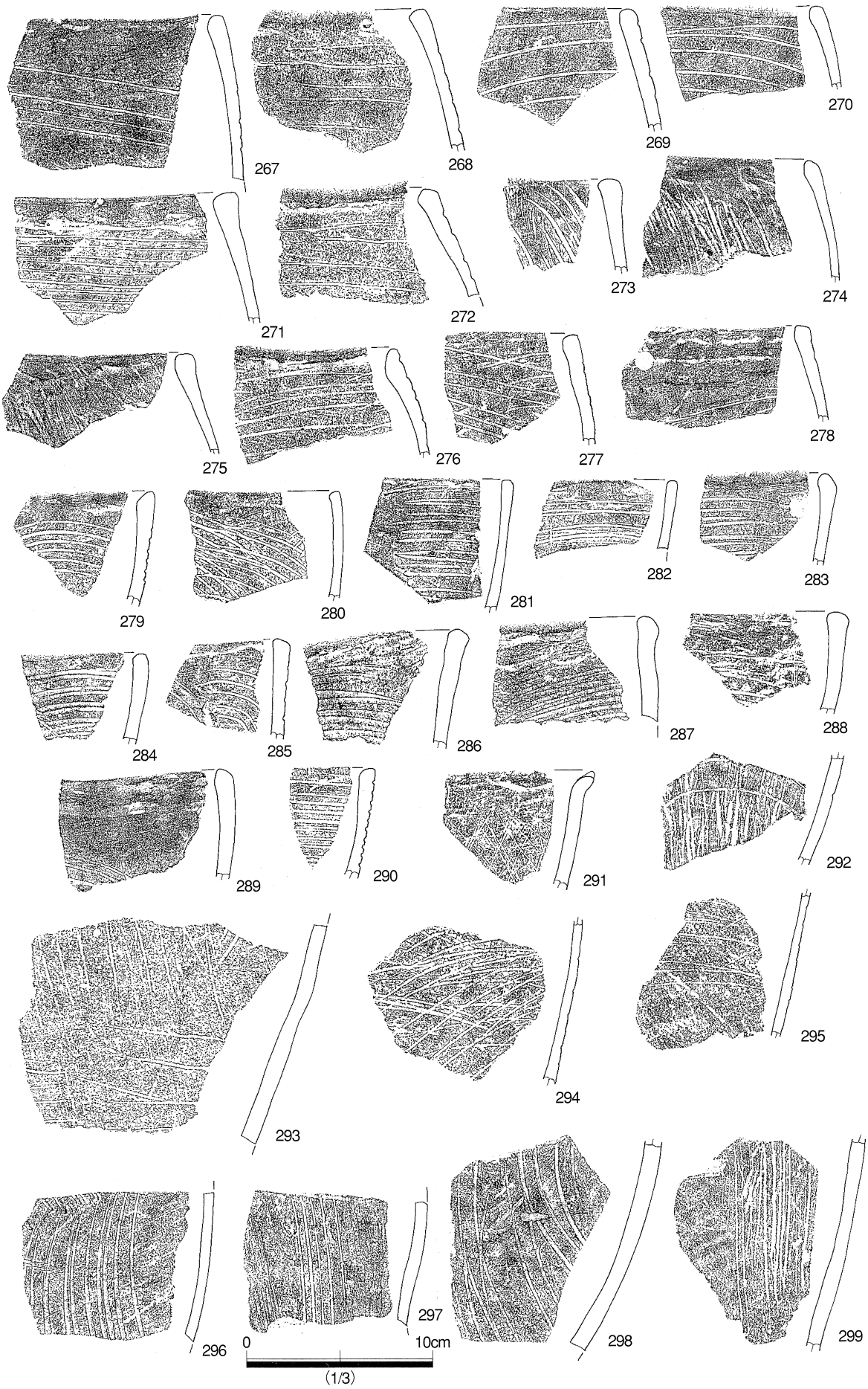
第39図　住居跡SI03出土遺物(6)



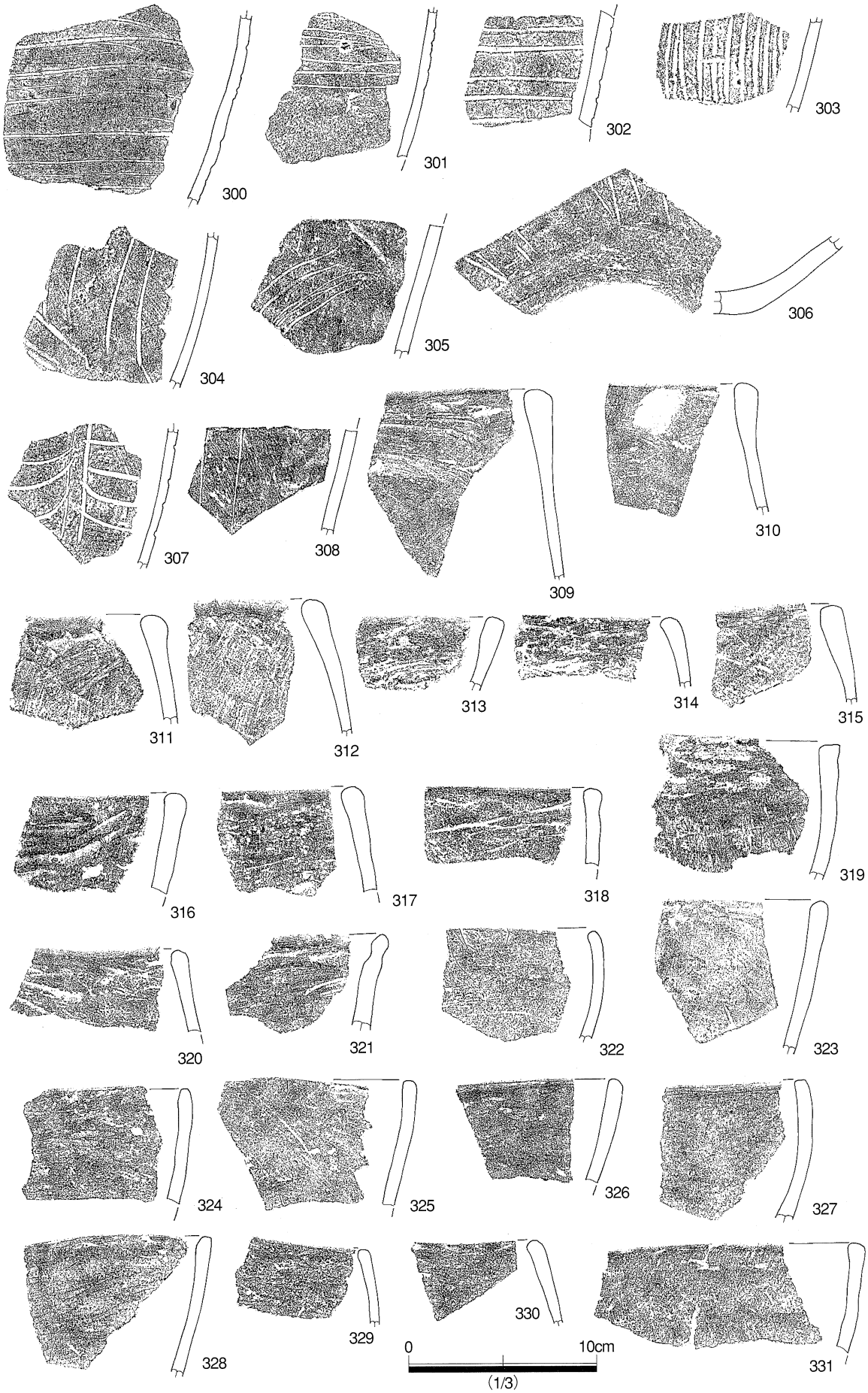
第40図　住居跡SI03出土遺物(7)



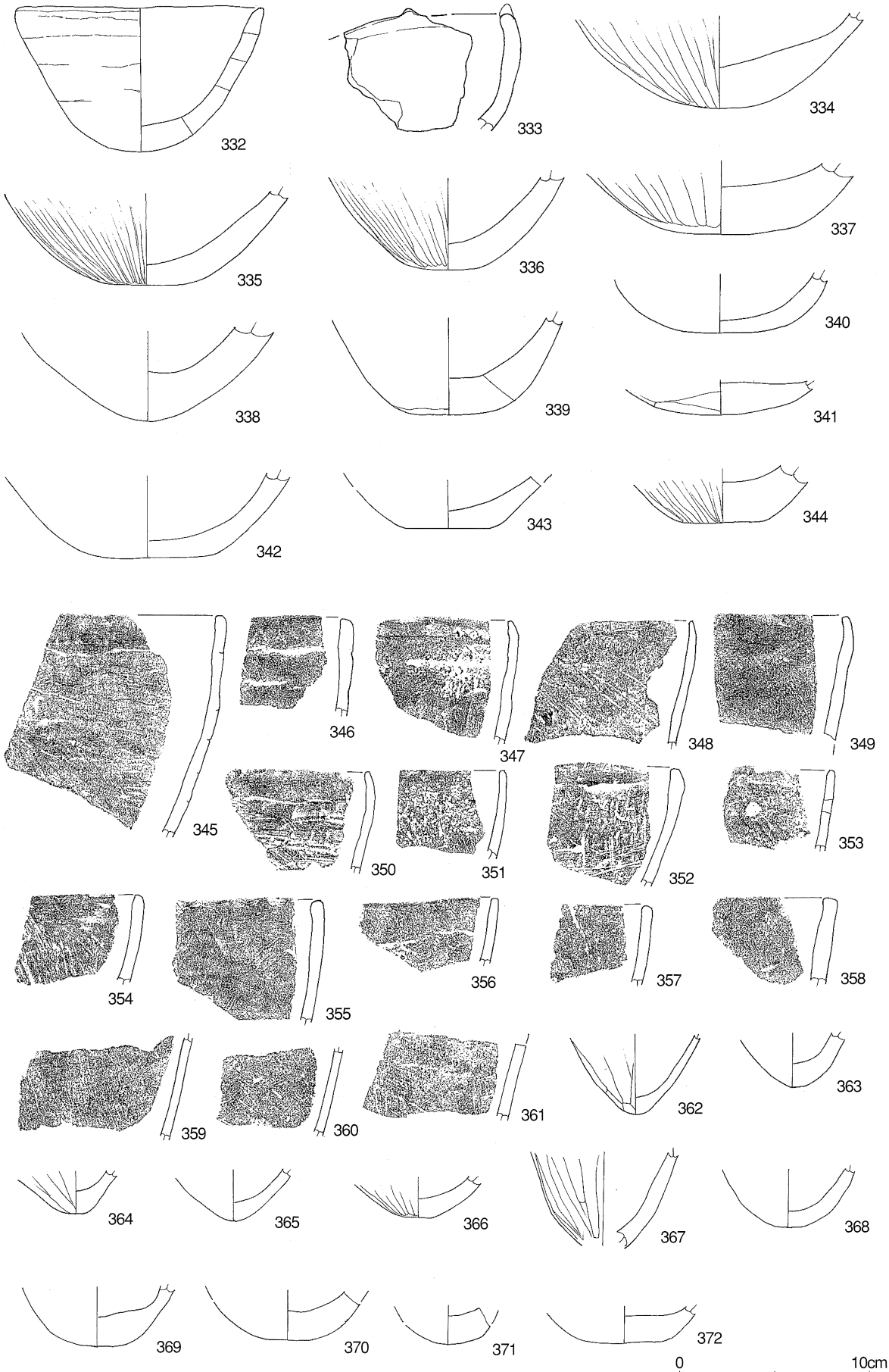
第41図　住居跡SI03出土遺物(8)



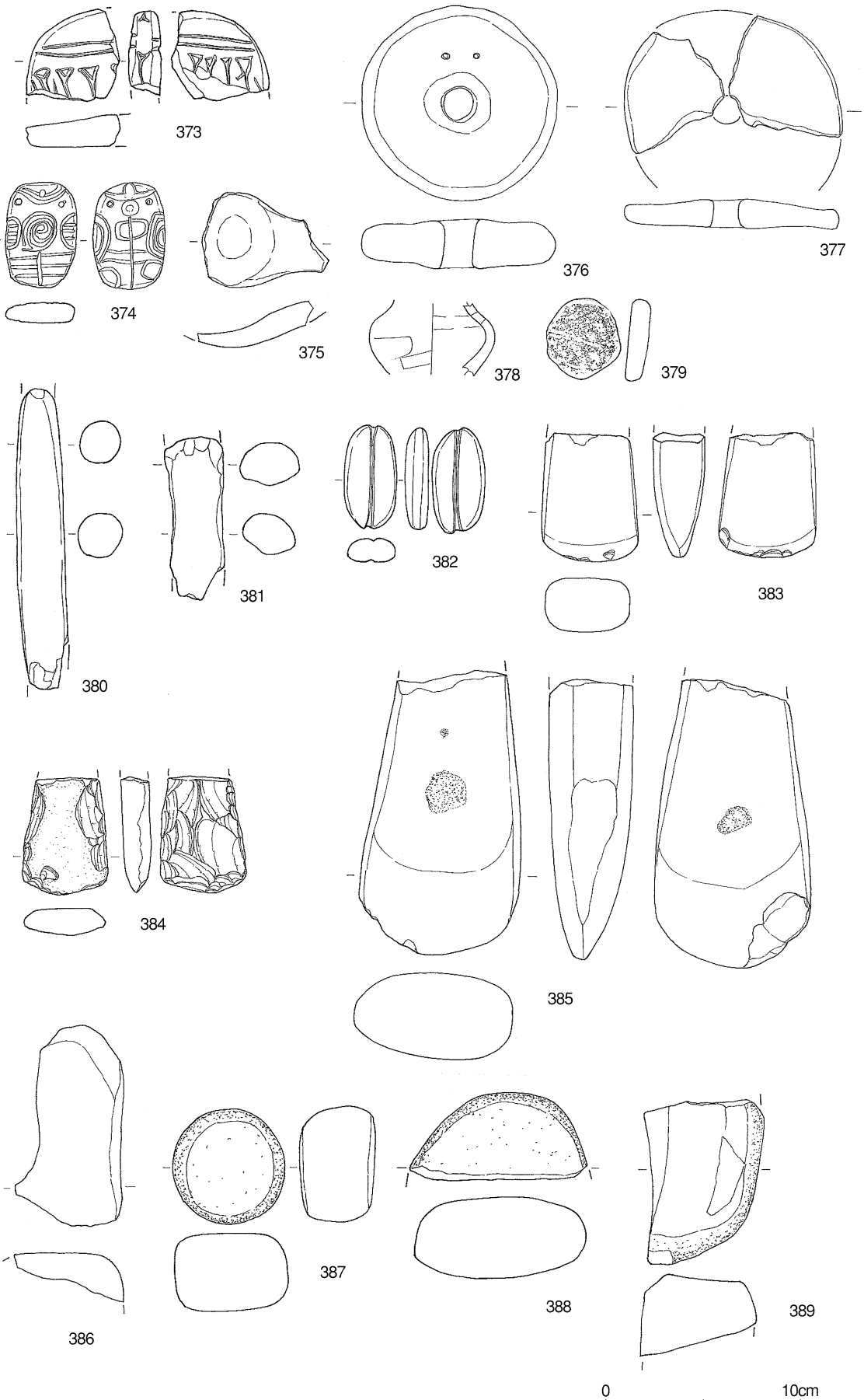
第42図　住居跡SI03出土遺物(9)



第43図　住居跡SI03出土遺物(10)



第44図　住居跡SI03出土遺物(11)



第45図　住居跡SI03出土遺物(12)

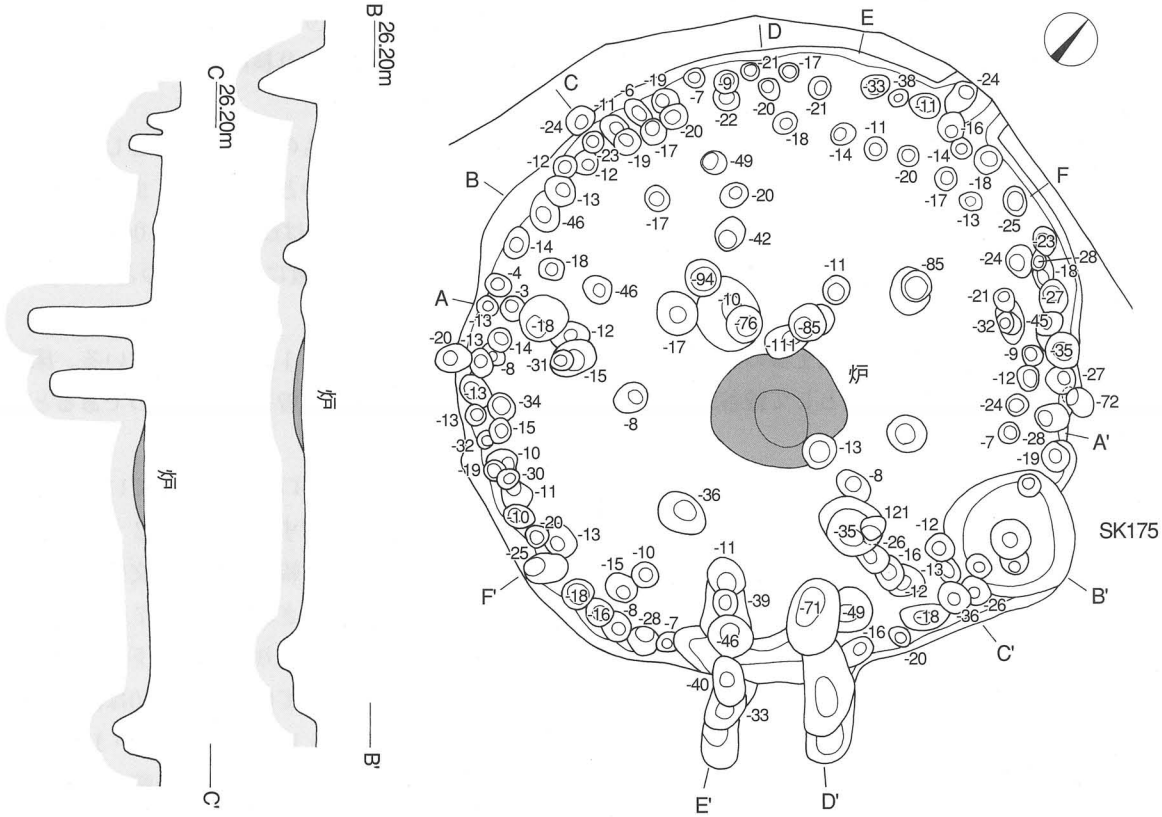
であり明瞭ではないが、沈線により頭部を平行沈線で区画し、I字状文を並列させる。現存長4.61cm、現存幅4.54cm、厚さ1.69cmを測る。374は長さ5.25cmの小型土版である。表裏面文様構図は非対称であるが、基本的に中央に渦巻文、円形文を配し、上部に弧線文、下部に直線文と円形文を施文する。幅3.53cm、厚さ1.07cm、重量35.1gを測る。375は匙状を呈した土製品の破片で、無文である。現存長6.41cm、最大幅4.91cm、厚さ1.16cmを測る。376・377は有孔円板である。376は完存品で、ほぼ中央の円孔部は僅かに盛り上がり肥厚している。さらに中央円孔脇に小孔が2ヶ所穿ってある。法量は径9.79cm、最大厚2.47cm、中央円孔径1.87cm、重量125.0gを測る。377は破片であるが、径10.7cmを測る扁平円板である。ほぼ中央に円孔をもつ。やはり中央円孔部が肥厚し、最大厚1.44cmである。378はミニチュア土器の破片。壺形を模したものである。無文でナデ調整が施されている。379は土器片円板である。深鉢の胴部破片を再利用している。ほぼ円形を呈し、全周比較的丁寧な研磨が施されている。法量は長さ4.103cm、幅3.575cm、厚さ1.085cm、重量20.01gを測る。

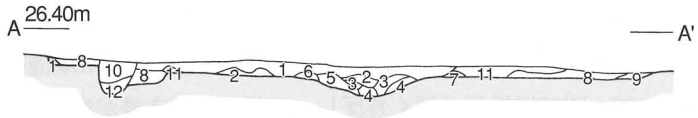
380～389は石製品である。380・381は石棒の破片。380は粘板岩製。両端を欠損する。器体全体比較的丁寧な研磨調整され、断面はほぼ円形を呈している。現存長15.31cm、厚さ2.34cm、重量142.0g。381も粘板岩製。両端部を欠損している。表面の研磨調整は比較的粗いが断面は円形を呈している。現存長8.25cm、厚さ2.89cm、重量69.5g。382は粘板岩製の石錘。全面丁寧に研磨し形を整え成形している。長軸に研磨による溝を全周させる。長さ5.39cm、幅2.57cm、厚さ1.20cm、重量32.5gである。383・385はいずれも刃部側が残存している折損の磨製石斧である。383は緑色凝灰岩製で表裏面、両側面とも丁寧に研磨調整されている定角式石斧である。刃潰れが刃部中央にみられる。現存長6.363cm、幅5.04cm、厚さ2.85cm、重量151.0g。385は緑色凝灰岩製の比較的大型の石斧で、表裏面および両側面とも丁寧な研磨調整が施されている。なお両面の中央に敲打痕が認められる。現存長14.81cm、幅8.15cm、厚さ4.326cm、重量801.0g。384は砂岩製の打製石斧、刃部側破損品である。いわゆる撥状を呈する。図表面には周縁を除き自然面を残し、裏面は全面調整剥離が施されている。現存長5.899cm、幅4.187cm、厚さ1.372cm、重量61.0g。386は砂岩製の砥石破損品である。表面の磨面はほぼ平坦で研磨痕をわずかに残している。現存長10.59cm、幅5.79cm、厚さ1.935cm、重量138.0g。387は安山岩製の円形磨石。表裏面および側面を丁寧に研磨し、円筒状に仕上げている。長さ6.0cm、厚さ4.0cm、重量221.0g。388は安山岩製磨石の破片。表裏面はほぼ全面研磨面として使用している。現存長4.52cm、幅8.94cm、厚さ4.16cm、重量189.0g。389は砂岩製石皿の破損品。作業面である表面に研磨による凹面が明瞭である。現存長8.215cm、幅5.85cm、厚さ4.32cm、重量321.5gを測る。

床面上から住居の時期を明示する遺物としては安行3b式から安行3c式および前浦式土器がまとまって検出されているが、住居内出土遺物の状況などからみて、本住居は安行3b式期に比定できるものと判断した。

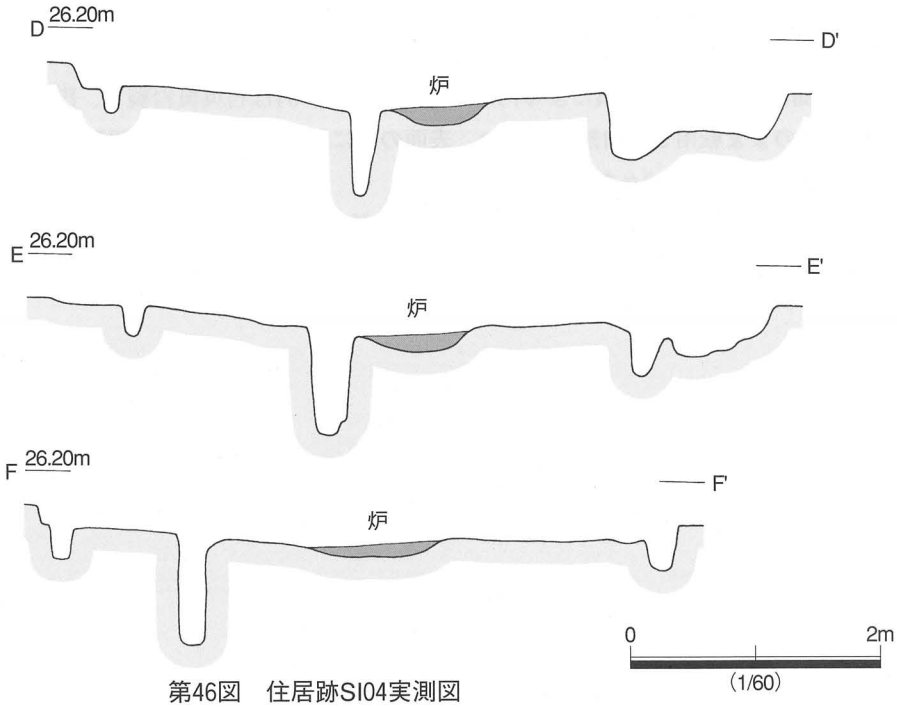
第4号住居跡（SI04）（第46図・第47図）

調査区北西側、E－Ⅲ区に位置し、北西側が保存区域に延びているため、北西に3m拡張して住居の全貌を明らかにした。なお東壁際では土坑SK175によって床面、壁面の一部が壊されている。本跡は住居壁際の壁柱穴が二列になっていることから拡張住居と推定される。まずピットを連結して構築された入口部施設である張り出し部が南に向いており、外側新期拡張部の規模は張出部を含めた南北軸長5.66mを測り、居住主体部は南北軸5.01m東西軸4.92mのほぼ円形を呈する。張出部と炉跡を結ぶ主軸方位はN－44°－Wを指す。張出部は主軸方向に平行した二列の連結ピットで、西側が6基、東側が3基により構成されているが、新旧については明瞭ではない。おそらく拡張幅が柱穴1本程度であることから規模の大きな拡張は実施されていないものと思われる。張出部は居住域を挟み内外に設置され、また開閉部は居住区域と同位置にあり溝によって構築されている。通路の長さは145.0cm、幅50.0cmを測る。壁高は東側で15.0cm、西側で18.0cmであり、南側の張出部は外側へ向って高まっていく。外側壁柱穴は57本検出され、大きさは径13.0～40.0cm、深さ4.0～45.0cmで、平均の深さは22.91cmを測る。壁柱穴以外に居住内柱穴は28本検出されたが、内炉跡の周囲の4本が主柱穴であろう。北側2本が深度85.0cm、94.0cmまた南東側が121.0cmと深いが、南西側が36.0cmと浅くなっている。また主柱穴以外は支柱穴と判断した。大きさは径18.0～50.0cm、深さは8.0～111.0cmで、平均の深さは37.55cmを測る。炉跡は中軸線上やや張出部寄り（南側寄り）にある。大きさは長径108.0cm、短径95.0cm、深さは14.0cmの円形で





1　極暗褐色土（7.5YR2/3）微量のローム粒、微量の焼土粒を含む
2　暗褐色土（7.5YR2/3）微量のローム粒、少量の焼土粒を含む
3　褐色土（7.5YR4/3）微量のローム粒、少量の焼土粒、微量のロームブロックを含む
4　暗赤褐色土（5YR3/4）微量のロームブロック、多量の焼土ブロックを含む
5　褐色土（10YR4/6）少量のローム粒、少量のロームブロック、微量の焼土粒を含む
6　にぶい黄褐色土（10YR5/3）少量のローム粒を含む
7　にぶい黄褐色土（10YR5/4）多量のローム粒、少量のロームブロックを含む
8　明黄褐色土（10YR6/8）多量のローム粒を含む
9　黄褐色土（10YR7/8）多量のローム粒、多量のロームブロックを含む
10　暗褐色土（10YR3/3）微量のローム粒を含む
11　暗褐色土（10YR3/4）微量のローム粒を含む
12　にぶい黄褐色土（10YR5/3）少量のローム粒を含む



第46図　住居跡SI04実測図

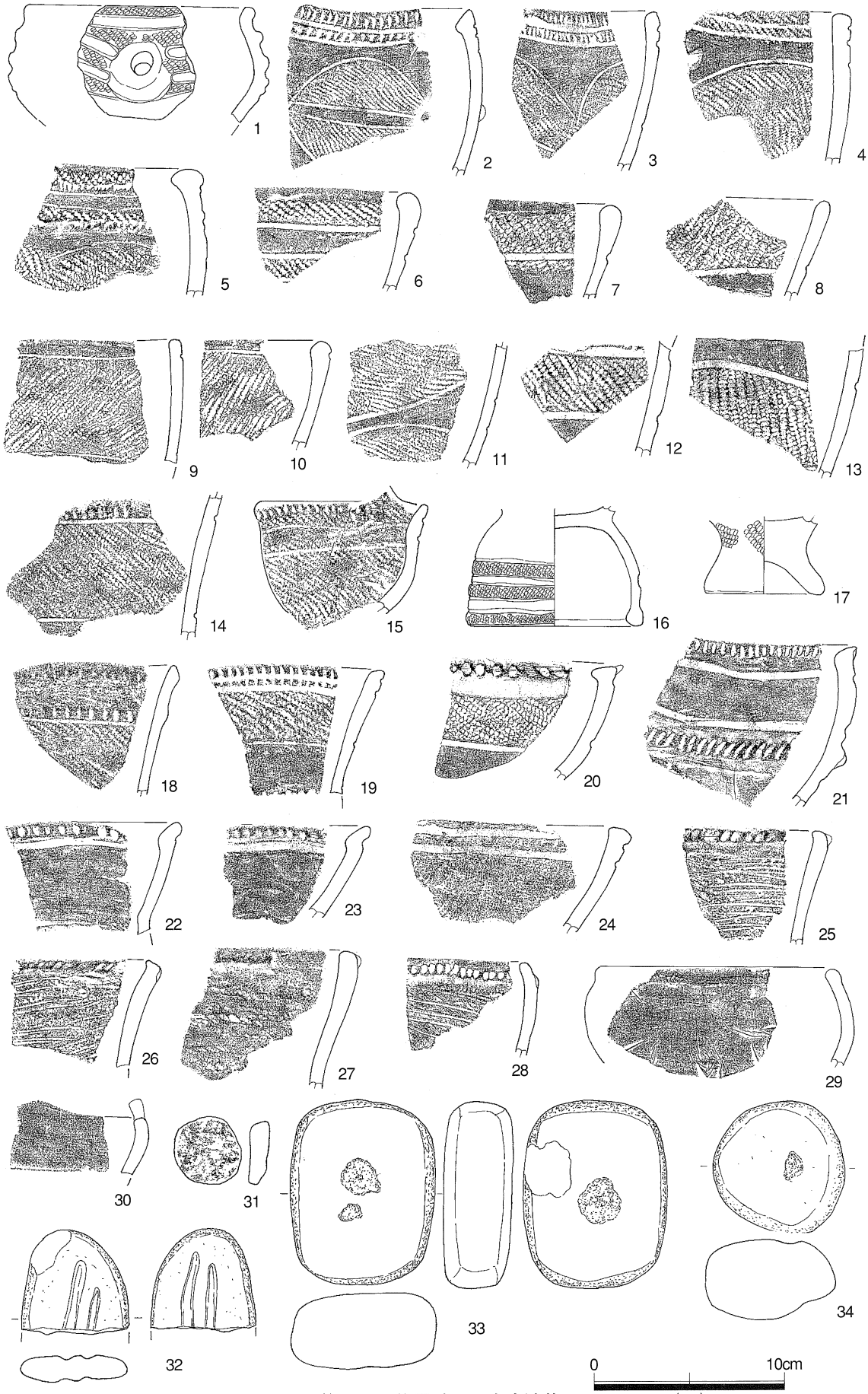
ある。掘形は浅い鍋底状に掘り窪めてあり、底面は丸底で起伏がなく被熱により赤化硬化している。覆土は焼土粒を多量に含む赤褐色土（5YR4/6）で覆われていた。床面は全体的に堅く締まり検出しやすかった。覆土は12層確認できたが、全体的に薄層で暗褐色土を基調とする自然堆積層である。

また内側古期住居の入口部の痕跡に酷似する連結ピット列が東側でみられるものの、入口部としての確たる証拠がない（５本ピット連結）。したがってここでは新期と同じ位置であったものと推定した。まず居住主体部は南北軸4.58m東西軸4.45mのほぼ円形を呈する。壁柱穴は29本検出され、規模は径18.0～35.0cm、深さは3.0～42.0cmで、平均の深さは17.44cmを測る。なお主柱穴については新期と同一位置にあったものと考えられる。床面は堅く締り、とくに炉跡周囲は顕著であった。

住居の東側の覆土中から、縄文土器の他には、土製円板１点、磨石２点、砥石１点が出土している。床面上から住居の時期を明示する遺物として曽谷式土器が主体であることから本住居は曽谷式期のものであると判断できる（第47図１～34）。

１～５は甕形の口縁部破片で、口縁が内彎する深鉢。１は注口土器であるが注口部を欠落している。縄文帯と無文帯が交互に４単位施文されている。２～４は平縁で口縁直下に文様帯を有するもので、２・３は沈線区画による２列の刻文帯、４は縄文帯を巡らし、２の体部には円弧文の中央横位に幅狭い磨消縄文帯を配し、いわゆる遮光器状を呈する弧線文である。３・４は上下対抗する弧状磨消文が描出される。５～７は口唇部が肥厚する深鉢で、５の口唇上端部が内屈する。口縁直下に沈線区画による縄文帯が巡り、口縁部下部には弧線文が施されている。８は波状口縁で、口縁下は沈線区画による縄文を上部に残存している。９・10は沈線区画された幅広い縄文帯で、口縁下は幅狭い無文帯が巡る。11～14は胴部破片で、11・13は弧線文、12・14は縄文帯をもつ。15は小突起をもつ小型の鉢。口縁上部に沈線区画の磨消縄文帯をもつ。16は台付鉢の脚台部で、ドーム型を呈し、３段の帯縄文が巡る。17は脚部破片。18・19は口縁部が外傾する深鉢。18は口縁部上部に平行する刻文帯間は無文帯となる。19は口縁直下に２列の列点帯を巡らし、縄文帯を配する。20は口縁部が内彎、口唇部が肥厚する鉢。口唇下隆帯上に連続する押捺文帯が巡り、口縁部は縄文帯。21は口縁部が刻文帯・沈線による区画文。22・23は口唇部が短く外反し、口唇下に刻文帯が巡る。24は鉢であろう。口縁直下に２条の沈線を巡らす。25～28は紐線文を伴う粗製土器。地文には縄文地に横位の条線を充填する。29・30は無文地で、口縁部が内彎する鉢。29は口縁直下に浅い凹帯が巡り、30は山形の小突起をもつ。31は土器片円板である。深鉢の胴部破片を再利用している。ほぼ円形を呈し、全周比較的丁寧な研磨が施されている。法量は長さ3.452cm、幅3.565cm、厚さ0.928cm、重量15.22ｇを測る。32は砂岩製の砥石の破損品である。表裏面には二列の浅い研磨溝を有している。33・34は磨石類である。33は安山岩製で典型的な石鹸形磨石である。長さ9.974cm、幅7.631cm、厚さ3.99cm、重量488.0ｇを測り、６面全面をよく研磨されており、形がいわゆる石鹸状に整っている。さらに表裏面ほぼ中央に加撃痕による円形の凹部をもつ。34は石英斑岩製で、円礫の周縁を僅かに研磨しているが、礫をそのまま転用した自然礫に近い。表面の脇に加撃痕による浅い凹部をもつ。長さ6.943cm、幅7.183cm、厚さ4.209cm、重量259.0ｇを測る。

床面上から住居の時期を明示する遺物としては曽谷式がまとまって検出されており、住居内出土遺物の状況などからみて、本住居は曽谷式期に比定できるものと判断した。



第47図　住居跡SI04出土遺物

第５号住居跡（SI05）（第48図・第49図）

調査区東端、K－Ⅳ・Ⅴ区の緩傾斜部に位置し、南側が未調査区域に広がっている。壁はすでに削平され、炉跡・柱穴および床面の状況により住居跡と判断した。入口部と推定される張出部が調査区外に延びていることから全体的な規模等が不明瞭で、壁がすでに削平されているものの、柱穴列と炉跡の存在から住居跡と判断した。確認した規模は南北軸（3.71）m、東西軸4.90mの円形を呈するものと推定される。炉跡の位置から主軸方位はN－41°－Wをとる。壁は全体的に削平され、壁柱穴は一部のみで周回設置しない半壁柱穴住居跡であろう。したがって柱穴は住居内のみとなり44本検出された。規模は径22.0～112.0cm、柱穴の深さは9.0～116.0cmで、平均の深さは54.64cm前後を測るが、整然とした柱穴ではない。炉跡は２ヶ所検出された。住居北側の炉１は長径132.0cm、短径113.0cm、深さは17.0cmの楕円形である。掘形は皿状に掘り窪めている。さらに北側に位置する炉２は住居外にあることから本跡に伴うものか疑問である。規模は長径97.0cm、短径88.0cm、深さは5.0cmの楕円形で、掘形は浅い皿状に掘り窪めてあり、底面の平坦部は狭小で起伏がなく被熱により赤化硬化している。覆土は底面の平坦部は狭小である。焼土粒を多量に含む赤褐色土（5YR4/6）で覆われていた。住居跡覆土は浅く黒褐色土（10YR3/1）の薄い単一層の状況を呈しており、自然堆積層である。

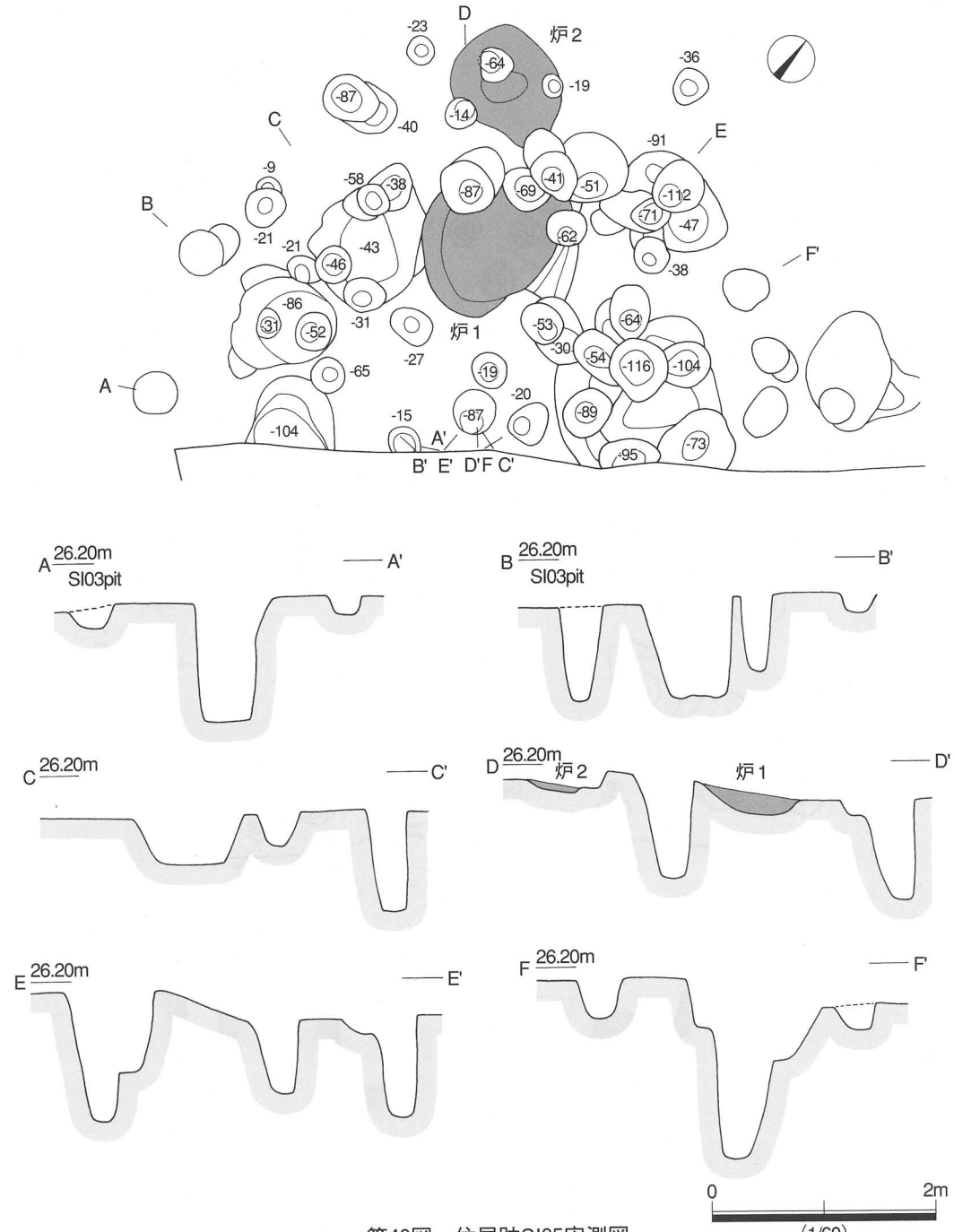
床面上から住居の時期を明示する遺物として加曽利B2式期の粗製土器が出土していることから、本住居は加曽利B式前半期のものであると判断できる（第49図１～９）。

１～９は粗製土器。１～４は紐線文系土器である。１は二列の隆帯に指頭による押圧が加えられた紐線文で、地文は縄文施文に幅のある斜行条線。２は波状口縁となり、口縁に沿って紐線文が巡り、波頂部下から縦位の紐線文が垂下する。３・４は口縁直下に押圧による紐線文が巡り、地文は縄文地に斜行条線。５は二列の平行する微隆帯が巡り、微隆帯間は無文。地文は縄文地。６・７は胴部破片。縄文地に横位の条線が施されている。８・９は縄文地のみの深鉢で、８は口縁直下に一条の沈線が巡る。９は口縁直下から縄文が施されている。加曽利B2式期に比定される。

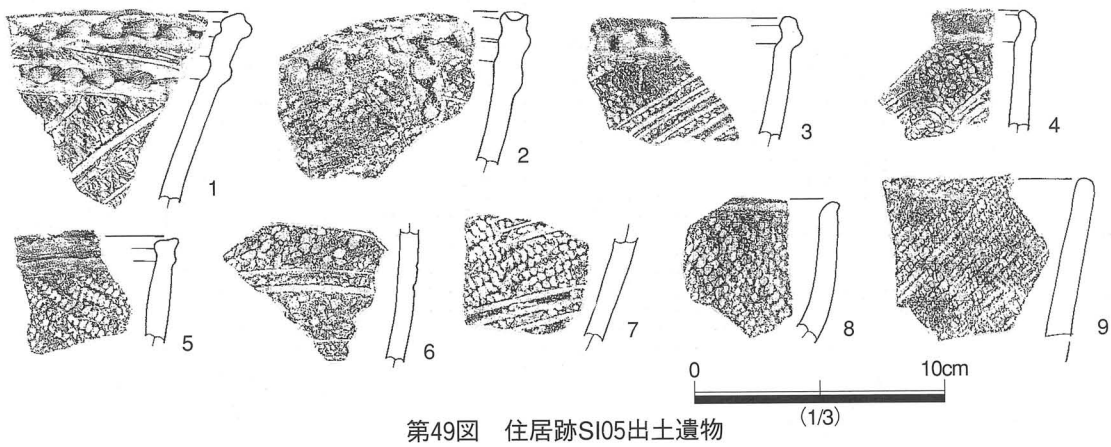
第６号住居跡（SI06）（第50図・第51図）

調査区東端、K－Ⅳ区の斜面部に位置する。北側の一部が未調査区域に広がっている。壁はすでに削平され、炉跡・柱穴および床面の状況により住居跡と判断した。入口部と推定される張出部が南東側の調査区外に延びていることから、全体的な規模について不明瞭な点が多い。しかし、柱穴と炉跡が２基検出されており、とくに炉１は明らかに本跡に伴うもので、これを手かがりにして住居構造をみると、柱穴列が２列検出され拡張住居跡とみられる。まず外側へ拡張したものと推定すると新期住居の規模は南北軸6.98m、東西軸7.40mの円形を呈する。また炉跡の位置から推定する主軸方位はN－35°－Wを指す。入口部は炉跡１の南側に連結ピット群が相当する。西側にも平行するものがみられ、これらの構造から判断して張出部であろう。開閉部は明瞭ではない。確認される通路の長さ50.0cm、幅50.0cmを測る。壁はすでに削平されていたが、壁に沿って廻る２列の柱穴列が検出でき、外側新期柱穴列は45本で、大きさは径20.0～105.0cm、深さ7.0～139.0cmで、平均の深さ37.65cmを測る。また内側の古期柱穴列は39本検出され、その大きさは径21.0～90.0cm、深さ11.0～125.0cmで、平均の深さ53.92cmを測る。炉跡は２基確認されるものの、新旧関係ではなく、とくに北北東側で確認された炉２は住居壁際に位置することから性格は不明である。しかし、炉１は中軸線上やや張出部寄り（南側寄り）にあり主炉である。規模は長径83.0cm、短径61.0cmの楕円形で、深さ5.0cmである。掘形は浅い皿状に掘り窪めてある。底面の平坦部は狭小で起伏がなく被熱により赤化硬化している。覆土は焼土粒を多量に含む赤褐色土(5YR4/6）で覆われていた。床面は堅く締まっており検出しやすかった。なお、覆土は浅く確認できなかった。また住居壁際に位置する炉２の規模は長径65.0cm前後、短径46.0cmの楕円形を呈し、深さ4.0cmを測るものの、その所属については本跡ではなく、位置関係から別遺構に伴うものと判断した。

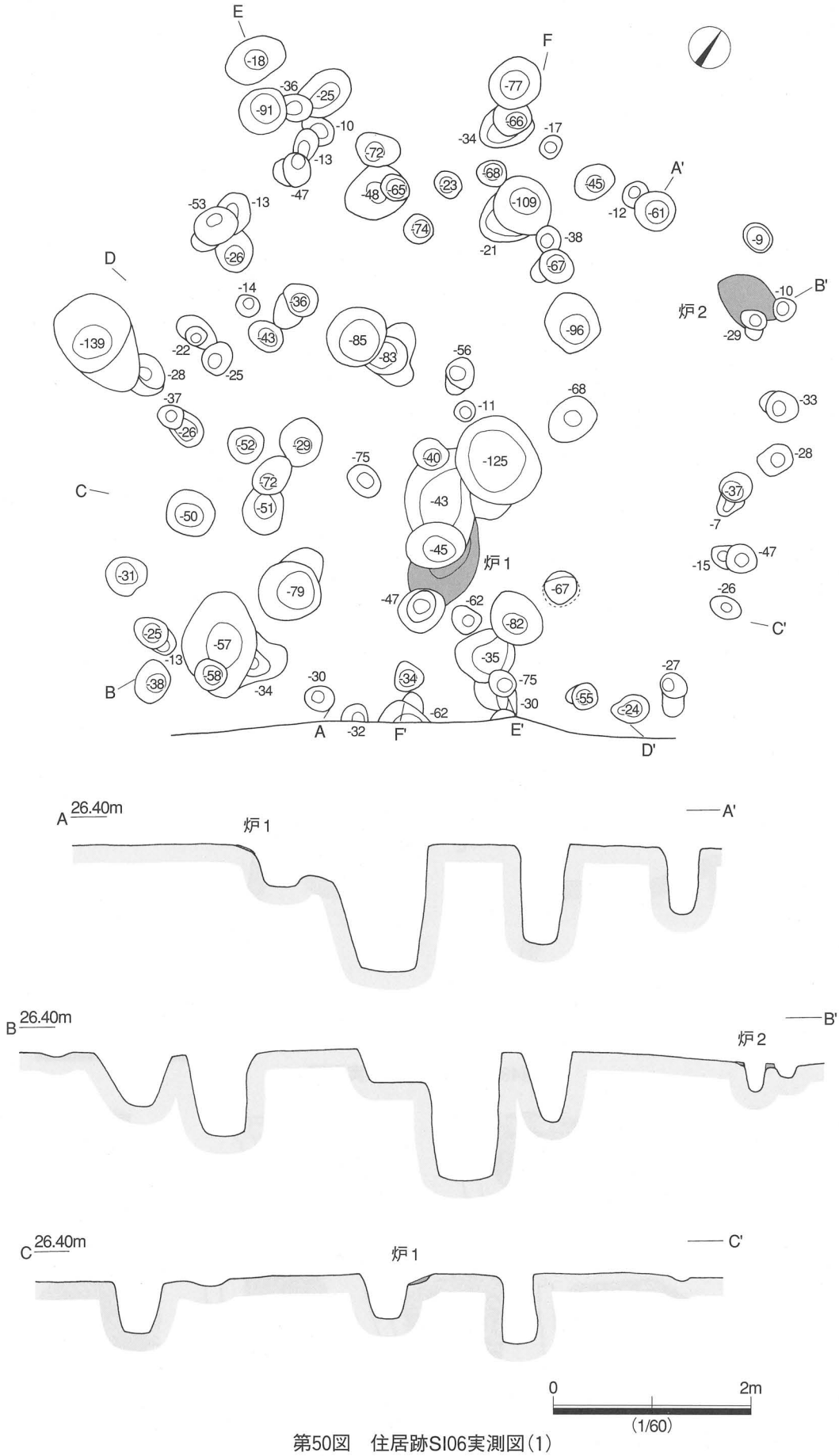
本跡は重複住居跡であるが、床面が直接検出されたため覆土はなく、また柱穴および炉跡内からも図示できる遺物の出土はなかったため、時期を確定できない。



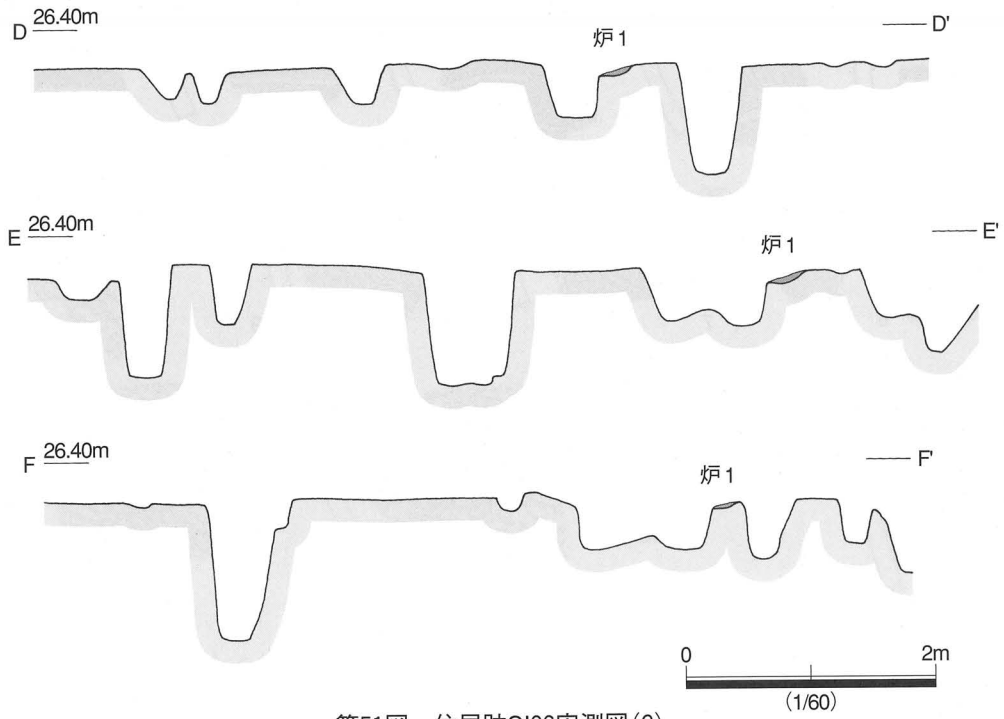
第48図　住居跡SI05実測図



第49図　住居跡SI05出土遺物



第50図　住居跡SI06実測図(1)



第51図　住居跡SI06実測図(2)

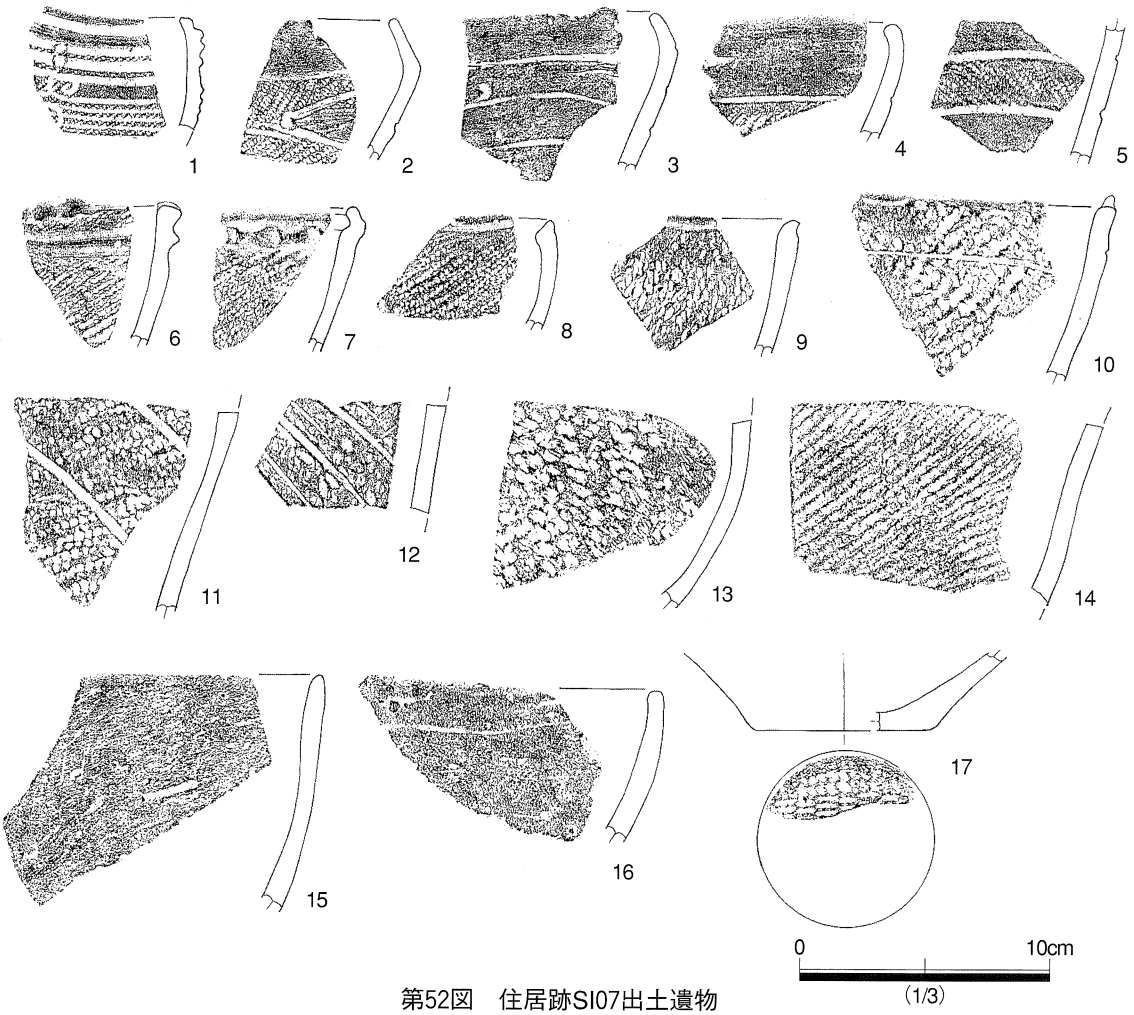
第７号住居跡（SI07）（第32図・第52図）

調査区南東端、J－Ⅴ・Ⅵ、K－Ⅴ区の緩傾斜面に位置する。住居跡中央で小型住居跡である第３号住居跡(SI03)に切られ、東端で土坑SK99を切っている。入口施設とみられる張出部を南に向けているものの、張出部の構築および柱穴列の配列から判断すると拡張住居と判断できる。まず外側新期拡張部の規模は張出部を含めた主軸である南北軸長8.95ｍを測り、居住主体部は南北軸7.53ｍ、東西軸6.51ｍの南北に長い楕円形を呈し、張出部と炉跡を通る主軸方位はN－１°－Eを指す。張出部は平行する溝状張出で、溝中央にピットが穿ってある。また外側は溝により区切られた開閉部があり、通路の長さ128.0㎝、幅28.0㎝を測る。壁高は東側で27.0㎝であり、南側の入口部は外側へ向って高まっていく。壁に沿って廻る壁柱穴は比較的間隔の開くもので17本検出された。大きさは径18.0～68.0㎝、深さは12.0～151.0㎝で、平均の深さは50.35㎝を測る。炉跡は新期住居跡であるSI03によって壊されていたものの、炉底部が深いため遺存状況は良好であった。ちょうどSI03の張出部にあたり、大きさは長径82.0㎝、短径74.0㎝の楕円形を呈し、深さは45.0㎝である。掘形は深い土坑状に掘り窪めてあり、底面は平坦で起伏がなく被熱により赤化硬化している。覆土は焼土粒を多量に含む赤褐色土（2.5YR4/6）で覆われていた。床面は全体的に堅く検出しやすかったが、住居跡SI03により大半が破壊されている。覆土は土坑SK99との切り合い付近を含め全体的に複雑であるが、黒褐色土を基調に、暗褐色土が絡む自然堆積層である。

また内側の古期住居跡は、新期と同じ張出部を南に向け、規模は張出部を含めた主軸である南北軸長7.10ｍを測り、居住主体部は南北軸6.40ｍ、東西軸5.20ｍのやはり南北に長い楕円形を呈し、張出部と炉跡を通る主軸方位はN－１°－Eを指す。張出部は平行する溝状張出で、溝内にはピットが穿ってある。また明瞭な開閉部施設は確認できない。通路の長さ135.0㎝、幅41.0㎝を測る。壁に沿って廻る壁柱穴は外側よりも比較的密で53本検出された。大きさは径18.0～77.0㎝、深さは12.0～163.0㎝で、平均の深さは52.22㎝を測る。炉跡は新期と同なじ位置であったものと推定できる。

住居覆土および床面上より出土した土器は後期中葉の土器である（第52図１～17）。

１～５は精製土器である。１は鉢の口縁部破片。口縁はやや内彎気味に立ち上がる。口唇部は外削状を呈し、横位平行沈線文が巡り、「の」の字状単位文による区切り文が配される。２は無文帯の口縁部が内傾し、直線的な幾何学文による縄文帯をもち、沈線の交点に円形刺突文が施される。３の口縁部も同じく「く」の状に内傾し、平行沈線が巡る。４・５は横位の平行沈線文による縄文帯。



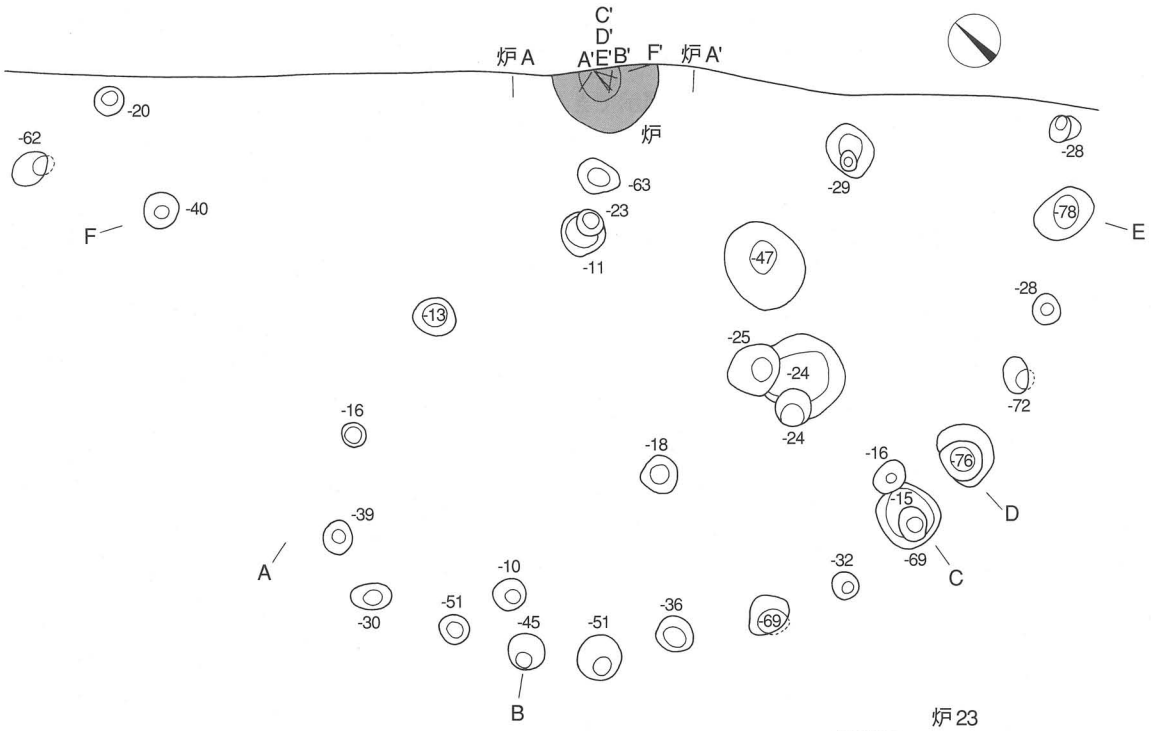
第52図　住居跡SI07出土遺物

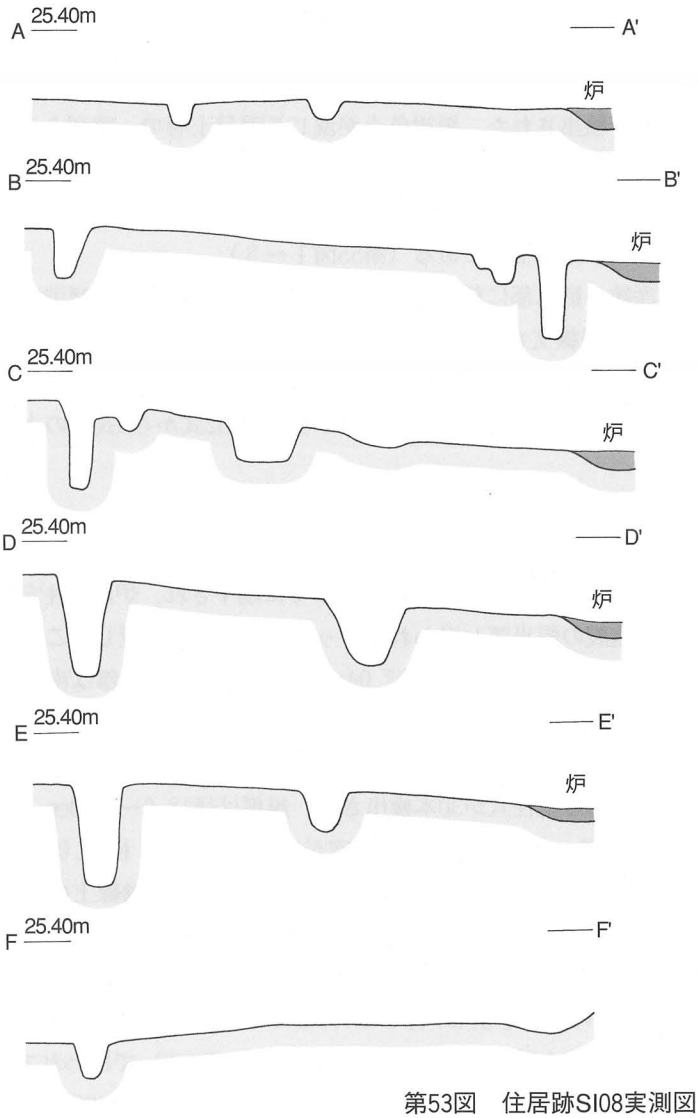
6～16は粗製土器である。6は口縁部破片。口唇部に貼付けによる小突起をもち、口縁下を僅かに空け貼付けによる細い紐線文が巡る。地文は縄文のみ。7も口縁部破片。口縁直下に押圧による紐線文を巡らせ、内面に沈線を有する。8は内彎、9は直口する口縁直下に浅い沈線が巡る。10は口唇部に小突起を有し、縄文地文に沈線が1条巡る。11～14は胴部破片。縄文地に11・12は斜行する間隔の広い条線。15・16は無文地。17は浅鉢の底部破片。底面に網代の圧痕が残されている。

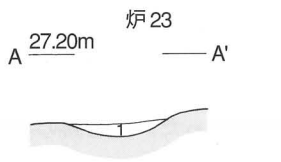
床面上から住居の時期を明示する遺物としては加曽利B1－2式期が中心であり、また住居の形態や遺物の出土状況などからみて、本住居は加曽利B2式期のものであると判断できる。

第8号住居跡（SI08）（第53図）

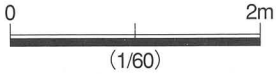
調査区北東側、I－Ⅱ、J－Ⅱ区の低位面の斜面部に位置し、北東側約半分は未調査区域に延びている。また南西側の壁もすでに削平されていたものの、炉跡・柱穴および床面の状況により住居跡と判断した。また入口部と推定される張出部が確認されないため全体的な規模について不明瞭な点が多い。しかし、柱穴と炉跡が検出されており、これを手かがりに規模をみると、長軸8.00m、短軸（4.74）mの円形もしくは楕円形を呈するものと推定される。また入口部が確認できず主軸方位は不明である。壁はすでに削平されていたが、壁に沿って廻ると思われる壁柱穴が18本検出され、柱穴の大きさは径20.0～50.0cm、深さ15.0～76.0cmで、平均の深さは39.94cmを測る。また居住内に13本の柱穴が検出されているが、間尺の合う主柱穴になるものはなく、いずれも支柱穴であろう。大きさは径19.0～71.0cm、柱穴の深さは10.0～63.0cmで、平均の深さは23.54cmを測る。炉跡は未調査区域に接した住居跡中央に位置し、確認される大きさは長径83.0cm、短径51.0cmの円形であろう。深さは15.0cmである。掘形は鍋底状に掘り窪めてあり、底面は平坦で起伏がなくしかも被熱により赤化硬化して







1　赤褐色土　5YR4/6　微量の焼土粒、少量のロームブロックを含む



第53図　住居跡SI08実測図

いる。炉覆土は焼土粒を多量に含む赤褐色土（5YR4/6）で覆われていた。また住居跡の覆土は薄く明瞭ではないが、床面上わずかに黒褐色土（10YR3/1）が堆積していた。床面は全体的に堅く締まっており、炉跡周囲はとくに顕著であった。なお、住居覆土中から図示できる遺物の出土はなかったため、時期を確定できない。

第９号住居跡（SI09）（第54図・第55図）

調査区北東側、H－Ⅲ区の緩傾斜部に位置する。壁がすでに削平され、炉跡・柱穴および床面の状況により住居跡と判断した。入口施設と推定される張出部を南に向け、張出部を含めた主軸である南北軸4.79ｍを測り、居住主体部は南北軸4.10ｍ、東西軸4.50ｍのほぼ円形を呈する。張出部と炉跡を通る主軸方位はN－４°－Eを指す。張出部は平行する溝状の入口施設で、溝内には小規模なピットが付設される。張出部は平行する溝状張出で、溝内にピットが穿ってある。また居住側はピットにより区切られた開閉部があり、通路の長さ90.0㎝、幅43.0㎝を測る。壁はすでに削平され明瞭ではない。しかし壁に沿って廻る26本の壁柱穴が検出でき、とくに張出部に集中していることが特徴である。大きさは径13.0～45.0㎝、深さ6.0～31.0㎝で、平均の深さは16.96㎝を測る。また居住内柱穴として10本検出され、うち炉跡周囲で深さ50㎝前後の４本は主柱穴であろう。また他は間尺のあわない支柱穴で、大きさは径15.0～57.0㎝、深さ11.0～59.0㎝、平均の深さは34.89㎝を測る。炉跡は住居跡の中軸線上に２ヶ所確認され、南側で張出部寄りの炉１が主炉と中央の炉２である副炉がある。主炉１の大きさは長径80.0㎝、短径41.0㎝の南北に長い不整楕円形を呈し、深さは20.0㎝である。また副炉２は長径106.0㎝、短径58.0㎝でやはり南北に長い瓢箪型を呈し、深さ5.0㎝である。いずれも掘形は皿状に掘り窪めてあり、底面の平坦部は狭小で起伏がなく被熱により赤化硬化している。炉覆土は焼土粒を多量に含む明赤褐色土（2.5YR5/6）・赤褐色土（5YR4/6）で覆われていた。床面は全体的に堅く締まり、とくに炉跡周辺は顕著であった。住居跡の覆土は薄く黒褐色土（10YR3/1）の単一層の状況を呈しており、自然堆積層であろう。また炉跡の北側柱穴中から小貝ブロックが検出された。黒褐色土が混じる混貝土層で、確認された規模は径35.0×25.0㎝、層厚10.0㎝を測り、ほぼシオフキの純貝層で、中小型のハマグリ、オキシジミが混入し、僅かにアカニシ、サルボウが検出された。

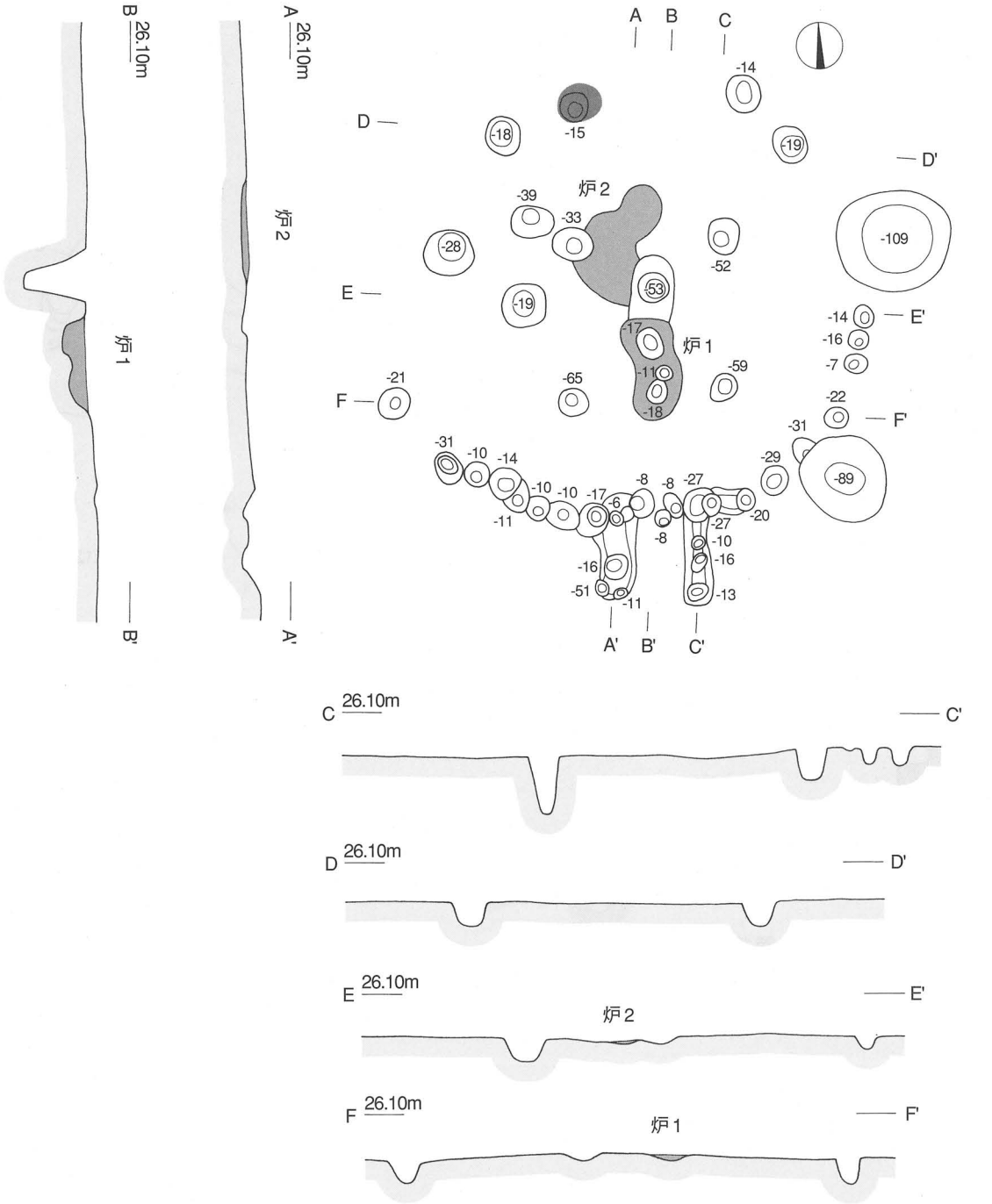
住居覆土および床面上より出土した土器は後期中葉の土器である（第55図１～３）。

１は胴部が大きく括れる算盤玉状を呈する深鉢。括れ部に刻文帯を巡らせ区画文とし、胴部は磨消弧線文を配する加曽利B3式。２は粗製の深鉢。口縁直下に紐線文を巡らせ、体部は縄文地文地に横位の条線。３は胴部括れ部に平行沈線による磨消区画帯を有し、口縁部、胴部とも斜沈線が施文されている。加曽利B2式。

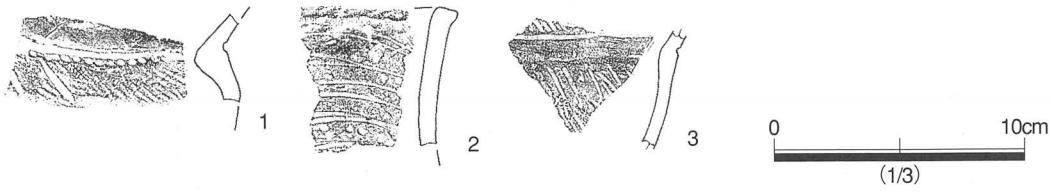
床面上から住居の時期を明示する遺物としては、全体的に貧弱であるが、加曾利B2式から3式期の土器が確認できる。

第10号住居跡（SI10）（第56図・第57図）

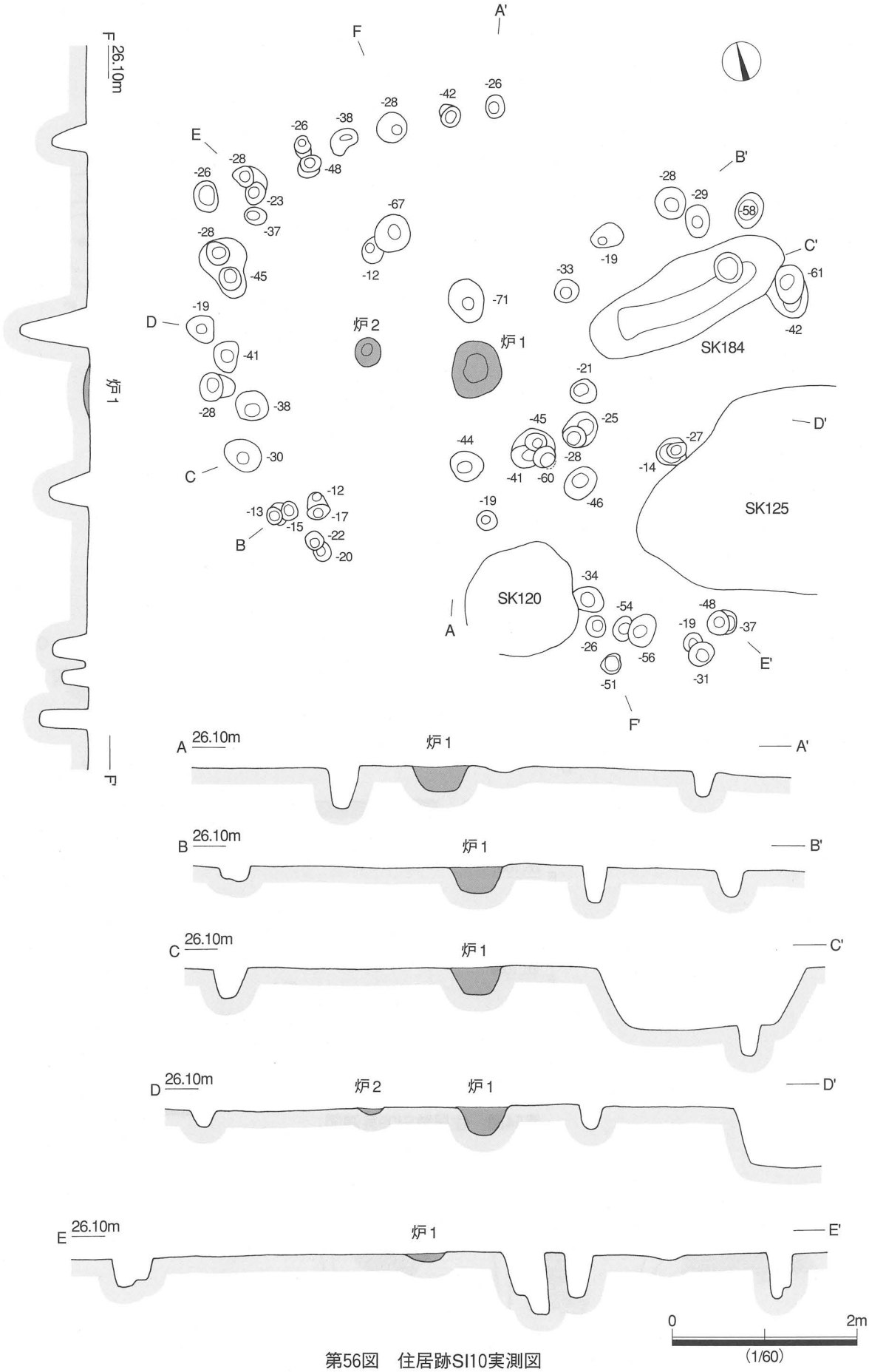
調査区北東側、I－Ⅲ・Ⅳ区に位置し、南側にSI11が隣接している。壁がすでに削平され、炉跡・柱穴および床面の状況により住居跡と判断した。出入口部施設の張出部と思われるピット群が南側に位置し、これを張出部と推定し南北軸を主軸とした。このピット群を含めた南北軸長は7.04ｍを測り、居住主体部は南北軸4.98ｍ、東西軸6.37ｍの東西に長い長方形を呈する。張出部と炉跡を通る主軸方位はN－９°－Wを指す。張出部はピット列により構築されている。開閉部は確認できない。また通路の長さ187.0㎝を測り、幅は不明である。壁はすでに削平され明瞭ではないが、壁に沿って廻る壁柱穴が30本検出され、規模は径18.0～42.0㎝、柱穴の深さは12.0～61.0㎝で、平均の深さは30.57㎝を測る。また居住内にも柱穴が14本検出され、径22.0～46.0㎝、深さは12.0～71.0㎝で、平均の深さは37.36㎝を測る。炉跡は２基検出され、炉１はほぼ中軸線上の中央にあり、長径60.0㎝、短径51.0㎝の楕円形を呈し、深さは30.0㎝である。掘形は鍋状に掘り窪めてあり、底面の平坦面は被熱により赤化硬化している。炉覆土は焼土粒を多量に含む赤褐色土（5YR4/6）で覆われていた。炉２は中央北西側寄りにある。長径30.0㎝、短径27.0㎝の円形を呈し、深さは7.0㎝である。掘形は浅い皿状に掘り窪めてあり、底面の平坦部は狭小である。炉覆土は焼土粒を多量に含む赤褐色土（5YR4/6）で覆われていた。床面は全体的に堅く締まり、炉跡周辺がとくに顕著であった。住居跡覆土は浅く黒褐色土（10YR3/1）の薄い



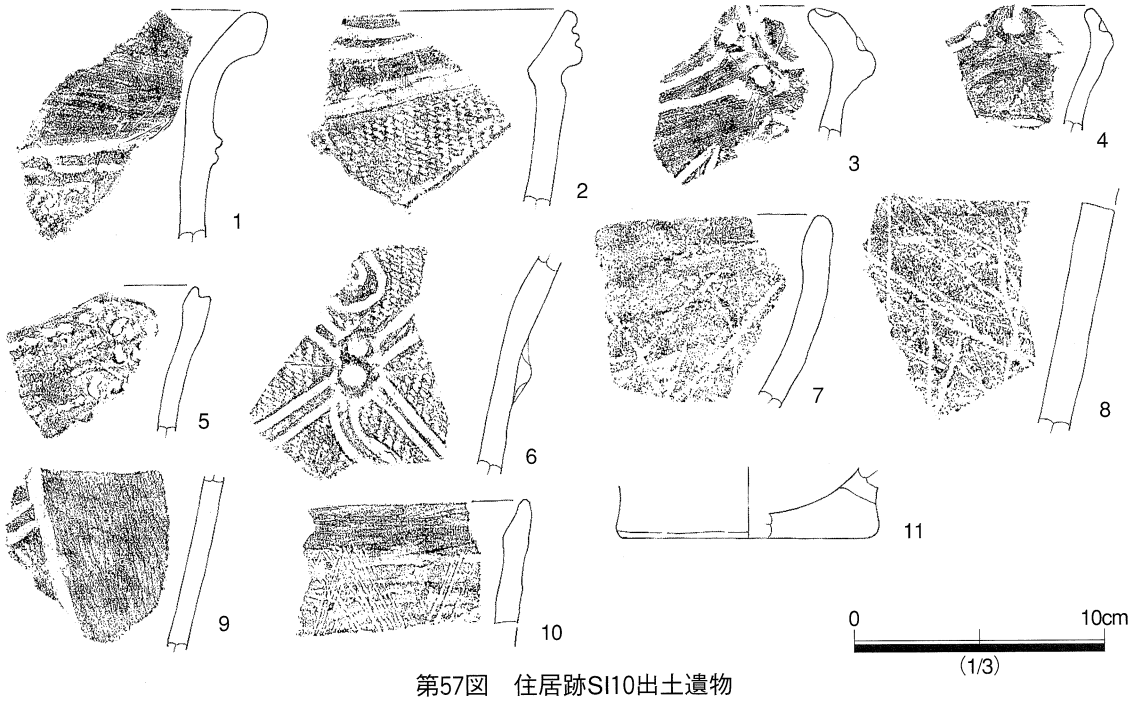
第54図　住居跡SI09実測図



第55図　住居跡SI09出土遺物



第56図　住居跡SI10実測図



第57図　住居跡SI10出土遺物

単一層の状況を呈しており、自然堆積層であろう。

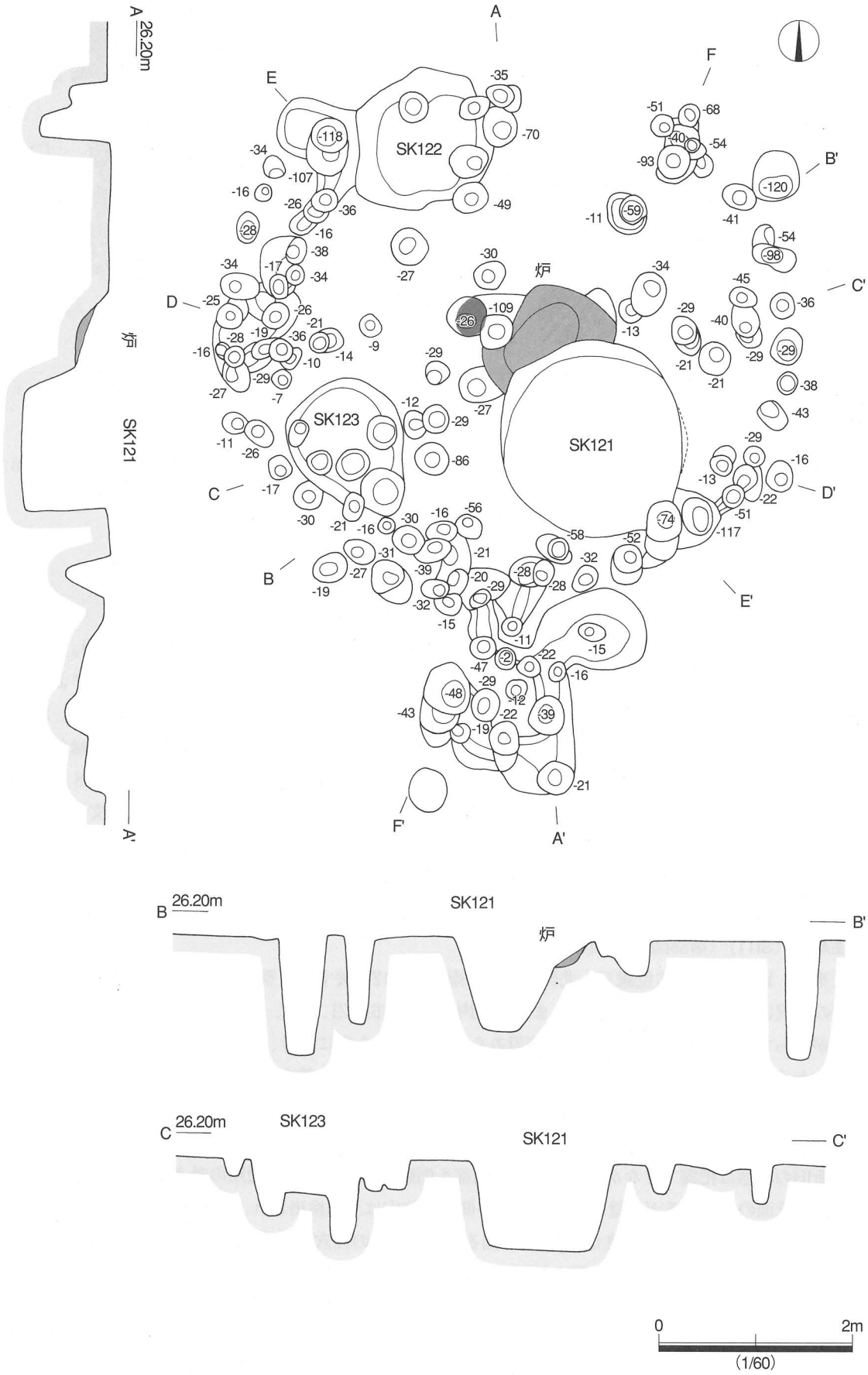
遺物は住居床面上より後期前半の土器が出土し、土器以外は確認できなかった（第57図１～11）。

１～５は口縁部破片である。１は大型の深鉢。無文帯の口縁部がくの字状に短く外反し、隆帯によって頸部が区画され、胴部は縄文地文に沈線文が施文される。３・４は波状口縁の深鉢。口縁部は内折する。波頂部に盲孔を配し、沈線によって繋ぐ。３の胴部は沈線による区画文を施す。５も波状口縁の深鉢。口縁部は直口する。６は胴部で縄文地文に平行沈線による意匠文を描き、交点には８の字状の盲孔を穿つ。７・８は沈線文によるランダムな格子文を施文する。９は太沈線による意匠文。10は口縁部破片で、口辺部は無文帯とし、格子状の条線文を施す。11は深鉢の底部破片である。

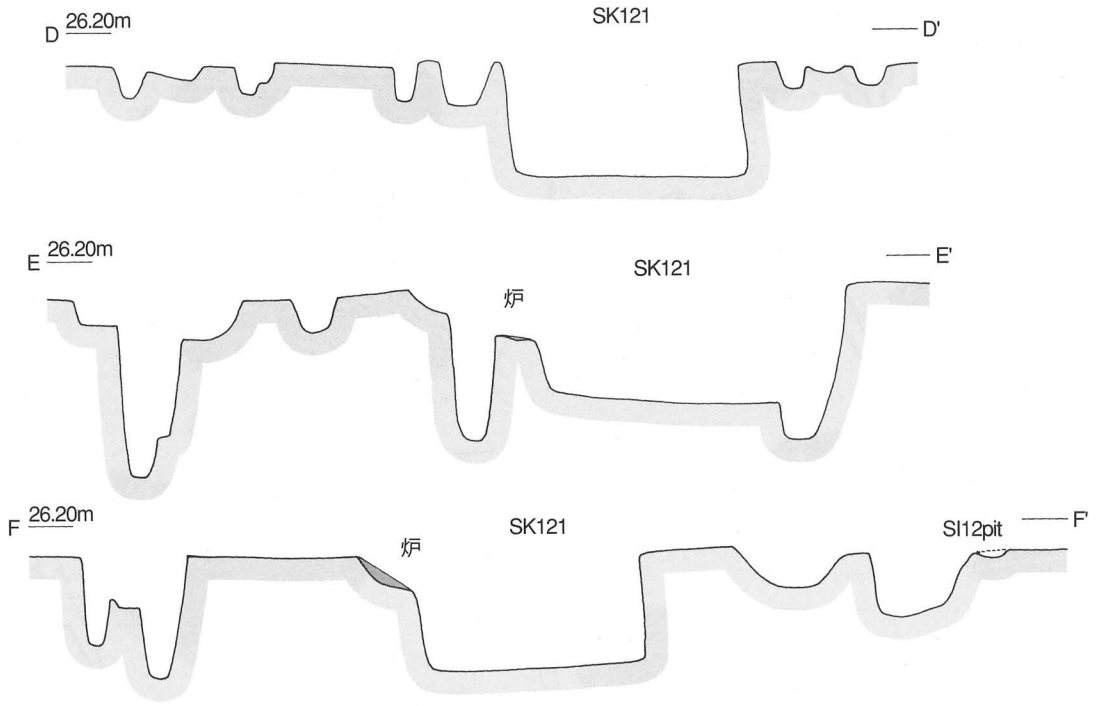
遺物は土器のみで全体的に少ないが、出土土器から本住居は堀之内１式期のものであると判断できる。

第11号住居跡（SI11）（第58図～第62図）

調査区東側、I－Ⅳ・Ⅴ区に位置し、北側でSI10と南側でSI12と接する。壁がすでに削平され、炉跡・柱穴および床面の状況により住居跡と判断した。また住居内には土坑SK121、122、123の３基が重複しているが、いずれも本跡が切って構築している。なお入口施設みられる張出部を南に向け、住居壁際の壁柱穴列が２列になっていることから拡張住居と推定される。外側新期拡張部の規模は張出部を含めた主軸である南北軸長7.51ｍを測り、居住主体部は南北軸5.74ｍ、東西軸6.01ｍの東西に長い楕円形を呈する。張出部と炉跡を通る主軸方位はN－2°－Eを指す。張出部構造は土坑とピット群により構築され、しかも拡張住居のため複雑になっている。ここでは新旧の状態は把握できなかった。また開閉部も明瞭ではない。なお通路の長さ205.0㎝を測る。壁はすでに削平され床面のみであるが、壁に沿って廻る外側の壁柱穴は38本検出され、規模は径12.0～69.0㎝、柱穴の深さは11.0～120.0㎝で、平均の深さは40.34㎝を測る。住居内側の柱穴は20本検出され、規模は径20.0～44.0㎝、柱穴の深さは9.0～109.0㎝で、平均の深さは33.11㎝を測るが、うち深度の深い３本は主柱穴であろう。しかし本来南東部に位置する１本が土坑SK121と重複しているため明確にできないものの、４本柱と推定される。炉跡は住居のほぼ中央に位置し、長径130.0㎝、短径55.0㎝の楕円形を呈し、深さは10.0㎝である。掘形は皿状に掘り窪めてあり、底面は平坦部で起伏がなく被熱により赤化硬化している。炉覆土は焼土粒を多量に含む赤褐色土（5YR4/6）で覆われていた。床面は全体的に堅く締まり検出しやすかった。覆土は浅く黒褐色土（10YR3/1）の



第58図　住居跡SI11実測図(1)



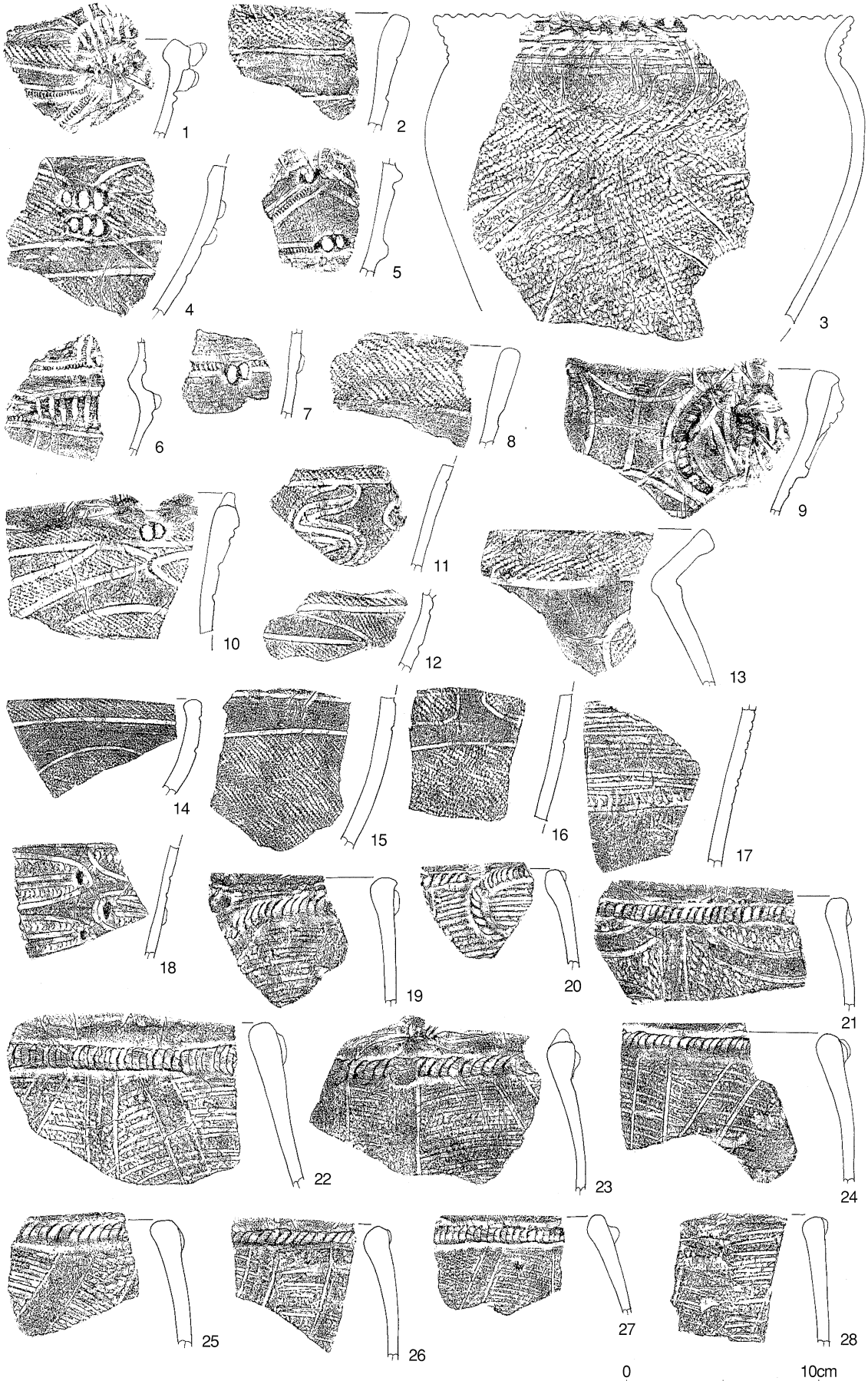
第59図　住居跡SI11実測図(2)

薄い単一層の状況を呈しており、自然堆積層である。また炉跡の北西側柱穴内から小貝層ブロックが検出された。黒褐色土が混じる混貝土層で、20点ほどの貝が確認された。規模は径10.0×25.0cm、層厚5.0cmを測り、ハマグリ、オキシジミ、シオフキのほか、イノシシの小骨片と魚骨であるハゼ、ニシン、コイが検出された。

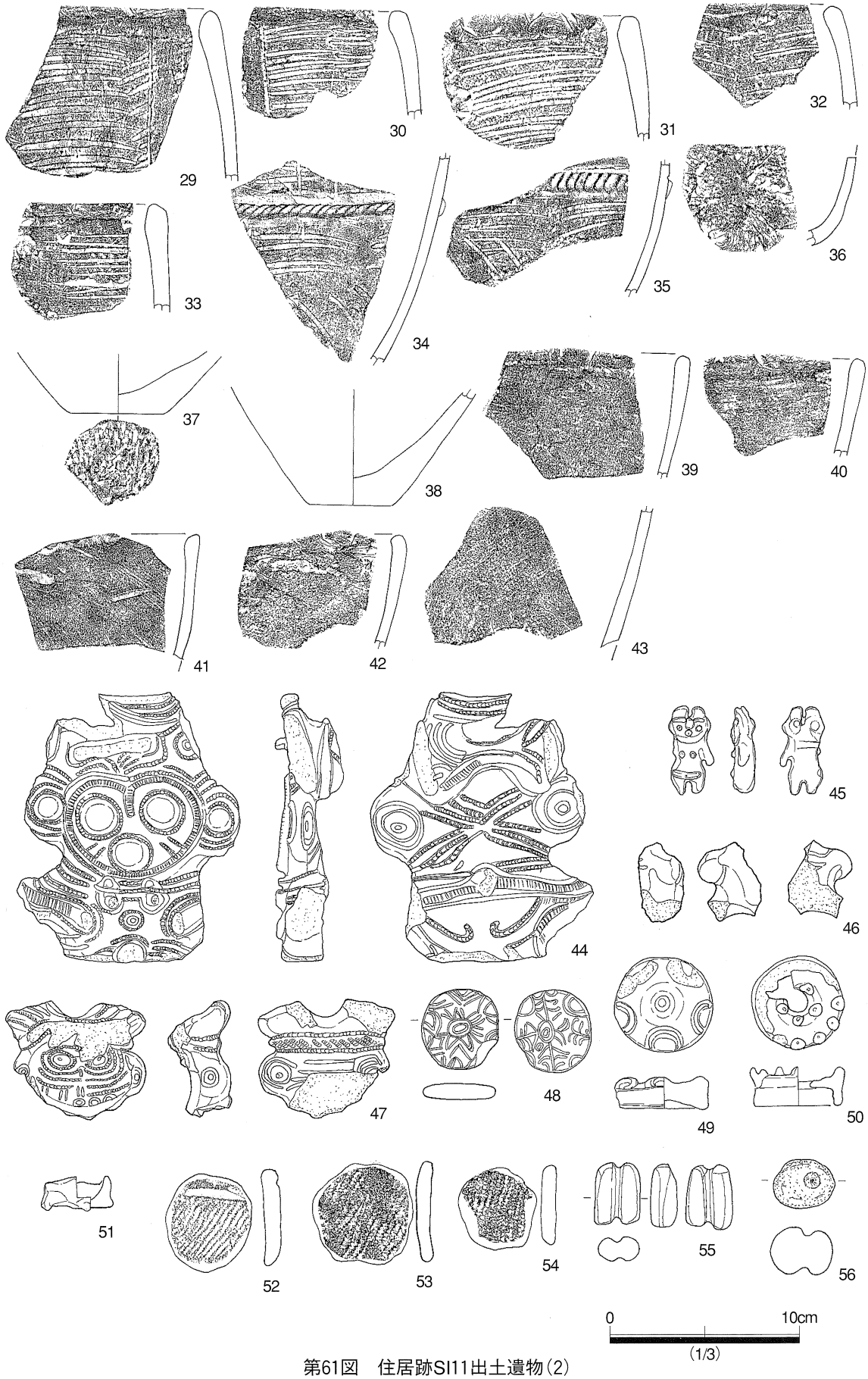
また内側の古期住居跡は、主柱穴および張出部が共通するものと推定される。居住主体部は南北軸4.75m、東西軸5.25mの新期と同様東西に長い楕円形を呈する。内側を廻る壁柱穴は32本検出され、規模は径17.0～50.0cm、柱穴の深さは7.0～70.0cmで、平均の深さは33.37cmを測る。新旧の床面は明確ではない。

住居覆土および床面上より出土した土器は後期後半から晩期前半の土器であり、主体は安行3a式期である。また土偶は4点出土し目立つ。その他土製品として円板1点、耳飾り2点、ミニュチア1点、土器片円板3点。石製品として石錘1点、砥石2点、凹石を含む磨石類2点、石匙1点が出土している（第60～62図）。

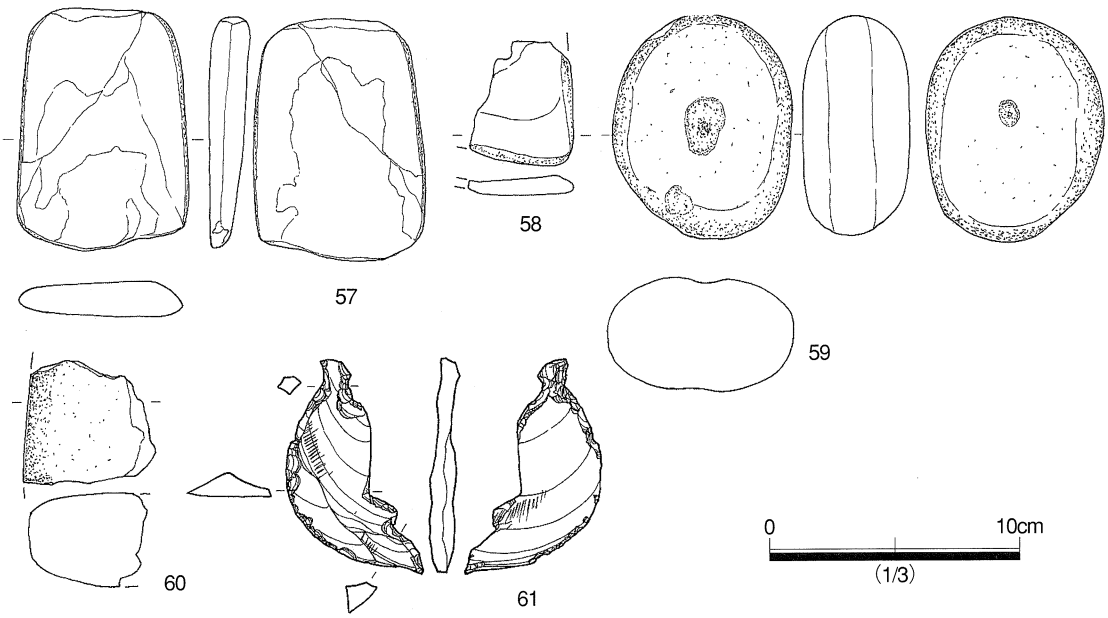
1・2、4～16は帯縄文系の深鉢。1は口縁に平行する隆起帯縄文をまたぐ横位の貼瘤上に縦位のキザミが施され、貼瘤から横位および斜位の幅狭な刻文帯が垂下する。2・8は平縁で、隆起帯縄文が施文される。4～7は胴部破片。4は磨消弧縄文の起点に上下二段の三刺押瘤が配される。5～7は横位の双刺押瘤が配され、6は隆帯区画内に縦位の沈線を充填する。9は円形の押捺隆帯に囲まれてキザミを施した縦長の貼瘤を配し、沈線による弧線文を施す。10～12は入組文が施された深鉢で、10は口縁部破片。口唇部に双頭突起が貼付けられ、横位の双刺押瘤が配される。11は蛇行磨消文が垂下する。13は縄文帯の口縁部がくの字状に外反する。14は鉢の口縁部破片。3は大洞系の深鉢。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部はくの字状に外反する。口唇部は刻目が巡り、口縁部は沈線間を短線で截痕した連続刻目文を施文し、体部は縄文施文である。19～36は粗製土器である。19～28、34・35は紐線文系である。21を除き地文に上向き弧線の横位の条線が施文され、縦位もしくは斜位の平行沈線間を磨消す意匠文が配される。19・20の紐線文は楕円区画文が伴う。21は縄文地文に上下対象となる磨消弧線文が配される。34・35は胴部破片で、胴部中位にも横位の紐線文が巡る。36は底部が丸みをもつ形になろう。37･38は深鉢の底部破片。37は網代圧痕を残す。39～43は製塩土器である。39･40の口唇部は丸みをもち、41は内削状となる。また42はやや肥厚する。



第60図　住居跡SI11出土遺物(1)



第61図　住居跡SI11出土遺物(2)



第62図　住居跡SI11出土遺物(3)

44～54は土製品である。44～47は土偶。44は大型のみみずく形土偶。頭頂部の一部および両腕、下半身を欠損する。顔はハート形に刻みのある隆帯で縁取られ、中央から一体化した鼻が垂下し、目・口・両耳にも同じような刻目隆帯による円形文を配し、とくに張り出した耳には耳飾りの装着が表現されている。また頬には左右２列の文様がみられる。顔面の裏側の後頭部には三重になったX字状の紐のようなものが施されている。なお頭頂部は大きく欠損しているが、同様の刻目円形文により前後にリボン状の結髪が表現されており、後には髪状突起がみられる。頸には二もしくは三重の有節沈線文が巡り、小振りの乳房は欠落しているものの胸から肩部にかけて有節沈線文による意匠文が表現されている。また部分的であるが赤彩痕が残存していた。現存長13.86cm、最大幅11.12cm、厚さ3.06cm、重量384.0ｇを測る。45は粗製土偶と呼ばれる小型の山形土偶であろう。右腕欠損部を除く体部は揃っている。頭部の表現は頭頂部からの刻みによって双頭状を呈し、後頭部には僅かな突起がみられる。顔面は粘土紐の貼付けによる眉毛・鼻・目・口が付されている。胸にはやはり貼付けによる乳房があり、腰にも貼付けがみられる。長さ4.50cm、幅2.11cm、厚さ1.25cm、重量9.98ｇ。46は左腕のみ残存する山形土偶。肩部から伸びる腕は短く湾曲されている。現存長3.85cm、幅2.81cm、厚さ2.26cm、重量19.12ｇ。47は頭部のみのみみずく形土偶の破片である。横長の楕円形を呈した顔面で、有節沈線文により目・鼻・両頬が表現され、両耳は耳孔と後面の同心円の表現により耳飾りの装着を想定させる。頭頂部にも刺突文による頭飾りが後頭部まで施文されている。全体的に赤彩痕が認められる。現存長4.99cm、幅7.14cm、厚さ2.49cm、重量85.0ｇである。48は円板である。長径4.16cm、短径3.88cm、厚さ0.76cmの円形を呈し、表裏面ともに沈線により、表面は二重円形文を中心に三角形文を細かく配し、裏面は二重円形文を中心に木の葉文を施す。重量1.308ｇを測る。49･50はいわゆる臼型と呼ばれている土製耳飾りである。49は裏面が臼状に窪み、表面に弧状の貼付けが付されている。長径5.02cm、短径4.82cm、高さ1.77cm、重量4.54ｇである。50は中央に円孔が穿かれ、裏面が大きく抉られている。中心孔縁と外周縁に小瘤状の突起を付する。長径4.72cm、短径4.70cm、高さ2.09cm、重量2.262ｇである。51はミニチュア土器である。粗製の坏状を呈し、手捏成形で粗いつくりである。口径3.52cm、器高1.60cm、底径3.9cm、重量1.004ｇ。52～54は土器片円板である。いずれも深鉢の胴部破片を再利用している。52は楕円形を呈し、全周丁寧な研磨が施されている。長さ4.897cm、幅4.509cm、厚さ0.836cm、重量21.86ｇ。53は隅丸方形を呈し、ほぼ全周比較的丁寧な研磨が施されている。長さ5.18cm、幅4.97cm、厚さ0.78cm、重量28.8ｇ。54も隅丸方形を呈し、周縁は打欠のみ成形で、研磨は一部のみ施されている。法量は長さ4.16cm、幅4.08cm、厚さ0.85cm、重量21.65ｇを測る。

55～61は石製品である。55は凝灰岩製の石錘。長方形を呈し、長軸の両端から全周研磨により溝を切っており、形を整えるため全体を研磨している。長さ3.299cm、幅2.438cm、厚さ1.376cm、重量19.0gである。56は2ヶ所の盲孔のある安山岩製の丸玉である。表裏両面から摺鉢状に孔が彫られている。錐状の工具によるものであろう。長さ2.46cm、幅3.19cm、厚さ2.58cm、円孔径0.99cm、深さ0.45cm、重量1.088gである。57･58は砂岩製の砥石である。57は完存品で扁平の長方形を呈し、両側縁は研磨により刃部状を呈し薄くなっている。表裏面は平均的に研磨されている。長さ9.61cm、幅6.78cm、厚さ1.67cm、重量131.5g。58は破片であるが、57とほぼ同じような砥石である。側縁は研磨により刃部状を呈している。現存長4.86cm、幅4.03cm、厚さ0.76cm、重量18.0gである。59・60は磨石類である。59は石英斑岩製の典型的な楕円形磨石である。長さ9.09cm、幅7.45cm、厚さ4.47cm、重量416.0gを測り、表裏面および側縁面をよく研磨しており、表裏面のほぼ中央に加撃痕による円形の凹部をもつ。60は安山岩製で破片である。表裏面および側面を丁寧に研磨され、いわゆる石鹸形状を呈している。現存長4.64cm、幅5.15cm、厚さ3.80cm、重量138.0gを測る。61はメノウ製の石匙である。完存品で、いわゆる縦型石匙である。薄手の縦長剥片を素材とし、刃部が長軸より右側に湾曲している。調整剥離は曲線的な刃部とツマミ部の抉り部に集中して行い、ツマミ部上端および刃部以外は第一剥離のみの未加工である。長さ8.6cm、幅3.3cm、厚さ0.98cm、重量15.0gである。

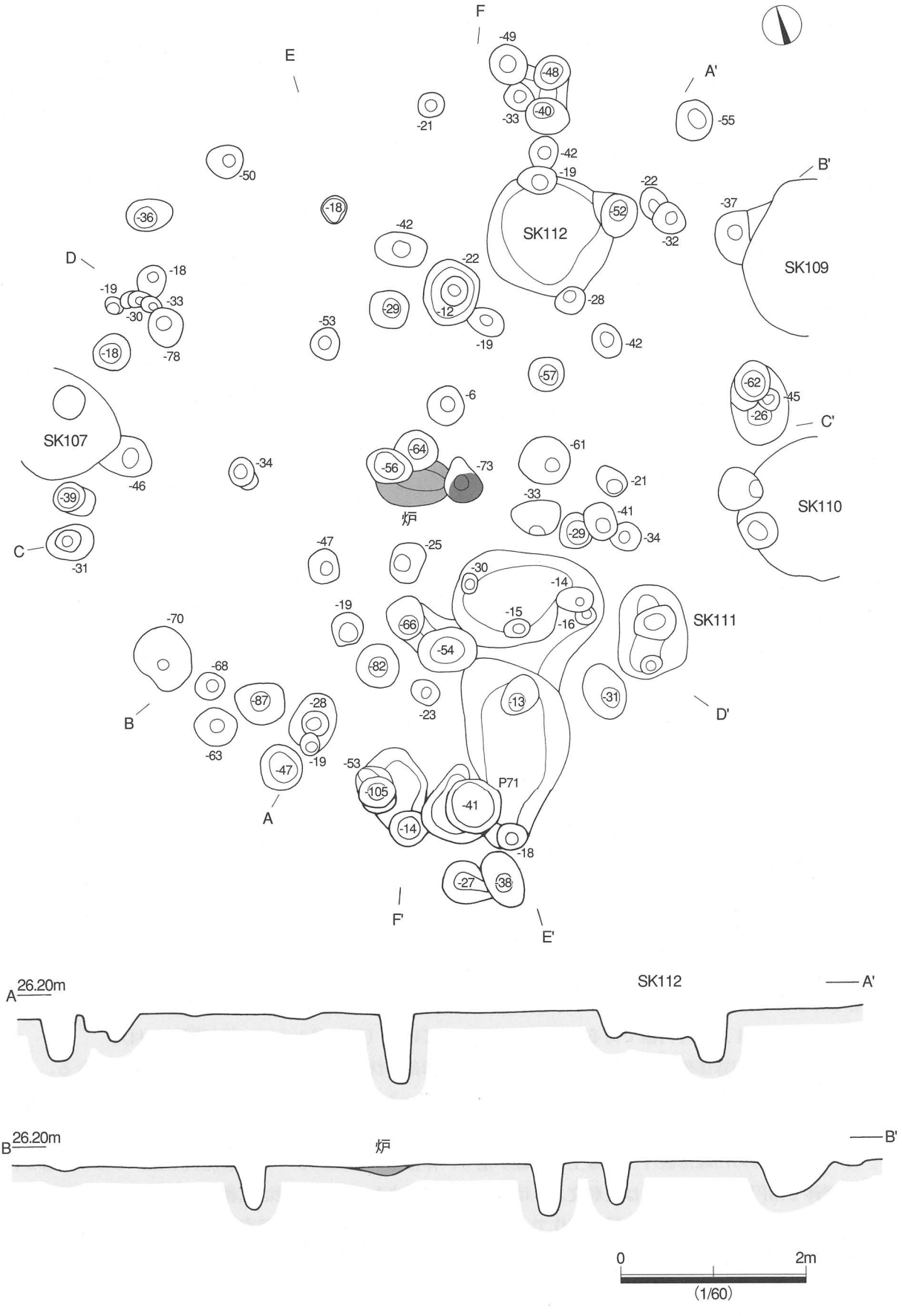
床面上から住居の時期を明示する遺物としては安行3a式期が中心であり、また住居の形態や炉の状況などからみて、本住居は安行3a式期のものであると判断できる。

第12号住居跡（SI12）（第63図～第66図）

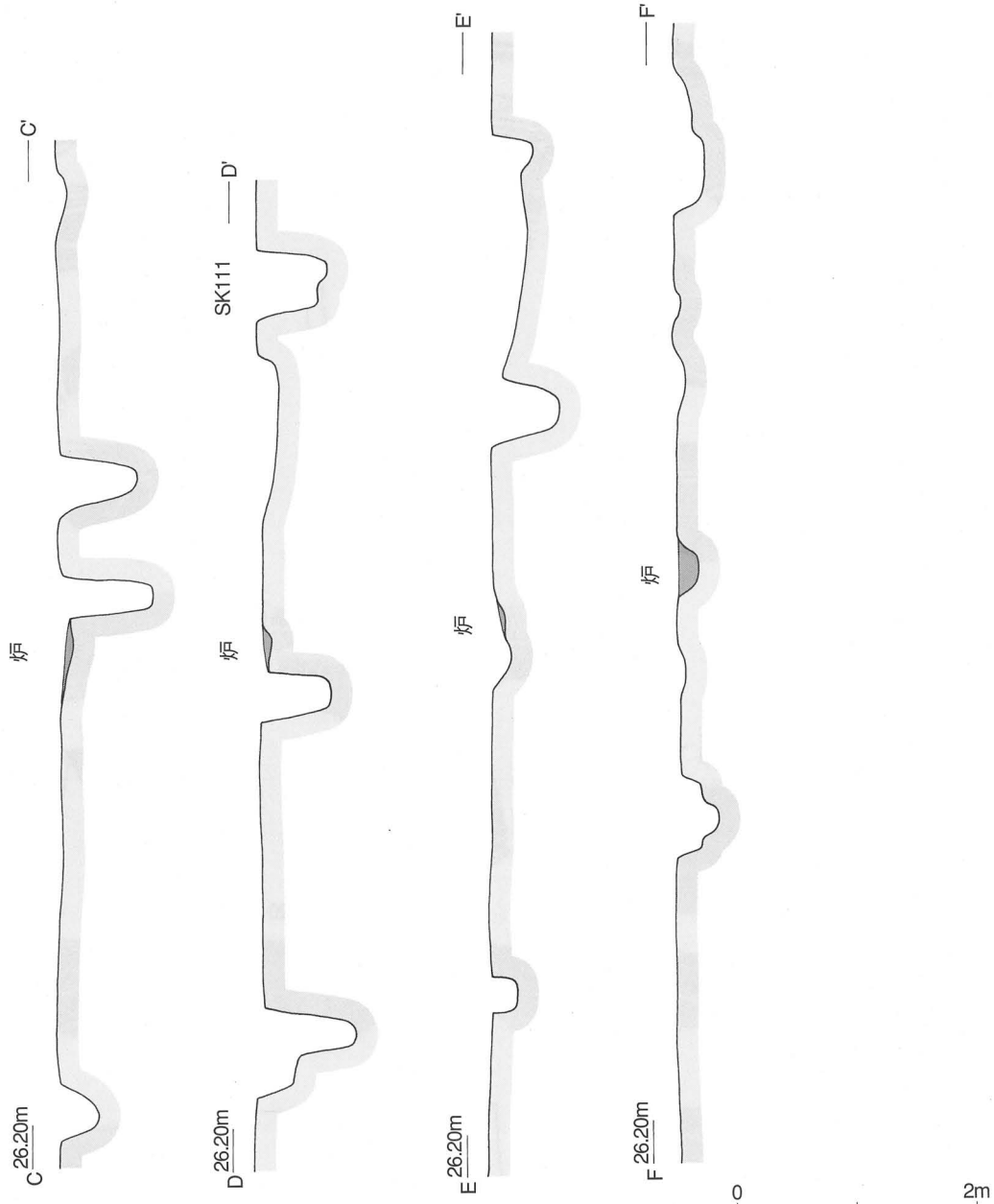
調査区南東側、I－Ⅴ・Ⅵ区に位置し、北側にSI11と西側にSI13が隣接している。壁がすでに削平され、炉跡・柱穴および床面の状況により住居跡と判断した。入口施設と考えられる張出部が南に向け、張出部を含めた主軸である南北軸長9.04mを測り、居住主体部南北軸7.52m、東西軸7.90mのほぼ円形を呈する。張出部と炉跡を通る主軸方位はN－5°－Eを指す。張出部構造は楕円形土坑内にピットを伴う単一土坑である。通路の長さ269.0cmを測る。壁はすでに削平されていたが、壁に沿って廻ると思われる壁柱穴が25本検出され、大きさは径21.0～80.0cm、柱穴の深さは18.0～105.0cmで、平均の深さは44.4cmを測る。また住居内は44本検出され、規模は径22.0～68.0cm、柱穴の深さは6.0～82.0cmで、平均の深さは36.82cmを測る。炉跡は住居のほぼ中央にある。長径74.0cm、短径46.0cmの楕円形を呈し、深さは16.0cmである。掘形は浅い皿状に掘り窪めてあり、底面の平坦部は狭小で被熱により赤化硬化しており、炉覆土は焼土粒を多量に含む赤褐色土（5YR4/6）で覆われていた。床面は全体的に堅く締まり検出しやすかった。覆土は浅く黒褐色土（10YR3/1）の薄い単一層の状況を呈しており、自然堆積層であろう。また炉跡の東側柱穴内から小貝層ブロックが検出された。黒褐色土が混じる混貝土層で、規模は径10.0×15.0cm、層厚5.0cmを測り、ハマグリ、オキシジミを主体に、僅かにアカニシが混入していた。そのほかニホンジカとイノシシの骨片、魚骨としてクロダイ、ボラ、ウナギ、ハゼが検出された。

住居覆土および床面上より出土した土器は晩期前半の土器で、安行3a､3b式、前浦式期であり、主体は安行3b式期である。また製塩土器も出土している。その他土製品として土偶１点、土器片円板４点。石製品として石剣１点、磨石類１点、骨角器であるヤス１点が出土している（第65図１～36、第66図37～44）。

１は平縁の鉢の口縁部破片。口唇部に突起を有し、口縁部の沈線区画内は入組み三叉文が施文される。２は胴部破片。沈線による菱形文、縄文帯に曲線文が施される。３は環状把手を有する深鉢。口縁部は刻目のもつ隆帯による枠状区画文が配され、体部上半分は雲形文、３本単位の沈線区画下は縄文施文。大洞C2式に平行する。４・５は浅鉢の口縁部破片。口縁上は沈線が巡り、体部は入組文。６～９は前浦式土器。６は口縁部が内傾する深鉢で楕円形文。７・８は菱形文。９は雲形文が施文される。10～12は広義の姥山Ⅱ式である細密沈線文が施文された深鉢。いずれも口縁部破片で、口縁に平行する沈線間を羽状細密沈線文で充填させる。11は口唇部が肥厚し、内彎気味に立ち上がる。連弧文と遮光器文を上下に施文する。12は口縁上部に横位の細密沈線を充填させ、無文帯下部を縦位区画する。13～27は粗製土器である。13～17は紐線文系である。地文に上向き弧線の横位の条線が施文され、縦位もしくは斜位の平行沈線間を磨消す意匠文が配される。13の紐線文は楕円区画文となろう。17は貼付けられた紐線文が欠損したものである。18～25は口縁部が内彎気味に立ち上がり、



第63図　住居跡SI12実測図(1)

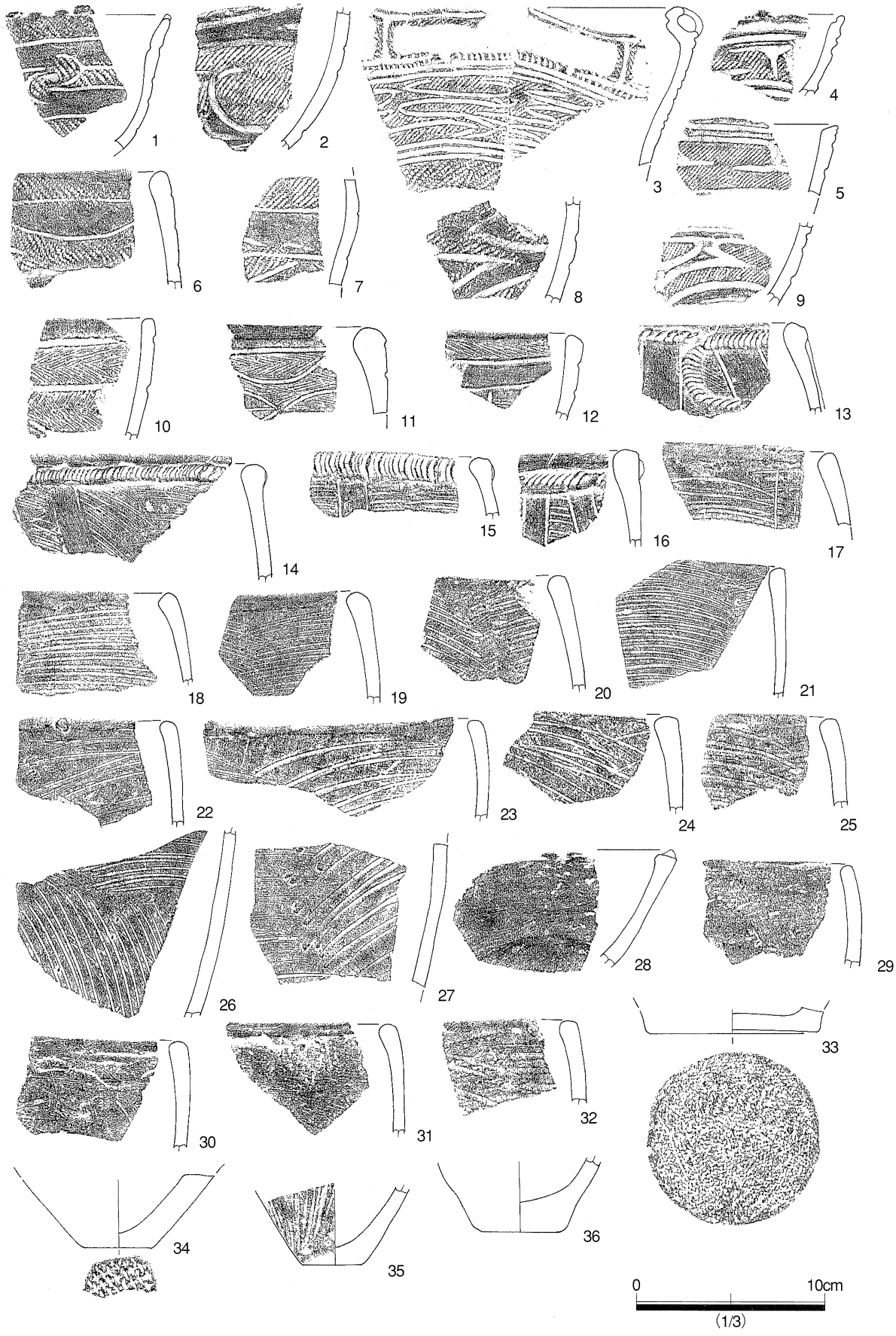


第64図　住居跡SI12実測図(2)

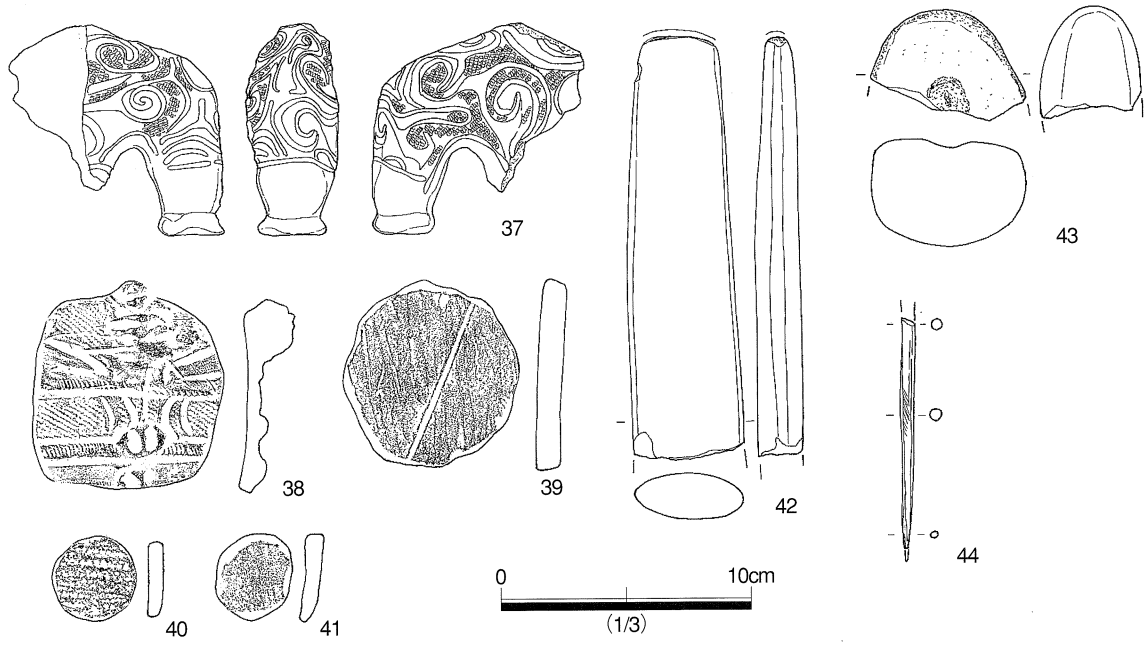
上向き弧線の横位条線が施される。26・27は胴部破片で、26のように胴部下半部の条線は縦位弧線状となる。28はB突起を伴う無文の浅鉢。29～32は製塩土器で、口縁部が内彎し、口唇部は丸みをもつ。33～36は深鉢の底部破片。33・34は網代の痕跡を残している。

37は遮光器系土偶の破片である。右の肩部から腕を残存している。肩部から大きく開く腕部は短く垂れ下がり、手の部分は小さく表現されている。文様は肩部から上腕部にかけて磨消縄文による渦巻文、入組文を施す。現存長7.02cm、幅8.41cm、厚さ3.14cm、重量144.0ｇである。38～41は土器片円板。38は隅丸方形を呈し、安行２式精製土器口縁部破片、他３点は深鉢胴部破片を利用している。法量は下記のとおりである（単位cm、ｇ）。

図版番号	長さ	幅	厚さ	重量	研磨状況	図版番号	長さ	幅	厚さ	重量	研磨状況
第66図38	7.583	6.935	2.256	70.00	全周	第66図39	7.096	6.608	0.993	60.08	打欠
第66図40	3.176	3.164	0.547	7.380	全周	第66図41	3.100	2.886	0.690	7.800	全周



第65図　住居跡SI12出土遺物(1)



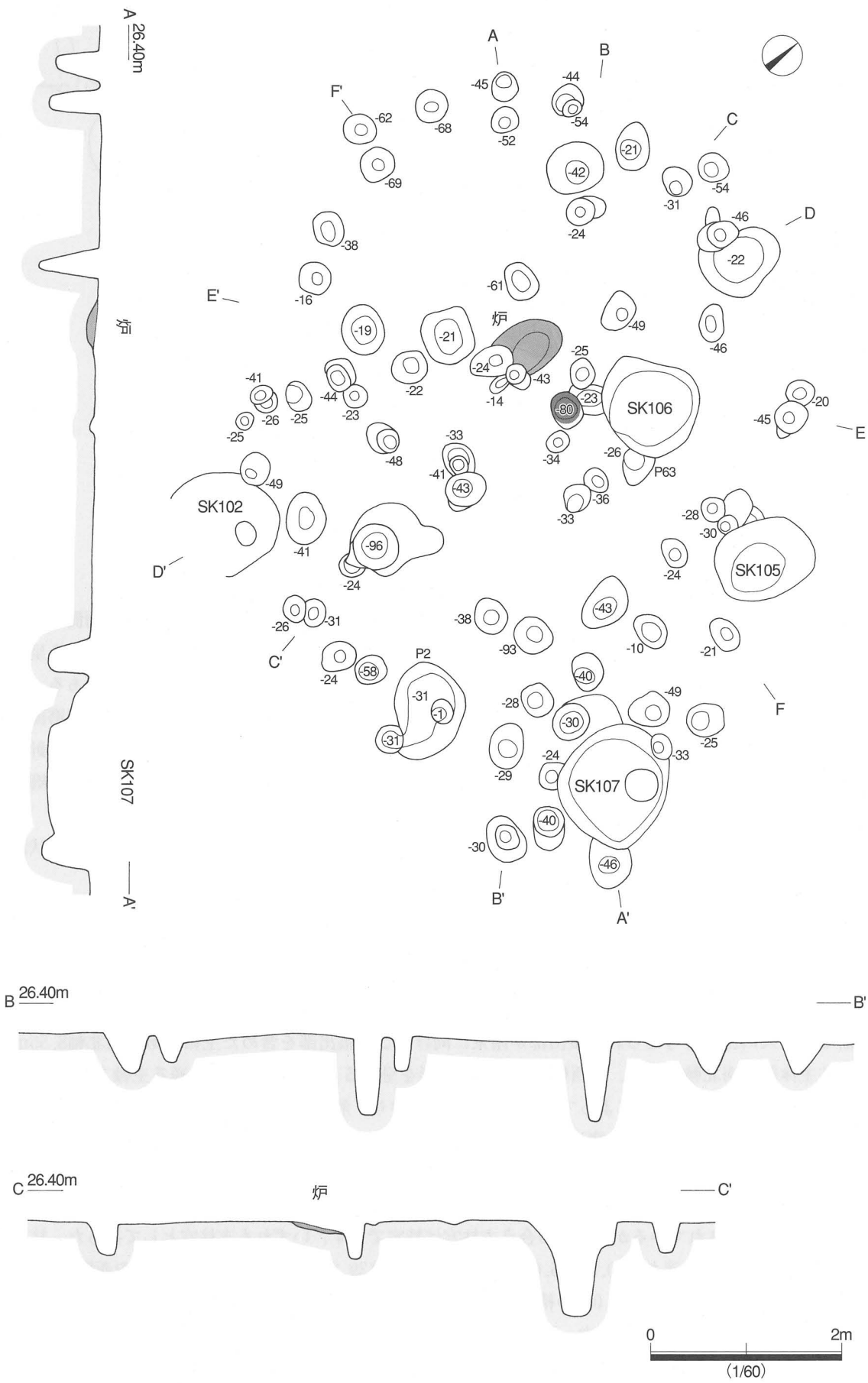
第66図　住居跡SI12出土遺物(2)

42は緑泥片岩製の石剣である。端部を欠損しており、全体形は不明である。図先端部および両側面は面取りされ、表裏面はほぼ平坦に研磨され、明瞭な研磨痕あるいは擦痕は確認できない。横断面は楕円形を呈する。現存長16.77cm、最大刃幅4.33cm、最大厚1.836cm、重量223.0gである。43は安山岩製の磨石類である。欠損品で、楕円形を呈していたものと推定される。図表面に敲打による凹部を有する。表裏面、側面に研磨面が認められる。現存長4.179cm、幅6.117cm、厚さ4.103cm、重さ132.0gである。44はシカの中足骨を用いた針状の刺突具であるが、欠損しており原形については不明である。断面形はほぼ円形を呈し、比較的丁寧に研磨加工されており、一部に研磨痕が認められる。現存長9.197cm、最大径0.498cm、重さ5.20gを測る。

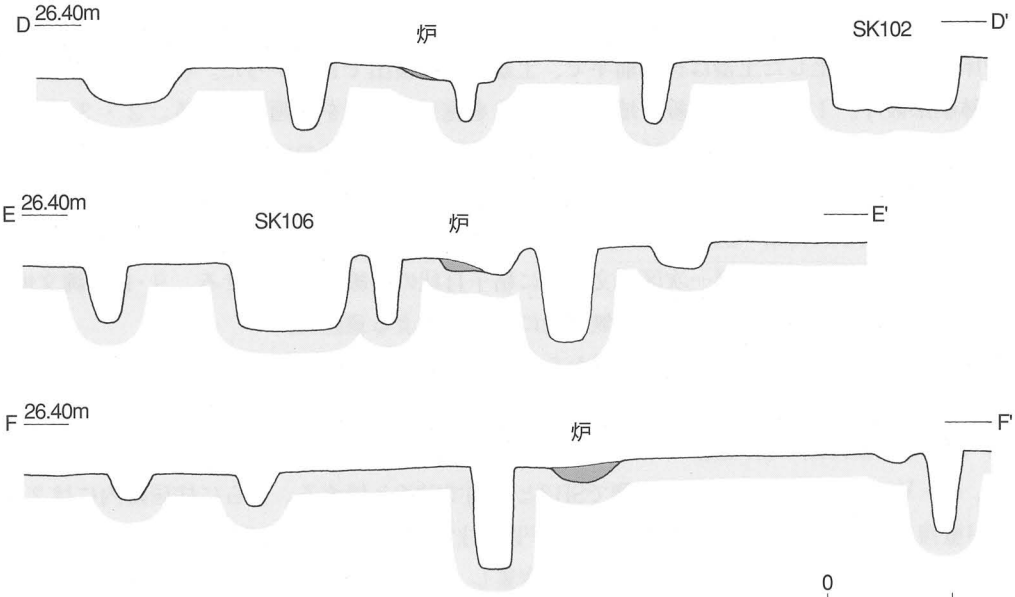
床面上から住居の時期を明示する遺物として安行3a，3b式期が中心であり、また住居の形態や炉の状況などからみて、本住居は安行3b式期のものであると判断できる。

第13号住居跡（SI13）（第67図～第69図）

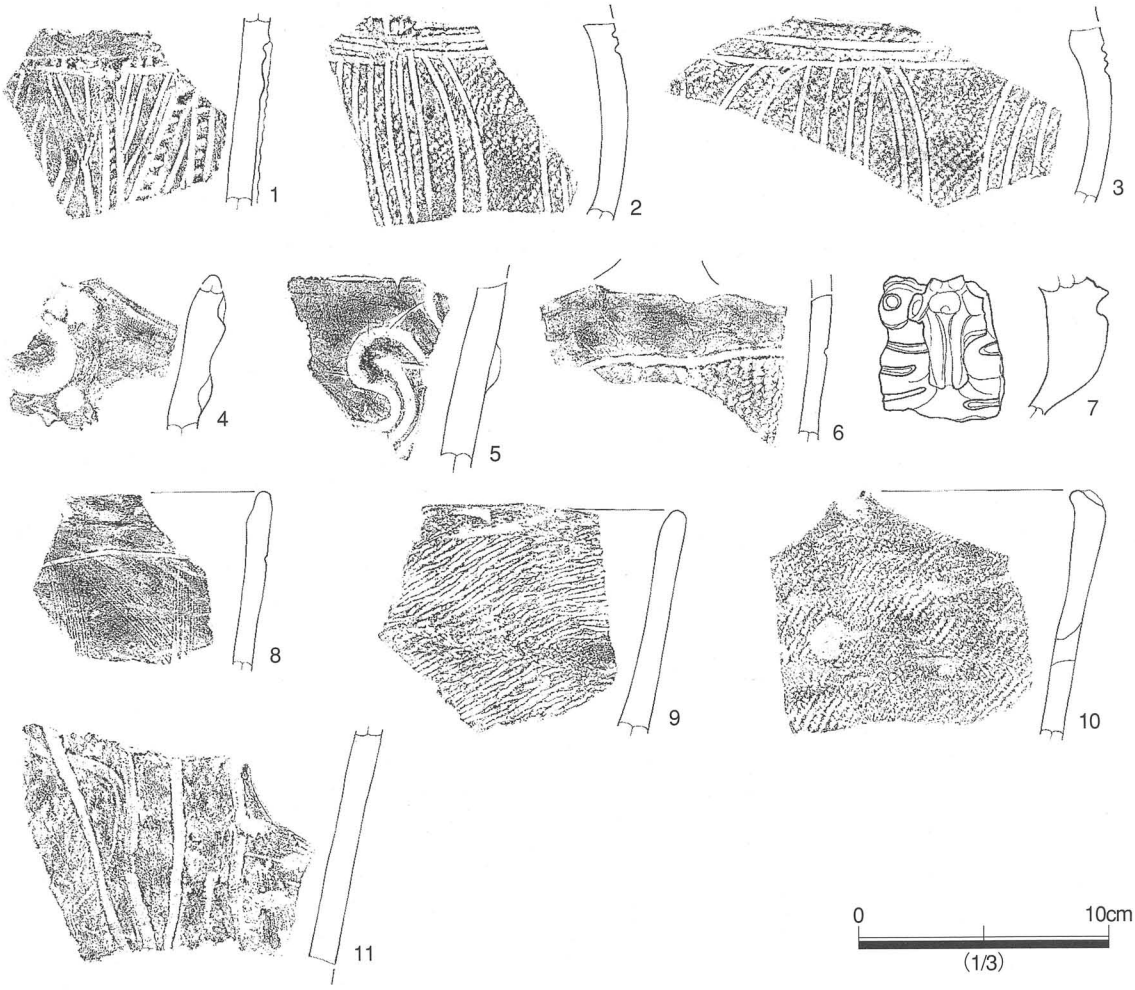
調査区中央、H－V、I－V区に位置し、東側でSI12と西側でSI14に接している。さらに住居跡内には3基の土坑（SK105、106、107）が重複している。壁がすでに削平され、炉跡・柱穴および床面の状況により住居跡と判断した。入口施設と考えられる張出部が南東に向け、この張出部を含めた主軸である南北軸8.55mを測る。居住主体部は南北軸6.77m、東西軸6.01mの楕円形を呈する。張出部と炉跡を通る主軸方位はN－63°－Wを指す。張出部は土坑SK107によって大きく破壊されており、形態は明瞭ではないが、平行するピット状張出部と推定される。これは外側に突出した2本のピットによって判断した。また開閉部については不明である。確認される通路の長さ153.0cm、幅65.0cmを測る。壁はすでに削平されていたが、壁に沿って廻ると思われる壁柱穴が28本検出され、大きさは径17.0～85.0cm、深さは16.0～69.0cmで、平均の深さは37.93cmを測る。居住内柱穴は60本検出されているが、間尺の合う主柱穴は特定できず、いずれも支柱穴として扱った。柱穴の大きさは径31.0～100.0cm、深さは10.0～96.0cmで、平均の深さは39.25cm。炉跡は中軸線上やや西側寄りにある。長径56.0cm、短径52.0cm、深さ12.0cmの楕円形である。掘形は浅い皿状に掘り窪めてあり、底面の平坦部は起伏がなく被熱により赤化硬化しており、覆土は焼土粒を多量に含む赤褐色土（5YR4/6）で覆われていた。床面は全体的に堅く締まり検出しやすかった。覆土は浅く黒褐色土（10YR3/1）の薄い単一層の状況を呈しており、自然堆積層であろう。また炉跡の東側柱穴内から小貝層ブロックが検出された。黒褐色土が混じる混貝土層



第67図　住居跡SI13実測図(1)



第68図　住居跡SI13実測図(2)



第69図　住居跡SI13出土遺物

で、規模は径30.0×35.0cm、層厚10.0cmを測り、大型のハマグリとオキシジミを主体に、シオフキ、サルボウ、アカニシとヤマトシジミ、獣骨であるイノシシの小片、魚骨であるウナギ、エイが僅かに混入していた。

住居覆土や床面上より出土した土器は後期前半で、土器以外は検出できなかった。(第69図1～11)

1～3は深鉢胴部破片。1は多条化沈線を地文にキザミを施した隆帯を区画文とする。2・3は縄文を地文に、横位の平行沈線を区画文にして多条化沈線文を垂下させる。4は深鉢の口縁部破片。波状口縁を呈し、波頂部からC字状隆帯を垂下させる。5は胴部破片。無文地にC字状隆帯を貼り付ける。6は山形突起をもつ深鉢。横位の沈線文で区画された第一区画文を無文とし、区画下は縄文施文。7は瘤状隆帯上に沈線と隆帯による意匠文。8は口縁を無文帯とする第一次区画文の下に格子目状の条線を垂下させる。9・10は縄文地の深鉢、口縁部破片である。10は波状口縁となる。11は無文地に太沈線による意匠文。

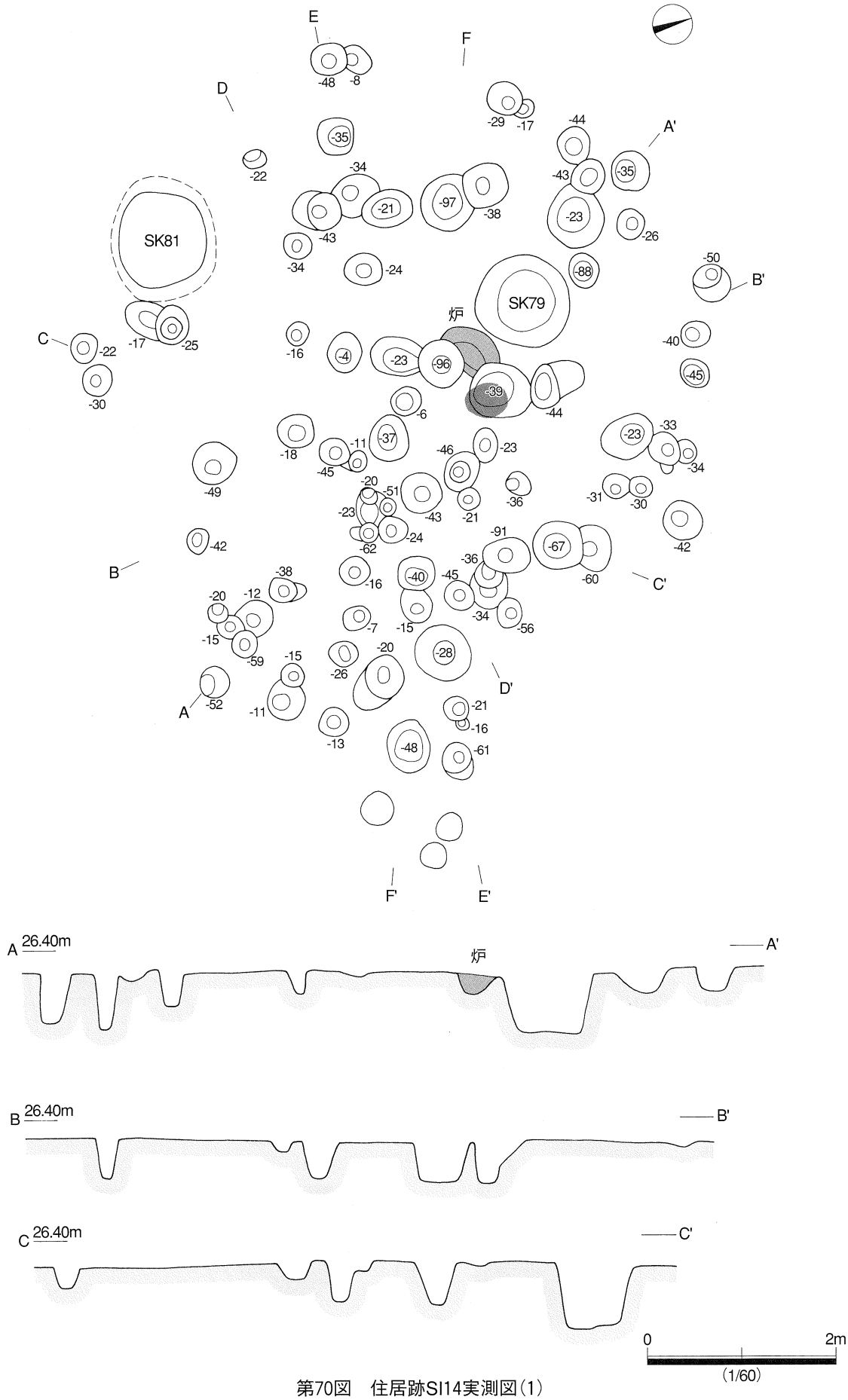
遺物は土器のみで全体的に少ないが、出土土器から本住居は堀之内1式新期であると判断できる。

第14号住居跡（SI14）（第70図～第72図）

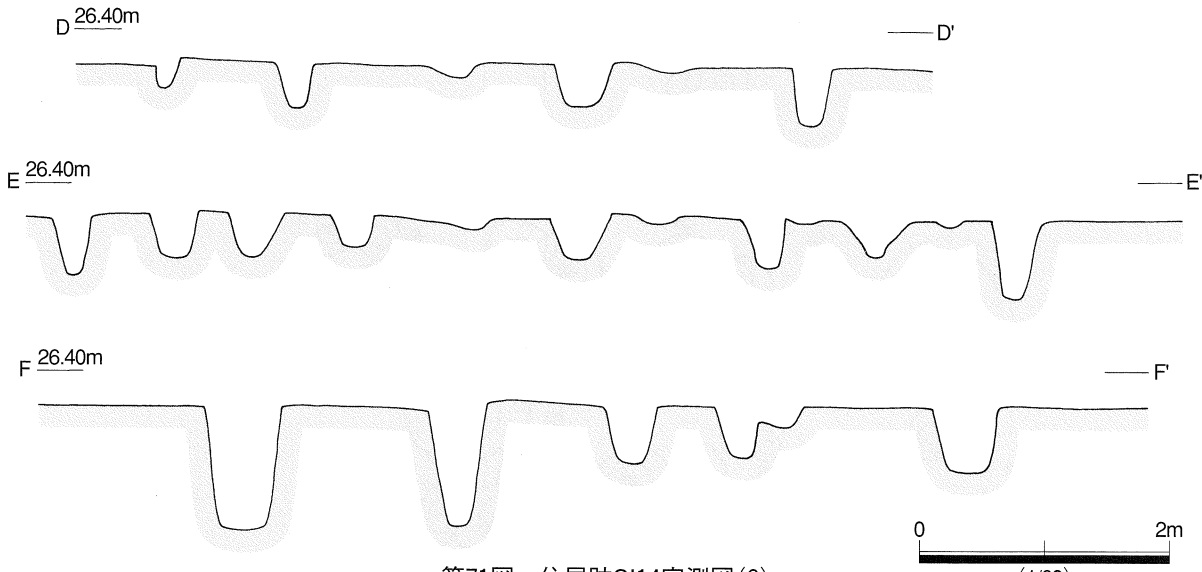
調査区中央、G－V、H－V区に位置し、東側でSI13と北側でSI29と接する。さらに住居跡内には2基の土坑（SK79、81）が重複している。壁はすでに削平され、炉跡・柱穴および床面の状況により住居跡と判断したが、明瞭な張出施設は確認できなかった。全体的に柱穴が密集し、これを手かがりに規模をみると東西軸7.76m、南北軸6.97mの楕円形を呈する。長軸線と炉跡を通る主軸方位はN－66°－Wを指す。壁はすでに削平されていたが、壁に沿って廻ると思われる壁柱穴が18本検出され、規模は径20.0～63.0cm、深さは8.0～52.0cmで、平均の深さは31.56cmを測る。居住内柱穴は60本検出されているが、間尺の合う主柱穴は特定できず、いずれも支柱穴として扱った。柱穴の大きさは径17.0～67.0cm、深さは4.0～97.0cmで、平均の深さは34.6cmを測る。炉跡は中軸線上やや北側寄りにある。長径50.0cm、短径43.0cm、深さ20.0cmの楕円形である。掘形は鍋底状に掘り窪めてあり、底面の平坦部は狭小で起伏がなく被熱により赤化硬化しており、覆土は焼土粒を多量に含む赤褐色土（5YR4/6）で覆われていた。床面は全体的に堅く締まり検出しやすかった。覆土は浅く黒褐色土（10YR3/1）の薄い単一層の状況を呈しており、自然堆積層であろう。また炉跡東側の柱穴内から小貝層ブロックが検出された。黒褐色土が混じる混貝土層で、規模は径20.0×25.0cm、層厚10.0cmを測り、ハマグリを主体とし、オキシジミ、シオフキ、サルボウのほか、イノシシとネズミの小骨片、魚骨としてイワシ、ニシン、ウナギ、ハゼ、エイが検出された。

住居覆土および床面上より出土した土器は縄文時代後期中葉の土器が主体である（第72図1～23）。1は深鉢の胴部破片。多重円形文から派生する意匠文。縄文を充填させる。粘土帯接合部にキザミが確認できる堀之内2式。2は口唇部に小突起を有する小型の深鉢。縄文地文に区切り沈線を伴う横帯文が巡る加曽利B1式。3～5は波頂部が三角形を呈する深鉢。3は口縁に沿って沈線区画内に2列の刺突文。曽谷式。4は縄文地文とし、口縁沿に沈線区画内に刺突文が施文される加曽利B3式。5は縄文地文に口縁に沿って2列の円形刺突文が施されている。6は平縁で口縁部に刻文帯が巡り、弧状沈線文。7は縄文地文に口縁部に沿って刻文帯が巡る。8は四条の横位沈線文、内面にも沈線文が巡る。9は胴部破片で、三角形区画文の頂部から懸垂文が垂下し、横位縄文帯を区画文とする。10は縄文地文に横位の枠状沈線を配する。11は口縁下を開け無文帯とし、紐線文が巡る堀之内2式。12は縄文地文に中位無文帯をもち、上下に格子文が施文され、内面に沈線が巡る。13～15・17は紐線文系土器。13は縄文地文に口縁下を開け紐線文が巡る。14は縄文地文に口縁下に紐線文が貼付けられ、上向弧線状の条線が施文され、内面に沈線が巡る。15は口縁下を開け、2条の紐線文が巡り、横位の条線が施文される。17は胴部破片。胴部中位に紐線文が巡り、縄文地文に弧線文が施される。16は縄文施文のみの深鉢。内面に沈線が巡る。18～21は深鉢の底部破片。18は網代底である。22・23は浅鉢の口縁部破片。22は口縁部がくの字状に内湾し、丁寧なミガキが施されている。口唇上部にキザミを施す。23は単口縁で素文であるが、肩部に外稜を有する。

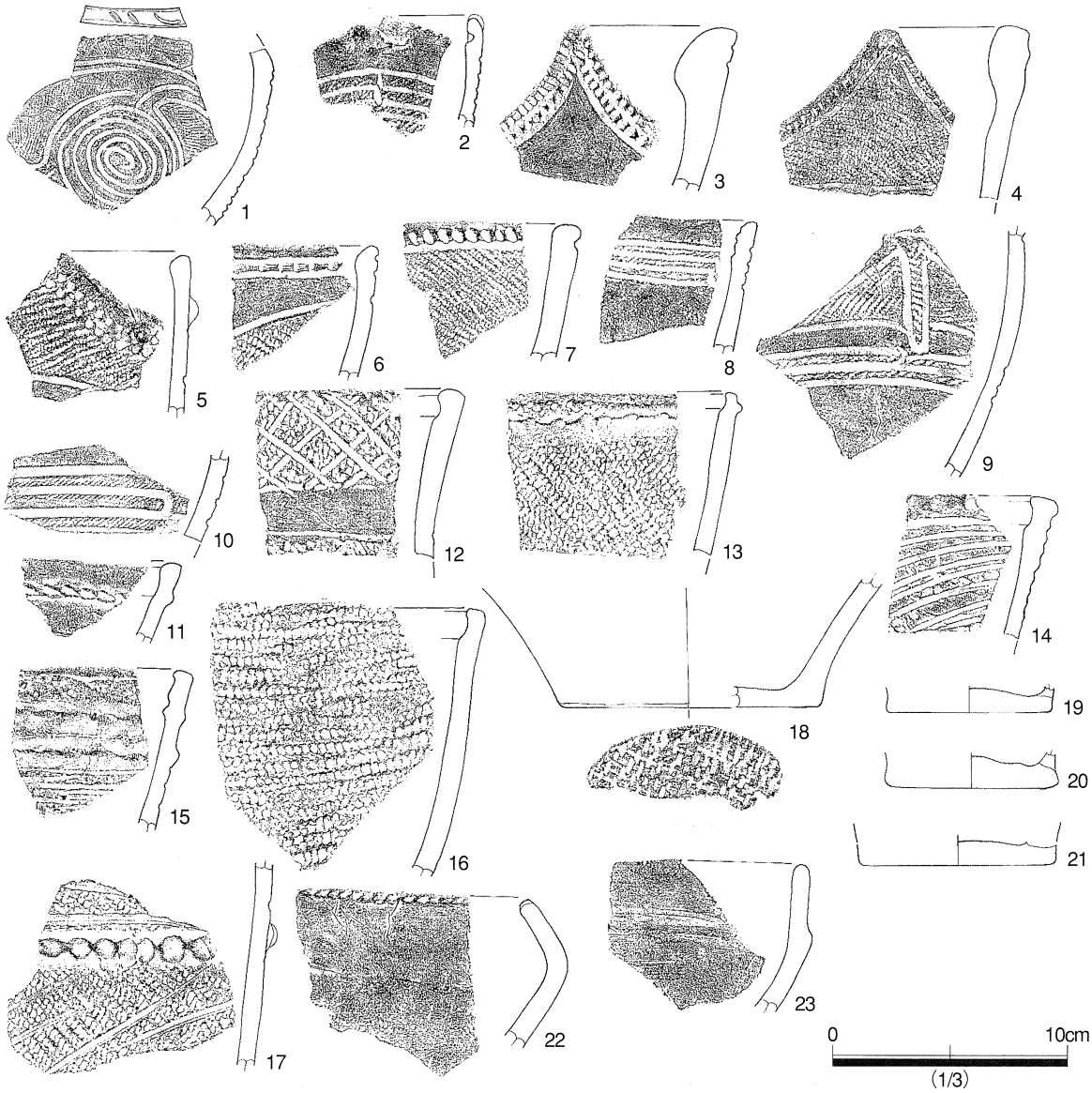
床面上から住居の時期を明示する遺物としては堀之内2式から加曽利B3・曽谷式期であり、主体は加曽利B2～3式期が中心であり、また住居の形態や炉の状況などからみて、本住居は加曽利B式後半期のものであると判断できる。



第70図　住居跡SI14実測図(1)



第71図　住居跡SI14実測図(2)



第72図　住居跡SI14出土遺物

第15号住居跡（SI15）（第73図）

調査区中央、G－Ⅲ・Ⅳ区に位置する。住居跡ほぼ中央で土坑SK156が切っている。壁はすでに削平され、炉跡・柱穴および床面の状況により住居跡と判断した。張出部はコの字状の掘り込みで南に向け、規模は入口部を含めた主軸である南北軸長5.09mを測り、居住主体部は南北軸4.33m、東西軸5.05mの東西にやや長い隅丸長方形を呈する。張出部と炉跡を通る主軸方位はN－13°－Eを指す。張出部は溝状遺構とピットの組み合わせによるコの字状張出部で、外側にピットにより区切られた開閉部がある。通路の長さ65.0cm、幅45.0cmを測る。壁はすでに削平されていたが、壁に沿って廻ると思われる壁柱穴が63本検出され、北壁や南西壁の一部に部分的な壁溝がみられる。壁柱穴の大きさは径16.0～46.0cm、深さは3.0～36.0cmで、平均の深さは19.57cmである。また住居内に柱穴17本が検出され、うち深さ50cm前後の４本は主柱穴であり、他は支柱穴であろう。支柱穴の大きさは径21.0～55.0cm、深さ11.0～62.0cmで、平均の深さは32.53cmである。炉跡は中軸線上の中央やや入口寄り（南側寄り）にある。半分以上は土坑SK156によって壊されているが、確認できる大きさは長径44.0cm、短径16.0cmの円形で、深さは3.0cmである。掘形は浅い皿状に掘り窪めてあり、底面は平坦で起伏がなく被熱により赤化硬化しており、覆土は焼土粒を多量に含む赤褐色土（5YR4/6）で覆われていた。床面は全体的に堅く締まり炉跡周囲を中心にとくに顕著であった。覆土は浅く黒褐色土（10YR3/1）の薄い単一層の状況を呈しており、自然堆積層であろう。

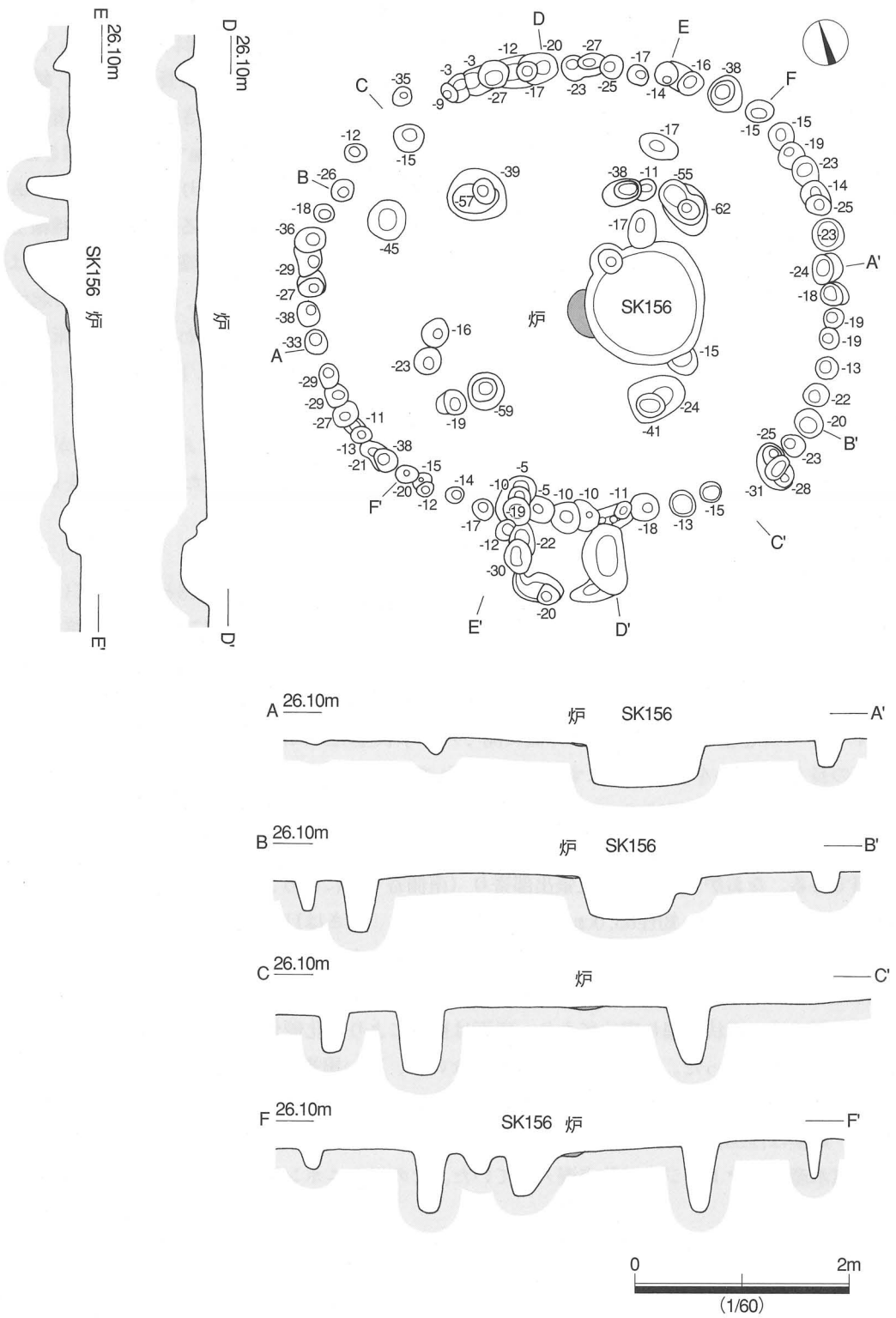
本跡は主柱穴、壁柱穴、張出部、炉跡ともに整い典型的な後・晩期の住居跡であるが、床面が直接検出されたため覆土はなく、また柱穴および炉跡内からも図示できる遺物の出土はなかったため、時期を確定できない。

第16号住居跡（SI16）（第74図・第75図）

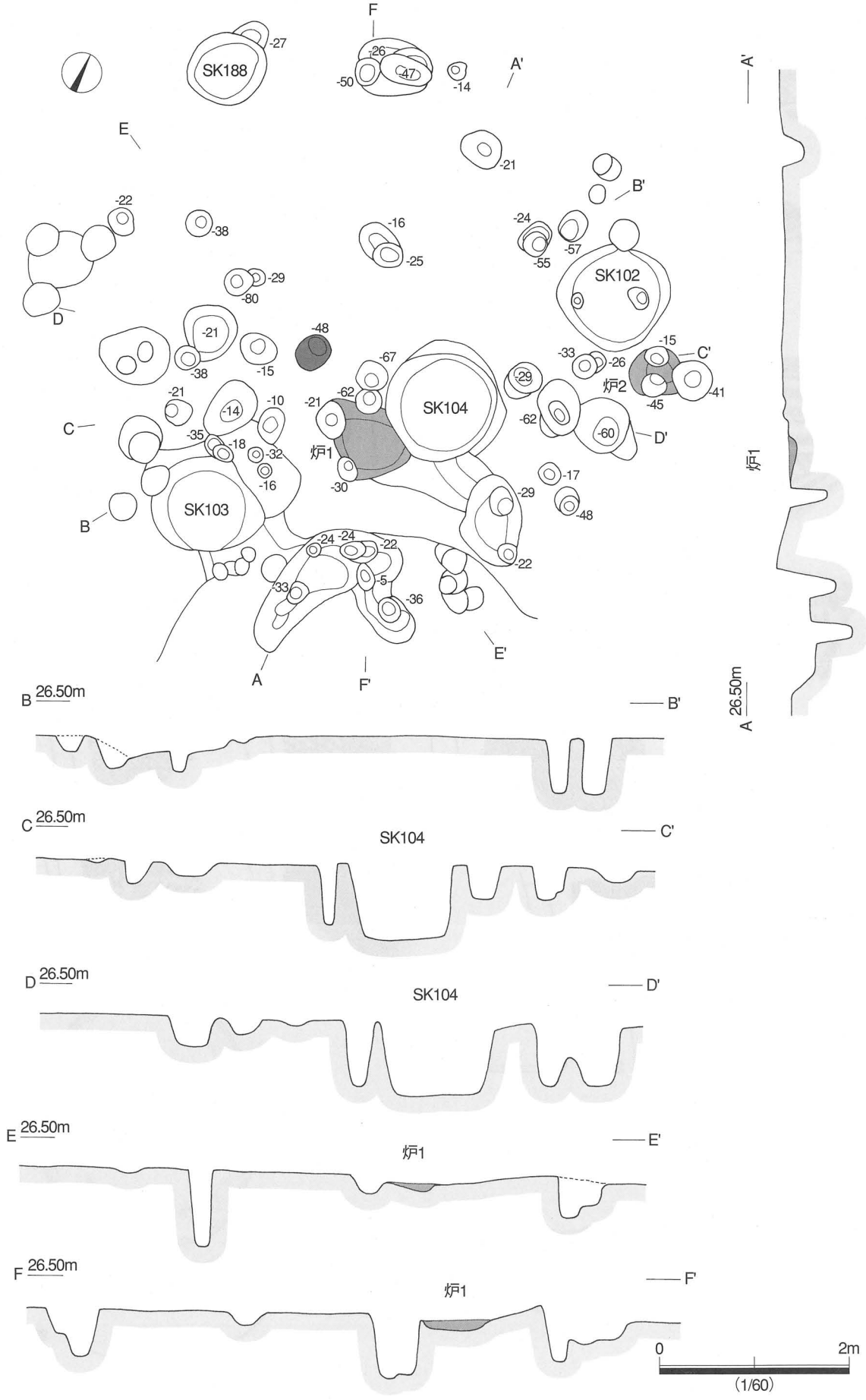
調査区中央、H－Ⅴ・Ⅵ区に位置し、南東側にSI02、南西側でSSI18、北側でSI13と隣接している。壁がすでに削平され、炉跡・柱穴および床面の状況により住居跡と判断した。なお住居内には４基の土坑（SK102、103、104、188）が重複している。入口施設と考えられる張出部を南に向け、規模は張出部を含めた主軸である南北軸長6.68m、居住主体部は南北軸5.50m、東西軸6.04mの東西に長い楕円形を呈する。張出部と炉跡を通る主軸方位はN－25°－Wを指す。張出施設は外側に開くハの字状土坑入口部で、土坑内にはピットが５基穿ってある。通路の長さ120.0cmを測る。壁はすでに削平されていたが、壁に沿って廻ると思われる間隔の開く壁柱穴が42本検出され、大きさは径15.0～74.0cm、深さは10.0～67.0cmで、平均の深さ32.88cmを測る。炉跡は２基確認されるものの、新旧関係ではなく、とくに炉２は壁際に位置するため別遺構の可能性もあり所在等を含め性格は不明である。なお炉１は中軸線上張出部寄り（南側寄り）にあり、一部土坑SK104によって切られているが、大きさは長径100.0cm、短径65.0cm、の不整円形を呈し、深さは11.0cmである。掘形は浅い皿状に掘り窪めてあり、底面は平坦で起伏がなく被熱により赤化硬化しており、覆土は焼土粒を多量に含む赤褐色土（5YR4/6）で覆われていた。住居跡東端に位置する炉２は長径47.0cm、短径45.0cmの円形を呈し、深さは12.0cmである。やはり掘形は浅い皿状に掘り窪めてあり、底面は被熱により赤化硬化している。床面は全体的に堅く、炉１周辺の硬化は顕著であった。覆土は浅く明瞭ではないが、薄い黒褐色土（10YR3/1）の単一層の状況を呈しており、自然堆積層であろう。また炉跡の北西側柱穴内から小貝層ブロックが検出された。黒褐色土が混じる混貝土層で、規模は径20.0×35.0cm、層厚15.0cmを測り、ハマグリを主体に、オキシジミとシオフキ、アカニシを含み、汽水産のヤマトシジミが数点混入していた。そのほかニホンジカの小骨片、魚骨としてウナギ、ハゼ、タイが検出された。

住居跡床面上より縄文土器、打製石斧１点・磨石類の石製品１点、骨角器１点であるヤスの破片が出土している（第75図１～30）。

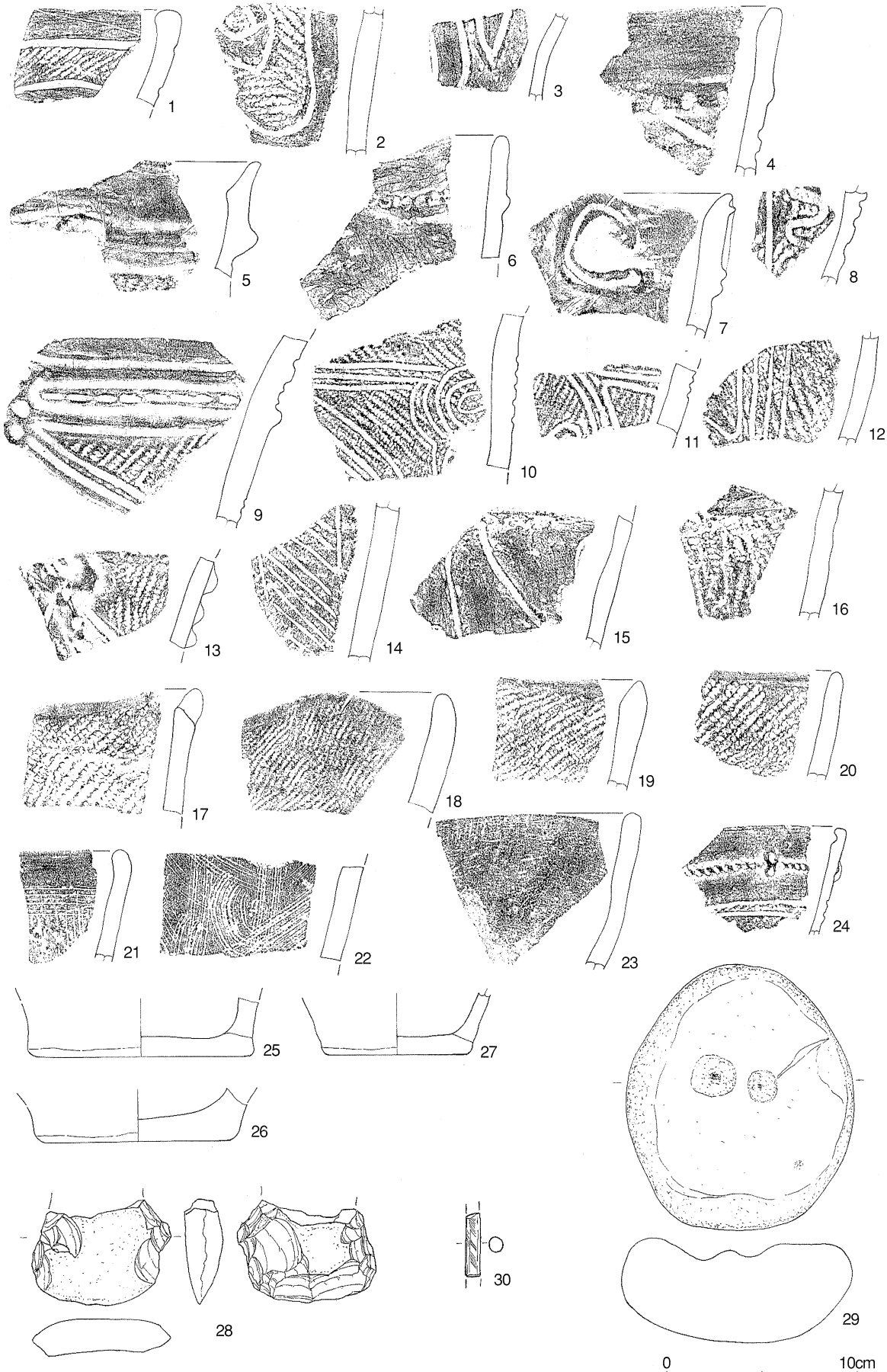
１～３は称名寺式で、１はやや内湾する口縁部破片。２本の平行描線による帯状意匠文で、縄文を充填している。２は胴部破片。二本の平行沈線に縄文が充填する。全体は不明であるが下部J字文鉤部であろう。３は沈線文のみの意匠文である。４～23は後期前半堀之内１式である。４は口縁部を無文帯とし、隆帯によって区画され、隆帯上には円形列点文が施文されている。胴部は沈線による意匠文。５は口縁部が尖頭状を呈しわずかに外反する。隆帯区画され、無文帯となる。胴部は縄文地文。６は大型の波状口縁を呈する深鉢。口縁部は



第73図　住居跡SI15実測図



第74図　住居跡SI16実測図



第75図　住居跡SI16出土遺物

無文帯となり、隆帯区画され、隆帯上には刺突文が施文される。７は口縁部で、無文地に背割り隆帯によるC字文を貼付ける。８～16は深鉢の胴部破片。８は縄文地文に蕨手文を垂下させる。９は大型の深鉢で頸部付近の破片。横位の隆帯区画文の中央に刺突文が巡り、交点に８の字状の盲孔を配し、沈線による意匠文を施す。10～13は縄文地文に沈線による意匠文を描出するもので、13は貼付隆帯による区画文。14は沈線区画文内に斜行沈線を充填する。15は沈線区画文。17～20は縄文系の粗製土器である。17は口縁部に小突起を有し、18は波状口縁である。いずれも単口の深鉢である。21・22は櫛状工具による条線文が施文されるもので、21は格子状に、22は弧状が加わる。23は無文の浅鉢となろう。24は堀之内２式。口縁下に８字状貼付文を伴う紐線文を巡らし、磨消縄文による幅狭の帯縄文。25～27は深鉢の底部破片。

28・29は石製品である。28は砂岩製の打製石斧である。分銅形で約1/3程の破損品である。両面に原礫面を残置する円礫を素材とし加工を施している。抉り部は比較的丁寧に施している。現存長4.725cm、幅7.335cm、厚さ1.774cm、重さ98.0ｇを測る。29は凝灰質砂岩製の凹孔部を伴う磨石である。表面には径２cm前後の凹孔部を有し、比較的浅い凹面研磨面をもち、裏面は凸面研磨面で、小凹孔部を穿つ。長さ14.375cm、幅11.966cm、厚さ6.49cm、重さ1,331.0ｇを測る。30はシカの中手・中足骨を素材とするヤス状刺突具であるが、両端部を欠損しており原形については不明である。断面形はほぼ円形を呈し、全体的に斜行する研磨痕が認められる。現存長3.25cm、最大径0.712cm、重さ1.20ｇを測る。

全体的遺物量は限定されているが、出土土器から本住居は堀之内１式期のものであると判断できる。

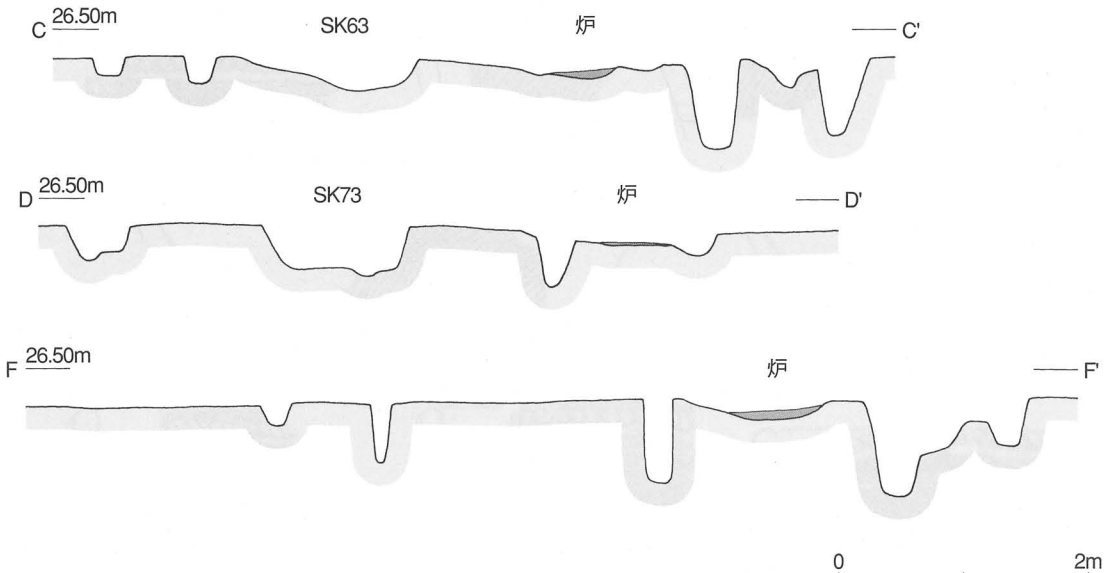
第17号住居跡（SI17）（第76図～第79図）

調査区中央、G－Ⅴ・Ⅵ区に位置し、北東側でSI14、南東側でSI18、南西側でSI19と隣接している。壁がすでに削平され、炉跡・柱穴および床面の状況により住居跡と判断した。入口施設と考えられる張出部を南に向け、規模は張出部を含めた主軸である南北軸長7.72ｍを測り、居住主体部は南北軸6.45ｍ、東西軸6.40ｍの円形を呈するものと推定される。張出部と炉跡を通る主軸方位はN－30°－Wを指す。張出施設は外側へハの字状開く土坑張出部で、外側も溝により区切られた開閉部があり、施設内にはピットが付帯する。通路の長さ125.0cm、最大幅105.0cmを測る。壁はすでに削平されていたが、壁に沿って廻ると思われる間隔の開く壁柱穴が18本検出され、柱穴は56本検出され、規模は径14.0～60.0cm、柱穴の深さは10.0～93.0cmで、平均の深さは33.41cm前後を測る。炉跡は中軸線上入口部に接する南側にある。大きさは長径92.0cm、短径80.0cmの楕円形を呈し、深さは13.0cmである。掘形は皿状に掘り窪めてあり、底面は平坦で起伏がなく被熱により赤化硬化しており、覆土は焼土粒を多量に含む赤褐色土（5YR4/6）で覆われていた。床面は全体的に堅く締まり検出しやすかった。とくに炉跡の周囲し北側の硬化面が著しかった。住居跡覆土は全体的に浅く、薄い黒褐色土（10YR3/1）の単一層の状況を呈しており、自然堆積層であろう。また住居跡の北西側柱穴内から小貝層ブロックが検出された。黒褐色土が混じる混貝土層で、規模は径15.0×15.0cm、層厚5.0cmを測り、サルボウを主体にハマグリ、オキシジミが含まれ、僅かにアカニシが混入し、ヤマトシジミが比較的多く含まれ、魚骨としてウナギ、タイ、スズキ、ハゼが検出された。

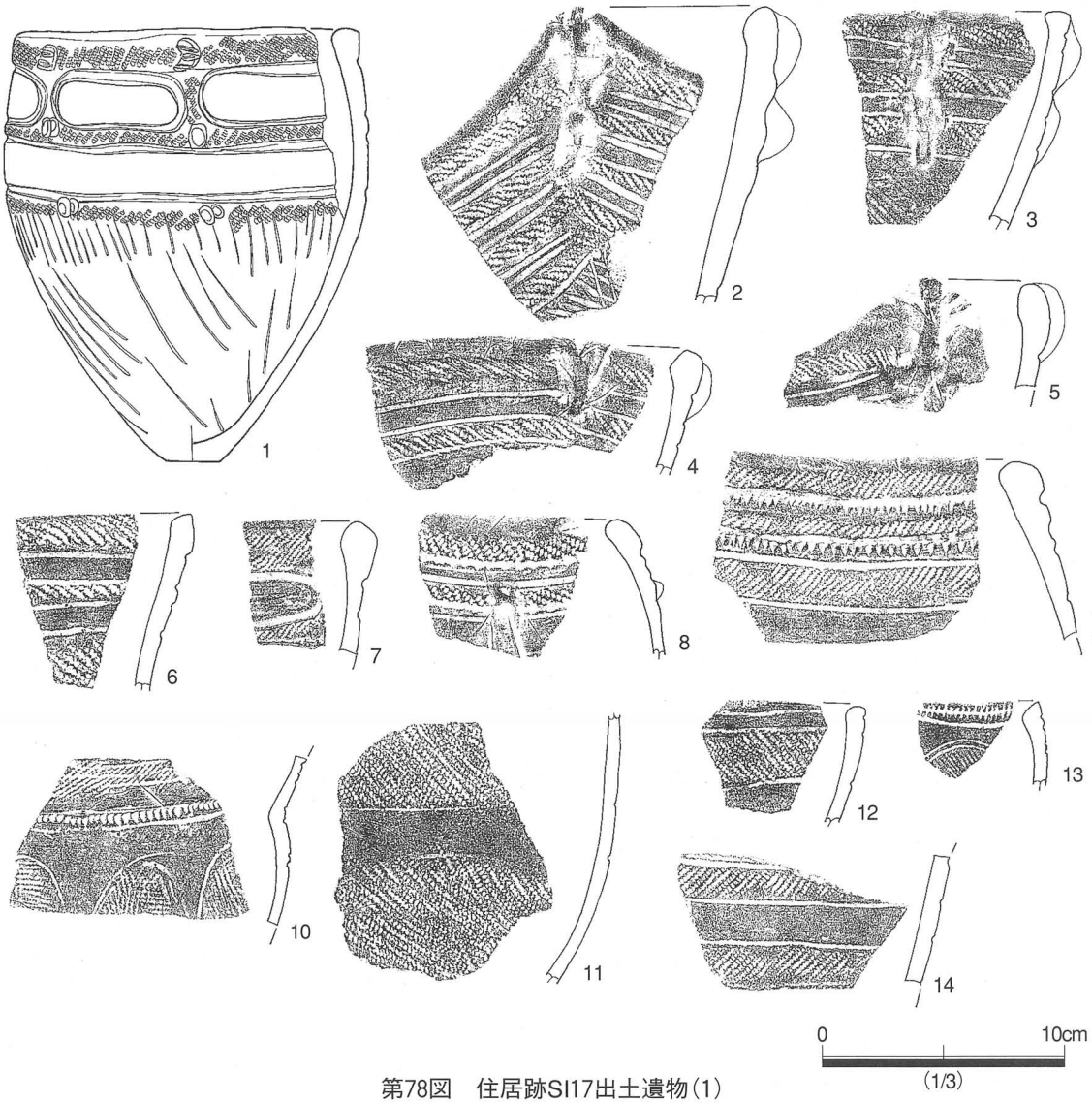
住居覆土および床面上より出土した土器は後期後半の土器が主体となり、製塩土器も含まれる。その他土製品として球状土製品１点。石製品として磨石１点が出土している（第78図１～14、第79図15～37）。

１はほぼ完形品で、砲弾形を呈する小型深鉢である。口径14.2cm、器高17.6cm、底径2.5cmを測る。２段の隆起帯縄文は沈線による楕円形枠状文によって区画され、枠状区画文の起点となる隆起帯上の上下に円形貼瘤が付される。また胴部中位は沈線により上下を区画し、下部に縦位の粗い弧状条線が施文される。２は波状口縁の深鉢。波頂部が三角形状の山形を呈し、直下より２段の縦長貼瘤を有する。さらに隆起縄文帯を４段施されている。３～７は平縁の隆起帯縄文を伴うもので、３は口縁下から隆起帯縄文が３段巡り、縦長の貼瘤が縦位に連携して付されている。４・５の縦長貼瘤は１段のみであるが、４は貼瘤を起点に隆起帯縄文が施されており、貼瘤を境に縄文帯の喰い違いがみられる。５の貼瘤は下部へ連携していくかもしれない。６・７は隆起帯縄文のみの破片。７は枠状区画文を呈する。８～10・13は瓢形土器で、８・９は口縁部破片。口縁部が大きく内傾して立ち上がる。２条の隆起帯縄文とこれに沿って刻文帯が施文され、８の縄文帯上に円形貼瘤が付され、９

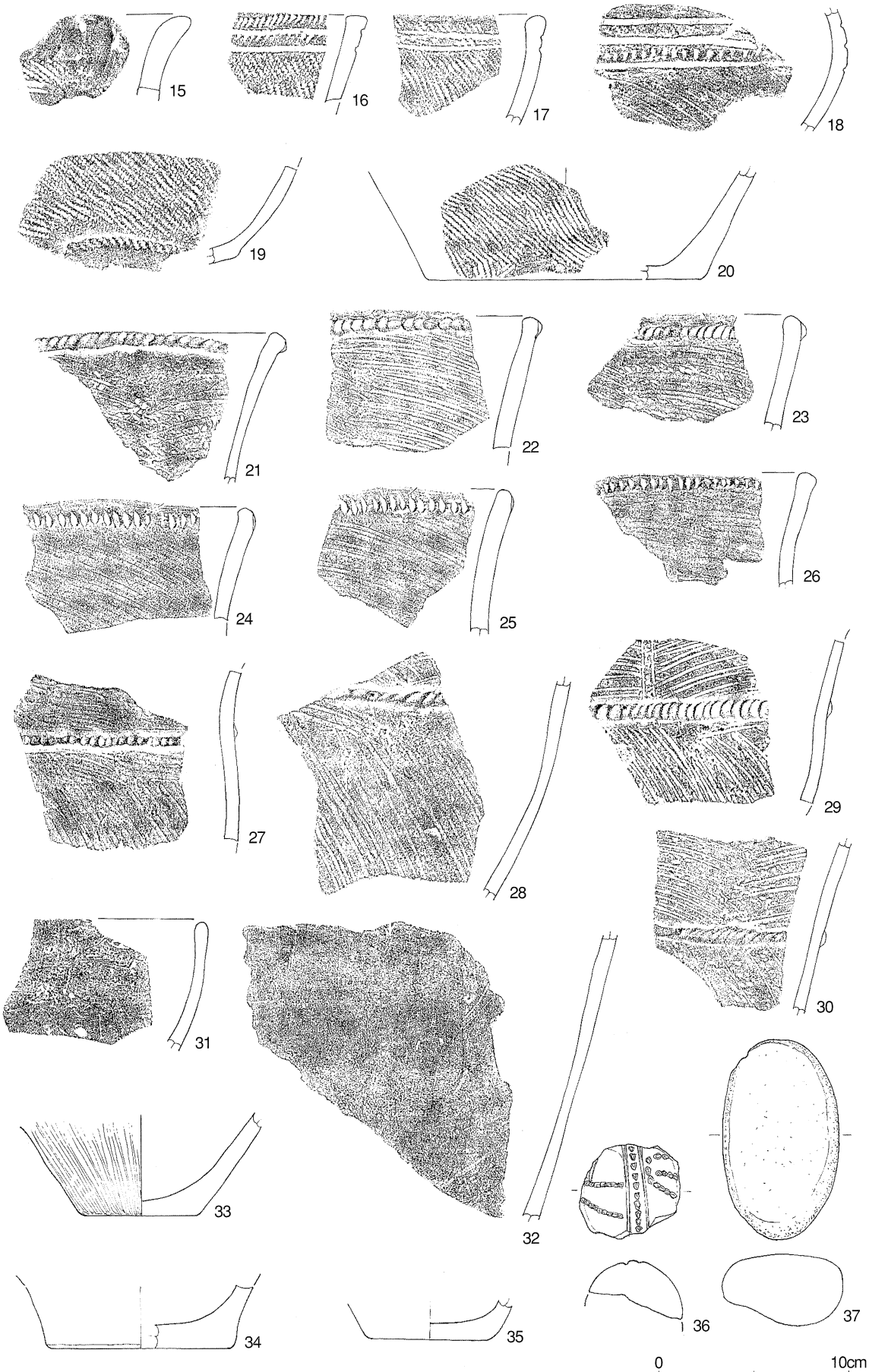
第76図　住居跡SI17実測図(1)



第77図　住居跡SI17実測図(2)



第78図　住居跡SI17出土遺物(1)



第79図　住居跡SI17出土遺物(2)

の頚部には沈線区画の縄文帯が巡る。13は口縁下の２条の沈線内に刺突文が連続し、磨消弧線文が配される。10は胴部破片。胴中位の括れ部に刻文帯を巡らし区画文とし、これを境に文様帯が分帯される。胴上部は帯縄文、下部は弧線文が描かれる。曽谷式。11は深鉢胴部破片。弧線文が施文される。12は口縁部破片。帯縄文が巡る。14も胴部破片で帯縄文が巡る。15は山形突起の口縁部は外反する。16・17は縄文地文に口縁下に平行沈線が巡る。18は瓢形の胴部中位の破片。３条の平行沈線の下段にキザミを充填させる。19は鉢の底部破片。底部下端が隆帯状に突出し、縄文施文されている。20は深鉢の底部。縄文施文である。21～30は紐線文系の粗製土器である。24～26はキザミを連続させて巡らし、23・28～30は指頭による圧痕、21・22・27は連続する指頭による圧痕が巡る。31･32は製塩土器。31は口縁部破片。口唇部は丸みを呈している。33～35は粗製深鉢の底部破片。

36は球状土製品で、全体の約1/3が残存しているが、穿孔されていたかは不明である。現存はほぼ球形を呈し、中央の平行沈線間に刺突文を充填させ、これを中心に連続する刺突列文を左右に配する。現存長4.984cm、幅5.226cm、現厚さ3.026cm、重さ52.0ｇである。37は安山岩製の磨石。図表面に磨面が確認される以外使用痕は認められない。長さ10.404cm、幅6.258cm、厚さ3.741cm、重さ388.0ｇを測る。

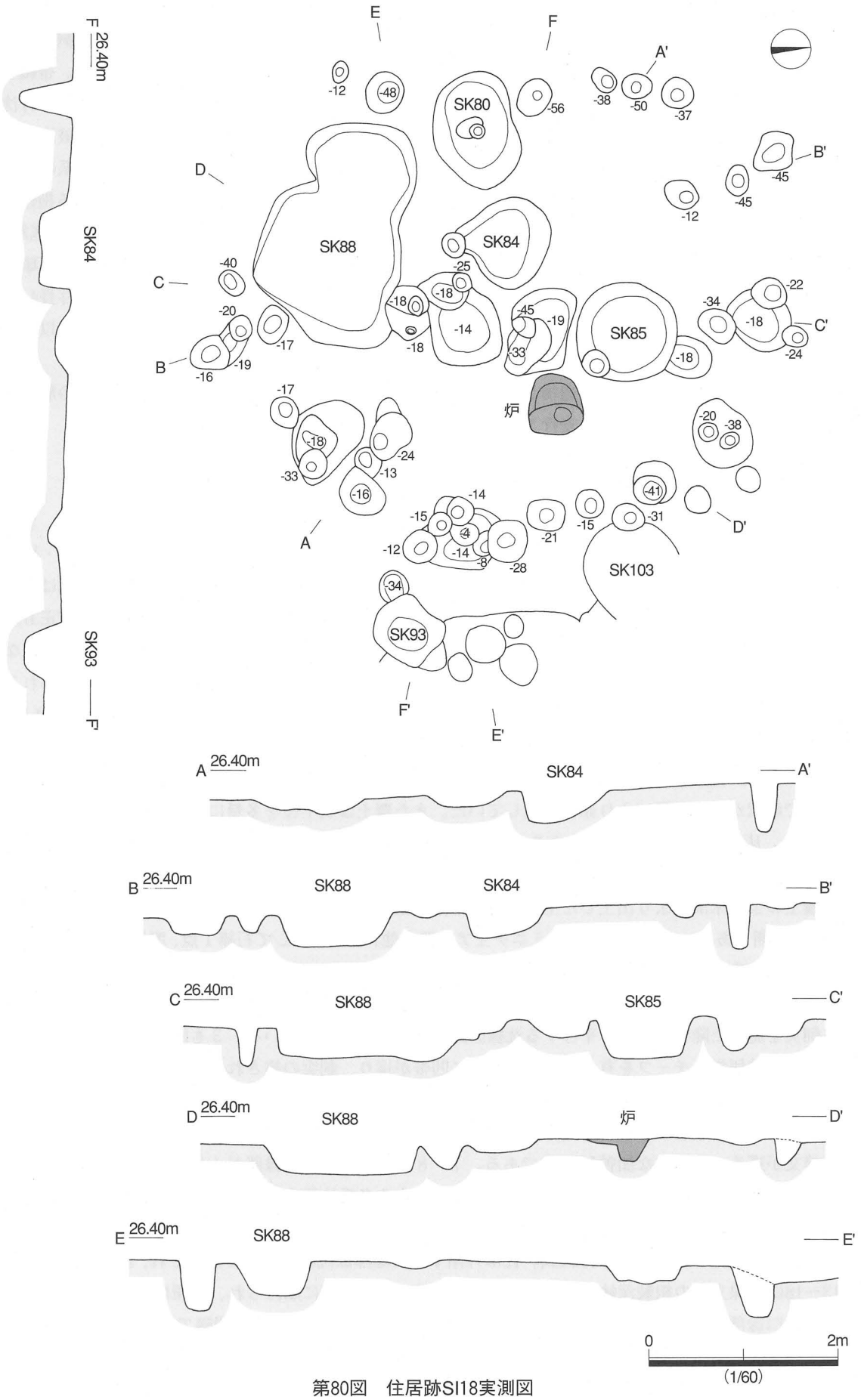
床面上から住居の時期を明示する遺物としては曽谷式から安行１式期が中心であり、また住居の形態や炉の状況などからみて、本住居は曽谷・安行１式期のものであると判断できる。

第18号住居跡（SI18）（第80図・第81図）

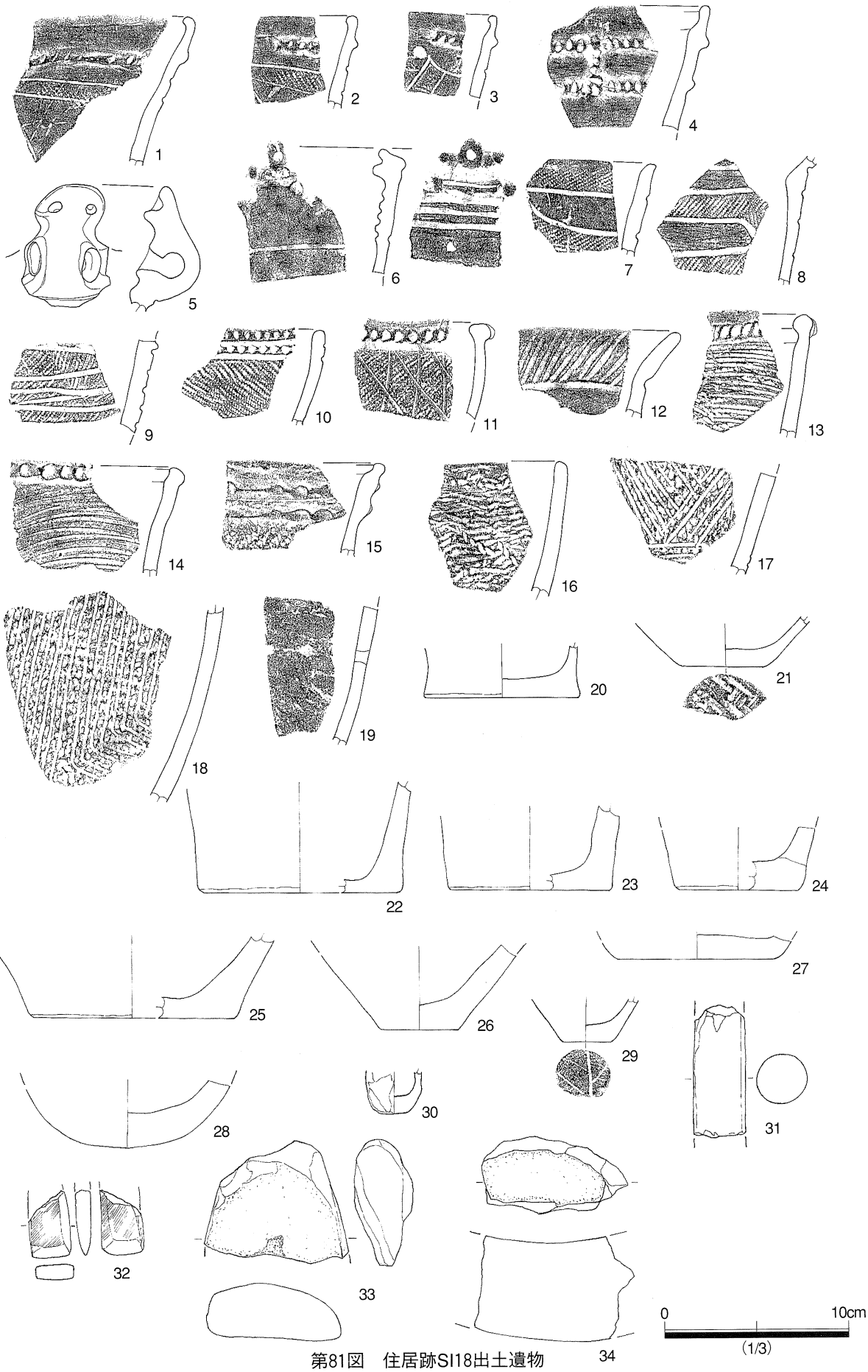
調査区中央、G－Ⅵ、H－Ⅵ区に位置し、北側でSI16、東側でSI02、北西側でSI17と隣接している。また住居跡内には６基の土坑（SK80、84、85、88、93、103）が重複している。壁はすでに削平され、炉跡・柱穴および床面の状況により住居跡と判断した。入口施設と考えられる張出部の一部が南側に位置し、規模は張出部を含めた主軸である南北軸長が6.42ｍを測る。また居住主体部は南北軸5.25ｍ、東西軸5.60ｍのほぼ正方形を呈する。張出部と炉跡を通る主軸方位はN－９°－Eを指す。張出施設は南端にピットと溝を伴う小規模なもので、形状的に張出部施設であるか問題が残る。壁はすでに削平されていたが、壁に沿って廻ると思われる壁柱穴が36本巡り、柱穴は12本検出され、規模は径10.0～86.0cm、柱穴の深さは4.0～50.0cmで、平均の深さは24.52cm前後を測る。炉跡は住居中央やや東寄りにある。大きさは長径62.0cm、短径53.0cmの隅丸方形を呈し、深さは23.0cmである。掘形は２基重複のようにみえ、浅く皿状に掘り窪めた部分とやや深掘りした部分があり、底面は平坦で起伏がなく被熱により赤化硬化していた。また覆土は焼土粒を多量に含む赤褐色土（5YR4/6）で覆われていた。床面は全体的に堅く締まり、炉跡周囲はとくに顕著であった。覆土は全体的に浅く黒褐色土（10YR3/1）の薄い単一層の状況を呈しており、自然堆積層であろう。

住居覆土および床面上より出土した土器は後期中葉の土器で、堀之内２式期から加曽利B3式期であり、主体は加曽利B式期である。また製塩土器やミニチュア土器の他、石製品として石棒１点、磨製石斧１点、磨石類１点、石皿１点が出土している（第81図）。

１～４は堀之内２式で、１～３は口辺部がわずかに内湾する朝顔形の深鉢で口縁部破片である。１・２は口辺部に刺突を施した隆帯が巡り、平行する沈線区画内に縄文を充填している。３も同様に隆帯が巡り、口縁部は沈線による幾何学モチーフを有する。４は内面に凹帯が巡り、刺突の施された隆帯が平行して貼付けられ、この横位の隆帯間に縦位の隆帯を連結させる。５～19は加曽利B式である。５は波状口縁を呈する深鉢の突起部破片。６は小突起を有する精製深鉢の口縁部破片。外面は沈線による横位区画文が施文され、内面は３本単位の沈線文が巡る、典型的な加曽利B1式である。７・８は同一個体。口縁部がくの字状に外反し、沈線区画による縄文帯と無文帯をもつ。９は縄文地文に横位に平行する多重沈線文を施文する。10は平縁で、口辺部に二重の連続刺突文を巡らす。11は体部が内湾する深鉢。口辺部に刻目のある隆帯が巡り、体部は縄文地文に沈線による格子目文が施される。加曽利B2式。12は外傾する口縁部は沈線によって区画され、斜行沈線が充填される。13～18は紐線文系の粗製深鉢である。13・14は紐線文が口辺部に貼付られ、指頭により押圧が加えられている。15は口縁部に２列の紐線文が巡る。紐線文は細めで指頭押圧が疎らな間隔で施文される。16は縄文地文。17・18は同一個体。縄文地文に半截竹管文による集合沈線文を施文する。19は製塩土器の胴部破片。20～29は底部破片。28は丸底を呈する鉢形であろう。また29は製塩土器である。底面に木葉痕を残置している。30



第80図　住居跡SI18実測図



第81図　住居跡SI18出土遺物

は鉢形のミニチュア土器で、口縁部を欠損している。手捏によるナデ成形で仕上げている。

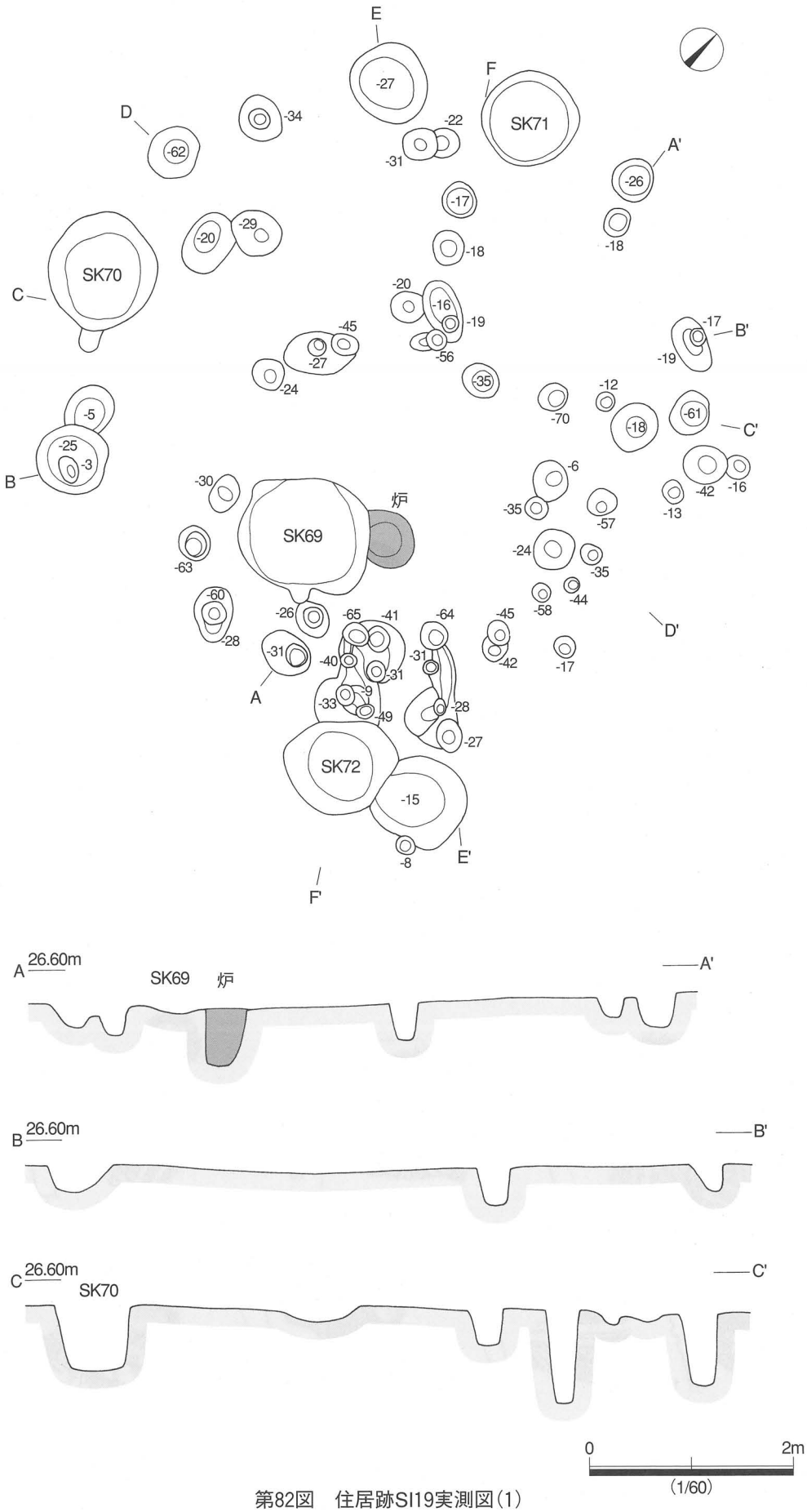
31～34は石製品である石棒・小型磨製石斧・磨石・石皿である。31は石棒の身部破片。断面はほぼ円形に研磨している。現存の長さ7.194cm、径2.738cm、重量91.0ｇを測る。32は蛇紋岩製の小型磨製石斧の刃部破片である。定形式を呈し、丁寧な作出である。また表裏面、側面の研磨痕は明瞭である。現存の長さ3.585cm、幅2.210cm、厚さ0.822cm、重量9.8ｇを測る。33は安山岩製の磨石で約半分を欠損している。表面の研磨痕は均一で、丁寧な作業痕を呈している。現存の長さ6.839cm、幅7.712cm、厚さ3.039cm、重量189.0ｇを測る。34は安山岩製の石皿小破片である。作業面である皿部で、使用頻度は高く研磨痕は顕著である。現存の長さ3.831cm、幅8.108cm、厚さ5.637cm、重量271.0ｇ。床面上から住居の時期を明示する遺物としては後期中葉の堀之内２式期から加曽利B2・３式期であり、本住居は加曽利B2・３式期と推定される。

第19号住居跡（SI19）（第82図～第86図）

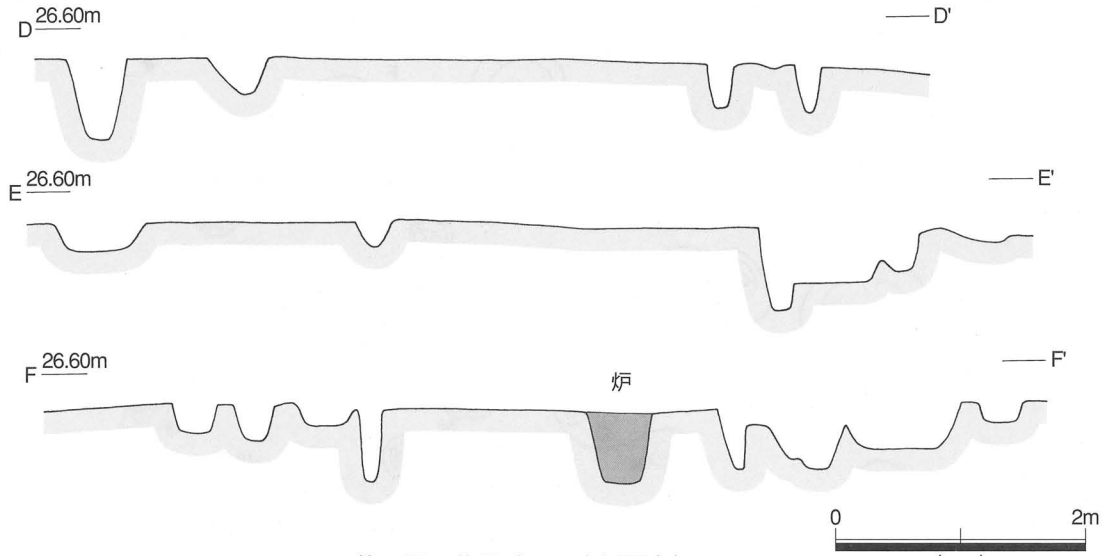
調査区南西側、F－Ⅵ、G－Ⅵ区に位置し、北側でSI17、南側でSI20、南西側でSI22と隣接している。また住居跡内には４基の土坑（SK69、70、71、72）が重複している。壁はすでに削平され、炉跡・柱穴・入口部および床面の状況により住居跡と判断した。入口施設と考えられる張出部を南に向け、規模は張出部を含めた主軸である南北軸長7.74ｍを測る。また居住主体部は南北軸6.17ｍ、東西軸6.92ｍの円形を呈する。張出部と炉跡を通る主軸方位はN－46°－Wを指す。張出施設は平行する溝状張出部で、溝内にピットが穿ってある。また外側の開閉部は浅い土坑状である。通路の長さ220.0cm、幅54.0cmを測る。壁はすでに削平されていたが、壁に沿って廻ると思われる間隔の開く壁柱穴が36本検出され、柱穴は23本検出され、規模は径14.0～77.0cm、柱穴の深さは3.0～63.0cmで、平均の深さは30.17cm前後を測る。竪穴の内側へ向って傾斜しているものがいくつかあった。炉跡は中軸線上入口寄りにある。長径54.0cm、短径42.0cmの円形を呈し、深さは55.0cmである。掘形は円筒状に掘り窪めてあり、底面は平坦で被熱により赤化硬化しており、覆土は焼土粒を多量に含む赤褐色土（5YR4/6）で覆われていた。床面は全体的に堅く締まり、とくに炉跡周囲は顕著であった。覆土は全体的に浅く黒褐色土（10YR3/1）の薄い単一層の状況を呈しており、自然堆積層であろう。

住居覆土および床面上より出土した土器は後期前半の土器で、称名寺式期から堀之内１式期であり、主体は堀之内１式期である。また土製品として土器片錘６点、石製品として磨製石斧１点、砥石１点が出土している。（第82～86図）。

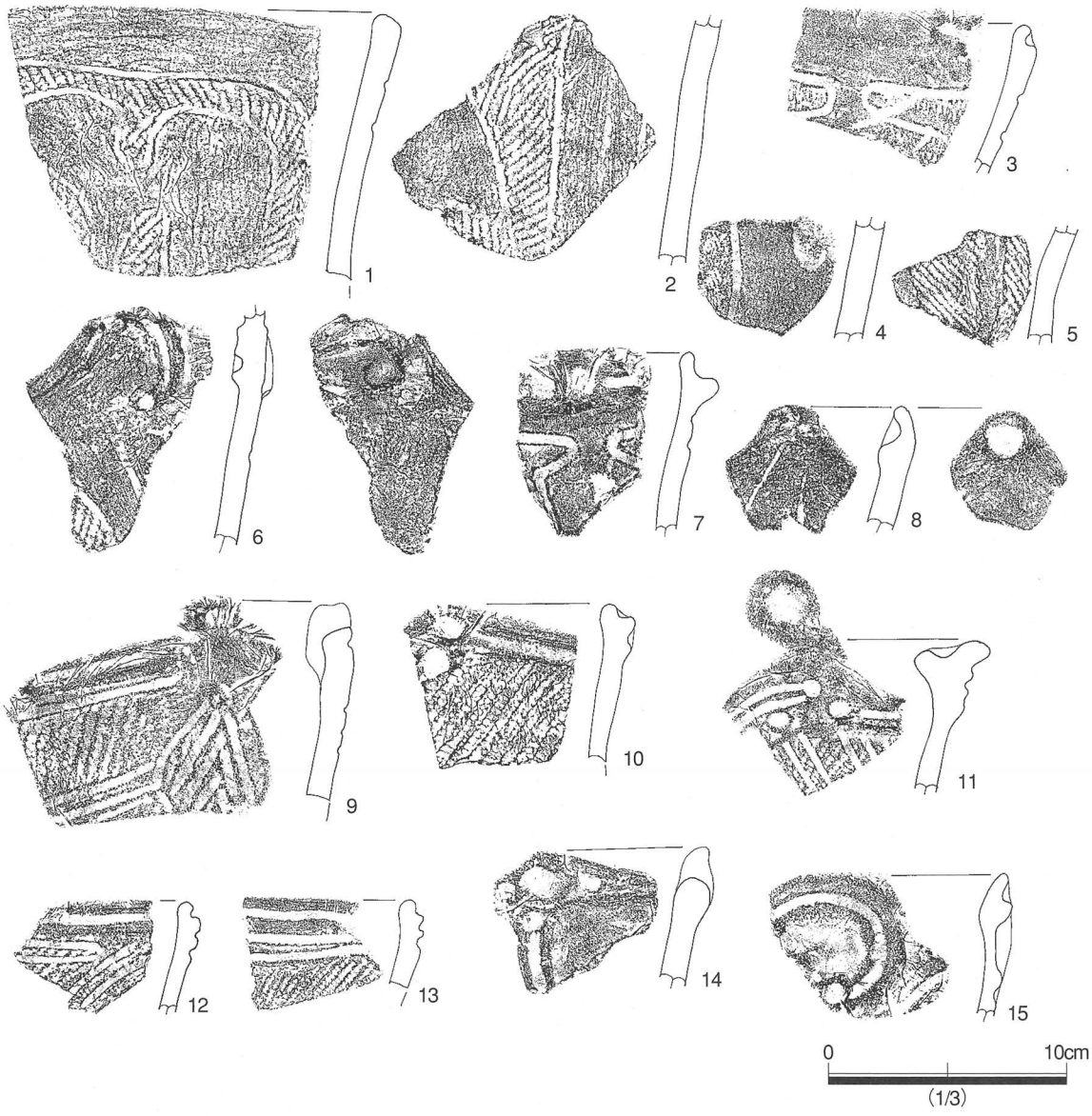
１～７・30は称名寺式である。１～４、６・７は２本単位の平行描線による帯状部意匠描出文様モチーフである。１は大型の平縁深鉢で連結されたJ字文で下端は不明であるが、上端は横位連結帯となる。２もJ字文であろう。３・７はスペード文を抽出している。６は波状口縁で、波頂部に背割り隆帯によるC字文が垂下する。内面に盲孔がみられる。30は帯縄文内に列点文を施す。５は微隆起帯が懸垂文として垂下する。８～29・31～51は堀之内１式である。８～21は口縁部破片である。８は波状口縁の深鉢。波頂部内面に盲孔があり、外面は沈線による文様モチーフ。９は波頂部に小突起を有し、縄文地文に沈線による意匠文を描く。10も波状口縁。口唇部に凹帯が巡り、波頂部には８の字状の盲孔が穿ってある。11も波状口縁。波頂部に凹孔部を有し、肥厚する。口縁部は沈線区画され、縄文地文に沈線が施文される。12・13は口辺部に平行して沈線を巡らし、縄文地文である。14は波状口縁で口縁部に背割り隆帯を垂下させる。15はC字状背割り隆帯をもつ。第85図16は眼鏡状把手を有する。17は波状口縁で、口唇内側が突出する。18は小突起をもち、口辺部に凹帯が巡る。19は小型の波状口縁を呈する深鉢。波頂部から隆帯上に刺突が施された懸垂文が垂下する。20は大型で平縁の深鉢。縄文地文に４本単位の沈線文による意匠文が施される。21も口縁部が外傾して立ち上がる深鉢。縄文地文に半截竹管による平行沈線の区画文。22は口辺部が僅かに内湾する深鉢。多条化沈線による意匠文。23～29、31～34は深鉢の胴部破片。縄文地文に沈線による意匠文が施文される。23は指頭押圧が加えられた貼付隆帯が垂下する。31は肋骨文様。35は３本単位の沈線による懸垂文。36～42は条線および沈線施文の胴部破片。36～41は櫛歯状工具による条線による意匠文。41は渦巻文を描出する。42は単沈線による格子目状文。第86図43～49は縄文系粗製深鉢である。43は山形状小突起を有する。44は波状口縁となろう。50・51は無文土器で、51は浅鉢になろう。52～60は底部破片である。



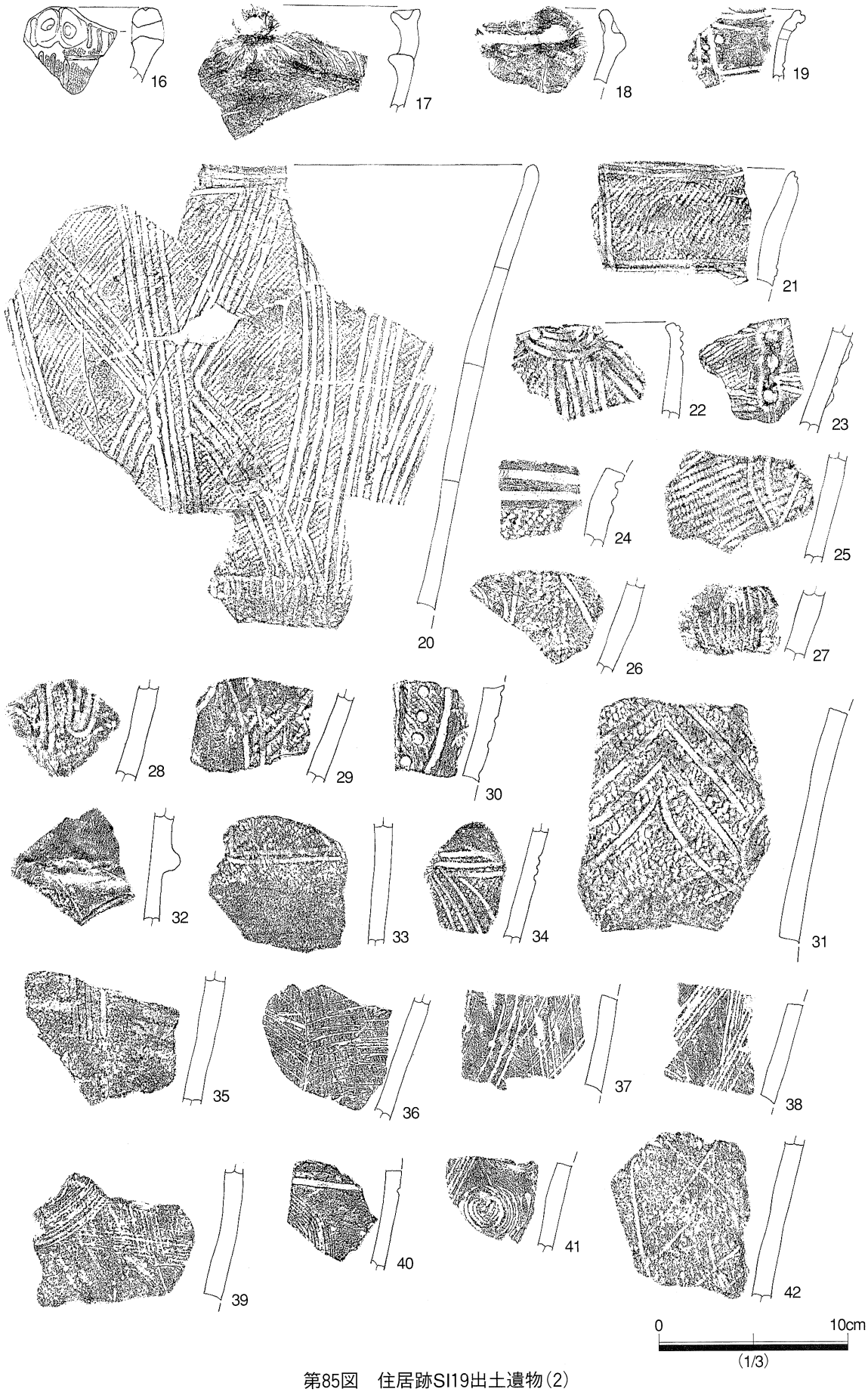
第82図　住居跡SI19実測図(1)



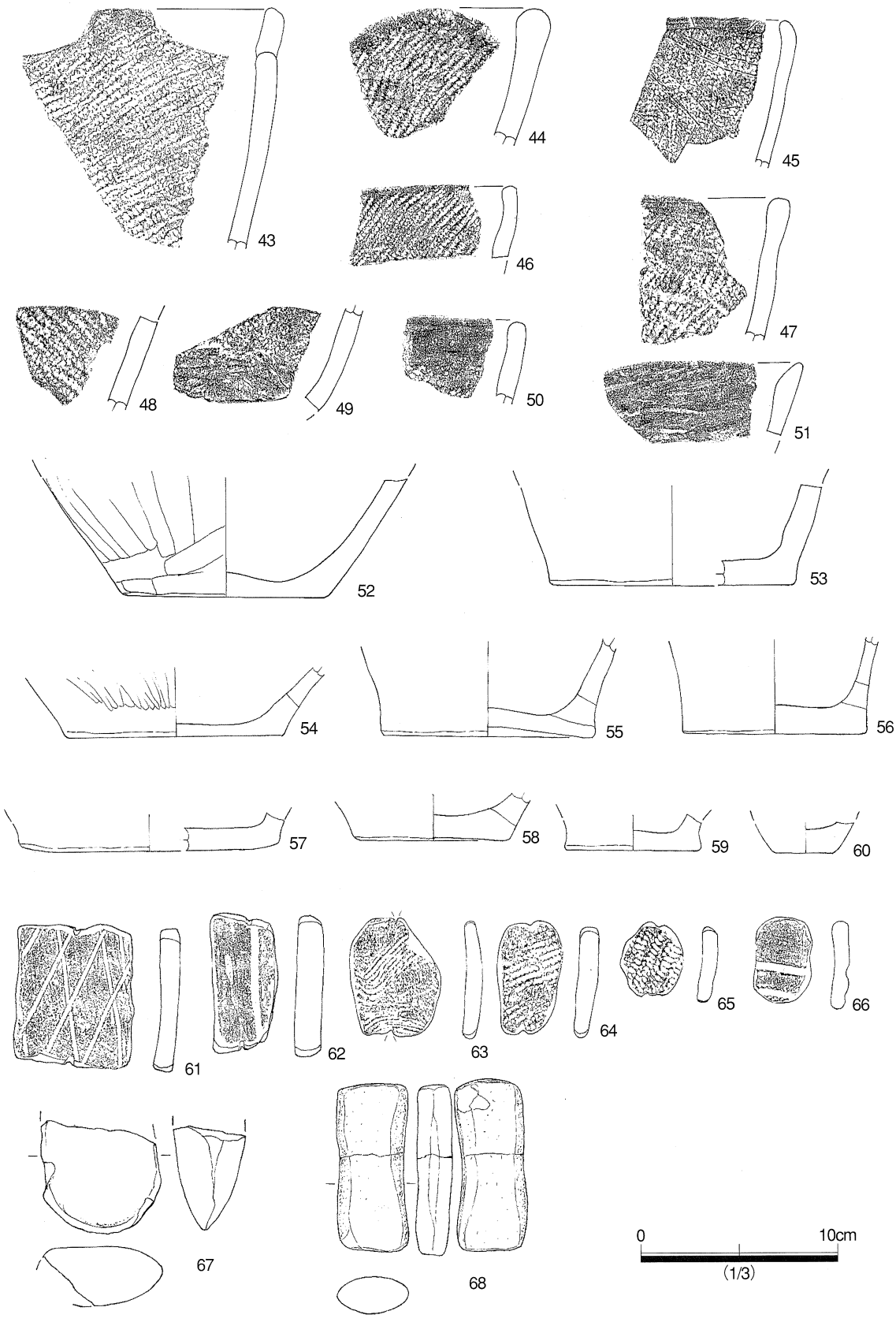
第83図　住居跡SI19実測図(2)



第84図　住居跡SI19出土遺物(1)



第85図　住居跡SI19出土遺物(2)



第86図　住居跡SI19出土遺物(3)

第86図61～66は土器片錘である。いずれも堀之内１式土器の胴部破片を再利用している。61・65を除く４点は長短軸差が大きい。法量は下記のとおりである（単位cm、ｇ）。

図版番号	長さ	幅	厚さ	重量	研磨状況	図版番号	長さ	幅	厚さ	重量	研磨状況
61	7.095	5.978	0.980	51.60	打欠	62	7.102	3.245	1.345	38.50	打欠
63	5.935	4.624	0.83	48.70	部分研磨	64	5.735	3.203	0.935	23.70	打欠
65	3.710	2.998	0.735	23.50	打欠	66	4.295	2.932	0.705	18.90	打欠

67･68は石製品で磨製石斧と砥石が出土している。67は砂岩製の磨製石斧の刃部破片である。両凸刃の乳房状石斧である。刃部研磨は丁寧に施されている。法量は現存の長さ5.351cm、幅6.254cm、厚さ3.332cm、重量129.5ｇを測る。68は軟質砂岩製のいわゆる石包丁様石器と呼ばれているものである。完存品で長方形を呈する。断面楕円形を呈し、表裏面および上下基部とも作業痕が認められる。長さ8.686cm、幅3.469cm、厚さ1.733cm、重量79.0ｇを測る。

床面上から住居の時期を明示する遺物としては堀之内１式期が中心であり、本住居は堀之内１式期のものであると判断できる。

第20号住居跡（SI20）（第87図～第92図）

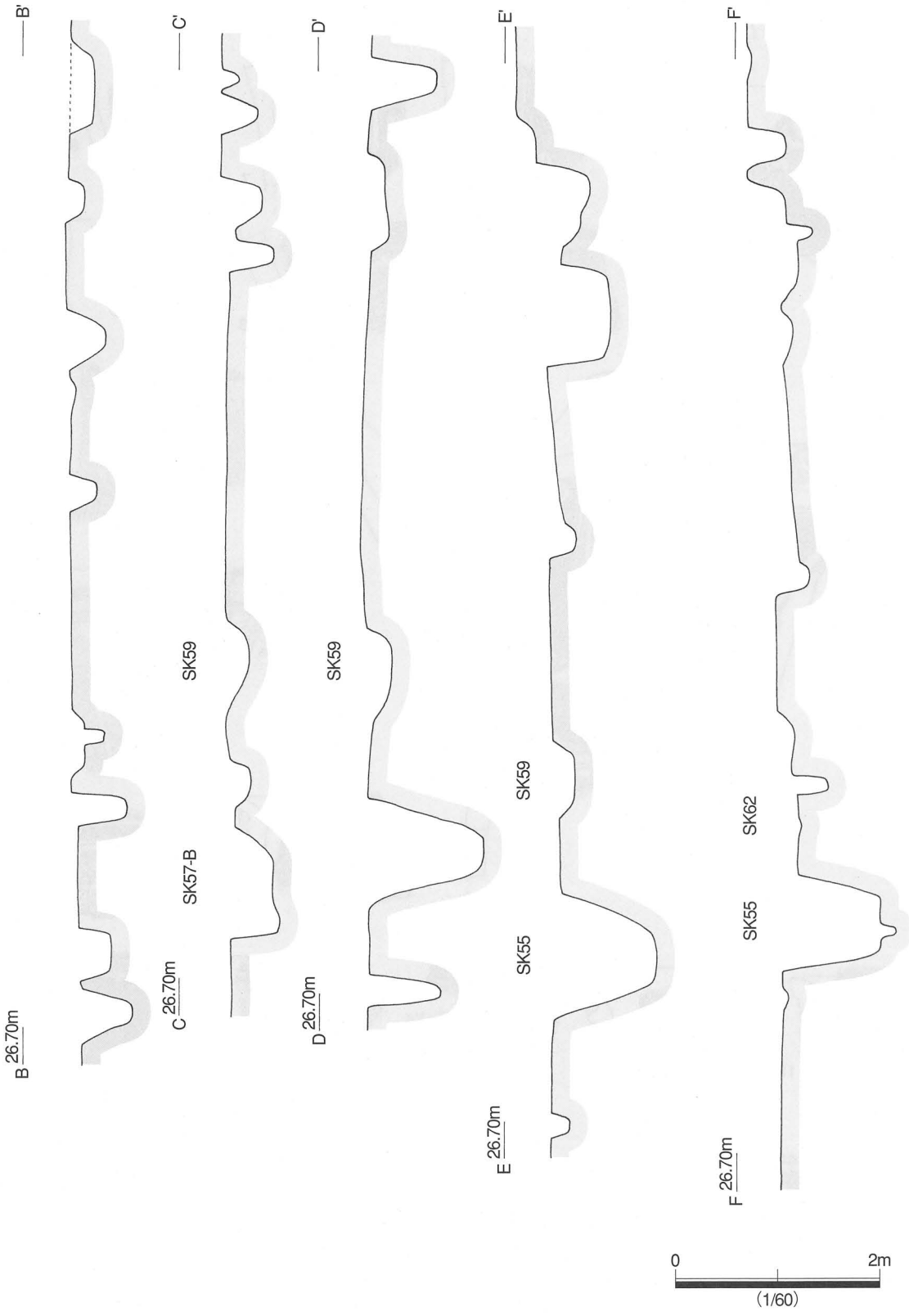
調査区南側、G－Ⅵ・Ⅶ、H－Ⅶ区に位置し、北西側でSI19、南東側でSI21と隣接している。また住居跡内には７基の土坑（SK54、55、56-A、57-B、59、62、72）が重複している。壁はすでに削平され、炉跡・柱穴および床面の状況により住居跡と判断した。入口施設と考えられる張出部を南東に向け、また住居壁際の壁柱穴が２列になっていることから拡張住居と推定される。まず外側新期拡張部の規模は張出部を含めた主軸である南北軸長10.48m、居住主体部は南北軸8.86m、東西軸8.70mの円形を呈するもの思われる。張出部と炉跡を通る主軸方位はN－71°－Wを指す。張出施設は南西側に位置し、土坑とピットによる組み合わせであるが、形状は不明である。また通路は明瞭ではなく、掘形の長さ190.0cm、幅35.0cmを測る。壁はすでに削平されていたが、壁に沿って廻ると思われる壁柱穴列が２列検出された。いずれも間隔を開ける柱穴列である。外側を巡る壁柱穴は27本検出され、大きさは径16.0～78.0cm、深さは13.0～53.0cmで、平均の深さは31.23cmである。内側では39本検出され、炉跡周囲の柱穴のうち、深度が50cm前後の規模をもつ４本が主柱穴で、他は支柱穴であろう。しかし、ここでは柱穴の新旧は明確にできなかった。支柱穴の大きさは径17.0～71.0cm、深さ6.0～63.0cmで、平均の深さは27.31cmである。

また内側の古期住居跡は張出部を共有し、居住主体部は南北軸5.50m、東西軸7.80mの楕円形を呈する。また内側を巡る壁柱穴は24本で、大きさは径20.0～81.0cm、深さは6.0～68.0cm、平均の深さは25.39cmである。炉跡は住居のほぼ中央に位置し、土坑SK62に切られているが、確認される大きさは長径76.0cm、短径64.0cmの楕円形を呈し、深さは10.0cmである。掘形は浅い皿状に掘り窪めてあり、底面は平坦部が丸底となり、被熱により赤化硬化しており、覆土は焼土粒を多量に含む赤褐色土（5YR4/6）で覆われていた。床面は全体的に堅く締まり、炉跡周囲はとくに顕著であった。覆土は全体的に浅く黒褐色土（10YR3/1）の薄い単一層の状況を呈しており、自然堆積層であろう。

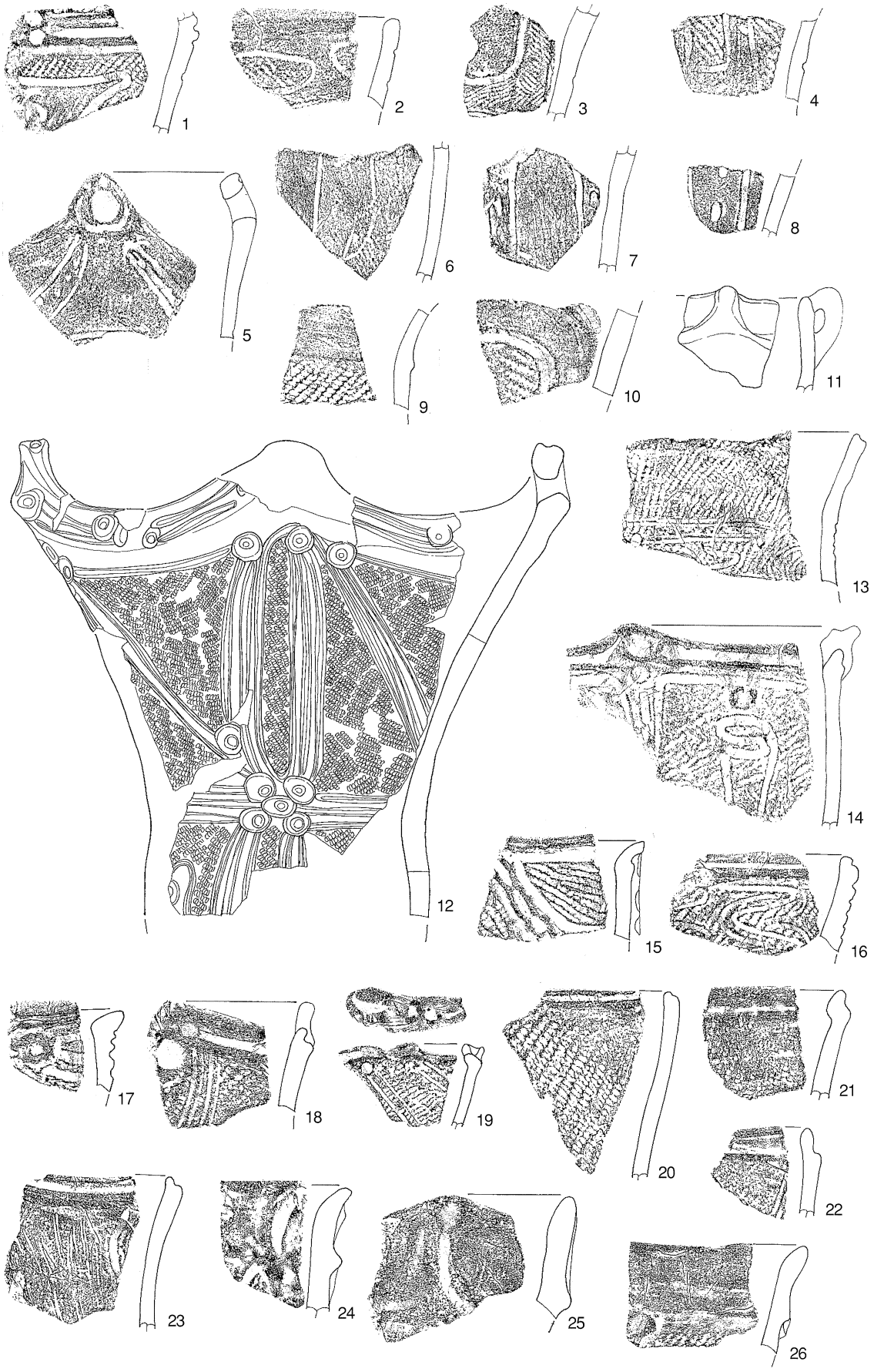
住居覆土および床面上より出土した土器は後期前半の土器で、その他土製品として土製蓋１点、土器片錘２点。石製品として礫石錘１点、打製石斧１点、凹石を含む磨石類２点が出土している（第89図～第92図）。

１は口縁部下の破片。口縁に平行する沈線に盲孔が配され、体部に沈線によるJ字文を垂下させる。２は口縁部破片。平縁の深鉢で楕円区画文内に縄文を充填する。３・４・６は深鉢の胴部破片。沈線による懸垂文を垂下させ、３・６は区画外に、４は区画内に縄文を充填する。５は波状口縁の深鉢。波頂部に円孔の周縁に沈線が巡る。体部上部は列点文を伴う区画文が垂下する。７・８も列点文を伴う区画文が懸垂文として垂下する。９は微隆起線文により口縁部が区画され、口縁部は無文帯、体部は縄文施文。10は深鉢の胴部破片。平行沈線による円形区画文内に縄文が充填される。11は橋状把手が付された深鉢。口縁部は隆帯で区画され、無文系土器である。12は単位の波状口縁で、胴部中位に括れ部を有する深鉢。口縁部は波頂部を中心に盲孔を伴う突起

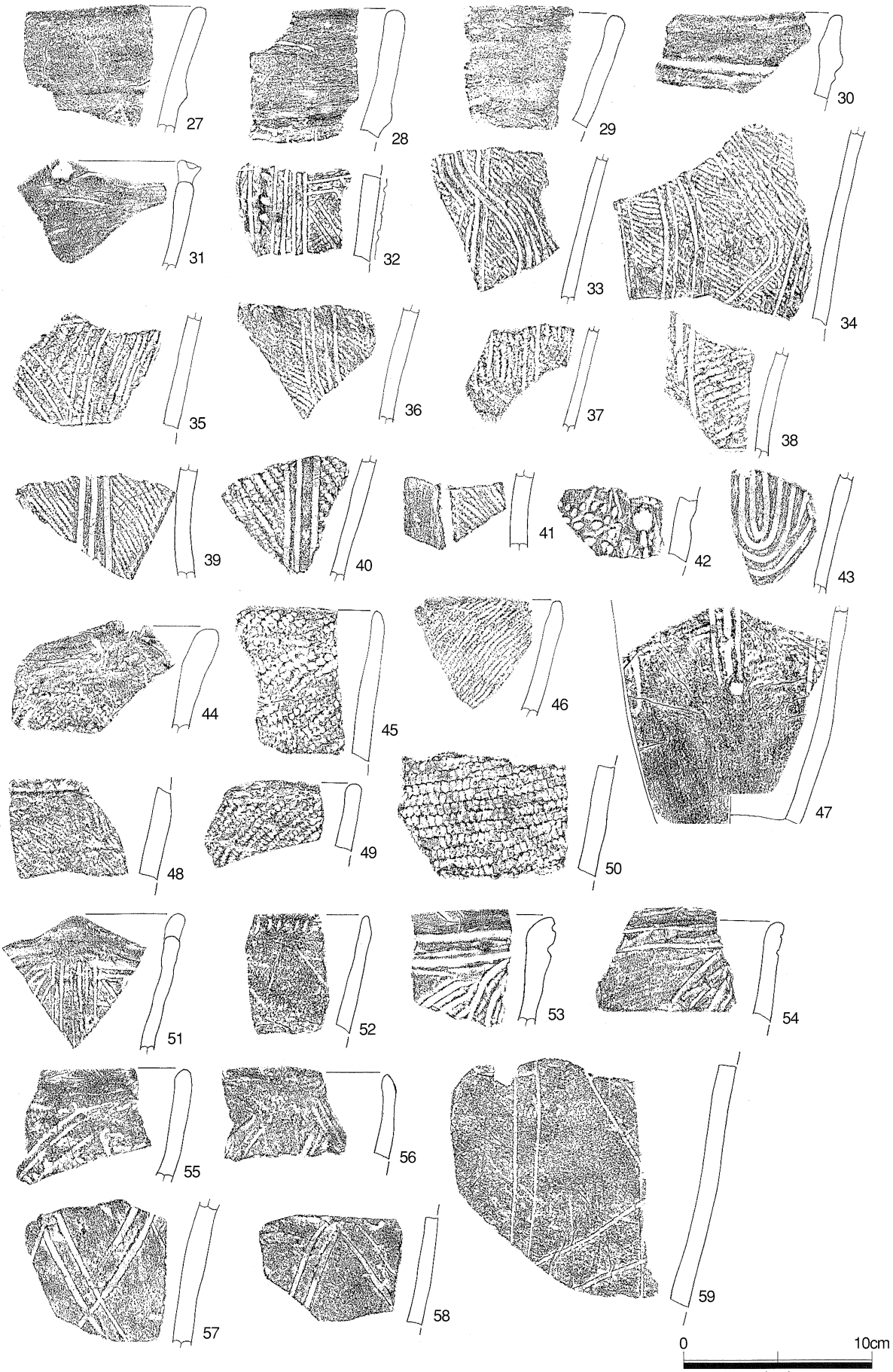
第87図　住居跡SI20実測図(1)



第88図　住居跡SI20実測図(2)



第89図　住居跡SI20出土遺物(1)



第90図　住居跡SI20出土遺物(2)

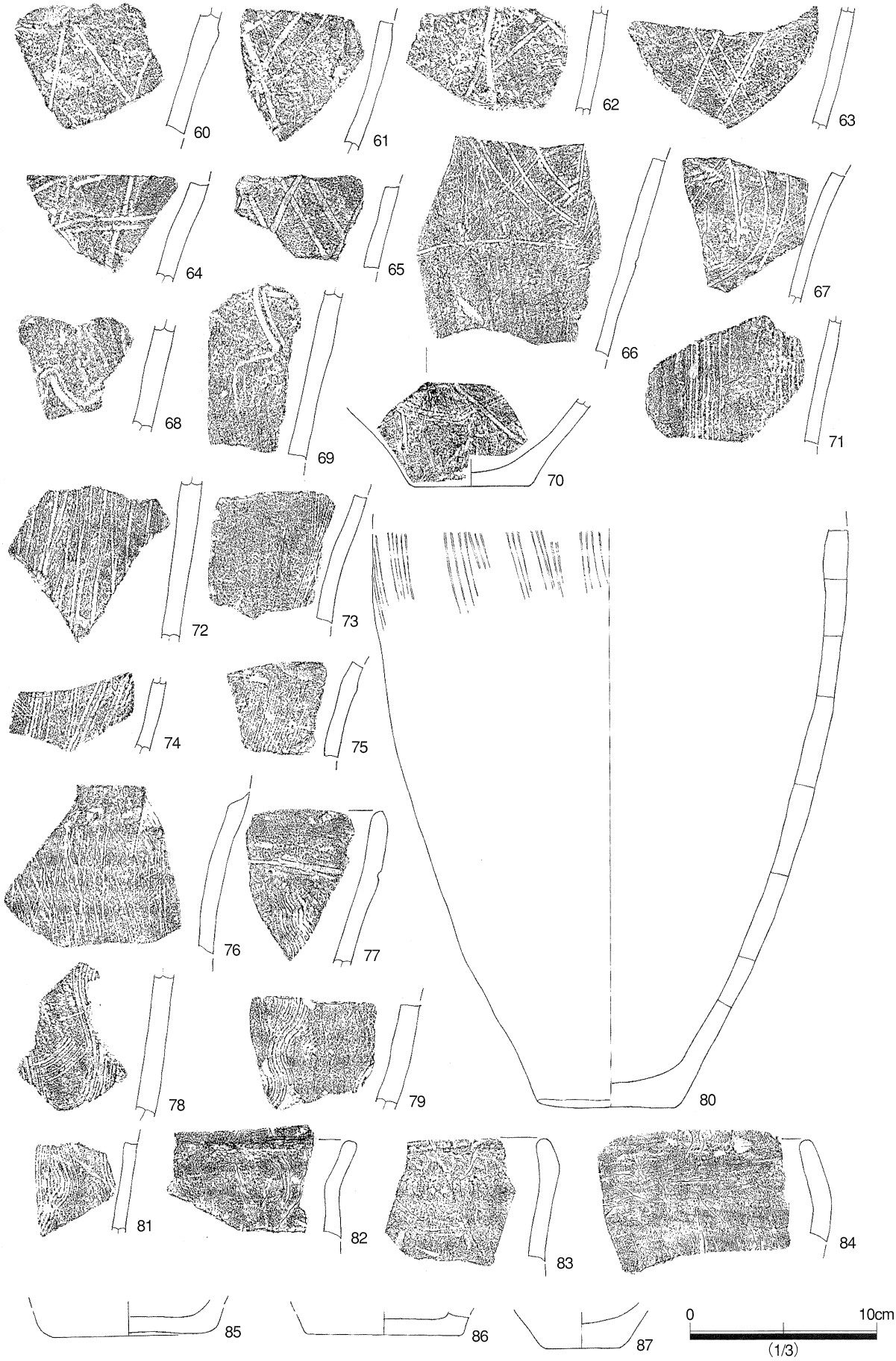
部を起点に懸垂状に垂下し、横位に二条施され、口縁下は幅狭い無文帯が巡る。頚部から胴部下半部は縄文施文を地文とし、複数の盲孔を伴う突起間に平行沈線が繋がる。胴部中位は横位の平行沈線によって区画される。13は口縁部が僅かに外反する深鉢。縄文を地文とし、頚部は横位の平行沈線が区画文となり、胴部に平行沈線による蛇行懸垂文が垂下する。14は口縁上に盲孔を伴う突起が配され、突起間を沈線が繋ぐ。さらに口縁下は縄文地文とし、波頂部を中心に沈線区画文が配され、区画内に蕨手文状懸垂文が垂下する。15は隆帯上に縦長の刺突を施す鎖状隆帯を斜行垂下させ区画文とする。16は口縁上が隆帯に沈線が伴い、口縁下は縄文地文に平行沈線による蛇行文が垂下する。17は盲孔を伴う隆帯を起点に横位沈線が施文される。18は波状口縁で、口縁上は沈線が巡り、波頂部は盲孔が施され、縄文地文に条線が垂下する。19は口唇部に円形刺突文と沈線が施され、口縁部は縄文地文に斜行沈線が施文される。20は口唇部に沈線が巡り、縄文地文。21～23は口縁上が短く外反させて凹帯を作出させる深鉢。21は縄文地文のみ。21は縄文地文に沈線文が垂下する。23は条線を地文に沈線が垂下する。24～30は口縁部を隆帯により区画し無文帯とするもので、24は無文の口縁部に短沈線が垂下し、横位の隆帯により区画される。25は波状口縁を呈し、波頂部下に扁平Ｓ字隆帯が垂下する。26～28・30は口縁部が隆帯により区画され無文帯となる深鉢。26の胴部は縄文施文。30は隆帯区画下に沈線が巡る。31は波状口縁で波頂部に盲孔が配される。32～43は深鉢の胴部破片。32は刻目のもつ隆帯を垂下させ、多条化沈線による幾何学文。33～38は縄文地文に多条化沈線による波状文、直行文、幾何学文を施す。39～41・47は磨消縄文を懸垂文とし垂下させる。47は深鉢の底部付近。43は多条化沈線による渦巻文。44～46・48～50は縄文地文の深鉢。44は波状口縁となる。51～82は無文地に条線および沈線のみで施文するもので、51は波状口縁を呈し、波頂部下を基点に多条化沈線が垂下する。52は口縁上に刻目が巡り、体部は細沈線による意匠文を施す。53・54は口縁上に平行沈線による横位の第一区画帯をもち、多条化沈線による意匠文。55～67は平行沈線による意匠文。55・56は口縁部破片。68・69は短沈線による蛇行文。70～76・80は縦位の直行条線を垂下させ、80は体部上部まで施文し、以下無文となる。77～79・81・82は波状に垂下する。77は口縁部破片。沈線による区画された口縁上は無文帯。83・84は無文地で、83は深鉢。84は浅鉢になる。85～87は深鉢の底部破片。

88～92は堀之内２式。88は深鉢の口縁部破片。口縁下に刻目を施した紐帯を巡らし、体部に沈線区画された磨消縄文帯を施文する。89も口縁部破片。口縁下に８字状貼付を付し、縄文地文に多条化沈線による意匠文。90～92は深鉢の胴部破片。縄文地文に多条化沈線による意匠文。92は無文地に沈線区画内は重畳三角文を充填する。

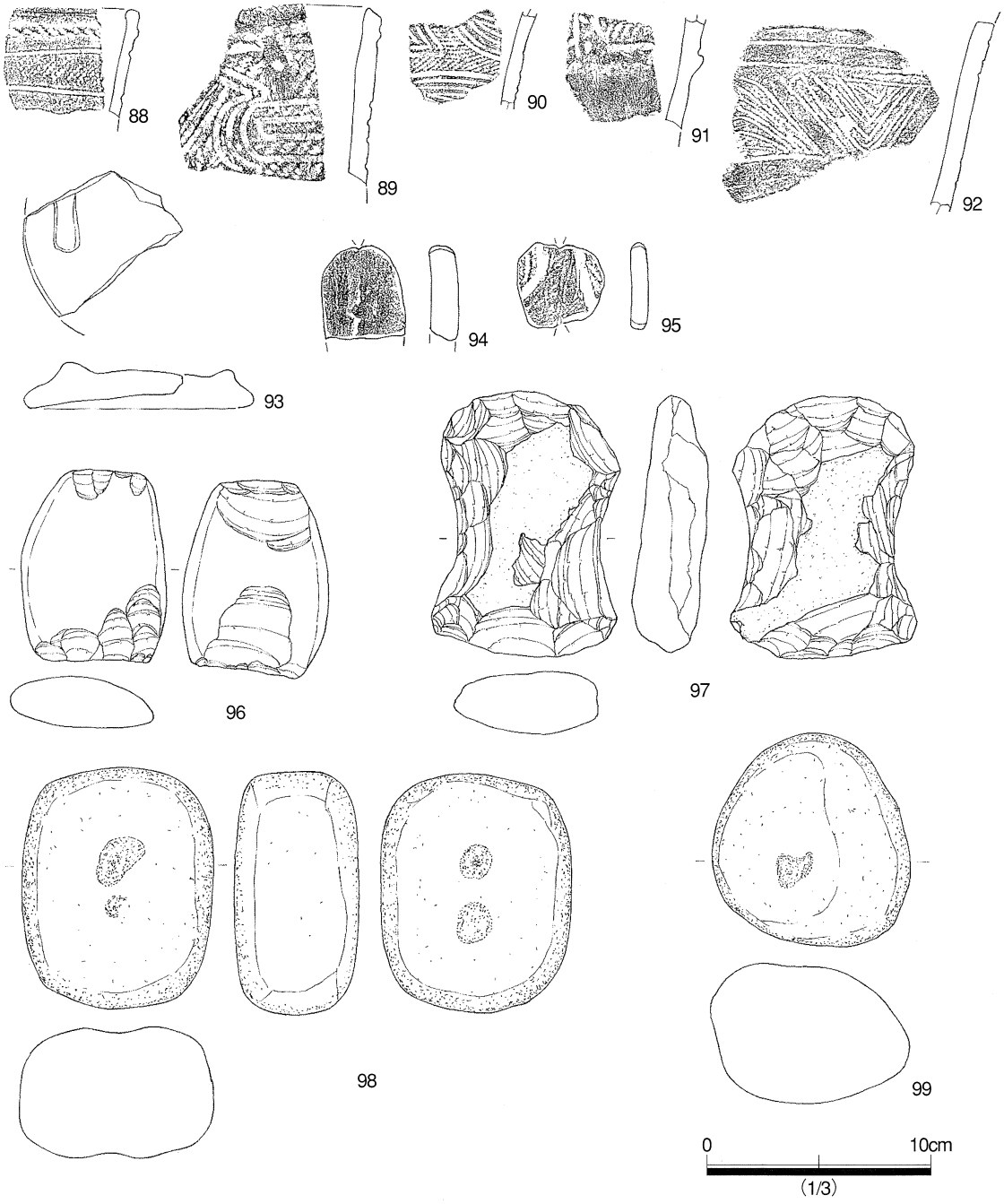
93～95は土製品である。93は土製蓋の破片。盤状を呈し、表面の周縁に貼付けによる隆帯が付されている。推定径10.5㎝、厚さ5.8㎝である。94･95は土器片錘である。いずれも深鉢の胴部破片を再利用している。94は欠損品であるが、全周丁寧な研磨が施され、楕円形を呈している。現存長4.20㎝、幅3.48㎝、厚さ1.18㎝、重量23.10ｇ。95は打欠のみで研磨は施されていない。不整方形を呈し、長さ3.72㎝、幅3.89㎝、厚さ0.79㎝、重量13.90ｇを測る。

96～99は石製品である。96は砂岩製の礫石錘である。両長軸辺を比較的粗い剥離調整で加工している。長さ8.45㎝、幅6.39㎝、厚さ2.24㎝、重量172.0ｇ。97は閃緑岩製の分銅形打製石斧である。表裏面に原礫面を残置している。両側縁の抉り部は丁寧な調整剥離が施されている。長さ11.95㎝、刃幅8.13㎝、最大厚2.94㎝、重量362.0ｇである。98・99は磨石類である。98は安山岩製で典型的な磨石である。長さ10.93㎝、幅8.43㎝、厚さ5.64㎝、重量791.0ｇを測り、６面全面をよく研磨されており、形がいわゆる石鹸形に整っている。表裏面ほぼ中央に加撃痕による円形の凹部をもつ。99は安山岩製で、円礫の周縁を僅かに研磨しているが、自然礫をそのまま転用したもので、表面の脇に加撃痕による浅い凹部をもつ。長さ9.65㎝、幅8.93㎝、厚さ6.07㎝、重量748.0ｇを測る。

床面上から住居の時期を明示する遺物としては称名寺式、堀之内１式、堀之内２式期があるが、なかでも堀之内１式が中心であり、住居の形態や炉の状況などからみて、本住居は堀之内１式期のものであると判断できる。



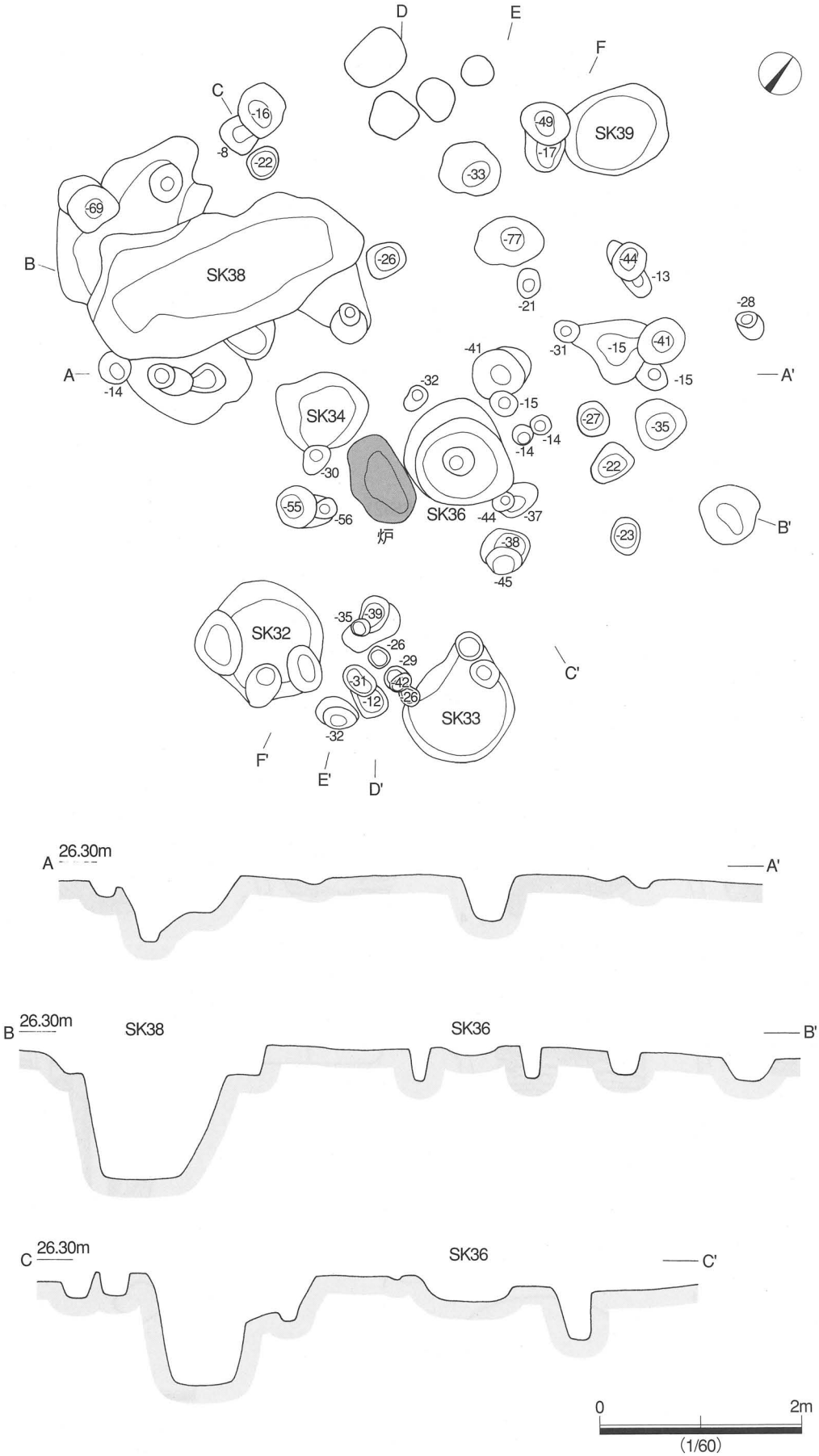
第91図　住居跡SI20出土遺物(3)



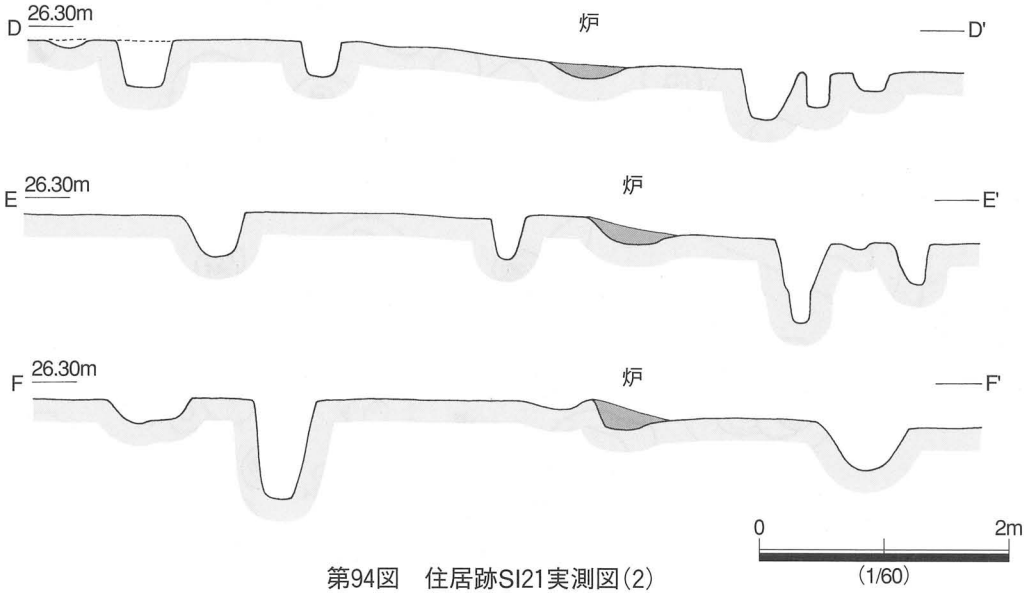
第92図　住居跡SI20出土遺物(4)

第21号住居跡（SI21）（第93図～第95図）

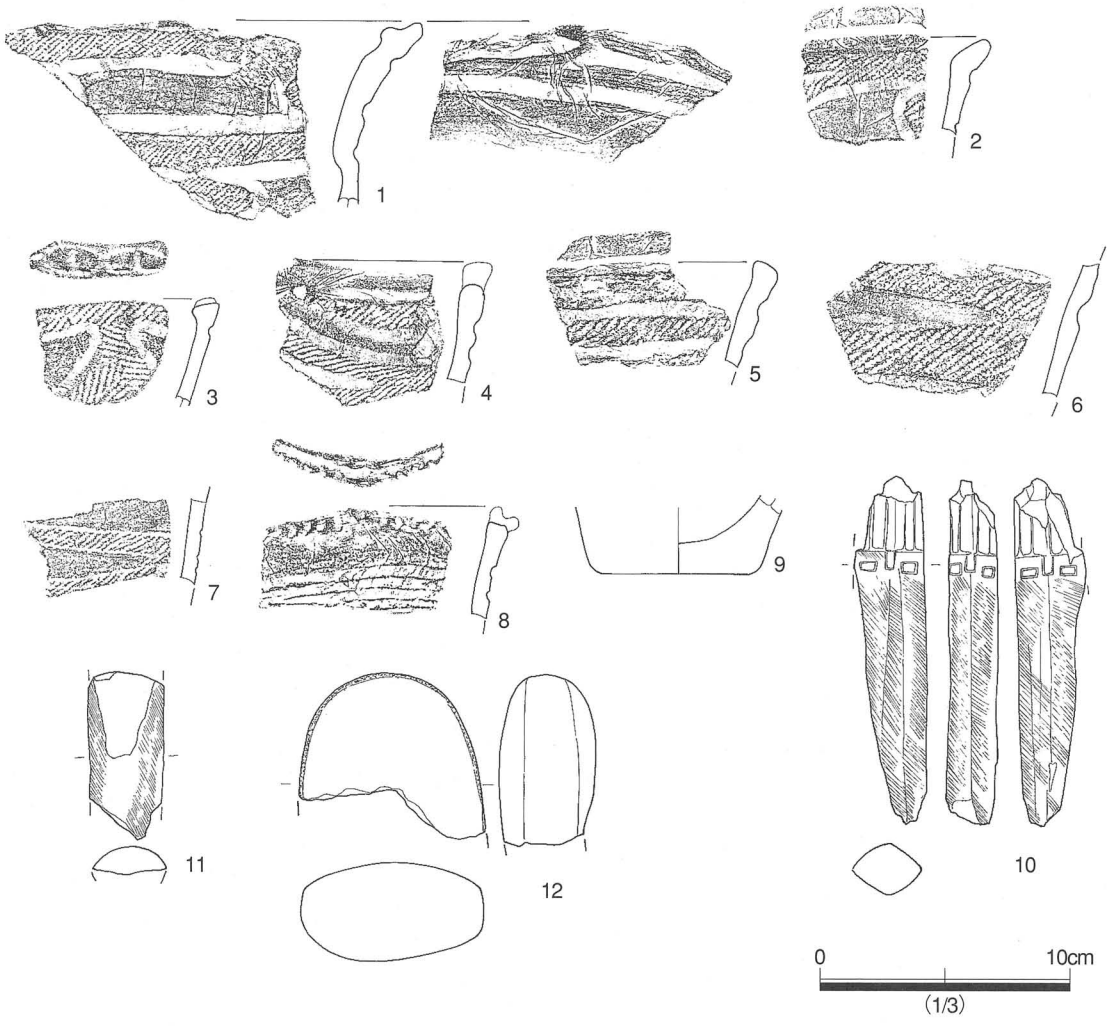
調査区南側、G－Ⅶ、H－Ⅶ区に位置し、北西側でSI20と隣接する。住居跡内には6基の土坑（SK32、33、34、36、38、39）が重複している。壁がすでに削平され、炉跡・柱穴および床面の状況により住居跡と判断した。張出施設は確認できなかった。居住主体部の規模は南北軸7.00m、東西軸6.84mの円形と推定される。炉跡の位置からみた主軸方位はN－38°－Wを指す。壁はすでに削平されていたが、住居内には柱穴が44本検出



第93図　住居跡SI21実測図(1)



第94図　住居跡SI21実測図(2)



第95図　住居跡SI21出土遺物

され、大きさは径18.0～71.0cm、深さは8.0～77.0cmで、平均の深さは31.66cmを測る。なお、明瞭な壁柱穴は検出できなかった。炉跡は中軸線上やや南側寄りに位置し、大きさは長径91.0cm、短径55.0cmの楕円形を呈し、深さは17.0cmである。掘形は皿状に掘り窪めてあり、底面は丸底状で起伏がなく被熱により赤化硬化しており、覆土は焼土粒を多量に含む赤褐色土（5YR4/6）で覆われていた。床面は全体的に堅く締まり検出しやすかった。覆土は浅く黒褐色土（10YR3/1）の薄い単一層の状況を呈しており、自然堆積層であろう。

住居床面上より出土した土器は晩期中葉の土器で、前浦式期である。その他石製品として石剣２点、磨石１点が出土している（第95図１～12）。

１～６は前浦式土器である。１は口縁部が外傾し、口唇内面が凹帯となる。また口唇部に小突起が付く。磨消縄文による入組文が施文され、沈線のみの内面文様がある。２は口縁上が短く外反する。磨消縄文による「の」の字文であろう。３は口唇部にB突起を付し、楕円形文が配される。４は波状口縁で、波頂部を起点とする菱形文。５は口唇部がわずかに肥厚し、磨消縄文帯が巡る。６は胴部破片で菱形文。７も胴部破片で磨消による菱形文。８は大洞式系。波状口縁で波頂部に小突起が付されている。口唇部に刻目が施され、口縁下に多条沈線が巡る。９は底部破片。

10～12は石製品である。10・11は石剣の破片。10は粘板岩製で、頭部端部と身下半部を欠損している。断面形は菱形を呈し、「鎬」「刃」にあたる部位が明瞭である。上部の柄にあたる部位にはI字文が並列し、鍔付近には方形文が彫刻的手法により作出されている。刃部は研磨による線条痕が明瞭に残されている。現存の長さ13.981cm、幅2.759cm、厚さ1.932cm、重量98.0ｇを測る。11も粘板岩製の石剣の身破片であるが、10と接合はできない。表面の研磨痕は明瞭である。現存の長さ6.867cm、幅2.974cm、厚さ1.364cm、重量38.5ｇを測る。12は緑色凝灰岩製の磨石で約半分を欠損している。表裏面および側面の研磨痕は均一で、丁寧な作業痕を呈している。現存長6.946cm、幅7.257cm、厚さ4.012cm、重量241.0ｇを測る。

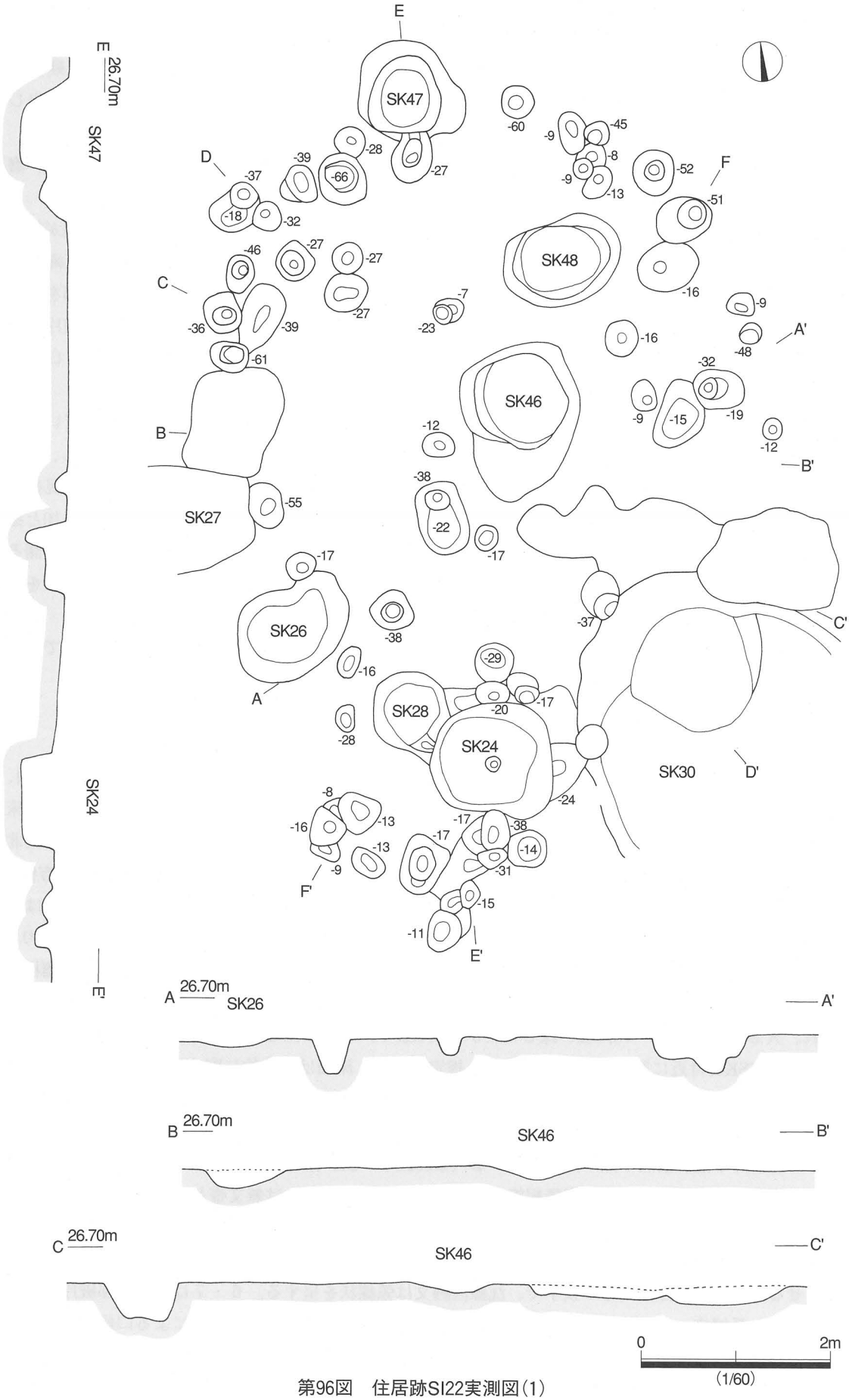
床面上から住居の時期を明示する遺物としては前浦式期が中心であり、本住居は前浦式期のものであると判断できる。

第22号住居跡（SI22）（第96図～第99図）

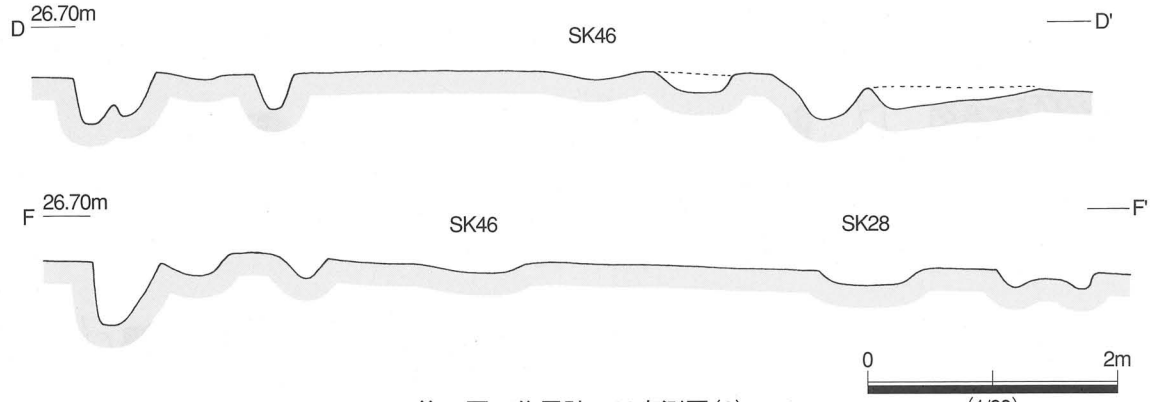
調査区南西側、F－Ⅵ・Ⅶ区に位置し、北東側でSI19と隣接する。また住居跡内には６基の土坑（SK24、26、28、46、47、48）が重複している。壁がすでに削平され、炉跡は確認できなかったものの、柱穴および床面の状況により住居跡と判断した。入口施設と考えられる張出部を南に向け、張出部を含めた主軸である南北軸長は9.68ｍを測り、居住主体部は南北軸7.70ｍ、東西軸6.10ｍの楕円形を呈する。張出部を通る主軸方位はN－6°－Eを指す。張出施設はピット状張出部で、複数のピットが連結している。また開閉部については明瞭ではないが、状況からみて内側に設置されているものと思われる。確認できる通路の長さは228.0cmを測り、幅については不明である。壁はすでに削平されていたが、壁に沿って廻ると思われる壁柱穴が28本、内側柱穴が19本検出され、規模は径20.0～60.0cm、深さは8.0～66.0cmで、平均の深さは31.54cmである。居住内柱穴は19本検出され、大きさは径22.0～75.0cm、深さは7.0～39.0cmで、平均の深さは23.68cmである。炉は検出できなかったが、土坑SK46付近に設けられていたものと推定される。床面は全体的に堅く締まり検出しやすかった。覆土は浅く黒褐色土（10YR3/1）の薄い単一層の状況を呈しており、自然堆積層であろう。

住居覆土および床面上より出土した土器は後期前半の土器を主体に、その他土製品として土器片錘２点、石製品として石皿片１点、磨石１点が出土している（第98図１～24、第99図25～43）。

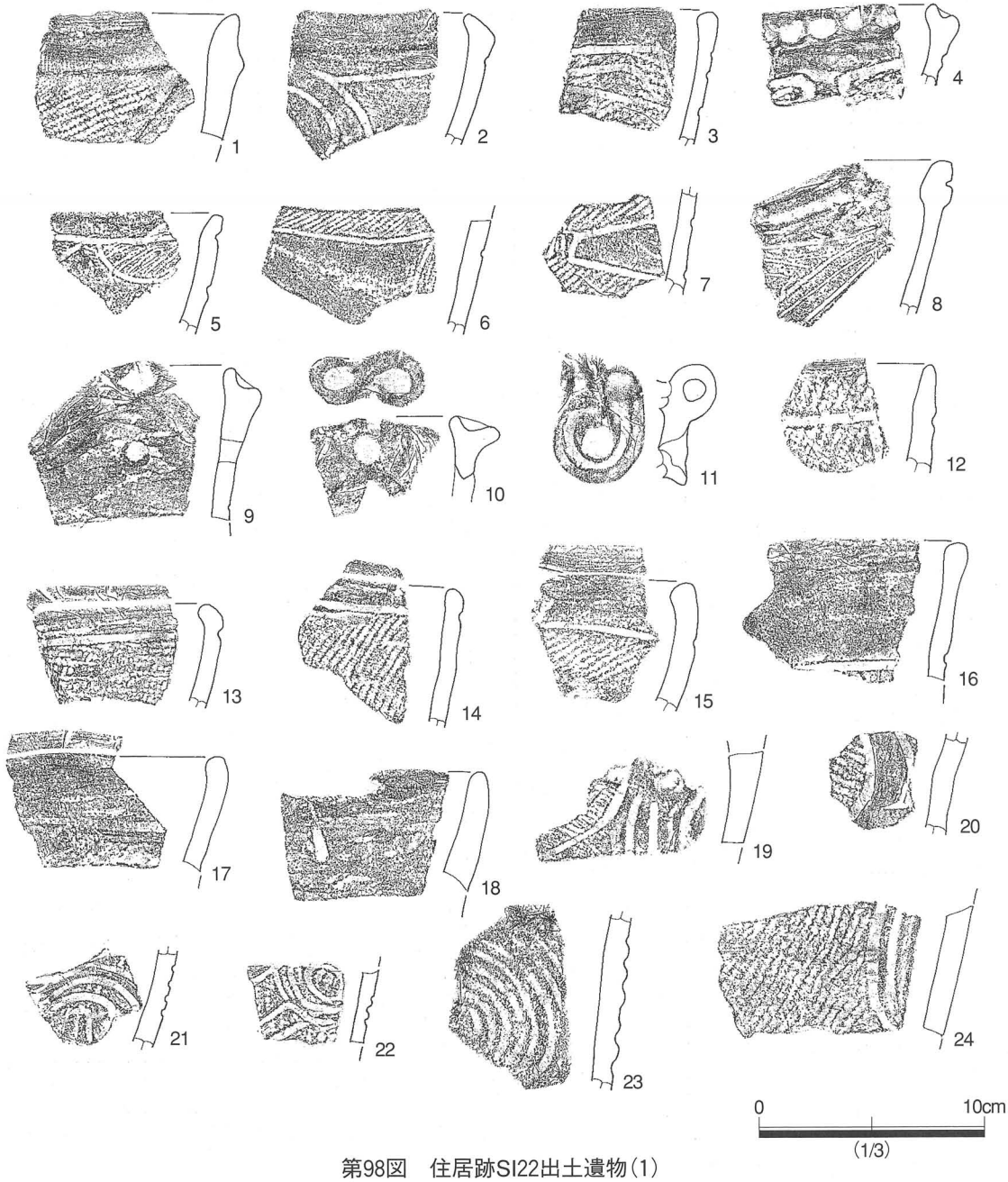
１～39は縄文土器片である。１は微隆起線文による区画文で、口縁上は無文帯とし、入組懸垂文を垂下させる。２は口縁部が短く内傾する深鉢。口縁上を無文帯とし、２本の平行描線による帯状の円形意匠文。３は口縁上を無文帯で、平行描線による帯状文。４は口唇部に円形刺突文が連続し、口縁部は沈線による枠状区画文を垂下させる。５は口縁部無文帯が狭小で、沈線区画文は弧線状を呈する。６・７は深鉢胴部破片。平行描線による帯縄文と弧線文。７は枠状区画文。８・９は波状口縁である。８は沈線区画による口縁上は狭小の無文帯。９は波頂部の口唇部が盲孔で、口縁部が無文地、直下に円形の穿孔がみられる。10は小波状の深鉢。口唇部は８の字状の盲孔が配され、口縁直下に円形穿孔がある。11は把手部破片。沈線を伴う隆帯で、沈線文端部



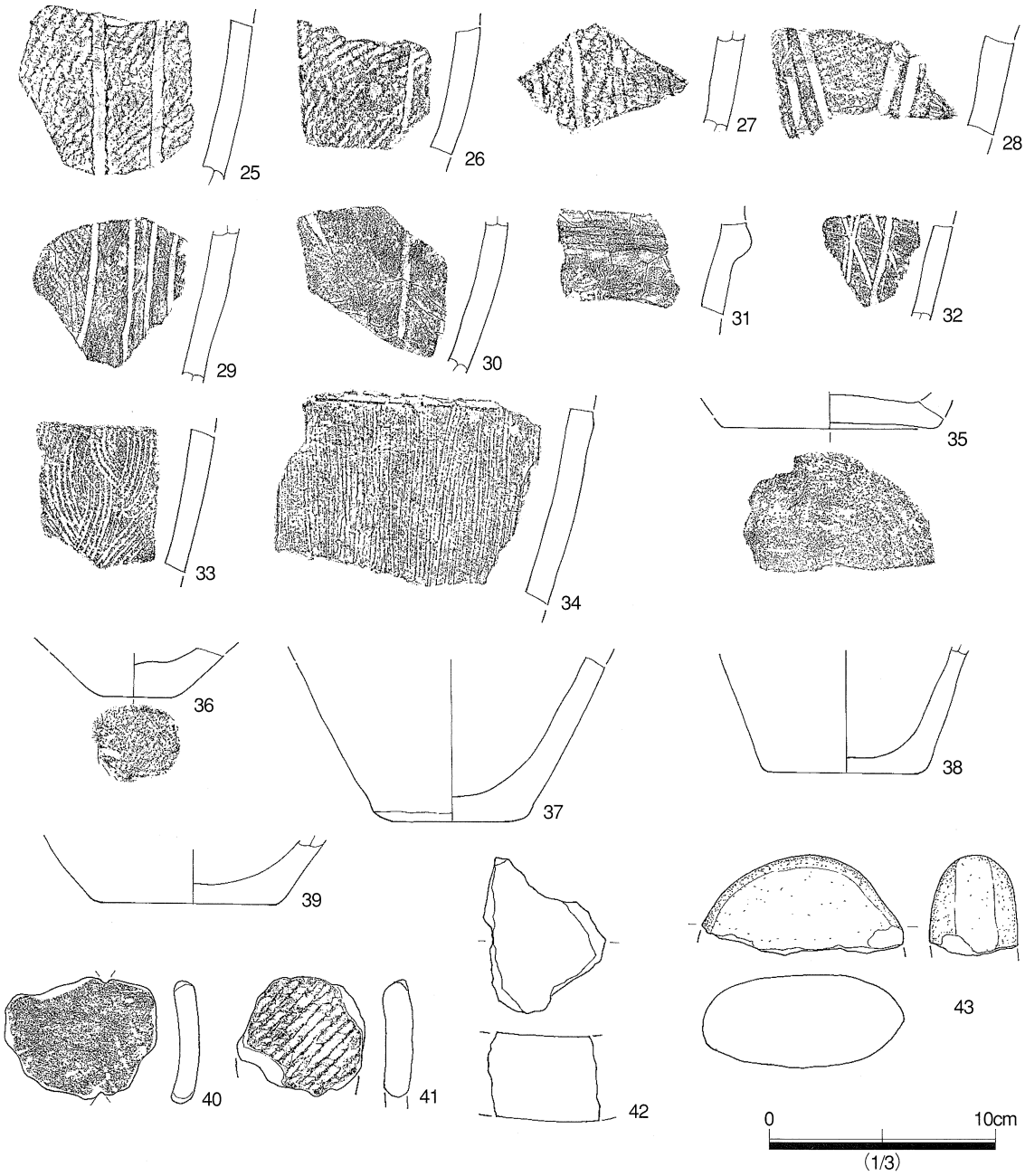
第96図　住居跡SI22実測図(1)



第97図　住居跡SI22実測図(2)



第98図　住居跡SI22出土遺物(1)



第99図　住居跡SI22出土遺物(2)

は盲孔が配されている。12～18は口縁部破片。12・13は縄文地文に口縁下に1条の沈線が巡る。14・15は口縁上が沈線区画され無文帯となる。16･17はやはり沈線区画され幅広い無文帯である。19～34は胴部破片。19･20は弧線による磨消縄文。21 は沈線による平行円形文。22は渦巻文に斜行する平行沈線が派生する。23は渦巻文。24～29は縄文地文に沈線による懸垂文が垂下する。24は磨消弧線文が垂下する。28～30は直行する磨消懸垂文である。31は隆帯による区画文。32は格子目文、33は櫛歯条線による鎖状懸垂文が垂下する。34は沈線区画文に縦位の条線文。35～39は底部破片。35・36は網代痕。40・41は土器片錘である。いずれも深鉢の胴部破

片を再利用している。40は周縁の打欠のみで不整楕円形に成形し、短軸の両端に紐掛け溝を作出している。長さ5.31cm、幅6.62cm、厚さ0.86cm、重量40.7g。41は欠損品である。周縁は打欠のみで長方形に成形し、長軸の両端に紐掛け溝を作出している。長さ5.14cm、幅5.58cm、厚さ1.08cm、重量39.5gを測る。42・43は石製品である石皿と磨石である。42は安山岩製の石皿小破片である。ちょうど作業面である皿部で、使用頻度は高く研磨痕は顕著である。現存の長さ7.134cm、幅5.273cm、厚さ4.136cm、重量171.0g。43は磨石の破片。表裏面および側縁部の研磨痕は明確である。現存の長さ3.985cm、幅8.809cm、厚さ4.136cm、重量171.5gを測る。

床面上から住居の時期を明示する遺物としては称名寺、堀之内1式期が中心であり、また住居の形態や炉の状況などからみて、本住居は堀之内1式期のものであると判断できる。

第23号住居跡（SI23）（第100図・第101図）

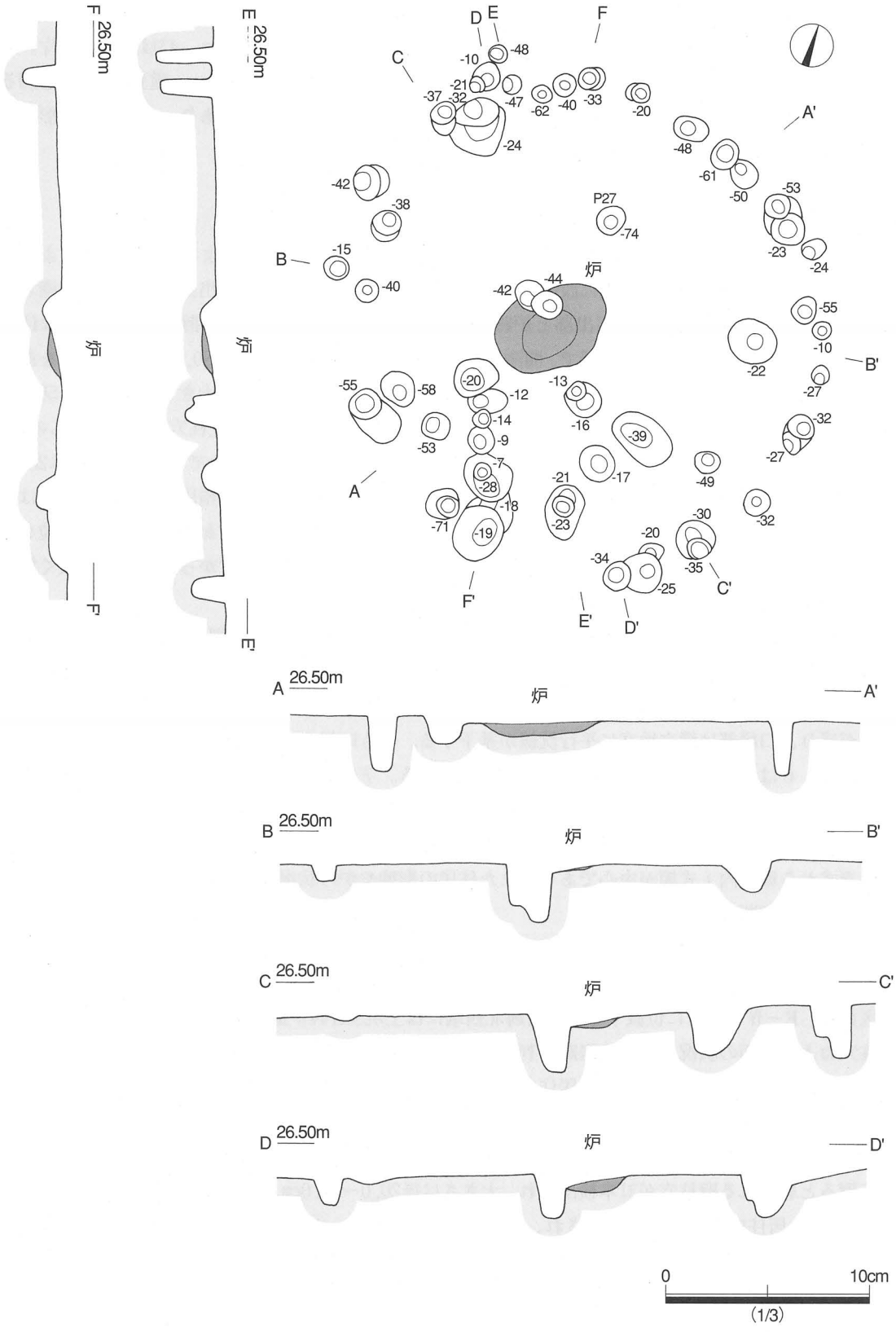
調査区南西側、F－Ⅴ・Ⅵ区に位置する。壁がすでに削平され、炉跡・柱穴および床面の状況により住居跡と判断した。張出施設は居住内の南側に設置され、住居跡の規模は主軸である張出部と炉跡を通る南北軸5.50m、東西軸4.93mの円形を呈する。張出部と炉跡を通る主軸方位はN－19°－Wを指す。張出施設は住居中央の炉跡に接して平行するピット状張出部で、開閉部は設けていない。通路の長さ180.0cm、幅55.0cmを測る。壁はすでに削平されていたが、壁に沿って廻ると思われる壁柱穴が31本検出され、大きさは径13.0～56.0cm、深さは10.0～62.0cmで、平均の深さは36.2cmである。居住内柱穴は24本検出され、主柱穴に相当するものはなく、いずれも支柱穴と思われる。柱穴の大きさは径16.0～62.0cm、深さは7.0～74.0cmで、平均の深さは28.55cmである。炉跡は住居ほぼ中央に位置し、長径112.0cm、短径73.0cm、深さは12.0cmの楕円形である。掘形は浅い皿状に掘り窪めてあり、底面はわずかに起伏があり全体が被熱により赤化硬化しており、覆土は焼土粒を多量に含む赤褐色土（5YR4/6）で覆われていた。床面は全体的に堅く締まり検出しやすかった。覆土は浅く黒褐色土（10YR3/1）の薄い単一層の状況を呈しており、自然堆積層であろう。

住居覆土および床面上より土器のみの出土で、後期前半が主体である（第101図1～13）。

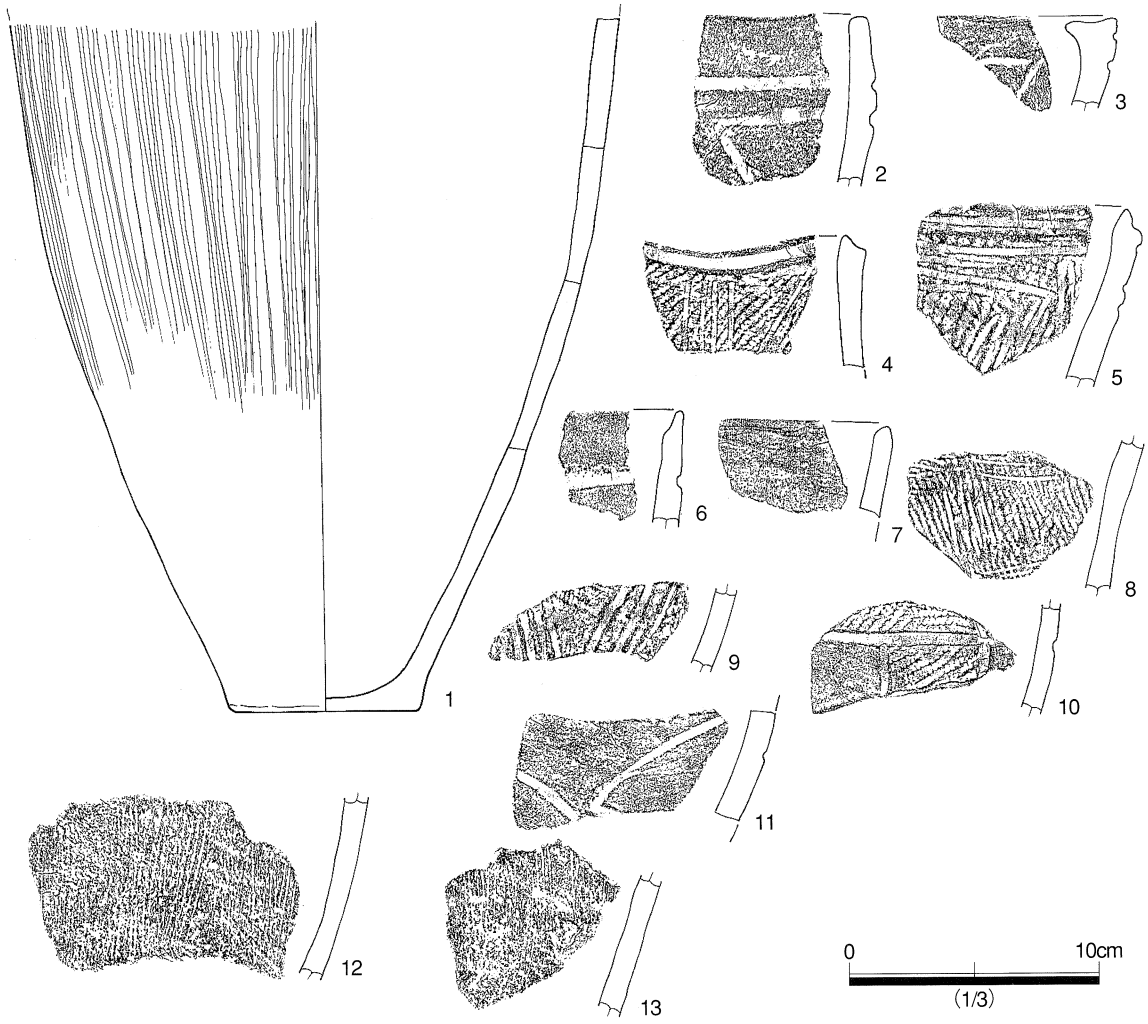
1は大型の深鉢。無文地に縦位の条線文を垂下させる。2は沈線区画によって口縁部上を無文帯とし、三角形枠状文を配する。3は口唇部が幅広く凹帯となり、口縁部は沈線による三角形の意匠文であろう。4は口縁上に凹帯が巡り、口縁部は縄文地文に平行沈線が垂下する。5も口縁上に凹帯が巡り、口縁部は縄文地文に三角形の意匠文。6は沈線区画により口縁部上は無文帯となる。7の口縁部も無文帯。8～13は胴部破片。8は縄文地文に平行沈線による意匠文。9は半截竹管状工具を使用した意匠文。10は沈線区画された縄文帯と磨消懸垂文を垂下させる。11は無文地に弧線文。12・13は縦位の条線。床面上から住居の時期を明示する遺物としては称名寺式から堀之内1式期が中心であり、また住居の形態や炉の状況などからみて、本住居は堀之内1式期のものであると判断できる。

第24号住居跡（SI24）（第102図・第103図）

調査区西側、E－Ⅳ・Ⅴ区に位置する。住居跡北西端には土坑SK144が重複している。壁がすでに削平され、炉跡・柱穴および床面の状況により住居跡と判断した。入口施設と考えられる張出部を南に向け、規模は張出部を含めた主軸である南北軸長5.73m、居住主体部は南北軸5.02m、短軸4.68mの円形を呈する。入口部と炉跡を通る主軸方位はN－27°－Wを指す。張出施設はピット連結状張出部で、5基のピットが穿ってある。また開閉部および通路幅については不明である。通路の長さ112.0cmを測る。壁はすでに削平されていたが、壁に沿って廻ると思われる壁柱穴が31本検出され、大きさは径20.0～81.0cm、深さ4.0～31.0cmで、平均の深さは23.61cmである。居住内柱穴は24本検出され、明瞭な主柱穴はなく、いずれも支柱穴で大きさは径17.0～37.0cm、深さは9.0～41.0cmで、平均の深さは24.30cmである。炉跡は住居ほぼ中央に位置し、長径45.0cm、短径42.0cm、深さ5.0cmの円形である。掘形は浅い皿状に掘り窪めてあり、底面の平坦部は狭小で起伏がなく被熱により赤化硬化しており、覆土は焼土粒を多量に含む赤褐色土（5YR4/6）で覆われていた。床面は全体的に堅く締まり検出しやすかった。覆土は浅く黒褐色土（10YR3/1）の薄い単一層の状況を呈しており、自然堆積層であろう。炉跡南側から小貝ブロックが検出された。中型ハマグリ・オキシジミ・サルボウが混入していた。また住



第100図　住居跡SI23実測図

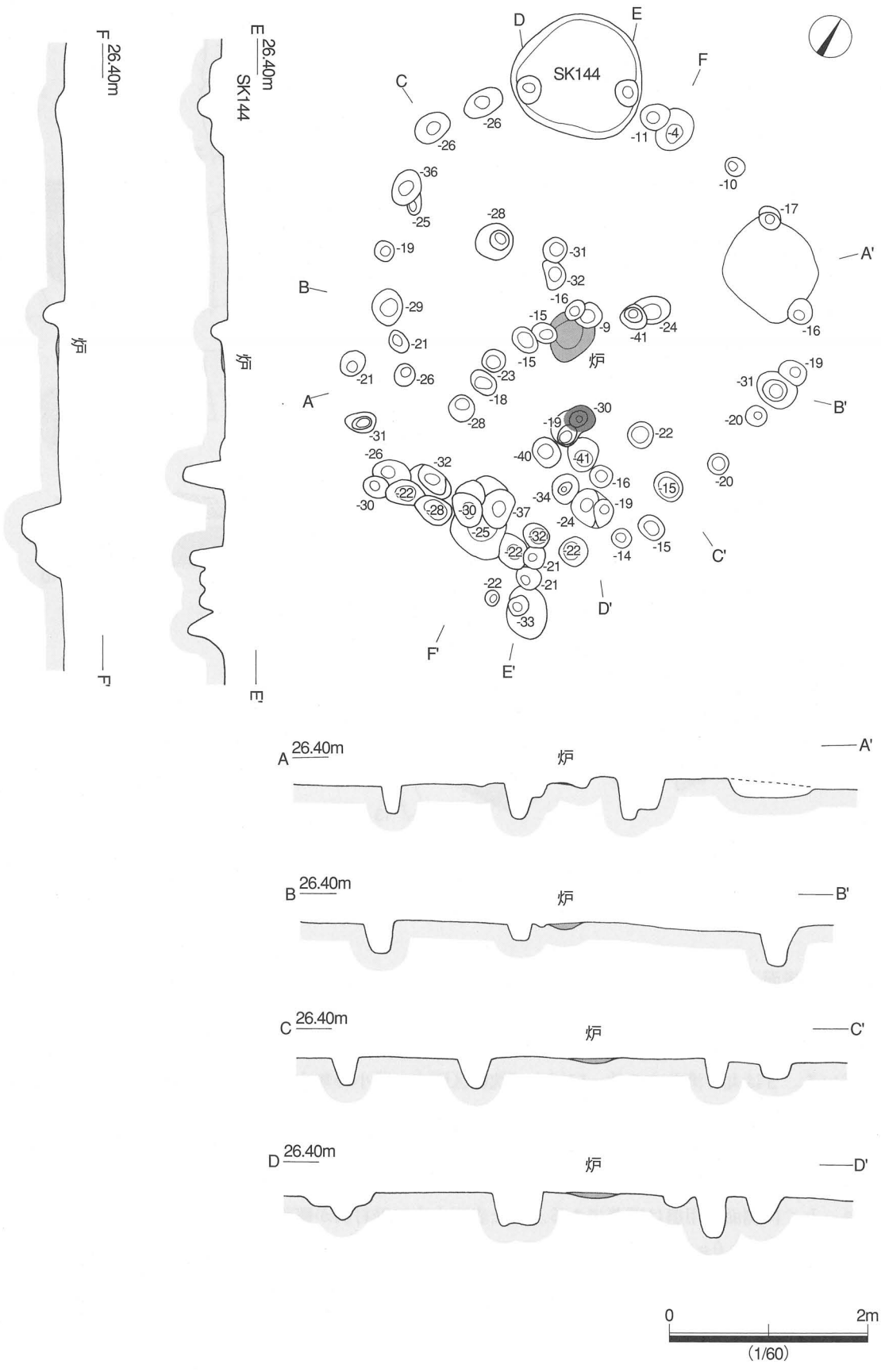


第101図　住居跡SI23出土遺物

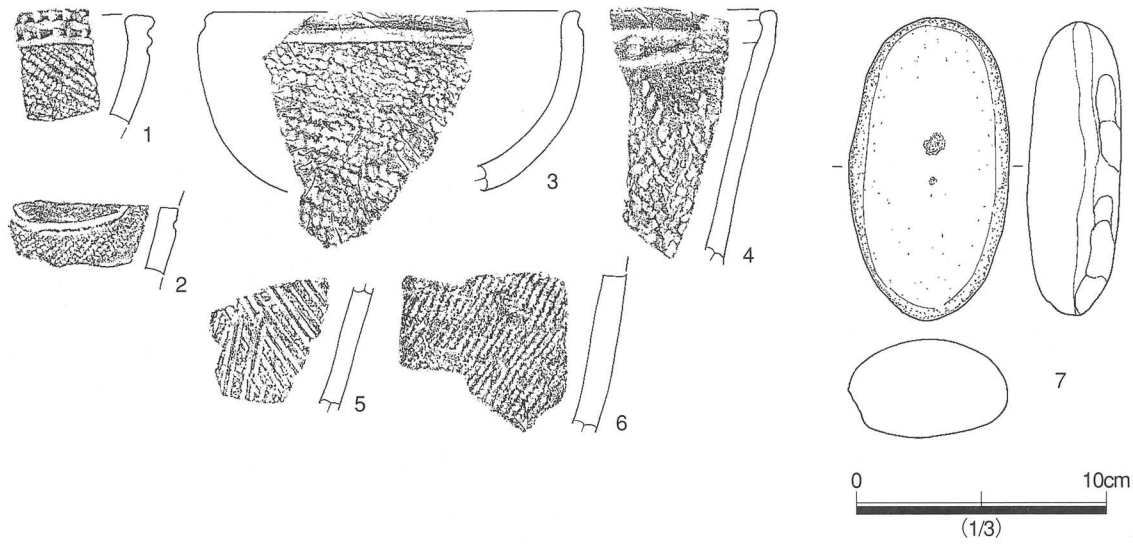
居覆土および床面上より出土した土器は後期中葉の土器と石製品である磨石類１点が出土している(第103図１～７)。

１は口縁上に２条の沈線区画された刻文帯が巡り、縄文地文。２は深鉢の胴部破片。縄文地文に弧線文が施こされている。３は丸く湾曲する鉢。口縁上が沈線区画文で狭小の無文帯をもち、丸底の底部まで縄文施文。４は紐線文系粗製土器深鉢。口縁上が狭小の無文帯となり、紐線文はやや間隔のある指圧痕。内面口縁上に凹帯が巡る。５も紐線文系の粗製土器胴部破片。縄文地文に半截竹管状工具による沈線文を斜位および縦位に密集施文している。６は縄文単節LRを施文する。７は砂岩製の磨石。楕円形の礫の表裏面および側面に磨面が認められ、とくに側面使用痕は顕著である。また表面中央に敲打痕が確認できる。長さ12.153㎝、幅6.552㎝、厚さ3.76㎝、重さ419.0ｇである。

床面上から住居の時期を明示する遺物としては少なく加曾利Ｂ式期であるが、特定は困難であるが加曽利Bの後半で３式期と判断できる。



第102図　住居跡SI24実測図



第103図　住居跡SI24出土遺物

第25号住居跡（SI25）（第104図・第105図）

調査区西側、C－Ⅳ区に位置する。また住居跡南西側に土坑SK170が重複している。壁がすでに削平され、炉跡は確認できなかったものの、柱穴および床面の状況により住居跡と判断した。入口施設と考えられる張出部を南に向け、規模は張出部を含めた主軸である南北軸長6.26m、居住主体部は南北軸5.39m、短軸4.86mの円形を呈する。張出部を通る主軸方位はN－12°－Eを指す。張出施設は4本のピット張出部で、開閉部は設けていない。通路の長さ82.0cm、幅60.0cmを測る。壁はすでに削平されていたが、壁に沿って廻ると思われる壁柱穴が19本検出され、規模は径19.0～53.0cm、深さは9.0～37.0cm、平均の深さは21.0cmである。居住内柱穴は3本検出され、いずれも支柱穴である。大きさは径20.0～33.0cm、深さは10.0～40.0cmで、平均の深さは21.67cmである。床面は全体的に堅く締まり検出しやすかった。住居跡覆土は浅く黒褐色土（10YR3/1）の薄い単一層の状況を呈しており、自然堆積層であろう。

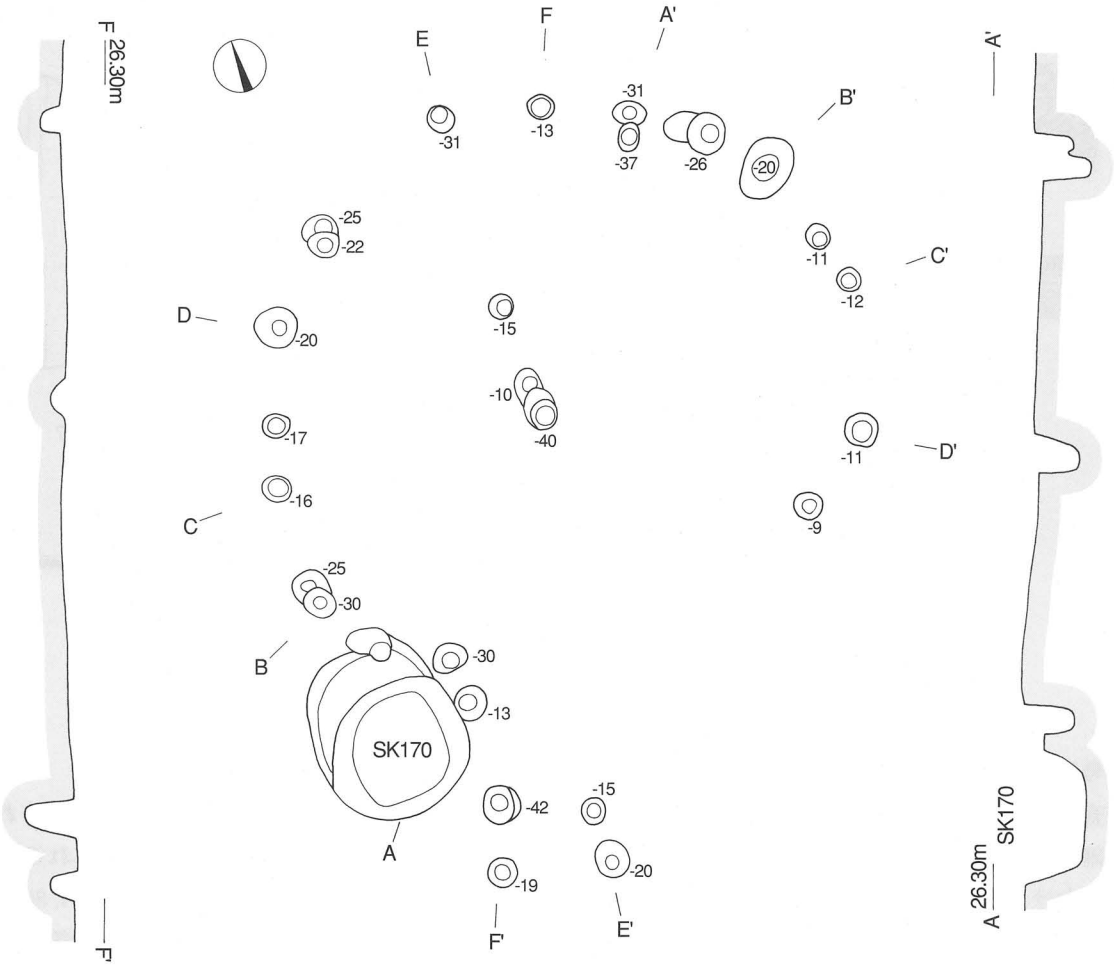
住居床面上より出土した土器は後期前半の土器2点のみである（第105図1・2）。

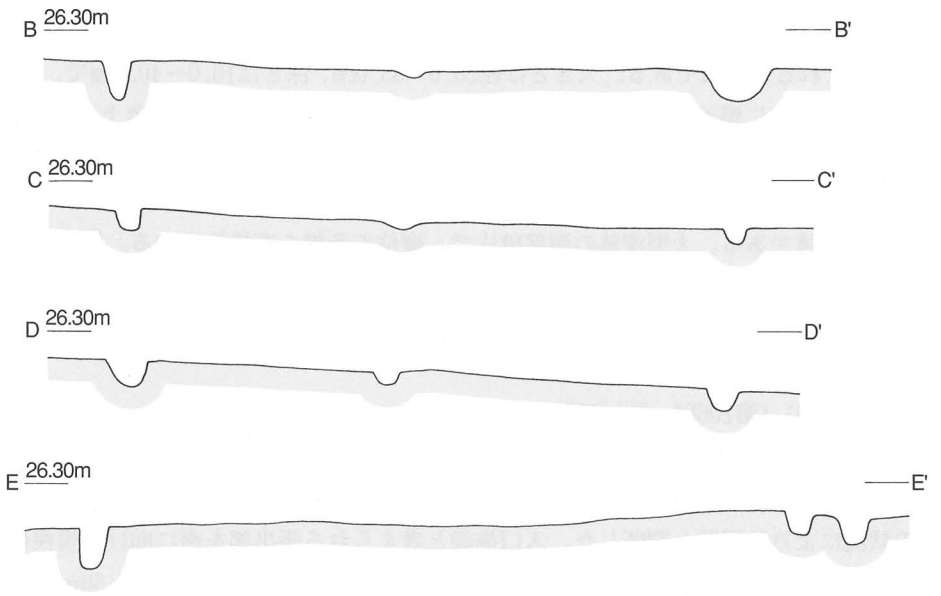
1・2は同一個体である。大型深鉢の胴部破片で、縦位の条線を密接施文する。堀之内1式。

床面上から住居の時期を明示する遺物としてはわずか2点と少ないが、堀之内1式期のものであると判断できる。

第26号住居跡（SI26）（第106図・第107図）

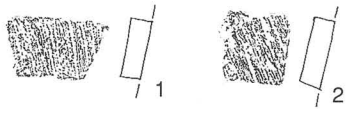
調査区西側、B－Ⅳ、C－Ⅳ区に位置する。北側約半分が未調査区域に広がっている。また南側で土坑SK171、172、173の3基が重複している。なお壁はすでに削平され、炉跡は確認できなかったものの、柱穴および床面の状況により住居跡と判断した。入口施設と考えられる張出部を南に向け、規模は張出部を含めた主軸である南北軸長4.43m、居住主体部は確認される南北軸3.74mを測り、東西軸5.50mの隅丸方形を呈する。張出部を通る主軸方位はN－31°－Wを指す。張出施設は平行する溝状張出部で、ピットが伴う。なお開閉部については土坑が重複しており不明である。通路の長さ123.0cm、幅50.0cmを測る。壁はすでに削平されていたが、壁に沿って廻ると思われる壁柱穴が17本検出され、大きさは径20.0～42.0cm、深さ8.0～43.0cmで、平均の深さは22.44cmである。また居住内柱穴は15本検出され、主柱穴については間尺に合うものはなく、不明である。柱穴の大きさは径19.0～36.0cm、深さ8.0～76.0cmで、平均の深さは24.0cmである。炉跡は確認できなかった。床面は全体的に堅く締まり検出しやすかった。覆土は浅く黒褐色土（10YR3/1）の薄い単一層の状況を呈





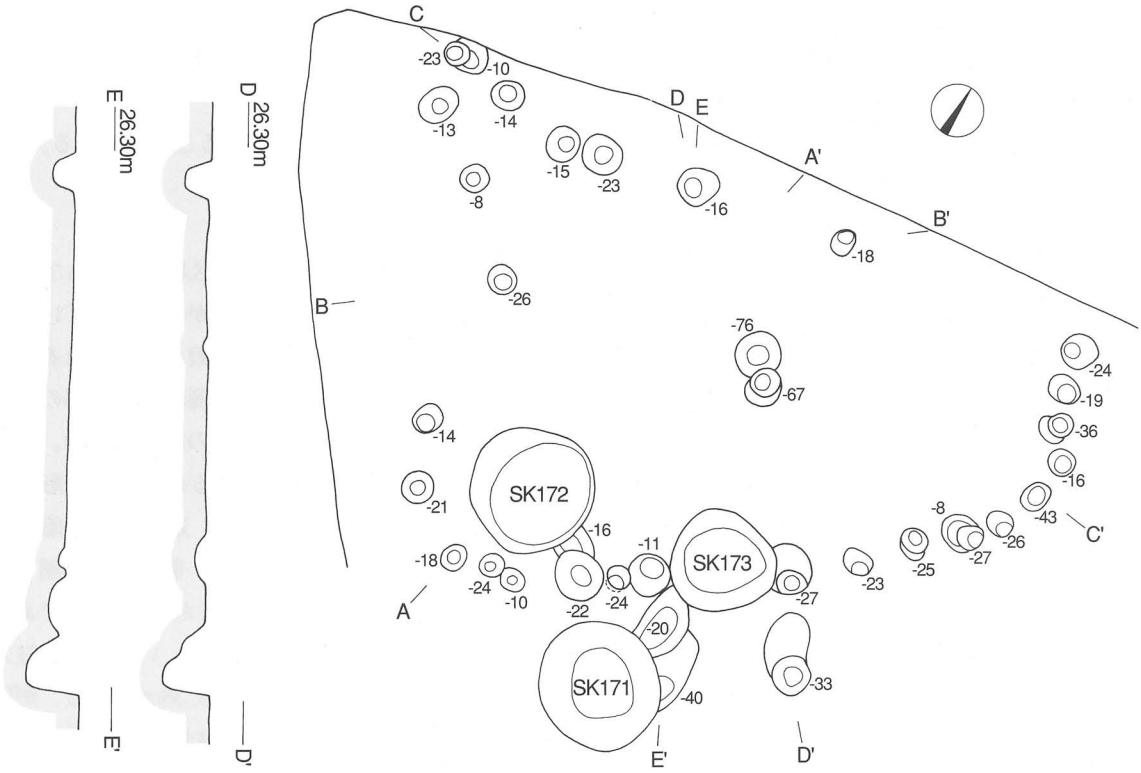
第104図　住居跡SI25実測図

0　2m
(1/60)



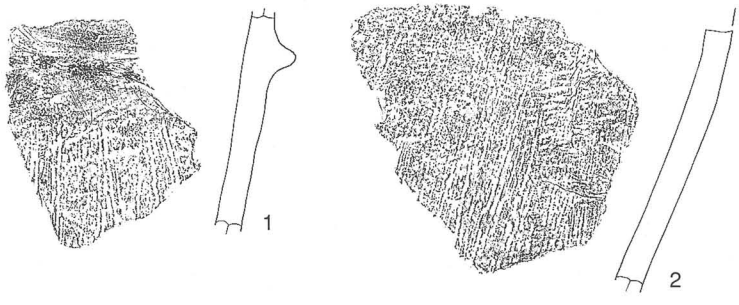
0　10cm
(1/3)

第105図　住居跡SI25出土遺物



第106図　住居跡SI26実測図

0　2m
(1/60)



0　10cm
(1/3)

第107図　住居跡SI26出土遺物

しており、自然堆積層であろう。

第107図は住居床面上より出土した土器で、後期前半堀之内１式土器の破片である。いずれも胴部破片で、大型の深鉢と推定される。１は頸部付近に隆帯を巡らし区画文とし、区画したに縦位の条線を垂下させる。２も胴下半部で条線が垂下する。

遺物は土器のみで全体的に少ないが、出土土器から本住居は堀之内1式期のものであると判断できる。

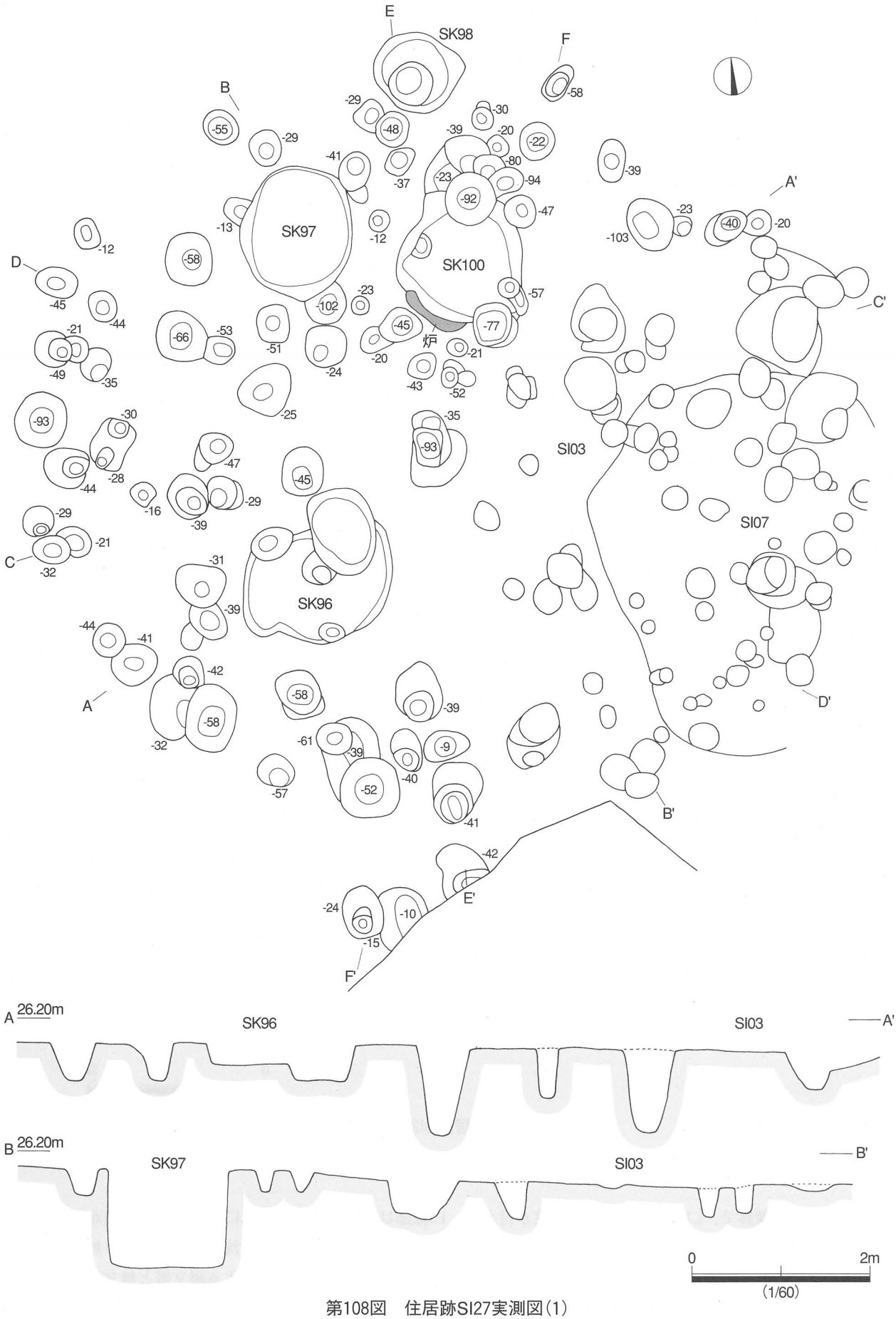
第27号住居跡（SI27）（第108図～第111図）

調査区南東側、J－Ⅴ区の緩傾斜部に位置する。南端にあたる入口部の一部が未調査区域に広がっている。また住居東側で住居SI03および07が重複し、さらに住居内には土坑SK96、97、100の３基が構築されている。なお壁がすでに削平され、炉跡・柱穴および床面の状況により住居跡と判断した。入口施設と考えられる張出部を南に向け、住居壁際の壁柱穴が２列になっていることから拡張住居と推定される。外側新期拡張部の規模は張出部を含めた主軸である南北軸長9.39m、居住主体部は南北軸7.94m、東西軸8.50mの規模をもつ。張出部と炉跡を通る主軸方位はN－２°－Wを指す。張出施設は南端が未調査区域に延びているが、全体の形状は把握可能である。形態は平行するピット連結状張出部で、開閉部については不明である。通路の長さ確認面で55.0cm、幅35.0cmを測る。壁はすでに削平されている。また柱穴の配列も複雑であるが、壁に沿って廻ると思われる壁柱穴が24本検出され、大きさは径26.0～73.0cm、深さ9.0～93.0cmで、平均の深さは40.46cmである。なお、住居内側には16本検出され、深度の深いものもみられるが、間尺に合うものがなく、いずれも支柱穴と判断した。それらの大きさは径19.0～65.0cm、深さは16.0～103.0cmで、平均の深さは38.38cmである。炉跡は住居跡北東寄りに位置し、土坑SK100によって大半が壊されている。確認された大きさは長径67.0cm、短径8.0cm、深さは3.0cmで楕円形を呈するものと思われる。わずかに検出された掘形は浅い皿状に掘り窪めてあり、底面は平坦部が狭小で起伏がなく被熱により赤化硬化しており、覆土は焼土粒を多量に含む赤褐色土（5YR4/6）で覆われていた。床面は全体的に堅く締まり検出しやすかった。覆土は浅く黒褐色土（10YR3/1）の薄い単一層の状況を呈しており、自然堆積層であろう。

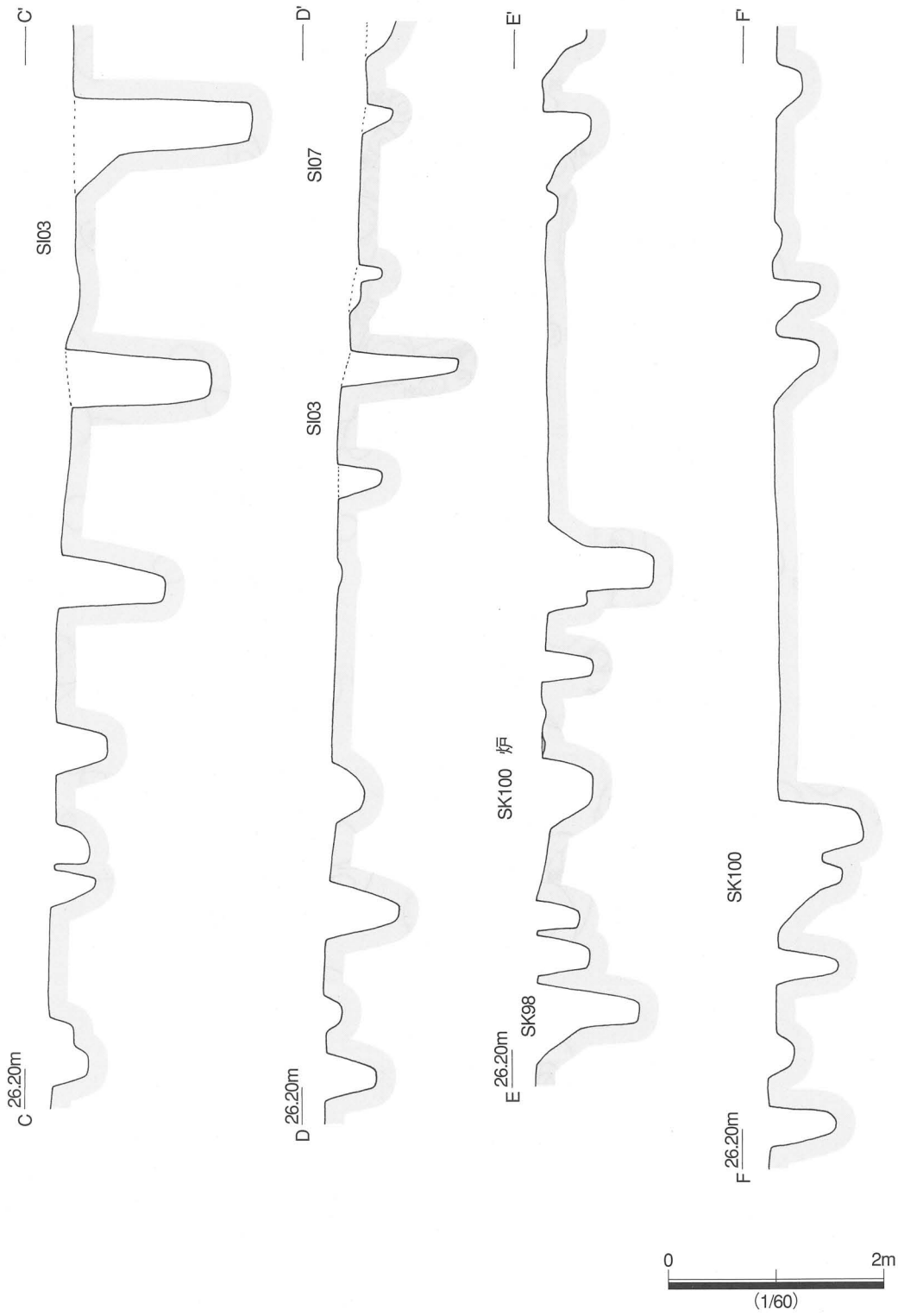
また内側の古期住居もやはり入口施設を設けおり、炉跡は明確ではない。規模は入口部を含めた主軸である南北軸長7.98m、居住主体部は南北軸6.98m、東西軸5.95mの規模をもつ。形態はやはり平行するピット連結状入口部で、開閉部については不明である。通路の長さ確認面で118cm、幅42cmを測る。内側壁柱穴は32本検出され、大きさは径20.0～59.0cm、深さ12.0～102.0cmで、平均の深さは46.97cm。規模は入口部を含めた主軸である南北軸長9.39m、居住主体部は南北軸7.94m、短軸8.50mの規模をもつ。入口施設は平行するピット連結状入口部で、開閉部は設けていない。通路の長さ55.0cm、幅35.0cmを測る。

住居覆土および床面上より出土した土器は製塩土器を含む晩期前半の土器の他、土製品として土製円板１点、土器片円板２点、土版１点。石製品として磨石１点が出土している（第110図１～23、第111図24～36）。

１はわずかに内彎する平縁の深鉢。帯縄文を挟むように横長の貼瘤上に縦位のキザミが施されている。２は内彎する胴部をもつ深鉢で、楕円形を呈した幅狭い隆起刻文帯を中心にそれから派生する水平の隆起刻文帯が連繋し、さらに下段に２列の隆起刻文帯が巡る。胴部下半部は無文帯と縄文帯を沈線により区画される。３はほぼ直線的に外傾する胴部破片。２段の水平帯縄文にいわゆる豚鼻貼瘤が付される。４は口縁部が大きく内傾する。括れ部の平行沈線間に円形刺突文が施される。５は口唇部に凹帯が巡り、口縁部は帯縄文が施文される。６は平底の底部から体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部が波状を呈する浅鉢。口径21.6cm、器高9.4cm、底径11.0cmを測る。波頂部は渦巻状隆帯とキザミを有する小突起が施され、体部は大柄な入組み文が施文される。７は波状口縁を呈する深鉢。口縁部に沿って縄文帯が巡り、三角形区画文内に盲孔を囲む円形文が重畳して配され、さらに三角形区画文間にも盲孔を伴う円形文が重畳する。８は口唇部が僅かに内側に肥厚する深鉢。菱形区画文をもつ。９は帯状の連弧文。10は口縁部が短く外傾する。帯縄文が巡る。11は体部が内彎気味に大きく開く浅鉢。口唇部は凹帯が巡り、体部は弧線文と帯縄文が施文される。12～14は細密沈線文が施文される深鉢。12は口縁部に貼付隆帯を有し、口縁上は狭小の無文帯は沈線区画され、刻文帯が巡る。口縁下は縦位の半月状区画文内に矢羽状の細密沈線文が充填される。13・14も弧線区画文内に矢羽状細密沈線文が充填される。15は口縁部が内彎気

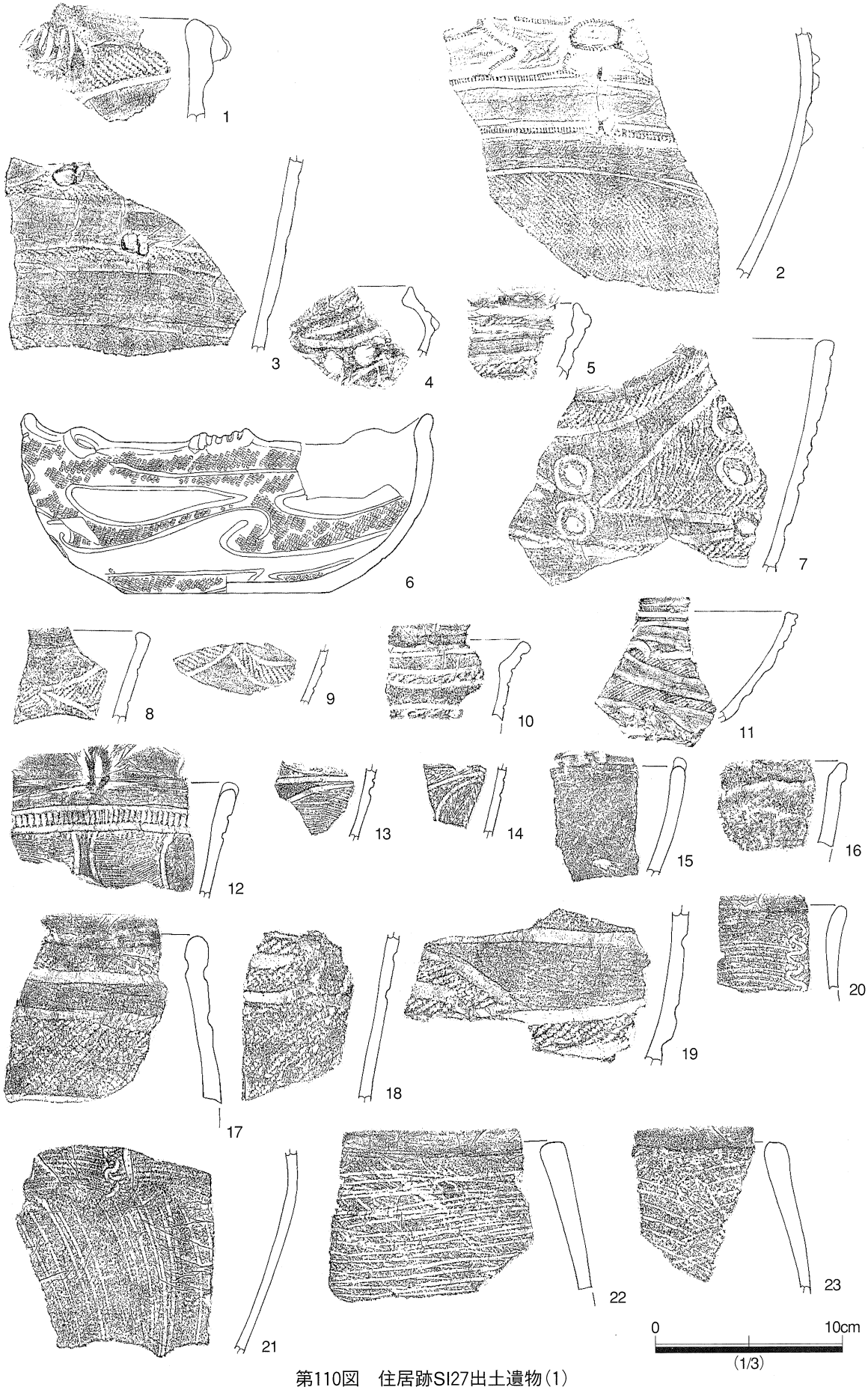


第108図　住居跡SI27実測図(1)

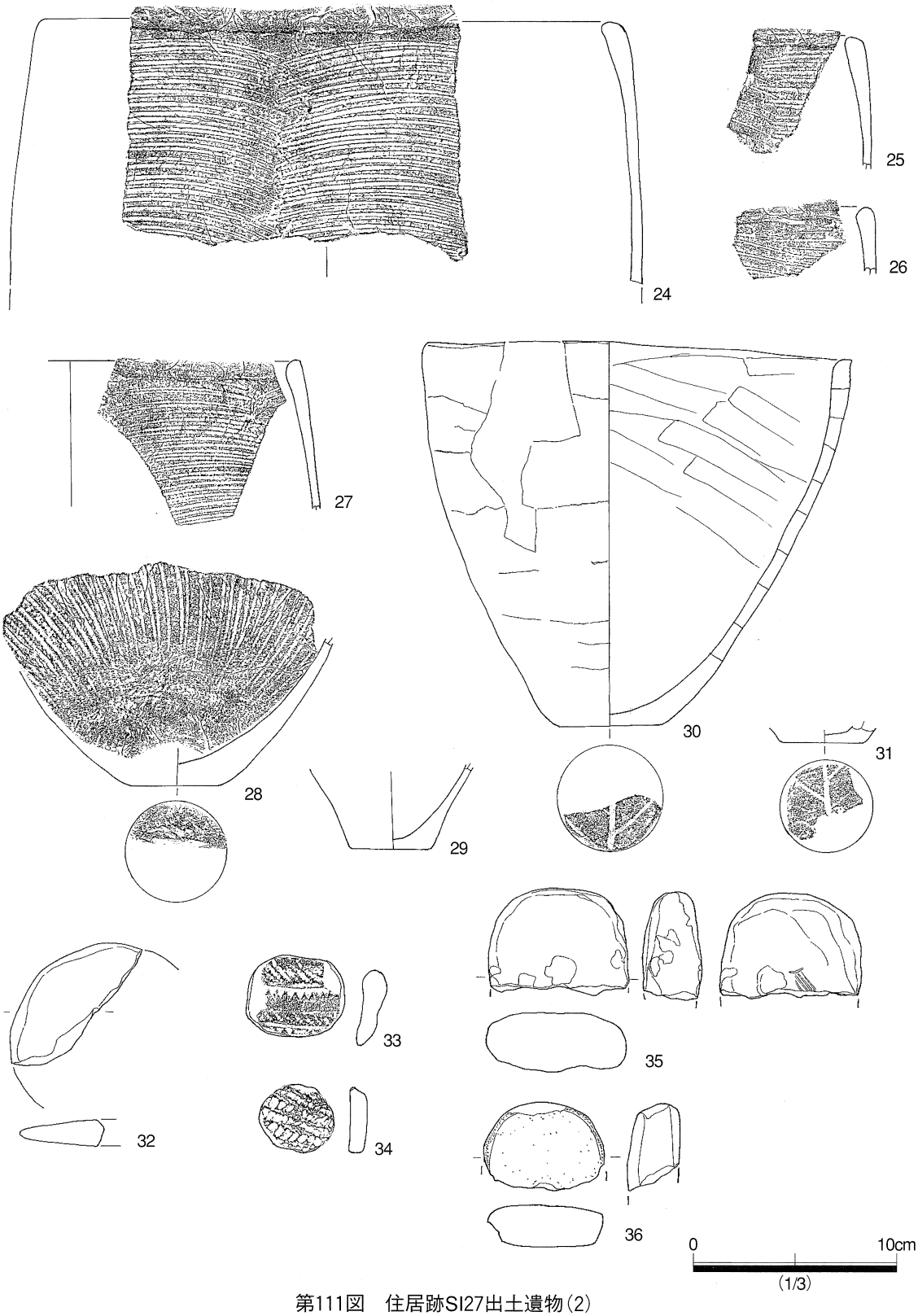


第109図　住居跡SI27実測図(2)

味に外傾する深鉢で、口唇部に二瘤状貼付文が付され、口縁部は無文である。16は口縁上が帯状に僅かに突出する深鉢。無文である。17～19は前浦式に相当する。17は平縁深鉢の口縁部破片。太沈線区画文により無文帯と縄文帯が区画され、内面も太沈線が巡る。18・19は胴部破片。太沈線による区画文による縄文帯と無文帯が区画される。20～28は粗製深鉢土器である。20は口唇部が丸みをもち、やや肥厚し、口縁部がほぼ垂直気味に立ちあ



第110図　住居跡SI27出土遺物(1)



第111図　住居跡SI27出土遺物(2)

がる。横位の条線上に蛇行沈線文が垂下する。21は胴部下半の破片。口縁部は横位、胴部は縦位の条線で、口縁部下部には半截竹管状工具によるコンパス文が垂下する。22～27は口唇部が肥厚し丸みをおび、口縁部が内彎する深鉢。横位の弧状条線を密集施文する。28は底部破片である。底面近くまで縦位の弧状条線を施文し、底

部は網代痕である。29も深鉢の底部破片。30・31は製塩土器である。30はほぼ完形の製塩土器である。口径21.0cm、器高18.6cm、底径5.2cmを測る砲弾形を呈している。口唇部は内側がわずかに丸みをもち内削状を呈し、底面は平坦で木葉痕を残置させている。体部は内彎気味に外傾して開き、外面ナデ整形で輪積み痕を残存させ、内面は比較的丁寧なハケ状のナデ整形で仕上げている。31は底部のみの破片で、木葉痕を残置させている。

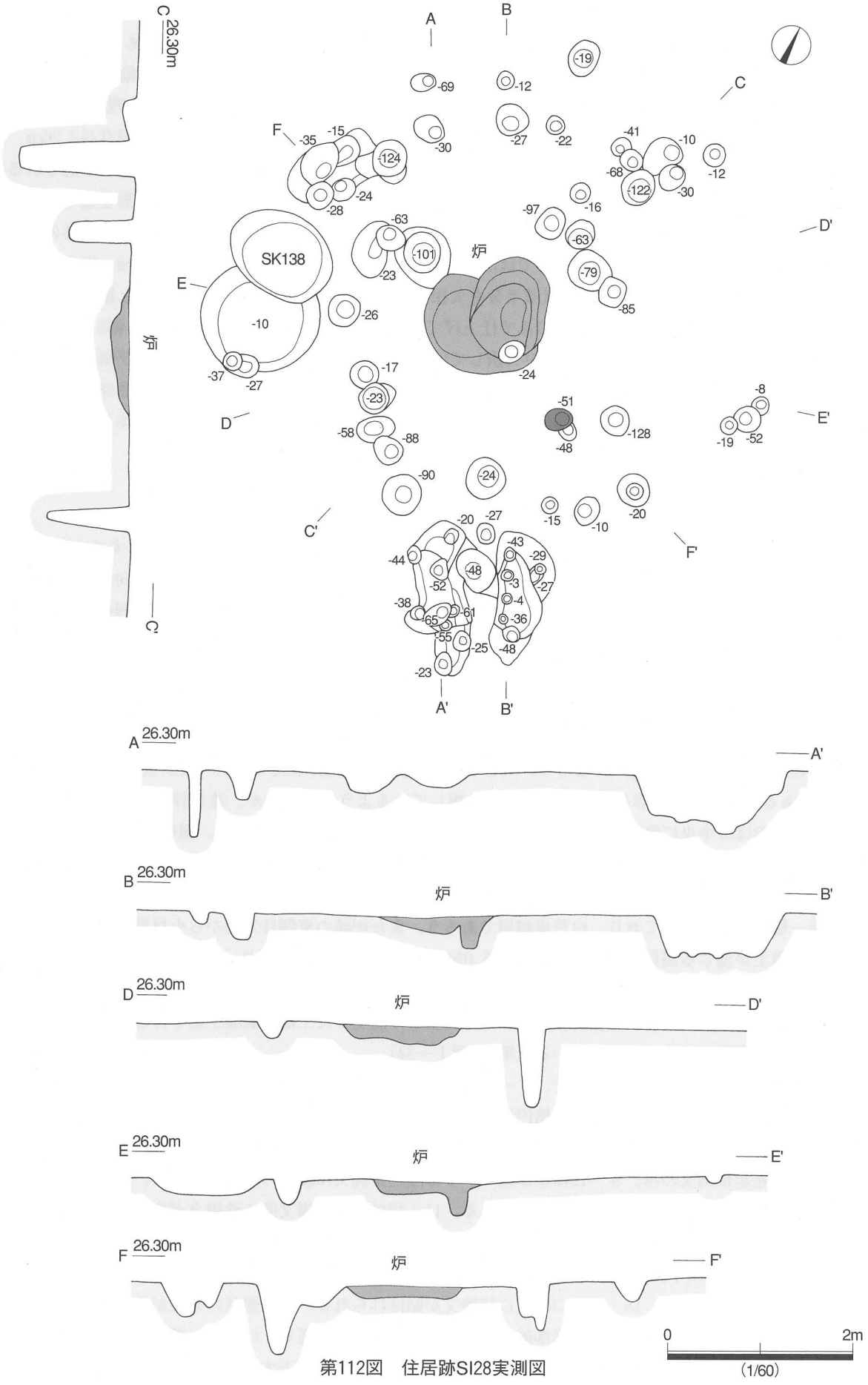
32は土製円板の欠損品。ほぼ円形を呈していたものであろう。推定径9.4cm前後を測る。現存長8.26cm、幅3.51cm、厚さ1.38cm。中央を厚く、周縁辺部を薄くし、表裏面ともナデ整形。中央穿孔の存在が予想される。33・34は土器片利用の円板である。33は精製土器の口縁部破片を再利用しており、隅丸長方形を呈し、全周比較的丁寧な研磨が施されている。長さ3.76cm、幅4.53cm、厚さ1.21cm、重量19.5ｇを測る。34は深鉢の胴部破片を再利用している。打欠成形によるものでほぼ円形を呈する。法量は長さ3.29cm、幅3.59cm、厚さ0.70cm、重量14.58ｇを測る。35は土版である。ほぼ半分を欠損しており、石鹸形を呈していたものと推定される。表裏面および側面の整形は粗く、ナデ整形のみで仕上げている。現存する法量は長さ4.965cm、幅6.842cm、厚さ2.71cm、重さ105.0ｇを測る。36は約半分が欠損している安山岩製の磨石である。両面および側面には使用痕である磨面が明瞭に残されている。現存の法量は長さ4.134cm、幅5.932cm、厚さ2.44cm、重さ68.0ｇである。

床面上から住居の時期を明示する土器としては安行3a式・3b式と前浦式がみられるが、主体となるのは安行3b式期である。したがって本住居は安行3b式期のものであると判断できる。

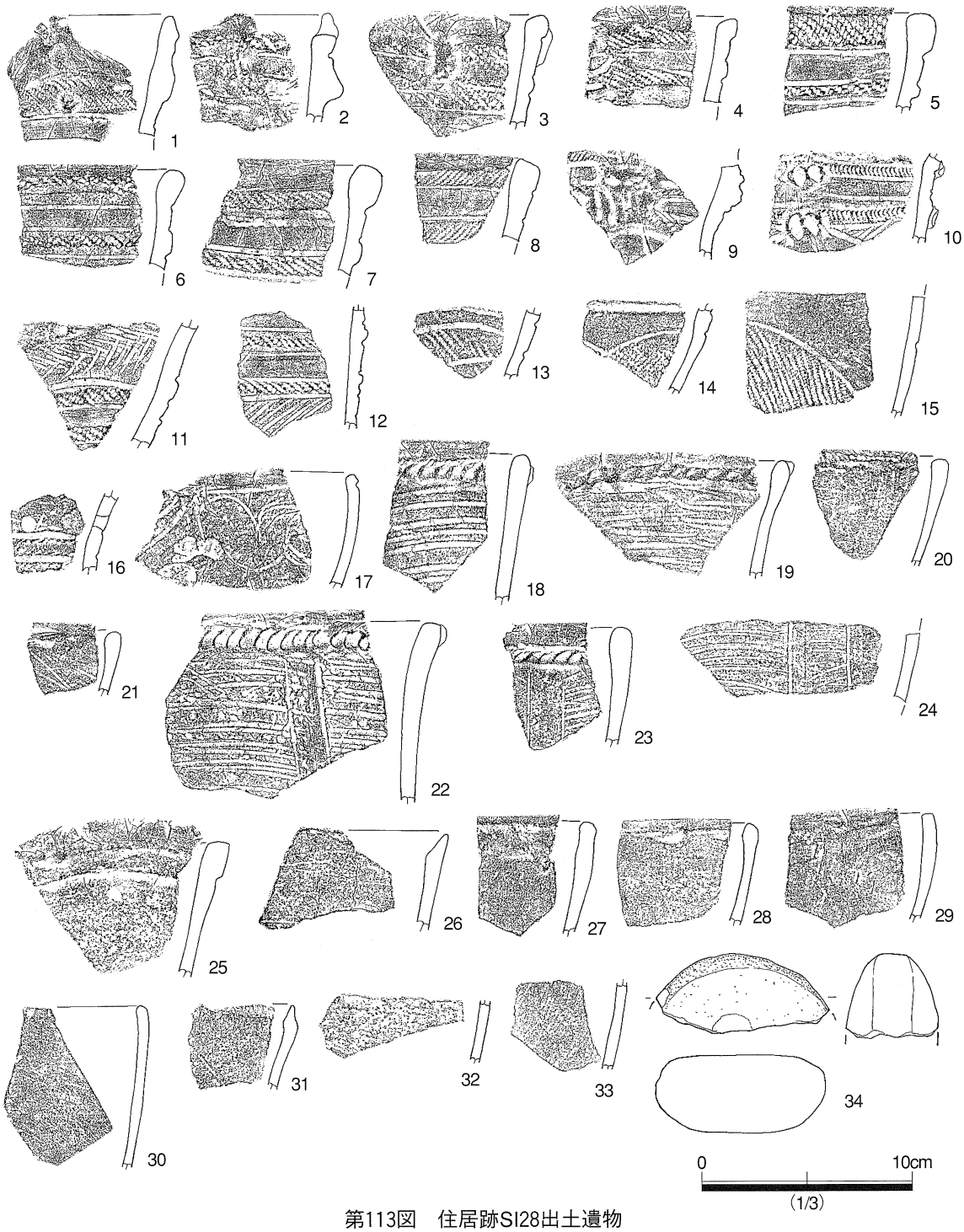
第28号住居跡（SI28）（第112図・第113図）

調査区中央、F－Ⅳ・Ⅴ区に位置する。住居跡西側で土坑SK138が重複している。なお壁はすでに削平され、炉跡・柱穴および床面の状況により住居跡と判断した。入口施設と考えられる張出部を南に向け、規模は張出部を含めた主軸である南北軸長は6.31ｍ、居住主体部は南北軸5.29ｍ、東西軸5.82ｍの楕円形を呈する。張出部と炉跡を通る主軸方位はN－23°－Wを指す。張出施設は平行する土坑状張出部で、遺構内に多数ピットが穿ってある。また内側にピットによる区切られた開閉部があり、通路の長さ160.0cm、幅36.0cmを測る。壁はすでに削平されていたが、壁に沿って廻ると思われる壁柱穴が15本検出され、大きさは径17.0～50.0cm、深さ8.0～69.0cmで、平均の深さ25.13cmである。また住居内に13本の柱穴が検出されているが、うち深度88～101cmの４本が主柱穴で、その他が支柱穴になろう。大きさは径19.0～65.0cm、深さは10.0～128.0cmで、平均の深さは54.33cmである。炉跡は楕円形を呈した炉が２基重複しているようにみえるが、造り替えられたものと推定される。住居跡のほぼ中央に位置し、長径110.0cm、短径78.0cm、深さ19.0cmである。掘形は鍋底状に掘り窪め、底面は平坦部分と起伏部がみられ、一様ではない。覆土は焼土粒を多量に含む赤褐色土（5YR4/6）で覆われていた。床面は全体的に堅く締まり炉跡周辺がとくに顕著であった。覆土は全体的に浅く黒褐色土（10YR3/1）の薄い単一層の状況を呈しており、自然堆積層であろう。また炉跡の東側柱穴内から小貝層ブロックが検出された。黒褐色土が混じる混貝土層で、規模は径15.0×15.0cm、層厚5.0cmを測り、ハマグリを主体にオキシジミの他、僅かにサルボウ・アカニシが混入していた。さらに獣骨としてイノシシ、シカ、魚骨としてクロダイ、ハゼ、ウナギが検出された。また住居覆土および床面上より出土した土器は製塩土器を含む後期後半の土器の他、石製品として磨石１点が出土している（第113図１～34）。

１～16は隆起帯縄文を施文するもので、１～８は口縁部破片。１は波状口縁の深鉢。波頂部は三角形の山形を呈し、隆起帯縄文を施し、波頂部から楕円形の貼瘤を貼り付ける。２は平縁で、口唇部に小突起を有する。やはり隆起帯縄文に挟まれるように楕円形貼瘤が付される。３も同様隆起帯縄文を挟むように貼瘤が付される。４～８は隆起帯縄文のみ。９～16は胴部破片。９は隆起帯縄文に横長の貼瘤が付され、貼瘤にキザミが施されている。10は隆起刻文帯に双刺押瘤が付される。11・12は隆起帯縄文間に沈線文が施文されるもので、11は綾杉状沈線、12は斜行沈線を充填する。13は平行する弧線文。14・15は磨消弧線文。16は帯縄文に円形の穿孔を伴う。17は口縁部が内彎する深鉢。口縁上に沈線が１条巡り、口縁部は横位のコンパス文が施文される。18～24は紐線文系粗製土器。18・19は口縁上に紐線文が貼付けられる。上向弧状の条線が施文される。20・21は紐線文が欠落している。22・23は口縁部破片で、指圧痕の紐線文が巡る。口縁部は縄文地文に上向き弧状の条線を施文し、磨消懸垂文が垂下する。24は胴部破片。磨消懸垂文が垂下する。25は口縁上が肥厚する無文の



第112図　住居跡SI28実測図



第113図　住居跡SI28出土遺物

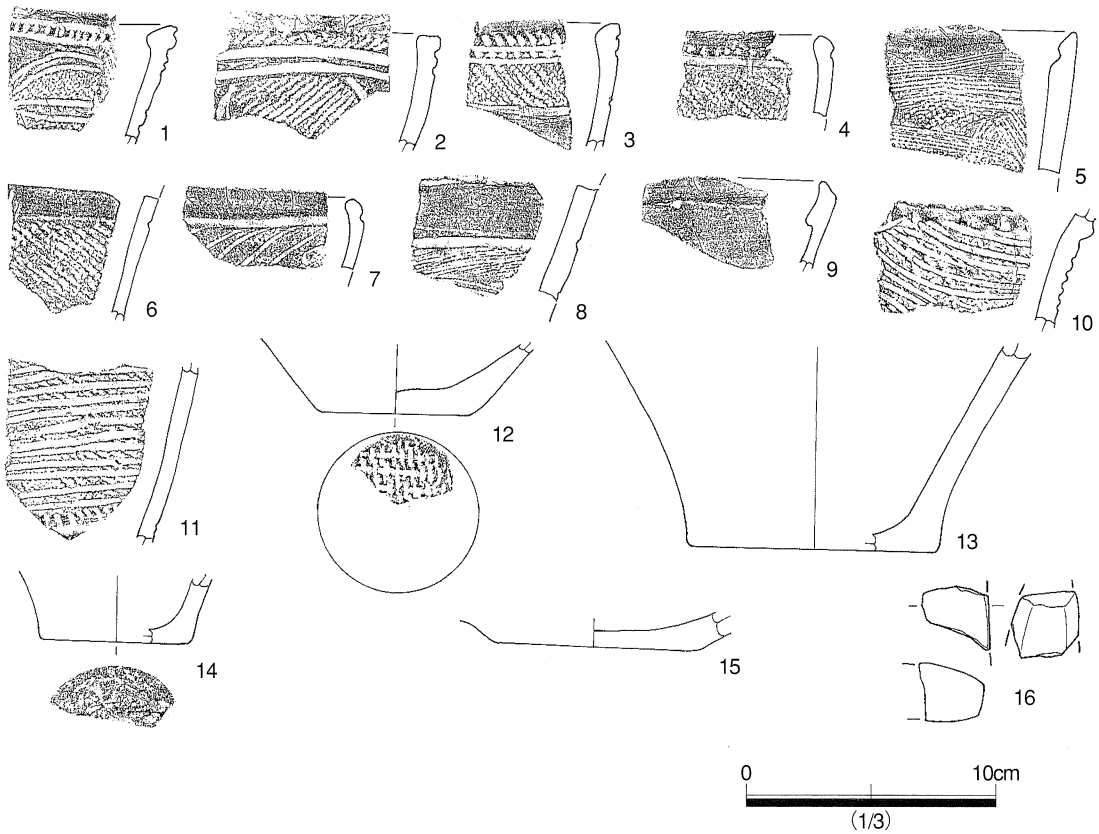
深鉢。単口縁で、体部は直線的に外傾して立ちあがる。26は内削状を呈した無文の浅鉢。27～33は製塩土器である。27・28・30の口唇部は丸みをもち、29はヘラ切りされ面取りされている。31は指頭により押さえられ先尖状を呈する。32・33は胴部破片。内外面とも平坦であり、ヘラナデによって比較的丁寧に整形されている。34は安山岩製の磨石の欠損品である。表裏面および側面が明瞭にわかるように研磨している。表面中央部は敲打による凹みが認められる。現長3.783㎝、幅8.216㎝、厚さ4.17㎝、重さ148.0ｇ である。床面上から住居の時期を明示する土器としては安行１式・２式がみられるが、主体となるのは安行１式期である。したがって本住居は安行１式期のものであると判断できる。

第29号住居跡（SI29）（第114図・第115図）

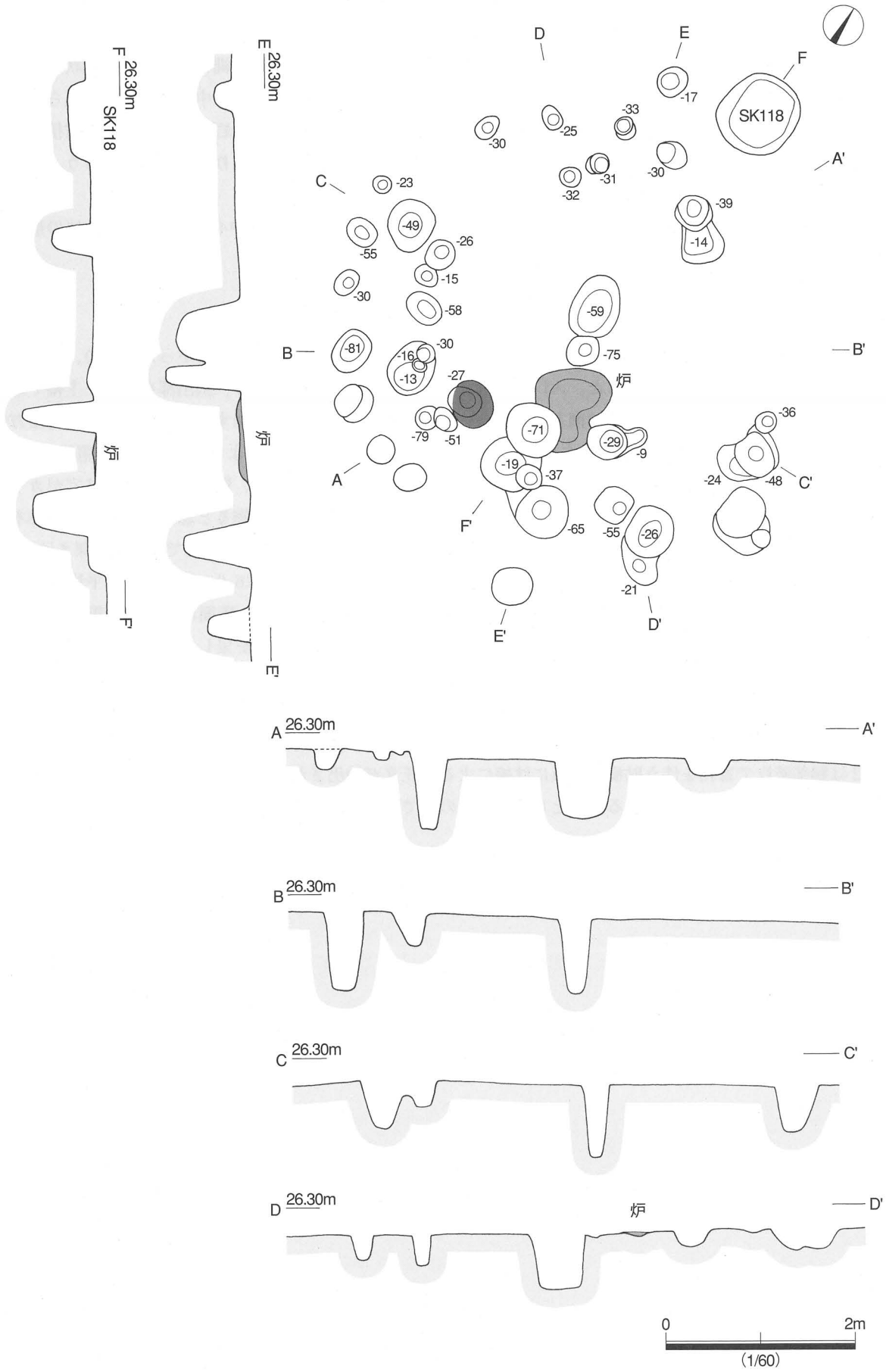
調査区中央、G－Ⅳ、H－Ⅳ区に位置する住居跡北側で土坑SK118が重複している。なお壁がすでに削平され、炉跡・柱穴および床面の状況により住居跡と判断した。入口施設と考えられる張出部を南に向け、規模は張出部を含めた主軸である南北軸長5.40mを測る。居住主体部は南北軸4.70m、東西軸4.65mの円形を呈する。張出部と炉跡を通る主軸方位はN－34°－Wを指す。張出施設は平行するピット列により構築されている。また開閉部は確認できなかった。通路の長さ85.0cm、幅65.0cmを測る。壁はすでに削平されていたが、壁に沿って廻ると思われる壁柱穴が24本検出され、大きさは径19.0～55.0cm、深さは17.0～81.0cmで、平均の深さは37.21cmである。また住居内柱穴は13本検出され、炉跡周囲に深度50cm前後の柱穴４本が主柱穴と思われる。またその他は支柱穴で大きさは径22.0～65.0cm、深さは9.0～71.0cmで、平均の深さは27.0cmである。炉跡は中軸線上入口寄り（南側寄り）にある。大きさは長径86.0cm、短径75.0cmの不整楕円形を呈し、深さは8.0cmである。掘形は浅い皿状に掘り窪めてあり、底面の平坦部は狭小で起伏がなく被熱により赤化硬化しており、覆土は焼土粒を多量に含む赤褐色土（5YR4/6）で覆われていた。住居跡覆土は浅く黒褐色土（10YR3/1）の薄い単一層の状況を呈しており自然堆積層であろう。また炉跡の西側柱穴内から小貝層ブロックが検出された。黒褐色土が混じる混貝土層で、規模は径30.0×30.0cm、層厚5.0cmを測り、ハマグリ、オキシジミを主体に、シオフキ、サルボウを含み、僅かにアカニシが混入していた。また魚骨としてウナギ、タイ、ハゼ、ボラ、コイが検出されました。

住居覆土及び、床面上より出土した土器は後期後半の土器で、加曾利B2式期から曽谷式期であり、主体は加曾利B3から曽谷式期である。

１～４は精製の深鉢。１・３・４は口縁下に沈線区画された刻文帯が巡る。１は口縁部文様帯が平行沈線を区画文にやはり平行沈線による弧線文が配される。３・４は帯縄文。２は口縁に沿って平行沈線が巡り、弧線磨消が配される。５は口縁部破片。縄文地文に櫛歯状の条線を横位、斜位に施文し、内面の口縁上に沈線が巡



第114図　住居跡SI29出土遺物



第115図　住居跡SI29実測図

る。6は沈線区画文による磨消縄文。7は口縁部破片。口縁部が内彎し、口縁に沿って沈線が巡り、無文帯となり、下位は斜行する沈線文が施文される。8は胴部破片。沈線間を磨消、下位に密集条線が施文される。9は内面が幅広く肥厚する浅鉢。無文である。10・11は粗製深鉢の胴部破片。10は縄文地文に下向弧状の条線を施し、胴部中位に紐線文を巡らし区画とする。11は縄文地文に横位の条線を施し、中位に刻文帯を巡らす。12～15は底部破片。12・14は網代痕を残置させる。15は浅鉢の底部である。16は砂岩製の磨製石斧の破損品である。残存している表裏面および側面は比較的丁寧に研磨され、形が整えられており、定角式となろう。現存長2.48cm、幅2.514cm、厚さ2.507cm、重さ21.5gである。

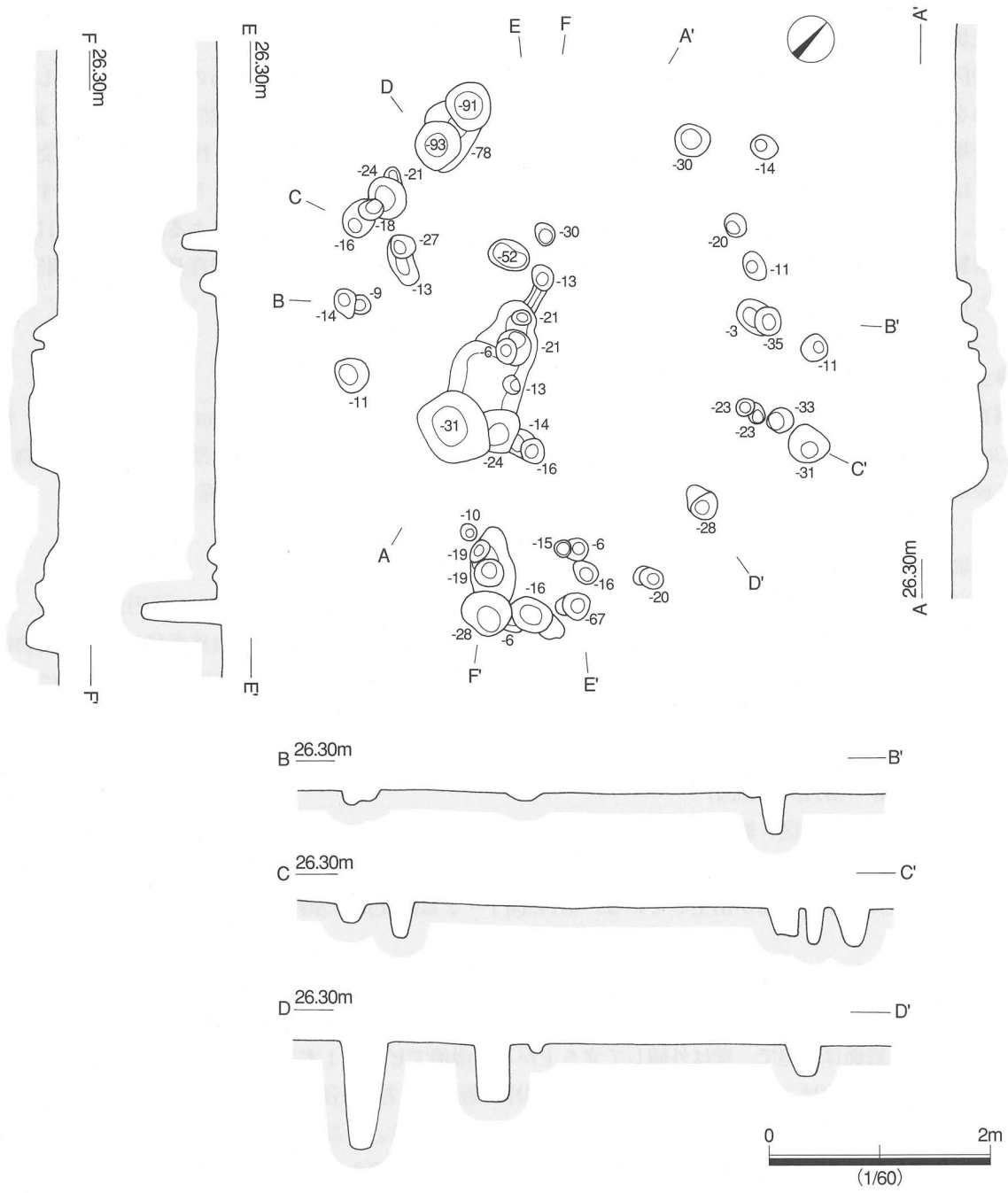
床面上から住居の時期を明示する遺物としては加曽利B3式期から曽谷式期が中心であり、また住居の形態や炉の状況などからみて、本住居は曽谷式期のものであると判断できる。

第30号住居跡（SI30）（第116図・第117図）

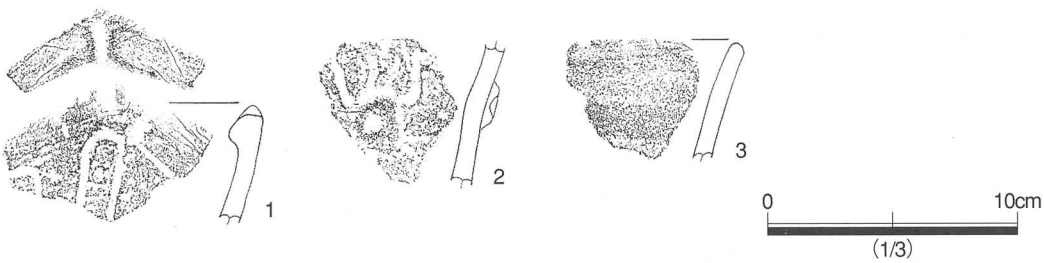
調査区西側、D－Ⅳ区に位置する。壁がすでに削平され、しかも炉跡も確認できなかったものの、柱穴および床面の状況により住居跡と判断した。入口部と考えられる張出部を南東に向け、張出部を含めた主軸である南北軸長5.19mを測り、居住主体部は南北軸4.50m、東西軸長4.45mの円形を呈する。張出部を通る主軸方位はN－45°－Wを指す。張出施設は平行するピット状張出部で、外側もピットにより区切られた開閉部があり、通路の長さ95.0cm、幅40.0cmを測る。竪穴の北西隅はすでに削平されていたが、壁に沿って廻る柱穴がカットされた面にかろうじて検出できた。壁はすでに削平されていたが、壁に沿って廻ると思われる壁柱穴が18本検出され、内側柱穴は29本検出され、規模は径18.0～74.0cm、柱穴の深さは13.0～31.0cmで、平均の深さは19.72cm前後を測る。壁柱穴は18本検出され、規模は径24.0～45.0cm、柱穴の深さは6.0～93.0cmで、平均の深さは31.55cm前後を測る。竪穴の内側へ向って傾斜しているものがいくつかあった。床面は全体的に堅く締まり検出しやすかった。住居跡覆土は浅く黒褐色土（10YR3/1）の薄い単一層の状況を呈しており、自然堆積層である。

住居覆土および床面上より出土した土器は後期初頭の土器のみ3点出土している（第117図1～3）。1は波状口縁の深鉢。波頂部は三角の山形状を呈し、口唇部は肥厚する。波頂部から沈線による枠状懸垂文が垂下する。2は胴部破片で盲孔を伴う貼瘤を起点に沈線による意匠文が抽出される。3は無文の深鉢である。

床面上から住居の時期を明示する遺物としては土器のみで、わずか3点のみを図示した。称名寺式期のものであると判断できる。



第116図　住居跡SI30実測図



第117図　住居跡SI30出土遺物

第2節　土坑

1号土坑（SK01）（第118・145図）

調査区の南側、G－Ⅷ区、標高26.12mに位置する。規模は長軸1.07m、短軸1.05mの隅丸方形を呈し、深さ38.7cmを測る。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がる。覆土は3層に分層でき、自然堆積層である。遺物は、縄文後期前半の土器と磨製石斧1点が出土している。第145図1は無文帯の口縁下を沈線区画し、縄文施文する。2は垂下する平行沈線間に列点文を充填。3は口唇部に押圧を加えた刻目。4・5は口縁に並行する平行沈線文。6は縄文施文。7・8は条線文を波状、弧状に施文する。9・10は単沈線による格子目文。11は砂岩製の磨製石斧の刃部側破片。全面丁寧に研磨され、刃部までの稜線も明瞭である。現存長7.047cm、幅5.49cm、厚さ2.77cm、重量181.5g。時期は堀之内1式期に比定される。

2号土坑（SK02）（第118・145図）

調査区の南側、G－Ⅷ区、標高26.12mに位置する。規模は長軸1.23m、短軸1.10mの楕円形を呈し、深さ46.3cmを測る。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がる。覆土は2層に分層できる自然堆積である。遺物は、縄文後期前半の土器が出土している。第145図1は口縁部、2は胴部破片でいずれも縄文地文である。

3号土坑（SK03）（第118・145図）

調査区の南側、G－Ⅷ区、標高26.11mに位置する。規模は長軸1.05m、短軸0.82mの楕円形を呈し、深さ41.9cmを測る。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がる。覆土は2層に分層できる自然堆積である。遺物は、縄文後期前半の土器が出土している。第145図1は口縁部破片。口縁に沿って沈線が巡る。2は沈線による懸垂文。3は横位の沈線文。

4号土坑（SK04）（第118・145図）

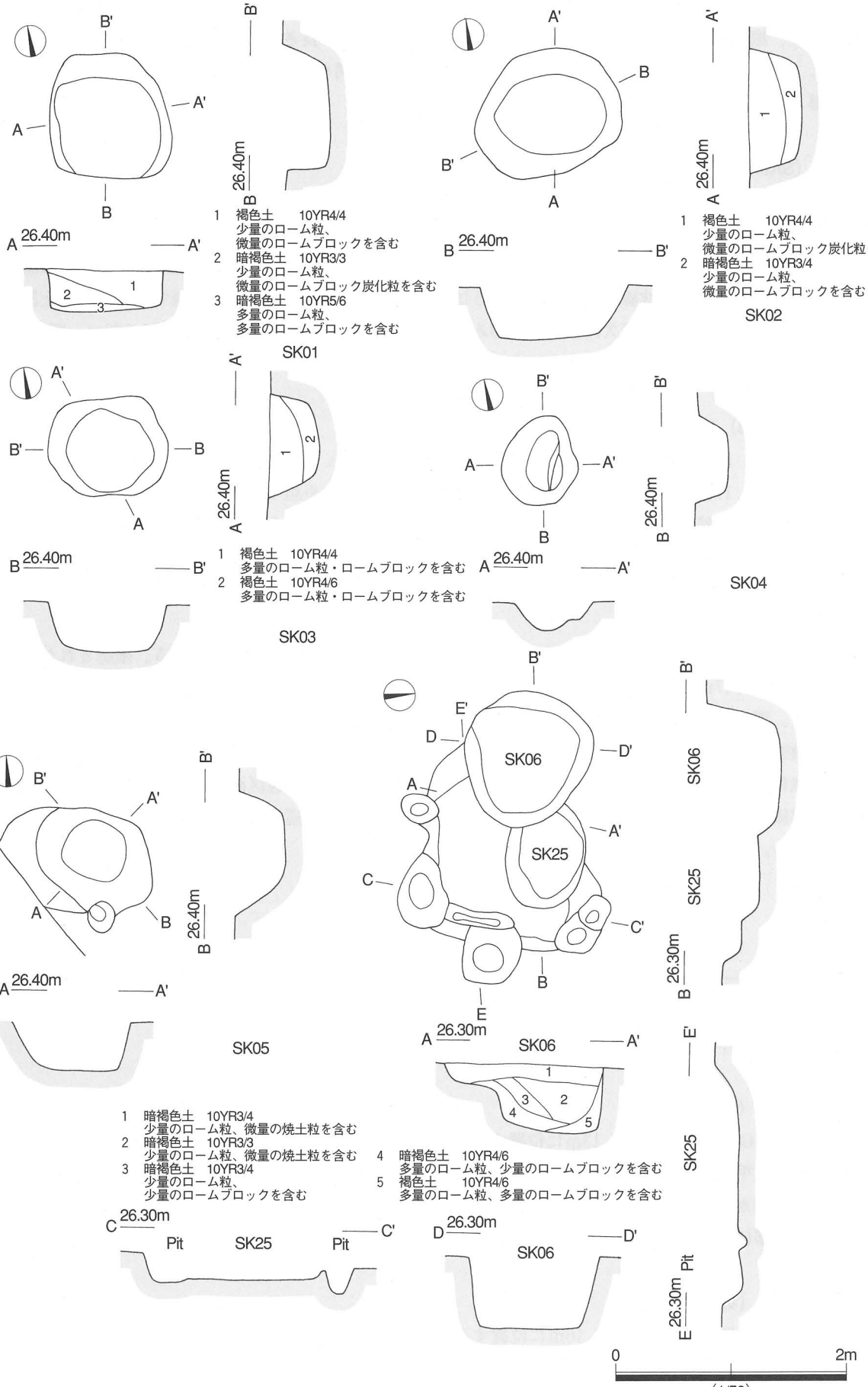
調査区の南側、G－Ⅷ区、標高26.10mに位置する。規模は長軸0.76m、短軸0.66mの楕円形を呈し、深さ24.5cmを測る。底面は南東部が一段高くなり、壁は外傾して立ち上がる。覆土は褐色土層の単一層からなる。遺物は、縄文後期前半の土器が出土している。第145図1・2は無文地の深鉢。

5号土坑（SK05）（第118・145図）

調査区の南西側、F－Ⅷ区、標高26.14mに位置する。規模は長軸1.08m、短軸1.03mの楕円形を呈し、深さ39.7cmを測る。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がる。南端でピット1本を伴う。覆土は3層に分層できる自然堆積である。遺物は、縄文後期前半の土器、土器片円板1点、打製石斧1点が出土している。第145図1は隆帯区画。2は平行沈線による弧線文。3は三角文。4は底部破片。5は土器片円板である。無文土器の胴部破片を再利用している。全周丁寧な研磨が施されている。法量は長さ2.989cm、幅2.981cm、厚さ0.654cm、重量8.02gを測る。6は安山岩製の分銅形打製石斧である。表裏面に原礫面を残置している。両側縁の抉り部は丁寧な調整剥離が施されている。長さ8.464cm、刃幅6.072cm、最大厚1.90cm、重量108.0gである。

6号土坑（SK06）（第118・146図）

調査区の南西側、F－Ⅷ区、標高26.12mに位置し、北東側で土坑SK25を切っている。規模は長軸1.14m、短軸1.11mの略円形を呈し、深さ63.0cmを測る。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がる。覆土は5層に分層でき、自然堆積層である。遺物は、縄文後期初頭の土器と土器片錘3点が出土している。第146図1は口縁部で、口縁上は沈線区画により幅狭い無文帯。口縁下は弧線沈線内に縄文を充填する。2は波状口縁の深鉢で、波頂部から平行沈線間に刻目の懸垂文が垂下し、M字モチーフを描く。3は弧線状による縄文帯と無文帯。4は波状口縁となろう。波頂部が顎状に突出する。5は平行沈線が垂下し、列点文が施文される。6・7は単沈線による格子目文。8は環状把手。9は深鉢の底部破片。10～12は土器片錘。いずれも胴部破片の再利用。10は台



第118図　土坑SK01, 02, 03, 04, 05, 06, 25実測図

形を呈し、短軸に紐掛け溝を入れる。打欠け成形のみ。長さ4.19cm、幅5.40cm、厚さ1.09cm、重量25.28ｇ。11は方形を呈し、短軸に紐掛け溝を入れる。全周研磨が施されている。長さ4.86cm、幅4.36cm、厚さ1.02cm、重量24.44ｇ。12は一部欠損している。長方形を呈し、長軸に紐掛け溝を入れる。打欠成形のみ。長さ3.82cm、幅3.28cm、厚さ1.06cm、重量15.20ｇを測る。称名寺式期。

7A号土坑（SK07A）（第119・146図）

調査区の南西側、F－Ⅷ区、標高26.13ｍに位置し、南東側で土坑SK07Bを切っている。長軸1.95ｍ、短軸1.17ｍの楕円形を呈し、深さ39.0cmを測る。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がる。覆土は２層に分層でき、自然堆積層である。遺物は、縄文後期前半の土器と土器片円板１点が出土している。第146図１～３は深鉢胴部破片。１は縄文地文に斜行沈線。２は条線文。３は縄文地文である。４は土器片円板である。粗製土器の胴部破片を再利用している。周囲打欠の後、半面のみ研磨が施されている。長さ5.11cm、幅5.066cm、厚さ0.992cm、重量31.34ｇを測る。

7号B土坑（SK07B）（第119図）

調査区の南西側、F－Ⅷ区、標高26.13ｍに位置し、北西側で大きく土坑SK07Aに切られている。検出規模は長軸1.95ｍ、短軸1.17ｍで円形であろう。深さ39.0cmを測る。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がる。覆土は２層に分層でき、自然堆積層である。遺物の出土はないが、SK07Aに切られていることから縄文時代に比定される。

8号土坑（SK08）（第119・146図）

調査区の南側、H－Ⅷ区、標高26.18ｍに位置し、南側約半分は未調査区域に延びている。確認された規模は長軸1.43ｍ、短軸0.47ｍの楕円形と推定され、深さ77.9cmを測る。底面は平坦で、壁は垂直気味に立ち上がる円筒形である。覆土は４層に分層でき、自然堆積層である。遺物は、縄文後期前半の土器が出土している。第146図１は口唇部が凹帯となり、縄文地文。２は口唇部が刻目で、口縁上は沈線区画。列点文を充填する。３は沈線による無作為な格子目文。４は条線による弧線文。５は口縁部上を沈線区画により無文帯とし、体部は条線文が縦位密接施文する。６は胴部中位に縄文地文に横位の押引き文を巡らす。７は縄文地文に沈線による懸垂文を垂下する。堀之内１式期。

9号土坑（SK09）（第119図）

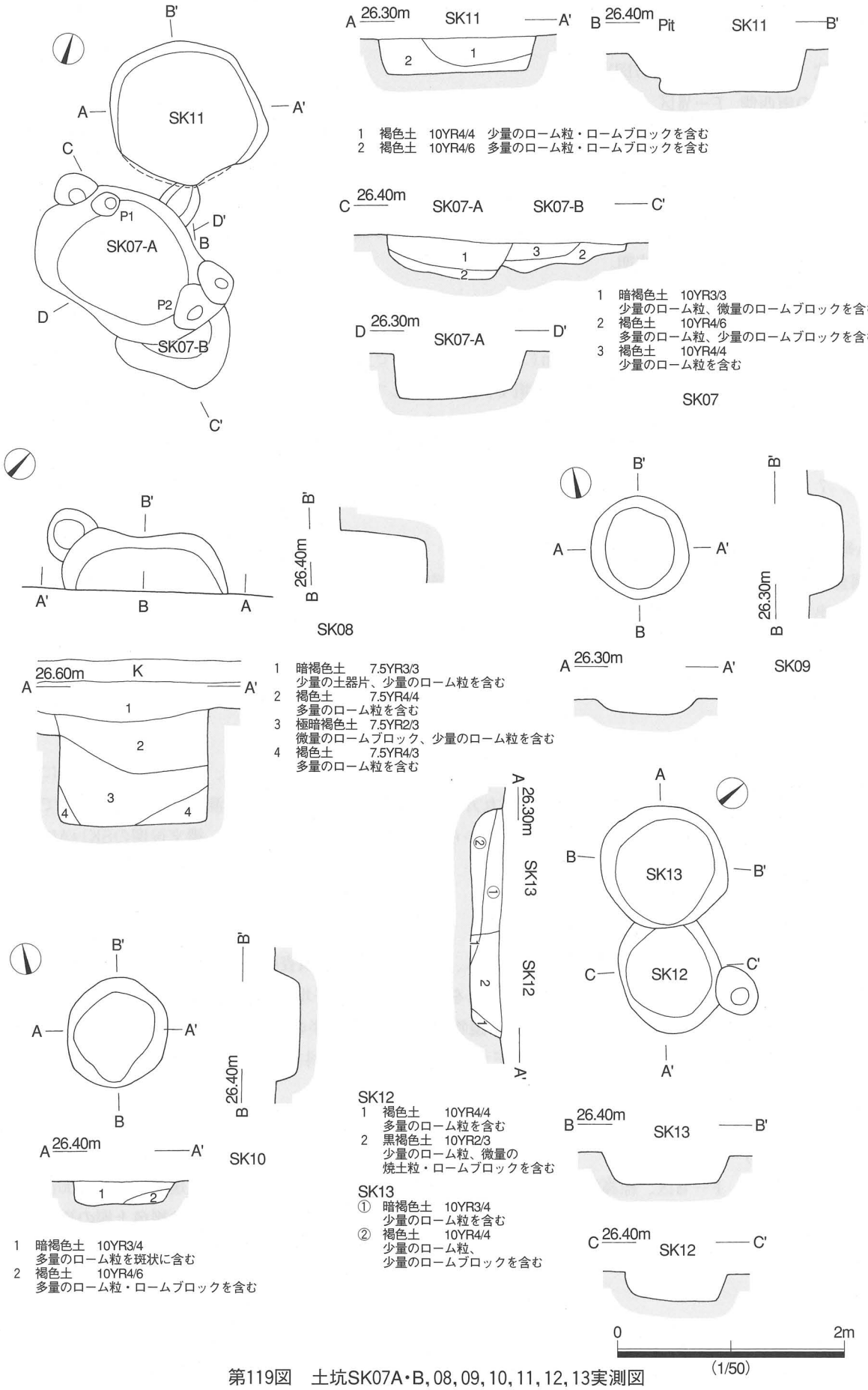
調査区の南側、G－Ⅷ区、標高26.02ｍに位置する。長軸0.91ｍ、短軸0.86ｍの円形を呈し、深さ30.5cmを測る。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がる。覆土は黒褐色土層の単一層からなる自然堆積層である。遺物の出土はなく、時期は不明であるが、覆土の状況は縄文時代に比定される。

10号土坑（SK10）（第119・146図）

調査区の南側、G－Ⅷ区、標高26.13ｍに位置する。規模は長軸0.97ｍ、短軸0.86ｍの円形を呈し、深さ21.2cmを測る。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がる。覆土は２層に分層でき、自然堆積層である。遺物は、縄文後期前半の土器が出土している。第146図１は弧線状の平行沈線間に縄文充填と無文部となる。２は口縁上が無文帯で、体部に縦位の条線。３は縦位の条線。４は深鉢の底部破片。称名寺式期。

11号土坑（SK11）（第119・147図）

調査区の南西側、F－Ⅶ区、標高26.16ｍに位置する。長軸1.35ｍ、短軸1.30ｍの円形を呈し、深さ36.3cmを測る。底面は平坦で、壁は南側がわずかにオーバーハングし、弱い袋状をなす。覆土は２層に分層でき、自然堆積層である。遺物は、縄文後期前半の土器が出土している。第147図１は口縁下に沈線が巡り、幅狭い無文帯



第119図　土坑SK07A・B, 08, 09, 10, 11, 12, 13実測図

となり、縄文地文。2は単沈線による格子目文。3は列点文。称名寺式期。

12号土坑（SK12）（第119・147図）

調査区の南西側、F－Ⅶ区、標高26.14mに位置し、土坑SK13に切られている。検出規模は長軸0.92m、短軸0.89mの円形で、深さ25.4cmを測る。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がる。覆土は2層に分層でき、自然堆積層である。遺物は、縄文後期前半の土器が出土している。第147図1は口縁上に沈線が巡り、沈線が垂下する。2・3は単口縁の縄文地文。4は口縁部が短く外反する壺形であろうか。口縁部は無文帯。胴部は沈線による円形文を基本とする意匠文。5は沈線文が垂下する。6は縦位の条線。7は深鉢の底部破片。網代痕で加曽利B式。1～6は堀之内1式期。

13号土坑（SK13）（第119・147図）

調査区の南西側、F－Ⅶ区、標高26.16mに位置し、南東側で土坑SK12を切っている。長軸1.14m、短軸1.08mの円形で、深さ27.40cmを測る。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がる。覆土は2層に分層でき、自然堆積層である。遺物は、縄文後期初頭の土器が出土している。第147図1は口縁部がくの字状に内傾する無文地の浅鉢。2～4は沈線のみによる意匠文。5は盲孔を配し、沈線意匠文に縄文が充填される。6は条線による弧線文。7も条線文。8は小型深鉢の底部破片。称名寺式期。

14A号土坑（SK14A）（第120・148図）

調査区の南西側、F－Ⅶ区、標高26.19mに位置し、南側で土坑SK14Bを切り、西側は未調査区域に延びている。検出規模は長軸1.26m、短軸0.62mの楕円形であろう。深さ17.2cmを測る。底面は鍋底状で、壁は外傾して立ち上がる。覆土は褐色土層の単一層からなる。遺物は、縄文後期前半の土器が出土している。第148図1は、縄文地文に平行沈線が垂下する。堀之内1式期。

14B号土坑（SK14B）（第120図）

調査区の南西側、F－Ⅶ区、標高26.19mに位置し、北側で土坑SK14Aに切られ、西側は未調査区域に延びている。検出規模は長軸0.52m、短軸0.24mの隅丸方形であろうか。深さ17.2cmを測る。底面は鍋底状で、壁は外傾して立ち上がる。覆土は黒褐色土層の単一層からなる。遺物の出土はないが、縄文後期のSK14Aに切られていることから縄文時代に比定される。

15号土坑（SK15）（第120・148図）

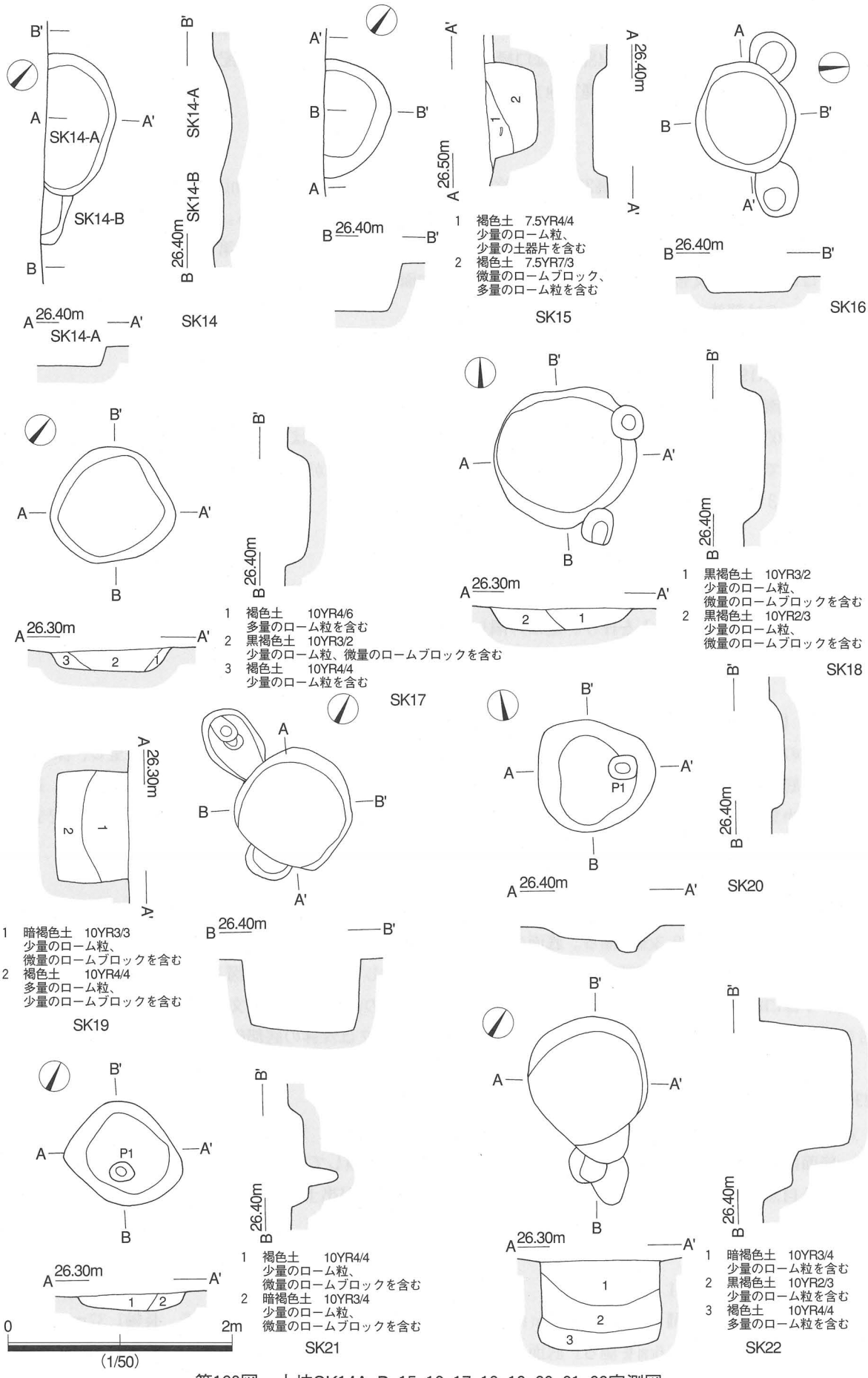
調査区の南西側、F－Ⅶ区、標高26.17mに位置し、西側約半分は未調査区域に延びている。検出規模は長軸1.00m、短軸0.59mの円形であろう。深さ42.3cmを測る。底面は平坦で、壁は垂直気味に立ち上がる円筒形。覆土は2層に分層でき、自然堆積層である。遺物は、縄文後期前半の土器が出土している。第148図1は山形状を呈した波状口縁、波頂部から沈線が垂下する。2は無文地に斜行沈線が施文されている。堀之内1式期。

16号土坑（SK16）（第120・148図）

調査区の南西側、F－Ⅶ区、標高26.18mに位置し、東西両側にピットを2基伴う。規模は長軸1.00m、短軸0.77mの円形で、深さ13.0cmを測る。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がる。覆土は褐色土層の単一層からなる自然堆積層である。遺物は、縄文後期前半の土器1点が出土している。第148図1は深鉢の胴部破片。縄文地文。

17号土坑（SK17）（第120・148図）

調査区の南西側、F－Ⅶ区、標高26.18mに位置する。長軸1.13m、短軸1.03mの略円形で、深さ22.4cmを測



第120図　土坑SK14A・B, 15, 16, 17, 18, 19, 20, 21, 22実測図

る。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がる。覆土は3層に分層でき、自然堆積層である。遺物は、縄文後期初頭の土器が出土している。第148図1は口縁部が隆帯による渦巻文と盲孔を配する。2は口縁上が沈線区画による縄文帯。3は条線文。4は縄文地文。称名寺式期。

18号土坑（SK18）（第120・148図）

調査区の南西側、F－Ⅶ区、標高26.17mに位置する。長軸1.29m、短軸1.23mの円形で、深さ20.9cmを測る。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がり、東側にピットが2基切り合っている。覆土は2層に分層でき、自然堆積層である。遺物は、縄文後期前半の土器と磨製石斧1点が出土している。第148図1・2は単口縁の縄文地文。3は口縁部が無文帯で沈線区画され、縄文施文。内面に沈線が巡る。4は多条化沈線による波状文。5は縄文地文。6は深鉢の底部破片。堀之内1・2式。

19号土坑（SK19）（第120・148図）

調査区の南西側、E－Ⅶ区、標高26.16mに位置し、西側および南側でピットを切っている。規模は長軸1.05m、短軸1.03mの隅丸方形で、深さ65.8cmを測る。底面は平坦で、壁は垂直気味に立ち上がる円筒形。覆土は2層に分層でき、埋戻し土層である。遺物は、縄文後期初頭の土器が出土している。第148図1・2は沈線による意匠文。3は縦位の密接条線。称名寺式期。

20号土坑（SK20）（第120図）

調査区の南側、G－Ⅷ区、標高26.08mに位置する。長軸1.05m、短軸1.00m不整円形で、深さ13.5cmを測る。底面は平坦で、東側にピットを伴う。壁は外傾して立ち上がる。覆土は黒褐色土層の単一層からなる。遺物は出土していないが、覆土の状況から縄文時代に比定される。

21号土坑（SK21）（第120・148図）

調査区の南西側、F－Ⅶ区、標高26.17mに位置する。長軸1.02m、短軸0.93mの略円形を呈し、深さ13.6cmを測る。底面はやや鍋底状で、壁は外傾して立ち上がる。覆土は2層に分層でき、自然堆積層である。遺物は、縄文後期中葉の土器が出土している。第148図1は紐線文。2は縄文地文に条線を垂下する。堀之内2式。

22号土坑（SK22）（第120・148図）

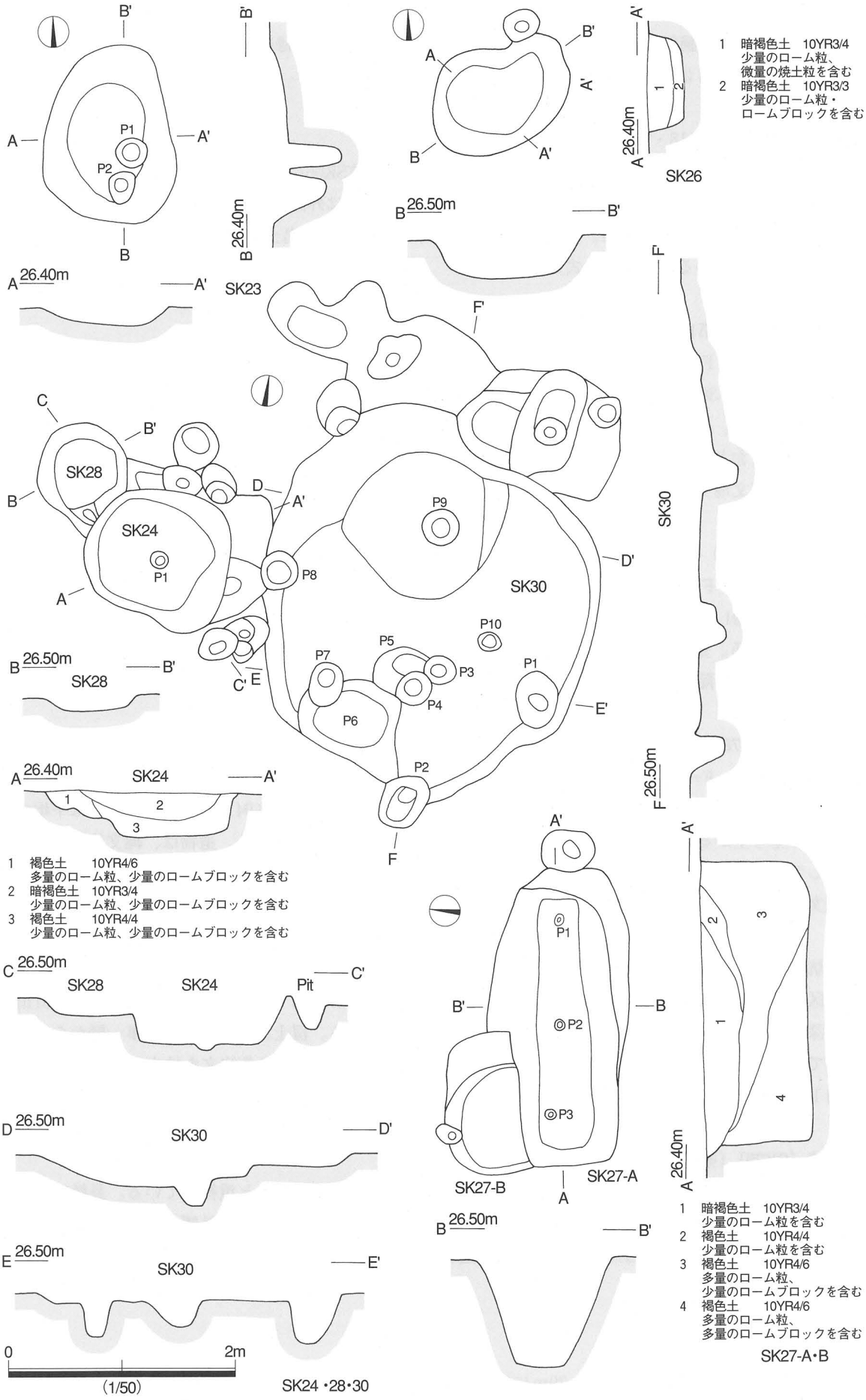
調査区の南西側、F－Ⅶ区、標高26.17mに位置し、南側にピットが重複している。規模は長軸1.70m、短軸1.06mの円形で、深さ78.3cmを測る。底面は平坦で、壁は垂直気味に立ち上がる円筒形。覆土は3層に分層でき、自然堆積層である。遺物は、縄文後期初頭の土器が出土している。第148図1・2・4～6は沈線による意匠文。1は口縁部を沈線区画により無文帯とする。2は2本の沈線によるJ字文内に列点文を充填させる。4・5は帯状交互に縄文を充填するもので、4はJ字文であろう。7は深鉢の底部破片。称名寺式期。

23号土坑（SK23）（第121・149図）

調査区の南西側、F－Ⅶ区、標高26.20mに位置する。長軸1.56m、短軸1.11mの楕円形で、深さ14.5cmを測る。底面はやや鍋底状で、南東側にピット2本が伴う。壁は外傾して立ち上がる。覆土は黒褐色土層の単一層からなる自然堆積層である。遺物は、縄文後期前半の土器1点が出土している。第149図1は、縄文地文の深鉢。

24号土坑（SK24）（第121・149図）

調査区の南西側、F－Ⅶ区、標高26.23mに位置し、北西側で土坑SK28を切っている。長軸1.37m、短軸1.32mの隅丸方形で、深さ35.6cmを測る。底面は平坦でほぼ中央にセンターピットを伴う。壁は外傾して立ち上がる。覆土は3層に分層でき、自然堆積層である。遺物は、縄文後期初頭の土器が出土している。第149図1は口



第121図　土坑SK23, 24, 26, 27A・B, 28, 30実測図

縁部が帯状に突出し、胴部は横位の多重化沈線。２は沈線区画により口縁部が無文帯となり、胴部は意匠文で、条線が充填される。３は縦位の条線。４は無文地の深鉢。称名寺式期。

25号土坑（SK25）（第118・149図）

調査区の南西側、E－Ⅷ区、標高26.00ｍに位置し、西側で土坑SK06に切られている。規模は長軸0.75ｍ、短軸0.68ｍの楕円形を呈し、深さ35.0㎝を測る。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がる。覆土は黒褐色土層の単一層からなる自然堆積層である。遺物は縄文後期前半の土器１点が出土している。第149図１は隆帯に沿って沈線が施文されている。堀之内１式。

26号土坑（SK26）（第121・149図）

調査区の南西側、F－Ⅶ区、標高26.29ｍに位置し、北東側でピットが重複している。長軸1.36ｍ、短軸0.94ｍの楕円形で、深さ36.7㎝を測る。底面はやや鍋底気味で、壁は外傾して立ち上がる。覆土は２層に分層でき、自然堆積層である。遺物は、縄文後期初頭の土器が出土している。第149図１・２は平縁の口縁部で、沈線で意匠文が描かれており、２は２本沈線のJ字文で構成される。３は微隆起帯による文様構成。４は細沈線による意匠文。５は縄文地文。称名寺式期。

27A号土坑（SK27A）（第121図）

調査区の南西側、F－Ⅶ区、標高26.28ｍに位置し、北西側で土坑SK27Bに切られている陥穴である。規模は長軸2.62ｍ、短軸1.25ｍの長方形を呈し、深さ94.6㎝を測る。底面は平坦で、坑底施設として逆茂木ピットが３本並列している。壁は垂直気味立ち上がる。覆土は４層に分層でき、自然堆積層である。遺物は出土しなかった。縄文時代の陥穴である。

27B号土坑（SK27B）（第121・149図）

調査区の南西側、F－Ⅶ区、標高26.28ｍに位置し、北側でピットが重複しており、南側で陥穴SK27Aを切っているため確認できず、長軸1.27ｍ、現存短軸0.68ｍの円形となろう。深さ94.6㎝を測る。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がる。覆土は黒褐色土層の単一層からなる自然堆積層である。遺物は、縄文後期前半の土器が出土している。第149図１は深鉢胴部破片。沈線が沿う隆帯区画。縄文地文である。２は沈線による弧線文。３は縄文地文。堀之内１式期である。

28号土坑（SK28）（第121・149図）

調査区の南西側、F－Ⅶ区、標高26.2ｍに位置し、土坑SK24に切られている。長軸0.82ｍ、短軸0.81ｍの円形で、深さ12.9㎝を測る。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がる。覆土は黒褐色土層の単一層からなる自然堆積層である。遺物は、縄文後期前半の土器が出土している。第149図１は条線文を地文とする。２は無文。堀之内１式期。

29号土坑（SK29）（第122・149図）

調査区の南西側、F－Ⅶ、G－Ⅶ区、標高26.27ｍに位置し、東側でピットと重複している。長軸1.05ｍ、短軸0.81ｍの楕円形で、深さ10.0㎝を測る。底面は平坦でピットを４本伴う。壁は外傾して立ち上がる。覆土は黒褐色土層の単一層からなる自然堆積層である。遺物は、縄文後期前半の土器が出土している。第149図１・２は縦位の条線が施文されている。

30号土坑（SK30）（第121・150図）

調査区の南西側、F－Ⅶ区、標高26.29ｍに位置する。長軸3.49ｍ、短軸2.92ｍの円形を呈し、深さ11.8㎝を測る。底面は平坦で、10本のピットを伴う。壁は外傾して立ち上がる。覆土は黒褐色土層の単一層からなる自

然堆積層である。遺物は、縄文晩期前半から中葉の土器と土器片円板１点、打製石斧１点が出土している。第150図１～４は帯縄文が巡るもので、１は口唇部にB突起が貼付けられ、口縁下に帯縄文が巡る。２は口縁部が強く外反し、平行沈線区画による縄文帯をもつ。３は縄文地文に沈線文が施文される。４は胴部破片。胴部に隆起帯が巡り、隆起上に刻みが施され、下部は磨消縄文による意匠文。５は口縁部が外傾する壷であろうか。横位の多条化沈線文が施文されている。６は前浦式。口縁部は肥厚し、太沈線により区画され縄文帯が巡る。７・８は沈線による意匠文。９は縄文地文に多条化沈線が施文される。10は帯縄文間に無文部が交互に配される。11は口縁部が内傾する粗製土器。横位の条線が施文される。

12は土器片円板。胴部破片を再利用している。全周丁寧な研磨が施されている。長さ3.51cm、幅3.58cm、厚さ1.18cm、重量13.82ｇを測る。13は緑色凝灰岩製の分銅形打製石斧である。約半分の欠損品。表裏面に原礫面を大きく残置している。両側縁の抉り部は丁寧な調整剥離が施されている。現存長6.59cm、刃幅6.94cm、最大厚2.09cm、重量138.5ｇである。

31号土坑（SK31）（第122・149図）

調査区の南西側、E－Ⅶ区、標高26.21ｍに位置し、東西両側にピットが重複する。長軸1.35m、短軸1.05mの円形で、深さ59.5cmを測る。底面は平坦でピット１本が伴う。壁は垂直気味に立ち上がる円筒形。覆土は２層に分層でき、自然堆積層である。遺物は、縄文後期初頭の土器と敲石１点が出土している。第149図１は口縁上に沈線が巡る。２は条線による弧線文。３は２本沈線による弧線文で、帯状交互に縄文が充填される。４は深鉢の底部破片。底面に網代痕が残る。５は砂岩製の敲石で、上端を欠損している。楕円形の礫で、先端部から側縁部にかけて使用痕である敲打痕が認められる。現存長5.44cm、幅3.25cm、厚さ2.02cm、重量49.5ｇを測る。称名寺式期。

32号土坑（SK32）（第122・150図）

調査区の南側、H－Ⅶ区、標高26.10ｍに位置し、ピット３本が切っている。長軸1.24m、短軸1.21ｍの円形で、深さ30.9cmを測る。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がる。覆土は２層に分層でき、自然堆積層である。遺物は、縄文後期前半の土器が出土している。第150図１は貼付け隆帯が施文される。２は縄文地文である。

33号土坑（SK33）（第122・150図）

調査区の南側、H－Ⅶ区、標高26.08ｍに位置し、西側でピットが重複している。長軸1.27m、短軸0.98ｍの略円形で、深さ19.5cmを測る。底面は平坦で、北端でピット２本を伴う。壁は外傾して立ち上がる。覆土は黒褐色土層の単一層からなる自然堆積層である。遺物は、縄文後期前半の土器が出土している。いずれも小破片である。第150図１は沈線が施文され、２は無文地である。

34号土坑（SK34）（第122・150図）

調査区の南側、H－Ⅶ区、標高26.14ｍに位置し、南側でピットが重複している。長軸0.89m、短軸0.77ｍの略円形で、深さ22.7cmを測る。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がる。覆土は黒褐色土層の単一層からなる自然堆積層である。遺物は、縄文後期前半の土器と土器片錘１点が出土している。第150図１は波状口縁の深鉢。口縁部は隆帯区画され、無文帯となり、盲孔を配する。２の口縁部も無文帯。３は縄文地文。４は無文地。５は土器片錘。胴部破片の再利用。長方形を呈し、長軸に紐掛け溝を入れる。打欠成形のみ。長さ8.04cm、幅4.16cm、厚さ1.13cm、重量48.42ｇを測る。

35号土坑（SK35）（第122・150図）

調査区の南側、H－Ⅶ区、標高26.06ｍに位置し、北西側が土坑SK37とピットによって切られている。長軸0.88m、短軸0.77ｍの隅丸方形で、深さ33.6cmを測る。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がる。覆土は３層

に分層でき、自然堆積層である。遺物は、縄文後期初頭の土器が出土している。第150図１は波状口縁の深鉢。２本沈線による意匠文で、J字文であろう。２は無文地の深鉢。３は波状口縁の波頂部破片。８の字隆帯を貼付け、これを起点に平行沈線が巡る。称名寺式期。

36号土坑（SK36）（第122・150図）

調査区の南側、H－Ⅶ区、標高26.16ｍに位置し、東側でピットが重複している。長軸1.06ｍ、短軸1.03ｍの円形で、深さ29.1㎝を測る。底面は平坦で小さく、壁は摺鉢状に外傾して立ち上がる。覆土は黒褐色土層の単一層からなる自然堆積層である。遺物は、縄文後期前半の土器１点が出土している。第150図１は深鉢。無文地である。

37号土坑（SK37）（第122・150図）

調査区の南側、H－Ⅶ区、標高26.09ｍに位置し、南側で土坑SK35を切っている。長軸1.31ｍ、短軸1.28ｍの円形で、深さ34.8㎝を測る。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がる。覆土は４層に分層でき、自然堆積層である。遺物は、縄文後期中葉の土器が出土している。第150図１は口唇部が外削状で、縄文施文。内面に沈線が巡る。２は胴部破片。縄文地文。

38号土坑（SK38）（第123・151図）

調査区の南側、H－Ⅶ区、標高26.22ｍに位置し、東縁側および西縁側にピット群が重複している陥穴である。規模は長軸2.75ｍ、短軸2.42ｍの長方形で、深さ110.4㎝を測る。底面は平坦で、壁はやや垂直気味に立ち上がる。坑底施設はない。覆土は黒褐色土層の単一層からなる自然堆積層である。遺物はいずれも縄文後期中葉の土器が出土しているが流れ込みである。第151図１は精製の浅鉢。口縁に沿って沈線が巡り、沈線区画された磨消縄文。２～４は粗製土器。２は縄文地文。３・４は条線。加曽利B3式期。

39号土坑（SK39）（第122・151図）

調査区の南側、H－Ⅶ区、標高26.15ｍに位置し、南西側でピットと重複している。長軸1.05ｍ、短軸0.81ｍの楕円形で、深さ44.5㎝を測る。底面は平坦で、壁は垂直気味に立ち上がる円筒形。覆土は黒褐色土層の単一層からなる。自然堆積層である。遺物は、縄文後期の土器片が出土している。第151図１は口縁上に沈線が巡る。２・３は沈線による意匠文。４は縄文地文。堀之内１式期。

40号土坑（SK40）（第123・151図）

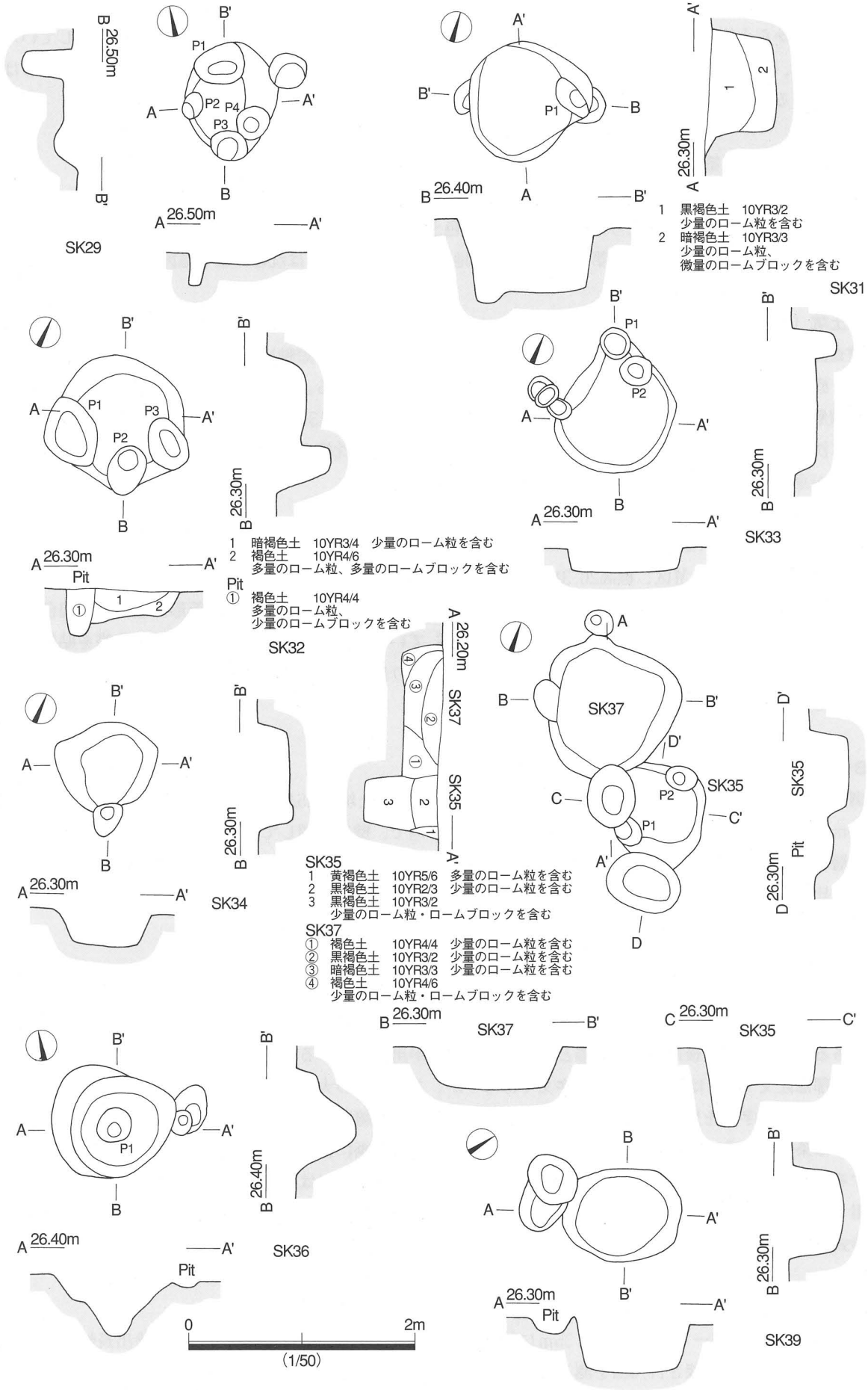
調査区の南西側、F－Ⅵ区、標高26.25ｍに位置する。長軸0.84ｍ、短軸0.79ｍの円形で、深さ13.5㎝を測る。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がる。覆土は黒褐色土層の単一層からなる自然堆積層である。遺物は、縄文後期前半の土器が出土している。第151図１は波状口縁の深鉢。口縁上は無文帯となり、体部は縄文施文である。２は無文地の深鉢胴部破片。

41号土坑（SK41）（第123・151図）

調査区の南西側、F－Ⅵ区、標高26.25ｍに位置する陥穴である。また北側に複雑なピット群が重複している。長軸3.08ｍ、短軸1.38ｍの長方形で、深さ87.7㎝を測る。底面は平坦で、壁は垂直気味立ち上がる。覆土は黒褐色土層の単一層からなる自然堆積層である。遺物は、縄文後期前半の土器が出土しているが流れ込みであろう。第151図１・２は単沈線による格子目文。

42号土坑（SK42）（第123・151図）

調査区の南西側、F－Ⅵ区、標高26.27ｍに位置する。長軸1.21ｍ、短軸1.09ｍの隅丸方形を呈し、深さ73.7㎝を測る。底面は平坦で、壁は垂直気味に立ち上がる円筒形。覆土は黒褐色土層の単一層からなる自然堆積層



第122図　土坑SK29, 31, 32, 33, 34, 35, 36, 37, 39実測図

で、最上層から小規模な貝ブロックが検出された。サルボウを主体とし、わずかにハマグリが混入していた。人工遺物は、縄文後期初頭の土器が出土している。第151図１は波状口縁で、波頂部に盲孔がみられる。２は微隆起帯による意匠文。３は縄文地文。称名寺式期。

43号土坑（SK43）（第123・151図）

調査区の南西側、F－Ⅵ区、標高26.29ｍに位置する。長軸0.81ｍ、短軸0.75ｍの円形で、深さ12.1㎝を測る。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がる。覆土は褐色土層の単一層からなる自然堆積層である。遺物は、縄文後期前半の土器が出土している。第151図１は縄文地文に条線施文。２は沈線による意匠文。堀之内１式期。

44号土坑（SK44）（第123・151図）

調査区の南西側、F－Ⅵ区、標高26.31ｍに位置する。長軸1.57ｍ、短軸1.33ｍの不整円形で、深さ17.0㎝を測る。底面は平坦で、北側にピットを伴う。壁は外傾して立ち上がる。覆土は黒褐色土層の単一層からなる自然堆積層である。遺物は、縄文後期初頭の土器が出土している。第151図１は深鉢の胴部破片。隆帯による区画文に沈線による意匠文。沈線内に条線が充填される。２も弧線沈線による帯状交互に縄文が充填する。３は沈線文が垂下する。称名寺式期。

45A号土坑（SK45A）（第124・151図）

調査区の南西側、F－Ⅵ区、標高26.31ｍに位置し、北側で土坑SK45Bを切っている。長軸0.82ｍ、短軸0.82ｍの隅丸方形で、深さ55.8㎝を測る。底面は平坦で、壁は垂直気味に立ち上がる円筒形。覆土は黒褐色土層の単一層からなる。遺物は、縄文後期前半の土器が出土している。第151図１・２は、扁平S字隆帯を貼付けするもので、１は波状口縁となる。３は口縁部を沈線区画により無文帯とし、単沈線による格子目文。４は縄文地文。５は無文地。称名寺２式期。

45B号土坑（SK45B）（第124図）

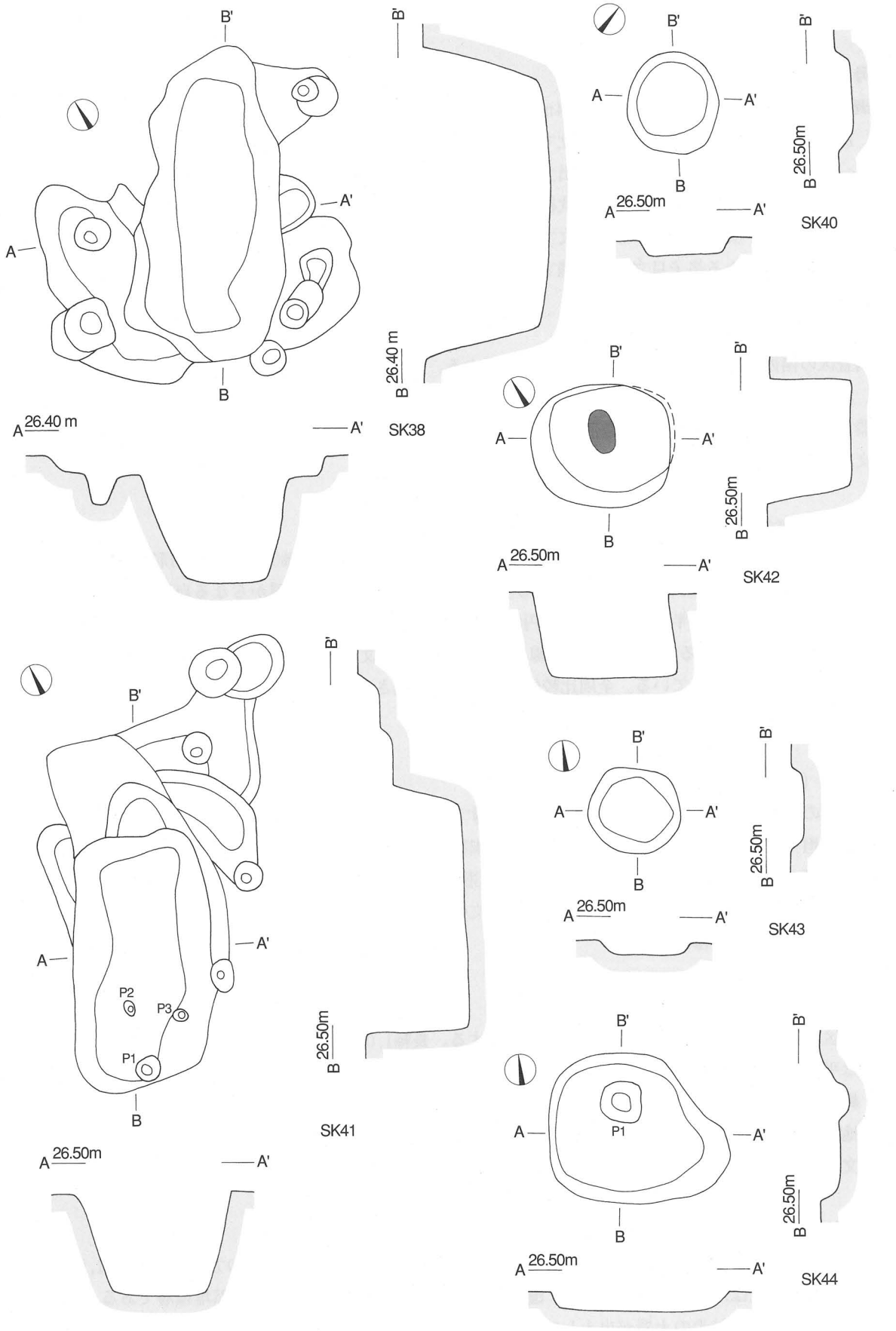
調査区の南西側、F－Ⅵ区、標高26.29ｍに位置し、南側で土坑SK45Aに切られている。長軸0.64ｍ、短軸0.60ｍの楕円形であろう。深さ14.4㎝を測る。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がる。覆土は黒褐色土層の単一層からなる自然堆積層である。遺物の出土はないが、縄文土坑であるSK45Aに切られていることから縄文時代に比定できる。

46A号土坑（SK46A）（第124・152図）

調査区の南西側、F－Ⅵ区、標高26.35ｍに位置し、南側で土坑SK46Bを切る。長軸1.66ｍ、短軸1.26ｍの円形で深さ108.8㎝を測る。底面は平坦で、壁は垂直気味に立ち上がる。円筒形。覆土は４層に分層でき埋戻し層である。遺物は縄文後期前半の土器と土器片円板１点が出土している。第152図１・２は２本の平行描線による帯状部意匠文で、１はJ字文、２はM字文であろうか。３は環状の大型把手を有する波状口縁の深鉢。口縁部が内屈し逆くの字状を呈する。口縁上は無文部で沈線による弧線内は縄文充填。４は弧線内に列点文を施文。５・６は条線文。７・８は無文地の深鉢。９は口縁部が沈線区画による無文帯で、単沈線による格子目文を施文する。10は縄文地文に沈線懸垂文。11～13は条線を垂下させる。14は土器片円板。無文土器の胴部破片を再利用している。全周比較的丁寧な研磨が施されている。長さ3.85㎝、幅4.20㎝、厚さ0.61㎝、重量13.38ｇ。称名寺式期。

46B号土坑（SK46B）（第124図）

調査区の南西側、F－Ⅵ区、標高26.35ｍに位置し、北側で土坑SK46Aに切られている。検出長軸0.95ｍ、短軸0.61ｍの楕円形で、深さ11.0㎝を測る。底面は鍋底気味で、ピット１本が伴う。壁は外傾して立ち上がる。覆土は３層に分層でき自然堆積層である。遺物は出土していないが、縄文土坑SK46Aに切られていることから



第123図　土坑SK38, 40, 41, 42, 43, 44実測図

縄文時代に比定できる。

47号土坑（SK47）（第124・152図）

調査区の南西側、F－Ⅵ区、標高26.34mに位置する。長軸1.12m、短軸1.04mの楕円形で、深さ51.8cmを測る。底面は鍋底気味で、壁は外傾して立ち上がる。覆土は黒褐色土層の単一層からなる自然堆積層である。遺物は、縄文後期初頭から前半の土器が出土している。第152図1は波状口縁の深鉢。波頂部に扁平S字状隆帯が貼付けられる。2は口縁部が肥厚し、沈線区画された口縁部は無文帯となる。3は帯状交互により縄文が充填する。4は縄文字文に蕨手文。5は縄文字文に多条化沈線による意匠文。6は口縁上が僅かに外反する縄文地文。7は細沈線による格子目文。8は縄文地文。称名寺式から堀之内1式期。

48号土坑（SK48）（第124・152図）

調査区の南西側、F－Ⅵ区、標高26.38mに位置する。長軸1.28m、短軸0.82mの楕円形で、深さ51.5cmを測る。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がる。覆土は黒褐色土層の単一層からなる。遺物は、縄文後期初頭の土器が出土している。第152図1隆帯下に単沈線が垂下する。2は隆帯下に条線施文。3は弧線状条線。4は無文地の深鉢。称名寺式期。

49号土坑（SK49）（第124・153図）

調査区の南西側、F－Ⅵ区、標高26.32mに位置する。長軸1.21m、短軸0.98mの楕円形で、深さ48.4cmを測る。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がる。覆土は黒褐色土層の単一層からなる自然堆積層である。遺物は、縄文後期初頭から前半の土器と土器片円板1点が出土している。

第153図1は沈線による意匠文。2は条線を格子目文状に施文。3は深鉢底部。4は土器片円板である。深鉢の胴部破片を再利用している。全周比較的丁寧な研磨が施されている。長さ4.597cm、幅4.143cm、厚さ0.854cm、重量22.10gを測る。

50号土坑（SK50）（第124・153図）

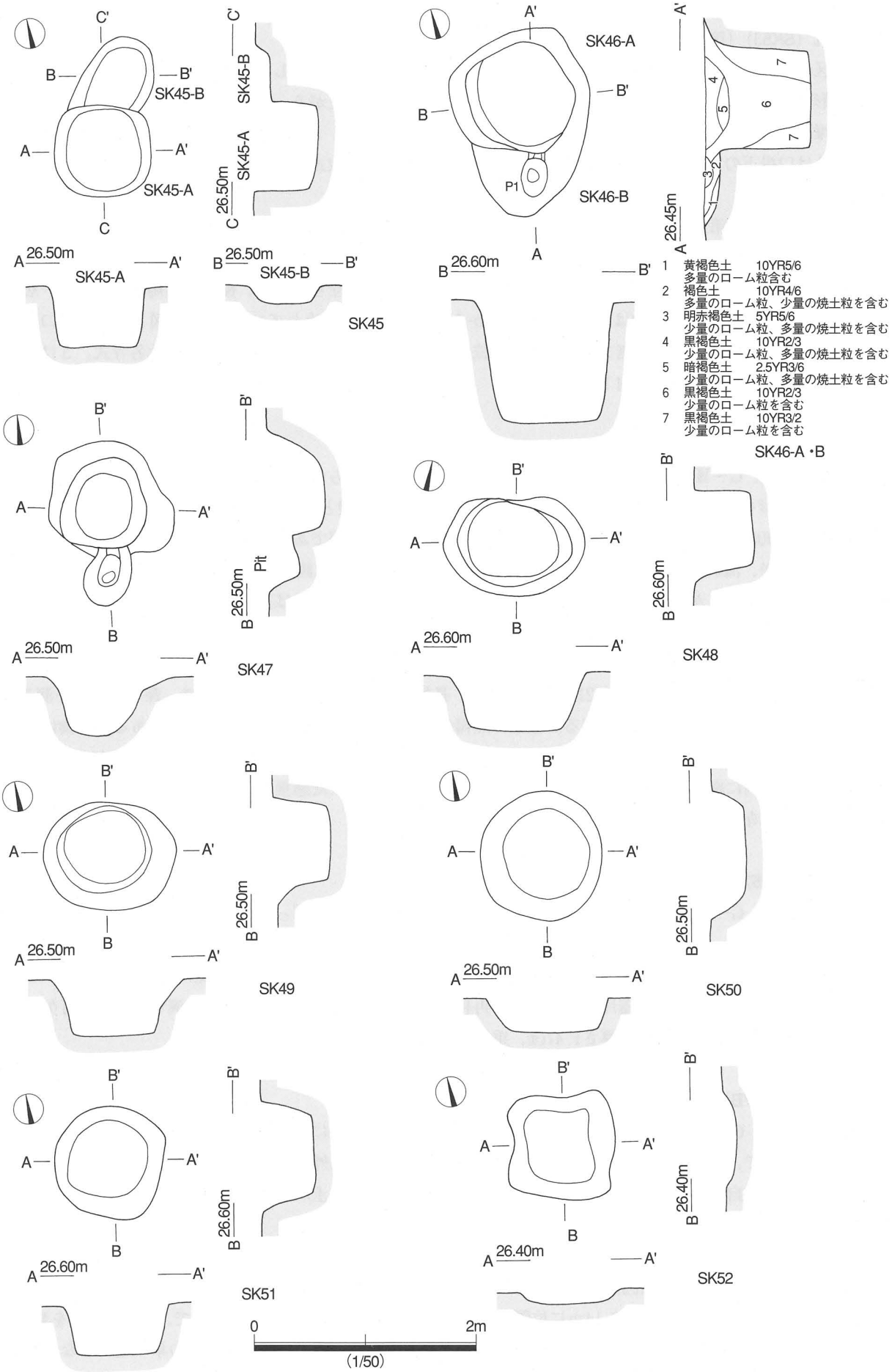
調査区の南西側、F－Ⅵ区、標高26.33mに位置する。長軸1.26m、短軸1.11mの円形。深さ29.6cmを測る。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がる。覆土は黒褐色土層の単一層からなる自然堆積層である。遺物は、縄文後期初頭から前半の土器が出土している。第153図1は口唇部が凹帯となり、沈線による方形区画文が垂下する。2は口縁に沿って沈線区画が巡り幅狭い無文帯となる。3は縄文地文に平行沈線。4は単沈線による格子目文。5は深鉢の底部破片。

51号土坑（SK51）（第124・153図）

調査区の南西側、F－Ⅵ区、標高26.34mに位置する。長軸1.01m、短軸0.95mの円形。深さ46.2cmを測る。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がる円筒形。覆土は黒褐色土層の単一層からなる自然堆積層である。遺物は、縄文後期初頭から前半の土器が出土している。第153図1は沈線による意匠文に縄文を充填させる。2は縄文地文に沈線による意匠文。3は無文系深鉢。縦位のヘラケズリ整形。4は列点施文。5は縦位の密集する条線文。称名寺式期。

52号土坑（SK52）（第124・153図）

調査区の南側、G－Ⅶ区、標高26.12mに位置する。長軸0.90m、短軸0.90mの方形で、深さ11.9cmを測る。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がる。覆土は黒褐色土層の単一層からなる自然堆積層である。遺物は、縄文中期後半から後期前半の土器が出土している。第153図1はキャリパー形の深鉢の口縁部破片。口縁上に隆帯に沿って沈線が施文される加曽利E式。2は平行する沈線区画に条線を施文する。3は無文地の深鉢。4は沈線による格子目文。5は底部破片。



第124図　土坑SK45A・B, 46A・B, 47, 48・49・50・51・52実測図

53号土坑（SK53）（第125・153図）

調査区の南側、G－Ⅶ区、標高26.22mに位置し、北西側にピットが重複している。長軸1.03m、短軸0.86mの楕円形で、深さ35.6cmを測る。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がる。覆土は黒褐色土層の単一層からなる自然堆積層である。遺物は、縄文後期前半の土器が出土している。第153図1は縄文地文に波状沈線が垂下する。2は口縁下の沈線区画による無文帯。3は網目状撚糸文。綱取式。4は横位の沈線。

54号土坑（SK54）（第125・154図）

調査区の南側、G－Ⅶ区、標高26.29mに位置し、北側にピット群が重複している。長軸1.00m、短軸0.91mの台形を呈し、深さ56.3cmを測る。底面は平坦で、壁は垂直気味に立ち上がる。覆土は黒褐色土層の単一層からなる自然堆積層である。遺物は、縄文後期初頭から前半の土器が出土している。第154図1は深鉢の口縁部破片。口縁下に沈線区画による無文帯。体部は縦位の条線。2は微隆起帯による弧線文の称名寺式。3は縄文地文に沈線による懸垂文。堀之内1式。

55号土坑（SK55）（第125・154図）

調査区の南側、G－Ⅶ区、標高26.29mに位置し、土坑SK57Aに切られている陥穴である。長軸2.56m、短軸0.90mの長方形を呈し、深さ91.7cmを測る。底面は平坦で坑底施設として逆茂木ピット5本が検出されている。壁は垂直気味に立ち上がる。覆土は5層に分層でき、自然堆積層である。遺物は、縄文後期前半の土器が出土しているが、流れ込み遺物であろう。第154図1は口縁上に沈線区画による幅狭い無文帯。2は十字状の隆帯区画の起点に盲孔が配される。3は縦位の条線文。4は縄文地文。5は条線文。

56号土坑（SK56）（第126・154図）

調査区の南側、G－Ⅶ区、標高26.21mに位置する。長軸1.00m、短軸0.85mの円形で、深さ25.1cmを測る。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がる。覆土は黒褐色土層の単一層からなる自然堆積層である。遺物は縄文後期初頭の土器が出土している。第154図1は口縁端が強く内傾し、くの字状を呈する。口縁上は無文帯で、沈線による意匠文内に縄文を充填する。2は平行沈線間に縄文施文された懸垂文。3は口唇部が肥厚する。無文地である。称名寺式期。

57A号土坑（SK57A）（第125・154図）

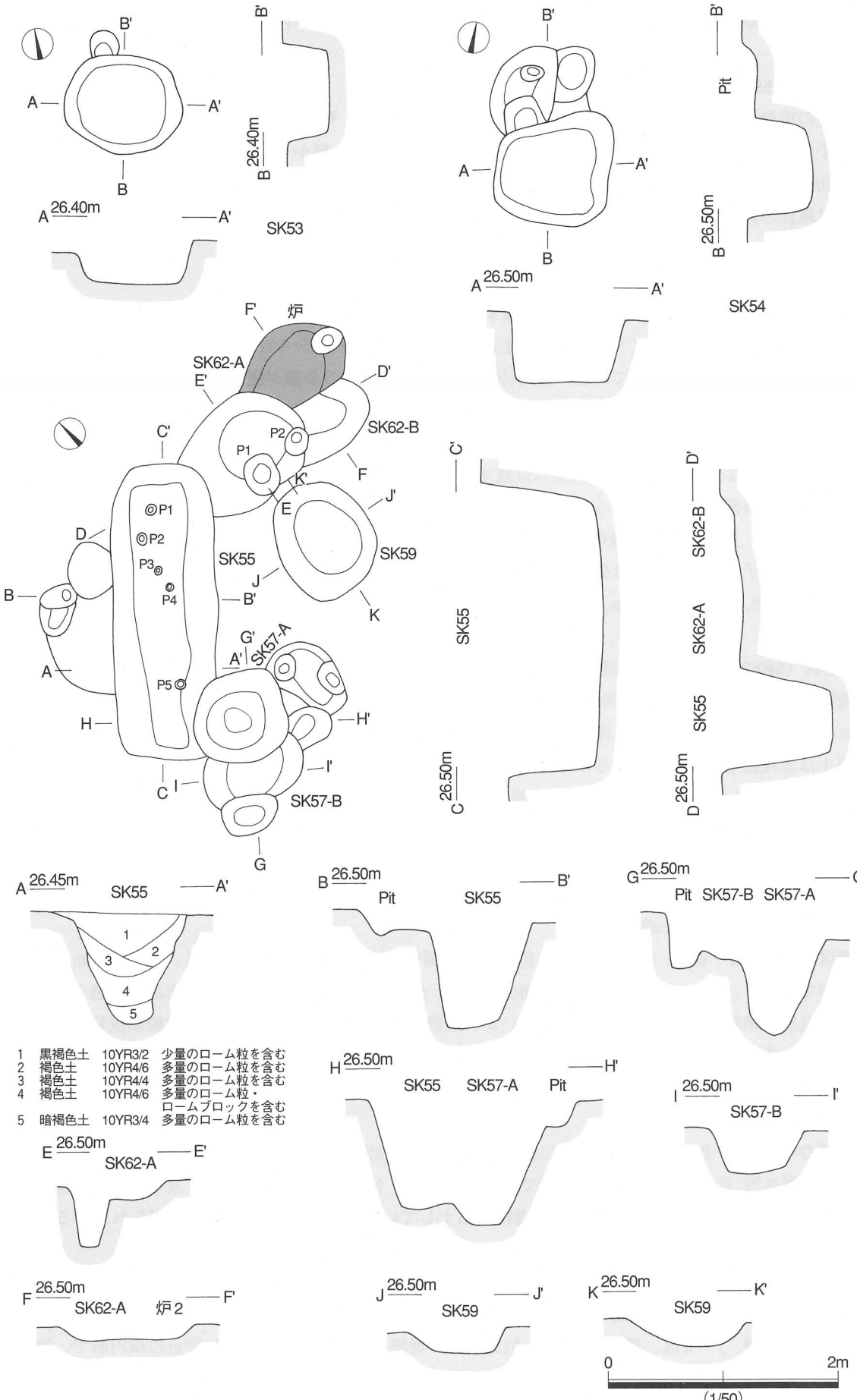
調査区の南側、G－Ⅶ区、標高26.12mに位置し、南側で土坑SK57Bを切っている。長軸0.80m、短軸0.80mの円形で深さ92.6cm。底面は丸底で壁は外傾して立ち上がる。覆土は黒褐色土層の単一層からなる自然堆積層である。遺物は縄文後期前半の土器と土器片錘1点が出土している。第154図1は沈線による意匠文。2・3は縄文地文。称名寺式期。4は土器片錘。胴部破片再利用。不整台形を呈し長軸に紐掛け溝を入れる。打欠け成形のみ。長さ7.90cm、幅8.02cm、厚さ1.47cm、重量82.0g。

57B号土坑（SK57B）（第125図）

調査区の南側、G－Ⅶ区、標高26.21mに位置し、北側で土坑SK57Aに切られている。検出長軸0.83m、短軸0.37mの楕円形で、深さ41.1cmを測る。底面はやや鍋底気味で、壁は外傾して立ち上がる。覆土は黒褐色土層の単一層からなる自然堆積層である。遺物は出土していないが、縄文土坑SK57Aに切られていることから縄文時代に比定できる。

58号土坑（SK58）（第126・154図）

調査区の南側、G－Ⅶ区、標高26.14mに位置する。長軸1.31m、短軸1.03mの楕円形で、深さ16.5cmを測る。底面は平坦で、西側にピット2本が伴う。壁は外傾して立ち上がる。覆土は黒褐色土層の単一層からなる自然堆積層である。遺物は、縄文後期前半の土器が出土している。第154図1は沈線区画により口縁無文帯は幅狭



第125図　土坑SK53, 54, 55, 57A・B, 59, 62A・B実測図

く、縄文地文に単沈線による区画文が施文される。2は条線を地文に平行沈線が垂下する。堀之内1式。

59号土坑（SK59）（第125・154図）

調査区の南側、G－Ⅶ区、標高26.26mに位置する。長軸1.00m、短軸0.84mの楕円形で、深さ18.9cmを測る。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がる。覆土は黒褐色土層の単一層からなる自然堆積層である。遺物は、縄文後期初頭から前半の土器が出土している。第154図1は口縁部が隆帯により区画され、刺突列による意匠文。隆帯下は縦位の刻目。2は沈線による逆U字状懸垂文。3は縄文地文に半截竹管により蛇行文が垂下する。

60号土坑（SK60）（第126・154図）

調査区の南側、G－Ⅶ区、標高26.19mに位置する。長軸1.16m、短軸1.12mで略円形で、深さ32.5cmを測る。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がる。覆土は黒褐色土層の単一層からなる自然堆積層である。遺物は、縄文後期前半の土器1点が出土している。第154図1は無文地に縦位の条線が施文される。堀之内1式。

61号土坑（SK61）（第126・155図）

調査区の南側、G－Ⅶ区、標高26.18mに位置する。長軸0.96m、短軸0.81mの円形で、深さ24.3cmを測る。底面は平坦で北西側にピットを穿っている。壁は外傾して立ち上がる。覆土は黒褐色土層の単一層からなる自然堆積層である。遺物は、縄文後期初頭の土器と磨石1点が出土している。第155図1は無文地の深鉢。2は単沈線による格子目文。3・4は条線施文。5は石英斑岩製の磨石破片。円礫の側縁部の一部に研磨面が認められる。現存長8.50cm、幅4.27cm、厚さ5.09cm、重量132.5gである。称名寺式期。

62A号土坑（SK62A）（第125・155図）

調査区の南側、G－Ⅶ区、標高26.27mに位置し、西側で土坑SK55を、東側で土坑SK62Bを切っている。長軸1.00m、短軸0.86mの楕円形で、深さ15.4cmを測る。底面は平坦でピット2本を伴う。壁は外傾して立ち上がる。覆土は黒褐色土層の単一層からなる自然堆積層である。遺物は、縄文後期後半の土器が出土している。第155図1は口縁部がくの字状に内傾する無文地系の浅鉢。2～4は粗製土器。2は紐線が低平で押圧が相接し、縦位の沈線区画内を磨消す。3も斜行条線に縦位の平行沈線を垂下させ磨消す。4は縦位の条線。1は加曽利B2式期、2・3は安行2式期。

62B号土坑（SK62B）（第126図）

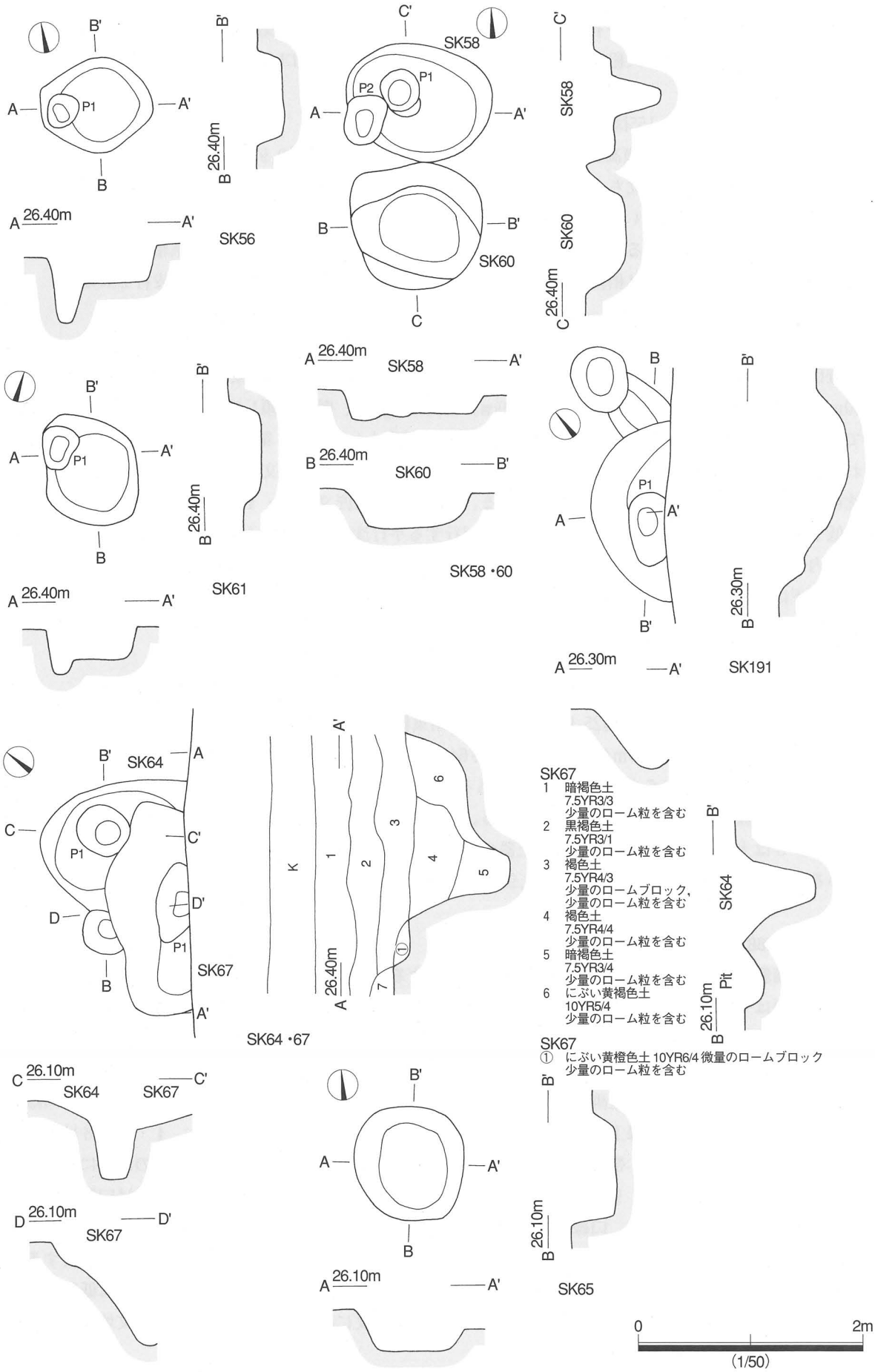
調査区の南側、G－Ⅶ区、標高26.25mに位置し、西側で土坑SK62Aに切られている。長軸0.60m、短軸0.54mの円形であろう。深さ12.2cmを測る。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がる。覆土は黒褐色土層の単一層からなる自然堆積層である。遺物の出土はないが、重複している縄文土坑SK62Aが縄文後期後葉であることから縄文時代に比定できる。

63号土坑（SK63）（第127図）

調査区の中央、G－Ⅳ区、標高26.28mに位置し、北側で土坑SK73に切られている。長軸1.02m、短軸0.97mの円形で、深さ22.7cmを測る。底面は平坦で、南東側にピットを伴う。壁は外傾して立ち上がる。覆土は黒褐色土の単一層からなる自然堆積層である。遺物は出土していないが、縄文土坑SK73に切られていることから縄文時代に比定される。

64号土坑（SK64）（第126・155図）

調査区の南東側、J－Ⅵ区、標高25.90mに位置する。規模は長軸1.27m、短軸1.07mの楕円形で、深さ14.6cmを測る。底面は平坦で北側にピット1本を伴う。壁は外傾して立ち上がる。覆土は黒褐色土層の単一層からなる自然堆積層である。遺物は、縄文晩期初頭の土器が出土している。第155図1は2本の沈線による意匠文。



第126図　土坑SK56, 58, 60, 61, 63, 64, 65, 67, 191実測図

沈線間に縄文を充填し、貫通孔を有する。称名寺式。２はA突起を有する浅鉢の口縁。入組文を配し、内文を有する。３・４も沈線による入組文。５は胴部が無文帯となる。６は注口土器の注口部破片。安行3a式期。

65号土坑（SK65）（第126・155図）

調査区の南東側、I－Ⅵ区、標高25.91ｍに位置する。長軸1.01ｍ、短軸0.97ｍの円形で、深さ19.3㎝を測る。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がる。覆土は黒褐色土層の単一層からなる自然堆積層である。遺物は、縄文後期後半の土器が出土している。第155図１は波状口縁の波頂部に双頭突起を有する帯縄文系の深鉢。２は波状口縁で、口縁部が肥厚する。３は無文地に横位の沈線文が重畳する。４は紐線文系粗製土器の胴部破片。胴部区画の紐帯は低平で押圧は相接する。下部は縄文地文に縦位の沈線が施文される。安行２式期。

66号土坑（SK66）（第127・155図）

調査区の南東側、I－Ⅵ区、標高25.97ｍに位置し、南側の大半が未調査区域に延びている。検出した長軸1.40ｍ、短軸0.65ｍの円形であろう。深さ93.9㎝。底面は丸底で、壁は外傾して立ち上がる。覆土は２層に分層でき自然堆積層である。遺物は、縄文晩期前半の土器が出土している。第155図１は細密沈線文が描かれるいわゆる姥山Ⅱ式である。口縁に並行する平行沈線と縦位の弧線状の区画文で構成され、沈線間に矢羽状の細密沈線が充填される。２は口唇部が短く内傾する。沈線による意匠文。３・４は紐線文系の粗製土器。３の紐帯は低平で押圧は相接する。条線は横位施文で、斜行する平行沈線間を磨消す。４は口唇部が内削状で肥厚し体部が内傾する深鉢。下向き弧状の条線を口縁上から施文する。５は深鉢の底部破片。６は口唇部が外削状を呈し口縁下は縦位の短沈線を施す。７・８は製塩土器。７の口唇部は内削状となり外面はナデ整形。８は底部破片で尖底。安行3b式期。

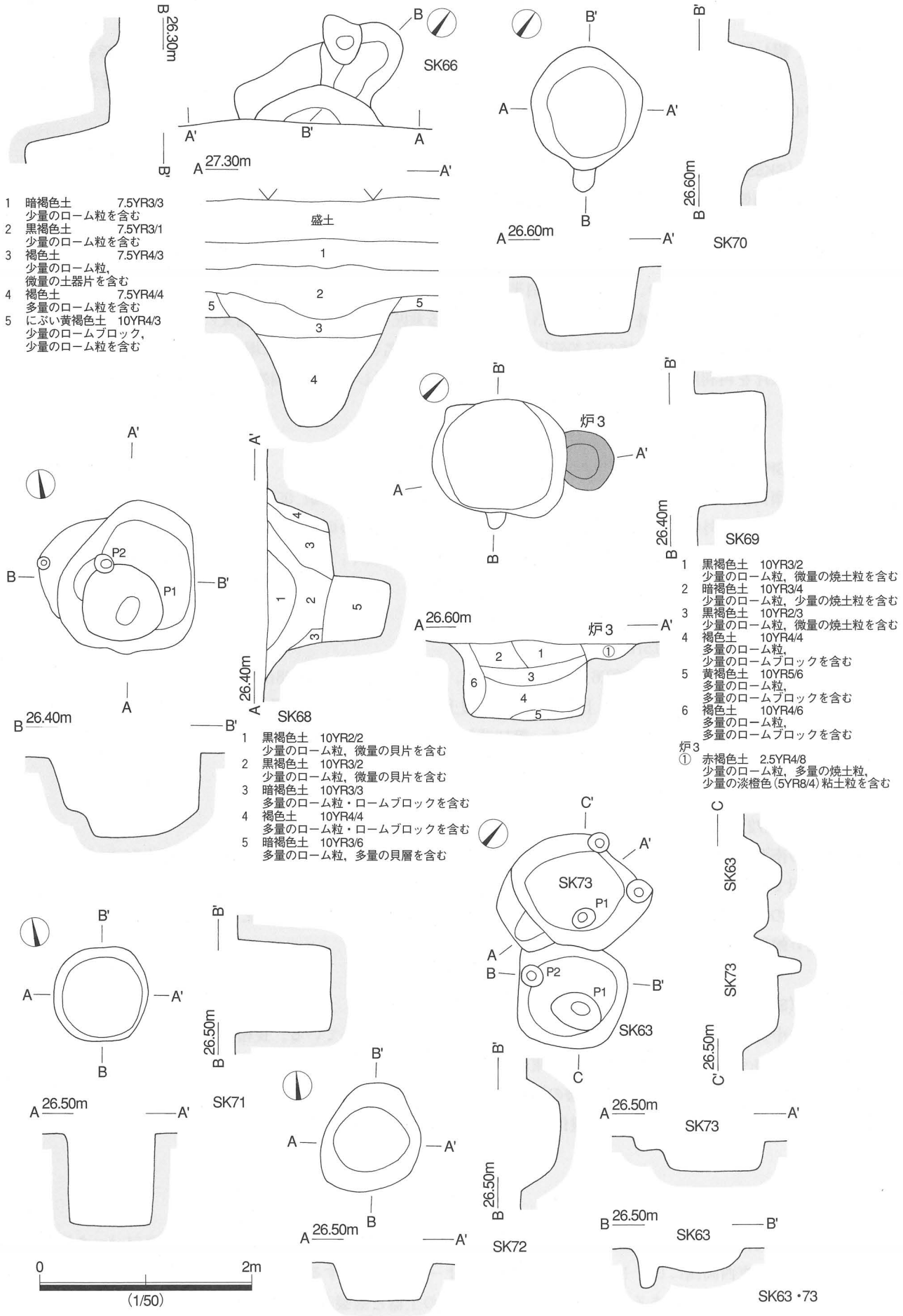
67号土坑（SK67）（第126・156図）

調査区の南東側、J－Ⅵ区、標高25.91ｍに位置し、南東側が未調査区域に延び、北側で土坑SK55を切っている。検出長軸1.84ｍ、短軸0.70ｍの楕円形で、深さ64.1㎝を測る。底面は丸底状で、壁は外傾して立ち上がる。覆土は褐色土層の単一層からなる自然堆積層である。遺物は、縄文後期中葉の土器が出土している。第156図１は口縁部が沈線区画され、斜沈線が施文される。２・３は縄文地文に条線が施文される粗製土器。４は深鉢底部破片。５は土器片円板。紐線文系粗製土器の口縁部破片を再利用している。全周比較的丁寧な研磨が施されている。長さ4.188㎝、幅4.146㎝、厚さ0.996㎝、重量19.82ｇを測る。加曽利B2式期。

68号土坑（SK68）（第127・156図）

調査区の南側、G－Ⅵ・H－Ⅵ区、標高26.29ｍに位置する。長軸1.46ｍ、短軸1.41ｍの略円形で深さ54.1㎝を測る。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がる。覆土は黒褐色土層の単一層からなる自然堆積層である。遺物は、縄文後期後半の土器と土器片円板１点、石槌１点が出土している。第156図１・５・７は瓢形の深鉢。１は口縁上に沈線区画され、刻目が巡り、体部は上下対向する横位連続弧線文が描かれ、内部に縄文が充填する。５・７は胴部破片。弧線による区画内は縄文充填。２は帯状文が刻目で施された隆帯が巡るもので、口縁下に縦長の貼瘤を配する。３は口縁上に刻目が巡り、口縁部に横位の沈線文が充填される。４・６・８は帯縄文が巡るもので、４は口縁部破片。帯縄文に縦長の貼瘤が貼付けられる。６は無文帯に対弧状の沈線により区切られている。９～11は無文地で、９は口唇部に細かな刻目が巡る。10は肩部に外綾を有し、11は口唇部が肥厚する浅鉢。13は胴部が僅かに括れ、口縁部は外傾する深鉢。胴部中央で平行沈線間を無文帯とし、口縁部と胴部は斜行する条線。加曽利B2式。12・14～18は紐線文系粗製土器。12は縄文地文に斜行する条線を施文する。14の紐帯は口縁上を僅かに空け、細紐帯を巡らす。縄文地文に横位の条線を施す。15～18の紐帯は低平で押圧は相接する。条線は横位および斜位。18は胴部破片。胴部の区画文に紐帯を巡らす。上部に縄文地文に横位の条線を施し、縦位の平行沈線を区画させ磨消す。

19は土器片円板。精製土器深鉢の口縁部破片を再利用している。全周比較的丁寧な研磨が施されている。長



1 暗褐色土 7.5YR3/3
少量のローム粒を含む
2 黒褐色土 7.5YR3/1
少量のローム粒を含む
3 褐色土 7.5YR4/3
少量のローム粒,
微量の土器片を含む
4 褐色土 7.5YR4/4
多量のローム粒を含む
5 にぶい黄褐色土 10YR4/3
少量のロームブロック,
少量のローム粒を含む

1 黒褐色土 10YR3/2
少量のローム粒, 微量の貝片を含む
2 黒褐色土 10YR3/2
少量のローム粒, 微量の貝片を含む
3 暗褐色土 10YR3/3
多量のローム粒・ロームブロックを含む
4 褐色土 10YR4/4
多量のローム粒・ロームブロックを含む
5 暗褐色土 10YR3/6
多量のローム粒, 多量の貝層を含む

1 黒褐色土 10YR3/2
少量のローム粒, 微量の焼土粒を含む
2 暗褐色土 10YR3/4
少量のローム粒, 少量の焼土粒を含む
3 黒褐色土 10YR2/3
少量のローム粒, 微量の焼土粒を含む
4 褐色土 10YR4/4
多量のローム粒,
少量のロームブロックを含む
5 黄褐色土 10YR5/6
多量のローム粒,
多量のロームブロックを含む
6 褐色土 10YR4/6
多量のローム粒,
多量のロームブロックを含む
炉3
① 赤褐色土 2.5YR4/8
少量のローム粒, 多量の焼土粒,
少量の淡橙色(5YR8/4)粘土粒を含む

第127図 土坑SK63, 66, 68, 69, 70, 71, 72, 73実測図

さ4.40cm、幅4.61cm、厚さ1.08cm、重量21.94ｇを測る。20は安山岩製の石槌である。下端に使用痕である敲面が顕著で、握り部側縁は原礫面のままである。長さ9.12cm、幅4.85cm、最大厚3.60cm、重量189.0ｇを測る。曽谷式を中心に前後の型式がみられるが、本跡は曽谷式期に比定される。

69号土坑（SK69）（第127・157図）

調査区の南西側、G－Ⅵ区、標高26.28ｍに位置する。長軸1.27ｍ、短軸1.23ｍの円形で、深さ69.1cmを測る。底面は平坦で、壁は南北辺がオーバーハングし、他辺は垂直気味に立ち上がる袋状形。覆土は６層に分層でき、自然堆積層である。遺物は、縄文後期前半の土器と土器片錘１点が出土している。第157図１は深鉢の口縁部破片。低山形状の突起をもつ。波頂部から扁平S字状隆帯が垂下し、隆帯により区画される。２は弧線沈線による帯状区画内に交互に縄文を充填する。３は沈線による意匠文。４・５は縄文地文に多条化沈線による意匠文。６・７は縄文地文。８は深鉢の底部破片。１～３・９が称名寺式、４～７は堀之内１式期。９は土器片錘。深鉢の胴部破片を再利用している。周縁は打欠のみで方形に成形し、長軸の両端に紐掛け溝を作出している。長さ6.06cm、幅5.53cm、厚さ0.94cm、重量72.5ｇを測る。

70号土坑（SK70）（第127・157図）

調査区の南西側、G－Ⅵ区、標高26.36ｍに位置する。長軸1.36ｍ、短軸1.05ｍの円形で、深さ57.5cmを測る。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がる円筒形。覆土は黒褐色土層の単一層からなる自然堆積層である。遺物は、縄文後期前半の土器が出土している。第157図１は蓋の底部破片。底部付近に小孔が穿ってある。２・３は条線文を地文とする。４は底部破片。

71号土坑（SK71）（第127・157図）

調査区の南西側、G－Ⅵ区、標高26.33ｍに位置する。長軸0.89ｍ、短軸0.88ｍの円形で、深さ86.9cmを測る。底面は平坦で、壁は垂直気味に立ち上がる円筒形。覆土は黒褐色土層の単一層からなる自然堆積層である。遺物は、縄文後期前半の土器が出土している。第157図１は鎖状隆帯を垂下させる。２・３は条線文。堀之内１式期。

72号土坑（SK72）（第127・157図）

調査区の南西側、G－Ⅵ区、標高26.28ｍに位置する。長軸1.03ｍ、短軸0.94ｍの円形で、深さ34.0cmを測る。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がる。覆土は黒褐色土層の単一層からなる自然堆積層である。遺物は、縄文後期前半の土器が出土している。第157図１は隆帯区画により口縁部が無文帯となる。２は縄文施文。３は条線により蛇行垂下する。堀之内１式期。

73号土坑（SK73）（第127・157図）

調査区の中央、G－Ⅵ区、標高26.29ｍに位置し、土坑SK191を切っている。長軸1.21ｍ、短軸1.17ｍの略円形で、深さ30.4cmを測る。底面は平坦で、東側でピット１本を伴い、北壁際でピット２本が穿ってある。壁は外傾して立ち上がる。覆土は黒褐色土層の単一層からなる自然堆積層である。遺物は、縄文後期前半の土器が出土している。第157図１は横位の多重化沈線文。２は条線による格子目文。３は無文地の口縁部破片。堀之内１式期。

74号土坑（SK74）（第128・158図）

調査区の中央、H－Ⅵ区、標高25.94ｍに位置する。長軸1.68ｍ、短軸1.52ｍの楕円形で、深さ71.1cmを測る。底面は平坦で、東西両側にピットを伴う。壁は南側がオーバーハングする袋状を呈する。覆土は褐色土層の単一層からなる自然堆積層である。遺物は、縄文後期前半の土器と磨製石斧１点が出土している。第158図１は縄文地文に盲孔を起点に２本の沈線による意匠文。２の口唇部は凹帯を呈し、口縁部は縄文地文に意匠文。３

は口縁に沿って平行沈線が巡り、磨消沈線文が垂下する。4は口縁部が短く内傾し、縄文地文に磨消懸垂文が垂下する。5の口縁は沈線区画された無文帯で称名寺式。6は波状口縁で、波頂部に盲孔を有し、懸垂文が垂下する。7は口縁部が微隆帯により区画され無文帯となり、押圧を加えた隆帯が垂下する。8は口縁部がくの字状に内傾する浅鉢。口縁部に沈線による枠状文。内文は平行沈線が巡る。9・10は縄文地文の深鉢。9は山形突起を有する波状口縁。11は口縁部が縦位の密接条線。12は口縁部が枠状文内に列点文を充填させる。13は刺突文が施された隆帯が垂下する。14～19は胴部破片。平行沈線による意匠文で、帯状交互に縄文を充填する。20は縦位の密接施文による条線文。21は深鉢の底部破片。22・23は土器片円板。いずれも深鉢の胴部破片を再利用している。22は全周比較的丁寧な研磨が施されている。長さ3.95cm、幅4.34cm、厚さ0.91cm、重量22.52gを測る。23は一部欠損している。ほぼ全周を打欠けによる成形。長さ4.90cm、幅4.60cm、厚さ1.10cm、重量23.04gを測る。称名寺式から堀之内1式期。

75号土坑（SK75）（第128・157図）

調査区の中央、G－V区、標高26.22mに位置する。長軸1.21m、短軸1.11mの円形で、深さ89.4cmを測る。底面は平坦で、壁は垂直気味に立ち上がる円筒形。覆土は黒褐色土層の単一層からなる自然堆積層である。遺物は、縄文後期前半の土器と土器片錘1点が出土している。第157図1・2は条線による格子目文。3は縄文地文。4は土器片錘。深鉢の胴部破片を再利用している。周縁は打欠のみで楕円形に成形し、長軸の両端に紐掛け溝を作出している。長さ4.82cm、幅3.15cm、厚さ0.86cm、重量14.92gを測る。

76号土坑（SK76）（第128・158図）

調査区の中央、G－V区、標高26.33mに位置する。長軸0.84m、短軸0.71mの円形で、深さ29.8cmを測る。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がる。覆土は黒褐色土層の単一層からなる自然堆積層である。遺物は、縄文後期初頭から前半の土器が出土している。第158図1は無文地の口縁部がくの字状に外反する深鉢。2は縄文地文。3は沈線懸垂文内に列点文を充填させる称名寺2式。称名寺式と堀之内1式土器が出土しているが、後者の堀之内1式期に比定できる。

77号土坑（SK77）（第128・158図）

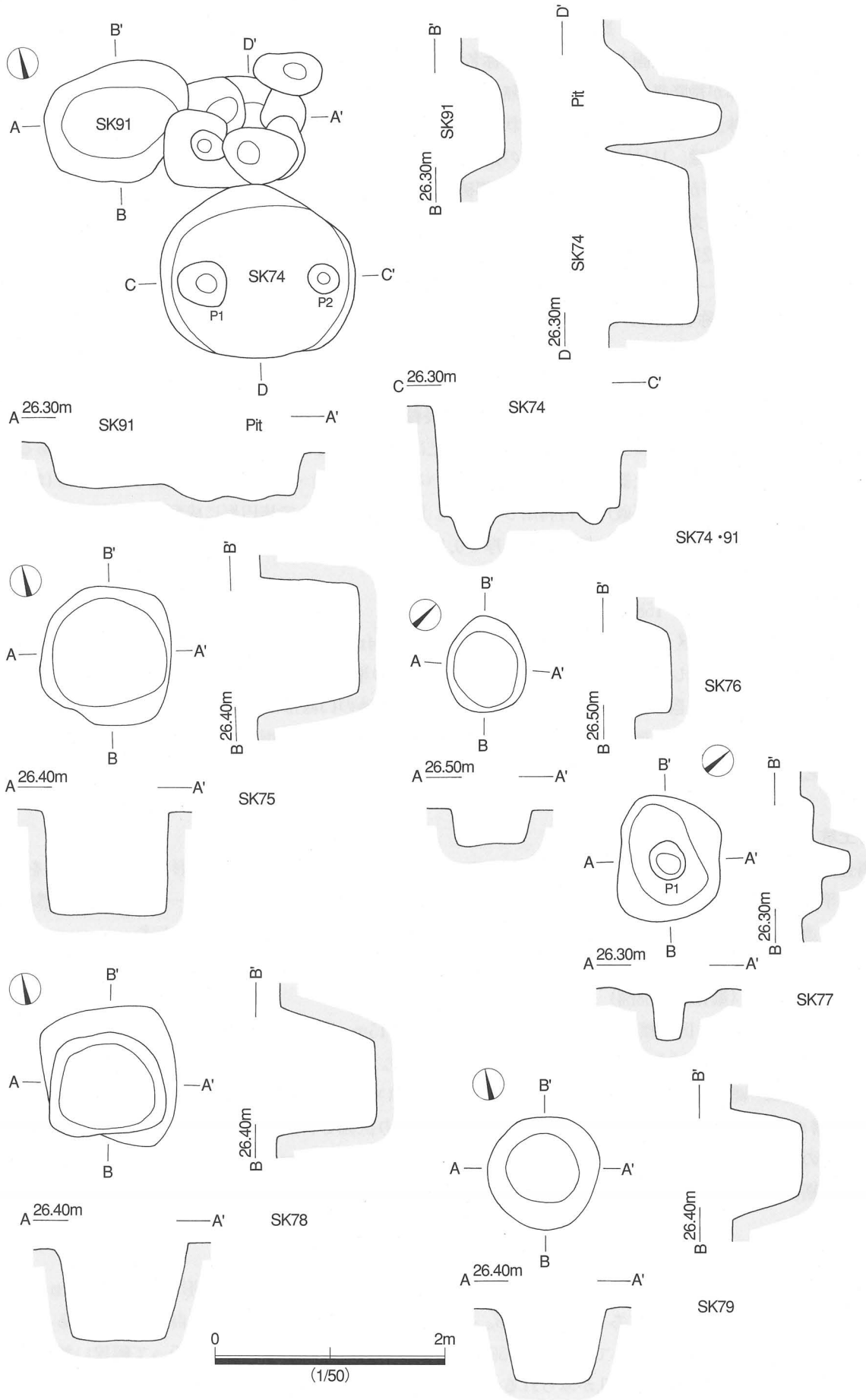
調査区の中央、G－V区、標高26.09mに位置する。長軸1.11m、短軸0.87m不整円形で、深さ18.6cmを測る。底面は平坦で中央にピットを伴う。壁は外傾して立ち上がる。覆土は黒褐色土層の単一層からなる自然堆積層である。遺物は、縄文後期前半の土器が出土している。第158図1は条線地文の堀之内1式。

78号土坑（SK78）（第128・158図）

調査区の中央、G－V区、標高26.21mに位置する。長軸1.15m、短軸1.14mの略円形を呈し、深さ82.0cmを測る。底面は平坦で、壁はやや垂直気味に立ち上がる円筒形。覆土は黒褐色土層の単一層からなる自然堆積層である。遺物は、縄文後期初頭の土器と磨石1点が出土している。第158図1は波状口縁の深鉢で、波頂部に扁平S字隆帯が貼付けられた把手。2は口縁部が微隆起帯により区画され無文帯となる。3は安山岩製の磨石破片。円礫の側縁部の一部に研磨面が認められる。現存長7.27cm、幅5.14cm、厚さ5.39cm、重量183.5gを測る。称名寺式期。

79号土坑（SK79）（第128・159図）

調査区の中央、G－V区、標高26.16mに位置する。長軸0.98m、短軸0.97mの円形で、深さ61.3cmを測る。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がる円筒形。覆土は褐色土層の単一層からなる自然堆積層である。遺物は、縄文後期前半の土器が出土している。第159図1・2は波状口縁の深鉢。口縁に沿って幅狭い無文帯をもち、縄文地文。1の波頂部には盲孔がみられる。3・4・10～15は縄文地文に多重化沈線による意匠文で、弧線文および直行文が垂下する。3～7は縄文地文に口縁に沿って沈線文が巡る。5は平行沈線。8は単口縁の



第128図　土坑SK74, 75, 76, 77, 78, 79, 91実測図

縄文地文。16は平行沈線による区画文。17は平行沈線が垂下する。18は条線による波状垂下。堀之内１式期。

80号土坑（SK80）（第129・159図）

調査区の中央、H－Ⅵ区、標高26.19ｍに位置する。長軸1.24ｍ、短軸0.83ｍの楕円形で、深さ30.9㎝を測る。底面は平坦で中央にピットを伴う。壁は外傾して立ち上がる。覆土は黒褐色土層の単一層からなる自然堆積層である。遺物は、縄文後期中葉の土器が出土している。第159図１の口縁部は沈線区画され無文帯とし、胴部は斜沈線が施文される。２も沈線区画され無文帯となる。加曽利B2式期。

81号土坑（SK81）（第129図）

調査区の中央、G－Ⅴ区、標高26.24ｍに位置するフラスコ形。開口部長軸0.97ｍ、短軸0.93ｍ、底面長軸短軸の円形で、深さ54.1㎝を測る。底面は平坦。覆土は黒褐色土層の単一層からなる自然堆積層である。遺物は出土していないが、縄文時代の典型的なフラスコ形を呈しており、縄文時代に比定される。

82号土坑（SK82）（第129・160図）

調査区の南側、H－Ⅶ区、標高26.16ｍに位置する。長軸0.96ｍ、短軸0.89ｍの略円形で、深さ35.3㎝を測る。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がる。覆土は黒褐色土層の単一層からなる自然堆積層である。遺物は、縄文後期前半の土器と土器片錘３点が出土している。第160図１大型深鉢で波状口縁である。波頂部は肥厚し盲孔隆帯が貼付けられており、口縁部は刻目を有する隆帯区画により無文帯となる。胴部は縄文地文。２も波状口縁。波頂部に８の字状隆帯を貼付け、背割り隆帯が対弧状に垂下する。３は口縁部が隆帯による意匠文。４は大型の橋状把手。把手下端部に盲孔、円形文、弧状沈線を配する。５は隆帯区画に羽状縄文地文。６は条線による格子目文。７～９は土器片錘。いずれも深鉢の胴部破片を再利用し、周縁を比較的丁寧に研磨している。楕円形に成形し、長軸の両端に紐掛け溝を作出している。７は長さ6.78㎝、幅3.49㎝、厚さ1.05㎝、重量30.34ｇ。８は長さ5.90㎝、幅2.94㎝、厚さ1.26㎝、重量28.60ｇ。９は長さ5.72㎝、幅3.14㎝、厚さ1.11㎝、重量24.76ｇを測る。堀之内１式期。

83号土坑（SK83）（第129・159図）

調査区の南側、H－Ⅵ区、標高26.16ｍに位置する。長軸1.26ｍ、短軸1.04ｍの楕円形で、深さ50.3㎝を測る。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がる。覆土は黒褐色土層の単一層からなる自然堆積層である。遺物は、縄文晩期中葉の土器が出土している。第159図１は口縁部破片。口縁に並行して２本の平行沈線間に列点文を充填する。２は粗製土器。紐帯は低平で押圧は相接し、斜条線を施文する。１が安行3c式、２が安行１式期。

84号土坑（SK84）（第129・159図）

調査区の北西側、E－Ⅴ区、標高26.18ｍに位置し、南端でピットを伴う。長軸1.15ｍ、短軸0.95ｍの不整円形で、深さ25.8㎝を測る。底面はやや起伏をもち、壁は外傾して立ち上がる。覆土は黒褐色土層の単一層からなる自然堆積層である。遺物は、縄文後期中葉の土器が出土している。第159図１は体部が直線的に外傾する深鉢。縄文地文。２は口縁下に刻みを施した紐帯を貼付け、沈線による幾何学文で堀之内２式。３は口縁に沿って２本の沈線間を縦位の沈線を施す。加曽利B3式期。

85号土坑（SK85）（第129・160図）

調査区の中央、H－Ⅵ区、標高26.20ｍに位置し、北東側でピットを切っている。長軸1.12ｍ、短軸1.10ｍの形で、深さ40.3㎝を測る。底面は平坦で、南東端でピットを伴う。壁は外傾して立ち上がる。覆土は黒褐色土層の単一層からなる自然堆積層である。遺物は、縄文後期前半の土器が出土している。第160図１は単口縁で、条線文が垂下する。２は鍔状に突出した隆帯が区画文となる。３は無文地に沈線が垂下する。４は深鉢の底部

破片。堀之内１式期。

86号土坑（SK86）（第129・160図）

調査区の中央、H－Ⅵ区、標高26.13ｍに位置する。長軸1.04ｍ、短軸1.01ｍの円形で、深さ57.9㎝を測る。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がる円筒形。覆土は褐色土層の単一層からなる自然堆積層である。遺物は、縄文後期初頭の土器が出土している。第160図１・２は無文地の口縁部破片。３～６は沈線による意匠文。３はJ字文。４は帯状交互に縄文が充填する。５は隆帯区画に帯状交互に列点文を充填させる。称名寺式期。

87号土坑（SK87）（第129・161図）

調査区の中央、H－Ⅵ区、標高26.14ｍに位置する。長軸0.84ｍ、短軸0.79ｍの円形で、深さ21.5㎝を測る。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がる円筒形。覆土は褐色土層の単一層からなる自然堆積層である。遺物は、縄文後期前半の土器と土製蓋１点が出土している。第161図１はS字状隆帯の把手に貫通孔が穿ってある。２は口縁部が沈線区画による幅狭い無文帯。３は口縁が僅かに外反する深鉢。縄文地文。４～７は縄文地文に沈線による意匠文。７は多重化弧線文。８は無文地。９は土製蓋で、約1/4の残存である。ほぼ円形で断面ドーム状の椀形を呈する。ナデ成形により仕上げている。推定径14.0㎝、高さ3.1㎝を測り、色調は橙色（7.5YR6/6）をなす。堀之内１式期。

88A号土坑（SK88A）（第129・161図）

調査区の中央、H－Ⅴ区、標高26.15ｍに位置し、西側で土坑SK88Bを切っている。規模は長軸1.55ｍ、短軸1.52ｍの隅丸方形をなす。深さ31.6㎝を測る。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がる。覆土は褐色土層の単一層からなる。自然堆積層である。

遺物は、縄文後期中葉の土器と土器片錘２点、台石１点が出土している。第161図１・２は平縁で口縁上の内面に沈線が巡り、磨消縄文による縄文帯をもつ。１は二本沈線による区画文間に弧線文を配する。２は縄文帯が巡る。３～５は口縁下に刻みを施した紐帯を貼付け、平行沈線による磨消縄文が施文される。６は口縁部が外反する鉢。内面に口縁に沿って沈線が巡る。７・８・17～20は磨消縄文施文で、７・８は口縁上が無文帯となる。９は縄文地文で、内面口縁上に沈線が巡る。10は口縁部が外反する深鉢で、口縁上は沈線が巡る。口縁部は無文帯であるが、区画線がなく、胴部は縄文地文。11は口唇部が肥厚し、沈線区画による無文帯。12～16は縄文地文。21～24は刻みを有する紐帯が区画文となる。25は口縁部が沈線区画による無文帯で、単沈線文が垂下する。26は単沈線による格子目文。27・28は土器片錘。27は口縁部の再利用で、口縁辺を除く三辺を研磨成形し、長軸の両端に紐掛け溝を作出している。長さ5.41㎝、幅3.62㎝、厚さ0.92㎝、重量22.4ｇ。28は胴部破片。周縁の打欠のみで方形に成形し、短軸の両端に紐掛け溝を作出している。長さ4.52㎝、幅5.46㎝、厚さ1.19㎝、重量34.80ｇを測る。29は砂岩製の台石である。表裏面とも平坦に研磨され、一部を欠損している。長さ12.72㎝、幅8.07㎝、厚さ1.97㎝、重量269.5ｇを測る。堀之内２式期。

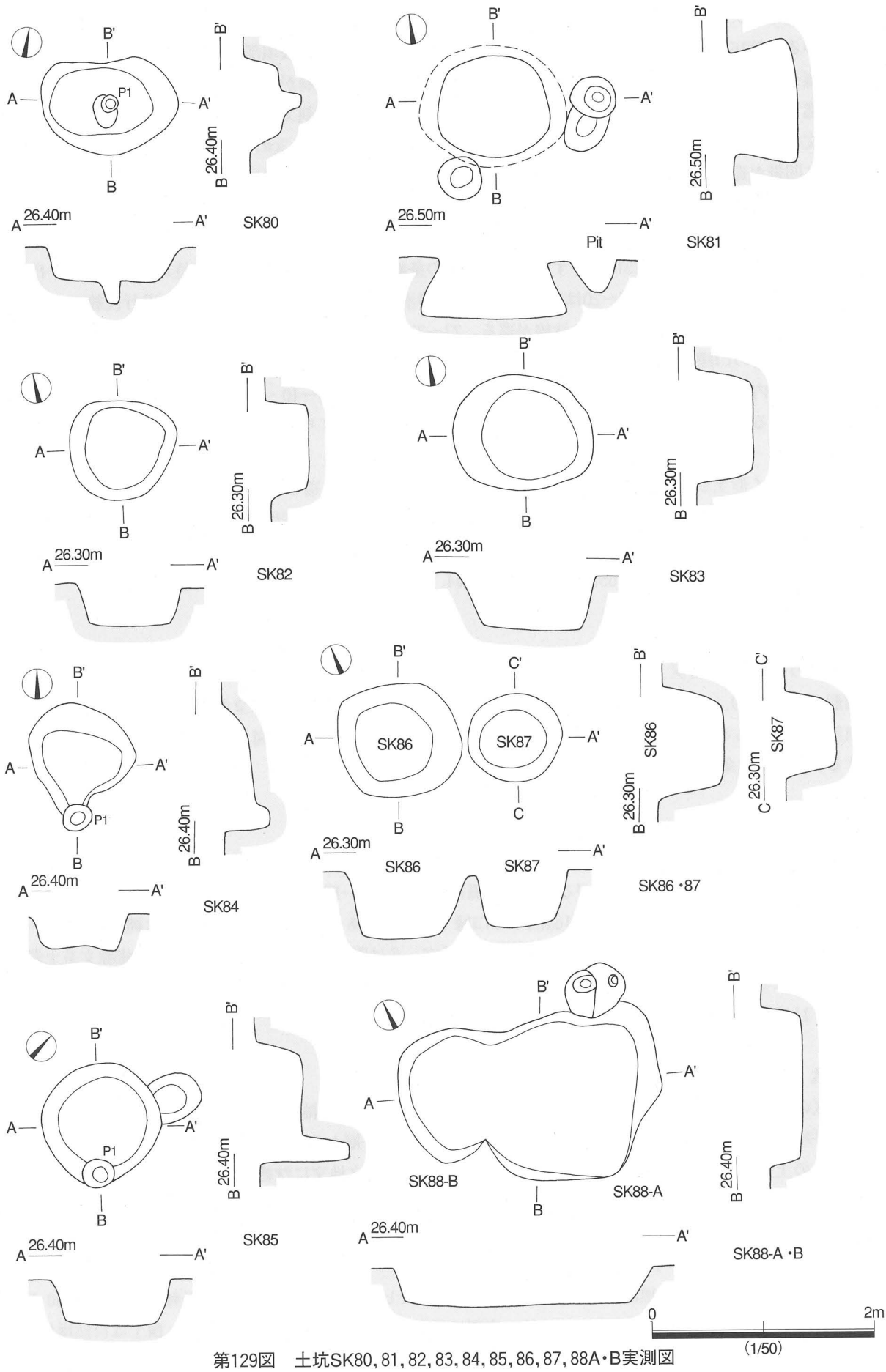
88B号土坑（SK88B）（第129図）

調査区の中央、H－Ⅴ区、標高26.15ｍに位置し、東側で土坑SK88Aに切られている。規模は長軸1.23ｍ、短軸0.87ｍの楕円形をなす。深さ31.6㎝を測る。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がる。覆土は自然堆積層である。

遺物は出土していないが、縄文時代後期前半の土坑SK88Aに切られていることから、縄文時代に比定される。

89号土坑（SK89）（第130・162・163図）

調査区の中央、H－Ⅵ区、標高26.12ｍに位置する。規模は長軸1.45ｍ、短軸1.43ｍで円形をなす。深さ383.7㎝を測る。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がる。覆土は自然堆積層で、最上層から小貝ブロックが検出された。ハマグリを主体とし、シオフキ・サルボウとわずかにアカニシと汽水産のヤマトシジミが混入して



第129図　土坑SK80, 81, 82, 83, 84, 85, 86, 87, 88A・B実測図

いた。またイノシシの小骨片が検出された。人工遺物は、縄文後期後葉の土器、軽石製品１点・剥片２点が出土している。第162図１・２は安行１式の４単位大波状口縁の深鉢。１は波頂部が角形状を呈し、隆起帯縄文が巡り、縦長の貼瘤が重畳する。２は波底部でやはり隆起帯縄文に、貼瘤が重畳する。３～９は平縁で、隆起帯縄文が巡る。７は口唇部が内面に突出する。８は隆起帯縄文に沿って刻文帯が巡る。10は胴部破片。胴部屈曲部に刻文帯が区画文となる。11は小型の浅鉢である。口径8.6cm、器高5.3cm、底径3.4cmを測る。波状口縁で、口唇部は凹帯が巡り、波頂部下に縦長の刻目をもつ貼瘤が付され、半截竹管による平行沈線で横位に展開する渦巻き状の意匠文。沈線間は刺突文を充填させる。12～20は紐線文系粗製土器である。12は体部が大きく内彎して立ち上がり、口唇部は肥厚し、低平で押圧され相接する紐帯が巡る。口縁部は下向き弧線の条線、体部上部から縦位の条線施文。13～15は斜行する下向き弧線の条線。16～20は体部上部に縦位および斜位の平行沈線による意匠文で区画される。17～20は沈線間の地文が磨消されている。21は縄文地文に平行沈線による弧線文。22は無文地に口縁に沿って一条の沈線が巡る。23～25は底部破片。23は網代痕。24は台付状を呈する。26～59は製塩土器の口縁部破片。いずれも体部は縦位方向のヘラナデ。26は口唇部が肥厚する。28・30・41・47・57は口唇部の内面をヘラケズリする内削状を呈する。27・29・31・33～40・42～44は口唇部を丸くし、外面をヘラケズリする外削状。45・46・48～59の口唇部は外削状にヘラケズリを施している。60・61は木葉痕を残置している。

62はみみずく形土偶の脚部破片である。沈線区画による縄文帯が巡る。現存長4.575cm、幅3.213cm、厚さ2.83cmを測る。63は軽石製品で一部欠損している。ほぼ全面に研磨面が認められる。浮子であろう。現存長6.22cm、幅3.07cm、厚さ2.18cm、重量4.98ｇである。64･65は粘板岩製の剥片である。54は長さ5.04cm、幅4.59cm、厚さ1.19cm、重量23.64ｇ。65は長さ6.37cm、幅4.12cm、厚さ1.70cm、重量28.38ｇである。

90号土坑（SK90）（第130・164図）

調査区の中央、H－Ⅵ区、標高26.15mに位置し、北西側でピットと重複している。長軸0.75m、短軸0.57mの円形で、深さ159.1cmを測る柱穴状土坑。底面はほぼ平坦で、壁は垂直気味に立ち上がる。覆土は黒褐色土層の自然堆積層である。遺物は、縄文後期前半の土器が出土している。第164図１は紐線文系土器。口唇部が肥厚する。２～４は条線文。５は網代痕を残す底部破片。

91号土坑（SK91）（第128・164図）

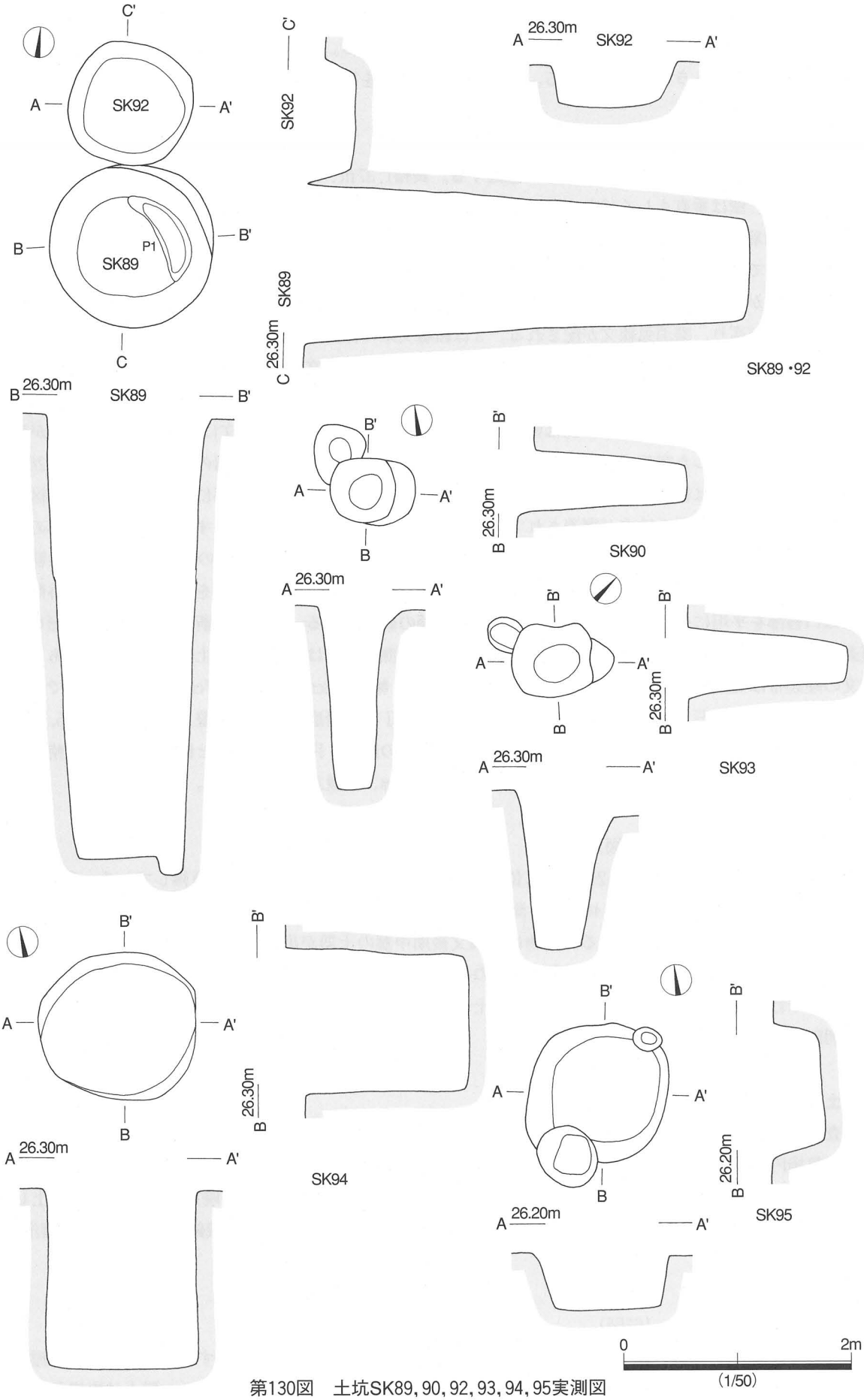
調査区の中央、H－Ⅵ区、標高26.10mに位置する。長軸1.25m、短軸1.02mの楕円形で、深さ37.9cmを測る。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がる。覆土は黒褐色土層の単一層からなる自然堆積層である。遺物は、縄文後期中葉の土器が出土している。第164図１は口縁下に刻みのある紐帯が巡る。２～４は縄文地文で、４は沈線懸垂文が垂下する。５・６は多重化沈線による意匠文。６は隆帯を伴う。７は胴部破片の紐線文系土器で、指頭圧痕による押圧された紐線が巡る。８は縄文地文に平行沈線を垂下させる。９は縦位の密接条線。10は縄文地文。11は深鉢の底部破片。堀之内２式期。

92号土坑（SK92）（第130・164図）

調査区の中央、H－Ⅵ区、標高26.13mに位置する。長軸1.10m、短軸1.09mの円形で、深さ34.6cmを測る。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がる。覆土は褐色土層の単一層からなる自然堆積層である。遺物は、縄文後期前半の土器が出土している。第164図１は斜行条線。２は縄文地文に沈線による懸垂文。３は縄文地文。堀之内１式期。

93号土坑（SK93）（第130・164図）

調査区の中央、H－Ⅵ区、標高26.11mに位置し、北西側でピットが重複している。長軸0.90m、短軸0.59mの隅丸方形で、深さ142.0cmを測る柱穴状土坑。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がる。覆土は自然堆積層である。遺物は、縄文後期末葉の土器が出土している。第164図１は口縁に沿って隆起帯縄文を巡らし、さらに沈



第130図　土坑SK89, 90, 92, 93, 94, 95実測図

線区画された刻目の施された隆起帯間に豚鼻状の貼瘤が付されている。2は口縁部が肥厚し、斜行する弧状磨消文を配する。3は刻文帯が区画文となり横位の条線を重点する。4～7は製塩土器。4～6は胴部破片で、器厚は薄手で丁寧なヘラナデ成形である。7の底部は網代痕を残す。安行2式期。

94号土坑（SK94）（第130・165・166図）

調査区の中央、H－Ⅴ区、標高26.06mに位置する。長軸1.37m、短軸1.28mの円形で、深さ157.9cmを測る。底面は平坦で、壁は垂直もしくはわずかにオーバーハングして立ち上がる円筒形。覆土は黒褐色土層を主体とする自然堆積層で、最上層から小貝ブロックが検出された。中型ハマグリとわずかにサルボウが混入していた。また小片であるがニホンジカの下顎が検出された。人工遺物は、縄文後期後半の土器と土製蓋、土偶および磨石類2点が出土している。第165図1は口縁上に沈線区画された刻目が巡り、縄文帯となる。2も沈線区画された刻目が巡り、磨消弧線文が配される。3は紐線文系の深鉢で、体部上部は横位の条線文に縦位および斜位の沈線で区画する。胴部中位は紐帯で区画し、下位は斜行条線文。4～7は隆起帯縄文で、4は半円形の区画を形成する。8の口縁上は沈線区画された刻文帯が巡り、縦位の磨消縄文を配する。9は無文地で肥厚する口縁部にV字状の刻みを入れる。10は瓢形土器の胴部破片。刻文帯を区画文に上部は磨消弧線文が配される。11は山形状を呈した突起で、表裏面に沈線区画による意匠文。12は注口土器の注口部破片。13～26は紐線文系の粗製土器。13は横位の下向き弧状条線。14～26は体部上部に縦位および斜位の平行沈線による区画文を有する。20～26は沈線間の地文が磨消されている。27・28は条線文のみを地文とする。29・30は深鉢の底部破片。1～41、第166図42～56は製塩土器の口縁部破片。いずれも体部は縦位方向のヘラナデ。31は口唇部が肥厚する。32～45は口唇部の内面をヘラケズリする内削状を呈する。46～53は外面をヘラケズリする外削状。54～59は口唇部を平坦にヘラケズリしている。60は土製蓋の破片である。円形で、断面ドーム状の椀形を呈し、貫通孔を有する。推定径10.0cm、高さ3.0cm、厚さ0.81cmを測る。61はみみずく形土偶の脚部破片である。縄文施文の隆起帯は裏面には施されていない。現存長6.356cm、幅2.622cm、厚さ2.537cm、重量46.74ｇである。62は安山岩製の円形磨石。円礫の表裏面および側縁を比較的丁寧に研磨し、形状を整えている。長さ5.03cm、幅4.00cm、厚さ2.95cm、重量66.5ｇ。63はホルンフェルス製の磨石。円礫の両端部と側縁部の一部に使用痕である敲打痕が認められる。長さ7.03cm、幅5.39cm、厚さ3.88cm、重量219.5ｇである。

95号土坑（SK95）（第130・166図）

調査区の中央、H－Ⅵ区、標高25.95mに位置し、北東および南西側にピットが重複している。長軸1.20m、短軸1.20mの隅丸方円形で、深さ46.0cmを測る。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がる。覆土は黒褐色土層の単一層からなる自然堆積層である。遺物は、縄文後期中葉の土器が出土している。第166図1～3は縄文施文の深鉢。4は紐線文で体部は縄文地文に横位の条線を施文する。5は沈線区画された縄文帯を巡らす。6は無文地に平行沈線を蛇行垂下する。7は注口付土器の注口部の破片。円筒形を呈する。8は深鉢の底部破片。加曽利B3式期。

96号土坑（SK96）（第131・164図）

調査区の東側、J－Ⅴ区、標高25.95mに位置し、北側に大型ピット2本が重複する。長軸1.778m、短軸1.25mの不整楕円形で、深さ26.0cmを測る。底面は平坦でピット2本が伴う。壁は垂直気味に立ち上がる。覆土は黒褐色土層の単一層からなる自然堆積層である。遺物は、縄文後期中葉および晩期前半の土器が出土している。第164図1は起点を同じくする弧線文間は磨消縄文。晩期・安行3式。2は浅鉢。平行沈線間は磨消縄文。加曽利B式期。

97号土坑（SK97）（第131・167図）

調査区の東側、J－Ⅴ区、標高26.01mに位置し、北西と南東側でピットが重複する。長軸1.51m、短軸1.25mの楕円形で、深さ106.0cmを測る円筒形。底面は平坦で、壁は垂直気味に立ち上がる。覆土は黒褐色土層を主

体とする自然堆積層である。遺物は、縄文晩期前半の土器が出土している。第167図１は浅鉢の口縁部破片。口縁上に連弧状文が配され、体部下には縄文帯が巡る。２～６は粗製土器で、２は体部が内彎気味に立ち上がる。口縁部が横位条線文、胴部が縦位条線文。３は口唇部が肥厚し、やはり口縁部は横位、胴部は縦位の条線が施文される。４は胴部中位の破片で、紐線文が巡り区画している。７は橋状把手。８は深鉢底部破片。９・10は製塩土器の胴部破片。比較的丁寧なヘラナデで仕上げられている。安行3b式期。

98号土坑（SK98）（第131図）

調査区の東側、J－Ⅴ区、標高25.98ｍに位置し、円形土坑に柱穴状土坑が付帯する。開口部の長軸0.92ｍ、短軸0.84ｍの円形で、深さ40.1㎝。下段の柱穴状土坑の長軸0.92ｍ、短軸0.84ｍの円形で、深さ40.1㎝を測る。底面は平坦で、壁は垂直気味に立ち上がる。覆土は黒褐色土層を主体とする自然堆積層である。遺物は出土していないが、覆土の状況から判断して縄文時代に比定できる。

99号土坑（SK99）（第131・167図）

調査区の東側、K－Ⅴ区、標高25.59ｍに位置する。長軸1.10ｍ、短軸0.83ｍの楕円形で、深さ68.7㎝を測る。底面は平坦で、西側で重複するピット２本を伴う。壁は垂直気味に立ち上がる。覆土は黒褐色土を主体とする自然堆積層である。遺物は、縄文晩期前半の土器と土製円板１点、磨製石斧１点、磨石１点が出土している。第167図１は鉢の口縁部破片。口縁上は沈線区画の無文帯で、体部は弧線文による磨消縄文。２は縄文地文に多条化沈線。３は無文地に円形文を配する。４・５は粗製土器で横位の条線を施文する。６は注口付土器の注口部の破片。７は無文地の深鉢。８は台付鉢の体部と脚部の接合部破片。９は深鉢の底部破片。10～12は製塩土器である。いずれも器面はヘラナデにより成形されている。10の口唇部は丸みをもって整形している。11の口唇部は平坦である。13は有孔円板形土製品の破片である。約1/4を残存している。表裏面ともに比較的丁寧に整形されており、中心部と比較し外縁部が肥厚する。また中心孔と小孔が認められ、中心孔は焼成前、小孔は焼成後に空けられたものである。現存径5.06㎝、厚さ1.436㎝、重量38.64ｇである。14は砂岩製の磨製石斧の基部側破片である。表裏面、側面共に丁寧に研磨仕上げされ、稜線が端部まで達している。また基部には敲打痕がみられる。現存長9.93㎝、幅4.48㎝、厚さ3.29㎝、重量239.5ｇである。15は砂岩製の磨石類のうち両端に研磨痕が認められる磨石である。長さ6.92㎝、幅4.56㎝、厚さ2.91㎝、重量123.0ｇを測る。

100号土坑（SK100）（第131・168図）

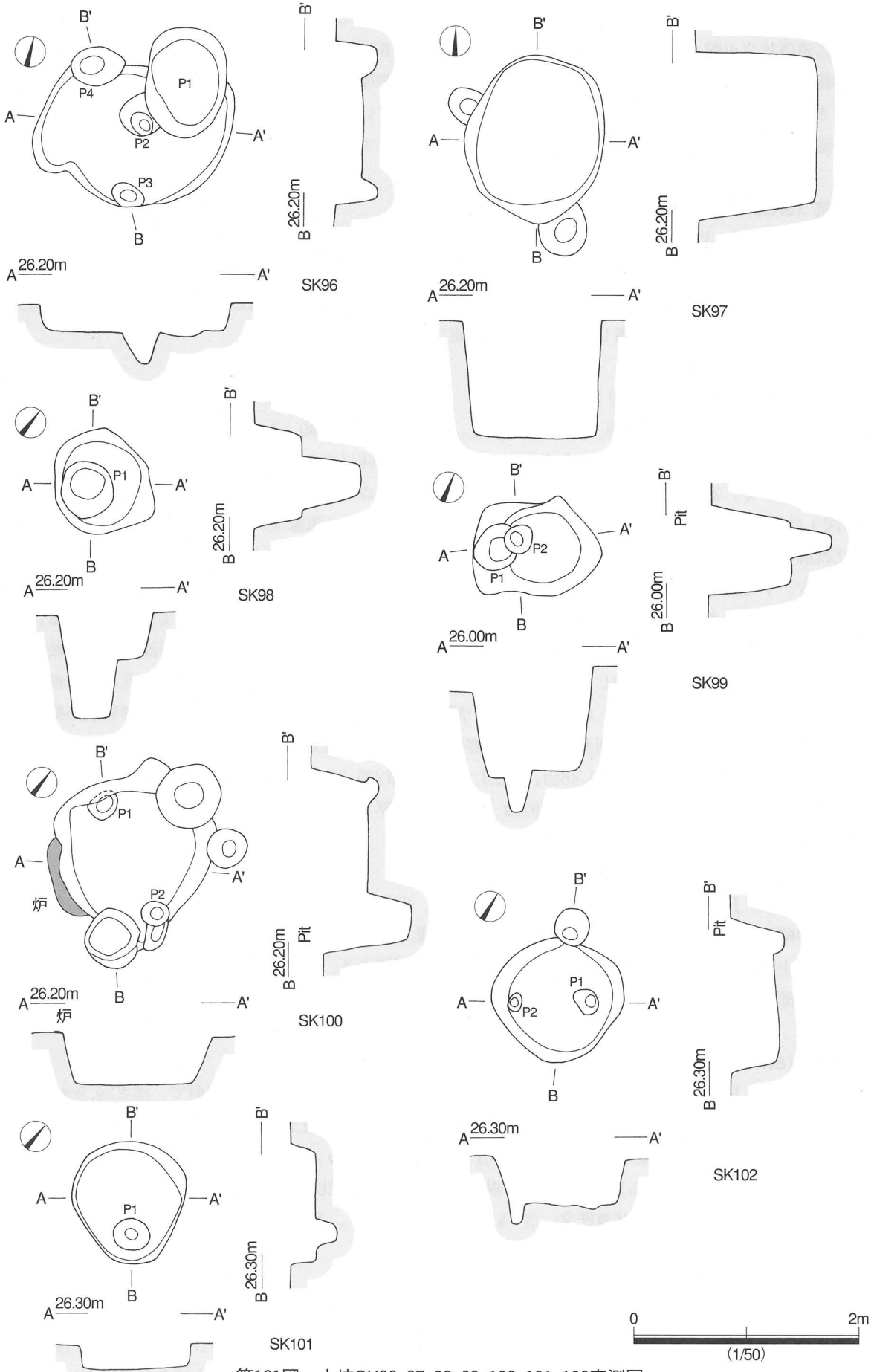
調査区の東側、J－Ⅴ区、標高25.99ｍに位置し、北側、南側にピットが３本重複している。長軸1.55ｍ、短軸1.34ｍの略円形で、深さ44.1㎝を測る。底面は平坦で北西壁、南東壁際にサイドピット２本を伴う。壁は外傾して立ち上がる。覆土は黒褐色土を主体とする自然堆積層である。遺物は、縄文後期前半の土器が出土している。第168図１深鉢の胴部小破片。横位の条線を施文する。

101号土坑（SK101）（第131・168図）

調査区の中央、H－Ⅴ区、標高26.05ｍに位置する。長軸1.08ｍ、短軸1.00ｍの円形で、深さ29.9㎝を測る。底面は平坦で、南側でピット１本を伴う。壁は外傾して立ち上がる。覆土は黒褐色土層の単一層からなる自然堆積層である。遺物は、縄文後期初頭から前半の土器が出土している。第168図１は波状口縁で、口縁部は隆帯区画により無文帯。波頂部から扁平S字隆帯が垂下する。胴部は単沈線による格子目文。２は横位の扁平S字隆帯に２本の平行描線による帯状意匠文。３・４は深鉢の底部破片。１は綱取式、２は称名寺式に比定される。

102号土坑（SK102）（第131・168図）

調査区の中央、H－Ⅴ区、標高26.12ｍに位置し、北側でピットが重複する。長軸1.18ｍ、短軸1.06ｍの円形で、深さ42.1㎝を測る。底面は平坦で、東・西側でサイドピットを伴う。壁は外傾して立ち上がる円筒形。覆土は黒褐色土を主体とする自然堆積層である。遺物は、縄文後期前半の土器と土器片錘１点が出土している。



第131図　土坑SK96, 97, 98, 99, 100, 101, 102実測図

第168図１は縄文地文に沈線による意匠文。２は縄文地文。３は土器片錘の破片。深鉢の胴部破片を再利用している。周縁は研磨により隅丸方形に成形し、長軸の両端に紐掛け溝を作出している。長さ3.23cm、幅3.98cm、厚さ1.05cm、重量23.5ｇを測る。堀之内１式期。

103号土坑（SK103）（第132図）

調査区の中央、H－Ⅵ区、標高26.15ｍに位置し、北側でピットが重複する。長軸1.06ｍ、短軸1.00ｍの円形で、深さ139.3cmを測る。底面は平坦で、壁は垂直に立ち上がる円筒形。覆土は黒褐色土を主体とする自然堆積層である。遺物は出土しなかったが、土坑の形態や覆土の状態から縄文時代に比定できる。

104号土坑（SK104）（第132・168図）

調査区の中央、H－Ⅴ区、標高26.13ｍに位置する。長軸1.24ｍ、短軸1.23ｍの円形で、深さ74.7cmを測る。底面は平坦で、壁は垂直気味に立ち上がる円筒形。覆土は黒褐色土を主体とする自然堆積層で、上層から小貝ブロックが検出された。ハマグリ・オキシジミを主体とし、わずかにシオフキ・アカニシが混入していた。またイノシシの小骨片が検出された。人工遺物は、縄文後期中葉の土器と土器片円板２点が出土している。第168図１は内文を伴う浅鉢で波状口縁。波頂部から平行して鎖状隆帯を垂下させ、横位の紐帯を区画文とする。内文は同心円文。２は横位の多条沈線文。３は口縁を沈線区画により無文帯となる。４～６は縄文地文。４は内面に沈線を巡らす。７は縄文地文に沈線による意匠文。８は浅鉢。外面無文で内面縄文帯を施す。９・10は紐線文系粗製土器。９は縄文地文に斜行沈線。11は深鉢底部破片。12・13は土器片円板である。深鉢の胴部破片を再利用している。12はほぼ全周をやや粗い研磨が施されている。長さ5.36cm、幅5.21cm、厚さ0.85cm、重量27.82ｇ。13は全周比較的丁寧な研磨が施されている。長さ3.64cm、幅3.99cm、厚さ0.78cm、重量12.80ｇを測る。

105号土坑（SK105）（第132・169図）

調査区の中央、H－Ⅴ区、標高26.02ｍに位置し、西側でピット群が重複する。長軸1.02ｍ、短軸0.78ｍの楕円形で、深さ17.8cmを測る。底面は鍋底状で、壁は外傾して立ち上がる。覆土は黒褐色土層の単一層からなる自然堆積層である。遺物は、縄文後期前半の土器が出土している。第169図１口縁部破片。縄文施文。２は無文地。

106号土坑（SK106）（第132・169図）

調査区の中央、H－Ⅴ区、標高26.10ｍに位置し、南東側でピットが重複する。長軸1.09ｍ、短軸0.98ｍの略円形で、深さ52.0cmを測る。底面は平坦で、壁は垂直気味に立ち上がる円筒形。覆土は黒褐色土を主体とする自然堆積層である。遺物は、縄文後期初頭の土器が出土している。第169図１は口唇部が内面に突出する深鉢で、無文地に沈線による懸垂文を垂下させる。２は条線による弧線文。３・４は断面三角形隆帯の区画文を巡らせ、３は縦位の条線を施文する。称名寺式期。

107号土坑（SK107）（第132・169図）

調査区の南東側、I－Ⅴ区、標高25.99ｍに位置し、周縁に３本のピットが重複する。長軸1.20ｍ、短軸1.09ｍの略円形で、深さ41.4cmを測る。底面は平坦で北東側にピットを伴う。壁は外傾して立ち上がる円筒形。覆土は黒褐色土を主体とする自然堆積層である。遺物は、縄文後期初頭の土器が出土している。第169図１は波状口縁の深鉢。扁平S字状隆帯が貼付けられている。２は単沈線の格子目文。３は条線を波状に垂下させる。称名寺式期。

108号土坑（SK108）（第132・169図）

調査区の南東側、I－Ⅴ区、標高25.99ｍに位置し、南側でピットが重複している。長軸1.08ｍ、短軸1.02ｍの円形で、深さ36.3㎝を測る。底面は平坦で東側にサイドピットを伴う。壁は外傾して立ち上がる円筒形。覆土は黒褐色土を主体とする自然堆積層である。遺物は、縄文晩期前半の土器が出土している。第169図１は浅鉢で、口縁部は肥厚し、無文帯で、２本沈線間を縦位沈線で区切る区画文と胴部は雲形文であろう。２は横位の多条化沈線にコンパス文を垂下させる。３は紐線文系粗製土器。紐帯は低平で押圧は相接する。条線は横位で斜行する平行沈線間を磨消す。４・５は製塩土器。４の口唇部はヘラにより平坦に面取りされている。５は底部で、平底の径は小さい。安行3a式期。

109号土坑（SK109）（第132・170図）

調査区の南東側、I－Ⅴ区、標高25.99ｍに位置し、東西２本のピットが重複している。長軸1.72ｍ、短軸1.66ｍの円形で、深さ124.4㎝を測る。底面は平坦で、壁は僅かにオーバーハングする袋状土坑。覆土は黒褐色土を主体とする自然堆積層である。遺物は、縄文後期前半の土器、土器片錘７点、土器片円板１点が出土している。第170図１～４は口縁上が沈線区画により無文帯をもつもので、１は盲孔を挟んで平行沈線間は無文帯。体部は縄文地文に沈線による対向弧線を垂下させる。２の口唇部は内削状を呈し、縄文地文に平行沈線間を無文とし意匠文を配し垂下させる。３は隆帯に沿って沈線区画文が巡る。体部は縄文地文に沈線による意匠文。４は平行沈線が区画文となる。５は波状口縁で波頂部に盲孔を有する。６は押圧を加えた隆帯を区画文とする。７～10・14は口縁部が無文帯で、隆帯を区画文とする。６は隆帯下に沈線が沿い、10は隆帯に刻目が施されている。11～13・24は沈線区画文により口縁部を無文帯とする。12・13は体部が縦位の条線。24・25は格子目文。15～19は口縁区画文をもたないもので、15～17は条線施文。17は波状に垂下させる。18・19は縄文地文。20～23は縄文地文に沈線による意匠文。22は平行沈線間に列点文を充填させ懸垂文としている。26～31は底部破片。26は木葉痕を残置している。堀之内１式期。

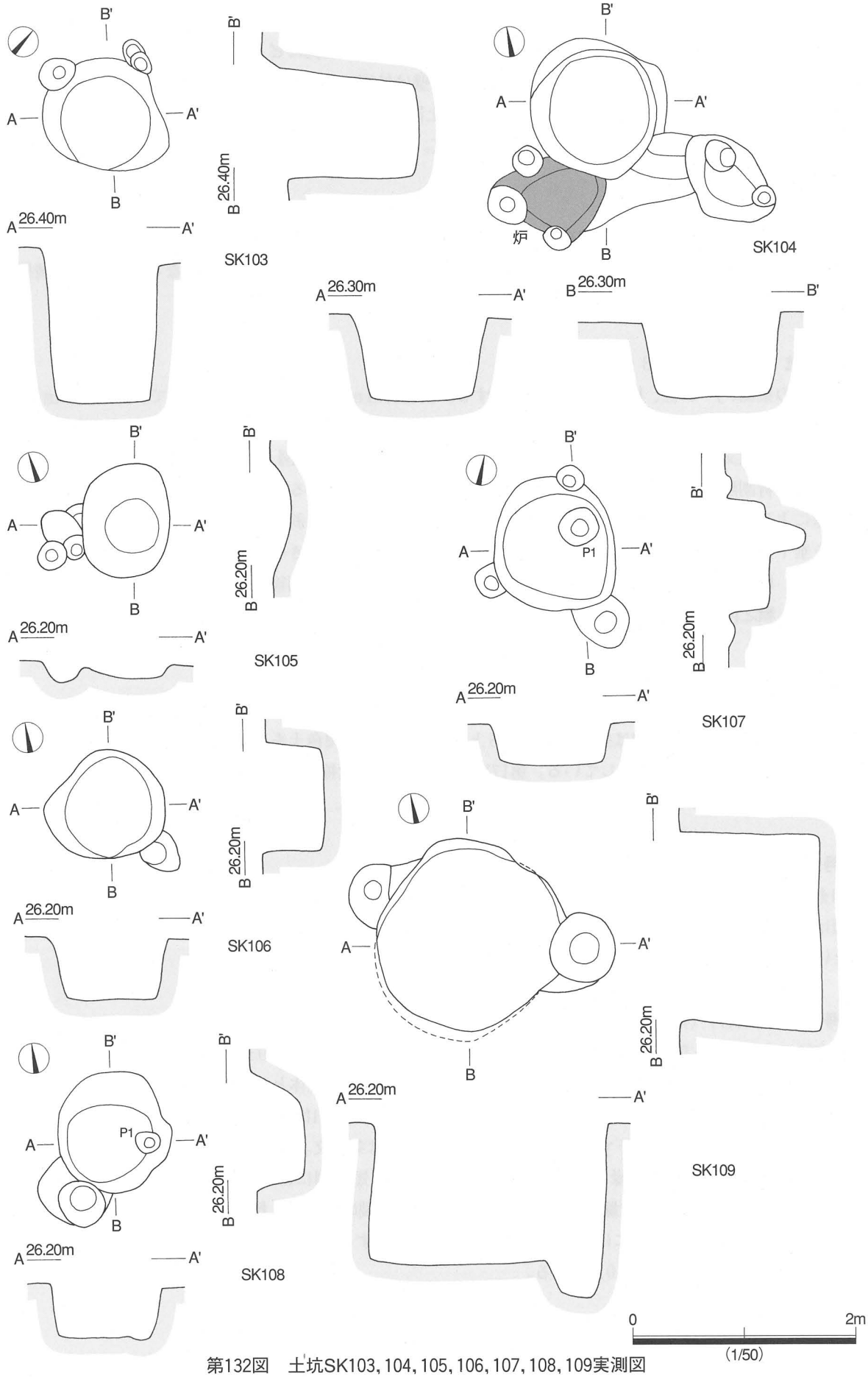
32～36は土器片錘。いずれも深鉢の胴部破片を再利用している。32の周縁は打欠のみで楕円形に成形し、長軸の両端に紐掛け溝を作出している。長さ4.94㎝、幅3.02㎝、厚さ1.20㎝、重量21.04ｇ。33は一部欠損。周縁の一部を研磨し方形に成形し、紐掛け溝は長軸側。現存長4.05㎝、幅3.67㎝、厚さ0.99㎝、重量16.86ｇ。34は周縁を打欠のみで三角形に成形し、紐掛け溝は長軸側。現存長6.50㎝、幅7.27㎝、厚さ1.19㎝、重量55.60ｇ。35は約半分を欠損。周縁は研磨仕上げ楕円形に成形し、紐掛け溝は長軸側。現存長3.59㎝、幅4.49㎝、厚さ1.0㎝、重量17.18ｇ。36は周縁の一部を研磨し、楕円形に成形し、紐掛け溝は長軸側。長さ4.48㎝、幅4.16㎝、厚さ1.13㎝、重量15.90ｇを測る。37は土器片円板である。縄文地文の胴部破片を再利用している。全周丁寧な研磨が施されている。長さ3.89㎝、幅3.94㎝、厚さ0.83㎝、重量17.92ｇを測る。

110号土坑（SK110）（第133・169図）

調査区の南東側、I－Ⅴ区、標高25.97ｍに位置し、南と東側にピットが重複する。長軸1.51ｍ、短軸1.46ｍの円形で、深さ24.8㎝を測る。底面は平坦で、７本のピットを穿っている。壁は外傾して立ち上がる。覆土は黒褐色土を主体にする自然堆積層である。遺物は、縄文後期前半の土器が出土している。第169図１は胴部中位に括れをもち、上部は沈線による1/4多条円文を重畳させ波状を呈する意匠文。下部は無文となる。２は口縁に沿って微隆起線が区画文なり、幅狭い無文帯を形成し、地文は縄文施文。３は胴部破片の縄文地文。堀之内１式期。

111号土坑（SK111）（第133・169図）

調査区の南東側、I－Ⅴ区、標高25.99ｍに位置する。長軸1.00ｍ、短軸0.70ｍの楕円形で、深さ51.4㎝を測る。底面は平坦で２本のピットが伴う。壁は外傾して立ち上がる。覆土は褐色土層の単一層からなる自然堆積層である。遺物は、縄文晩期前半の土器が出土している。第169図１・２は条線のみを施文する粗製土器。３～７は製塩土器である。３の口唇部は丸みを呈する。７の底部は尖底である。安行3b式。



第132図　土坑SK103, 104, 105, 106, 107, 108, 109実測図

112号土坑（SK112）（第133・171図）

調査区の南東側、I－Ⅴ区、標高26.00mに位置し、南北および東側にピットが重複する。長軸1.30m、短軸1.30mの円形で、深さ33.8cmを測る。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がる。覆土は黒褐色土層の単一層からなる自然堆積層である。遺物は、縄文後期前半の土器が出土している。第171図1は口縁部破片。無文地である。2は縄文地文。3は深鉢の底部破片。縄文施文。堀之内1式であろう。

113号土坑（SK113）（第133図）

調査区の東側、J－Ⅲ・J－Ⅳ区、標高25.74mに位置する。長軸1.29m、短軸1.00mの長方形を呈し、深さ45.0cmを測る。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がる。覆土は褐色土層の単一層からなる人為的な堆積層である。遺物は出土しなかった。覆土の状況から判断して近世土坑である。

114号土坑（SK114）（第133・171図）

調査区の東側、J－Ⅳ区、標高25.95mに位置する。長軸1.51m、短軸1.19mの楕円形で、深さ50.5cmを測る。底面は平坦で、4本のピットを伴う。壁は外傾して立ち上がる。覆土は黒褐色土を主体とする自然堆積層である。遺物は、縄文中期後半から後期中葉の土器が出土している。第171図1はキャリパー形の深鉢口縁部破片。縄文地文に背割隆帯による横S字文。加曽利E1式。2は平行沈線による渦巻文内を磨消。3は縄文地文に多条化沈線による意匠文。4は胴部破片。無文地に隆帯区画文。隆帯上に斜行する短沈線を施文する。5は波状の条線を垂下させる。6は無文地。7は口縁に沿って二条の紐帯を平行させ、胴部は沈線による楕円形の意匠文に磨消す。堀之内2式期。8は深鉢の底部破片。本坑の出土遺物は中期後半から後期中葉まで確認できるが、後期前半・堀之内1式期に比定できる。

115号土坑（SK115）（第133・171図）

調査区の東側、J－Ⅳ区、標高25.96mに位置する。長軸1.15m、短軸0.90mの円形で、深さ144.5cmを測る柱穴状土坑。底面は平坦で、壁は垂直気味に立ち上がる。覆土は黒褐色土を主体とする自然堆積層である。遺物は、縄文後期前半の土器が出土している。第171図1は口縁上に沈線をもち、胴部に斜行する条線を施す。2は縄文地文に沈線区画し、同心円文を描出する。3・4は縄文地文。堀之内1式期。

116号土坑（SK116）（第133図）

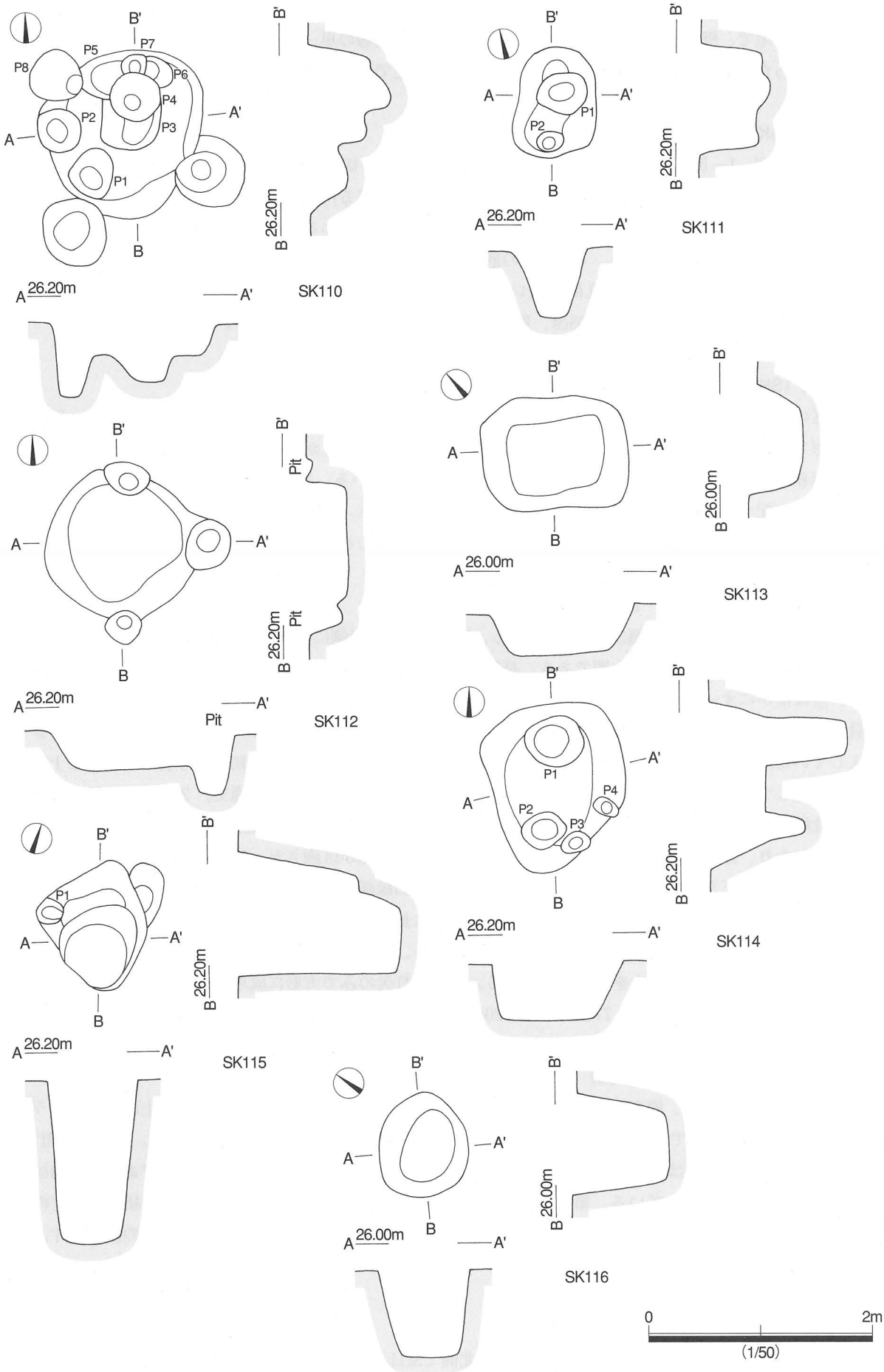
調査区の東側、J－Ⅳ区、標高25.86mに位置する。長軸0.93m、短軸0.81mの楕円形で、深さ80.3cmを測る。底面は平坦で、壁は垂直気味に立ち上がる。覆土は黒褐色土を主体とする自然堆積層である。遺物は出土していないが、土坑形態および覆土の状況から縄文時代に比定される。

117号土坑（SK117）（第134・171図）

調査区の東側、K－Ⅳ区、標高25.73mに位置する。長軸1.02m、短軸0.93mの円形で、深さ44.6cmを測る。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がる円筒形。覆土は黒褐色土を主体とする自然堆積層である。遺物は、縄文後期前半の土器と土器片錘1点、磨石1点が出土している。第171図1は深鉢の口縁部破片。平行沈線による意匠文。2は磨消縄文が垂下する。3・4は縄文地文。5は条線文。6・7は深鉢底部破片。8は土器片錘。深鉢の胴部破片を再利用。周縁は打欠のみで台形に成形し、短軸側に紐掛け溝を作出している。現存長5.34cm、幅5.65cm、厚さ1.22cm、重量34.46gを測る。9は安山岩製の磨石類。楕円形を呈し、表裏、側面に顕著な研磨面を残し、表裏両面中央には敲打作業痕である2個連接する8の字状楕円凹部がある。長さ12.78cm、幅7.87cm、厚さ4.20cm、重量532.0gを測る。

118号土坑（SK118）（第134図）

調査区の中央、G－Ⅳ区、標高25.97mに位置する。長軸0.82m、短軸0.81mの隅丸方形で、深さ18.0cmを測



第133図　土坑SK110, 111, 112, 113, 114, 115, 116実測図

る。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がる。覆土は黒褐色土層の単一層からなる自然堆積層である。遺物は出土しなかったが、覆土の状況から判断して縄文時代に比定できる。

119号土坑（SK119）（第134・172図）

調査区の東側、I－Ⅳ区、標高25.94ｍに位置し、土坑SK120を切っている。長軸1.57ｍ、短軸1.24ｍの略円形で、深さ62.8㎝を測る。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がる円筒形。覆土は黒褐色土を主体とする自然堆積層である。遺物は、縄文後期前半の土器と土錘１点が出土している。第172図１・２は無文地の深鉢。ヘラナデが明瞭である。３は縄文地文、４は深鉢の底部破片。５は有溝土錘である。楕円形を呈し、長軸両端に縦位の貫通孔を有し、表面のみ貫通孔間に浅い溝が切られている。焼成は良好。色調はにぶい橙色（7.5YR7/4）。長さ6.08㎝、幅3.42㎝、厚さ2.08㎝、貫通孔径0.55㎝、重量44.80ｇを測る。

120号土坑（SK120）（第134・172図）

調査区の北東側、I－Ⅳ区、標高25.89ｍに位置し、土坑SK119に西側が切られている。長軸1.17ｍ、短軸1.17ｍの円形で、深さ70.4㎝を測る。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がる円筒形。覆土は黒褐色土を主体とする自然堆積層である。遺物は、縄文後期前半の土器が出土している。第172図１は大型の橋状把手。橋上部に盲孔を縦位に配する。２は口縁部が隆帯区画により無文帯となる。３～６は胴部破片。縄文地文に沈線による区画文と意匠文が施されている。７は隆帯区画文上に押圧を加える。８～10は条線施文。堀之内１式期。

121号土坑（SK121）（第134・172・173図）

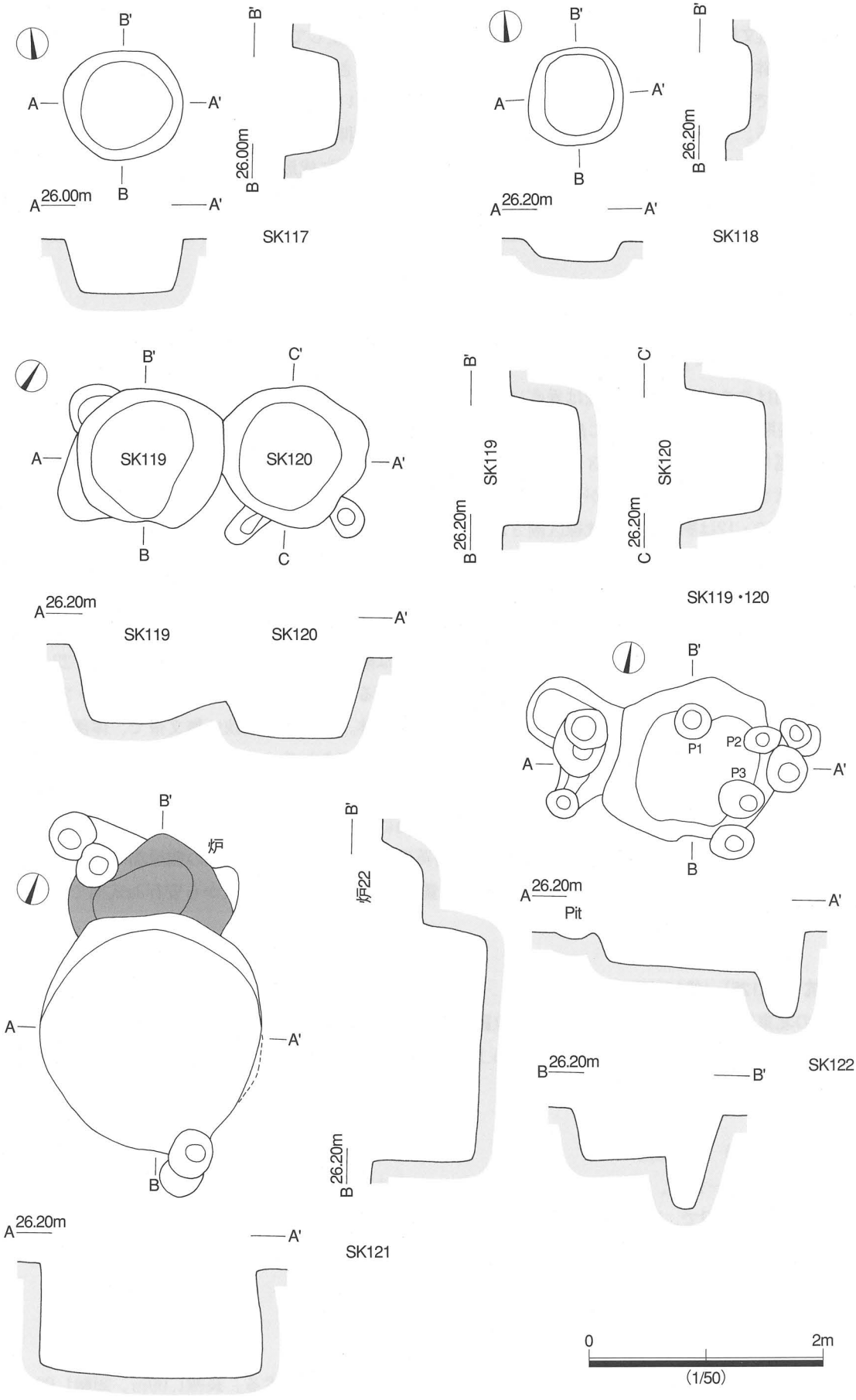
調査区の東側、I－Ⅳ区、標高25.96ｍに位置し、住居跡SI11の南側に重複しており、SI11がSK121の上面を塞ぐように構築しており、本跡が古期である。長軸2.01ｍ、短軸1.90ｍの円形で、深さ87.7㎝を測る。底面は平坦で、壁は僅かにオーバーハングする袋状土坑である。覆土は黒褐色土を主体とする自然堆積層で、上層から小貝ブロックが検出された。ハマグリを主体とし、シオフキ・サルボウ・アカニシと汽水産のヤマトシジミが混入していた。またイノシシの小骨片が検出された。人工遺物として縄文後期初頭から前半の土器と土器片錘１点が出土している。第172図１は深鉢の口縁部破片。沈線によるJ字文は磨消縄文。２は波状口縁の深鉢。口縁部は沈線区画による無文帯。体部は縄文地文に蕨手文が垂下する。３は口縁部が刺突文のある隆帯区画により無文帯となり、体部は縄文地文。４は横位の条線により口縁部が区画され、体部は縦位の条線。５は縄文地文に蛇行沈線を垂下させる。６は沈線による三角文。７は口縁部を無文帯とし、縦位の条線を垂下させる。８は縄文地文に多条化沈線を垂下させる。９は平行沈線間に長い列点文を充填させ垂下する。10は縄文地文に平行沈線を垂下させる。11は隆帯区画文上に盲孔が配される。12は条線による格子目文。13は深鉢の底部破片。14は土器片錘。深鉢の胴部破片を再利用している。周縁は打欠のみで方形に成形し、長軸の両端に紐掛け溝を作出している。長さ5.18㎝、幅4.77㎝、厚さ1.20㎝、重量42.48ｇを測る。称名寺式期。

122号土坑（SK122）（第134・173図）

調査区の東側、I－Ⅳ区、標高25.90ｍに位置し、北側でSI11と重複しているが、SK122の上面を塞ぐように構築しており、本跡が古期である。長軸1.46ｍ、短軸1.30ｍの隅丸方形で、深さ42.8㎝を測る。底面は平坦で東・北端にピットを伴う。壁は外傾して立ち上がる。覆土は黒褐色土を主体とする自然堆積層である。遺物は、縄文後期末葉の土器が出土している。第173図１は紐線文系粗製土器。低平で押圧の相接する紐帯。横位の条線に斜行する平行沈線間は磨消されている。２は縄文地文に斜行する沈線。３・４は製塩土器の胴部破片。器厚が薄手で、器面はヘラナデ成形。安行２式期。

123号土坑（SK123）（第135・173図）

調査区の東側、I－Ⅳ区、標高25.98ｍに位置し、北側でSI11と重複しているが、SK123の上面を塞ぐように構築しており、本跡が古期である。長軸1.47ｍ、短軸1.17ｍの円形で、深さ37.1㎝を測る。底面は平坦で、南側



第134図　土坑SK117, 118, 119, 120, 121, 122実測図

でピットが密集する。壁はやや垂直気味に立ち上がる円筒形。覆土は黒褐色土を主体とする自然堆積層である。遺物は、縄文後期後半の土器と土器片錘１点、石皿１点が出土している。第173図１は安行１式の４単位大波状口縁の深鉢。１は波頂部が双頭状を呈し、貫通孔をもつ。さらに隆起帯縄文が巡り、縦長の貼瘤が重畳する。２は平縁で、隆起帯縄文が巡り、貼瘤は突起状で連続していない。３は沈線が垂下し、下部で横位の沈線が区画文となる。４・５は紐線文系の粗製土器である。低平で押圧の相接する紐帯。５は上向き弧線の条線。６は土器片錘。深鉢の胴部破片を再利用。周縁は打欠のみで方形に成形し、長軸の両端に紐掛け溝を作出している。長さ4.63cm、幅4.09cm、厚さ0.98cm、重量21.22ｇ。７は凝灰質砂岩製の石皿破片である。縁部を明瞭に作出し、作業面である窪みは平坦である。現存長8.60cm、幅8.64cm、厚さ4.36cm、重量369.0ｇを測る。安行１式期。

124号土坑（SK124）（第135・173・174図）

調査区の北東側、J－Ⅲ区、標高25.72ｍに位置する。長軸1.38ｍ、短軸1.20ｍの隅丸長方形で、深さ183.5cmを測る。底面はやや鍋底気味で、壁は垂直に立ち上がる。覆土は黒褐色土を主体とする自然堆積層である。遺物は、縄文後期後半の土器が中心に出土し、石皿、磨石も出土している。第173図１～３は口縁上に沈線区画された刻目が巡り、縄文帯となる。３は縄文帯が弧線状となる。４は安行１式の４単位大波状口縁の深鉢で、波頂部が山形状を呈し、隆起帯縄文が巡り、縦長の貼瘤が重畳する。５～９は平縁で、隆起帯縄文が巡る。５は貼瘤が付く。10・12は胴部破片。沈線区画された縄文帯と弧線文。11は幅狭い隆起帯縄文が区画文となる。13は磨消縄文の平行沈線が十字状を呈する。14は縄文地文。15は口唇部に刺突文が巡る。16は口縁部が細沈線により区画され無文帯となる。17は口縁下に凹帯が巡る無文地の深鉢。18～25は紐線文系粗製土器。18は縄文地文に、口縁下に指頭圧痕による細い紐線が巡る。19は斜行する条線施文。20は口唇部が肥厚し、紐帯のかわりに刻文帯を巡らし、横位の条線を施文する。21～25の紐線は貼付けで、低平で押圧は相接する。22・23は横位の条線施文に平行沈線を垂下させ磨消す。24・25は胴部に巡る。26は縄文地文に条線施文。27・28は深鉢の底部破片。29は大洞系土器で、体部は内彎気味に立ち上がる浅鉢。口縁上は幅狭い無文帯で、体部は列点文が充填した平行沈線文が上下で区画文となり、区画内は雲形文が施文される。

30は安山岩製の石皿破片である。縁部を明瞭に作出し、作業面である窪みは平坦である。また裏面も研磨によりほぼ平坦に施されている。なお、表面に１ヶ所、裏面に４箇所の円形凹部が認められる。現存長10.97cm、幅10.36cm、厚さ5.14cm、重量857.5ｇを測る。31は石英斑岩製の磨石破片。円礫の側縁部の一部に研磨面が認められる。現存長6.51cm、幅3.95cm、厚さ3.21cm、重量119.5ｇである。曽谷式から安行3a式期であるが、遺構の時期は安行１式期と推定される。

125号土坑（SK125）（第135図）

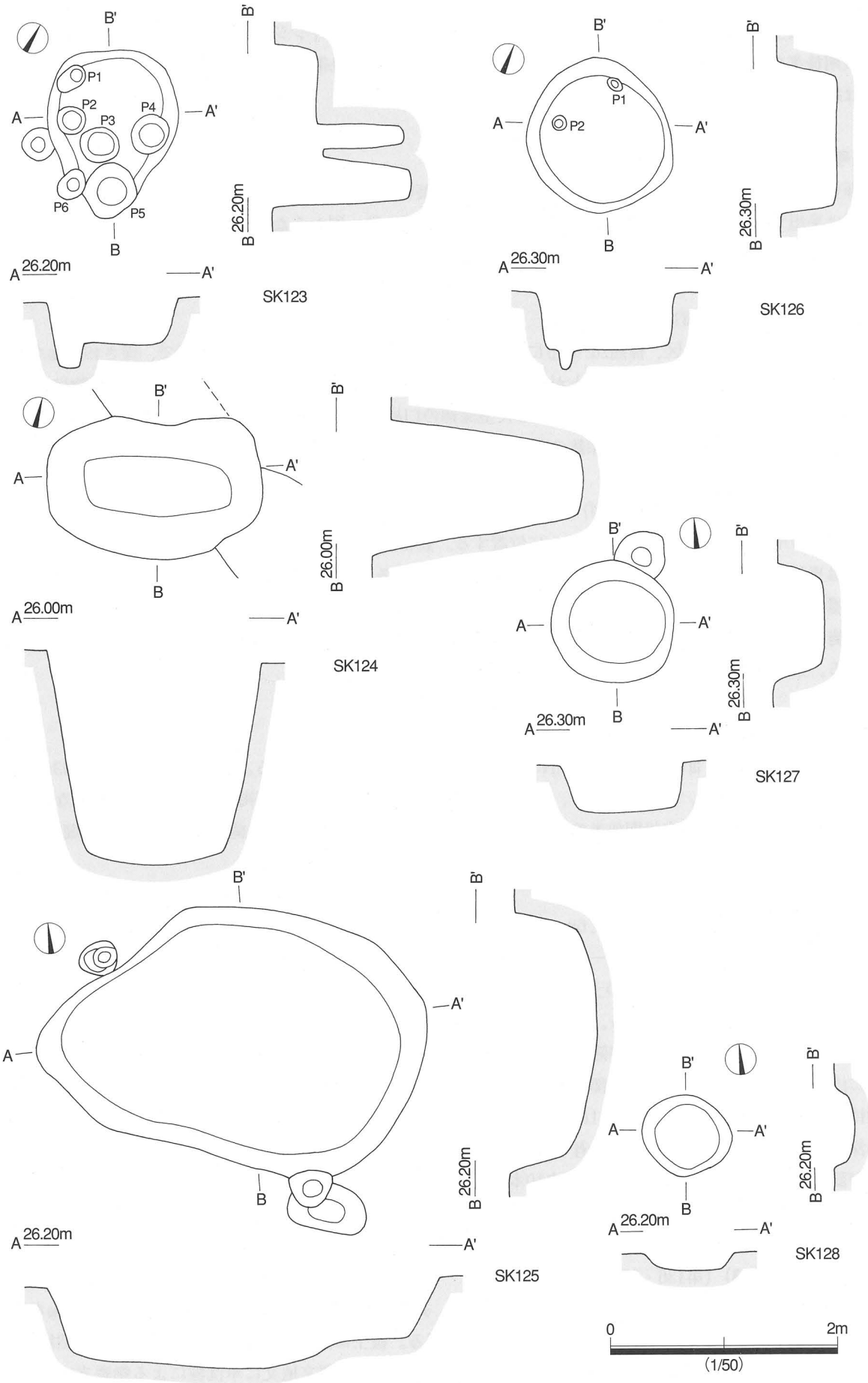
調査区の北東側、I－Ⅳ区、標高25.93ｍに位置する。長軸3.45ｍ、短軸2.22ｍの大型楕円形で、深さ77.1cmを測る。底面は起伏があり、壁は外傾して立ち上がる。覆土は黒褐色土を主体とする自然堆積層である。遺物は出土していないため、時期は不明である。

126号土坑（SK126）（第135図）

調査区の中央、G－Ⅳ区、標高26.06ｍに位置する。規模は長軸1.37ｍ、短軸1.26ｍで円形をなす。深さ50.4cmを測る。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がる。覆土は黒褐色土を主体とする自然堆積層である。覆土は褐色土層の単一層からなる。覆土は自然堆積層である。遺物は出土していないが、土坑の形態および覆土の状況から判断して縄文後期前半に推定される。

127号土坑（SK127）（第135・174図）

調査区の中央、G－Ⅳ区、標高26.04ｍに位置し、北側でピットと重複する。長軸1.09ｍ、短軸1.09ｍの円形で、深さ42.9cmを測る。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がる。覆土は黒褐色土層の単一層からなる自然堆



第135図　土坑SK123, 124, 125, 126, 127, 128実測図

積層で、最上層から小貝ブロックが検出された。中型ハマグリとオキシジミが混入していた。人工遺物は、縄文後期後半の土器が出土している。第174図１は紐線文系土器。紐帯は低平で押圧は相接する。条線は横位。２は細沈線による格子目文。安行１式期。

128号土坑（SK128）（第135図）

調査区の中央、G－Ⅳ区、標高26.03mに位置する。長軸0.80m、短軸0.72mの円形で、深さ16.1cmを測る。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がる。覆土は褐色土層の単一層からなる自然堆積層である。遺物が出土していないため、時期は不明である。

129号土坑（SK129）（第136・175図）

調査区の中央、G－Ⅳ区、標高26.00mに位置する。長軸0.85m、短軸0.82mの円形で、深さ49.3cmを測る。底面は平坦で、壁は垂直気味に立ち上がる。覆土は黒褐色土を主体とする自然堆積層である。遺物は、縄文後期中葉の土器が出土している。第175図１は大型深鉢の口縁部破片。縄文地文に押圧を加えた隆帯が逆T字状に貼付く。２は縦位の条線。３は深鉢の底部破片。加曽利B式期。

130号土坑（SK130）（第136・174図）

調査区の中央、G－Ⅳ区、標高25.97mに位置する。長軸1.16m、短軸0.90mの円形で、深さ32.4cmを測る。底面は平坦で南側にピットを伴う。壁は外傾して立ち上がる。覆土は黒褐色土を主体とする自然堆積層である。遺物は、縄文後期前半の土器が出土している。第174図１・２は紐線文系土器。１は口縁上に指頭による押圧を施した紐帯を巡らし、縄文地文に横位の多重化沈線を施文する。２は貼付けによる紐帯は低平で押圧は相接する。条線は横位。１は加曽利B2式、２は安行１式期。

131号土坑（SK131）（第136・174図）

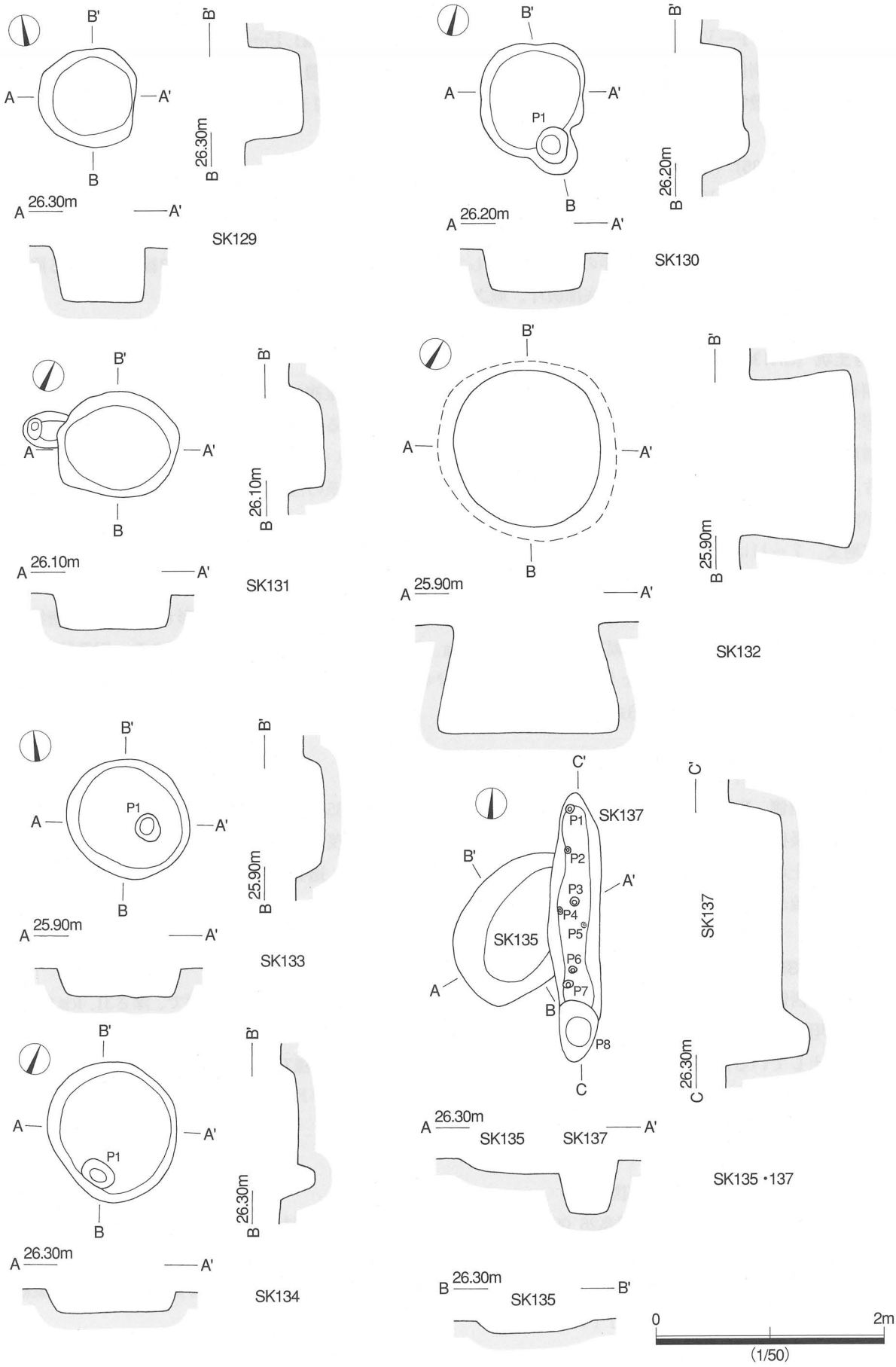
調査区の北側、H－Ⅲ区、標高25.91mに位置し、西側でピットと重複する。長軸1.04m、短軸0.93mの円形で、深さ29.5cmを測る。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がる。覆土は黒褐色土層の単一層からなる自然堆積層である。遺物は、縄文後期前半の土器１点が出土している。第174図１は縄文地文の土器で、堀之内１式。

132号土坑（SK132）（第136・175図）

調査区の北側、H－Ⅲ区、標高25.68mに位置する。規模は長軸1.37m、短軸1.29mの円形で、深さ95.9cmを測る。底面は平坦で、壁はオーバーハングして立ち上がる袋状土坑。覆土は黒褐色土を主体とする自然堆積層である。遺物は、縄文後期前半の土器と有孔土製品１点が出土している。第175図１は口縁上が隆帯区画により幅狭い無文帯となり盲孔を伴う。口縁下は貫通孔を有し、縄文地文に沈線による意匠文。２・３は口縁上に沈線文が巡る。４・５は口縁部が隆帯区画され無文帯となり、単沈線が垂下する。６・８は口縁部上がくの字状に内傾し無文帯となり、６の胴部は縄文地文。７・９～11・13は縄文地文に単沈線による意匠文。７・９は横位の渦巻文。10は磨消懸垂文。11は蕨手文。12は横位の隆帯は無文である。14は押圧隆帯による意匠文。15は深鉢の底部破片。16は棘状突起を有する有孔土製品。ちょうど金平糖様を呈している。棘状突起は５本の欠落が認められ、現存５本確認でき、本来10本存在していたものであろう。現存長5.399cm、幅3.304cm、厚さ3.103cm、重量47.220ｇを測る。堀之内１式期。

133号土坑（SK133）（第136・176図）

調査区の東北側、I－Ⅲ区、標高25.63mに位置する。長軸1.10m、短軸1.00mの円形で、深さ22.4cmを測る。底面は平坦でピットを１本伴う。壁は外傾して立ち上がる。覆土は黒褐色土層の単一層からなる自然堆積層である。遺物は、縄文後期前半の土器が出土している。第176図１は縄文地文に単沈線による懸垂文。２は縦位の条線地文。堀之内１式。



第136図　土坑SK129, 130, 131, 132, 133, 134, 135, 137実測図

134号土坑（SK134）（第136・176図）

調査区の西側、F－Ⅴ区、標高26.08mに位置する。長軸1.22m、短軸1.15mの円形で、深さ17.0cmを測る。底面は平坦で、南側にピット１本を伴う。壁は外傾して立ち上がる。覆土は黒褐色土層の単一層からなる自然堆積層である。遺物は、縄文後期前半の土器が出土している。第176図１は列点文を施文する。称名寺式期。

135号土坑（SK135）（第136・176図）

調査区の西側、F－Ⅴ区、標高26.04mに位置し、土坑SK137を切っている。長軸1.45m、短軸1.00mの楕円形で、深さ12.9cmを測る。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がる。覆土は褐色土層の単一層からなる自然堆積層である。遺物は、縄文後期前半の土器が出土している。第176図１は口縁部破片。口縁に並行する隆帯上に刺突文が施文される。２は深鉢の底部破片。堀之内１式。

136号土坑（SK136）（第137・176図）

調査区の西側、F－Ⅴ区、標高26.03mに位置し、北側でピットが重複している。長軸1.35m、短軸1.10mの円形で、深さ36.3cmを測る。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がる。覆土は黒褐色土の単一層からなる自然堆積層である。遺物は、縄文後期中葉の土器と耳飾１点が出土している。第176図１・２は精製深鉢土器の胴部破片。磨消縄文による円弧線文。３・４は口縁部が大きく開く無文系の浅鉢。３は口唇部に刻目が巡り、口縁部が内傾する。口縁下に浅い沈線が施される。４は口縁下の区画に削出し状の外綾が巡る。５は無文地。６は縄文地文。７～11は紐線文系粗製土器。８～11は縄文地文に条線、平行沈線を施文する。12は底部破片。網代痕が残置している。

13は土器片錘。一部欠損。深鉢の胴部破片を再利用。周縁は打欠のみで楕円形に成形し、長軸側に紐掛け溝を作出している。現存長4.03cm、幅3.35cm、厚さ0.78cm、重量17.6ｇ。14は土製耳飾りである。円筒状を呈し、無文で比較的丁寧なナデ整形で仕上げている。高さに対する最大径がほぼ１：１である。径2.12cm、高さ1.19cm、重量6.66ｇを測る。加曽利B式から曽谷式期。

137号土坑（SK137）（第136・176図）

調査区の西側、F－Ⅴ区、標高26.04mに位置し、西側を土坑SK135によって切られている。長軸2.37m、短軸0.44mの長楕円形で、深さ45.6cmを測る陥穴。底面は平坦で、逆茂木用の小ピットが７本穿ってある。壁は垂直に立ち上がる。覆土は黒褐色土を主体とする自然堆積層である。遺物は、縄文後期前半の土器１点が出土しているが流れ込みであろう。第176図１は縄文地文の深鉢。

138号土坑（SK138）（第137・177図）

調査区の西側、F－Ⅴ区、標高26.01mに位置する。長軸1.18m、短軸0.85mの楕円形で、深さ31.4cmを測る。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がる。覆土は黒褐色土の単一層からなる自然堆積層である。遺物は、砥石１点が出土している。第177図１は軟質砂岩製の砥石、いわゆる石包丁様石器である。完存品で扁平の長方形を呈し、両側縁は研磨により刃部状を呈し薄くなっている。表裏面は平均的に研磨されている。長さ9.19cm、幅4.15cm、厚さ1.12cm、重量52.5ｇを測る。晩期前半であろう。

139号土坑（SK139）（第137・176図）

調査区の中央、F－Ⅴ・G区、標高26.09mに位置する。長軸1.19m、短軸1.10mの円形で、深さ87.4cmを測る。底面は平坦で、壁はオーバーハングして立ち上がる袋状土坑。覆土は黒褐色土を主体とする自然堆積である。遺物は、縄文後期後半の土器が出土している。第176図１は帯縄文が巡る。２は縄文地文。３・４は条線の施文された紐線文系粗製土器。安行１式期。

140号土坑（SK140）（第137図）

調査区の南西側、E－Ⅴ・Ⅵ区、標高26.22mに位置し、北西側で土坑SK149に切られている。長軸3.03m、短軸1.92mの長楕円形を呈する陥穴。深さ100.1cmを測る。底面は平坦で、壁は垂直気味に立ち上がり、壁際にピットを伴う。覆土は黒褐色土を主体とする自然堆積層である。遺物の出土はないが、形態から判断して縄文時代の陥穴である。

141号土坑（SK141）（第137・177図）

調査区の南西側、E－Ⅴ区、標高26.12mに位置する。長軸0.92m、短軸0.80mの円形で、深さ63.8cmを測る。底面は平坦で、壁は垂直気味に立ち上がる円筒形。覆土は黒褐色土を主体とする自然堆積層である。遺物は、縄文後期前半の土器と磨石1点が出土している。第177図1は3単位の山形突起を有する円筒形を呈する深鉢。縄文地文である。口径12.5cm、現器高23.2cmを測る。2は口縁部が内傾する無文系土器。3は横位の隆帯が区画文となり、条線施文される。4は縄文地文。5は深鉢の底部破片。6は安山岩製の楕円形磨石である。長さ11.32cm、幅7.37cm、厚さ4.02cm、重量589.0gを測り、表裏面および側縁面を研磨しており、表面のほぼ中央に加撃痕による円形の敲打痕をもつ。堀之内1式。

142号土坑（SK142）（第137・176図）

調査区の南西側、E－Ⅴ区、標高26.16mに位置する。長軸1.05m、短軸1.01mの円形で、深さ59.3cmを測る。底面は平坦で、壁は垂直気味に立ち上がる円筒形。覆土は黒褐色土を主体とする自然堆積層である。遺物は、縄文後期中葉の土器が出土している。第176図1は縄文帯に多条化沈線を巡らし、縄文帯に区切りを施す。2は縄文帯の区切りが蛇行沈線を垂下させる。3～5は沈線区画された縄文帯。6は紐線文系粗製土器の胴部破片。加曽利B式期。

143号土坑（SK143）（第138・177図）

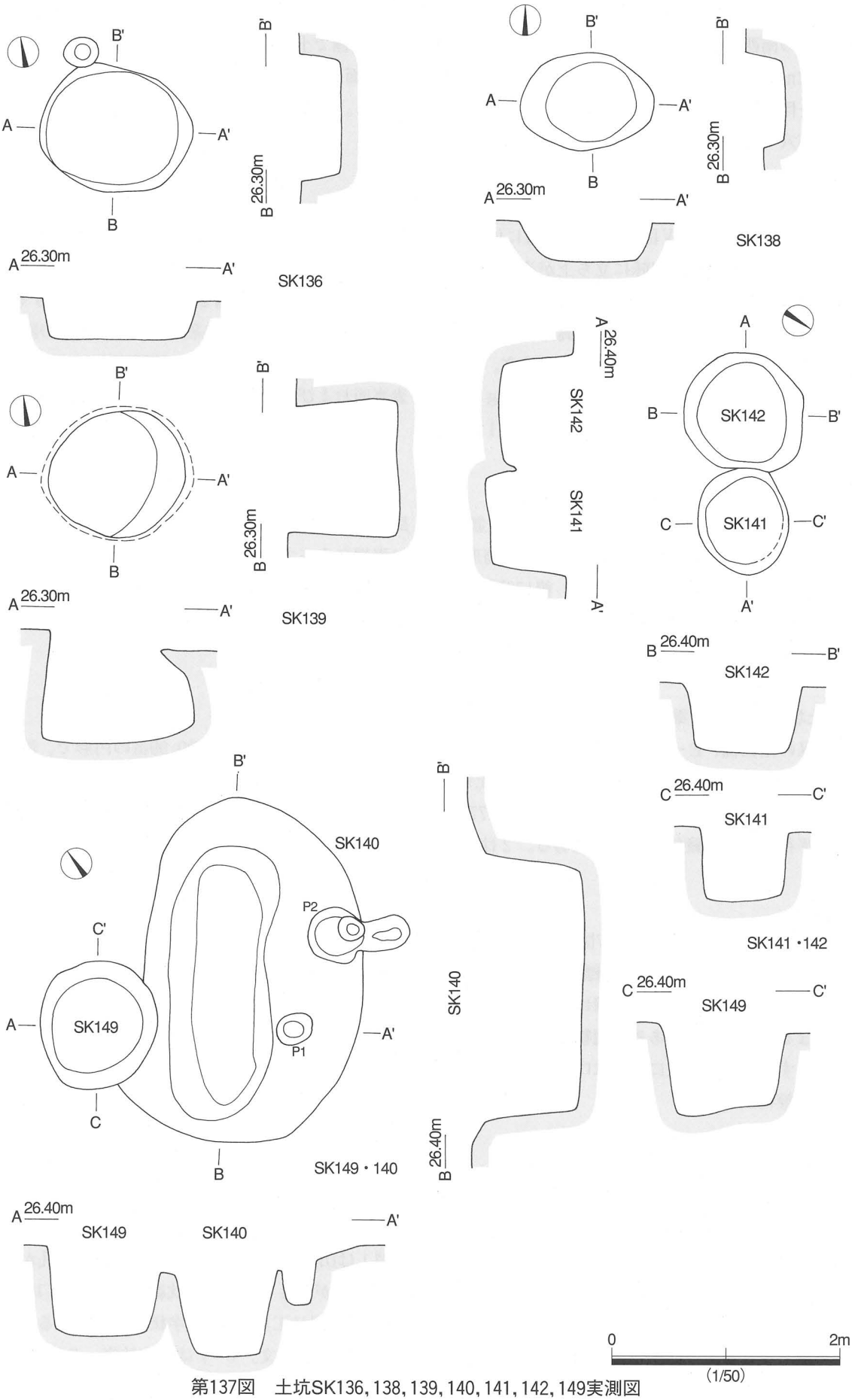
調査区の南西側、E－Ⅵ・F－Ⅵ区、標高26.24mに位置する。長軸1.20m、短軸0.99mの円形で、深さ56.1cmを測る。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がる。覆土は黒褐色土を主体とする自然堆積層である。遺物は、縄文後期中葉の土器が出土している。第177図1は体部が内彎気味に立ち上がる浅鉢。口縁上は無文帯となり、平行沈線間に縦位の沈線が区切る。2は沈線区画上が無文帯で、下部は条線文。3は無文地。加曽利B式期。

144号土坑（SK144）（第138・177図）

調査区の西側、E－Ⅴ・Ⅳ区、標高26.10mに位置する。長軸1.33m、短軸1.23mの略円形で、深さ16.3cmを測る。底面は鍋底状で、東西壁際にサイドピットを伴う。壁は外傾して立ち上がる。覆土は黒褐色土層の単一層からなる自然堆積層である。遺物は、縄文後期中葉の土器が出土している。第177図1・2は紐線文系土器である。いずれも縄文地文に紐帯は口縁上よりやや下部に貼付けられている。3・5は縄文地文。4は無文地の深鉢。加曽利B1式。

145号土坑（SK145）（第138・178図）

調査区の南西側、E－Ⅴ区、標高26.20mに位置する。長軸0.97m、短軸0.93mの円形で、深さ28.2cmを測る。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がる。覆土は黒褐色土層の単一層からなる自然堆積層である。遺物は、縄文後期前半の土器と土器片錘1点が出土している。第178図1は山形状の突起を有し、波頂部の盲孔から平行沈線が垂下し、さらに沈線により胴部と区画される。2は口縁部が大きく外反し、沈線区画により口縁部が区画され、無文帯となる。胴部は3本一組の工具による懸垂文間に同じ工具によるZ字状に垂下させる。3は蕨手文を垂下させる。4は多条化沈線を垂下させる。5は条線による弧線文。6・7は縄文地文。7は無節縄文。8は土器片錘。一部欠損。深鉢の胴部破片を再利用。周縁は打欠のみで方形に成形し、長軸側に紐掛け溝を作



第137図　土坑SK136, 138, 139, 140, 141, 142, 149実測図

出している。現存長5.65cm、幅6.16cm、厚さ1.34cm、重量60.0ｇを測る。堀之内１式期。

146号土坑（SK146）（第138・177図）

調査区の西側、E－Ⅳ区、標高26.08ｍに位置し、北西側でピットが重複する。長軸1.44ｍ、短軸1.13ｍの円形で、深さ34.0cmを測る。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がる円筒形。覆土は黒褐色土層の単一層からなる。自然堆積層である。遺物は、縄文後期中葉の土器が出土している。第177図１は浅鉢。口唇部に刻目が巡り、口縁部は沈線区画により無文帯となる。２は口縁に平行して３条の沈線が巡る。３は無文系の深鉢。４～６は粗製土器。４は口縁部破片で縄文地文に単沈線による格子目文。加曽利B式期。

147号土坑（SK147）（第138・178図）

調査区の南西側、E－Ⅳ区、標高26.12ｍに位置する。長軸1.27ｍ、短軸1.10ｍの円形で、深さ44.0cmを測る。底面は平坦で、壁はほぼ垂直気味に立ち上がる。覆土は黒褐色土を主体とする自然堆積層である。遺物は、縄文後期中葉の土器が出土している。第178図１は無文地に太沈線による弧線文。２は三角形文に縄文帯が巡る堀之内２式。

148号土坑（SK148）（第138・178図）

調査区の南西側、E－Ⅳ区、標高26.18ｍに位置する。長軸1.33ｍ、短軸1.26ｍの円形で、深さ34.8cmを測る。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がる円筒形。覆土は黒褐色土層の単一層からなる自然堆積層である。遺物は、縄文後期前半の土器が出土している。第178図１は無文地の土器で、口縁上が僅かに内傾する。２は無文地に沈線文を垂下させる。堀之内１式期。

149号土坑（SK149）（第137・178図）

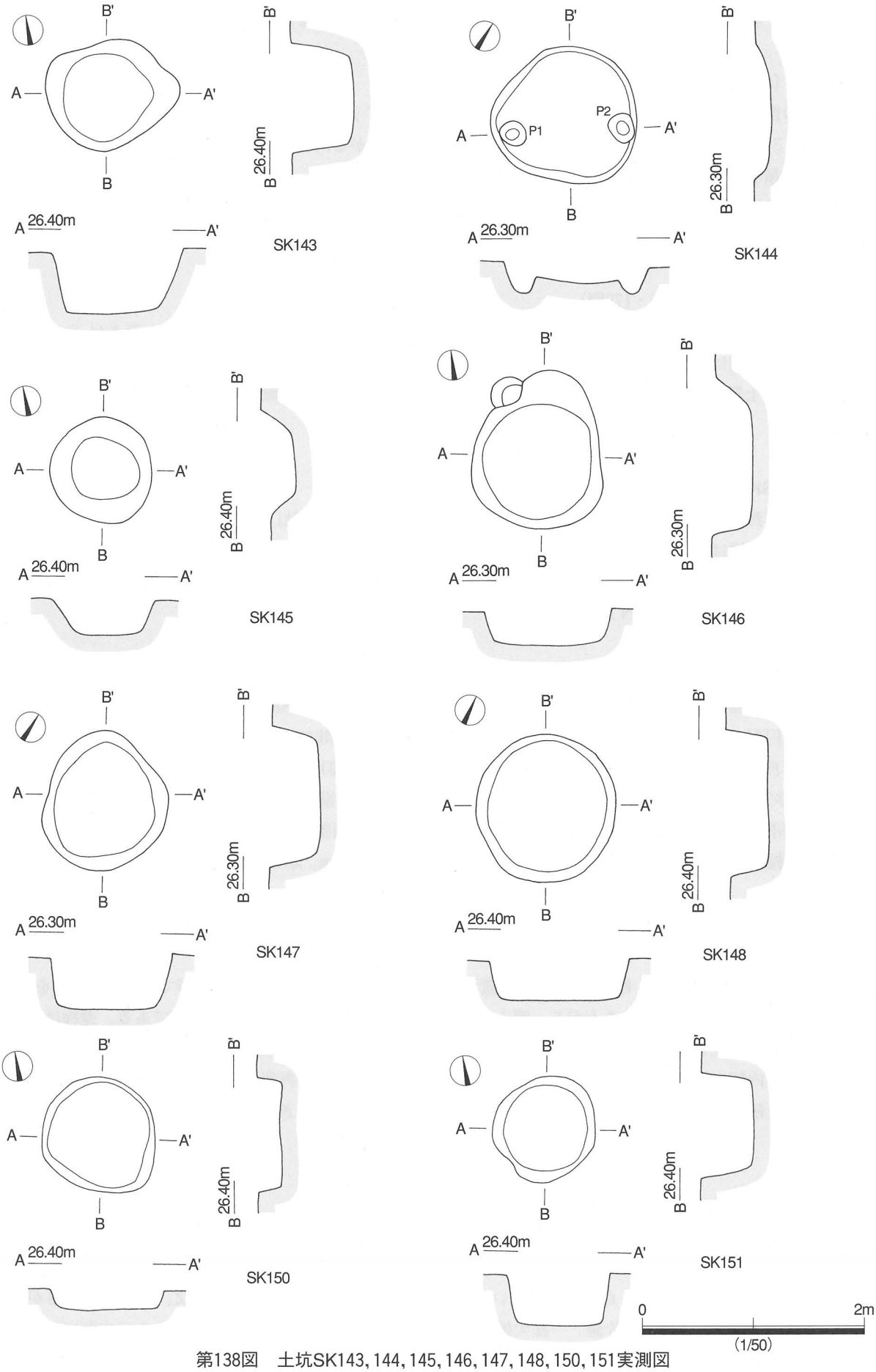
調査区の南西側、E－Ⅴ・Ⅵ区、標高26.18ｍに位置し、南東側で陥穴SK140を切っている。長軸1.12ｍ、短軸1.01ｍの円形で、深さ73.9cmを測る。底面は平坦で、壁は垂直気味に立ち上がる円筒形。覆土は黒褐色土を主体とする自然堆積層である。遺物は、縄文後期初頭の土器と土器片錘１点が出土している。第178図１は沈線によるJ字文内に列点文を充填させる。２は隆帯区画された無文帯の口縁部に刺突文を施した隆帯が垂下する。３は磨消縄文による意匠文。４は土器片錘。欠損品。深鉢の胴部破片を再利用。周縁は打欠のみで方形に成形し、長軸側に紐掛け溝を作出している。現存長4.05cm、幅5.60cm、厚さ1.05cm、重量26.56ｇを測る。称名寺式期。

150号土坑（SK150）（第138・178図）

調査区の南西側、E－Ⅵ区、標高26.18ｍに位置する。長軸1.02ｍ、短軸1.01ｍの円形で、深さ18.5cmを測る。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がる。覆土は黒褐色土の単一層からなる自然堆積層である。遺物は、縄文後期初頭の土器と土器片円板１点が出土している。第178図１は２本の沈線文による弧線文。２は無文地に口縁上が僅かに内傾する。３は土器片円板である。無文土器の胴部破片を再利用している。楕円形を呈し、全周比較的丁寧な研磨が施されている。法量は長さ3.703cm、幅3.232cm、厚さ1.098cm、重量15.46ｇを測る。称名寺式期。

151号土坑（SK151）（第138・179図）

調査区の南西側、E－Ⅵ区、標高26.21ｍに位置する。長軸0.96ｍ、短軸0.91ｍの円形で、深さ48.7cmを測る。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がる円筒形。覆土は黒褐色土を主体とする自然堆積層である。遺物は、縄文後期初頭の土器と土器片錘１点が出土している。第179図１は弧線文による磨消縄文。２は微隆起帯が垂下する。３は縄文地文。４は土器片錘。一部欠損。深鉢の胴部破片を再利用。周縁は打欠のみで方形に成形し、長軸側に紐掛け溝を作出している。現存長4.49cm、幅4.10cm、厚さ1.07cm、重量23.40ｇを測る。称名寺式期。



第138図　土坑SK143, 144, 145, 146, 147, 148, 150, 151実測図

152号土坑（SK152）（第139・179図）

調査区の南西側、E－Ⅵ区、標高26.21ｍに位置し、東側でピットが重複する。長軸0.97ｍ、短軸0.92ｍの円形で、深さ69.2㎝を測る。底面は平坦で、壁は垂直気味に立ち上がる円筒形。覆土は黒褐色土を主体とする自然堆積層である。遺物は、縄文後期初頭土器が出土している。第179図１～３は弧線沈線による帯状交互に縄文が充填するもので、１は口縁部破片で、口唇部が肥厚する。４・５は沈線による意匠文。６は微隆起帯が垂下する。称名寺式期。

153号土坑（SK153）（第139・179図）

調査区の南西側、E－Ⅵ区、標高26.19ｍに位置し、南東側約半分が未調査区域に延びている。長軸0.91ｍ、短軸0.45ｍの円形であろう。深さ41.1㎝を測る。底面は平坦で、壁は垂直気味に立ち上がる円筒形。覆土は２層に分層でき、自然堆積層である。遺物は、縄文後期中葉の土器が出土している。第179図１は沈線区画の磨消縄文。２は縄文施文。加曽利B式期。

154号土坑（SK154）（第139図）

調査区の南西側、E－Ⅵ区、標高26.15ｍに位置し、南東側約半分が未調査区域に延びている。長軸0.90ｍ、短軸0.52ｍの円形であろう。深さ74.3㎝を測る。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がる円筒形。覆土は２層に分層でき、自然堆積層である。遺物は出土していない。土坑の形態および覆土の状況から判断して縄文時代に比定できる。

155号土坑（SK155）（第139・179・180図）

調査区の北側、G－Ⅲ区、標高25.66ｍに位置する。長軸1.51ｍ、短軸1.38ｍの円形で、深さ270.2㎝を測る。底面は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。覆土は黒褐色土を主体とする自然堆積層である。遺物は、縄文後期後半の土器が出土している。第179図１・２は帯縄文の深鉢で、１は口唇部が肥厚し、２段の帯縄文が巡る。２は貼瘤が付されている。３は瓢形深鉢の胴部破片。横位の沈線と弧線文によって描かれた半円形の意匠文が上下対向となろう。起点に豚鼻状の貼瘤が付されている。４～24は紐線文系粗製土器。４は復元可能な砲弾形の深鉢で、口縁上と頚部に低平で押圧は相接する紐帯が巡り区画する。さらに口縁上の紐帯は連携して垂れ下がる。口縁部は横位の条線に縦位の沈線による意匠文で区切り、胴部は縄文地文。また底部は網代痕を残す。口径18.6㎝、器高23.4㎝、底径3.4㎝を測る。５～８は紐帯のかわりに刻文帯を施すもので、縦位の比較的粗い沈線を施文する。９～11も同じく刻文帯が巡り、横位の条線を施す。12～15は紐帯がなく、条線施文に斜行する平行沈線の意匠文を配する。16は縦位の意匠文。17～24は紐帯が低平で押圧は相接する。条線は横位で、平行沈線による意匠文は磨消す。25～29は底部破片。25は浅鉢。26～28は網代痕を残置している。30・31は製塩土器である。30は口唇部が外削状を呈し、僅かに肥厚する。31は底部破片。網代痕を残置する。

32は土器片円板である。深鉢の胴部破片を再利用している。ほぼ正円形を呈し、全周比較的丁寧な研磨が施されている。長さ3.878㎝、幅3.659㎝、厚さ0.681㎝、重量11.86ｇを測る。33は流紋岩製の磨石である。欠損品で表裏面に僅かに研磨痕を残置している。現存長6.04㎝、幅5.71㎝、厚さ4.74㎝、重量は162.0ｇである。34・35はみみずく形土偶の破片である。34は右腕で、肩部から手先までの破片。腕は僅かに湾曲させ表現している。肩部と腋部に細沈線を引き、沈線間に刺突文を施す。現存長2.965㎝、幅6.869㎝、厚さ2.114㎝、重量38.96ｇである。35は左胸部から腕部の破片。同じように肩部および腋部に細沈線を引き、沈線間に刺突文を充填させる。現存長5.297㎝、幅5.90㎝、厚さ2.30㎝、重量68.0ｇを測る。安行１式期。

156号土坑（SK156）（第139・180図）

調査区の北側、G－Ⅲ区、標高25.83ｍに位置し、周縁にピットが重複する。長軸1.11ｍ、短軸1.10ｍの円形で、深さ37.3㎝を測る。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がる。覆土は黒褐色土を主体とする自然堆積層である。遺物は、縄文後期中葉の土器が出土している。第180図１は瓢形土器の口縁部破片。口縁上は沈線区画

による刻文帯と縄文帯が巡る。２は無文地の浅鉢。加曽利B3式期。

157号土坑（SK157）（第140・181図）

調査区の北西側、F－Ⅳ区、標高25.97ｍに位置し、南側と東側でピットが重複する。長軸2.00ｍ、短軸1.53ｍの円形で、深さ126.0㎝を測る。底面は平坦で、壁はオーバーハングして立ち上がる袋状土坑。覆土は黒褐色土を主体とする自然堆積層である。遺物は、縄文後期前半の土器と土器片錘２点、土製蓋１点が出土している。第181図１は口縁部が隆帯により区画され、盲孔と８の字状隆帯が配される。２は波状口縁で、波頂部に８の字状隆帯が貼り付けられている。３・５～７は磨消縄文による意匠文で、３は口縁上を無文帯とし、８の字隆帯を起点に平行沈線による対向弧線文を垂下させる。５は盲孔を起点とする意匠文。６・７は磨消縄文が垂下する。４・８～13の口縁部は区画文によって無文帯となるもので、８は隆帯区画。11・12は条線が施される。14・15は弧線沈線による帯状交互に縄文が充填する。16～20は縄文地文に２本平行する沈線による意匠文。16は磨消縄文。21は無文地に弧線文。22は無文地。23は鉢形の注口土器。口縁部と注口部の一部が欠損している。口径11.8㎝、器高8.3㎝、底径6.0㎝を測る小型の土器である。口唇部に小突起を貼付け、さらに胴上半部にも瘤状の小突起部をランダムに貼付けている。底部は網代痕を残置する。

24・25は土器片錘。いずれも深鉢の胴部破片を再利用。24は周縁を打欠のみで長方形に成形し、長軸側に紐掛け溝を作出している。長さ4.80㎝、幅3.49㎝、厚さ1.16㎝、重量22.12ｇ。25は周縁を打欠のみで方形に成形し、短軸の両端に紐掛け溝を作出している。長さ4.99㎝、幅5.04㎝、厚さ0.99㎝、重量30.30ｇを測る。26は土製蓋の完存品。正円の円板上のほぼ中央に環状把手が付けられている。径9.0㎝、円板の厚さ1.49㎝、把手までの高さ3.6㎝を測る。色調は黒褐色（10YR3/1）を呈する。称名寺式を含むが、主体は堀之内１式期である。

158号土坑（SK158）（第139・182図）

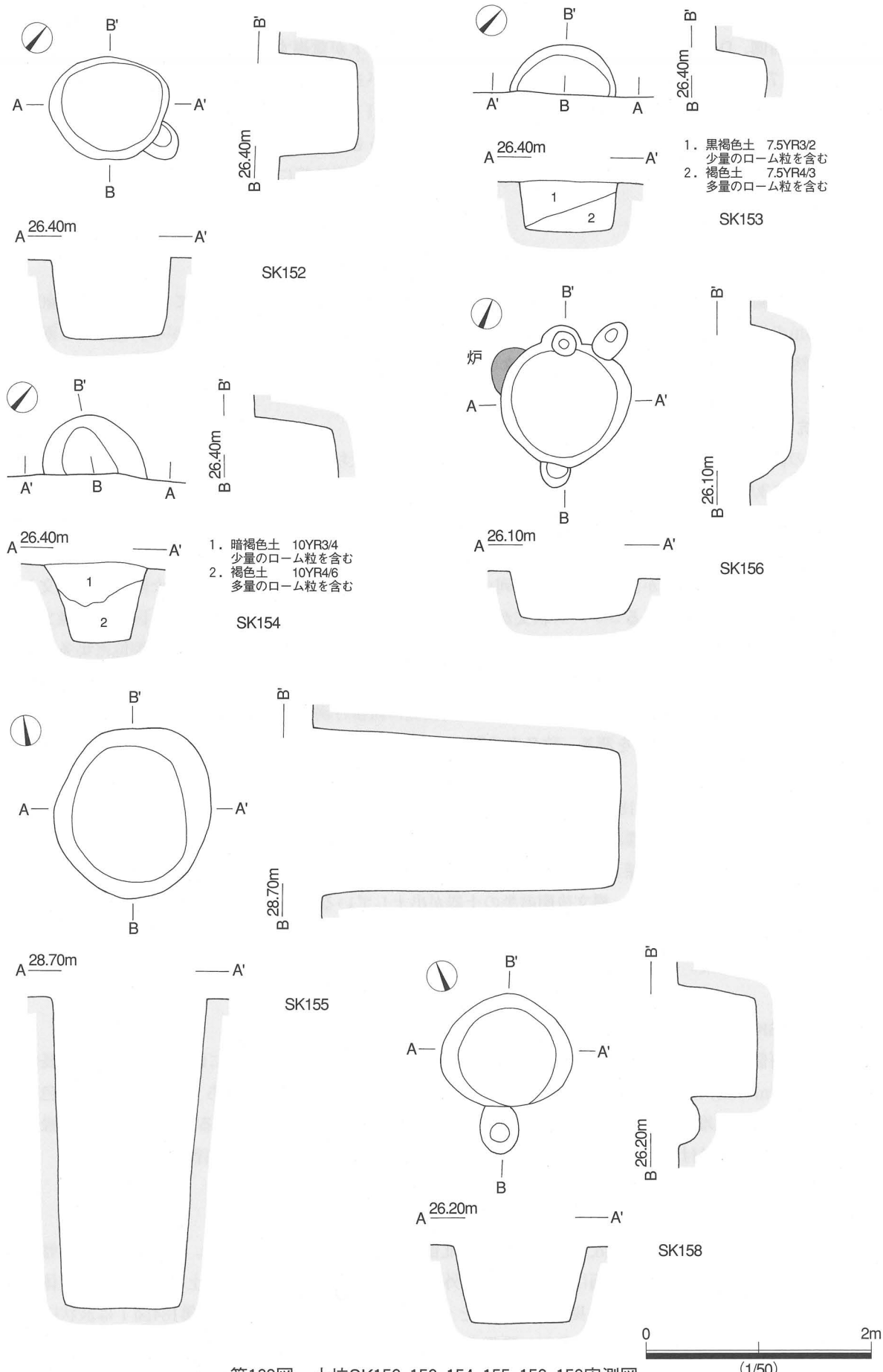
調査区の北西側、F－Ⅲ・Ⅳ-区、標高25.96ｍに位置し、南側でピットが重複する。長軸1.18ｍ、短軸1.00ｍの円形で、深さ69.1㎝を測る。底面は平坦で、壁は垂直気味に立ち上がる円筒形。覆土は黒褐色土を主体とする自然堆積層である。遺物は、縄文後期前半の土器１点が出土している。第182図１は沈線区画され無文帯とし、区画下は弧状条線。堀之内１式。

159号土坑（SK159）（第140・182図）

調査区の北西側、F－Ⅳ・Ⅳ区、標高23.30ｍに位置する。長軸2.53ｍ、短軸2.36ｍの円形で、深さ160.0㎝を測る。底面は平坦で、壁はオーバーハングして立ち上がる袋状土坑。覆土は黒褐色土を主体とする自然堆積層である。遺物は、縄文後期前半の土器と磨石１点が出土している。第182図１は口縁上が平行沈線による区画で幅狭い無文帯とし、胴部は縄文地文に８の字状隆帯から沈線が垂下する。２は波状口縁で、波頂部に盲孔が穿ってある。無文系深鉢。３は内削状の口唇部。縄文地文。４は縄文地文に沈線による意匠文。５は縄文地文に平行沈線による意匠文。６は半截竹管文による平行沈線を波状垂下させる。７は条線による格子目文。８は小型の深鉢底部破片。９は安山岩製の磨石破片。円礫の側縁部の一部に研磨面が認められる。現存長7.37㎝、幅6.40㎝、厚さ5.41㎝、重量234.5ｇである。堀之内１式期。

160号土坑（SK160）（第140・182図）

調査区の西側、D－Ⅵ区、標高26.10ｍに位置し、南西側約半分が未調査区域に延びている。現存長軸1.15ｍ、短軸0.55ｍの円形であろう。深さ14.7㎝を測る。底面は平坦でピットを１本伴う。壁は外傾して立ち上がる。覆土は黒褐色土を主体とする自然堆積である。覆土は２層に分層でき、自然堆積層である。遺物は、縄文後期初頭の土器が出土している。第182図１は無文で口唇部が肥厚し、口縁上が帯状を呈する。２は弧線沈線による帯状交互に列点文が充填する。称名寺式期。



第139図　土坑SK152, 153, 154, 155, 156, 158実測図

161号土坑（SK161）（第140・182図）

調査区の西側、D－Ⅵ区、標高26.08ｍに位置し、東側でピットが重複する。長軸1.40ｍ、短軸1.30ｍの円形で、深さ34.7㎝を測る。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がる。覆土は黒褐色土を主体とする自然堆積層である。遺物は、縄文後期初頭の土器が出土している。第182図１は口唇部が肥厚し、口縁部に盲孔を配し、沈線による区画文。２・３は沈線による帯状交互に縄文が充填するもので、２は２本の平行する弧線文。４は縄文地文に対弧線文を垂下させる。５は平行沈線を垂下させる。６は単沈線による格子目文。７は縄文地文。８は密接条線施文。称名寺式期。

162号土坑（SK162）（第140図）

調査区の西側、D－Ⅵ区、標高26.11ｍに位置し、南西側約半分が未調査区域に延びている。検出長軸0.87ｍ、短軸0.43ｍの円形であろう。深さ67.9㎝を測る。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がる。覆土は２層に分層でき、自然堆積層である。遺物は出土していないが、土坑の形態および覆土の状況から縄文時代に比定できる。

163号土坑（SK163）（第141・183図）

調査区の西側、D－Ⅴ区、標高26.11ｍに位置し、西側に重複土坑が確認できる。長軸1.38ｍ、短軸1.18ｍの円形で、深さ30.6㎝を測る。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がる。覆土は黒褐色土層の単一層からなる自然堆積層である。遺物は、縄文後期前半の土器と土器片錘１点が出土している。第183図１は把手で扁平S字隆帯が貼付けられる。２は胴部破片。隆帯による区画文で、胴部は縄文地文。３は横位の橋状把手。胴部は沈線文が垂下する。４は口縁上が沈線区画され、列点文を巡らす。５は口縁部が押圧を加えた隆帯が区画文とし無文帯となり、胴部は条線によるコンパス状文が垂下する。６は口縁部が２条の条線により区画され無文帯となり、胴部は波状条線が垂下する。７は口縁部が沈線により区画され無文帯となり、胴部は縦位密集条線が垂下する。８は口縁部が沈線により区画され無文帯となり、胴部は意匠文。９は土器片錘。一部欠損。深鉢の胴部破片を再利用。周縁は打欠のみで長方形に成形し、長軸側に紐掛け溝を作出している。現存長5.55㎝、幅4.61㎝、厚さ0.96㎝、重量30.26ｇを測る。称名寺式期。

164号土坑（SK164）（第141・183図）

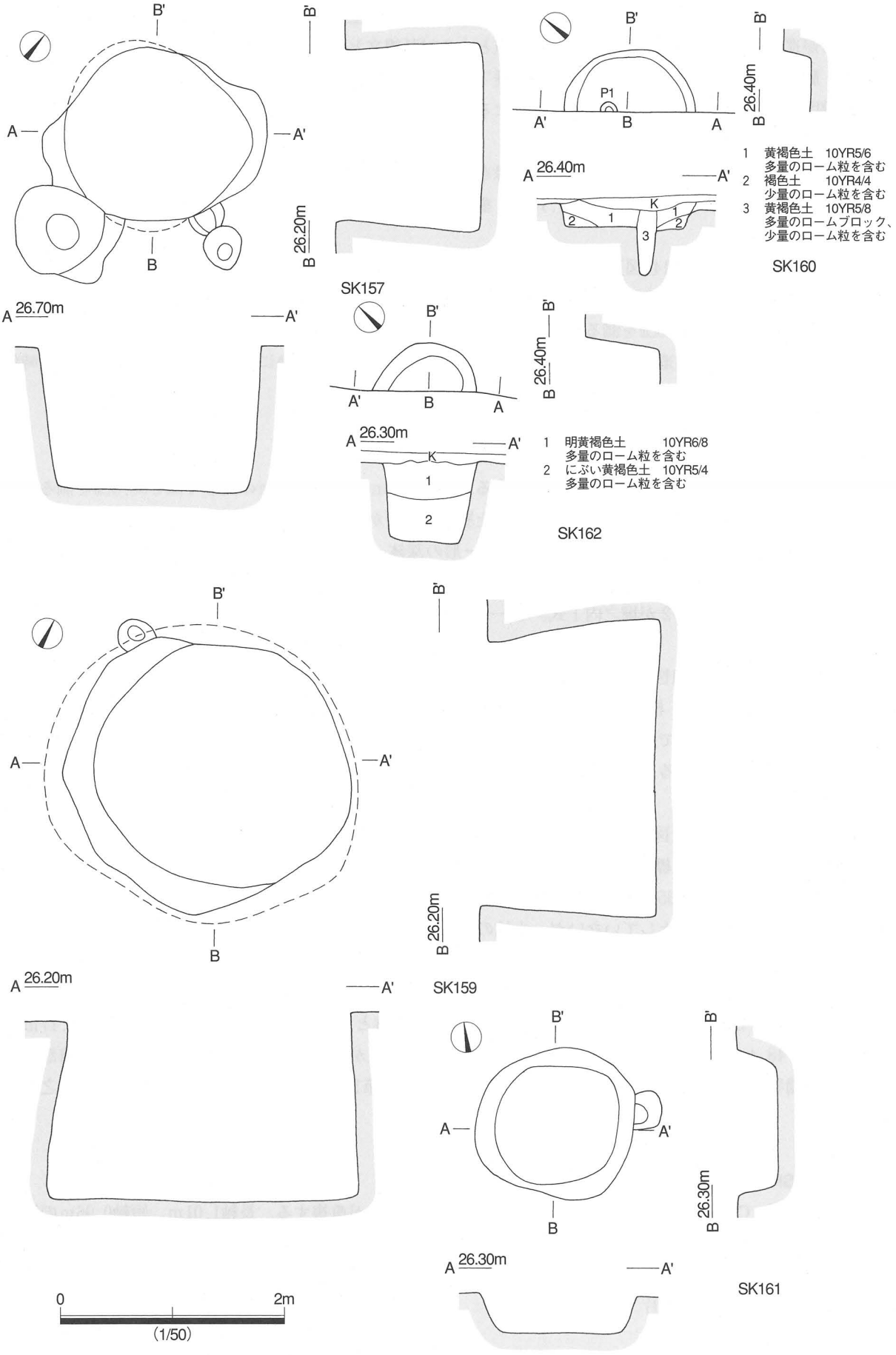
調査区の西側、D－Ⅴ区、標高26.09ｍに位置し、南西側の一部が未調査区域に延びている。検出長軸1.02ｍ、短軸0.95ｍの楕円形で、深さ22.2㎝を測る。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がる。覆土は２層に分層でき自然堆積層である。遺物は、縄文後期前半の土器が出土している。第183図１は波状口縁で、口唇部に凹帯が巡る。２は口縁部下に凹帯が巡り区画文となる無文系深鉢。３は頚部から口縁部がくの字状に外傾する。４は条線による格子目文。称名寺式期。

165号土坑（SK165）（第141・184図）

調査区の西側、D－Ⅴ区、標高26.12ｍに位置し、南西側の一部が未調査区域に延びている。検出長軸1.00ｍ、短軸0.88ｍの楕円形で、深さ11.6㎝を測る。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がる。覆土は褐色土層の単一層からなる自然堆積層である。遺物は、縄文後期中葉の土器とが出土している。第184図１は口縁部に刺突が施された瘤状の貼付け文。２は縄文地文に条線が施される。３は縄文地文。加曽利B式期。

166A号土坑（SK166A）（第141・184図）

調査区の西側、D－Ⅴ区、標高26.10ｍに位置し、北側で土坑SK66Bを切っている。長軸1.35ｍ、短軸1.35ｍの円形で、深さ81.8㎝を測る。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がる円筒形。覆土は黒褐色土を主体とする自然堆積層である。遺物は、縄文後期前半の土器と土器片錘１点が出土している。第184図１は波状口縁の大型深鉢。波頂部に盲孔を伴う逆U字状背割り隆帯を配し、口縁部は隆帯区画による無文帯。内面にも隆帯区画が巡る。２は橋状把手をもつ深鉢。把手部には扁平隆帯が貼付けられ、口縁部は縄文地文に沈線による意匠



第140図　土坑SK157, 159, 160, 161, 162実測図

文。３・４・６・８は縄文地文に沈線による意匠文が施される大型の深鉢。３は口縁上が沈線区画による幅狭の無文帯が巡り、口縁部は縄文地文に盲孔を起点とする対弧線文と三角形文。４は口縁上が沈線区画による無文帯で、胴部は縄文地文に沈線による蕨手文が垂下する。６は胴部破片沈線間が磨消されている。５は波状口縁。沈線区画による無文帯をもつ。７は沈線による縦位の入組み渦巻文。９は条線による格子目文。10～12は深鉢の底部破片。

13は土器片錘。深鉢の胴部破片を再利用。周縁を丁寧に研磨し楕円形に成形。長軸の両端に紐掛け溝を作出している。長さ5.23cm、幅3.18cm、厚さ1.15cm、重量24.28ｇを測る。堀之内１式期。

166B号土坑（SK166B）（第141図）

調査区の西側、D－Ⅴ区、標高26.11ｍに位置し、南側で土坑SK66Aに切られている。検出長軸0.90ｍ、短軸0.76ｍの楕円形で、深さ42.6cmを測る。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がる。覆土は褐色土層の単一層からなる自然堆積層である。遺物は出土していないが、縄文土坑であるSK66Aに切られていることから縄文時代に比定できる。

167号土坑（SK167）（第141・185図）

調査区の西側、C－Ⅳ区、標高26.05ｍに位置する。長軸1.48ｍ、短軸1.40ｍの円形で深さ38.5cmを測る。底面は平坦で壁は外傾して立ち上がる。覆土は褐色土層の単一層からなる自然堆積層である。遺物は、縄文後期初頭の土器が出土している。第185図１はキャリパー形の深鉢。口縁部に隆帯による渦巻文を配する。２は胴部破片。盲孔を起点に磨消縄文が対弧状に垂下する。３は垂下する平行沈線間に列点文が充填される。４は単沈線による格子目文。１・２が堀之内１式。３・４が称名寺式期。

168号土坑（SK168）（第141図）

調査区の西側、C－Ⅳ区、標高26.09ｍに位置する。長軸2.48ｍ、短軸1.14ｍの長楕円形で、深さ86.6cmを測る陥穴である。底面は平坦で逆茂木ピットが14本穿ってある。壁は垂直気味に立ち上がる。覆土は黒褐色土を主体とする自然堆積層である。遺物の出土はないが、形態は縄文時代の陥穴である。

169号土坑（SK169）（第141図）

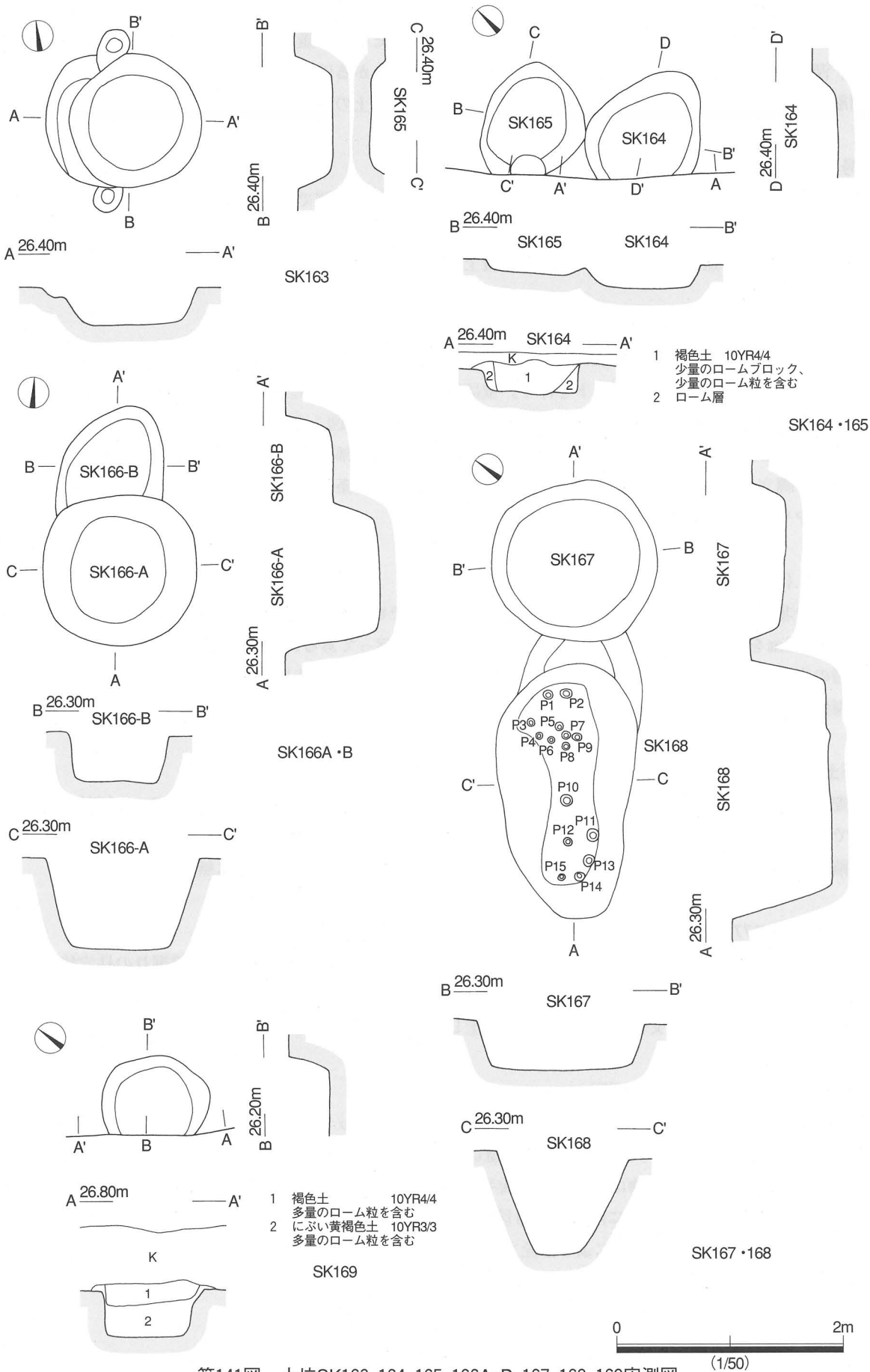
調査区の西側、B－Ⅳ区、標高25.99ｍに位置し、南西側の一部が未調査区域に延びている。検出長軸0.97ｍ、短軸0.70ｍの円形で、深さ35.6cmを測る。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がる。覆土は２層に分層でき自然堆積層である。遺物は出土していないが、土坑の形態および覆土の状況から縄文時代に比定できる。

170号土坑（SK170）（第142・184図）

調査区の西側、C－Ⅳ区、標高26.07ｍに位置し、北側で土坑と重複している。長軸1.39ｍ、短軸1.17ｍの円形で、深さ48.4cmを測る。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がる。覆土は黒褐色土を主体とする自然堆積層である。遺物は、縄文後期前半の土器１点が出土している。第184図１は縦位の条線地文の深鉢。堀之内１式。

171号土坑（SK171）（第142・184図）

調査区の西側、C－Ⅳ区、標高26.04ｍに位置し、北側でピットが重複する。長軸1.01ｍ、短軸0.96ｍの円形で、深さ44.6cmを測る。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がる。覆土は黒褐色土を主体とする自然堆積層である。遺物は、縄文後期初頭の土器が出土している。第184図１は弧線文内に縄文を充填する。２は縦位の条線文。３は小型の深鉢底部破片。称名寺式期。



第141図　土坑SK163, 164, 165, 166A・B, 167, 168, 169実測図

172号土坑（SK172）（第142図）

調査区の西側、B－Ⅳ区、標高25.99mに位置し、南東側でピットが重複する。長軸1.01m、短軸0.97mの円形で、深さ59.2cmを測る。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がる円筒形。覆土は黒褐色土を主体とする自然堆積層である。遺物は出土していないが、土坑の形態および覆土の状況から縄文時代に比定できる。

173号土坑（SK173）（第142図）

調査区の西側、C－Ⅳ区、標高25.99mに位置し、北東および南西側でピットが重複する。長軸0.80m、短軸0.80mの円形で、深さ32.8cmを測る。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がる。覆土は黒褐色土を主体とする自然堆積層である。遺物は出土していないが、覆土の状況から縄文時代に比定できる。

174号土坑（SK174）（第142・185図）

調査区の北西側、F－Ⅲ区、標高25.93mに位置する。長軸1.60m、短軸1.40mの隅丸方形で、深さ46.3cmを測る。底面は平坦で、北西側でピットを伴う。壁は外傾して立ち上がる。覆土は黒褐色土を主体とする自然堆積層である。遺物は、縄文後期初頭の土器が出土している。第185図１の口縁部は盲孔を伴う扁平S字隆帯が貼付けられている。２は口唇部が肥厚し、口縁上に沈線が巡る。胴部は沈線による意匠文。３～５は沈線による帯状交互に縄文が充填するもので、４・５は弧線文。７は縦位の条線文が垂下する。８は単沈線による格子目文。６はやや肥厚する無文土器。称名寺式期。

175号土坑（SK175）（第142・185図）

調査区の北西側、E－Ⅲ区、標高25.77mに位置し、南側でピット群が重複する。長軸1.04m、短軸0.99mの円形で、16.3cmを測る。底面は平坦で、坑底にピット４本が穿ってある。壁は外傾して立ち上がる。覆土は褐色土層の単一層からなる自然堆積層である。遺物は、縄文後期前半の土器が出土している。第185図１は無文地の深鉢で隆帯区画を有する。２は沈線による懸垂文。堀之内１式。

176号土坑（SK176）（第142・185図）

調査区の北西側、F－Ⅲ区、標高25.91mに位置し、西側でピットが重複する。長軸0.93m、短軸0.86mの略円形で、深さ46.1cmを測る。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がる円筒形。覆土は黒褐色土を主体とする自然堆積層である。遺物は、縄文後期前半の土器が出土している。第185図１・２は無文地の深鉢。

177号土坑（SK177）（第142・185図）

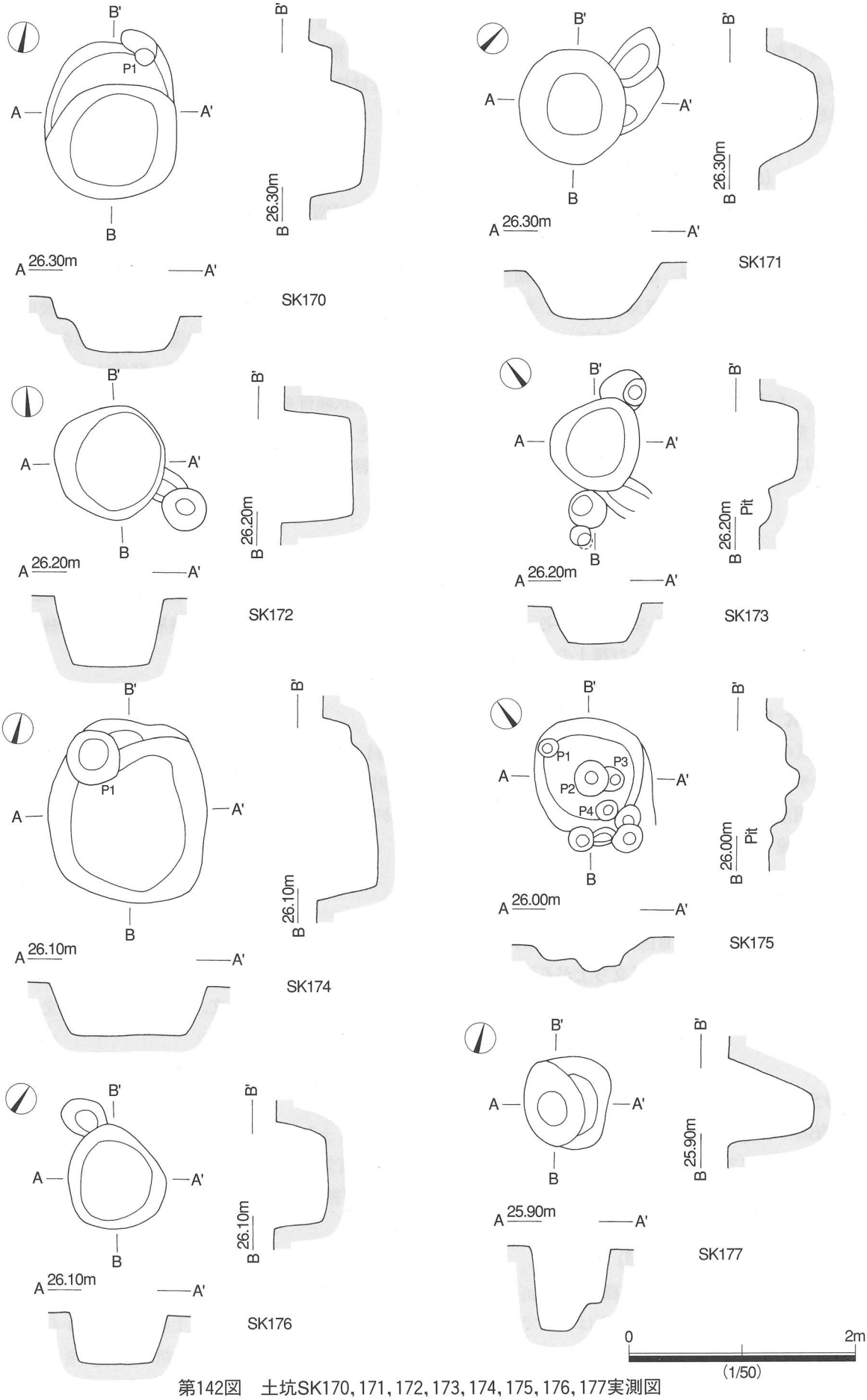
調査区の北西側、F－Ⅲ区、標高25.69mに位置する。長軸0.80m、短軸0.73mの二段掘りの柱穴状土坑で円形をなす。深さ73.0cmを測る。底面は丸底で、壁は垂直気味に立ち上がる。覆土は黒褐色土を主体とする自然堆積層である。遺物は、縄文後期前半の土器が出土している。第185図１は縄文地文の深鉢。堀之内１式。

178号土坑（SK178）（第143・186図）

調査区の北西側、E－Ⅳ区、標高25.96mに位置し、南側で小ピットが重複する。長軸1.45m、短軸1.32mの略円形で、深さ68.3cmを測る。底面は平坦で、壁はやや垂直気味に立ち上がる円筒形。覆土は黒褐色土を主体とする自然堆積層である。遺物は、縄文後期前半の土器が出土している。第186図１は沈線区画された隆帯上に縄文施文される。２は口縁下に隆帯が巡り区画文となり、胴部は三角文。３口縁部破片で弧線文が描かれる。４・５は縄文地文に平行沈線による意匠文で、４は縦位の波状文が垂下し、５は幾何学文。６は深鉢の底部破片。縄文地文。堀之内２式期。

179号土坑（SK179）（第143・186図）

調査区の北西側、E－Ⅲ区、標高25.82mに位置し、南側でピットが重複する。長軸1.34m、短軸1.27mの円



第142図　土坑SK170, 171, 172, 173, 174, 175, 176, 177実測図

形で、深さ65.2cmを測る。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がる円筒形。覆土は黒褐色土を主体とする自然堆積層である。遺物は、縄文後期前半の土器が出土している。第186図１は無文地。口縁下に刺突文を施した隆帯を巡らす。２の口縁部も沈線区画され無文帯とする。３は縄文地文に平行沈線による意匠文。４は小型の深鉢底部破片。堀之内１式期。

180号土坑（SK180）（第143・187図）

調査区の北西側、F－Ⅲ区、標高25.90mに位置し、北側および南西側で小ピットが重複する。長軸1.37m、短軸1.34mの円形で、深さ62.5cmを測る。底面は平坦で壁は垂直気味に立ち上がる円筒形。覆土は黒褐色土を主体とする自然堆積層。遺物は縄文後期前半の土器が出土している。第187図１は４単位の波状口縁の深鉢。口縁部は沈線区画により無文帯となり、波頂部から縦位に盲孔が３個垂下する。胴部は縄文地文に波頂部下および波底部下から蕨手文が垂下する。口径22.8cm、現器高32.1cm。２は波状口縁の深鉢。波頂部を欠損している。口縁上に沈線が巡り、縄文地文。３は口縁部が無文帯で橋状把手が付されている。胴部は縄文地文に沈線意匠文。４は低い山形状の突起をもつ深鉢で、波頂部に８の字状隆帯を貼付け、口縁部は沈線による枠状内に沈線を充填する。胴部は縄文地文。５・６は口縁部が無文帯となるもので、５は盲孔が配される。７～９は縄文地文に沈線による意匠文。10～12は縄文地文。13・14は条線による格子目文。15は深鉢の底部破片。堀之内１式期。

181号土坑（SK181）（第143図）

調査区の北西側、E－Ⅳ区、標高29.13mに位置する。長軸1.15m、短軸1.10mの円形で、深さ36.9cmを測る。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がる。覆土は褐色土層の単一層からなる自然堆積層である。遺物は出土していないが、土坑の形態および覆土の状況から縄文時代に比定できる。

182号土坑（SK182）（第143・186図）

調査区の北西側、E－Ⅲ区、標高25.94mに位置する。長軸1.48m、短軸1.34mの円形で、深さ66.6cmを測る。底面は平坦で、壁は垂直気味に立ち上がる円筒形。覆土は黒褐色土を主体とする自然堆積層である。遺物は、縄文後期前半の土器が出土している。第186図１は口縁部が直線的に外傾する深鉢。縄文地文に半截竹管による平行沈線で蕨手文を垂下させる。堀之内１式期。

183号土坑（SK183）（第143・186図）

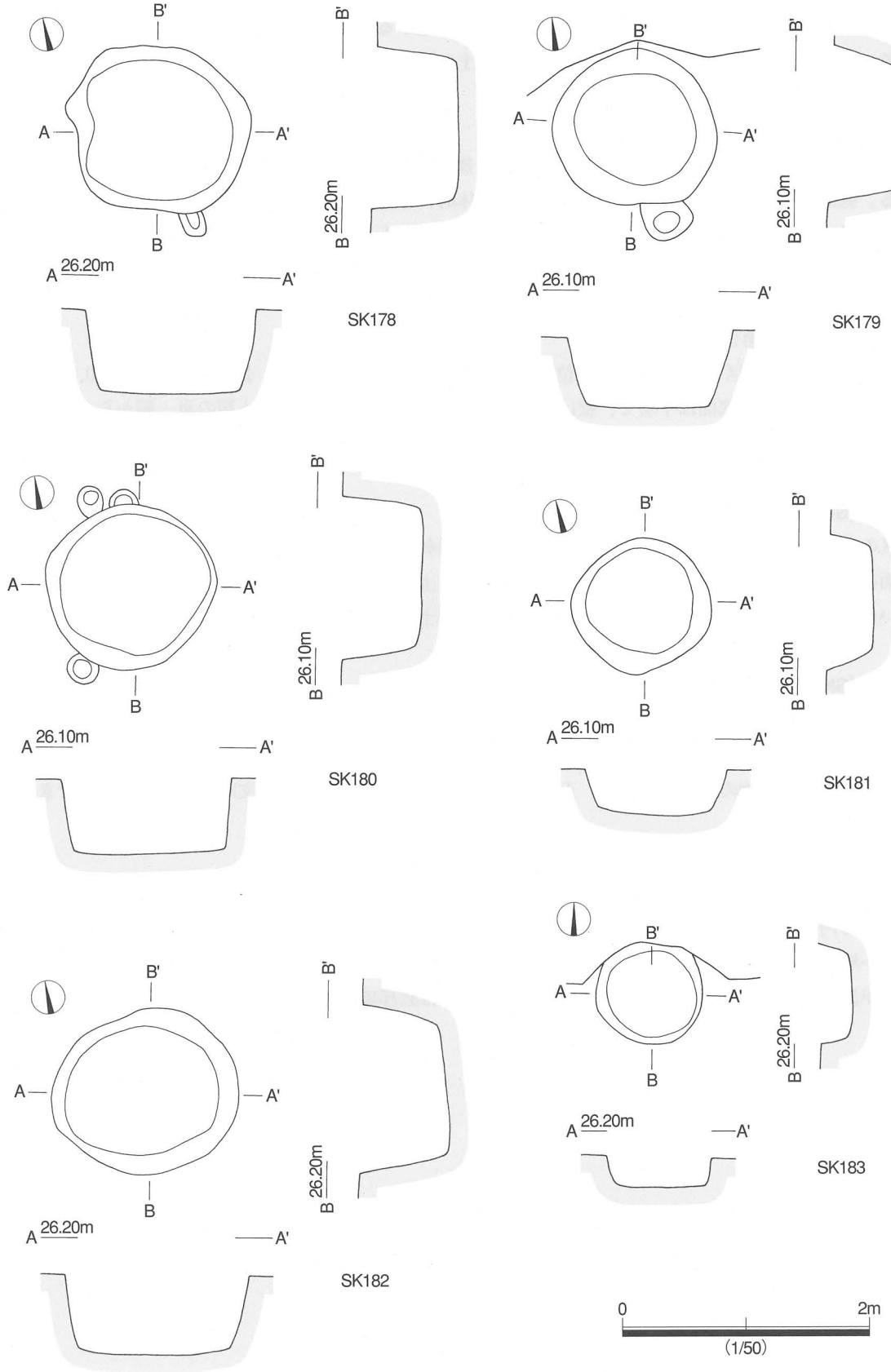
調査区の北西側、D－Ⅲ区、標高26.01mに位置する。長軸0.86m、短軸0.81mの円形で、深さ24.1cmを測る。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がる。覆土は褐色土層の単一層からなる自然堆積層である。遺物は、縄文後期前半の土器が出土している。第186図１は隆帯による渦巻文。２は縄文地文。３は縦位の条線文。堀之内１式期。

184号土坑（SK184）（第144図）

調査区の北東側、I－Ⅳ区、標高25.87mに位置し、南東側でピットが重複する。長軸2.26m、短軸0.81mの長楕円形の陥穴で、深さ64.7cmを測る。底面は平坦で、壁は垂直気味に立ち上がる。覆土は黒褐色土を主体とする自然堆積層である。遺物の出土はないが、土坑の形態および覆土の状況から縄文時代の陥穴と判断できる。

185号土坑（SK185）（第144図）

調査区の北西側、E－Ⅳ区、標高25.92mに位置し、北西側でピットが重複する。長軸1.03m、短軸0.93mの円形で、深さ29.6cmを測る。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がる。覆土は褐色土層の単一層からなる自然堆積層である。遺物の出土はないが、土坑の形態および覆土の状況から縄文時代の土坑と判断できる。



第143図　土坑SK178, 179, 180, 181, 182, 183実測図

186号土坑（SK186）（第144図）

調査区の西側、D－Ⅳ区、標高26.03mに位置する。長軸1.21m、短軸0.85mの楕円形で、深さ24.4cmを測る。底面は平坦で、北西側にピットを伴う。壁は外傾して立ち上がる。覆土は褐色土層の単一層からなる自然堆積層である。遺物の出土はないが、土坑の形態および覆土の状況から縄文時代の土坑と判断できる。

187号土坑（SK187）（第144図）

調査区の中央、H－Ⅳ区、標高26.00mに位置する。規模は長軸3.17m、短軸0.93mの長楕円形で、深さ40.6cmを測る。底面は東側が深く、さらに南側が深く、全体的には起伏がある。壁は外傾して立ち上がる。覆土は褐色土層の単一層からなる自然堆積層である。遺物の出土はなく、土坑の性格および時期については不明である。

188号土坑（SK188）（第144図）

調査区の中央、H－Ⅴ区、標高26.19mに位置し、北側にピットが重複する。長軸0.77m、短軸0.75mの円形で、深さ34.8cmを測る。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がる。覆土は褐色土層の単一層からなる自然堆積層である。遺物の出土はないが、土坑の形態および覆土の状況から縄文時代の土坑と判断できる。

189号土坑（SK189）（第144図）

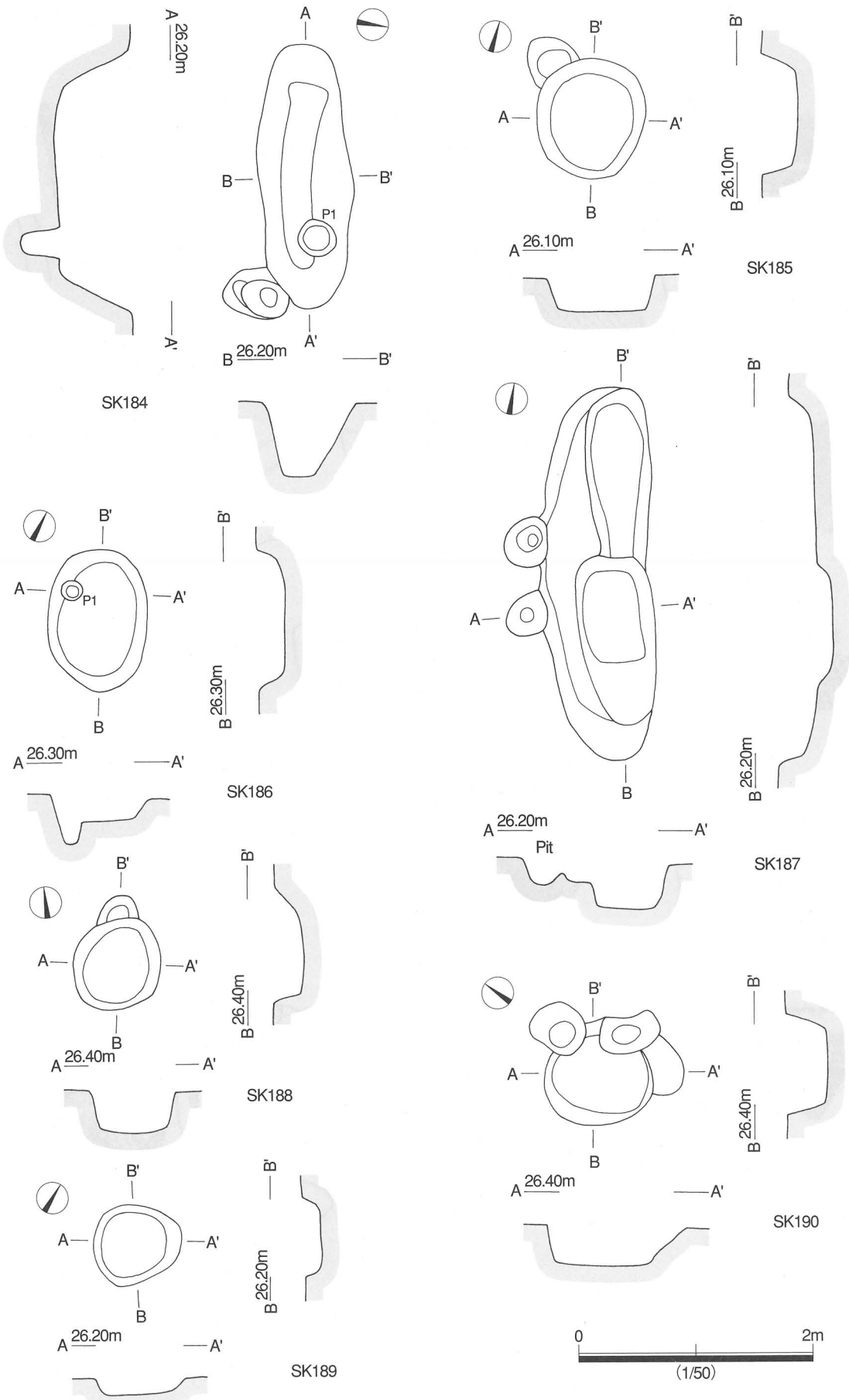
調査区の北西側、E－Ⅳ区、標高25.94mに位置する。長軸0.75m、短軸0.68mの略円形で、深さ13.9cmを測る。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がる。覆土は褐色土層の単一層からなる自然堆積層である。遺物の出土はないが、土坑の形態および覆土の状況から縄文時代の土坑と判断できる。

190号土坑（SK190）（第144図）

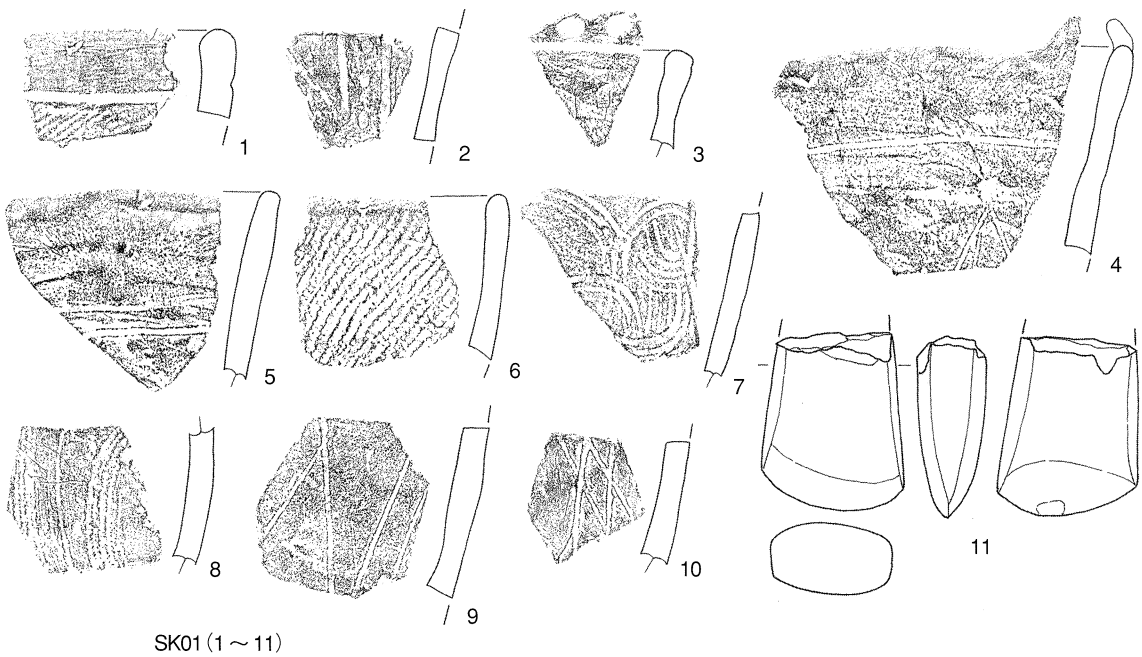
調査区の東側、K－Ⅳ区、標高26.12mに位置し、北東側でピット２本が重複する。長軸1.18m、短軸0.88mの楕円形で、深さ32.9cmを測る。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がる。覆土は褐色土層の単一層からなる自然堆積層である。遺物の出土はないが、土坑の形態および覆土の状況から縄文時代の土坑と判断できる。

191号土坑（SK191）（第126・155図）

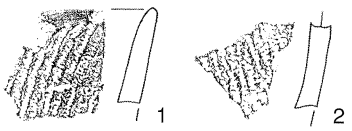
調査区の南東側、I－Ⅵ区、標高25.97mに位置し、東側半分は未調査区域に延びている。現存長軸1.55m、短軸0.66mの円形であろう。深さ6.6cmを測る。底面は鍋底状を呈し、壁は外傾して立ち上がる。覆土は褐色土層の単一層からなる。遺物は、縄文後期中葉の土器が出土している。第155図１は口縁部が内傾し、口唇部に斜行刻目が施された無文系浅鉢。２・３は横位の条線。４は底部破片。加曽利B式期。



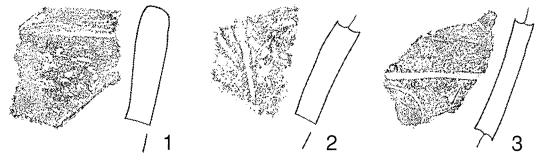
第144図　土坑SK184, 185, 186, 187, 188, 189, 190実測図



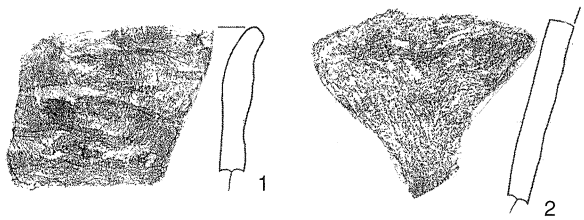
SK01 (1～11)



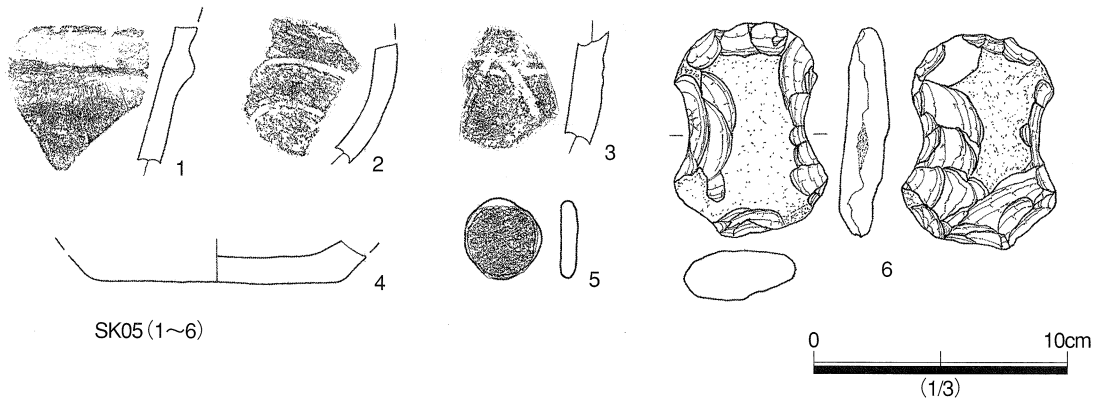
SK02 (1・2)



SK03 (1～3)



SK04 (1・2)

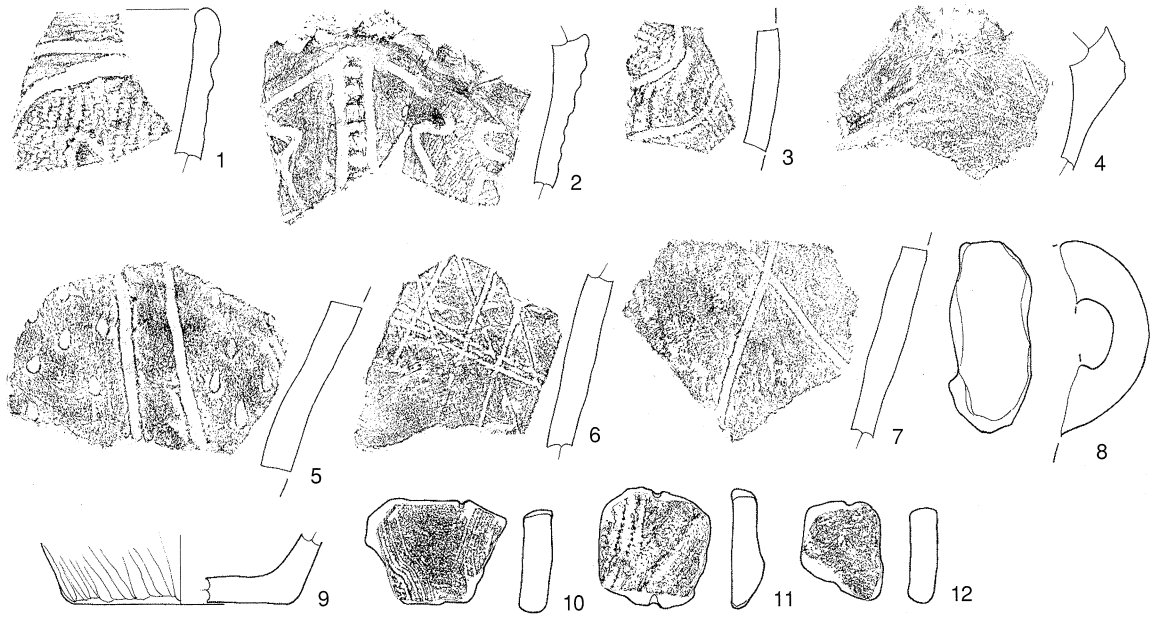


SK05 (1～6)

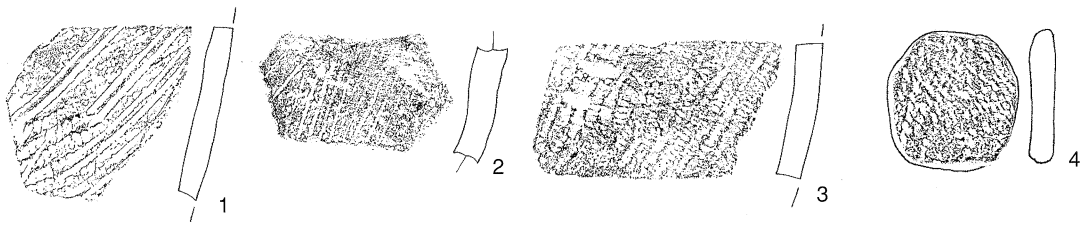
0 10cm

(1/3)

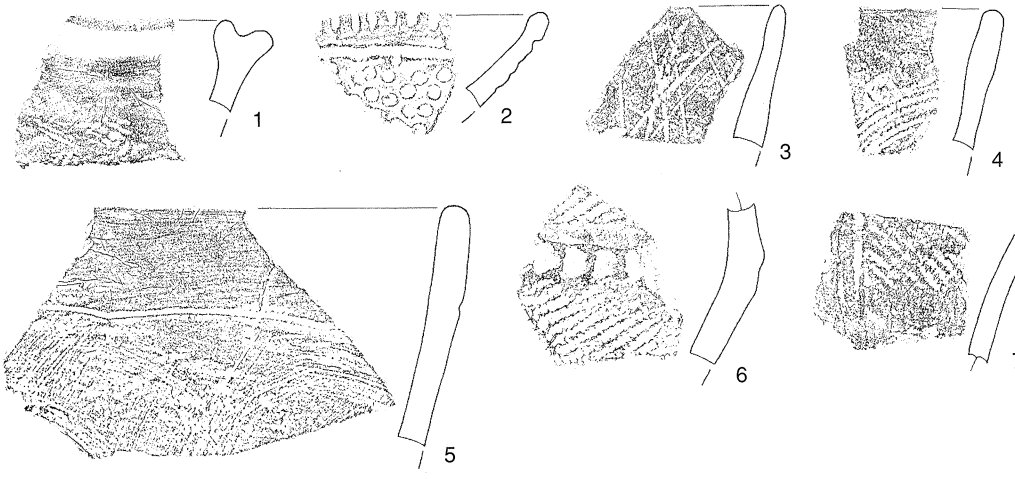
第145図　土坑SK01, 02, 03, 04, 05出土遺物



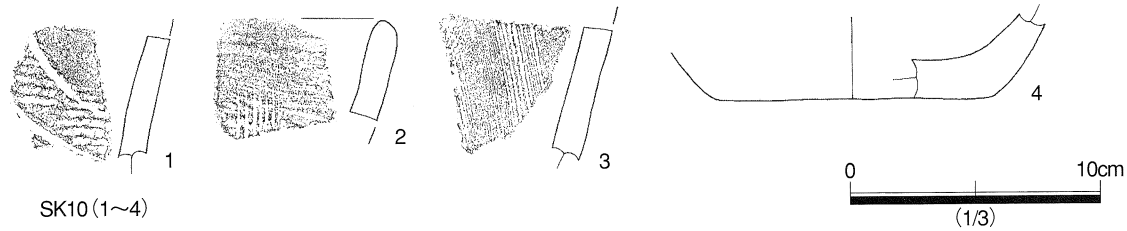
SK06 (1～12)



SK07A (1～4)

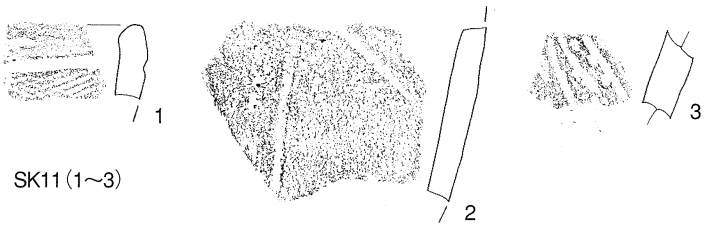


SK08 (1～7)

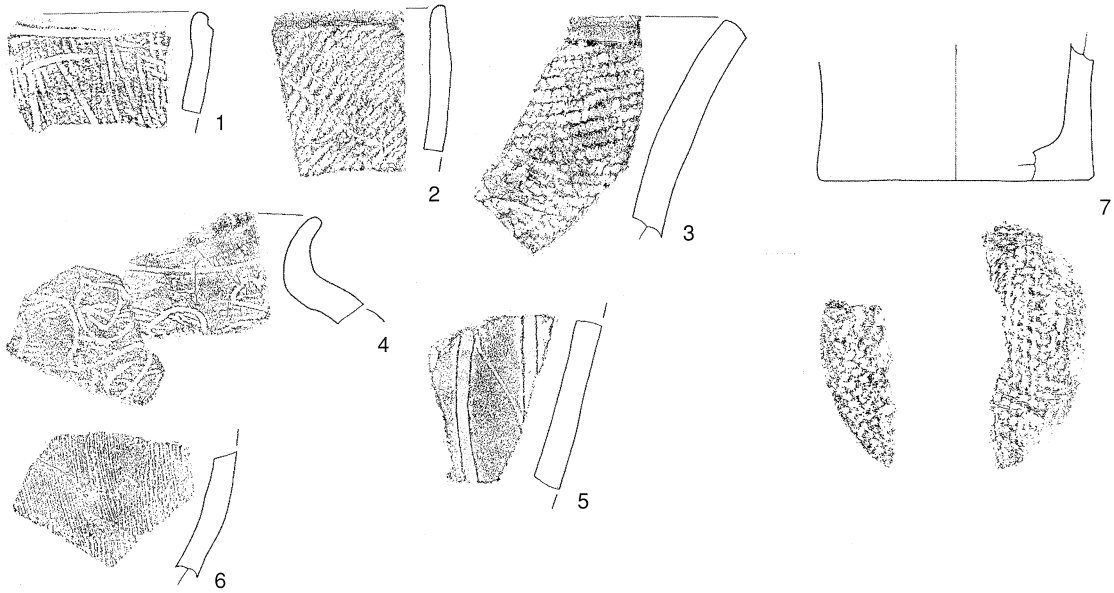


SK10 (1～4)

第146図　土坑SK06, 07, 08, 10出土遺物



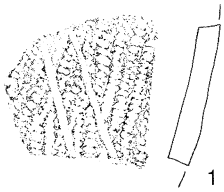
SK11(1～3)



SK12(1～7)

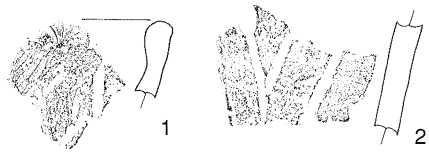
SK13(1～8)

第147図　土坑SK11, 12, 13出土遺物

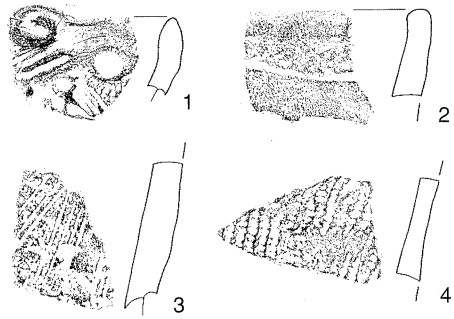


SK14A(1)

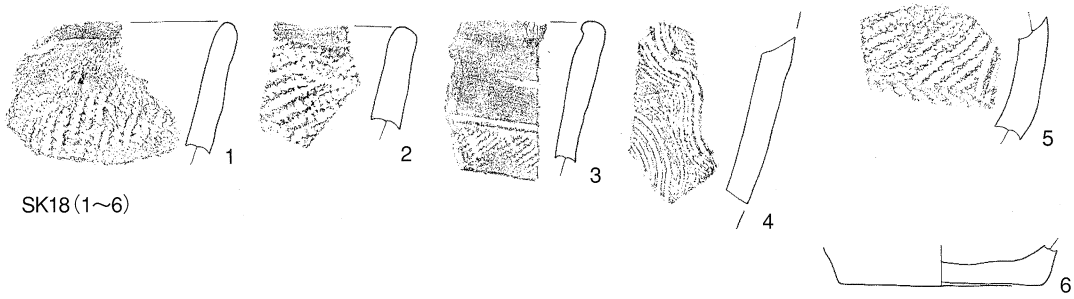
SK16(1)



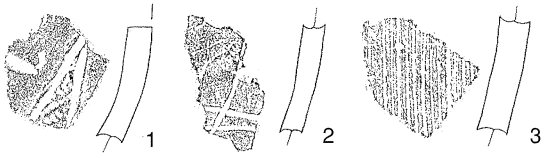
SK15(1・2)



SK17(1～4)

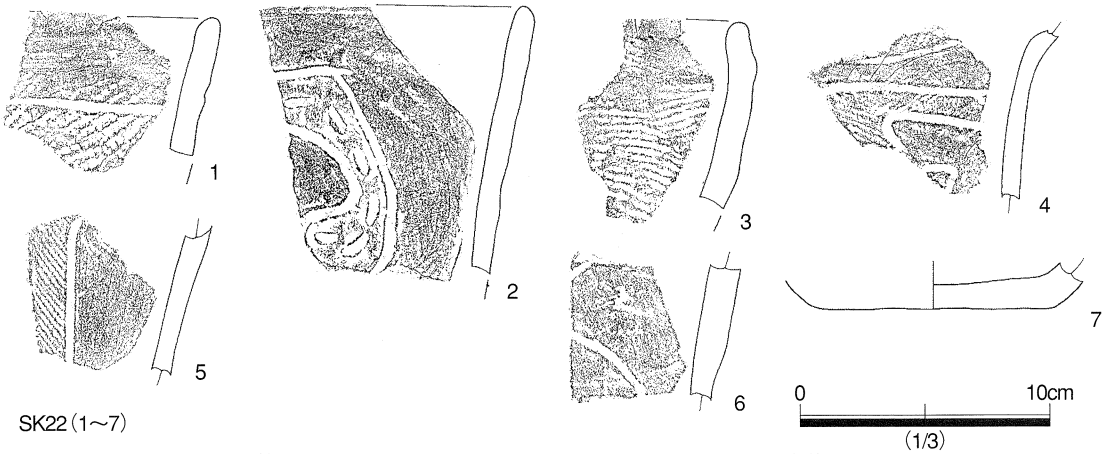


SK18(1～6)



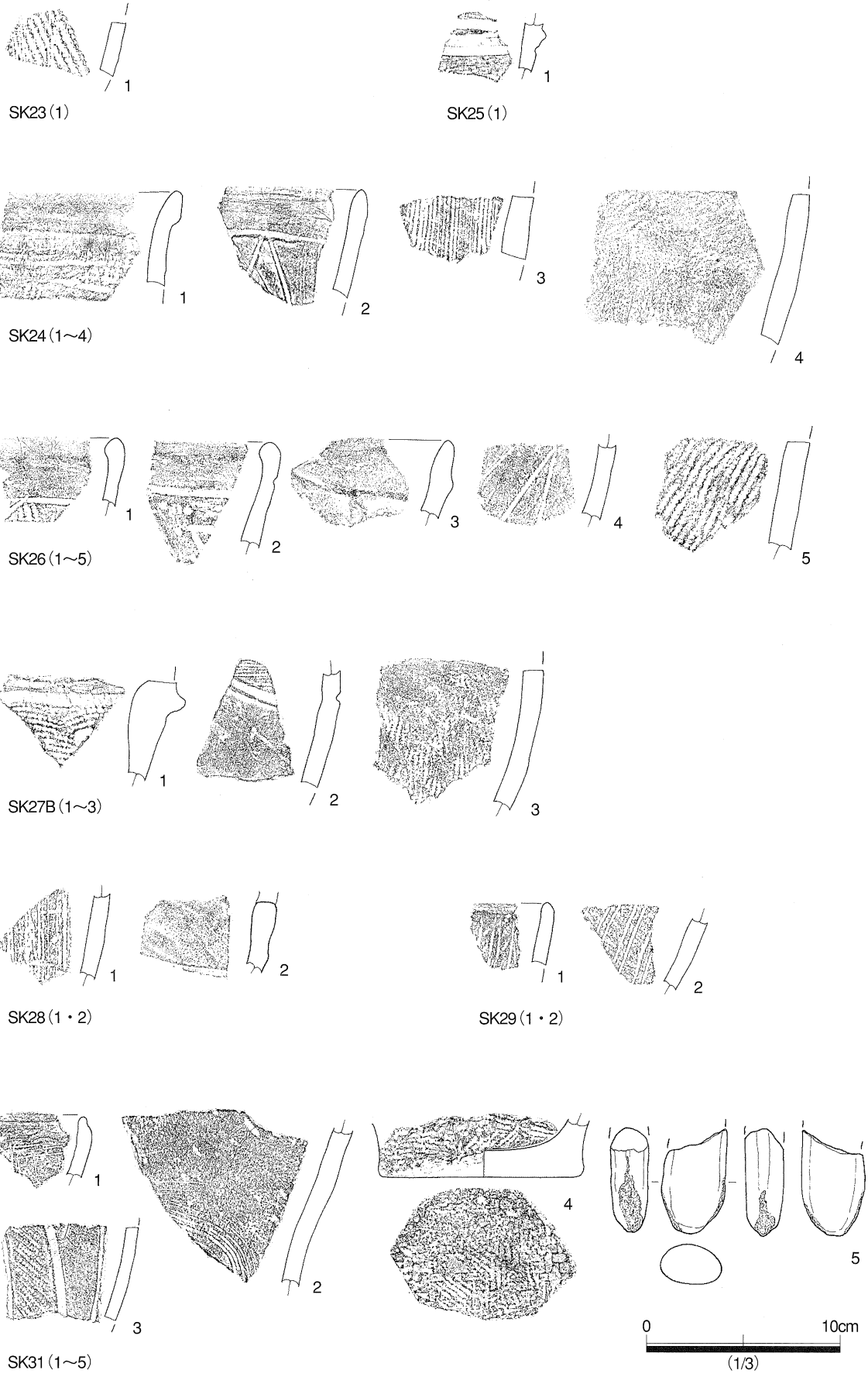
SK19(1～3)

SK21(1・2)

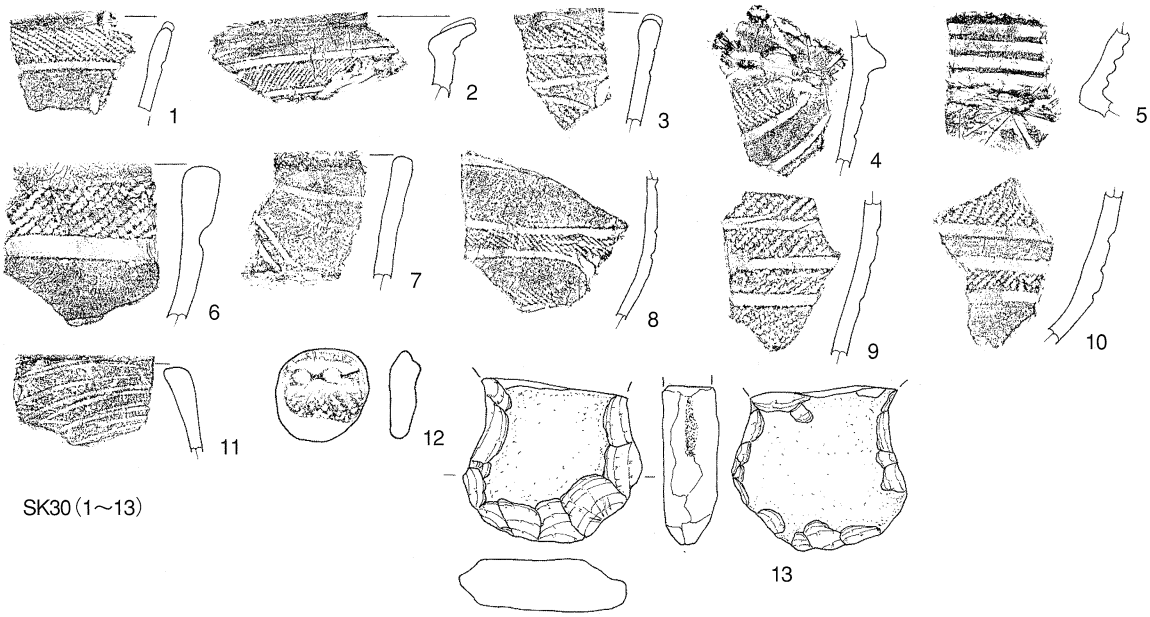


SK22(1～7)

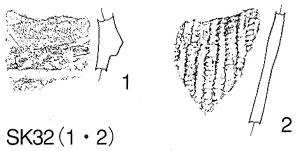
第148図　土坑SK14, 15, 16, 17, 18, 19, 21, 22出土遺物



第149図　土坑SK23, 24, 25, 26, 27, 28, 29, 31出土遺物

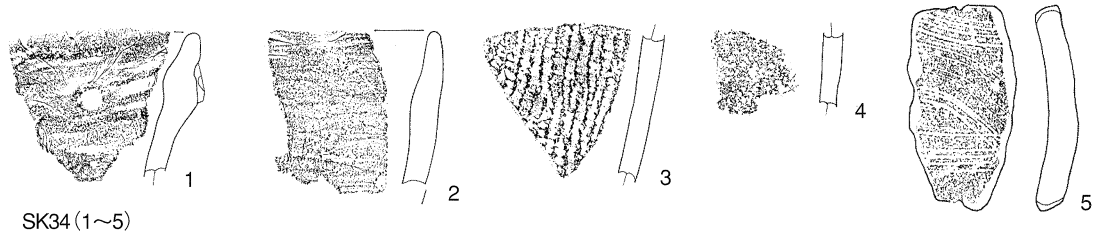


SK30 (1～13)

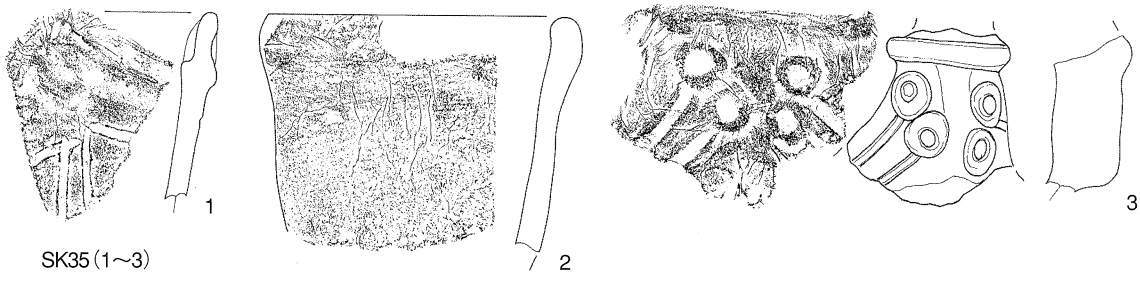


SK32 (1・2)

SK33 (1・2)

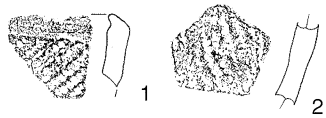


SK34 (1～5)



SK35 (1～3)

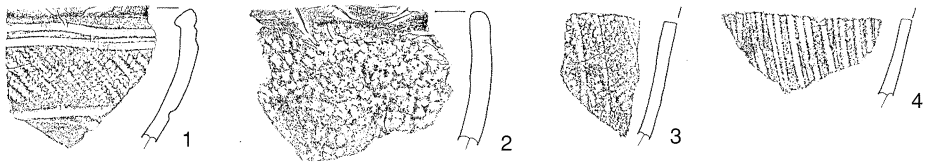
SK36 (1)



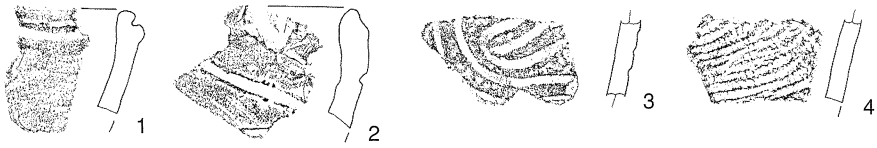
SK37 (1・2)

0 10cm
(1/3)

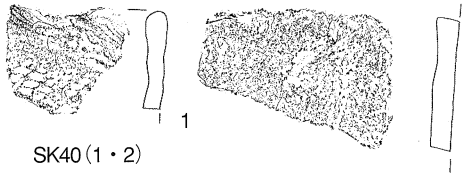
第150図　土坑SK30, 32, 33, 34, 35, 36, 37出土遺物



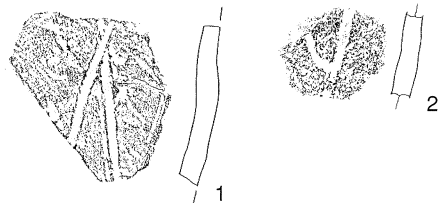
SK38 (1～4)



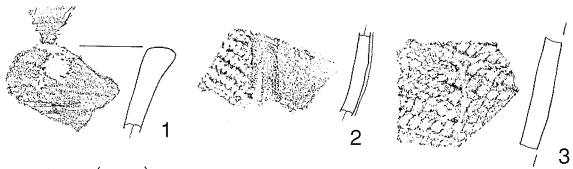
SK39 (1～4)



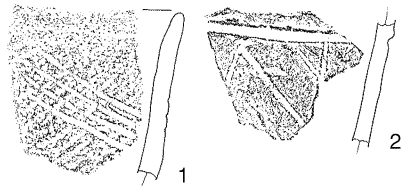
SK40 (1・2)



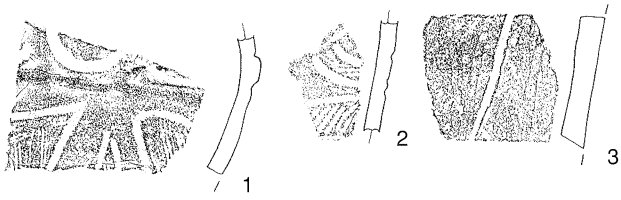
SK41 (1・2)



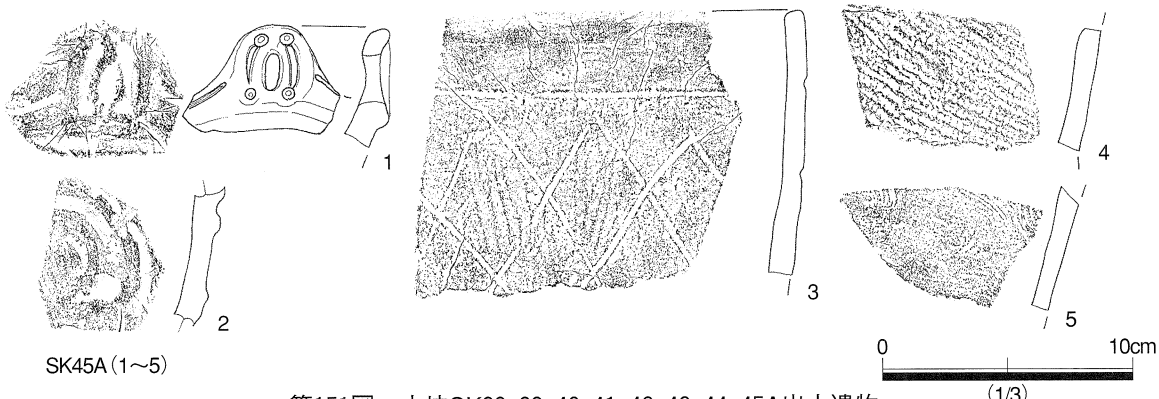
SK42 (1～3)



SK43 (1・2)

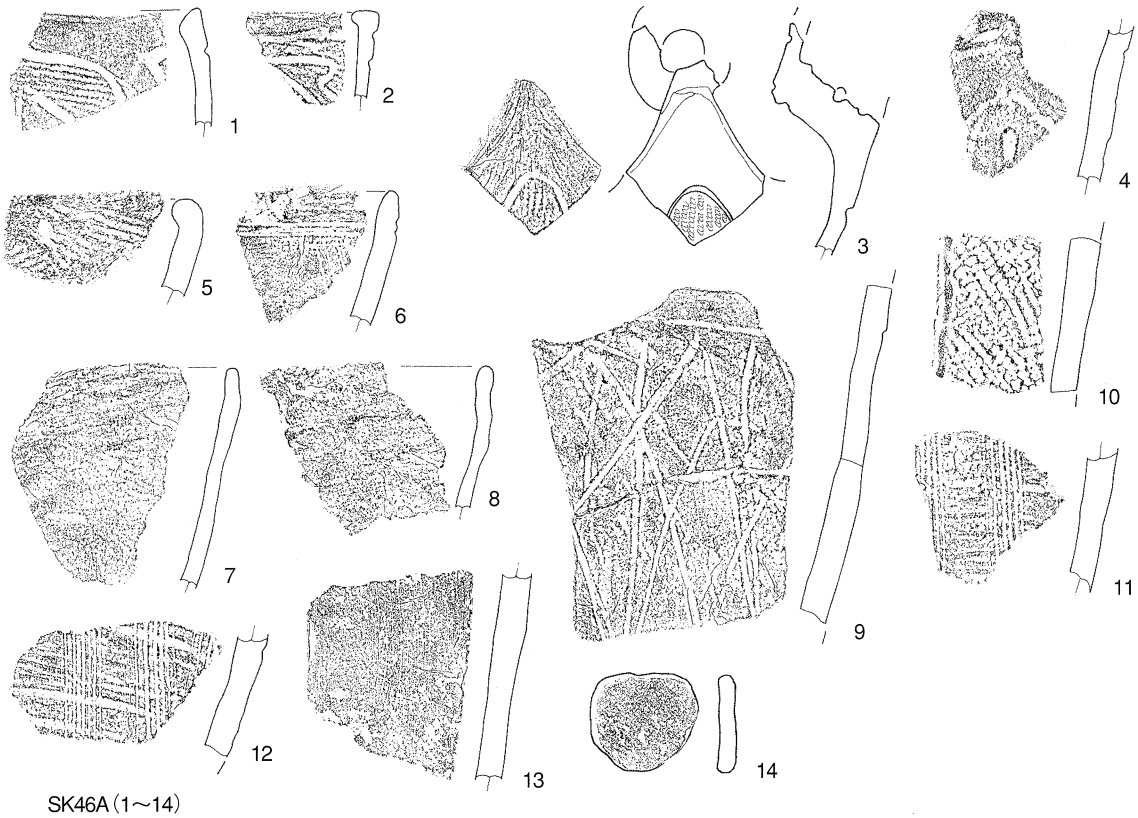


SK44 (1～3)

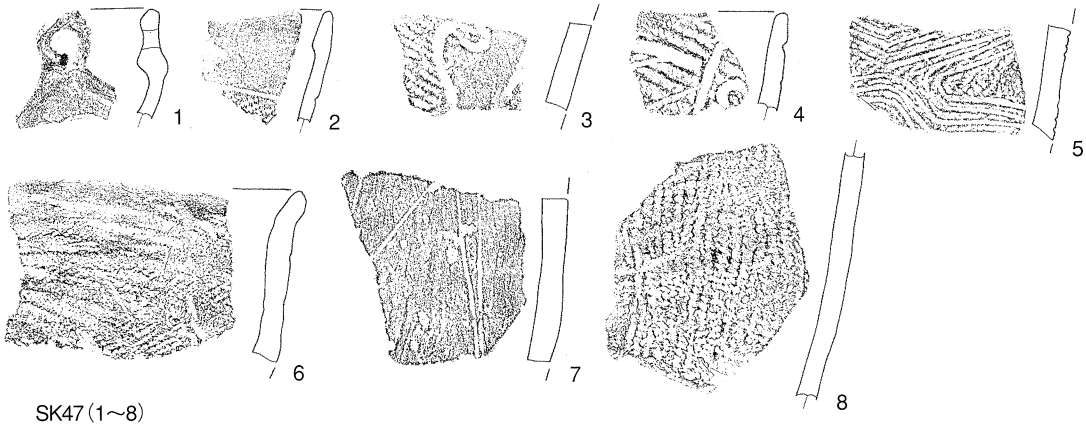


SK45A (1～5)

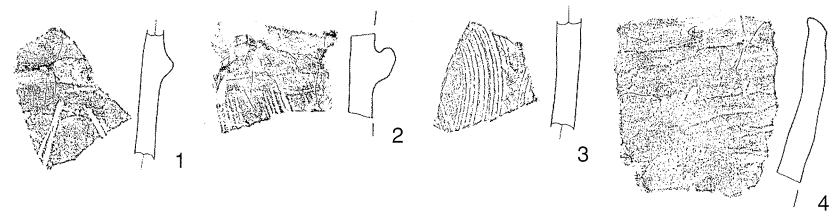
第151図　土坑SK38, 39, 40, 41, 42, 43, 44, 45A出土遺物



SK46A (1～14)



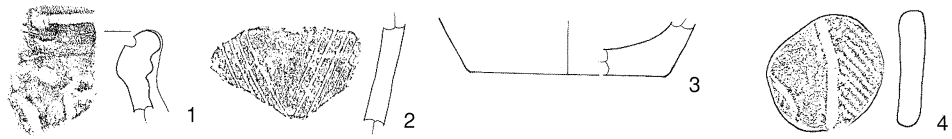
SK47 (1～8)



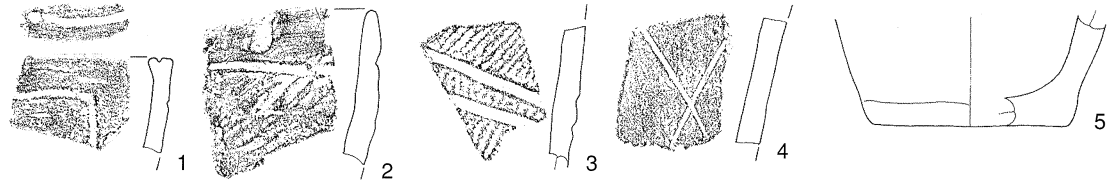
SK48 (1～4)

0 10cm
(1/3)

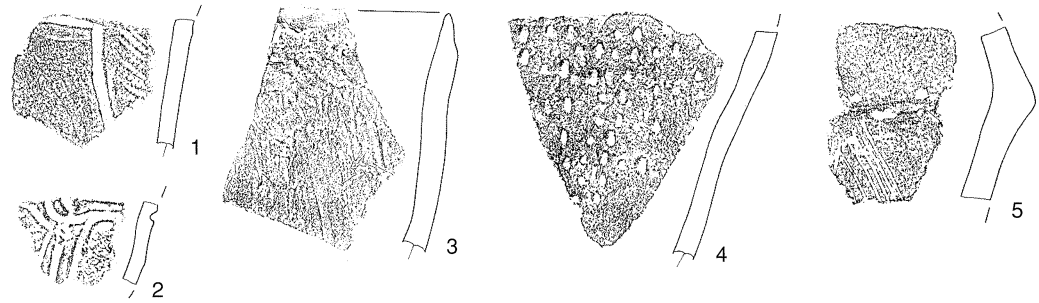
第152図　土坑SK46A, 47, 48出土遺物



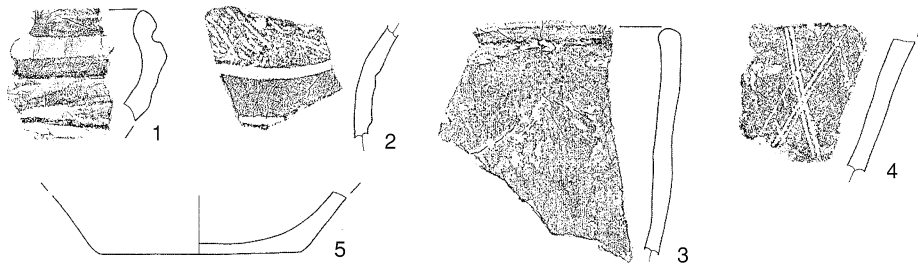
SK49 (1～4)



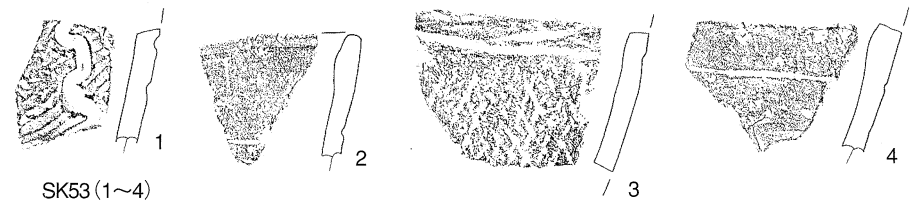
SK50 (1～5)



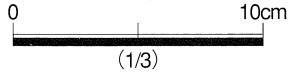
SK51 (1～5)



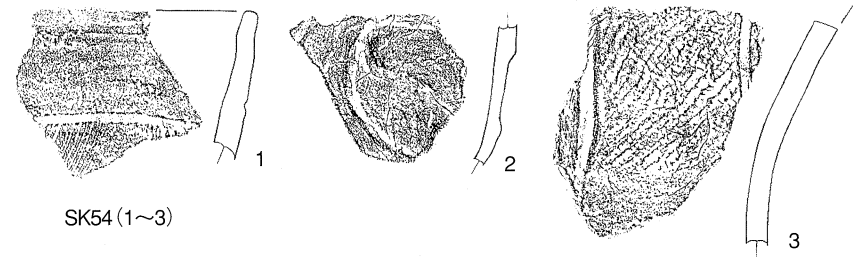
SK52 (1～5)



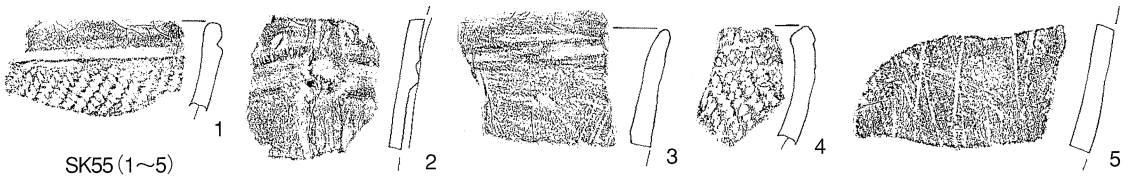
SK53 (1～4)



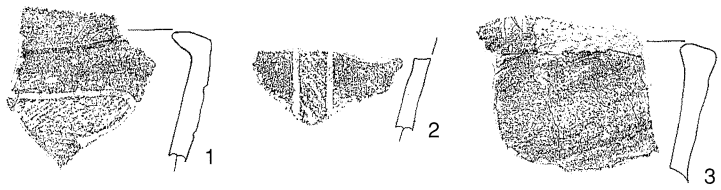
第153図　土坑SK49, 50, 51, 52, 53出土遺物



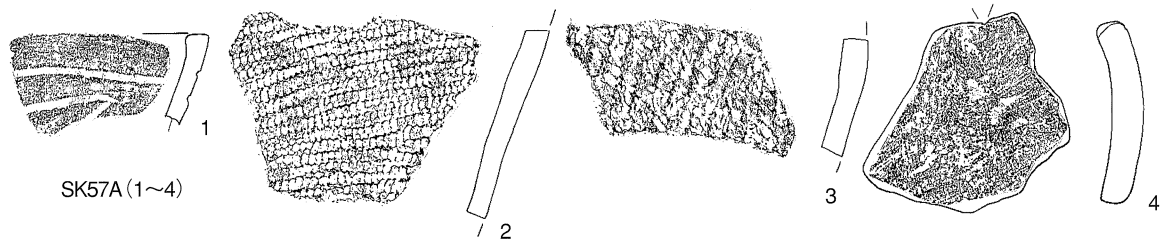
SK54 (1～3)



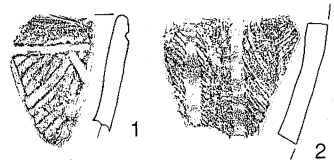
SK55 (1～5)



SK56 (1～3)

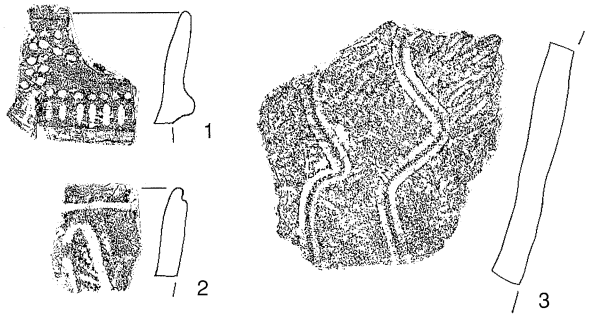


SK57A (1～4)

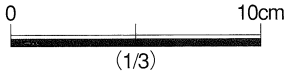


SK58 (1・2)

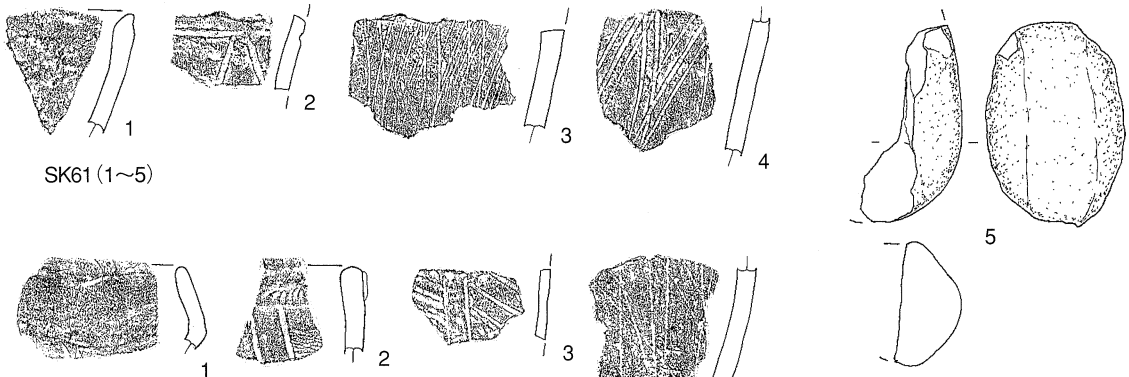
SK60 (1)



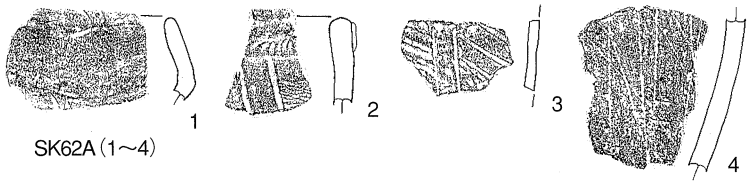
SK59 (1～3)



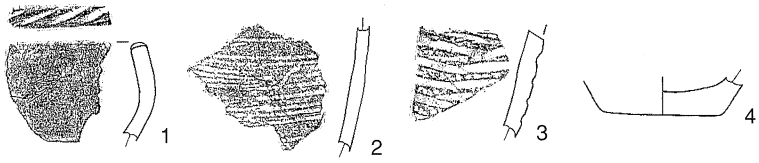
第154図　土坑SK54, 55, 56, 57A, 58, 59, 60出土遺物



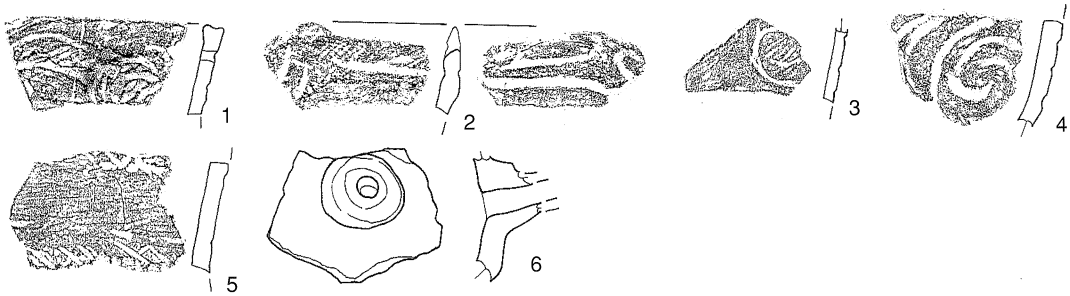
SK61 (1～5)



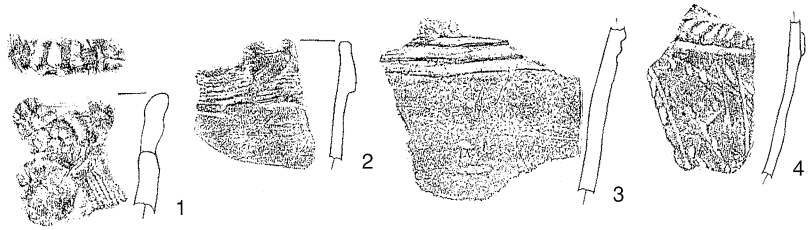
SK62A (1～4)



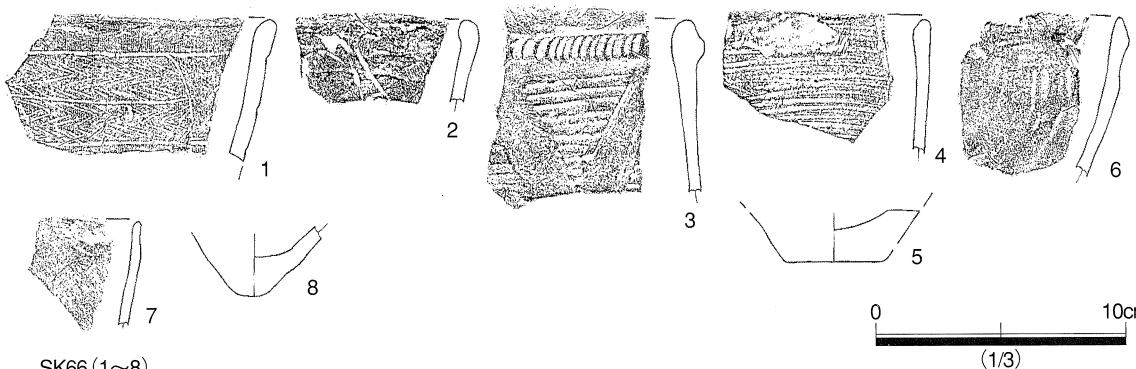
SK191 (1～4)



SK64 (1～6)

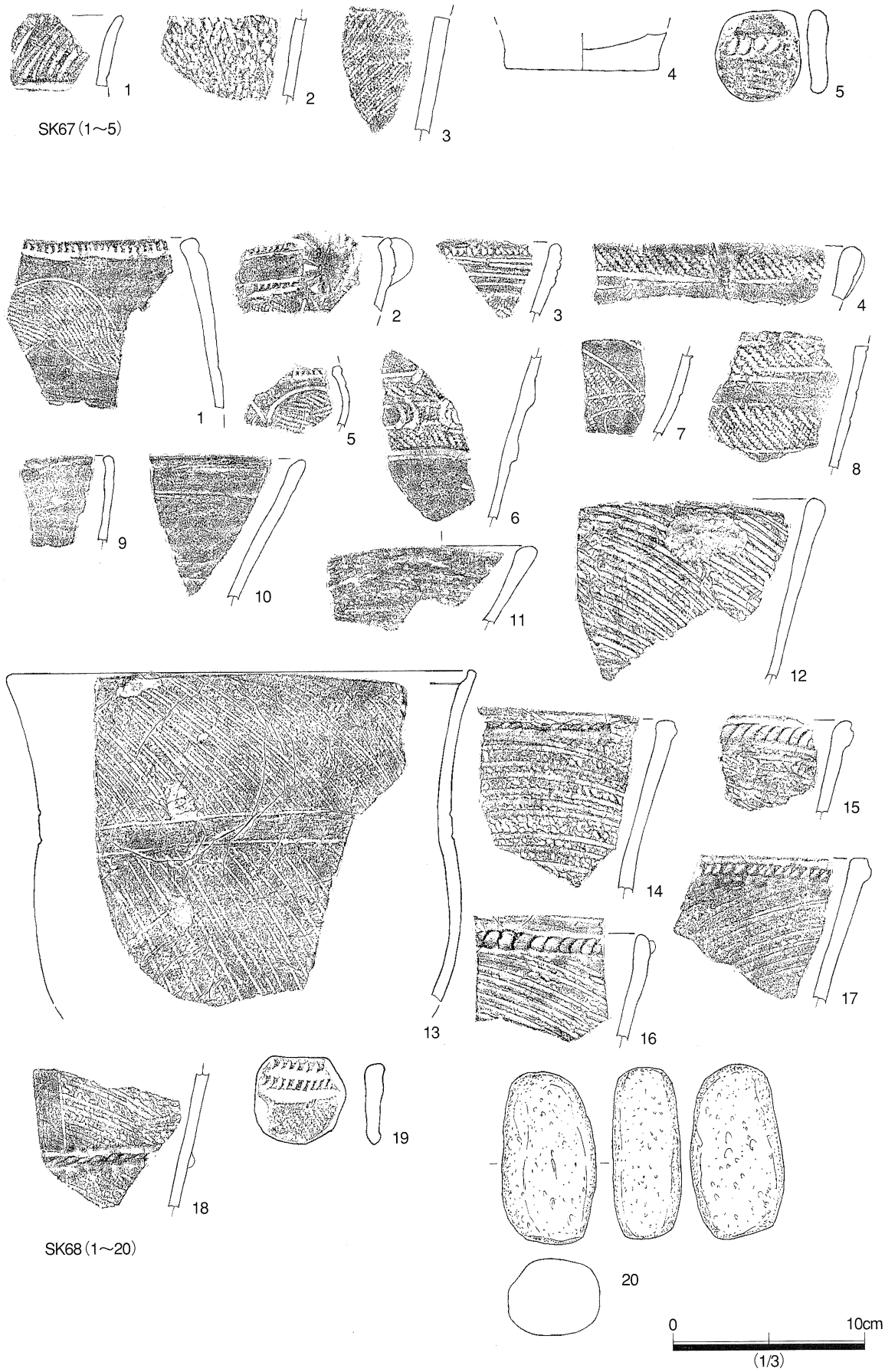


SK65 (1～4)

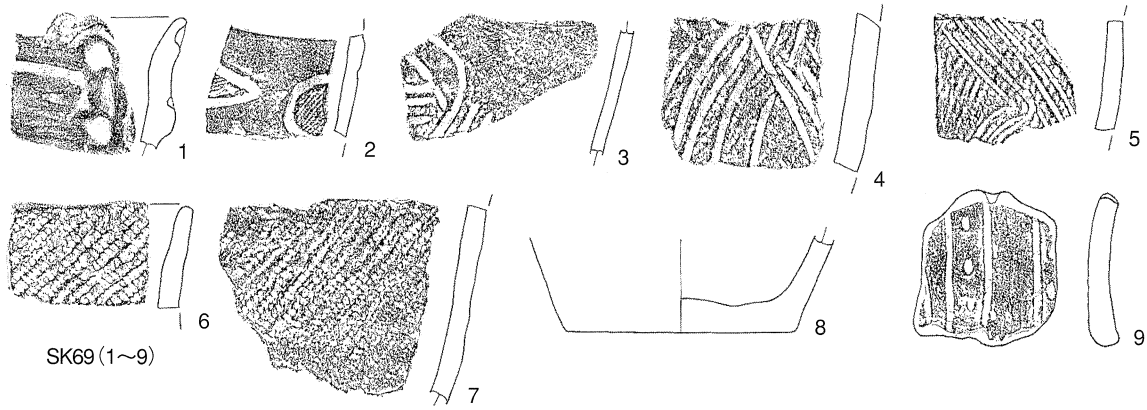


SK66 (1～8)

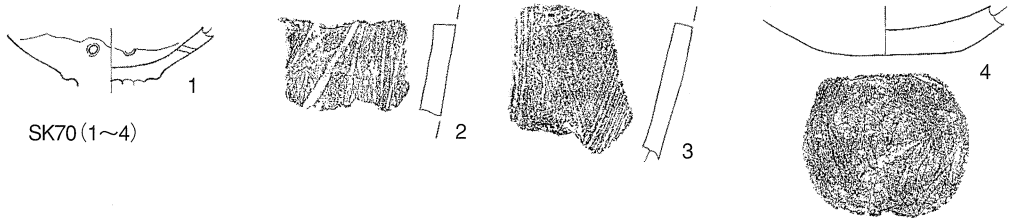
第155図　土坑SK61, 62A, 63, 64, 65, 66, 191出土遺物



第156図　土坑SK67,68出土遺物

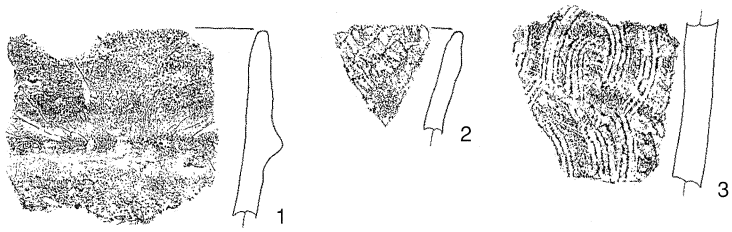


SK69 (1～9)

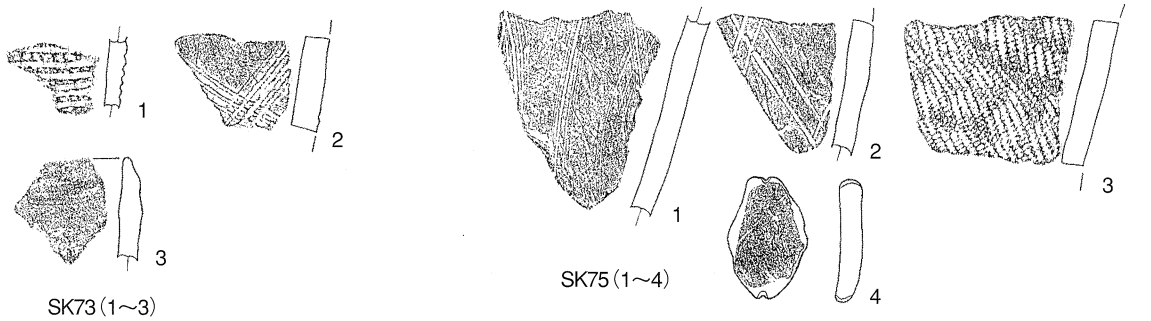


SK70 (1～4)

SK71 (1～3)



SK72 (1～3)



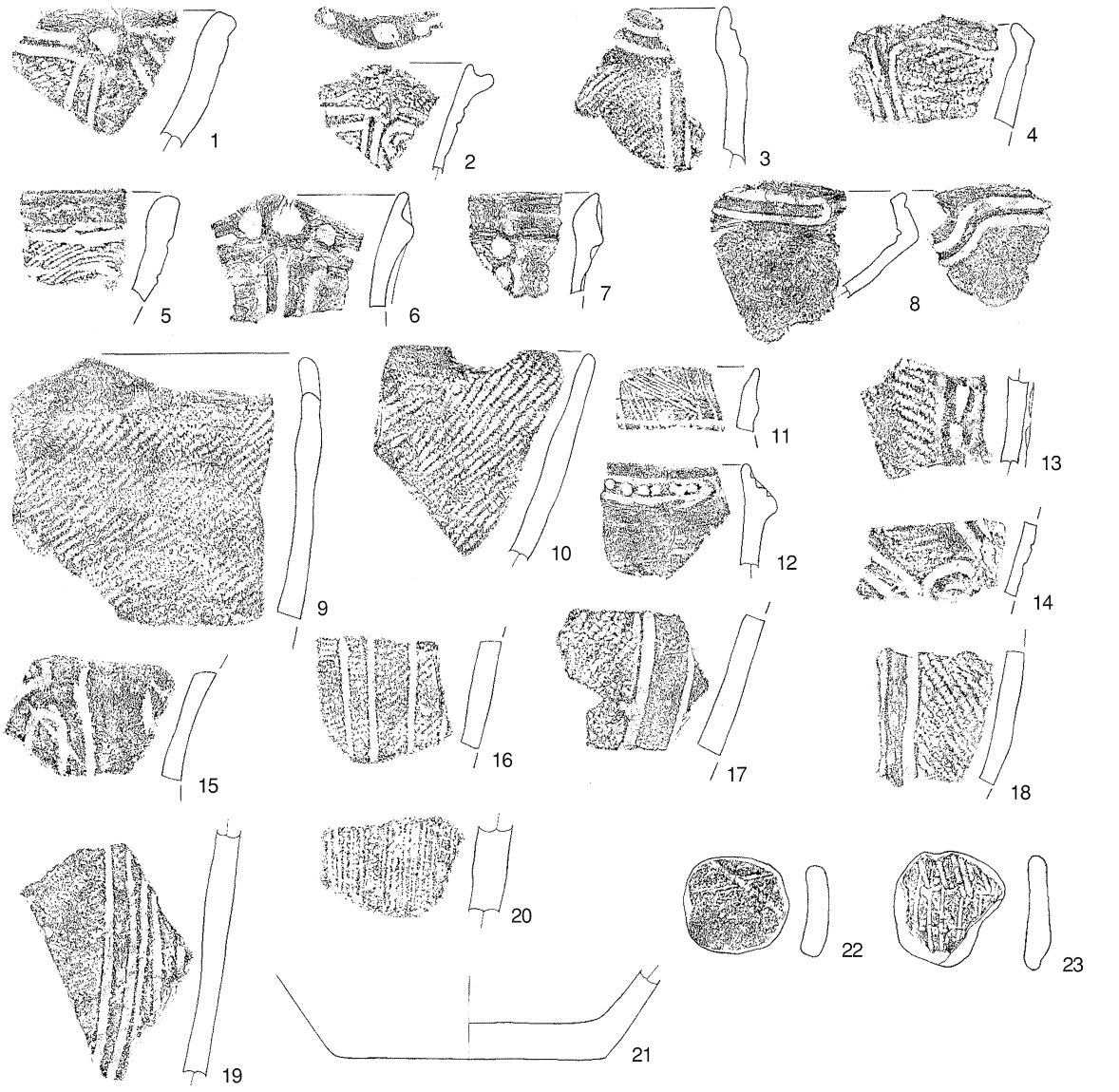
SK73 (1～3)

SK75 (1～4)

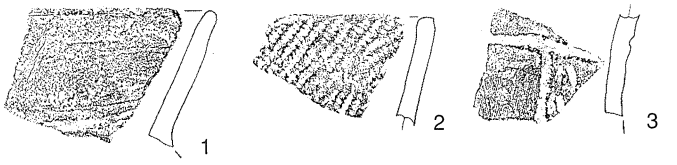
0 10cm

(1/3)

第157図　土坑SK69, 70, 71, 72, 73, 75出土遺物

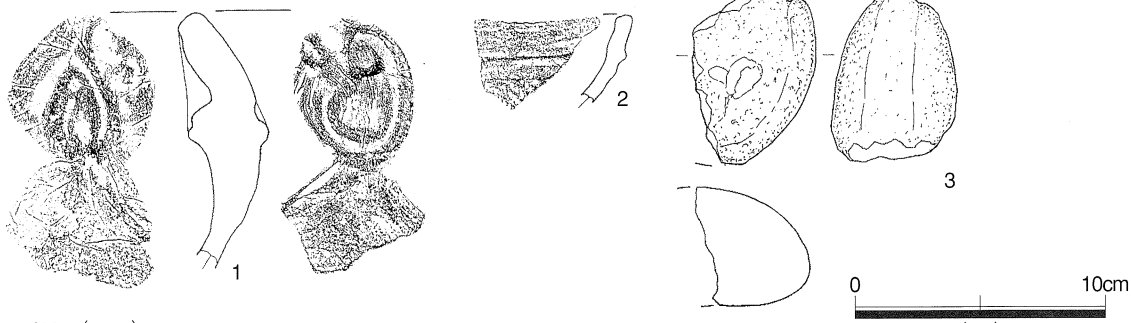


SK74(1～23)



SK76(1～3)

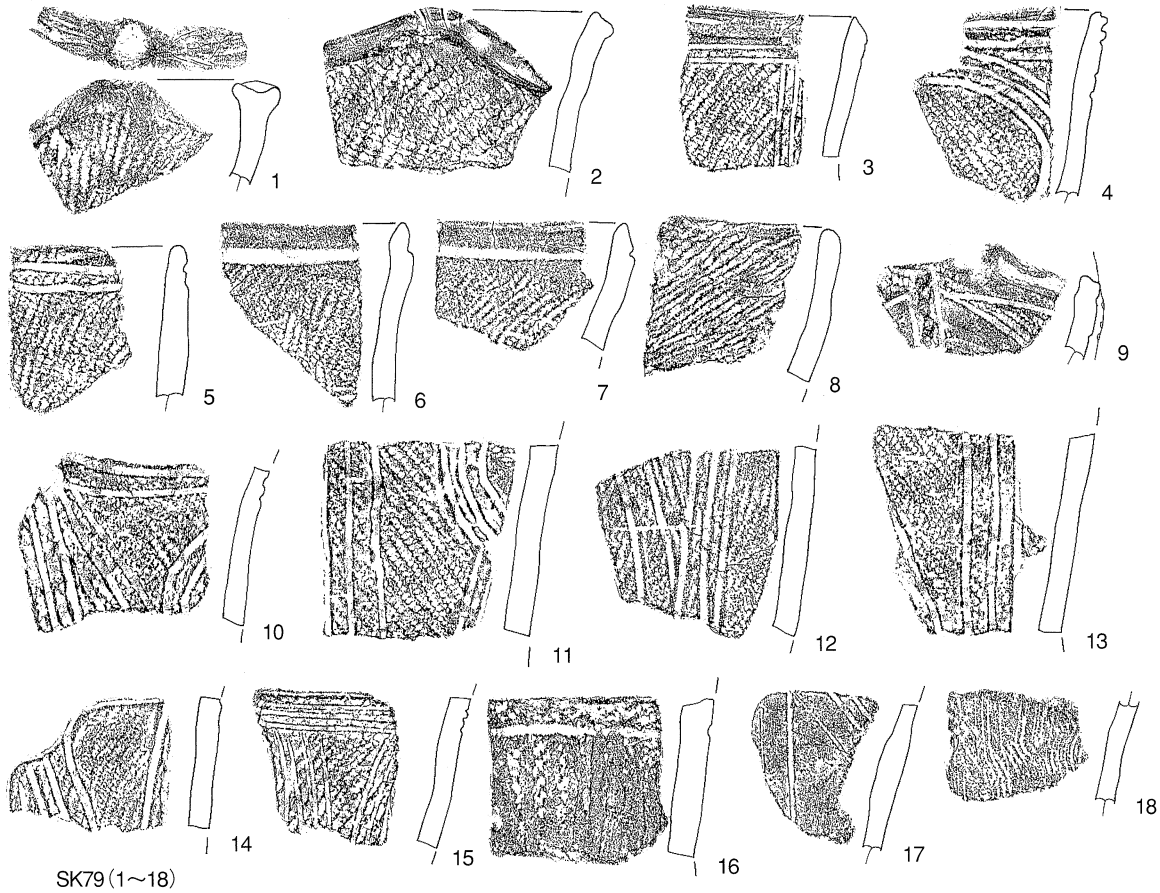
SK77(1)



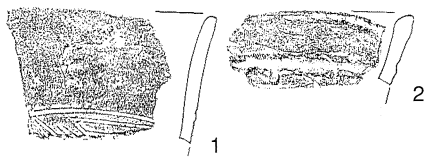
SK78(1～3)

第158図　土坑SK74, 76, 77, 78出土遺物

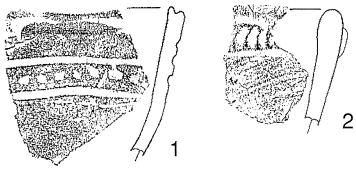
(1/3)



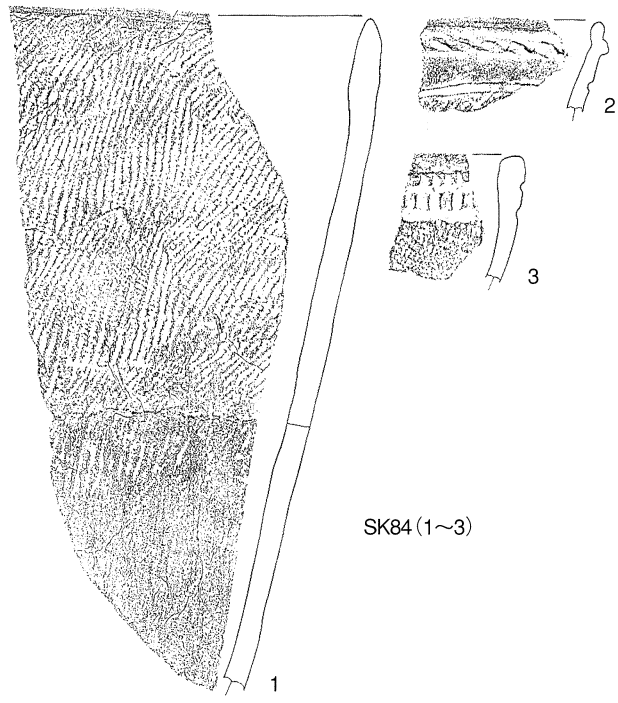
SK79(1～18)



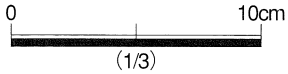
SK80(1・2)



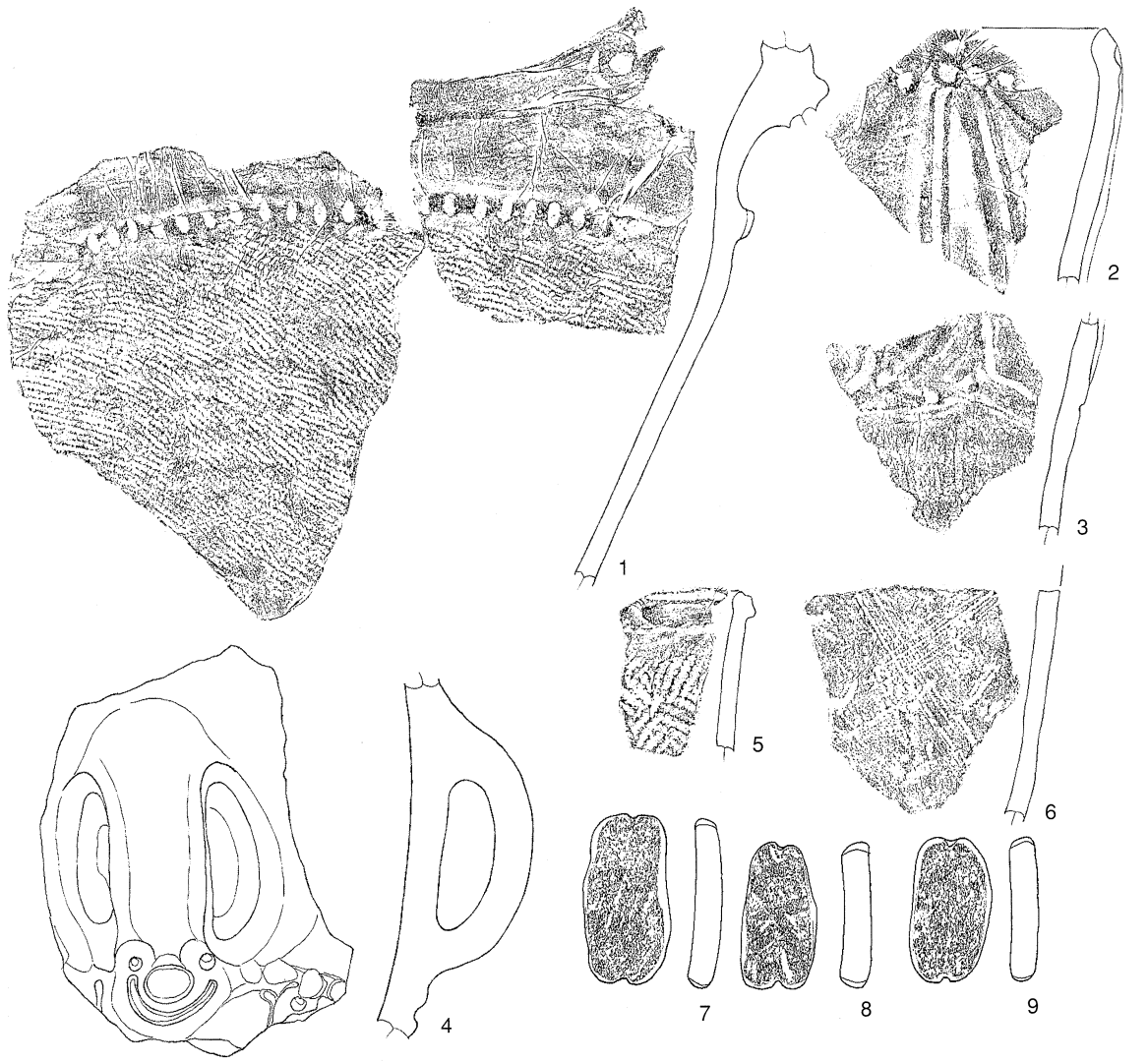
SK83(1・2)



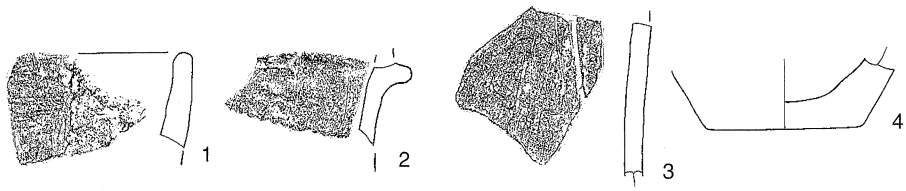
SK84(1～3)



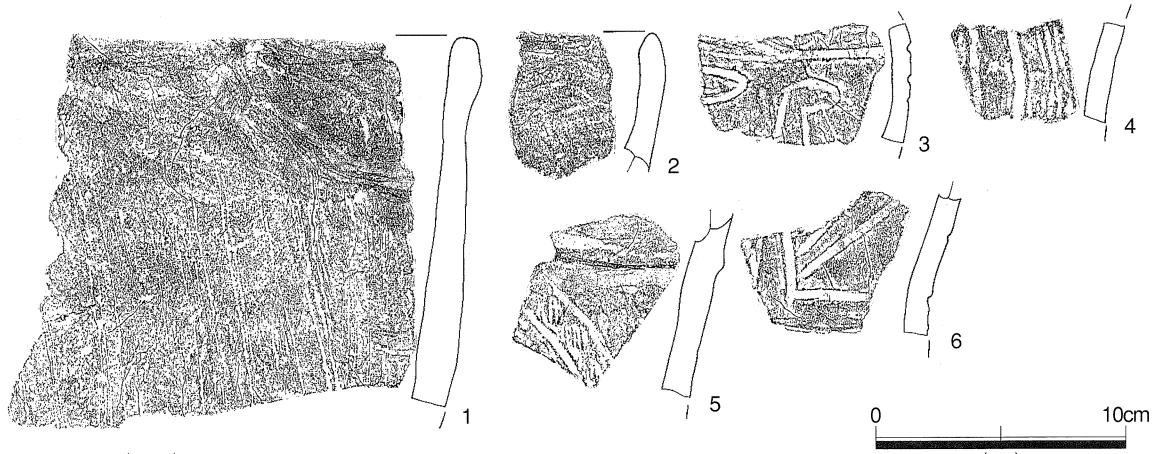
第159図　土坑SK79, 80, 83, 84出土遺物



SK82(1～9)

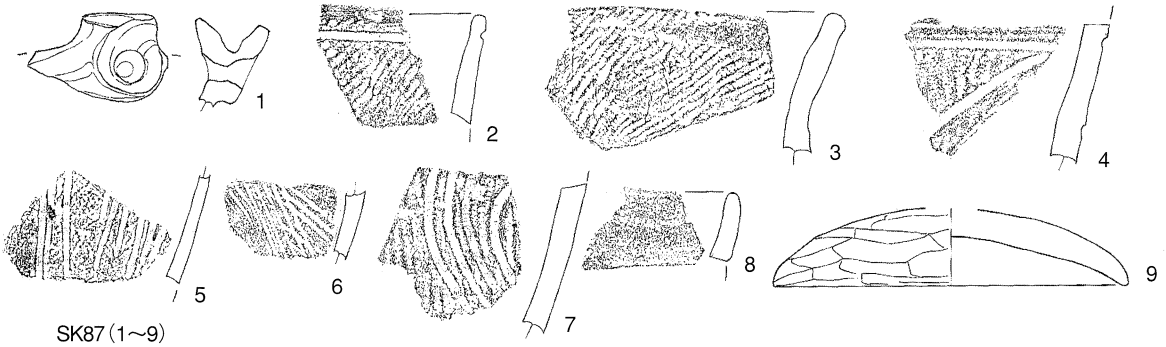


SK85(1～4)

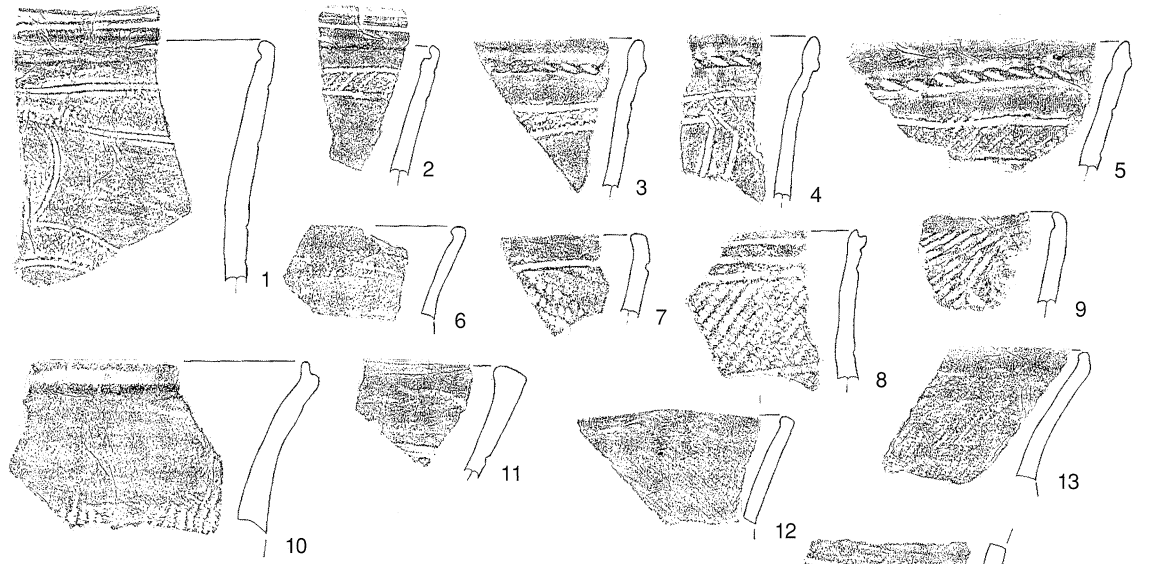


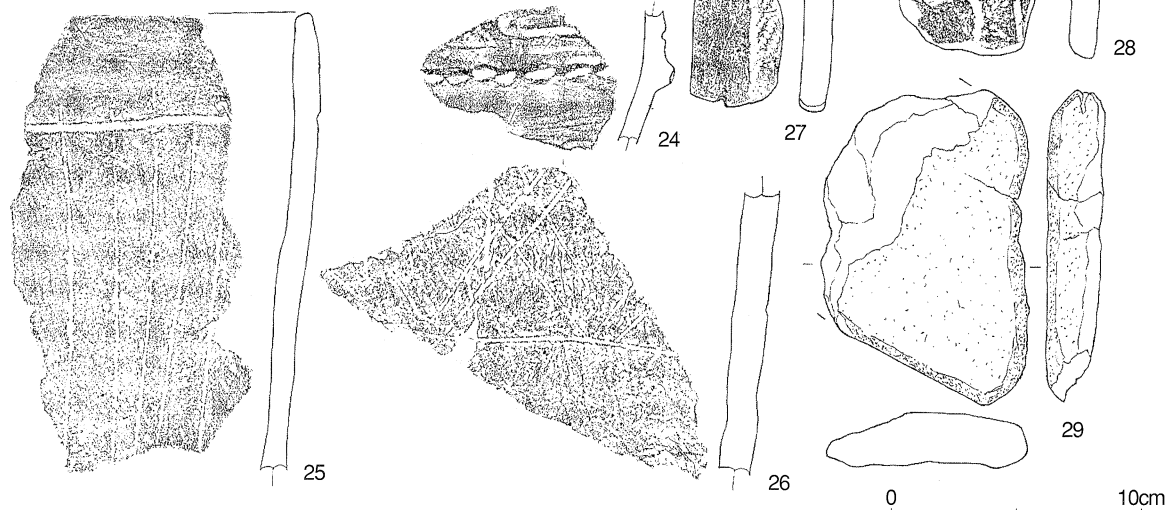
SK86(1～6)

第160図　土坑SK82, 85, 86出土遺物



SK87(1～9)

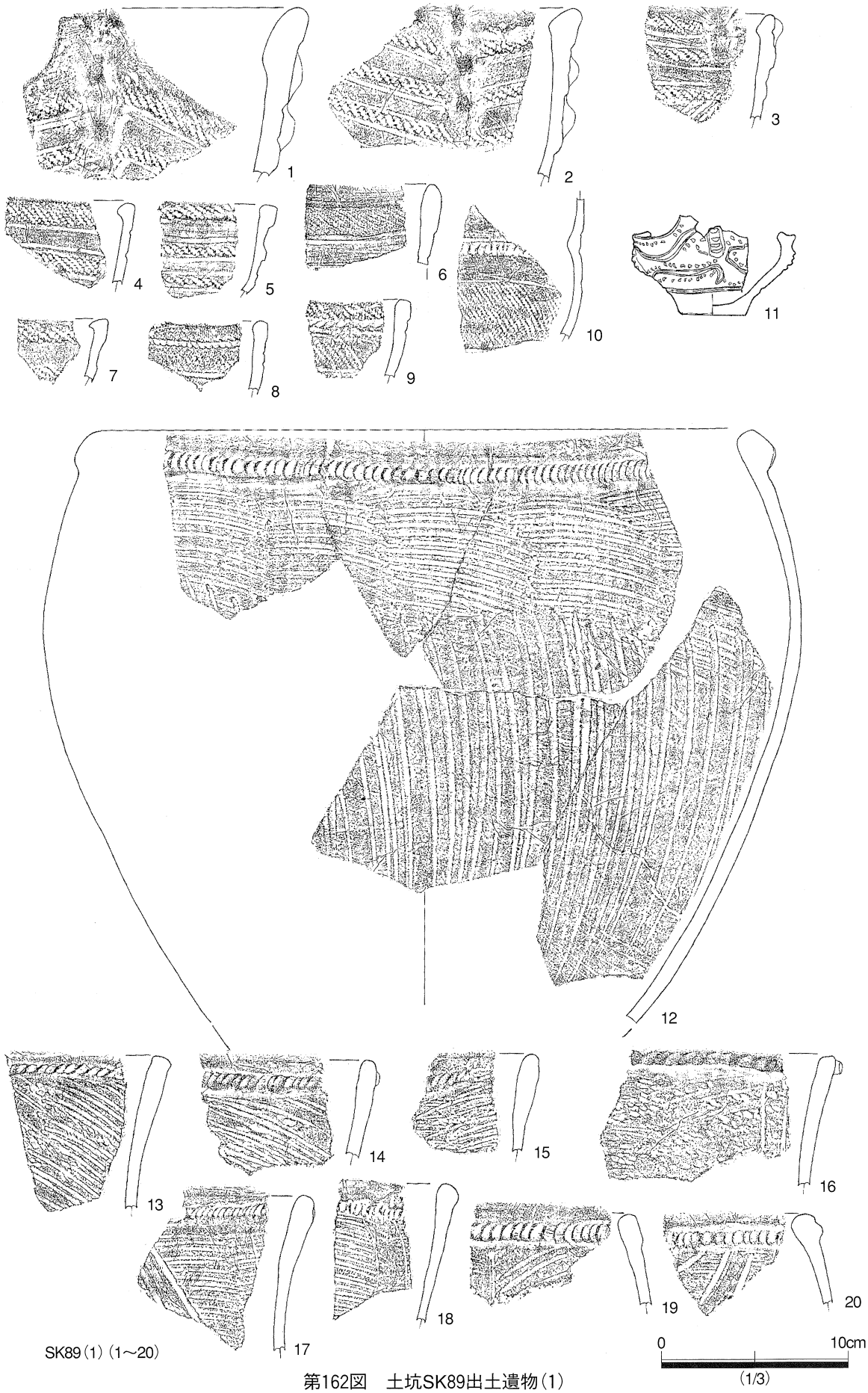




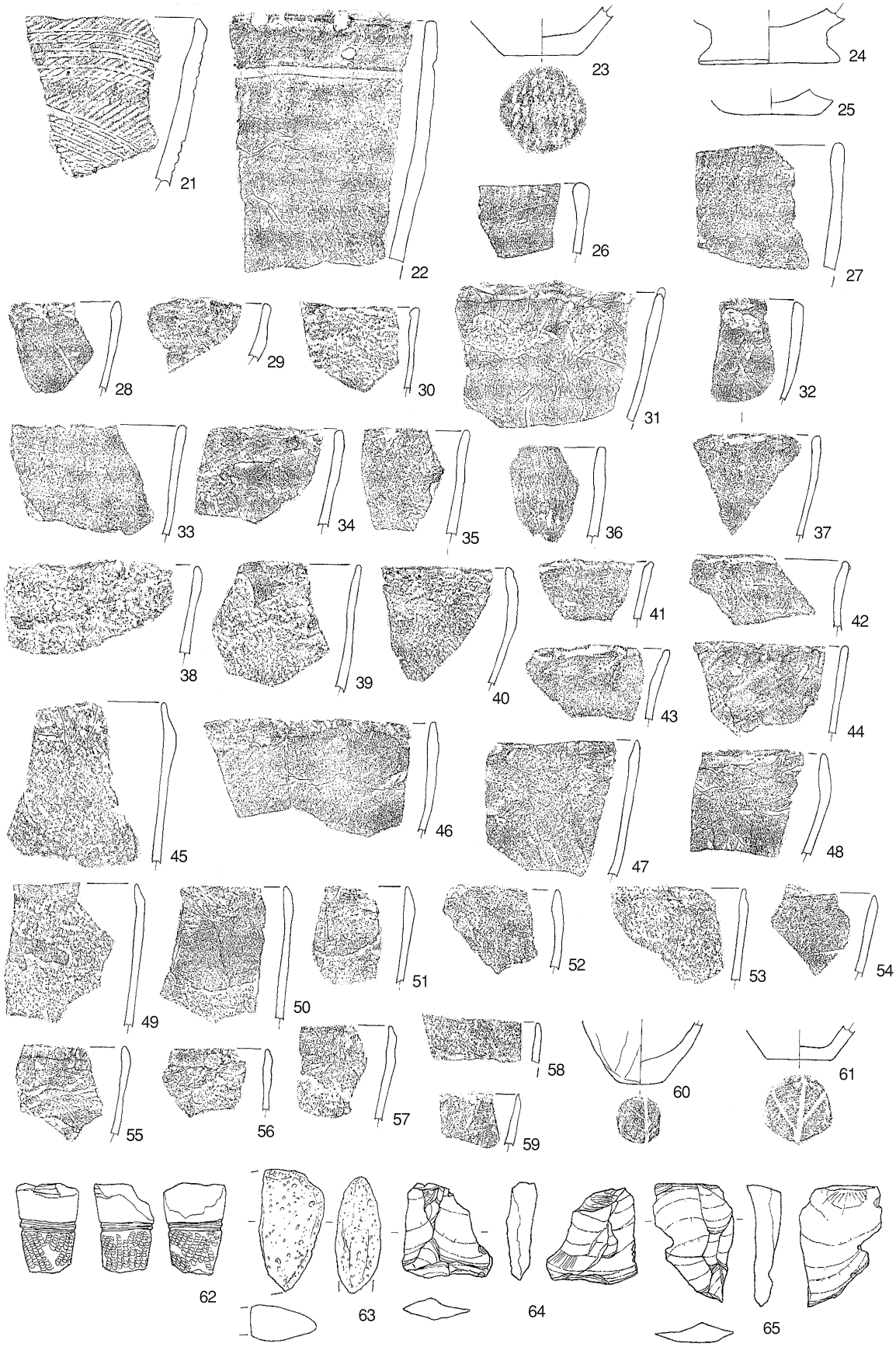
SK88A(1～29)

0 10cm
(1/3)

第161図　土坑SK87, 88A出土遺物



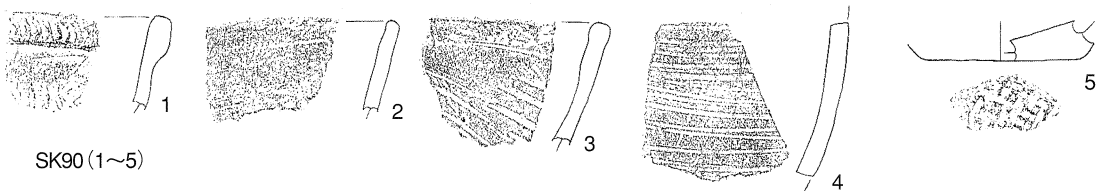
第162図　土坑SK89出土遺物(1)



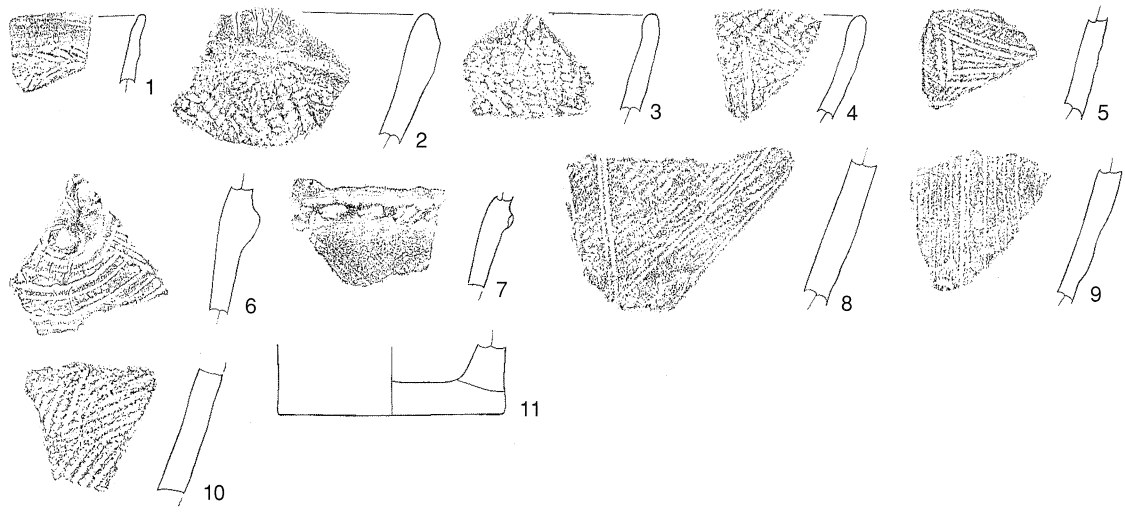
SK89(2) (21～65)

0 10cm
(1/3)

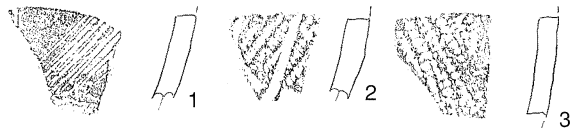
第163図　土坑SK89出土遺物(2)



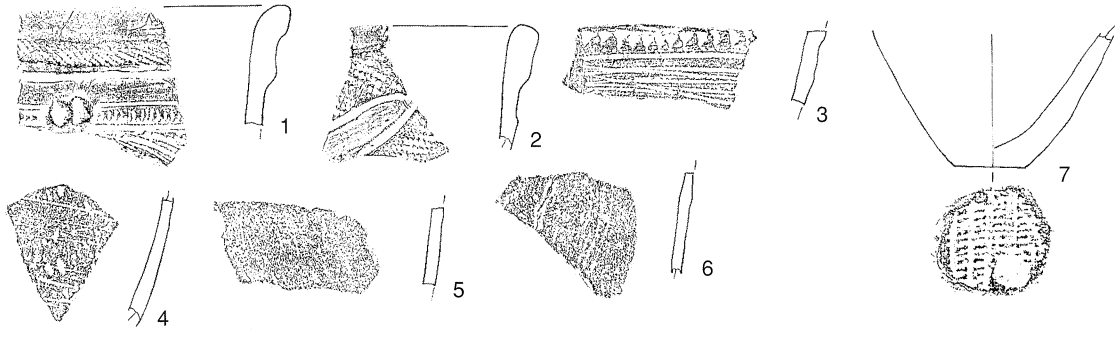
SK90（1～5）



SK91（1～11）

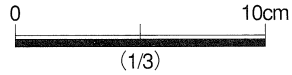


SK92（1～3）

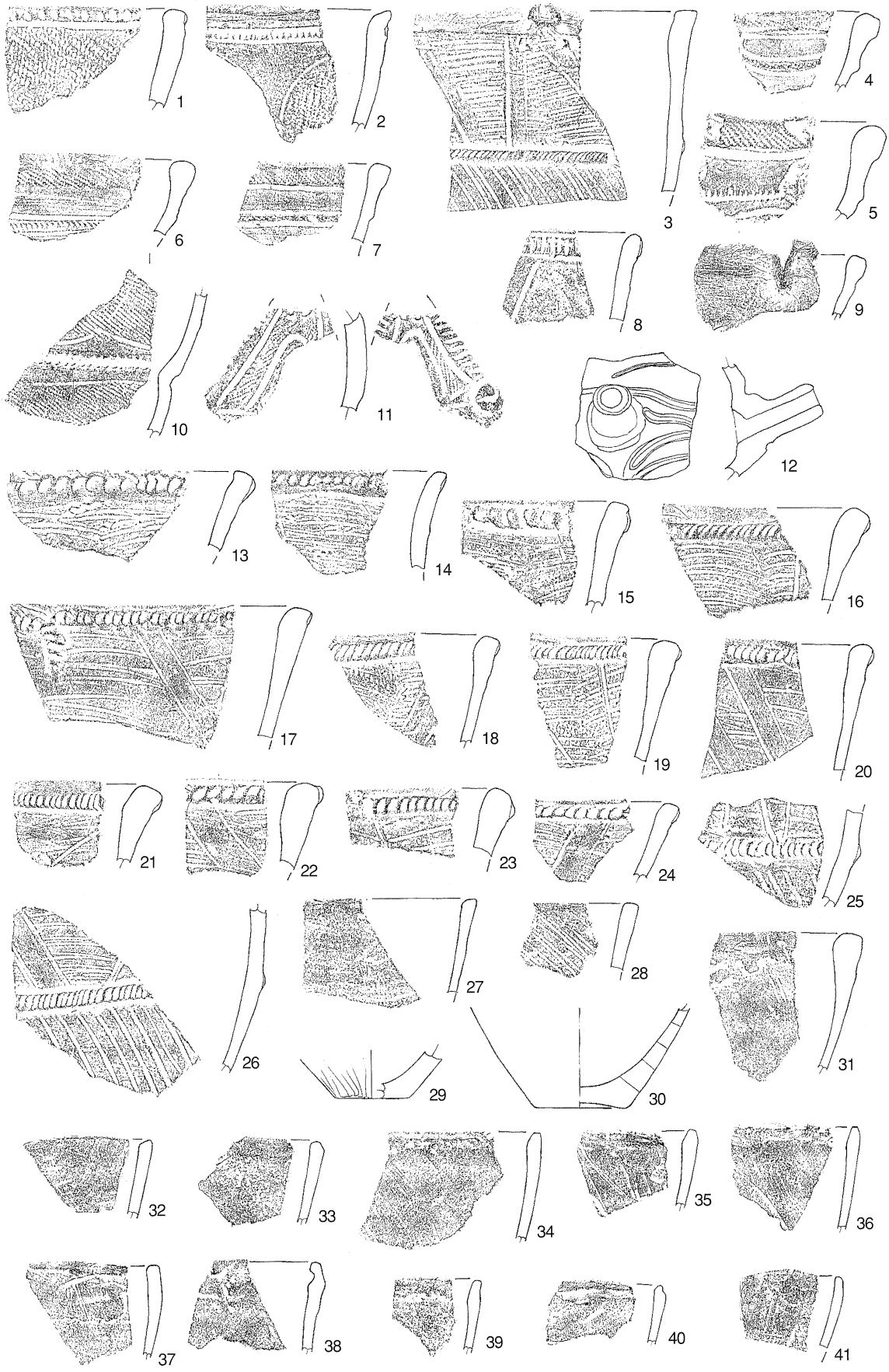


SK93（1～7）

SK96（1・2）



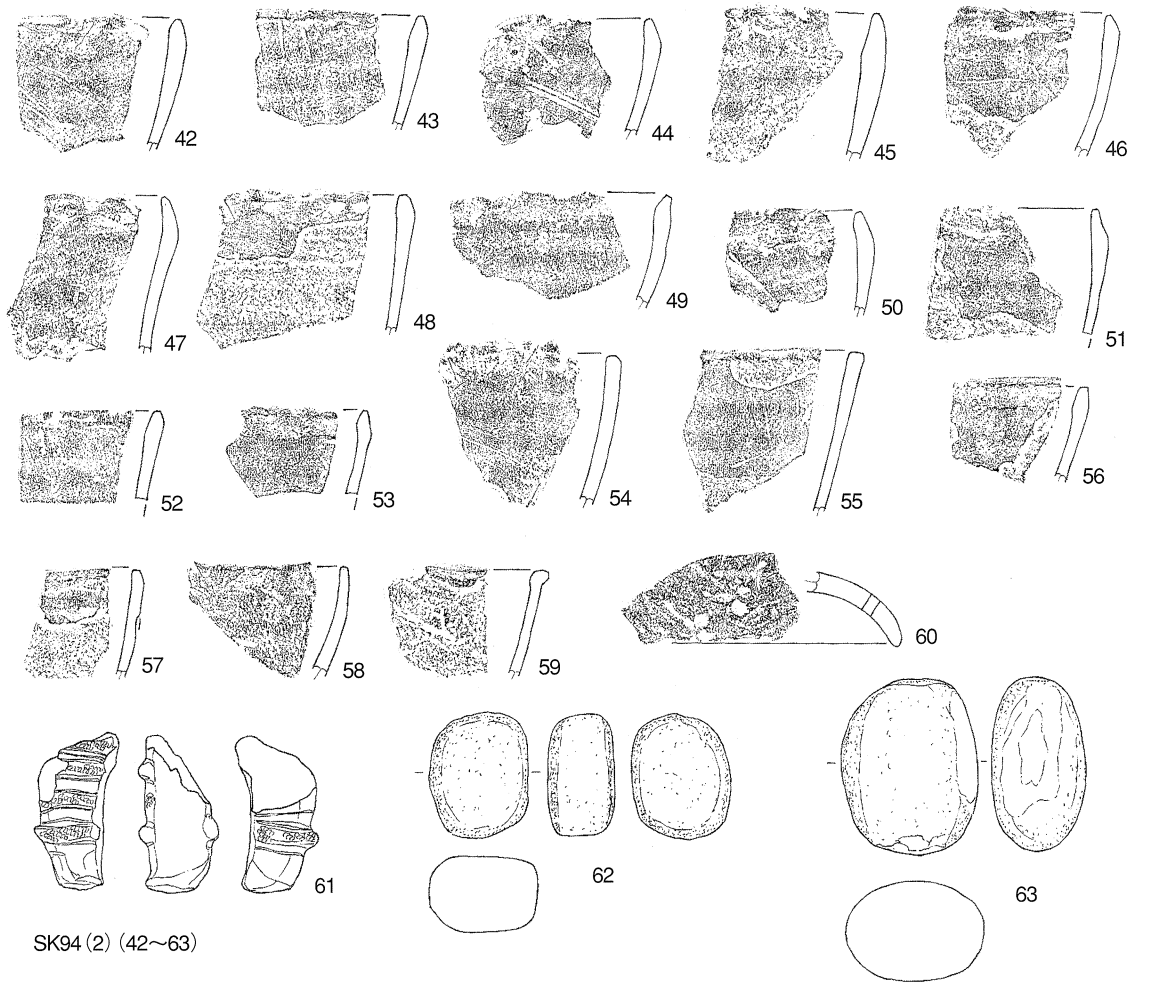
第164図　土坑SK90, 91, 92, 93, 96出土遺物



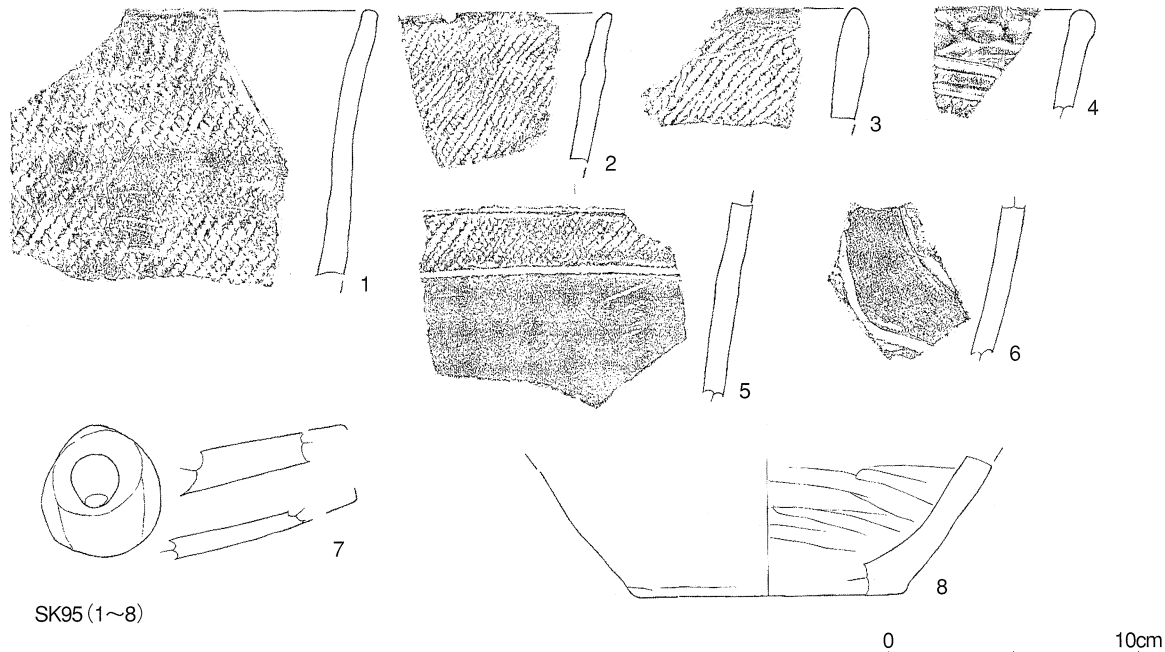
SK94 (1) (1～41)

0 10cm
(1/3)

第165図　土坑SK94出土遺物(1)



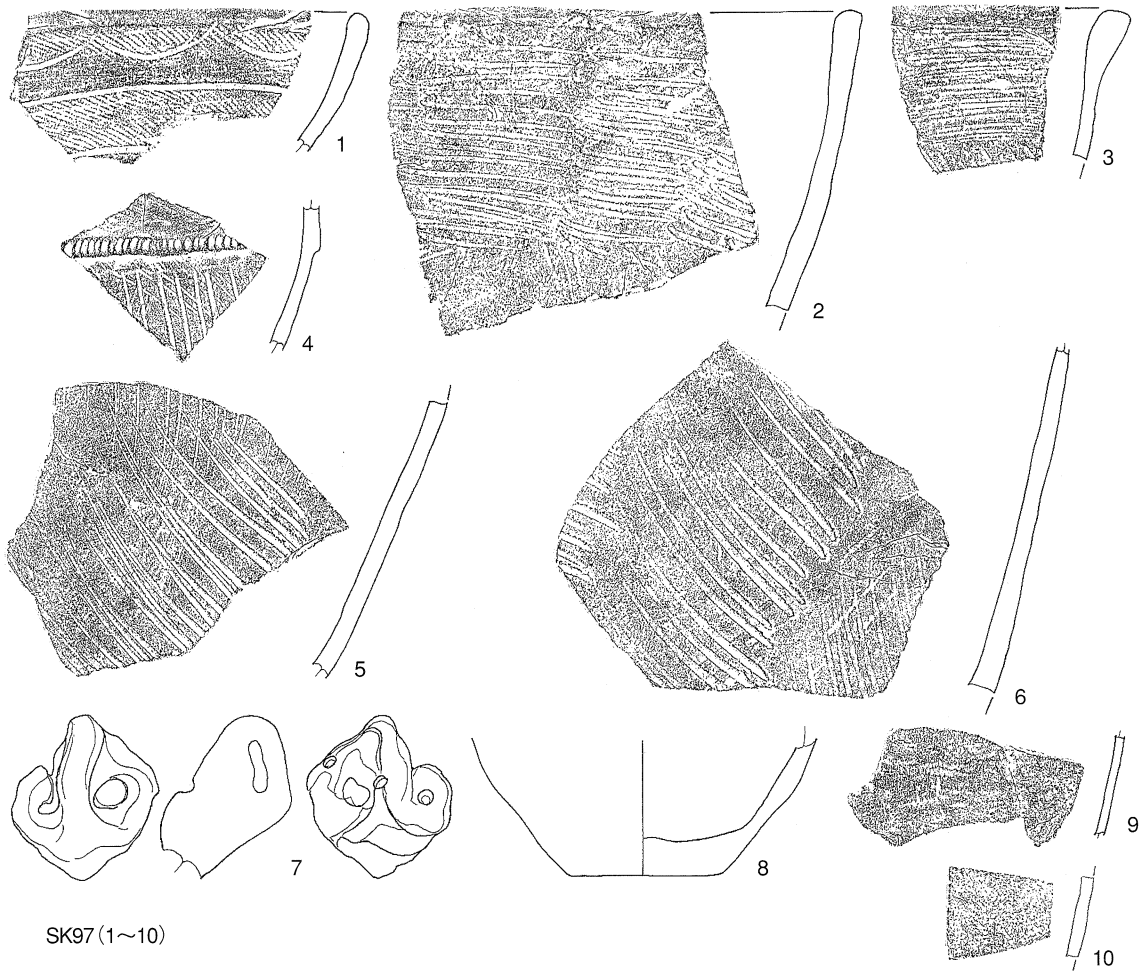
SK94(2)(42～63)

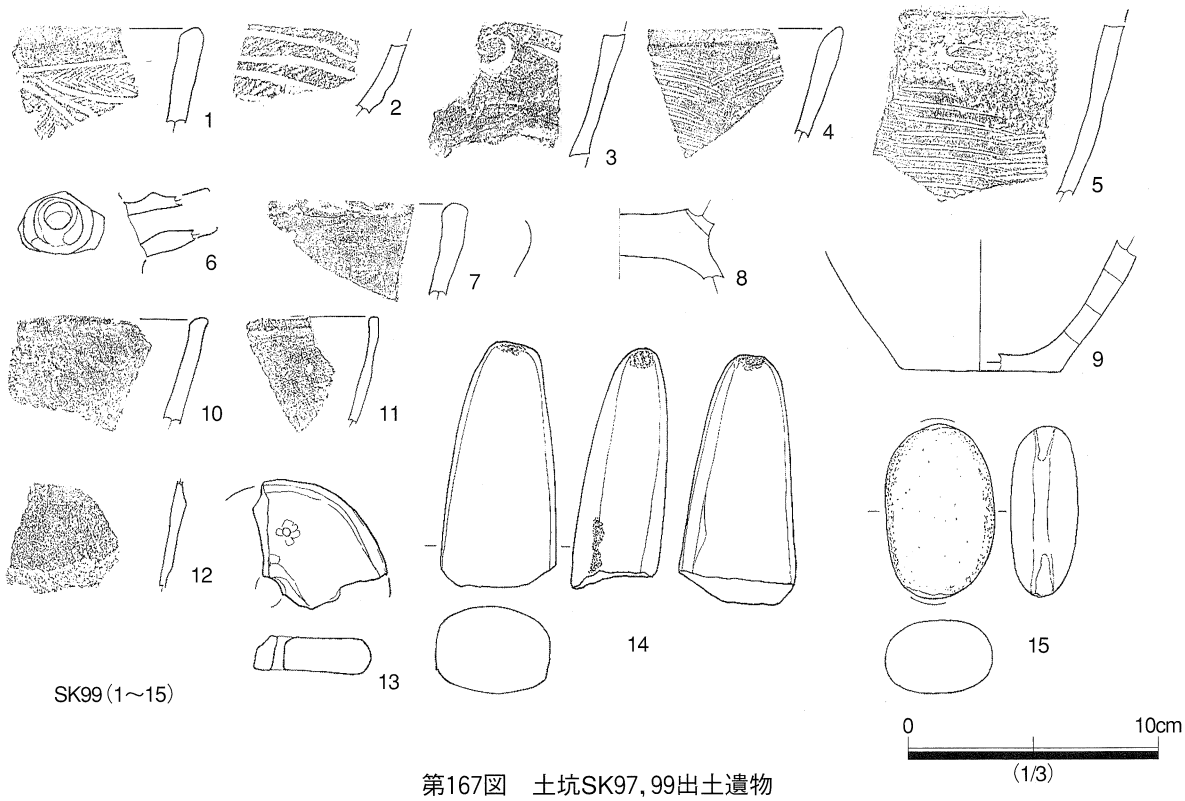


SK95(1～8)

0 10cm
(1/3)

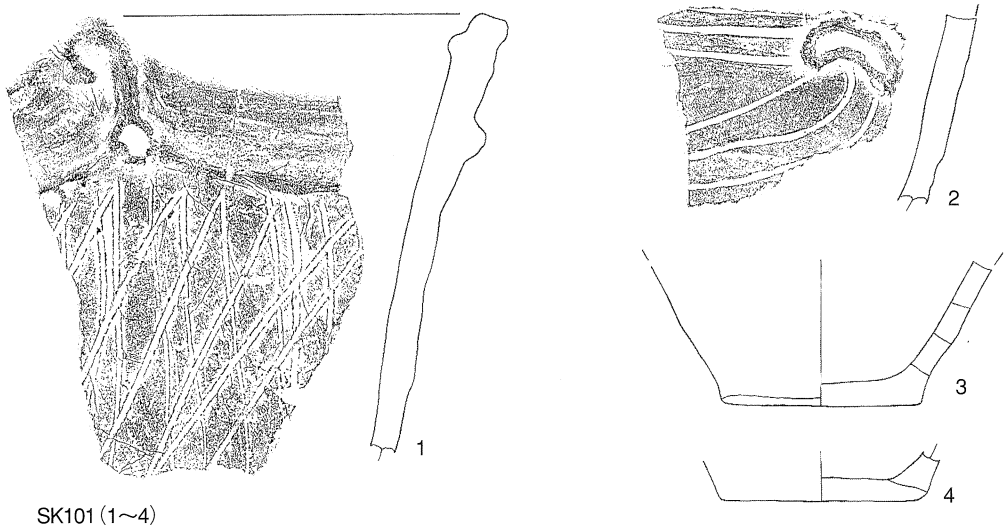
第166図　土坑SK94(2),95出土遺物





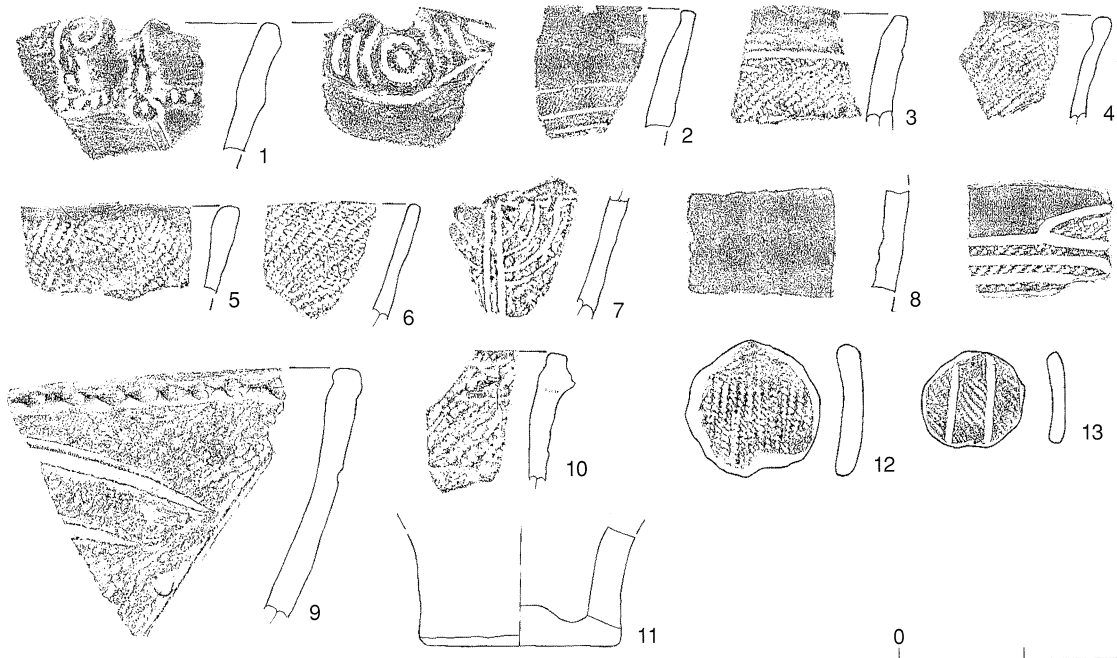
第167図　土坑SK97,99出土遺物

SK100 (1)



SK101 (1～4)

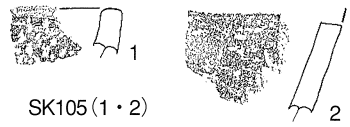
SK102 (1～3)



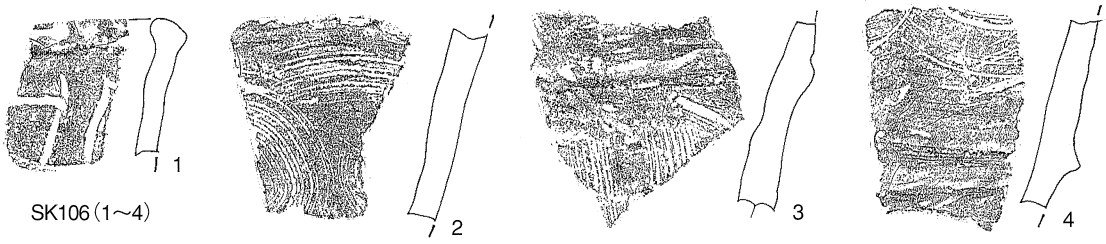
SK104 (1～13)

0 10cm
(1/3)

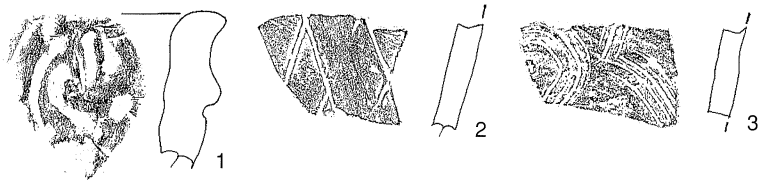
第168図　土坑SK100, 101, 102, 104出土遺物



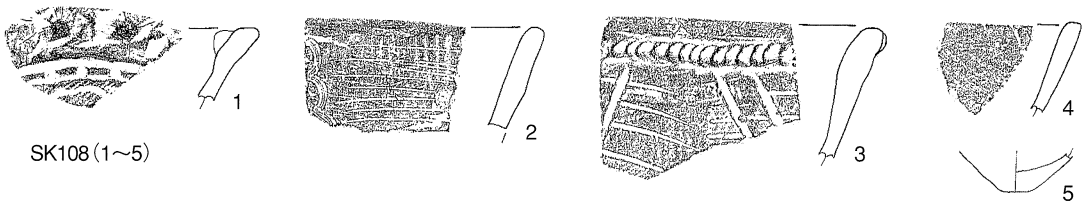
SK105(1・2)



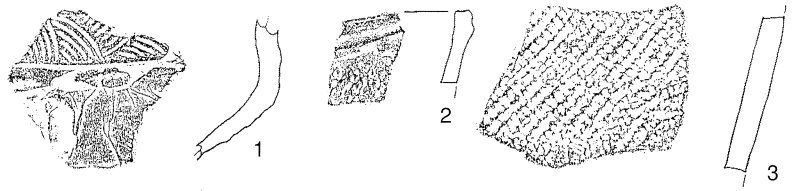
SK106(1～4)



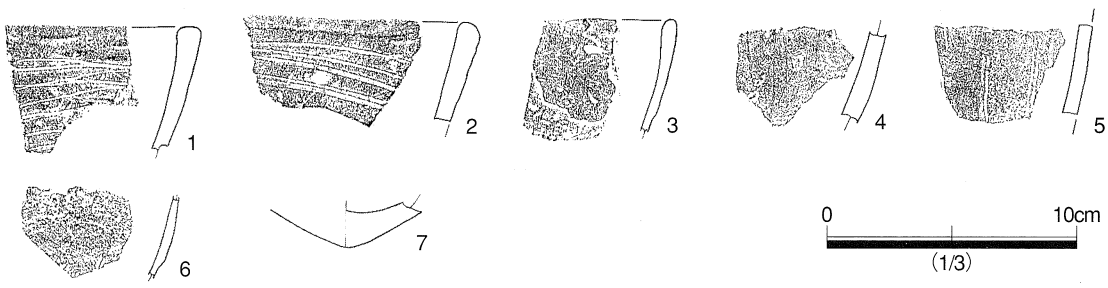
SK107(1～3)



SK108(1～5)

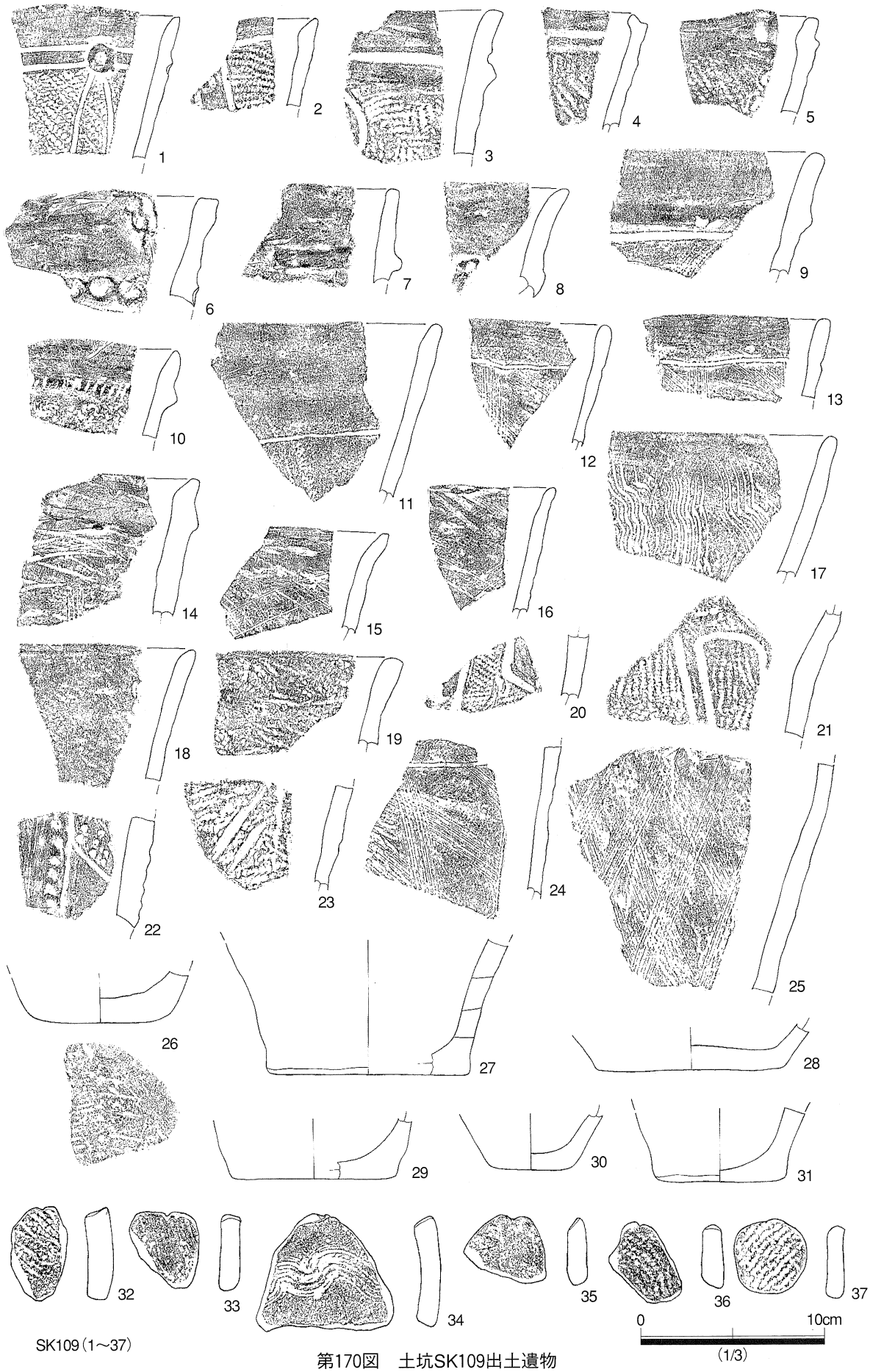


SK110(1～3)



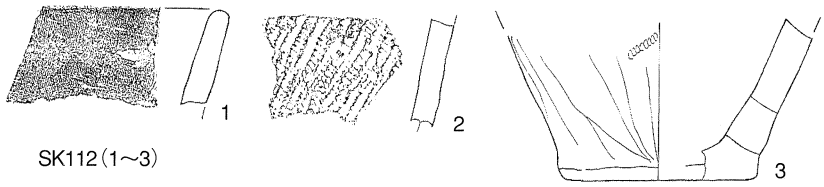
SK111(1～7)

第169図　土坑SK105, 106, 107, 108, 110, 111出土遺物

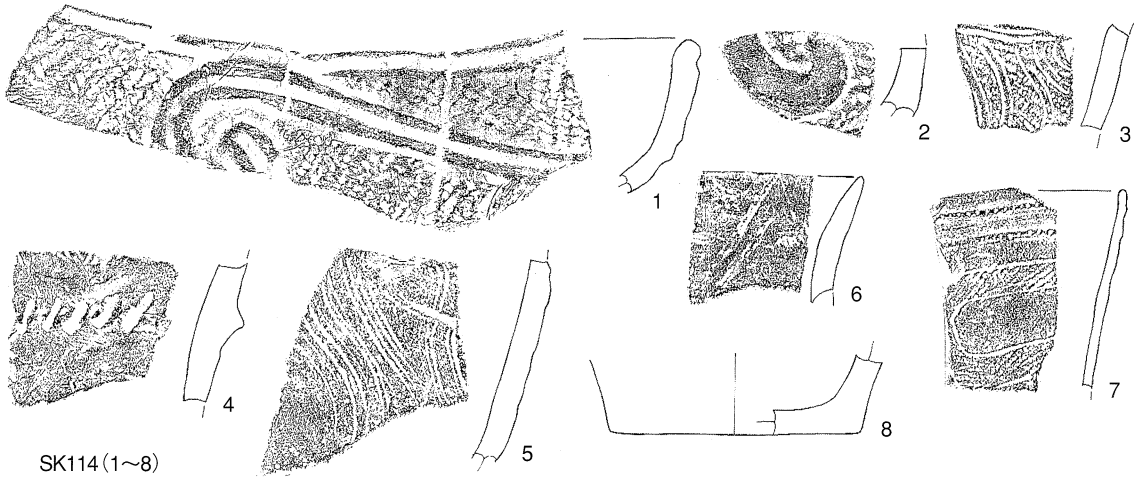


SK109(1～37)

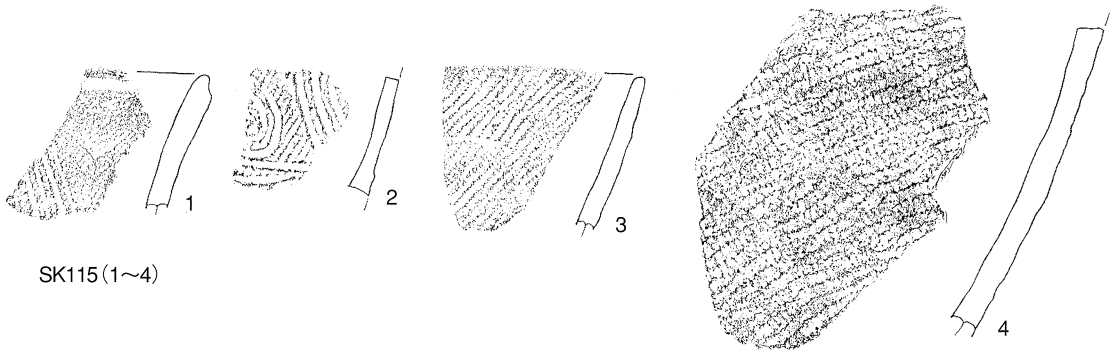
第170図　土坑SK109出土遺物



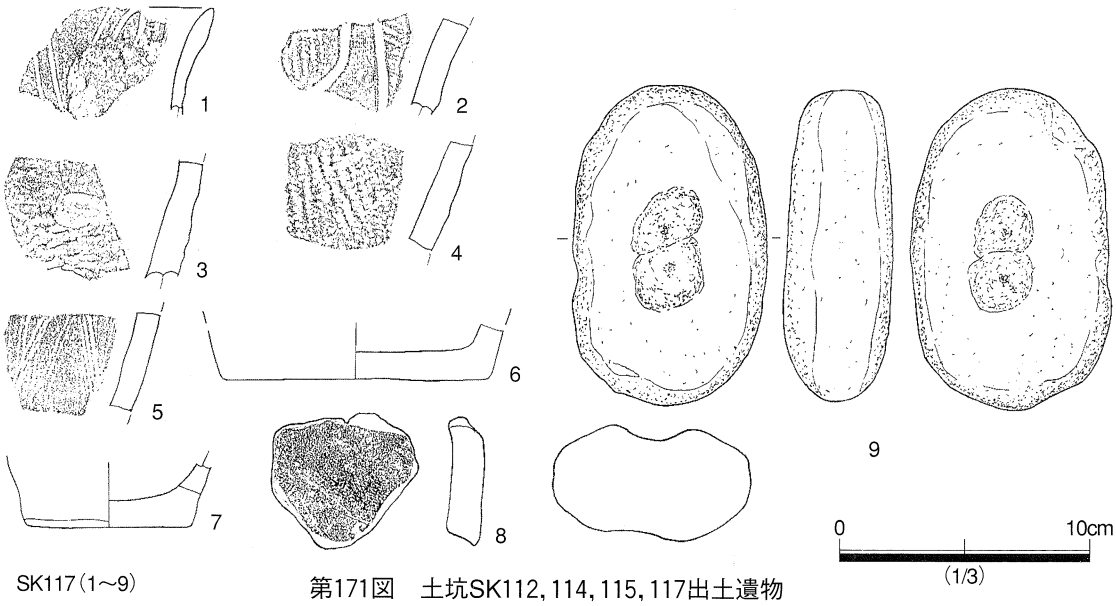
SK112(1～3)



SK114(1～8)

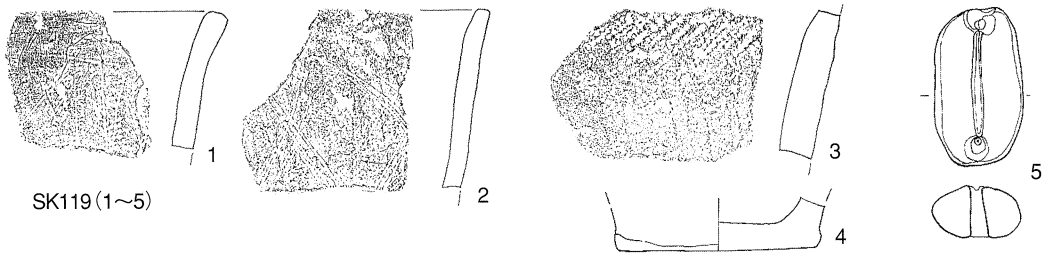


SK115(1～4)

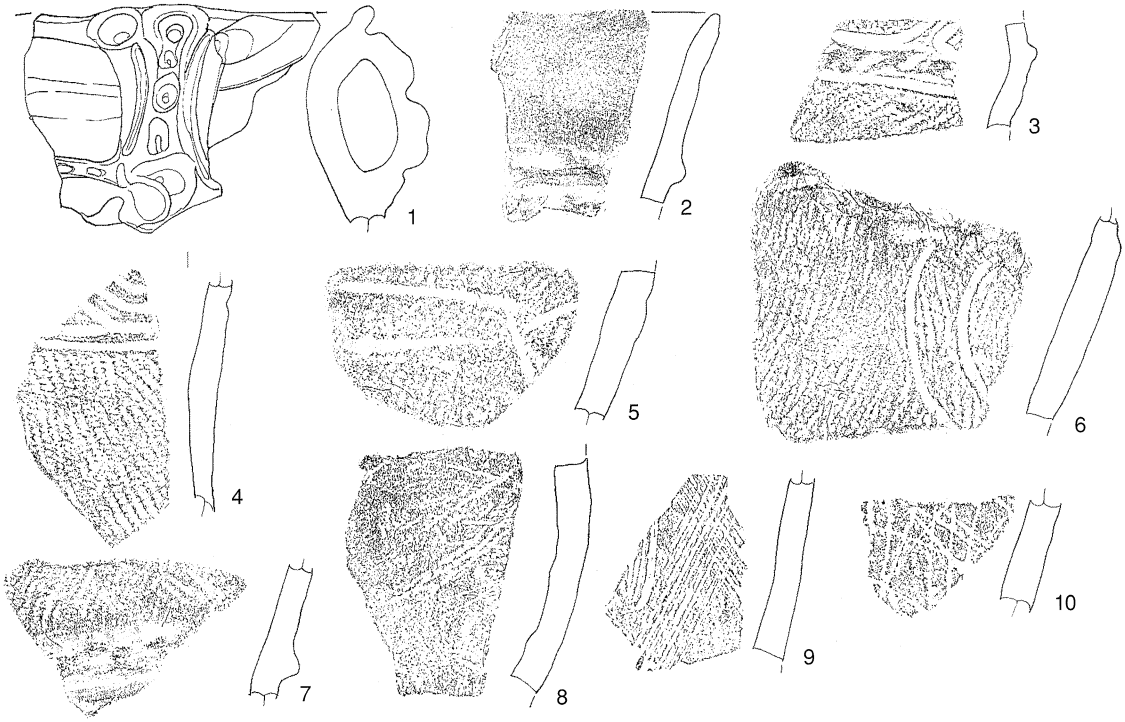


SK117(1～9)

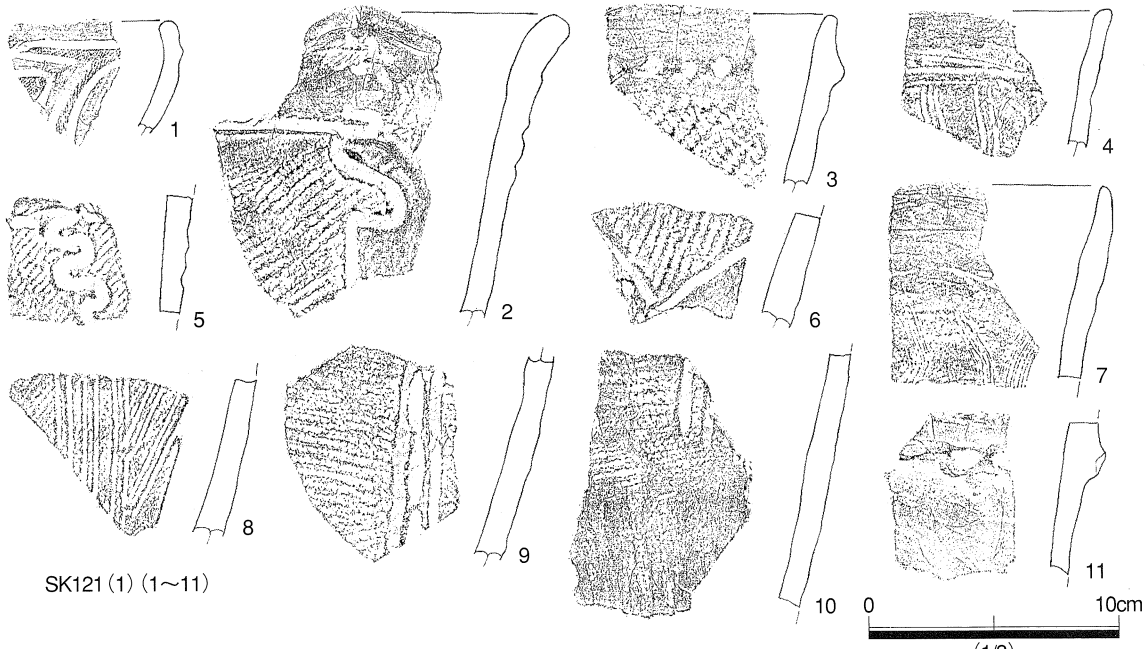
第171図　土坑SK112, 114, 115, 117出土遺物



SK119(1～5)

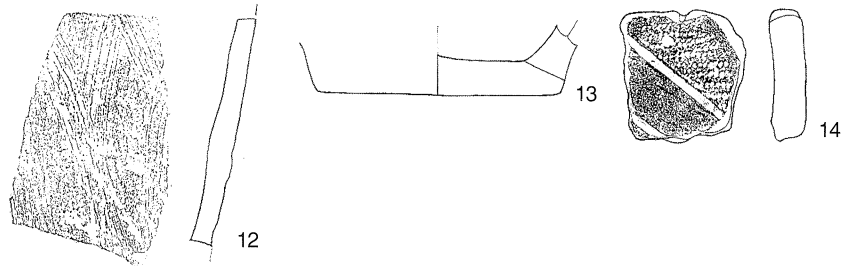


SK120(1～10)

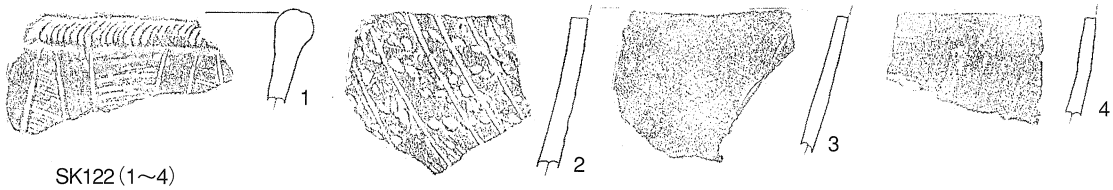


SK121(1)(1～11)

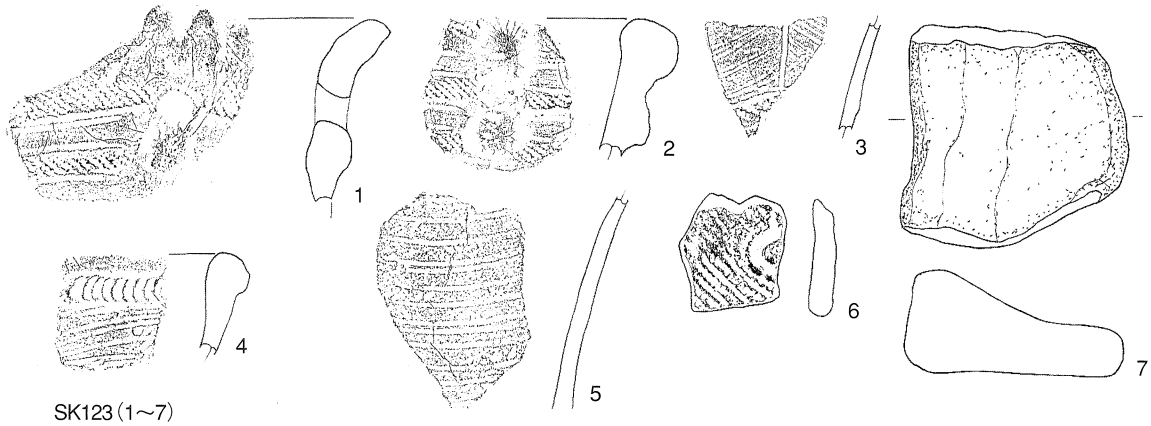
第172図　土坑SK119, 120, 121出土遺物(1)



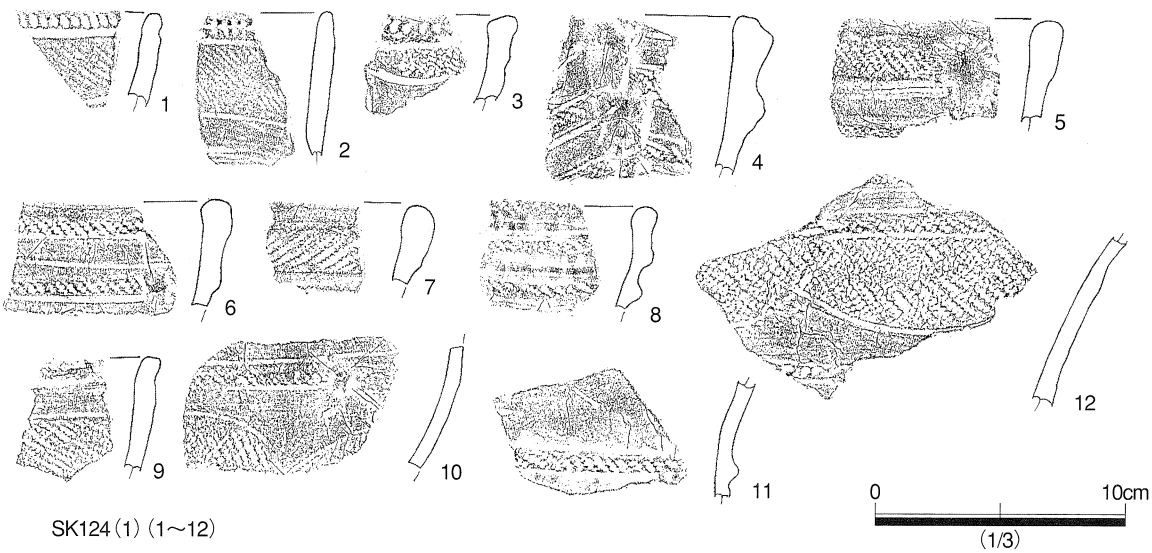
SK121 (2) (12～14)



SK122 (1～4)

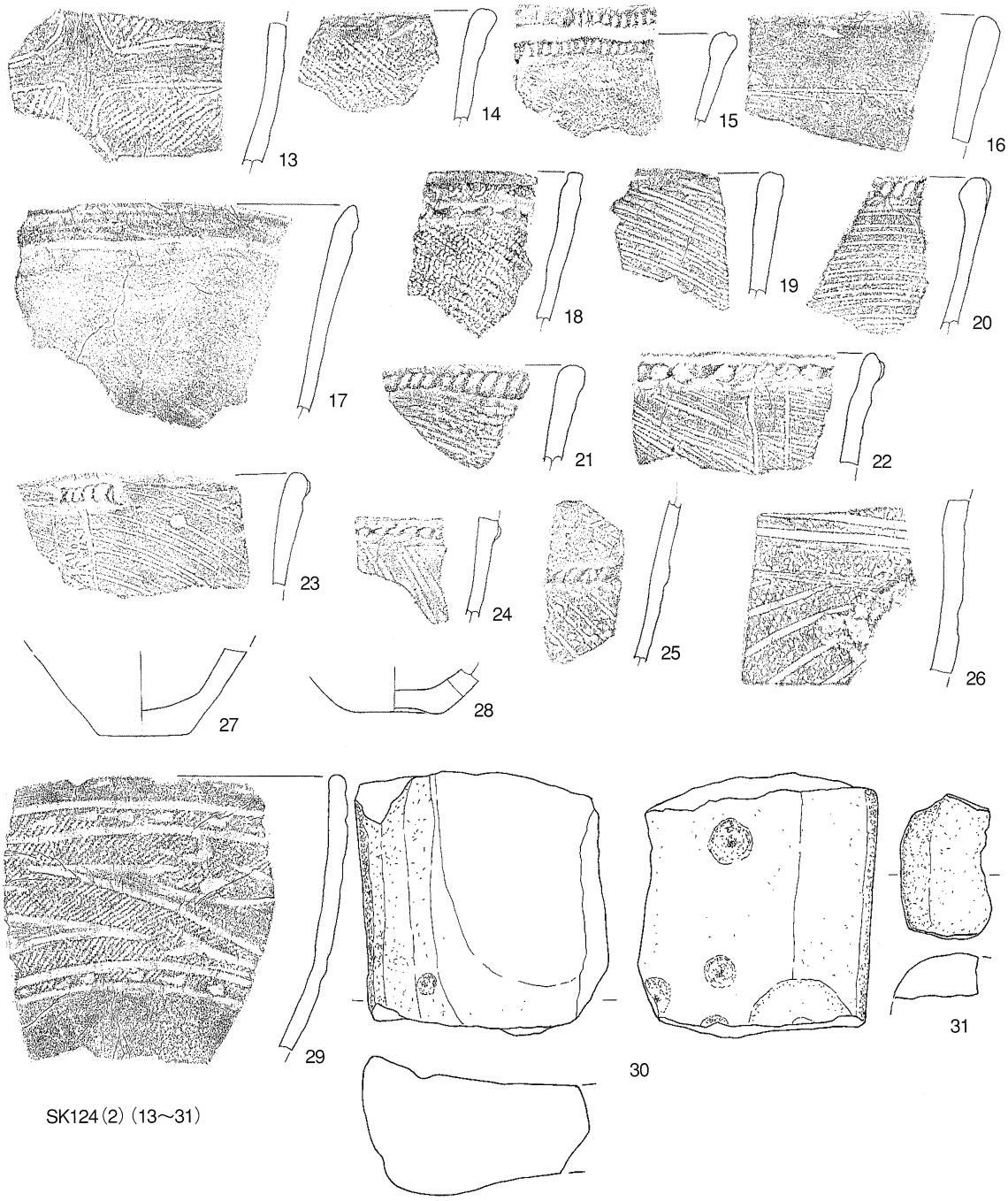


SK123 (1～7)

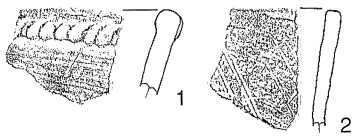


SK124 (1) (1～12)

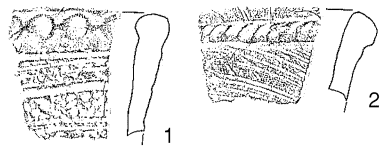
第173図　土坑SK121 (2), 122, 123, 124 (1) 出土遺物



SK124(2)(13～31)

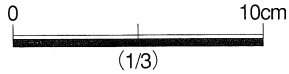


SK127(1・2)

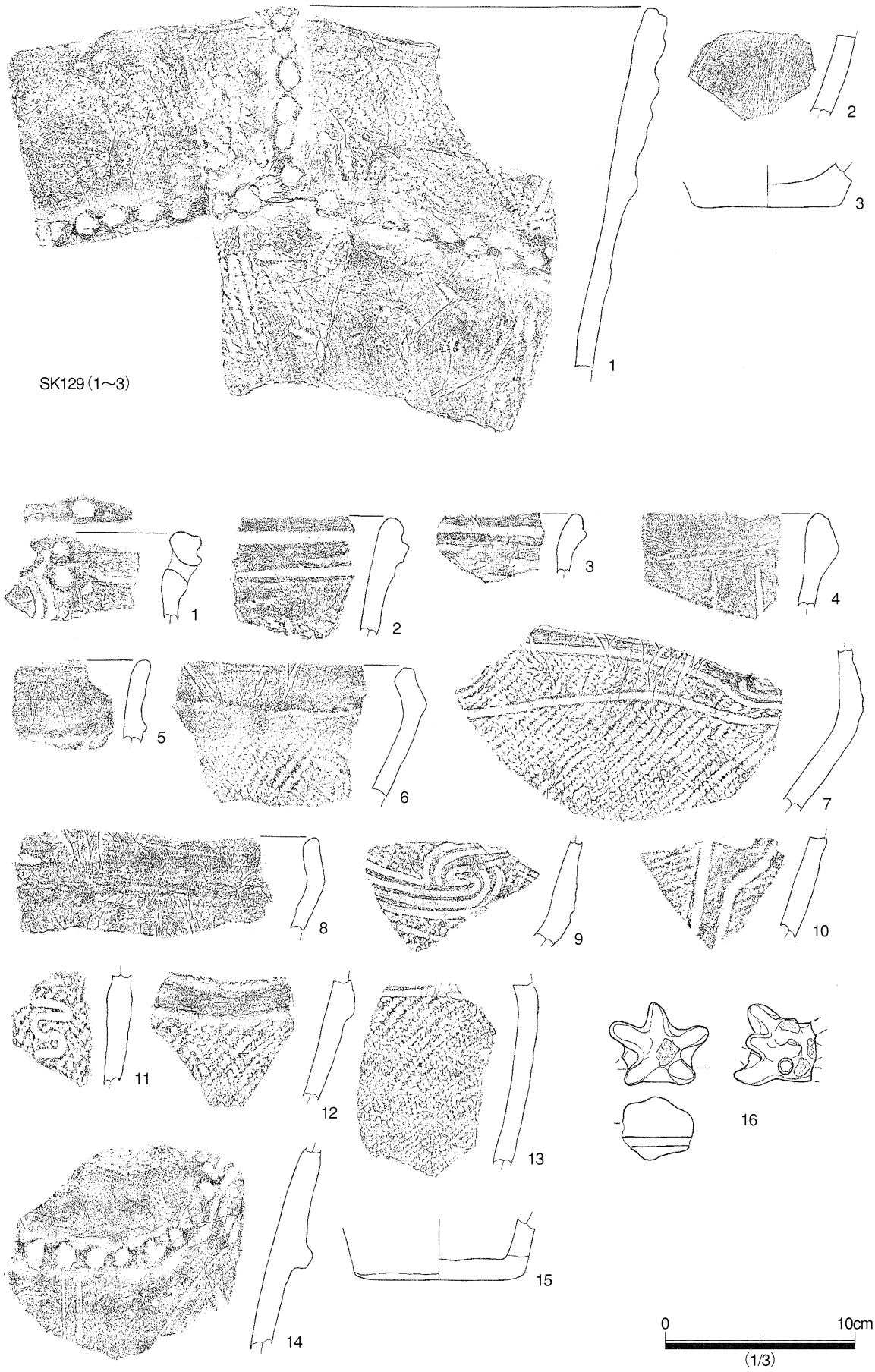


SK130(1・2)

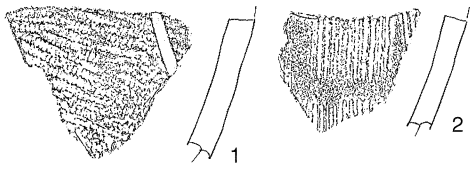
SK131(1)



第174図　土坑SK124(2),127,130,131出土遺物

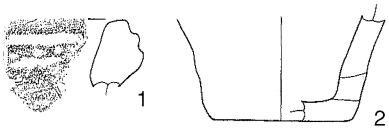


第175図　土坑SK129, 132出土遺物



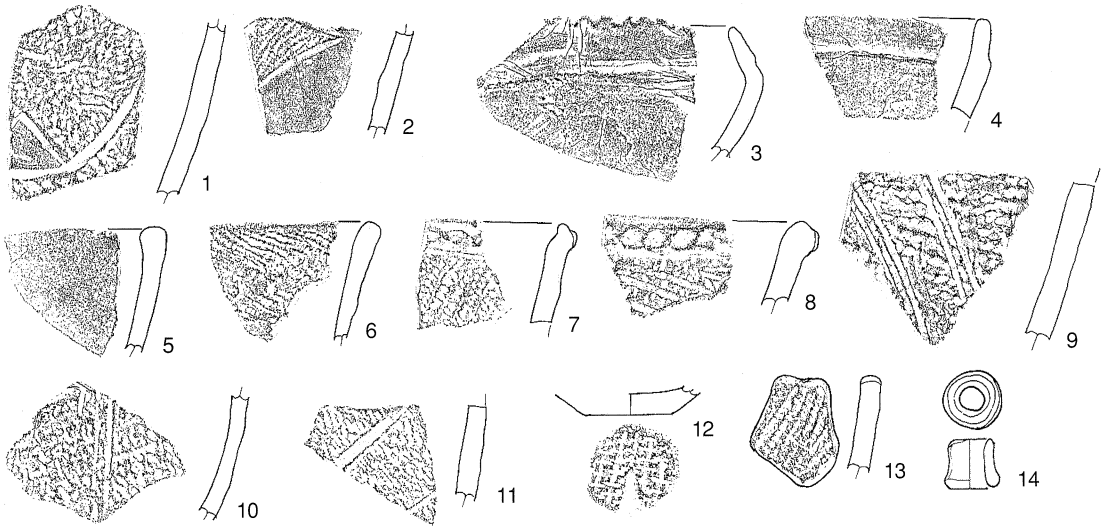
SK133(1・2)

SK134(1)

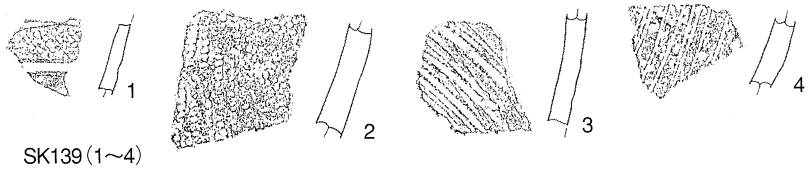


SK135(1・2)

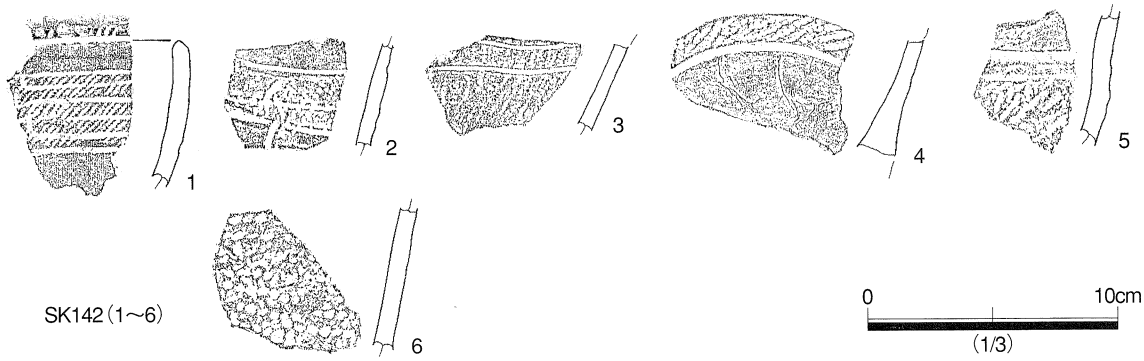
SK137(1)



SK136(1～14)



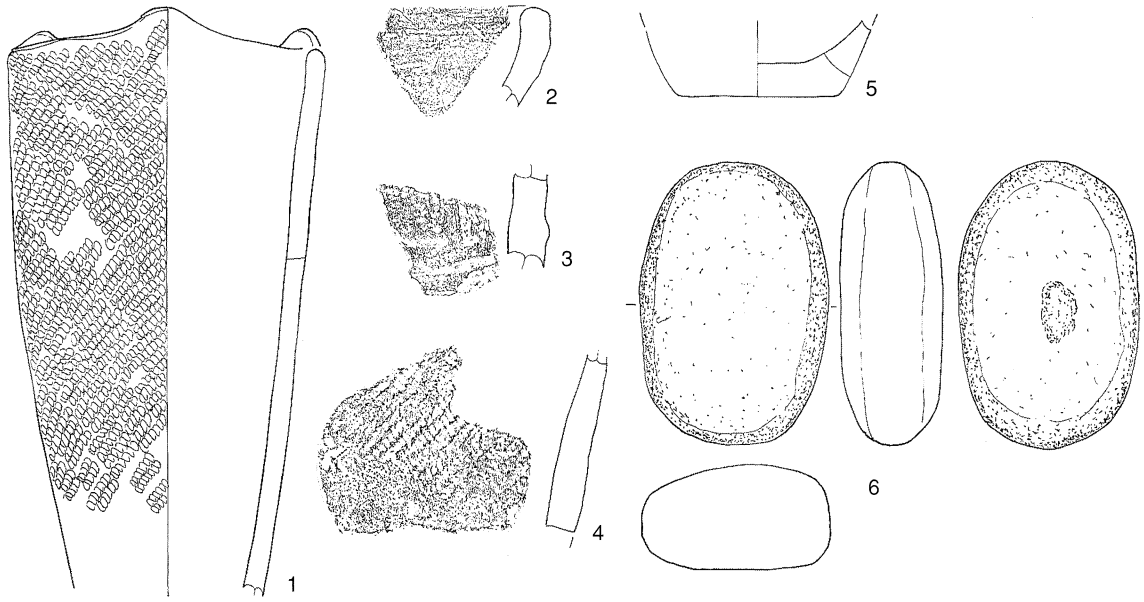
SK139(1～4)



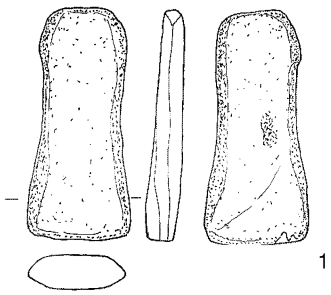
SK142(1～6)

0 10cm
(1/3)

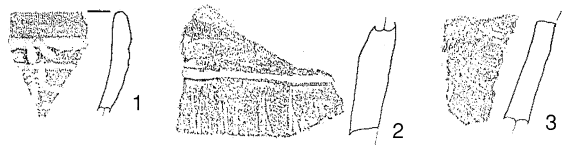
第176図　土坑SK133, 134, 135, 136, 137, 139, 142出土遺物



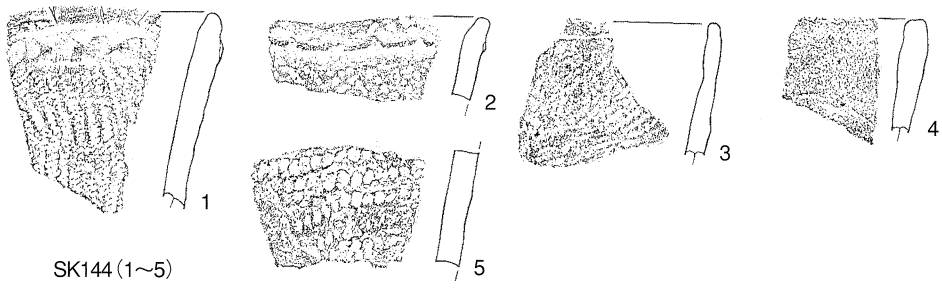
SK141 (1～6)



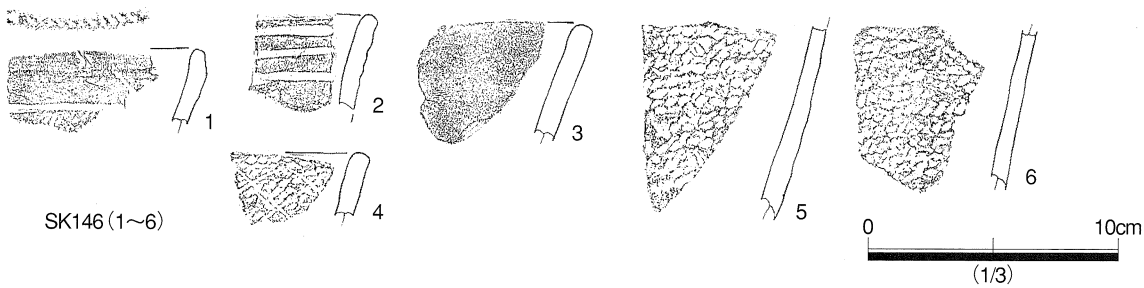
SK138 (1)



SK143 (1～3)

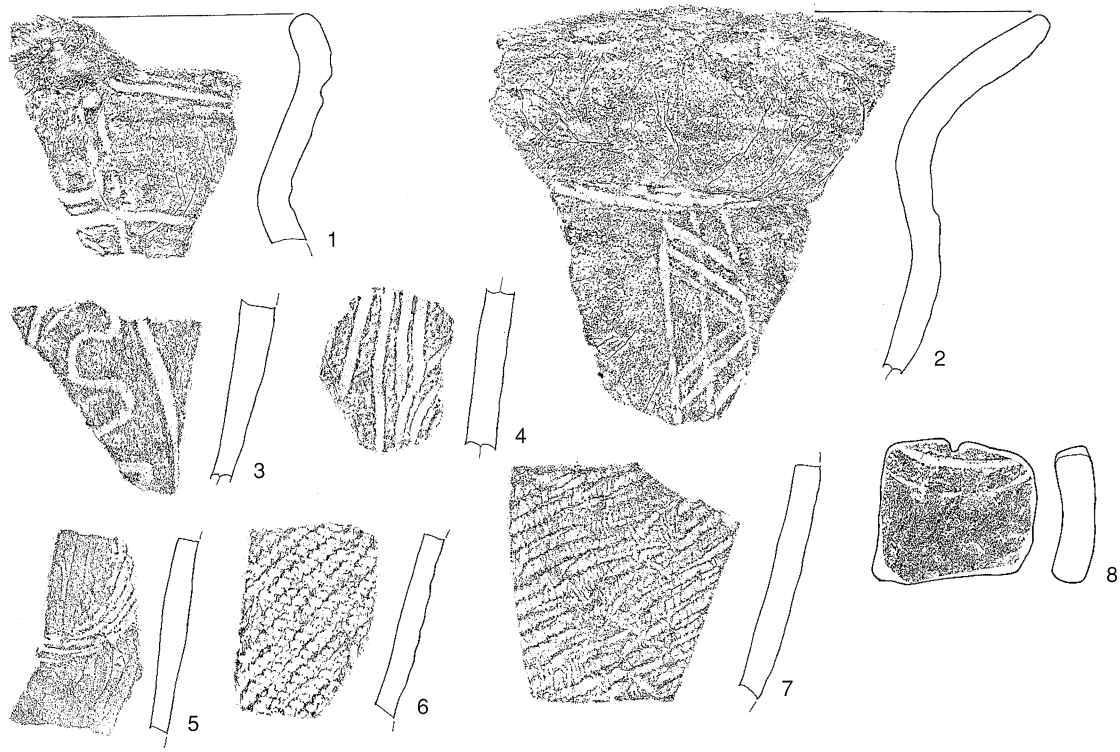


SK144 (1～5)

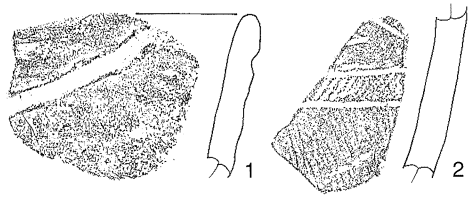


SK146 (1～6)

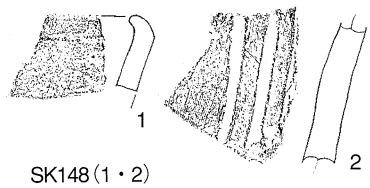
第177図　土坑SK138, 141, 143, 144, 146出土遺物



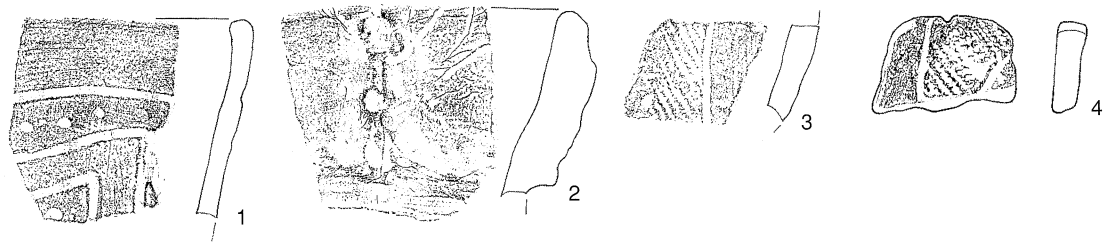
SK145(1～8)



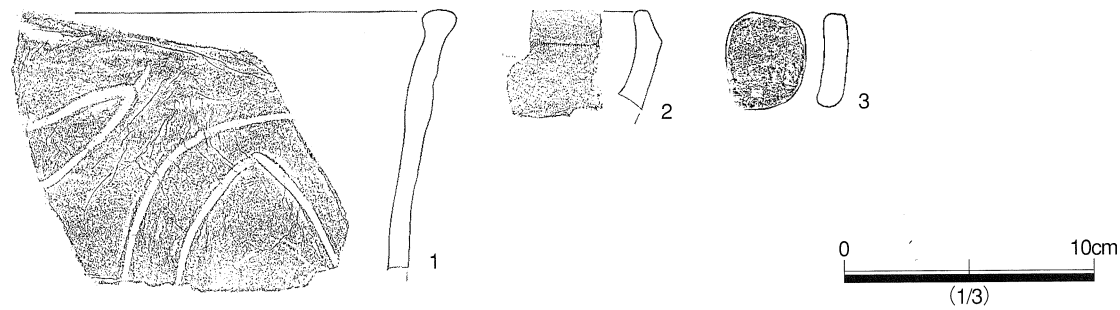
SK147(1・2)



SK148(1・2)

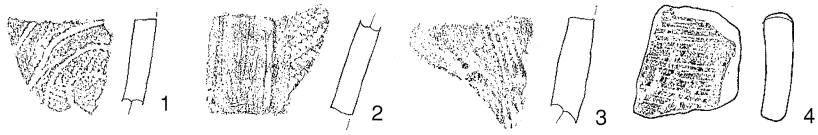


SK149(1～4)

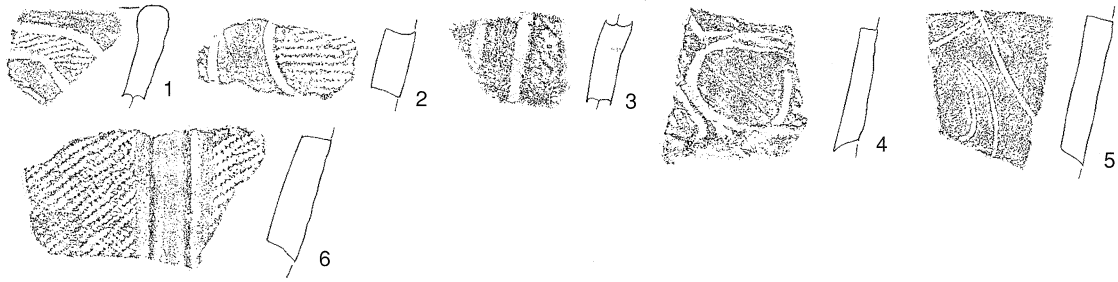


SK150(1～3)

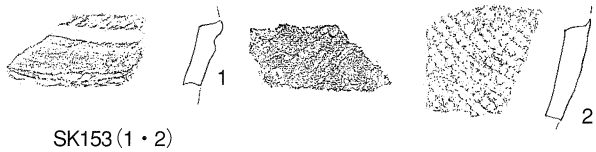
第178図　土坑SK145, 147, 148, 149, 150出土遺物



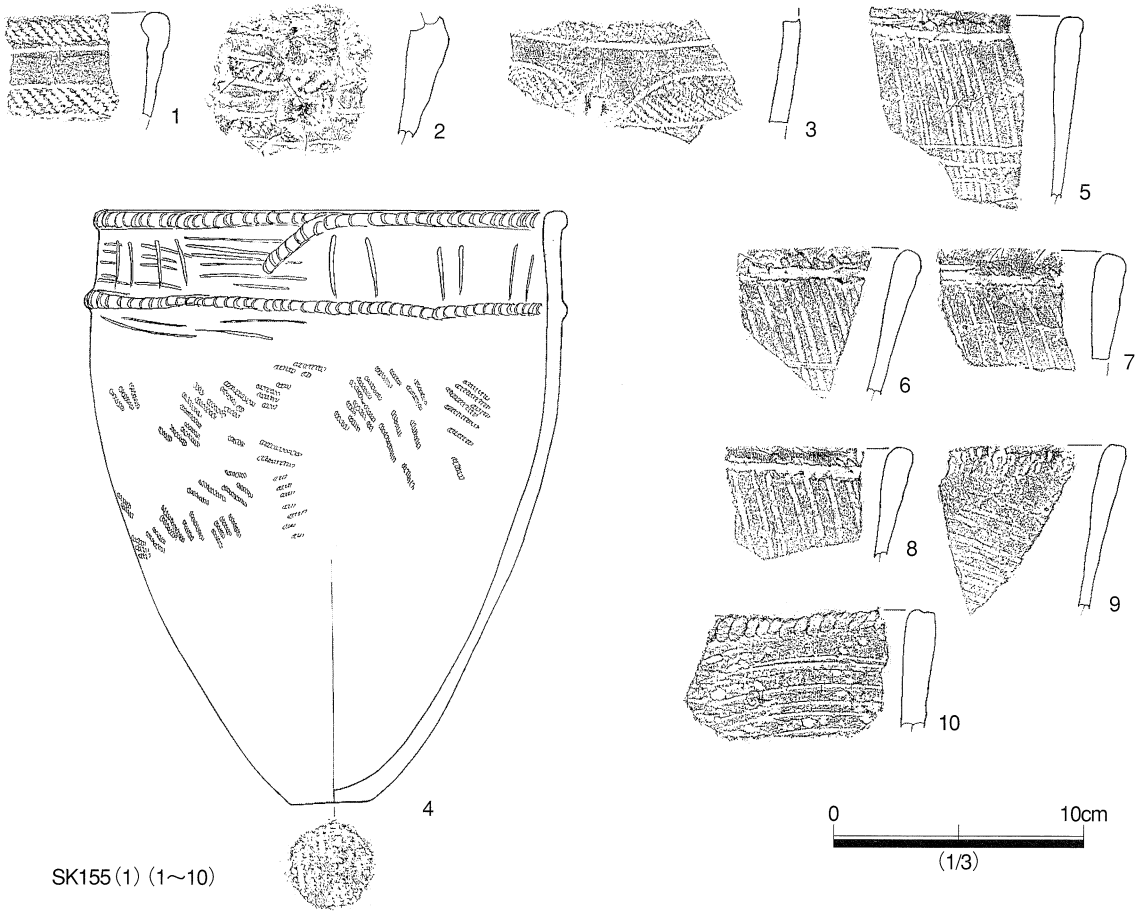
SK151 (1～4)



SK152 (1～6)

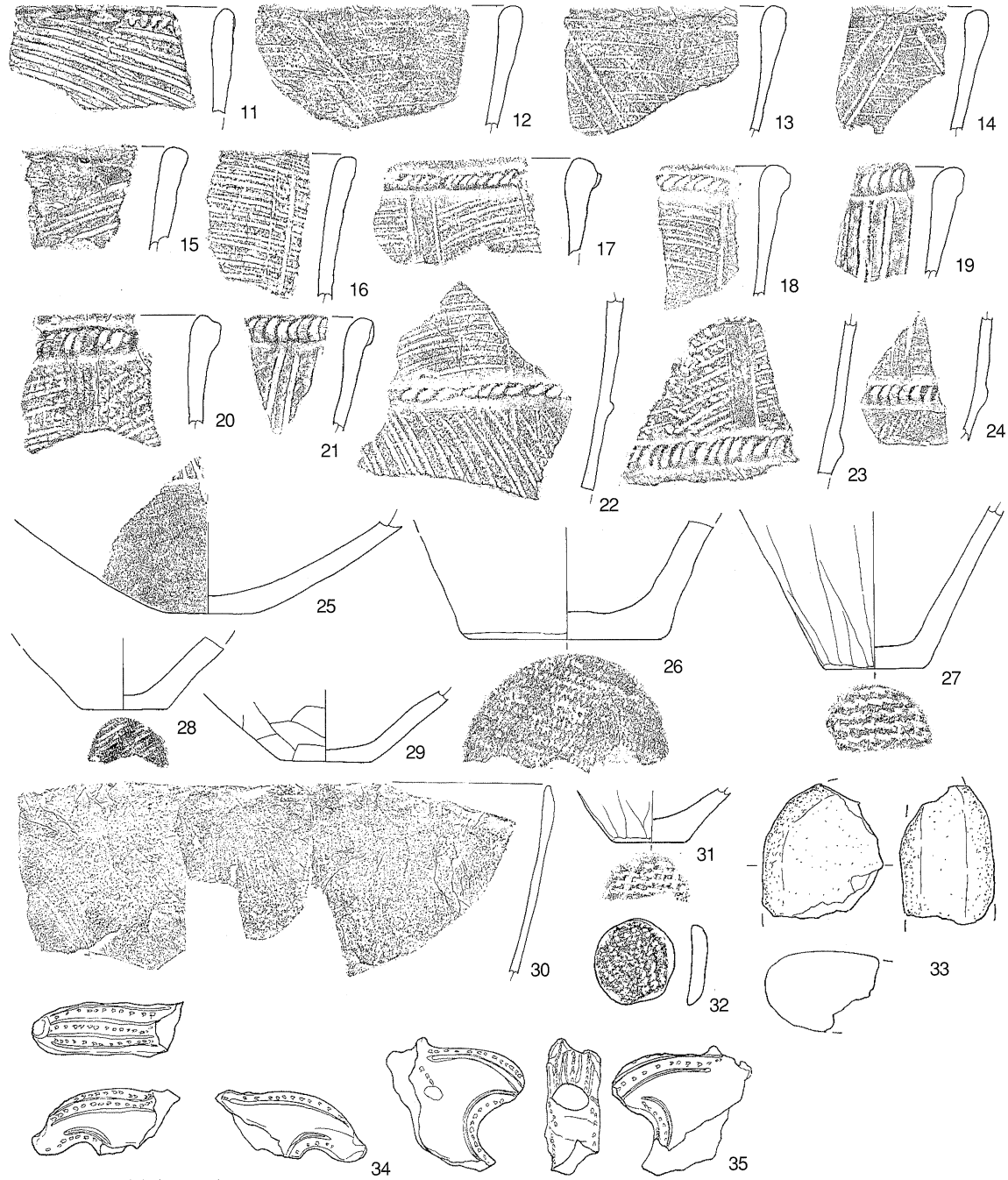


SK153 (1・2)

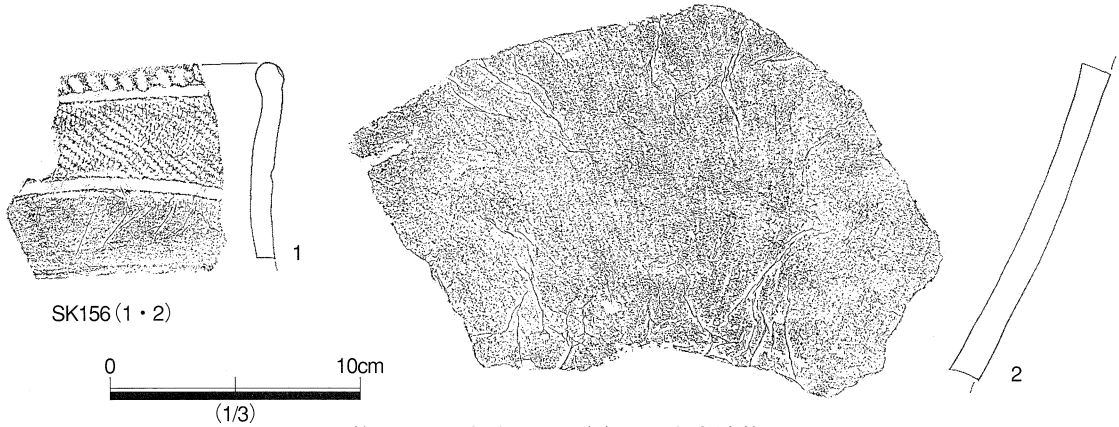


SK155 (1) (1～10)

第179図　土坑SK151, 152, 153, 155 (1) 出土遺物



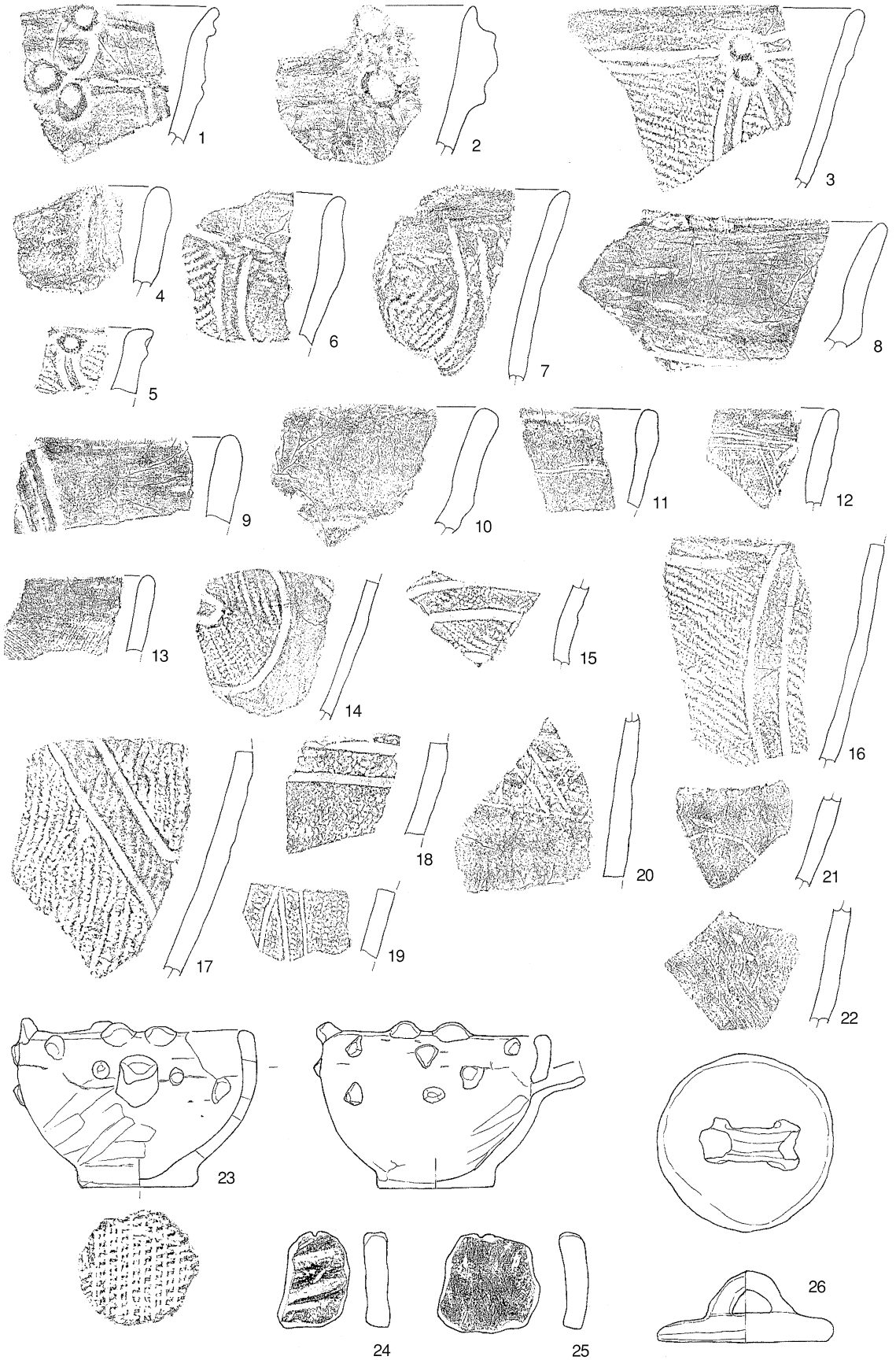
SK155(2)(11～35)



SK156(1・2)

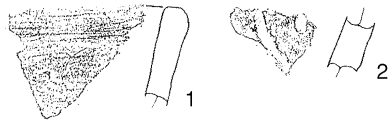
0 10cm
(1/3)

第180図　土坑SK155(2),156出土遺物

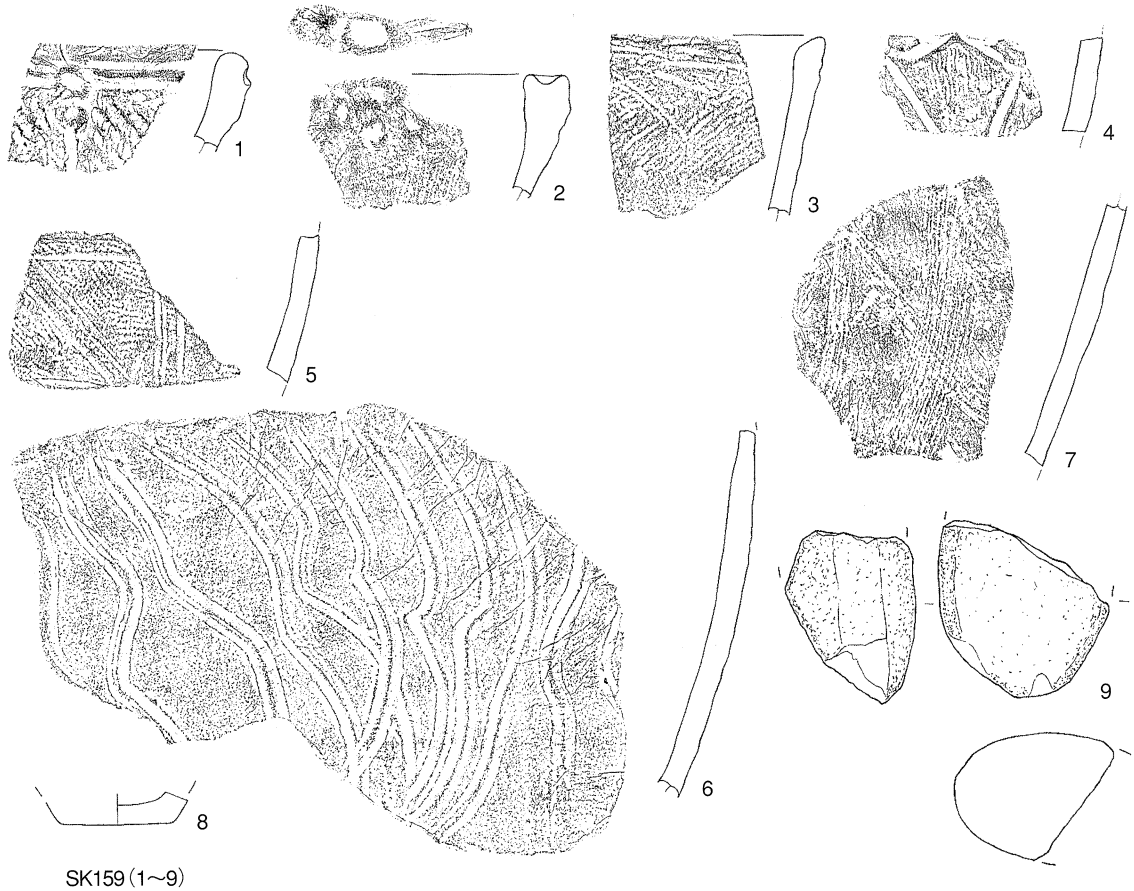


第181図　土坑SK157出土遺物

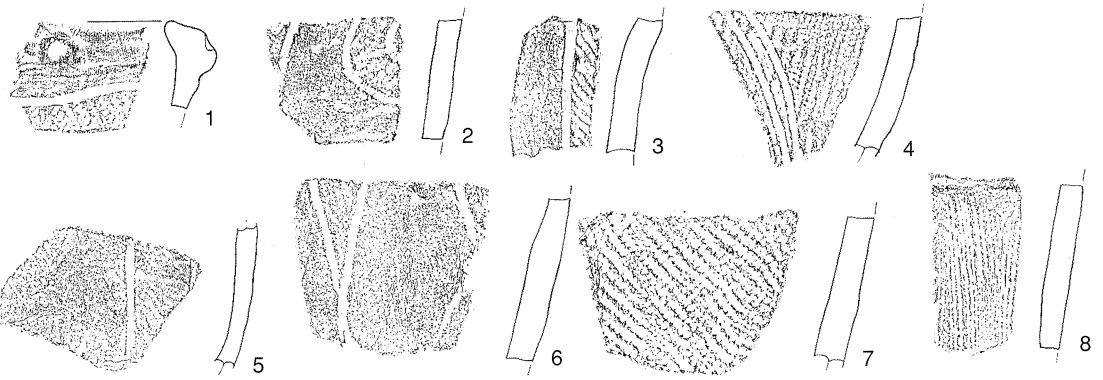
SK158(1)



SK160(1・2)



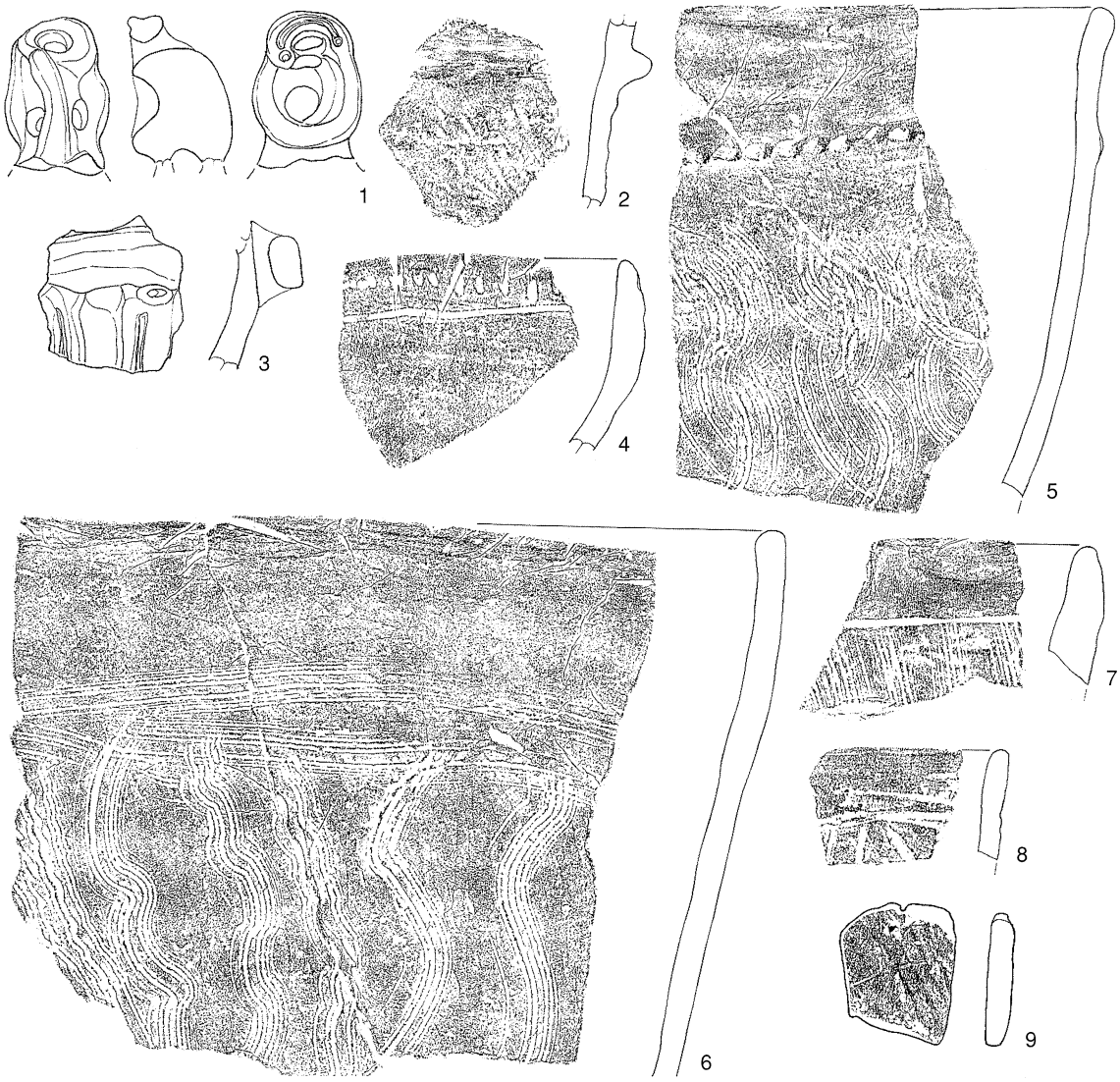
SK159(1～9)



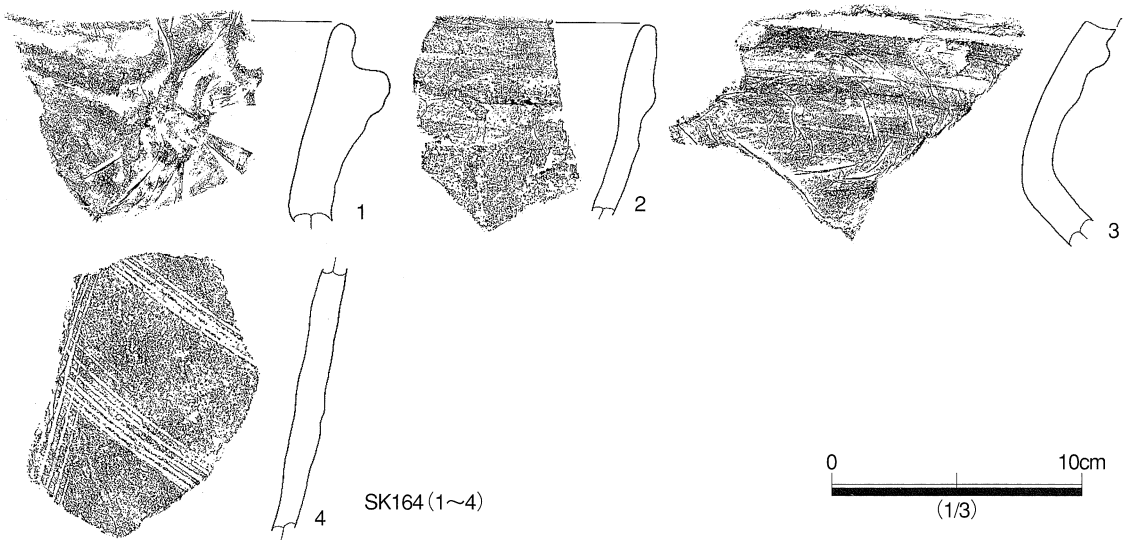
SK161(1～8)

0 10cm
(1/3)

第182図　土坑SK158, 159, 160, 161出土遺物



SK163(1～9)

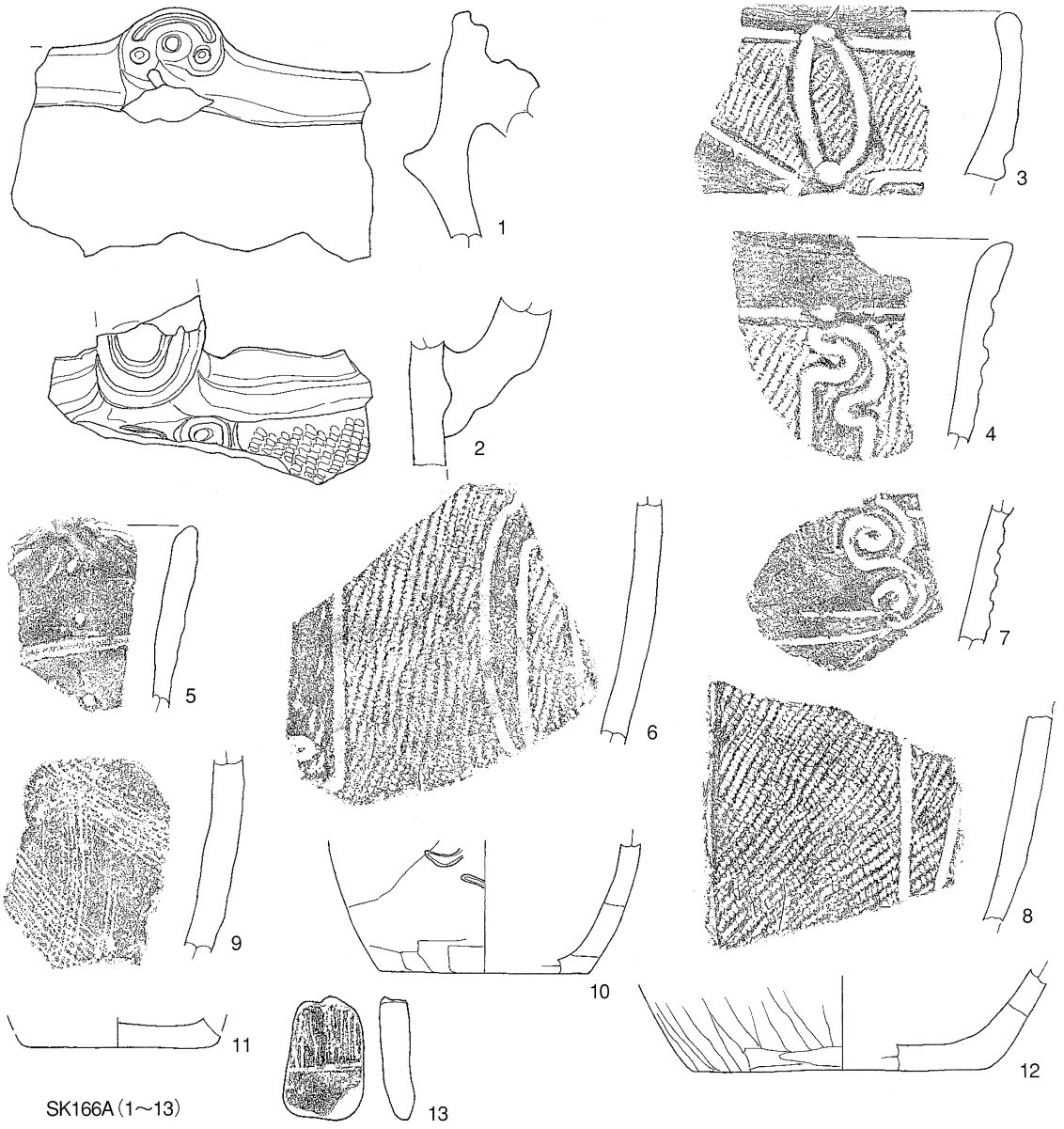


SK164(1～4)

0 10cm
(1/3)

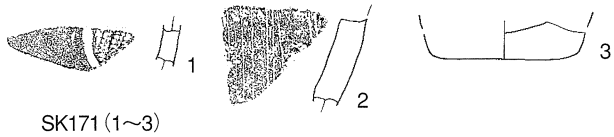
第183図　土坑SK163, 164出土遺物

SK165 (1～3)

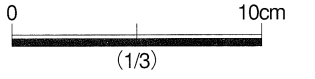


SK166A (1～13)

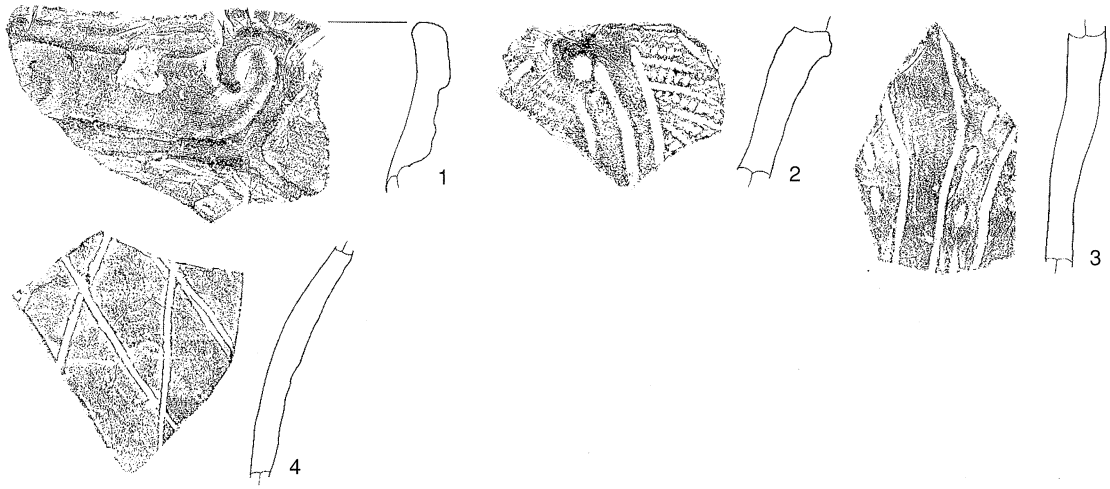
SK170 (1)



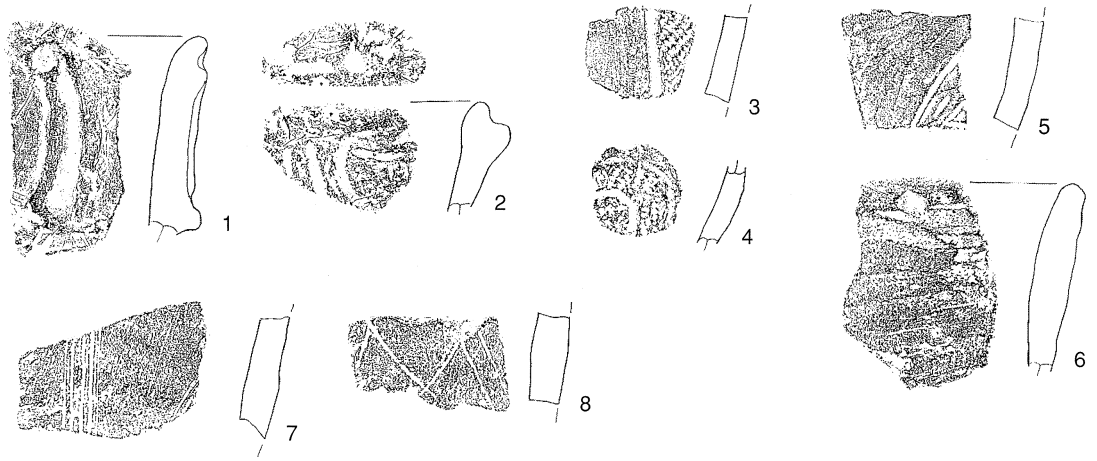
SK171 (1～3)



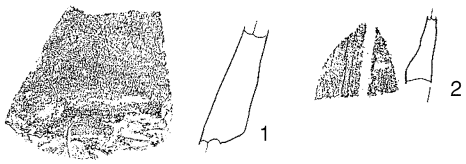
第184図　土坑SK165, 166A, 170, 171出土遺物



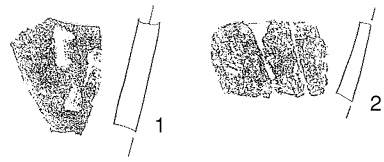
SK167(1～4)



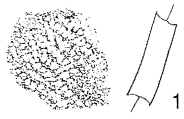
SK174(1～8)



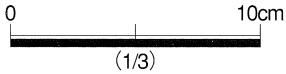
SK175(1・2)



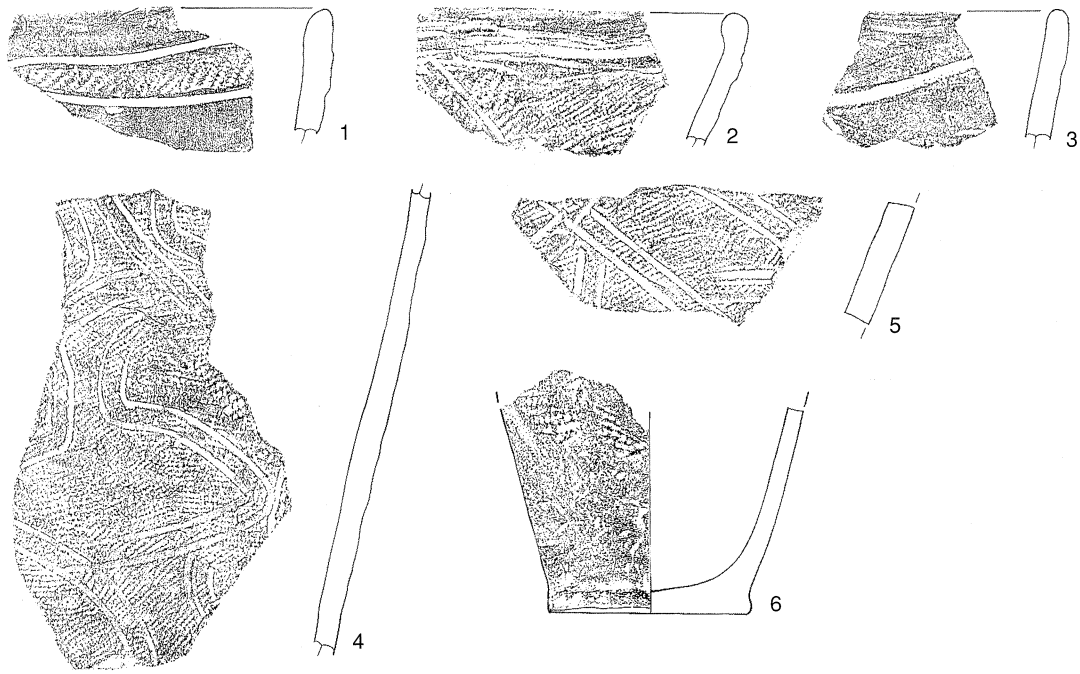
SK176(1・2)



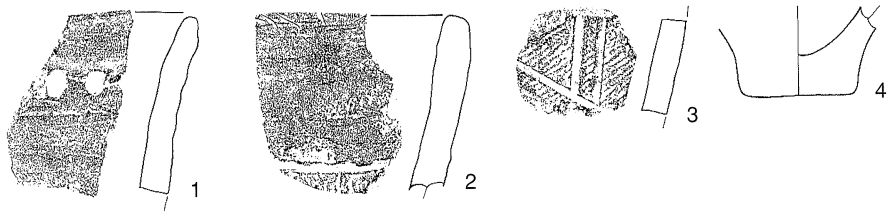
SK177(1)



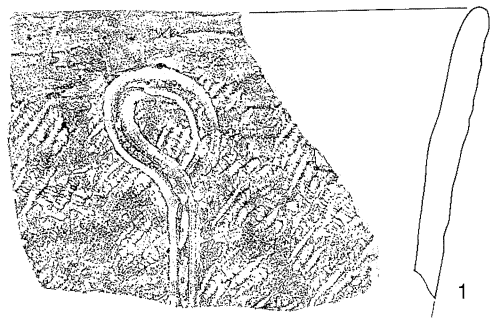
第185図　土坑SK167, 174, 175, 176, 177出土遺物



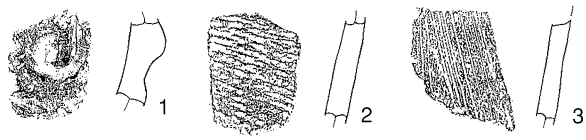
SK178(1～6)



SK179(1～4)



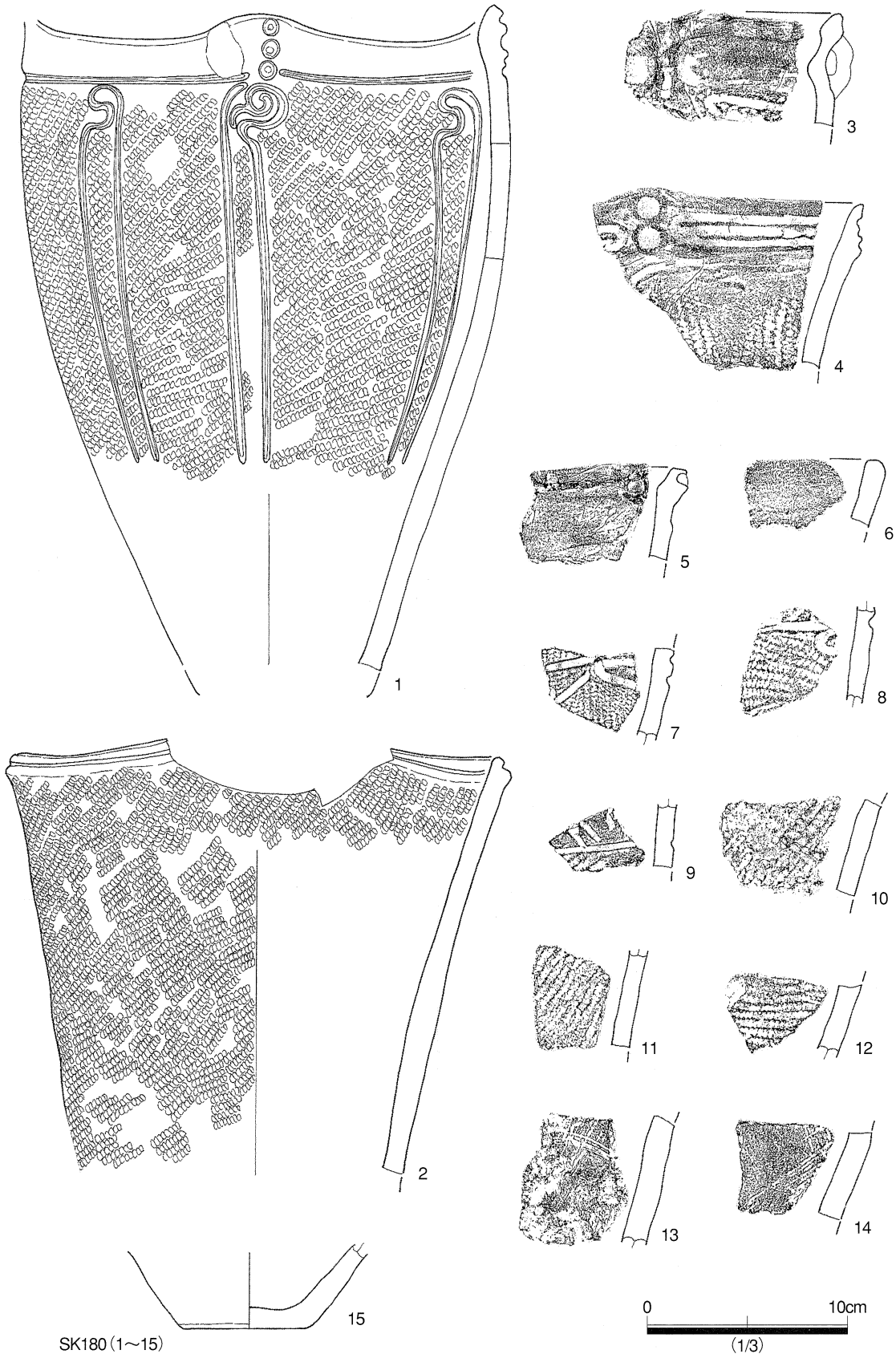
SK182(1)



SK183(1～3)

0 10cm
(1/3)

第186図　土坑SK178, 179, 182, 183出土遺物



第187図　土坑SK180出土遺物

第３節　遺構外出土遺物

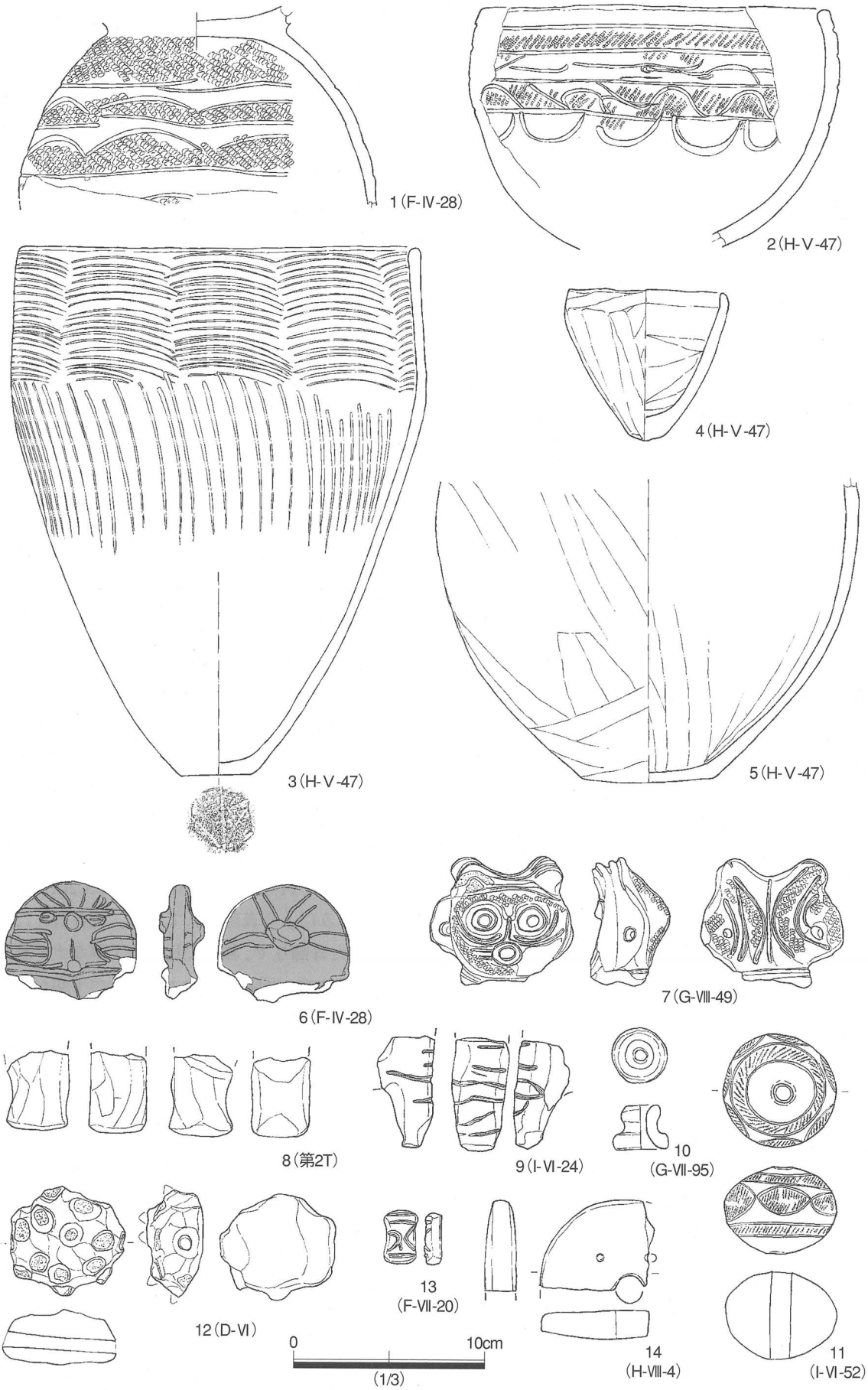
遺構外から出土した遺物を一括する。遺物は土器、土製品、石製品がある。土製品では土偶・耳飾り・有孔球状土製品・小型亀形模造品・小型土版・有孔円板・蓋があり、石製品では石棒・石刀・石剣・石錘・磨製石斧・磨石類・砥石・石皿である。

１）土器（第188図１～５）

１は大型の台付鉢の脚台部破片である。脚台部はドーム型を呈する。下３段は横連続の弧線文による半円の意匠文が描かれている。脚部接合部に帯縄文が巡る。２は丸底状の鉢であろう。帯縄文系で、帯縄文の交互施文で、３段目無文帯に沈線と磨消意匠文、４段目帯縄文に沈線による弧線文、さらに最下段には上向き半円の弧線文を横位連続させる。３は砲弾形をした粗製土器。口縁部は横位の条線文を弧状に施し、胴部は縦位のやや弧状に施文する。口径20.6cm、器高27.3cm、底径3.3cmを測る。４は小型の製塩土器である。口唇部は外削の先尖状を呈し、底部はやや丸底をなす。口縁部は斜位、体部は縦位のヘラケズリ。内面は横位のヘラナデにより整形している。口径7.9cm、器高7.75cm、底径1.5cmを測る。５は無文地の深鉢。体部は内彎気味に立ち上がり、底部は平底である。

２）土製品（第188・189図６～15）

６～９は土偶である。６は山形土偶の頭部片。半円形を呈する。眉上隆線は横位の直線的な隆帯で表現し、鼻は眉中央で小さい瘤状に貼り付けられ、目も眉に接して瘤状に付され、刺突と沈線で目玉を表している。また口は鼻下から伸びる中心線の下部に円形刺突により表現されている。額と両頬は沈線が施文されているが、頬は中央線を境に対向弧線状文と横位の沈線が施されている。後頭部は中央に瘤状の後頭部突起が貼付けられ、そこから２本単位の沈線が放射状に施文され結髪を表している。現存長6.01cm、幅6.71cm、厚さ2.03cm。赤彩が残存している。７はみみずく形土偶の頭部破片である。横長の楕円形を呈した顔面で、円盤状の両目の周りには沈線による輪郭が描かれ、口も円盤状の貼付けで表現され、両頬の弧線は入墨であろうか。また両耳は半円形を呈し、後頭部からの張り出し小孔が開き、耳飾りの装着を想定させる。頭頂部には双頭状の突起を有し、結髪を表している。後頭部は瘤状に突出させ後頭部突起をもち、中心線と対向弧線状で施文されている。全体的に赤彩痕が認められる。現存長6.277cm、幅7.481cm、厚さ3.616cm、重量111.0ｇである。８は山形土偶の脚部片。足底は平坦で、括れ部を設け足先を表現している。現存長4.144cm、幅2.886cm、厚さ3.261cm、重量48.90ｇ。９は山形土偶の脚部片。足先は細くなる。正面は沈線のみにより表現されている。現存長3.72cm、幅2.31cm、厚さ2.0cm。10は完存品の耳飾りである。耳栓状を呈した耳飾りで、無文で比較的丁寧なナデ整形で仕上げている。中心部に径0.64cmの円形の貫通孔を有し、断面形は中央が凹み、また上端に比べ下端が大きく開く。上面径2.03cm、中央径1.64cm、下面径2.917cm、高さ2.31cm、重量12.06ｇ。色調は浅黄橙色をなす。11は有孔球状土製品。一部を欠損するものの、ほぼ完存品といってもよい。やや上下を押しつぶしたような球形を呈し、中央から貫通孔が焼成前に開けられている。中央孔を中心に上下に帯縄文を巡らし、その中央に縄文が充填された楕円形区画文が７単位巡る。幅5.803cm、高さ4.461cm、孔径0.943cm、重量134.0ｇを測る。色調は明赤褐色を呈する。12は亀形土製品の小型模造品である。形状は楕円形を呈し、甲羅面に相当する上面は丸みをもち、裏面はほぼ平坦である。また甲羅面には径1.3cm前後、高さ0.7cm前後の棘状突起が貼付けられており、大半は欠落しているものの13本の突起が確認できる。またちょうど頭部から尻部にかけて径0.919cmの円形の貫通孔が穿ってある。長さ5.871cm、幅5.635cm、厚さ2.877cm、重量78.0ｇ。色調は浅黄橙色をなす。13は小型の土版である。形状は中央部が僅かに窪む長方形を呈し、完存品である。文様は表面のみで、上下端に沈線による区画文を配し、中央にちょうどX字状の対向弧線状文が施文されている。長さ2.745cm、幅1.689cm、厚さ0.867cm、重量4.94ｇで、褐灰色をなす。14は有孔円板形土製品の破片である。約1/4が残存している。表裏面ともに比較的丁寧に整形されており、外縁部と比較し中心部が肥厚する。また中心孔と小孔が認められ、中心孔と小孔は焼成前に空けられたものである。現存径5.50cm、厚さ1.484cm、重量38.50ｇである。15は土製蓋



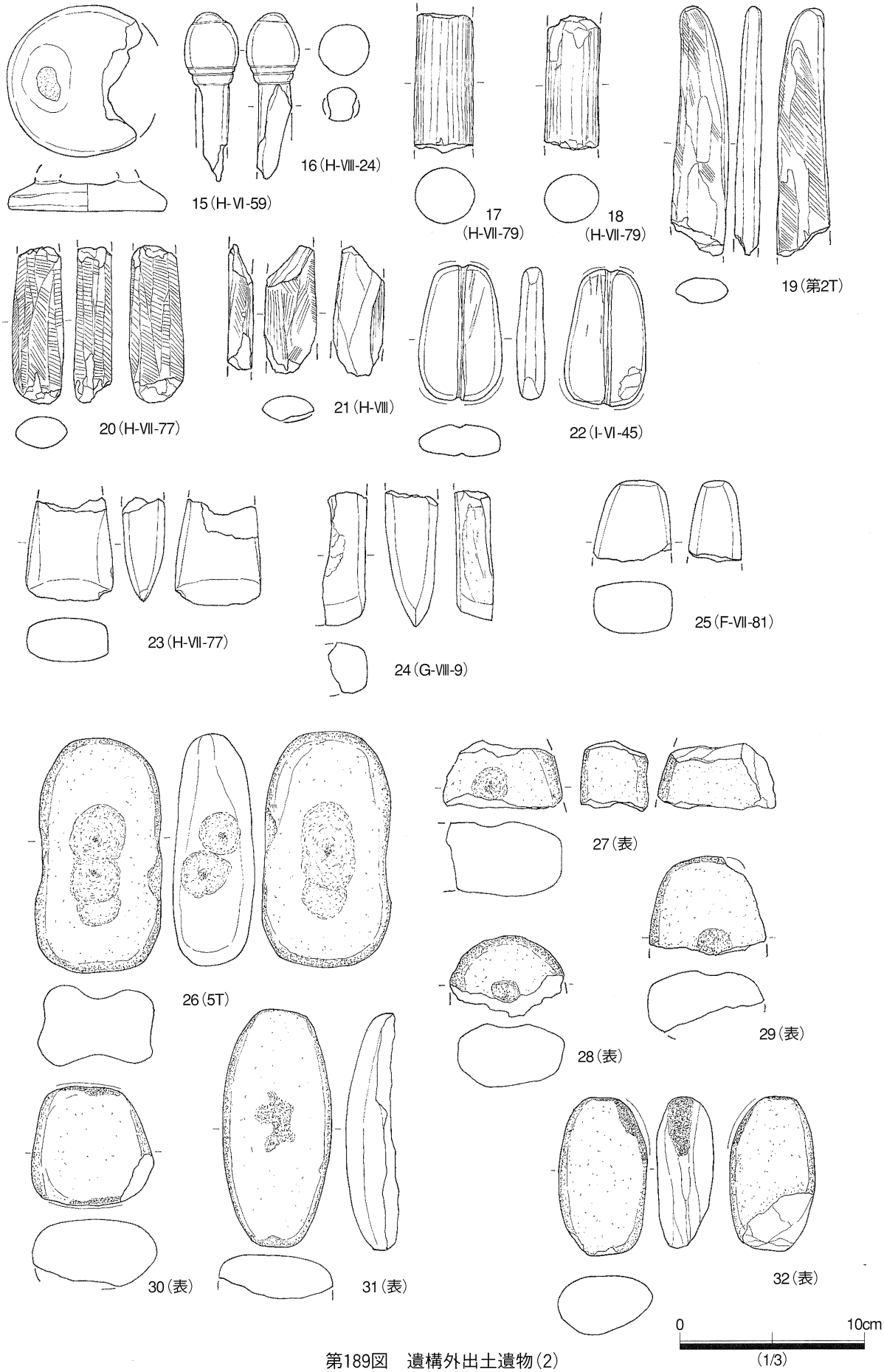
第188図　遺構外出土遺物(1)

で把手部のほか一部を欠損している。正円の円板上のほぼ中央に環状把手が付けられている。径8.6㎝、円板の厚さ1.6㎝を測る。色調は黄橙色をなす。

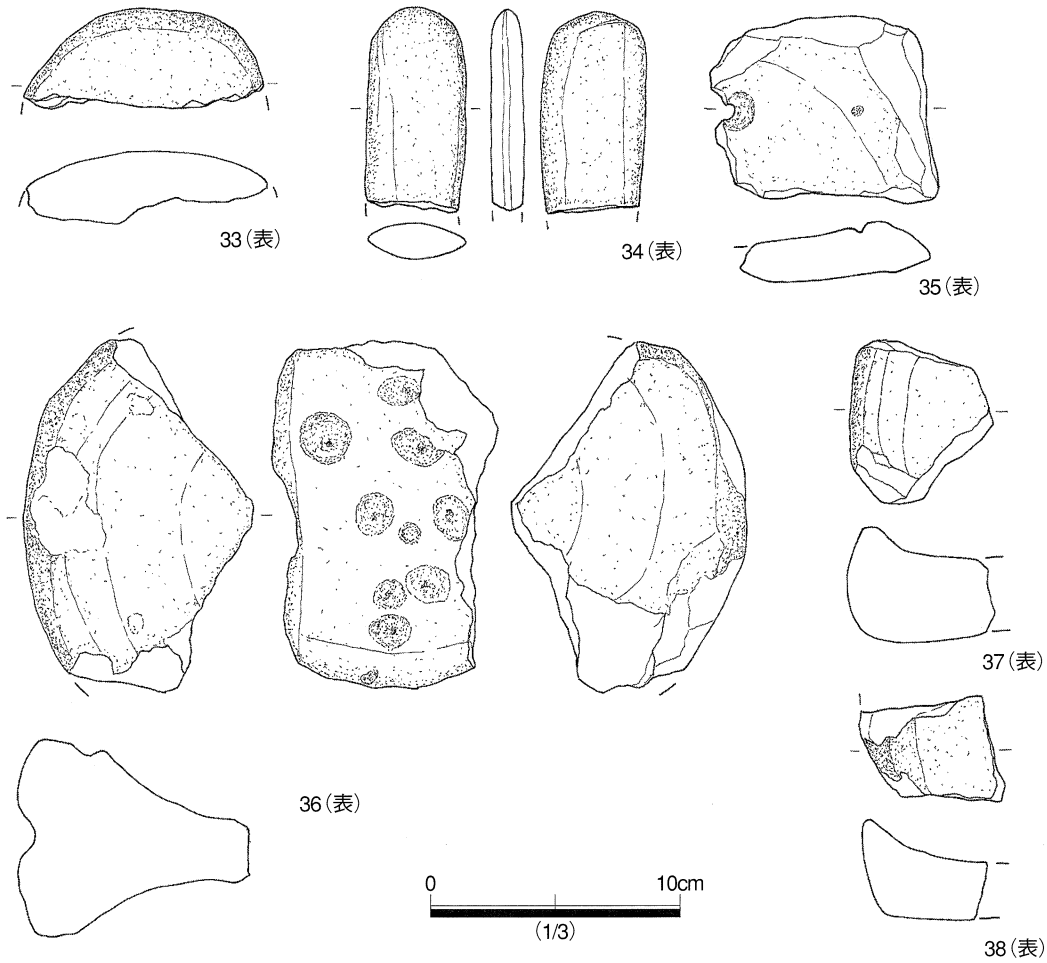
3）石製品（第189・190図16～38）

16～18は石棒で、いずれも破損品である。16は亀頭部破片で、丁寧な研磨による整形で、先端部に1条、下端部に2条の線刻が巡る。17・18は基部側の破片で、断面は正円形に研磨している。19は石刀の刃先部の破片である。両側縁部が薄く刃部を作出し、刃先部が僅かに反っている。20・21は石剣の破損品である。いずれも両側縁部は薄く刃部としている。両面ともに研磨痕が明瞭である。

22は石錘である。扁平礫の長軸に紐掛け溝を全周させる。23～25は磨製石斧である。いずれも定角式石斧の破損品である。23は刃部で、両側面を含め全体的に丁寧な研磨が施されている。24は刃部側がさらに半分欠損している。やはり側面側を含め丁寧な研磨がみられる。25は基部側で研磨による稜線が明瞭である。26～33は磨石類である。26は完存品で、隅丸長方形を呈し、ほぼ全面に磨面を有し、表裏面および側面に敲打による凹部をもつ。27・28・29は破損品であるが、やはり磨面に敲打による凹部を有する。31は長軸の両端部に敲打痕を有する。31・33は側面部に磨面が残され、31の表面に敲打痕がある。32は側面端部に敲打痕がみられる。34は砥石である。破損品で、両側縁が研磨によって薄くなり、石刀の側縁刃部状を呈するいわゆる石包丁様石器である。35～38は石皿で、いずれも破損品である。35は凹面研磨面に凹部をもつ。36は表裏両面に凹面研磨面をもち、側面に凹部を多数有する。37・38は凹面研磨面に周堤部をもつ。



第189図　遺構外出土遺物(2)



第190図　遺構外出土遺物(3)

図版番号	石材	長さ	幅	厚さ	重量	図版番号	石材	長さ	幅	厚さ	重量
16	粘板岩	5.220	2.956	2.732	61.50	17	角閃石	7.510	3.175	3.025	141.0
18	絹雲母片岩	7.068	2.795	2.732	92.55	19	粘板岩	13.464	2.878	1.344	78.50
20	粘板岩	8.554	2.794	1.898	72.50	21	粘板岩	7.020	2.776	1.440	37.50
22	粘板岩	7.144	4.431	1.573	82.50	23	ホルンフェルス	5.614	4.740	2.339	58.0
24	緑色凝灰岩	7.203	2.233	2.779	41.0	25	安山岩	4.282	4.137	2.958	32.0
26	安山岩	12.771	6.536	4.151	441.0	27	安山岩	3.155	6.495	3.802	115.0
28	安山岩	4.387	6.129	3.231	61.0	29	安山岩	5.385	6.279	3.208	111.58
30	角礫岩	6.543	6.504	3.637	208.6	31	石英安山岩	12.999	5.921	2.687	268.80
32	安山岩	8.638	4.782	3.196	181.40	33	流紋岩	4.270	9.400	2.470	92.30
34	砂岩	7.797	3.917	1.399	52.00	35	緑泥片岩	8.560	7.282	2.189	203.65
36	安山岩	13.905	9.827	8.790	811.0	37	安山岩	6.784	6.069	4.519	142.50
38	砂岩	4.381	4.921	3.831	79.						

(小川和博)

第５章　総括

１．はじめに

土浦市内における縄文時代後晩期の遺跡として、学史的にも有名な国指定史跡でもある上高津貝塚が所在するが、今回対象となったここ神立平遺跡はこの上高津貝塚と比較しても全く遜色ない遺跡であることがこの発掘調査によって明らかになった。これは検出された遺構・遺物を含め総合的に判断しても古鬼怒湾における縄文後晩期の拠点的集落のひとつとして、市内はもちろん、県内外において重要な位置付けがされることは間違いないからである。かつて当遺跡は畑地として耕作されており、その段階で既に出土遺物の多さは周知されていたようであった。この地に現在の工場建設によって以前の地形は改変されていたが、保存されていたため、その実態を明らかにできたことは幸運であった。というのも原地形を残すのは周縁のみとなってしまっており、とくに今回の調査区は谷地形であったため、削平や大規模な盛土の繰り返しで遺構・遺物が遺存していたのが奇跡に近い状態といっても過言ではなかったからである。しかも、4000㎡にも満たない限定された範囲の調査にも係わらずその内容の多様性は大きな問題を提起している。

２．調査の概要

調査によって検出された遺構は竪穴住居跡、土坑および多数の柱穴で調査区全面に分布していた。ここは報文中のとおり、南西側から北東側においては緩傾斜面を呈する谷地形で、ちょうど調査区の北東側1/3が斜面部となっており、平坦面と低位面との比高差は1.2mある。ここから竪穴住居跡が30軒検出された。すべて後晩期に比定され、台地平坦面である高位面から斜面部さらに低位面にまで形成されていた。しかし、全体的に掘形の明瞭な遺構は少なく、炉跡・床面・柱穴および出入口部と推定される張出遺構の存在によって確認したものが多い。また土坑は陥穴９基を含め199基を検出した。陥穴以外の大半が後晩期に比定でき、その形態はバラエティーにとんでいる。なお多数検出された柱穴群については掘立柱建物跡の可能性が大きいとはいえ、現場において柱間尺にあう柱穴列を確認することができなかった。将来所産時期を含め図面上から立ち上げる方法しかないが、現時点では分析は困難と判断し、いずれの機会に委ねることとしたい。

ここではまず、縄文後晩期より先行するものと推定される陥穴が９基検出された。長方形を呈し、坑底施設として逆茂木小ピットが穿ってあるものが６基（SK27A・38・41・55・137・168）、無施設のものが３基（SK124・140・184）である。覆土上面からは図示したように後晩期の土器が出土しているが、いずれも流れ込み土器として処理した。この後晩期以前の土器としては中期後半・加曽利E1式土器（SK114出土）があるものの、これが陥穴に関係するものではないと判断している。

次に竪穴住居跡に触れたい。検出されたすべて後期初頭から晩期前半に収まっている。竪穴住居跡は既述したように掘形の明瞭なものがわずかであり、少なくとも壁面が不明確なものについては炉跡・床面・柱穴・張出遺構の四条件の存否によって住居範囲を確定した。しかし、床面が削平され遺存していないもの、あるいは張出部も確認できないものも存在することから上記の四条件のうち、最低三条件が整っている遺構を住居跡と判断した。これを時期別に追ってみると、縄文後期初頭から晩期中葉まで確認が可能であった。なお、大半の住居跡において出土遺物が複数型式共伴していることから住居跡の時期決定が困難のものも多いため大まかな枠組で捉えていることをご了解願いたい。

後期初頭段階　後期初頭は称名寺式期にあたり、本集落の開始段階に相当する。しかし遺構として土坑は多数存在するものの、住居跡はSI30の１軒のみである。本住居跡は出土土器も少なく、確実性に欠けることも事実であるが、出土した遺物がすべてであり、いずれも称名寺式期前半の土器に比定される。住居跡の形態は円形で、壁柱穴を伴い、出入口部としての張出部が明確ではない。この称名寺式土器は次期の堀之内１式と共伴する住居跡が多くある。なお、称名寺式期以前の土器として、中期後半・加曽利E1式土器の出土も確認しているが、遺構には伴わないものと判断した。ここで検出された住居跡の規模等について一覧表を提示しておきたい。

住居跡番号	平面形	南北軸×東西軸	主軸方位	張出部形態	貝層有無	出土土器
SI30	円形	4.50×4.45m	N−45°−W	不明	無	称・中

土坑は比較的多く37基を確認している。そのなかでSK19・22・42・46を代表とする。いずれも径1m前後の円筒形を呈する土坑で、土器の出土量は少ないが纏まっている。なお、SK42は覆土上面において径40.0×22.0cm、厚さ5.0cm規模の貝層が検出された。サルボウを主体とし、僅かにハマグリが混入していた。

後期前半段階　後期前半は堀之内1式から堀之内2式前半期に比定される。堀之内1式は大きく三段階に、そして綱取式もみられること、さらに堀之内2式が共伴するなど一住居から複数型式の出土土器があるため住居跡の時期決定を困難にしている。そこで煩雑を避ける意味で一括提示した。その結果、住居跡数が11軒となり本遺跡の最盛期となってしまった。改めて遺構および出土土器の再吟味の必要性を感じるが、ここでは便宜的に総括的な堀之内1式段階として断定しまとめることとした。

堀之内1式段階の住居跡分布は台地平坦面の高位面に集中し、斜面部は1軒のみである。とくに調査区の高位面である南東側から北西側の地形に沿って延びていることから南東方向に中央広場的な空間を想定するならばちょうど環状に住居跡が構築されていることになろう。住居跡の形態は円形、楕円形、隅丸方形がみられ、出入口部施設と推定される張出遺構は南方向を中心に南東側に集中している。さて、当該期の典型例としてSI02がある。平面形は楕円形を呈し、外側に突出する張出部は平行する溝構造で、開閉施設を有するコの字状施設である。炉跡は出入口部に近接して設置されている。本跡に類似する住居跡としてSI19・23がある。ここで規模等について一覧表を提示しておきたい。

住居跡番号	平面形	南北軸×東西軸	主軸方位	張出部形態	貝層有無	出土土器
SI02	楕円形	3.91×4.28m	N−15°−W	溝＋柱穴	無	堀1中～堀2
SI10	長方形	4.98×6.37m	N−09°−W	溝＋柱穴	無	堀1中
SI13	楕円形	6.77×6.01m	N−63°−W	不明	有	堀1後
SI16	楕円形	5.50×6.04m	N−25°−W	溝＋柱穴	有	称・堀1前・中・堀2
SI19	円形	6.17×6.02m	N−46°−W	溝＋柱穴	無	称・堀1前・中
SI20	円形	8.86×8.70m	N−71°−W	不明	無	称・堀1前・中・堀2
SI22	楕円形	7.70×6.10m	N−06°−E	柱穴列	無	称・堀1前
SI23	円形	5.50×4.93m	N−19°−W	柱穴列	無	称・堀1前
SI25	円形	5.39×4.86m	N−12°−E	柱穴	無	堀1
SI26	隅丸方形	3.74×5.50m	N−31°−W	柱穴	無	堀1前

また土坑でも堀之内1式期段階は他時期を圧倒している。確認された検出数も68基と全体の34%を占めている。形態はSK08・69・71・75・78・141・158・166A・179・180のような円筒形を基本とするものが最も多い。なかでもSK180は径140.0cmの円筒形土坑であるが、完形に近い大型深鉢が2個体床面上より出土している。こうした円筒形土坑の底面に坑底施設を伴うものもある。SK74・126では壁際にサイドピットが穿ってある。またSK109・132・157・159のように壁面がオーバーハングする袋状となる土坑がある。これら袋状土坑では遺物が纏まって出土している。

後期中葉段階　後期中葉は堀之内2式後半から加曽利B3式期に相当する。加曽利B式は少なくとも3段階に細分さているが、時期については精製土器と比較して最も普遍的に出土する紐線文系粗製土器から判断した。その結果中葉の加曽利B2式が主体となるようである。まず当該期における住居跡の典型例として住居跡SI18とSI24を挙げたい。いずれも平面形は円形を呈し、出入口部とする張出部は外側に突出することはなく、住居内側に柱穴列をもって設けられ、開閉施設もSI24でみるように柱穴列による施設である。炉跡は出入口部に近接して設置されている。検出された住居跡は6軒であり、前段階よりも減少する傾向にある。ここで規模等について一覧表を提示しておきたい。

住居跡番号	平面形	南北軸×東西軸	主軸方位	張出部形態	貝層有無	出土土器
SI05	円形	(3.71)×4.90m	N−41°−W	不明	無	加B1・2
SI07	楕円形	7.35×6.51m	N−01°−E	溝+柱穴	無	加B1・2
SI09	円形	4.10×4.50m	N−04°−E	溝+柱穴	有	加B3
SI14	楕円形	7.76×6.97m	N−66°−W	柱穴列	有	堀2～加B3
SI18	方形	5.25×5.60m	N−09°−E	柱穴列	無	堀2～加B3
SI24	円形	5.02×4.68m	N−27°−W	柱穴列	有	加B3

なお、6軒のうち半分の3軒で小貝ブロックを確認している。いずれも小規模であるが、最も纏まっているのがSI09である。ここではシオフキの純貝層が形成されており、わずかにハマグリ・オキシジミ、アカニシ、サルボウが混入していた。またSI14およびSI24は小規模貝ブロックで、ハマグリを主体とし、オキシジミ・シオフキ・サルボウを含んでいた。

土坑はこの段階において極端に減少し、わずか21基を確認したに過ぎない。まず堀之内2式期では6基あるが、いずれも円形を呈すものの、浅く底面が鍋底状のものもある。但し隅丸方形を呈したSK88Aにおいては遺物が纏まっている。しかし、加曽利B式期では15基であるものの、SK143やSK156のように径1m前後の比較的浅い円筒形を基本とするものの、出土遺物はいずれも小破片のみである。

後期後半段階　後期後半の曽谷式期から安行2式期までではやや時間幅があるものの、5軒の住居跡が該当する。立地は台地縁辺部に沿って構築されており、より谷側となる。また住居跡形態としては比較的まとまっており、検出された5軒は時間的な変遷を辿ることが可能である。まず曽谷式期段階ではSI04とSI29が相当する。SI04は円形を呈し、壁柱穴は2周する拡張住居跡で建替え住居であろう。出入口の張出部は柱穴が伴う平行する対溝状で、炉跡は中央に設けている。出土土器はいずれも曽谷式を主体とする。またSI29は出土遺物が少ないため確証を得ることが困難であったが、加曽利B3式から曽谷式段階に比定できよう。次の曽谷式期から安行1式期の段階ではSI01と17の2軒が相当する。SI01は住居跡の掘形として本遺跡で最も整っており、出土遺物もまとまっていた。まず平面形は楕円形を呈し、壁柱穴は2周し、やはり拡張住居という建替えを示唆している。出入口である張出部は「ハ」の字状に開く対土坑による構築である。炉跡はほぼ中央に設けている。出土土器は曽谷式および安行1式がまとまっている。またSI17は住居跡の形態としていは整っていないが、出入口の張出部は小さく「ハ」の字状に開き、柱穴列による開閉施設を伴う。出土土器は安行1式が主体となる。次いで安行1式期ではSI28が相当する。平面形は円形を呈し、炉が2基検出され、壁柱穴も2周確認できることから、本跡も拡張に伴う建替え住居であろう。出入口部である張出部は柱穴の伴う平行する対溝状である。出土遺物は安行1式を主体にし、わずかに安行2式が伴う。これら5軒の住居跡を抽出したなかで、時間的に追ってみるとSI29→SI04→SI01→SI17→SI28となろう。やはり前段階よりも減少する傾向にある。

ここで規模について一覧表を提示しておきたい。

住居跡番号	平面形	南北軸×東西軸	主軸方位	張出部形態	貝層有無	出土土器
SI01	楕円形	6.44×7.23m	N−84°−W	溝+柱穴	有	曽谷・安1
SI04	円形	5.10×4.92m	N−44°−W	溝+柱穴	無	曽谷
SI17	円形	6.45×6.40m	N−30°−W	溝+柱穴	有	曽谷・安1
SI28	楕円形	5.29×5.82m	N−23°−W	溝+柱穴	有	安1・安2
SI29	円形	4.70×4.65m	N−34°−W	溝+柱穴	有	加B3・曽谷

なお、5軒のうち実に4軒が小貝ブロックを伴っている。最も纏まっているのがSI01およびSI29の覆土で検出された貝ブロックである。いずれもハマグリ・オキシジミを主体とし、アカニシ・シオフキ・サルボウを含み、SI01のみオオノガイと汽水産のヤマトシジミが混入していた。

土坑では曽谷～安行2式段階に比定されるものが13基確認されているが、そのなかでSK89・94・155が当該期の特徴ある土坑のひとつとして挙げられる。まずSK94は深さ150.0cmほどの円筒形土坑であるが、ここから

第191図　時期別住居跡分布図(1)

第192図　時期別住居跡分布図(2)

製塩土器が纏まって出土しており、製塩関連土坑と推定される。またSK89およびSK155は井戸状を呈した深度が深い土坑である。円筒形を呈し、SK89が深さ385.0㎝、SK155が深さ275.0㎝を測る。これらからは遺物の出土が多く、完形に近い深鉢が底面に遺棄され、さらにSK89では製塩土器が纏まって検出されている。

晩期前半～中葉段階　晩期前半の安行3a式期から安行3c・前浦式期に相当し、やや時間幅があるものの４軒の住居跡が該当する。立地はいずれも緩傾斜面に構築されている。なお、各住居跡の形態にバラつきが目立つと同時にそれぞれ時間的な変遷を辿ることが可能である。まず後期末葉・安行２式期から晩期初頭・安行3a式段階としてSI11が相当する。形態はほぼ円形を呈し、壁柱穴を連結する周溝がみられる。出入口の張出部は柱穴が伴う溝状で、炉は中央に設けている。出土土器は安行２式と安行3a式期が纏まっている。次いで安行3a式期から安行3b式期の段階とした。SI12と27の２軒が相当する。いずれも炉・柱穴・張出部が確認できるものの、

第193図　貝ブロック出土分布図

全体的に住居跡の掘形としては決して良好とはいえない。出土遺物は安行3b式が比較的よくもまとまっており、SI27では完形に近い製塩土器の出土がある。そして安行3b式・3c式・前浦式の住居跡としてSI03が相当する。住居形態としてまず平面形は長方形を呈し、南側に位置する炉を囲むように5本の主柱穴があり、壁柱穴は構築していない。出入口である張出部は柱穴を伴う平行する対溝である。覆土中から比較的規模の大きな貝層を伴い、イノシシの頭骨が検出されている。また製塩土器を含む土器も多量に出土している。最後に前浦式期に比定されるSI21がある。掘形等整ってはいないが、石剣を含み前浦式土器が出土している。ここで規模について一覧表を提示しておきたい。

住居跡番号	平面形	南北軸×東西軸	主軸方位	張出部形態	貝層有無	出土土器
SI03	隅丸長方形	4.09×3.37m	N−08°−W	溝+柱穴	有	安3b～前浦
SI11	楕円形	5.74×6.01m	N−05°−E	溝+柱穴	無	安2～安3a
SI12	円形	7.52×7.90m	N−05°−E	溝+柱穴	無	安3a・安3b
SI21		7.00×6.84m	N−38°−W		無	前浦
SI27	楕円形	7.94×8.50m	N−02°−W	溝+柱穴	無	安3a～前浦

なお、4軒のうち貝ブロックを伴っていた住居跡はSI03である。このSI03は本遺跡で最も纏まって検出されたもので、オキシジミとハマグリを主体とし、アカニシ・シオフキ・サルボウを含み、さらに汽水産のヤマトシジミが混入していた。またイノシシとニホンジカの動物骨が検出されており、とくにイノシシは纏まって検出されている。

土坑では安行3式段階に比定される土坑が8基確認されているが、土坑は小型の円筒形を基本とする。また遺物も少ないが、そのなかでSK97は安行3b式期に比定され、当該期の代表的な土坑のひとつとして挙げられる。平面形は楕円形を呈し、径120.0×150.0cmで深さは100.0cmほどの円筒形土坑であるが、ここから製塩土器を含む土器が纏まって出土しており、製塩関連土坑と推定されるものである。

3．おわりに

ここ神立平遺跡における集落の成立は縄文後期初頭・称名寺式前半期である。そしてその終焉は晩期中葉・前浦式期でありその間、連綿と集落としての機能を維持している。その背景には古鬼怒湾という地理的な立地が最大であることはいうまでもない。住居跡や土坑の検出数をもってその集落規模の消長を計ることは簡単であるが、ここでは十分読み取れない遺構が多数存在すること、さらに調査対象地がその一部分であることを忘れることができない。少なくとも現象面からみて後期中葉・加曾利B式期段階から急激に遺構数の減少がみられても、出土遺物は周辺地域の中核的集落に相応しい内容を備えており、総合的にみても貧弱に感じることはできない。そのひとつに土偶や石棒などの非実用品の増加が挙げられる。そして後期後半の曽谷式期から顕現化する製塩土器の存在はそれまでの狩猟採集を主体とする生業活動にくわえ、「食」に対するあらたな生産活動の導入を予測させる。しかし、これが永遠ではなく晩期後半まで存続することはない。その理由のひとつに次なる稲作農耕の導入という大きな変革がまっているからである。これほど繁栄し拠点的な集落を形成しながら稲作という生産基盤に対応できない土地柄であったと理解したい。それは弥生時代以降ここに生活の場を求めていないことの傍証となろう。

ともかく4000㎡にも満たない調査範囲にも係わらず、今回検出された土器などの資料は膨大であり、その成果は今後の縄文後晩期研究にとって欠かすことのできないひとつとなることを期待したい。

（小川和博）

参考文献

福田礼子他　2006　「国指定史跡上高津貝塚C地点」土浦市教育委員会

付編

土浦市神立平遺跡出土の動物遺体

国立歴史民俗博物館
小林園子・西本豊弘

はじめに

神立平遺跡では縄文時代後期から晩期の９箇所の竪穴住居跡に貝殻が捨てられており、その中に魚骨や獣骨が含まれていた。貝塚はハマグリが主体であり、シオフキガ・オキシジミガイなども多く見られた。魚類ではハゼ類やウナギが多く含まれていた。貝塚に含まれる貝種や出土量、その他の動物の内容については表に示したとおりである。なお、貝類と魚類・鳥類の分類は小林が担当し、哺乳類の分類と加工品と本文執筆は西本が分担した。

１．貝層サンプルの処理方法

９ヶ所の竪穴住居跡の覆土に貝塚が見られ、それぞれ土嚢袋１から２個分の貝層サンプルが採集された。サンプルは、乾燥後に重量と体積を計測した。その後、そのサンプルを４㎜・２㎜・１㎜の３種のメッシュの「ふるい」を用いて水洗した。４㎜メッシュのふるいで水洗したものは乾燥後に体積と重量を計測した（表２）。

２．貝類

この遺跡で出土し貝類は16種であり、貝層サンプルごとの内容を表３に示した。SI-11，13・14・17・28・29はハマグリがもっとも多く、SI-3はオキシジミ、SI-16はシオフキガイが多い。ハマグリは殻長さ40～50㎜が多く、よく生育した個体が主に捕獲されている。生育異常もみられず、生育環境はよかったと推測される。シオフキガイとオキシジミガイもよく生育した個体であった。アマオブネガイ科としたものはイシマキガイの可能性が高い。シジミ類としたものは、殻高は高くないがヤマトシジミと思われる。

３．魚類

魚類は、小さなハゼ類とうなぎが主体である。その他にイワシ類・メナダ・スズキなど計10種が見られた。いずれも内湾から河口域で普通に見られる魚種である。

４．鳥類・哺乳類

鳥類は四肢骨の中間部破片１点が見られただけでは、種は不明である。哺乳類はシカとイノシシが主体であり、ネズミ類は新しいものの混入であろう。なお写真図版の23に示したよいに、イノシシの上腕骨にイヌによると思われる咬み痕があり、イヌが飼育されてと推測される。

まとめ

以上に述べたように、貝類と魚類のいずれも内湾から河口域に生息する動物である。当時の海岸がこの遺跡からどの程度離れていたかよく分からないが、海岸部まで出かけていって漁撈活動を行い、獲物の処理を集落内で行ったのであろう。ハゼやウナギなどが多いことから浅い海域や河口部で簡単な網や仕掛けで漁獲していたと推測される。シカとイノシシの出土量は少ないが、貝殻を含めたサンプルそのものが少ないので、当時のシカ・イノシシの狩猟活動についてはよく分からない。

貝輪・骨製品について

写真図版の12に示した貝製腕輪はSI-28より出土した。よく研磨されており、完成品の破損品である。サルボウガイ類製で、殻頂部分の破片である。現存最大長は54.1㎜で幅は4.2㎜～5.6㎜、厚さ3.1㎜～4.2㎜である。写真図版の13に示したものは、SI-28より出土した骨製錐である。おそらくシカの骨を加工したもので写真の下側に示した一端を尖らし、その先端部の基部に切り込みを入れて段を作り出している。加工は荒く、ごく簡単な作りである。反対側も尖っているように見えるが、これは破片を作った時のままで二次的加工はない。全長70.6㎜で先端部の幅は6㎜前後である。写真図版の14. は、イノシシの雄の下顎左側犬歯で、エナメル質部分を利用するためにエナメル質ををほとんど切り取った後の象牙質部分破片である。写真図版の15は、シカの中足骨の前面内側を示したもので、中足骨を前後に半割している。その断面には剥離痕が明瞭に残っている。中足骨の後面を加工品に用いた後の破片であろう。

表1　神立平遺跡出土動物遺体種名一覧

貝類	アマオブネガイ科 カワアイガイ ウミニナ アカニシ イボニシ サルボウガイ マガキ マツカサガイ イシガイ シジミ類 ハマグリ オキシジミガイ アサリ シオフキガイ ムラサキガイ オオノガイ	魚類	アカエイ科 イワシ類 カタクチイワシ ウナギ コイ メナダ スズキ類 アジ科（マアジ） クロダイ ハゼ科	鳥類 哺乳類	種不明 ネズミ類 シカ イノシシ

表2　サンプル一覧

遺構名	サンプル名	水洗前		水洗後（4㎜）		水洗後（2㎜）	水洗後（1㎜）
		堆積（cc）	重量（kg）	堆積（cc）	重量（kg）	重量（g）	重量（g）
SI-3	一括貝・骨	4900	3.75	3800	1.82	45	75
SI-11	一括貝・骨	1200	1.0	500	0.3	23	23
SI-11	no.2	900	0.6	100	0.2	6	8
SI-12	一括貝・骨	1300	0.9	100	0.3	15	19
SI-13	一括貝・骨	3500	2.8	2000	0.9	69	45
SI-14	一括貝・骨	2000	1.7	500	0.4	43	31
SI-16	一括貝・骨	5200	3.3	3500	1.3	53	44
SI-17	一括貝・骨	2200	1.9	300	0.3	43	39
SI-28①	一括貝・骨	900	0.7	700	0.3	5	10
SI-28②	一括貝・骨	1400	1.0	700	0.3	7	7
SI-29	一括貝・骨	5600	3.6	4000	2.1	45	37
合計		29100	20.98	16200	8.21	354	338

表3　サンプル別貝出土量一覧

遺構名	サンプル名	水洗後（4㎜）														水洗後（2㎜）	水洗後（1㎜）
		ハマグリ		シオフキガイ		オキシジミガイ		サルボウガイ		シジミ		アカニシ	その他	貝破片重量（g）	骨重量（g）	重量（g）	重量（g）
		左	右	左	右	左	右	左	右	左	右						
SI-3	一括貝・骨	38	37	4	8	87	115	4	1	4	5	2	カワアイガイ1， カノコガイ またはイシマキガイ1， ウミニナ類10， ムラサキガイ右3， カキ破片（焼）1	306	11	微小巻貝3	微小巻貝7
SI-11	一括貝・骨	20	14	3	2	4	8						ウミニナ類1， 巻貝軸破片1， 二枚貝破片1	74	23		
SI-11	no.2	5	4			1	5						ウミニナ類1	13	139	微小巻貝1	
SI-12	一括貝・骨	1									2	1		0	215		
SI-13	一括貝・骨	64	55	19	13	22	18	1		3	3	2	オオノガイ左1 巻貝2	188	43	微小巻貝2	
SI-14	一括貝・骨	5	10	0	0	5	4	2				5	巻貝1	85	8	微小巻貝4	微小巻貝9（焼）
SI-16	一括貝・骨	46	46	71	74	42	40					9	オオノガイ右1	125	0		微小巻貝13
SI-17	一括貝・骨	16	10							13	11		アサリ右1，巻貝破片3	85	9		
SI-28①	一括貝・骨	27	25	0	4	13	13	2	1				ウミニナ類2， 巻貝1	52	21		
SI-28②	一括貝・骨	31	23	2	4	6	5		2			1	マツカサガイ？ 左5右5 イシガイ？右1， イボニシ1	37	42	オキシジミ 左1 カワニナ？ 幼1	
SI-29	一括貝・骨	68	84	34	38	61	63	6	14			6		196	23	微小巻貝1	微小巻貝1（焼）
合計		321	308	133	143	241	271	15	18	20	21	26	0				

＊ウミニナ類はウミニナとイボウミニナの可能性があるものを示す。
＊（焼）は被熱により変色しているものを示す。

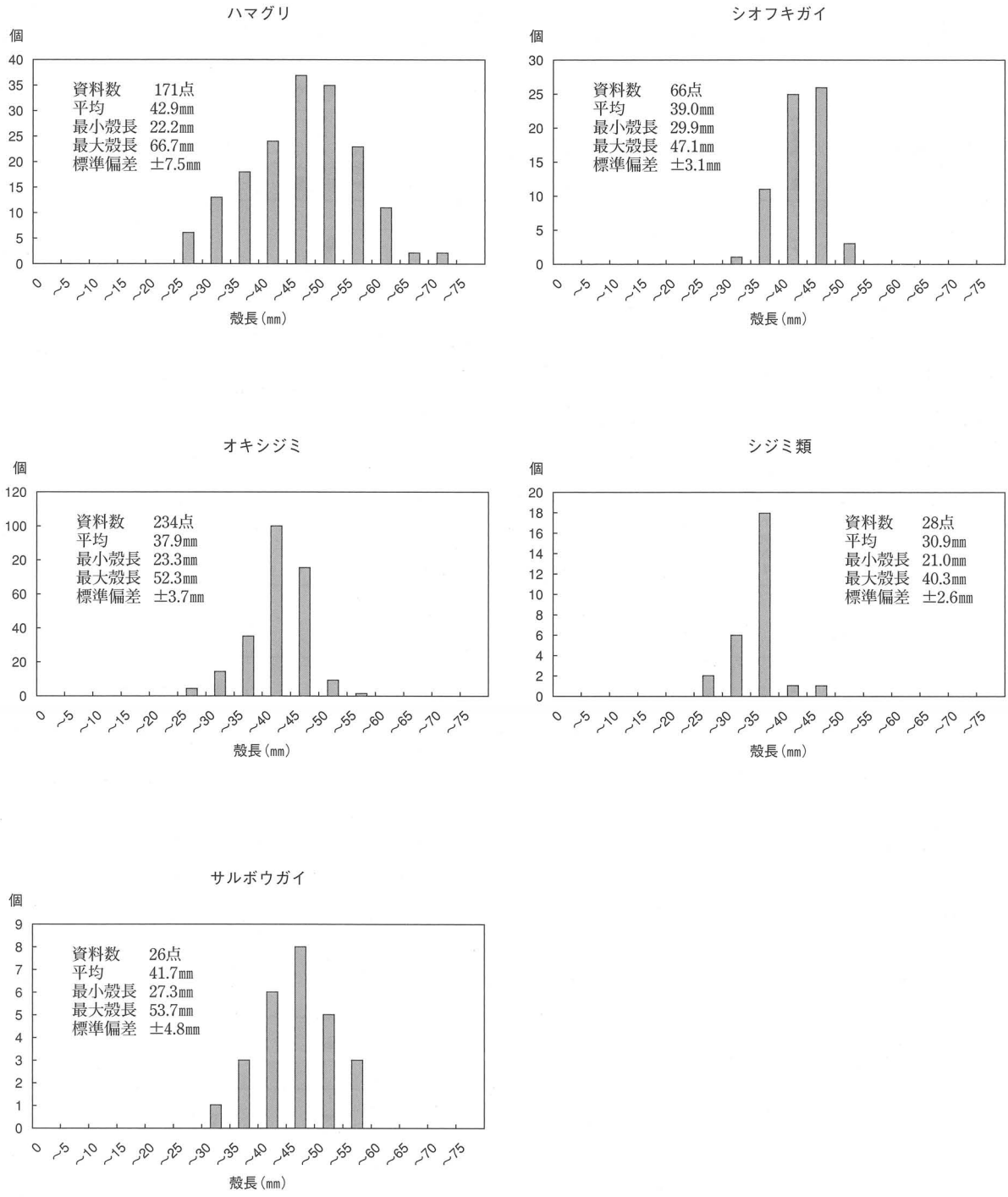

ハマグリ
個
資料数 171点
平均 42.9㎜
最小殻長 22.2㎜
最大殻長 66.7㎜
標準偏差 ±7.5㎜
殻長(㎜)
シオフキガイ
個
資料数 66点
平均 39.0㎜
最小殻長 29.9㎜
最大殻長 47.1㎜
標準偏差 ±3.1㎜
殻長(㎜)
オキシジミ
個
資料数 234点
平均 37.9㎜
最小殻長 23.3㎜
最大殻長 52.3㎜
標準偏差 ±3.7㎜
殻長(㎜)
シジミ類
個
資料数 28点
平均 30.9㎜
最小殻長 21.0㎜
最大殻長 40.3㎜
標準偏差 ±2.6㎜
殻長(㎜)
サルボウガイ
個
資料数 26点
平均 41.7㎜
最小殻長 27.3㎜
最大殻長 53.7㎜
標準偏差 ±4.8㎜
殻長(㎜)

図1　二枚貝の殻長分布

表4　出土貝類の大きさ（殻長・殻高分布一覧）

	ハマグリ	シオフキガイ	オキシジミ	シジミ類	サルボウガイ	アカニシ
資料数（個）	171	66	234	28	26	28
平均（mm）	42.9	39.0	37.9	30.9	41.7	30.9
最小（mm）	22.2	29.9	23.3	21.0	27.3	21.0
最大（mm）	66.7	47.1	52.3	40.3	53.7	40.3
標準偏差	7.5	3.1	3.7	2.6	4.8	2.6
殻長（mm）	殻長（mm）	殻長（mm）	殻長（mm）	殻長（mm）	殻長（mm）	殻高（mm）
0	0	0	0	0	0	0
～ 5	0	0	0	0	0	0
～10	0	0	0	0	0	0
～15	0	0	0	0	0	0
～20	0	0	0	0	0	0
～25	6	0	4	2	0	0
～30	13	1	14	6	1	0
～35	18	11	35	18	3	0
～40	24	25	101	1	6	0
～45	37	26	76	1	8	0
～50	35	3	9	0	5	2
～55	23	0	1	0	3	2
～60	11	0	0	0	0	3
～65	2	0	0	0	0	3
～70	2	0	0	0	0	0
～75	0	0	0	0	0	0

表5　出土魚類一覧

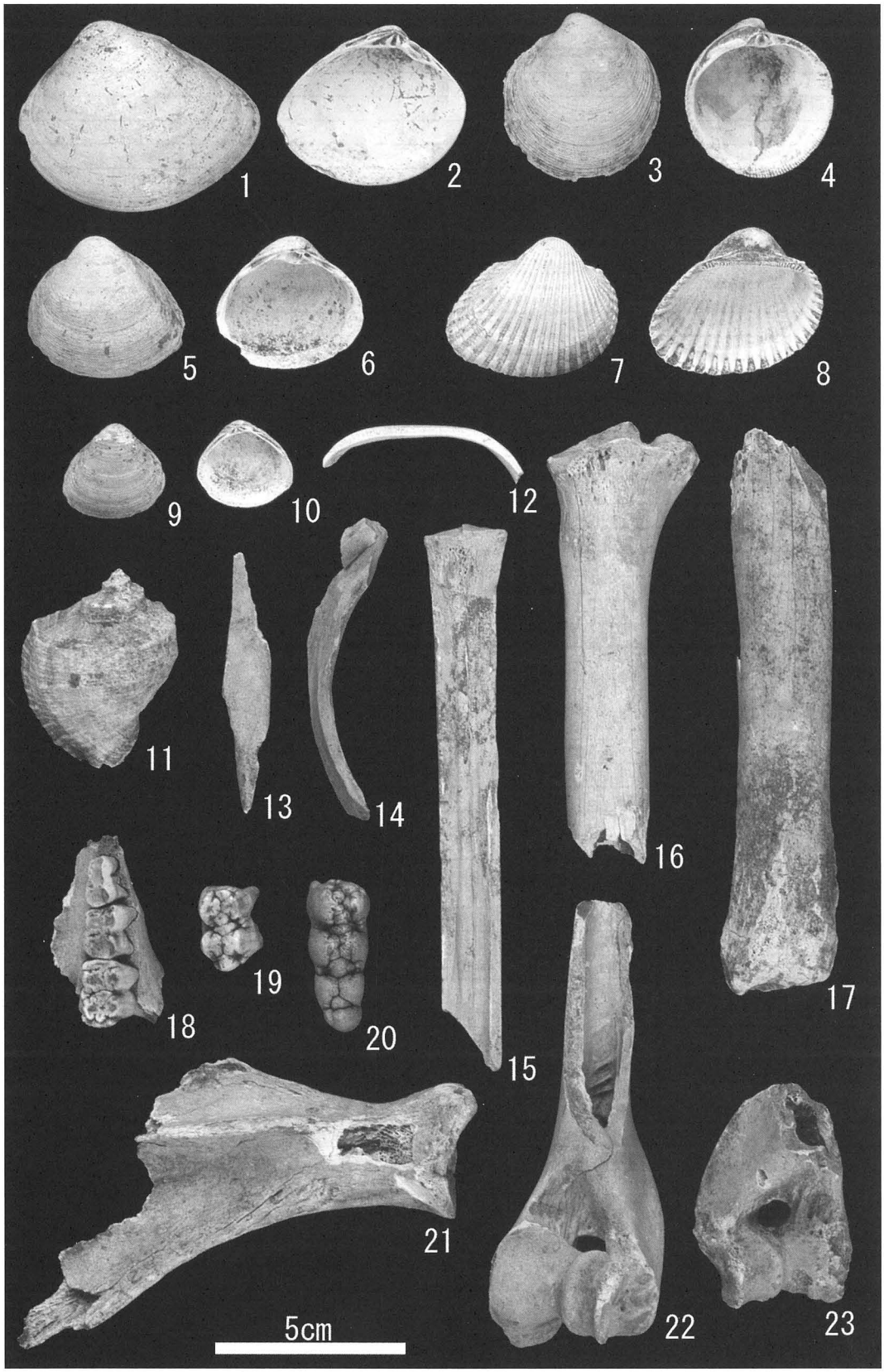
遺構	メッシュ	魚種類	部位	左右	数量	備考
SI-3	4 mm	スズキ属	方骨	左	1	SL40cm程度
		スズキ属	椎骨		1	
		タイ科	歯骨	右		破片，SL40cm程度
		種不明	主鰓蓋骨	?	1	
		種不明	椎骨		1	
		種不明	鱗		2	
	2 mm	エイ類	椎骨		1	
		ウナギ	舌顎骨	右	1	SL50cm程度
		ウナギ	椎骨		4	
		タイ科？	歯		8	
		ハゼ科	前上顎骨	左	1	
		ハゼ科	椎骨		2	
		未同定	椎骨		3	
		同定不可	椎骨		1	
	1 mm	エイ類	歯		2	
		ウナギ	主上顎骨	右	1	
		ウナギ	主鰓蓋骨	左	1	
		ウナギ	椎骨		4	
		タイ科？	歯		14	
		ハゼ科	角骨	左	1	
		ハゼ科	角骨	右	1	
		ハゼ科	椎骨		38	
		ハゼ科	主鰓蓋骨	右	1	
		ハゼ科	前上顎骨	右	1	
		ハゼ科	主上顎骨	左	1	
		未同定	椎骨		3	
		同定不可	椎骨		4	
SI-11	2 mm	エイ類	椎骨		1	
		ニシン科	椎骨		1	
		ハゼ科	椎骨		1	
	1 mm	ニシン科	椎骨		1	
		ハゼ科	前鋤骨		1	
		ハゼ科	歯骨	左	1	
		ハゼ科	角骨	左	1	
		ハゼ科	主鰓蓋骨	右	1	

遺構	メッシュ	魚種類	部位	左右	数量	備考
		ハゼ科	椎骨		5	
		種不明	椎骨		1	小型
SI-11②	2㎜	コイ科	椎骨		1	
		種不明	破片		1	青く変色
	1㎜	アカエイ科	歯		1	
		ハゼ科	角骨	左	1	
		種不明	破片		2	
SI-12	4㎜	クロダイ	前上顎骨	右	1	体長40㎝程度
	2㎜	ウナギ	椎骨		3	うち2点焼
		タイ科	歯		3	
		種不明	鱗		1	
	1㎜	ウナギ	角骨	右	1	
		ウナギ	椎骨		8	
		ボラ科	椎骨		1	
		タイ科	歯		8	
		ハゼ科	前上顎骨	右	1	
		ハゼ科	角骨	右	1	
		ハゼ科	方骨	右	1	
		ハゼ科	第一椎骨		2	
		ハゼ科	椎骨		13	
		未同定	椎骨		3	
		同定不可	椎骨		5	
SI-13	2㎜	エイ類	椎骨		1	
		ウナギ	椎骨		5	
		種不明	歯		1	
		種不明	椎骨		2	
SI-14	4㎜	スズキ属	方骨	左	1	体長55㎝程度
	2㎜	ウナギ	椎骨		4	
		ボラ科	椎骨		3	
		タイ科	顎	破片	1	
		ハゼ科？	椎骨		1	
		同定不可	椎骨		2	
SI-14	1㎜	エイ類	歯		1	
		ニシン科	椎骨		1	
		カタクチイワシ	第一椎骨		1	
		ウナギ	前鋤骨		1	
		ウナギ	基後頭骨		2	
		ウナギ	主鰓蓋骨	右	1	
		ウナギ	椎骨		6	
		ハゼ科	主上顎骨	左	1	
		ハゼ科	前上顎骨	左	2	
		ハゼ科	歯骨	左	1	
		ハゼ科	椎骨		6	
		未同定	椎骨		8	
		同定不可	椎骨		5	
SI-16	2㎜	ウナギ	椎骨		3	
		ハゼ科	椎骨		2	
	1㎜	ウナギ	椎骨		2	
		タイ科？	歯		2	
		ハゼ科	椎骨		1	
		種不明	鱗		1	
SI-17	4㎜	ウナギ	椎骨		1	
		メナダ属	涙骨	右	1	体長40～50㎝程度
		スズキ属	椎骨		1	
		同定不可	椎骨		1	
	2㎜	エイ類	椎骨		1	
		ウナギ	前鋤骨		1	
		ウナギ	歯骨	左	1	
		ウナギ	椎骨		14	
		アジ類	椎骨		1	
		タイ科	歯		1	
		ハゼ科	角骨	左	1	
		ハゼ科	主鰓蓋骨	右	1	

遺構	メッシュ	魚種類	部位	左右	数量	備考
		ハゼ科	椎骨		3	
		未同定	椎骨		1	
	1㎜	エイ類	歯		1	
		エイ類	椎骨		1	
		ニシン科	第一椎骨		1	
		ウナギ	基後頭骨		1	
		ウナギ	椎骨		10	
		コイ科	咽頭歯	破片	1	コイ
		コイ科	椎骨		1	
		ハゼ科	前上顎骨	左	1	
		ハゼ科	角骨	左	2	
		ハゼ科	椎骨		9	
		未同定	椎骨		3	
SI-28①	4㎜	クロダイ	主上顎骨	右	1	体長40cm程度
	1㎜	タイ科	歯		1	
		ハゼ科	角骨	右	1	
		ハゼ科	前上顎骨	左	1	破片
SI-28②	1㎜	ウナギ	椎骨		1	
SI-29	4㎜	エイ類	椎骨		1	
		ボラ科	椎骨		1	
	2㎜	ウナギ	椎骨		2	
		コイ科	椎骨		1	
		未同定	椎骨		2	
	1㎜	ウナギ	椎骨		2	
		タイ科	歯		1	
		ハゼ科	椎骨		1	

表6　出土獣鳥類一覧

遺構	メッシュ	種類	部位	残存	左右	数量	備考
SI-3	4㎜	シカ	中手または中足骨	遠位破片	?	1	一部被熱
		陸獣	破片			20	
		陸獣	破片			10	焼けている
	1㎜	陸獣	指?			1	
SI-11	4㎜	陸獣	破片			17	
SI-11	1㎜	陸獣	椎骨			1	
SI-11②	4㎜	シカ	橈骨	近位～中間	左	1	成獣
		イノシシ	大腿骨	近位	左	1	若獣
		イノシシ	上腕骨	中間～遠位	左	1	成獣
		イノシシ	肩甲骨		右	1	成獣
SI-12	4㎜	シカ	橈骨	中間～遠位	左		成獣
		イノシシ	上腕骨	遠位	右		成獣，イヌの噛み痕あり
		シカ	中足骨	遠位	不明		若獣，切断痕あり，原材のこり
		イノシシ	頚椎	破片			
		イノシシ	上顎骨	(m34M1)	左		m34磨耗　若獣
		イノシシ	下顎遊離歯	M123	右		M3萌出はじめ　若獣
		イノシシ	前頭骨	破片	左		若獣
	2㎜	鳥類		破片		1	
	1㎜	鳥類?	中足骨	中間～遠位			
SI-13	4㎜	イノシシ	下顎骨	(M3)	左		成獣，第3咬頭まで摩滅
		陸獣?	破片				
SI-14	2㎜	ネズミ	大腿骨		右	1	
SI-17	2㎜	小型陸獣	椎骨			2	
SI-28①	4㎜	陸獣	破片			2	
SI-28②	4㎜	シカ	中足骨	近位～中間	左	1	前面部分　原材の残り．
		イノシシ	下犬歯	破片	左	1	雄　原材
		シカ	上顎遊離歯	M2	右	1	
		鳥類	四肢骨	中間～遠位		1	
		陸獣	破片			3	
SI-29	4㎜	陸獣	指			1	若
	1㎜	小型陸獣	破片			1	



写真図版１　動物遺体

１・２．ハマグリ　３・４．オキシジミガイ　５・６．シオフキガイ　７・８．サルボウガイ類　９・10．シジミ類　11．アカニシ　12～15．加工品・原材（12．貝輪　13．キリ　14．イノシシ雄犬歯破片　15．シカ中足骨破片）　16．シカ橈骨左側近位部～中間部　17．シカ橈骨左側中間部～遠位部　18～28．イノシシ（18．左側若獣上顎骨　19．右下顎第２後臼歯　20．右下顎第３後臼歯　21．右肩甲骨　22．左上腕骨遠位部　23．右上腕骨遠位部）　二枚貝のうち７は右側、その他は左側。

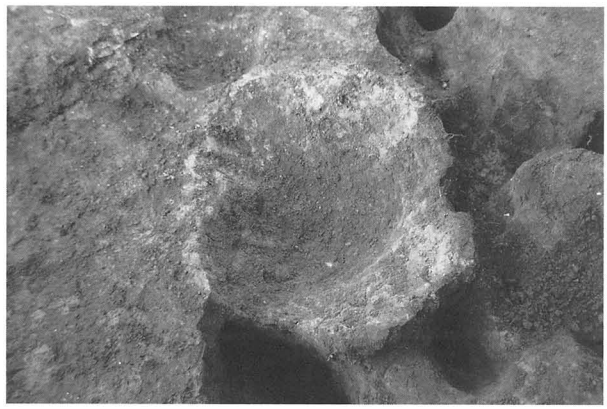
写　真　図　版

住居跡SI1完掘

住居跡SI2完掘

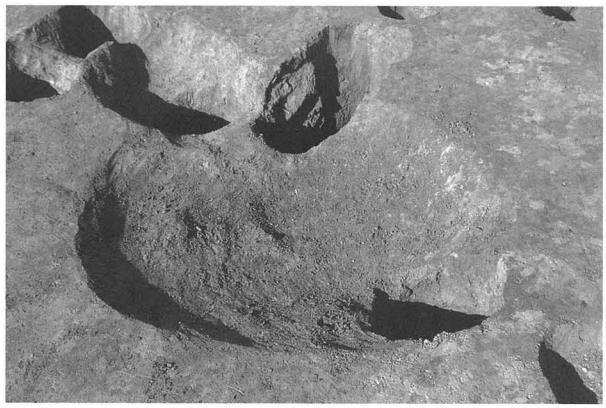
住居跡SI3・7完掘

住居跡SI3入口施設



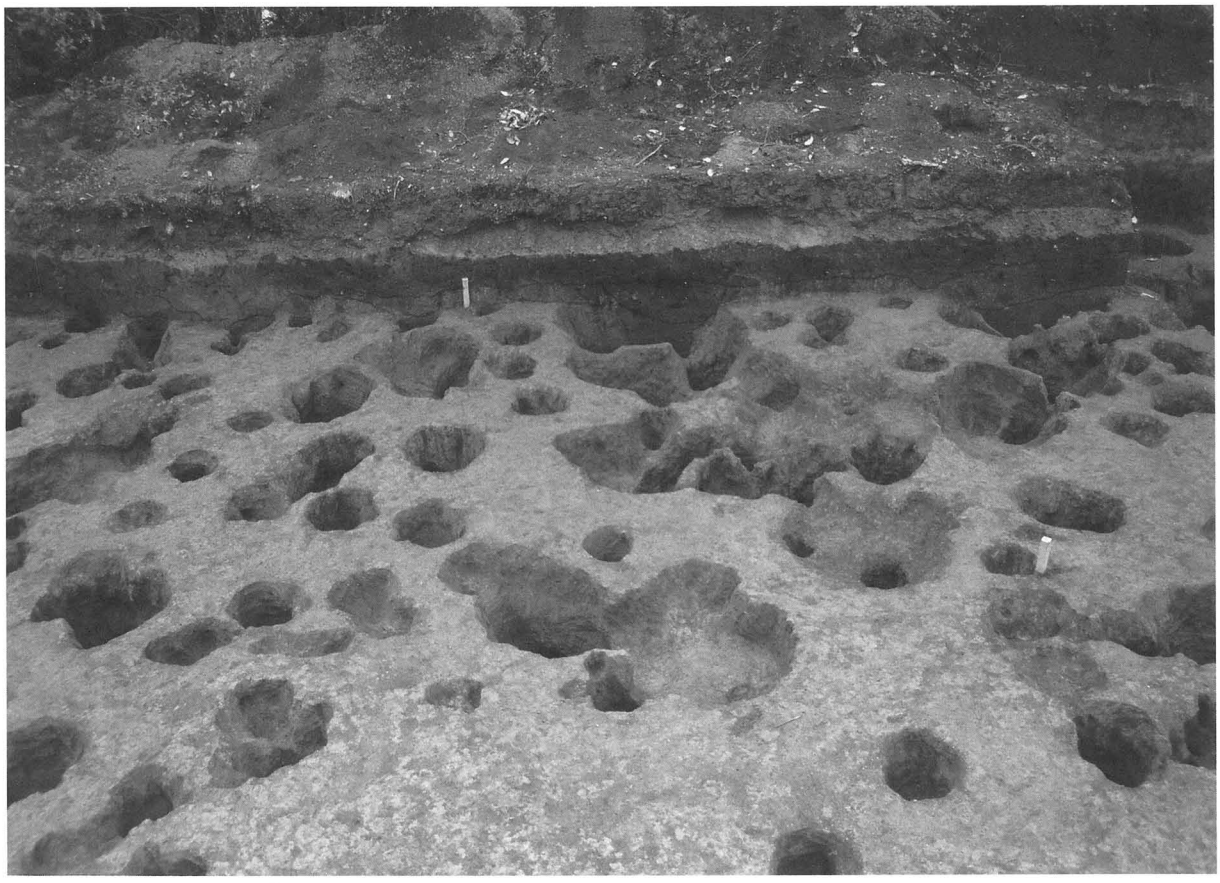
住居跡SI3炉跡

住居跡SI3遺物出土状況



住居跡SI4炉跡

住居跡SI4完掘



住居跡SI5完掘

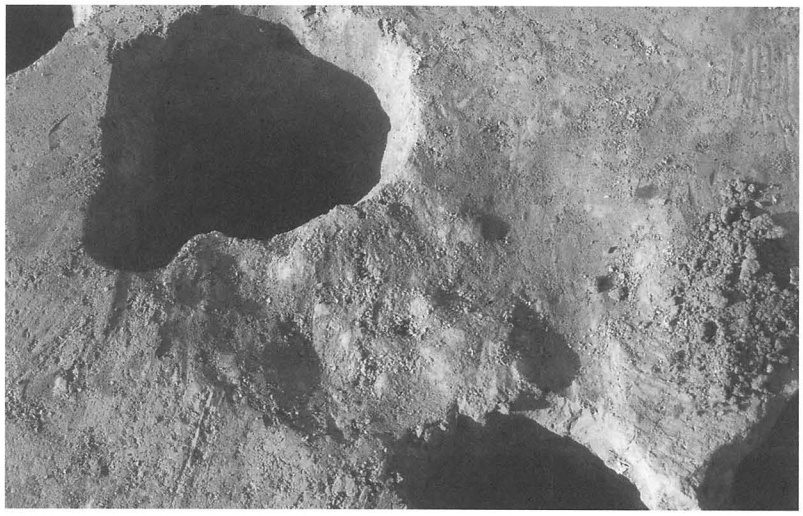
住居跡SI6完掘

住居跡SI8完掘

住居跡SI9完掘

住居跡SI10完掘

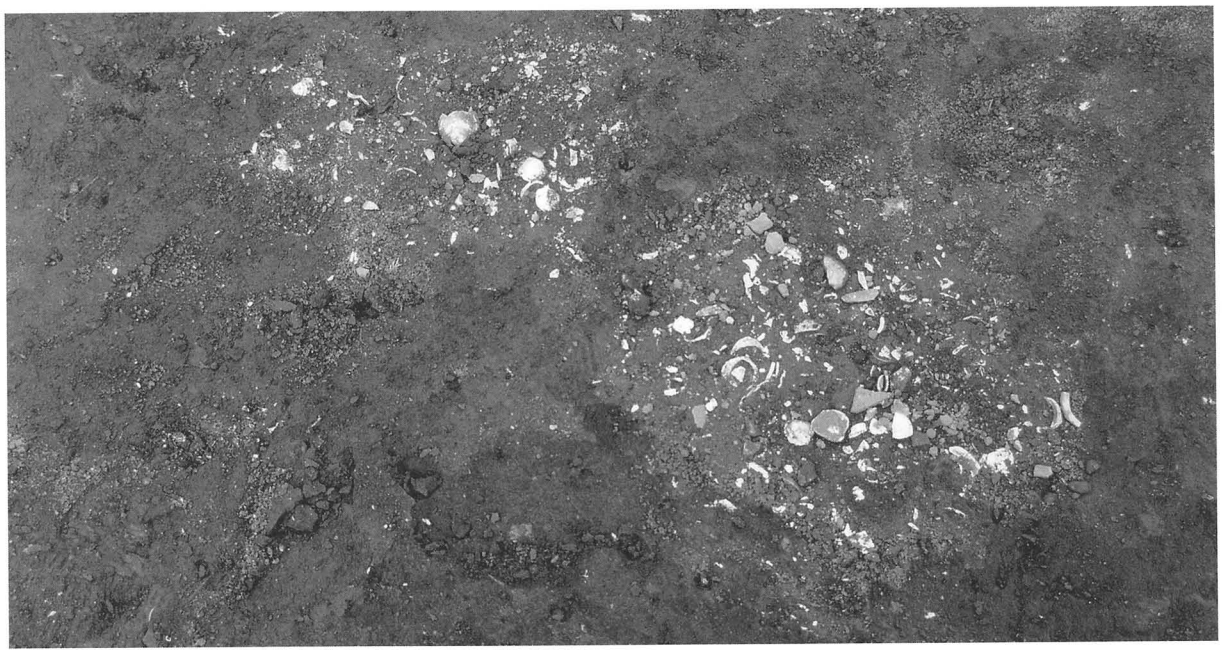
住居跡SI11完掘



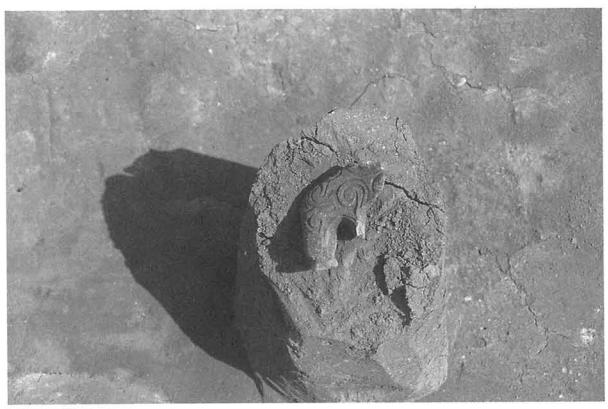
住居跡SI11炉跡

住居跡SI11遺物出土状況

住居跡SI12完掘



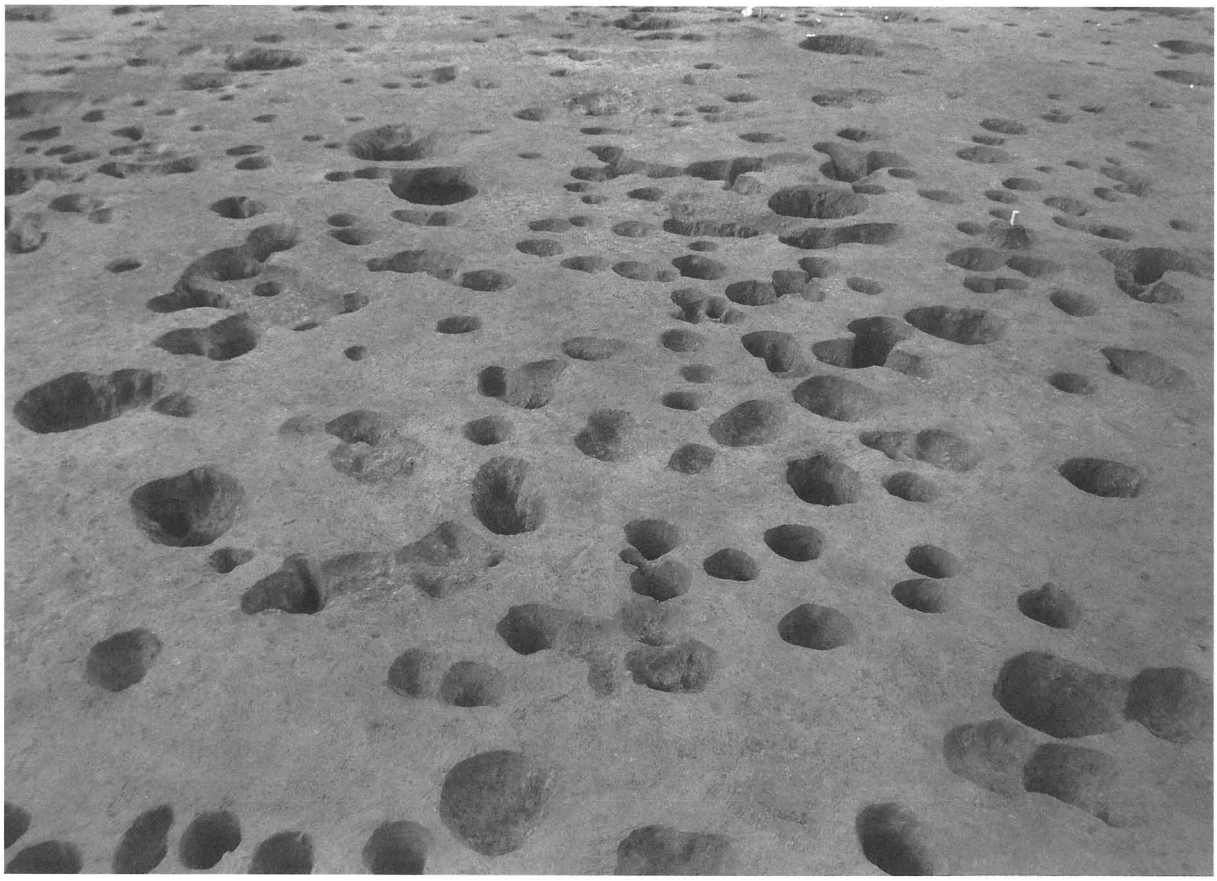
住居跡SI12遺物出土状況



住居跡SI12遺物出土状況

住居跡SI12遺物出土状況

住居跡SI13完掘



住居跡SI14完掘

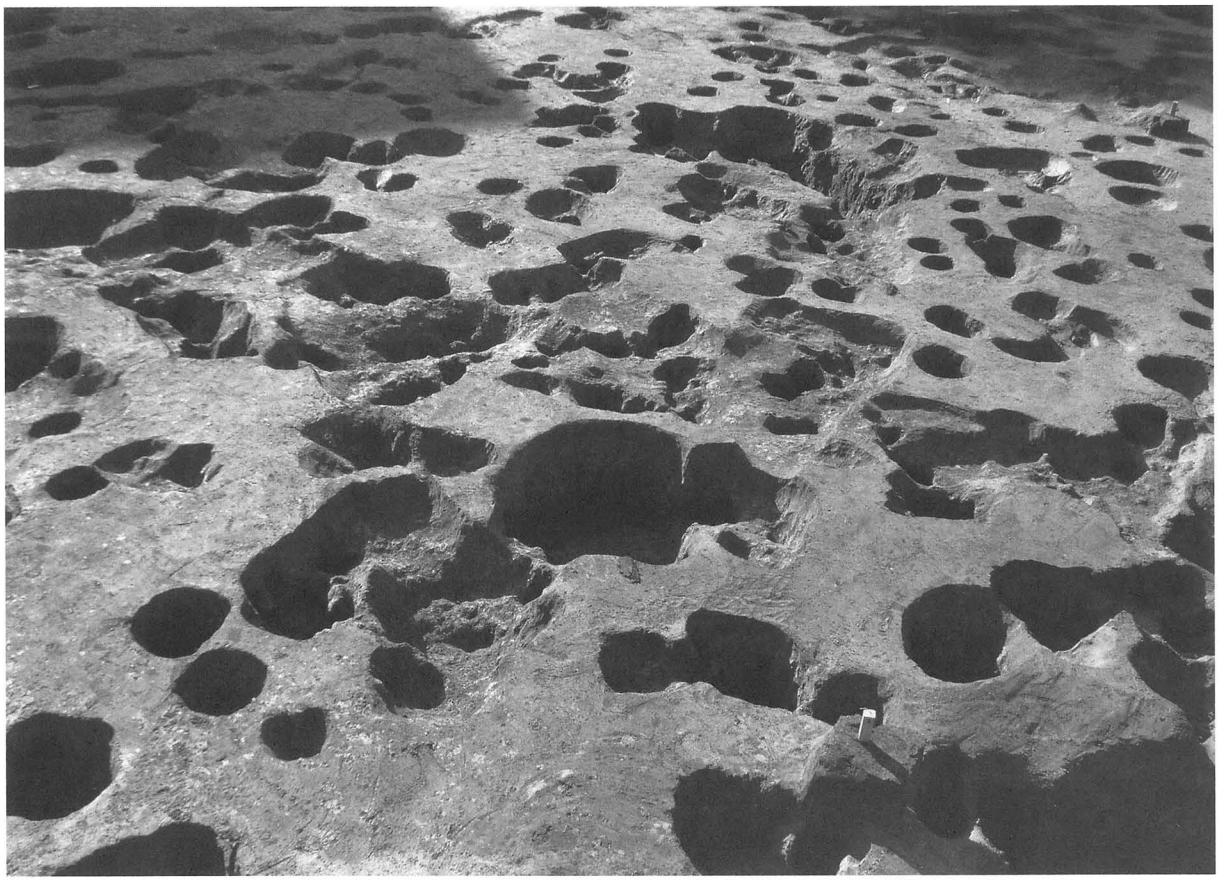
住居跡SI15完掘

住居跡SI16完掘

住居跡SI17完掘

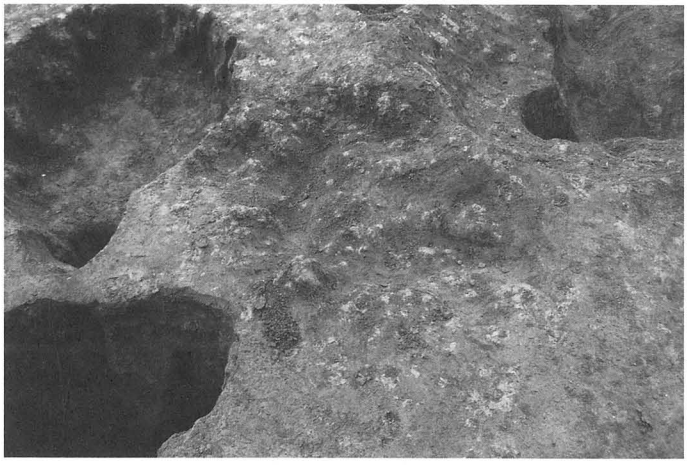
住居跡SI18完掘

住居跡SI19完掘



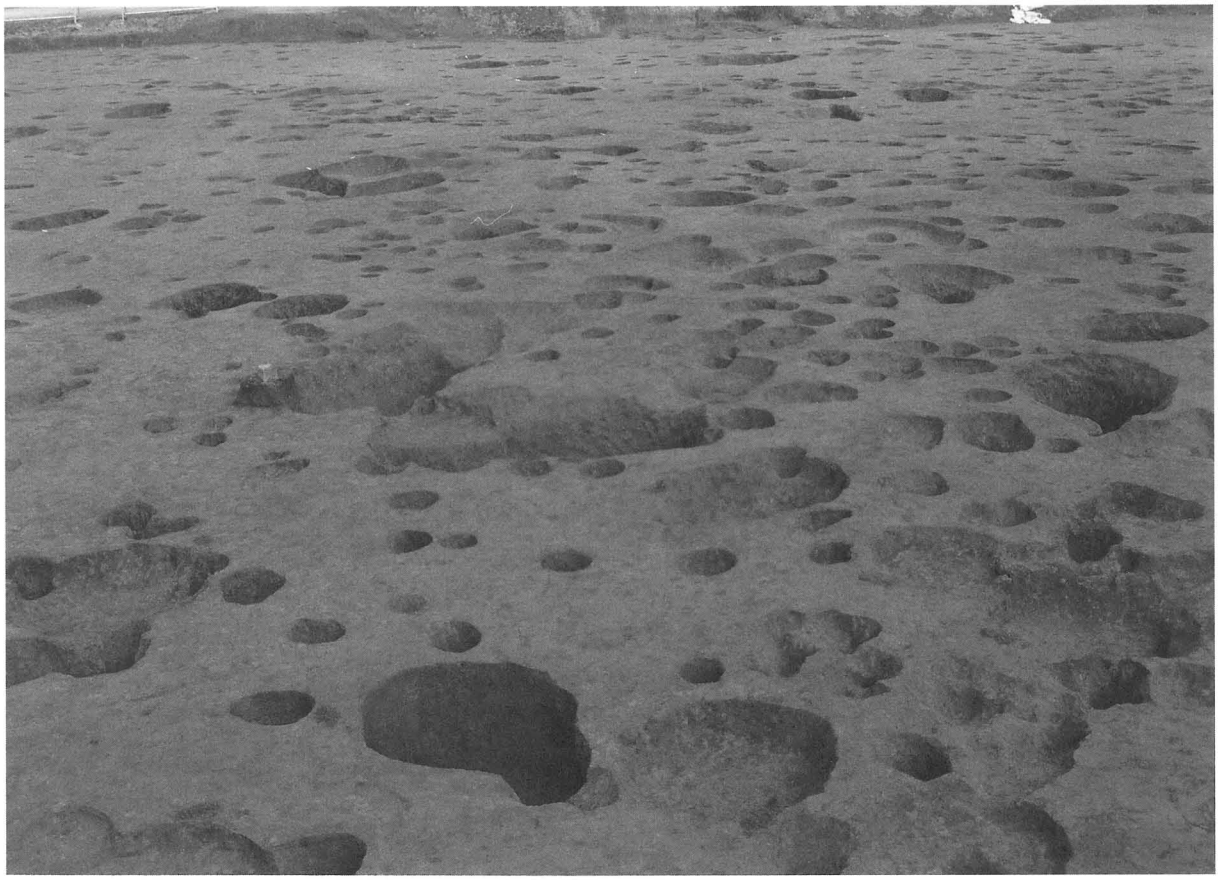
住居跡SI20完掘

住居跡SI21完掘

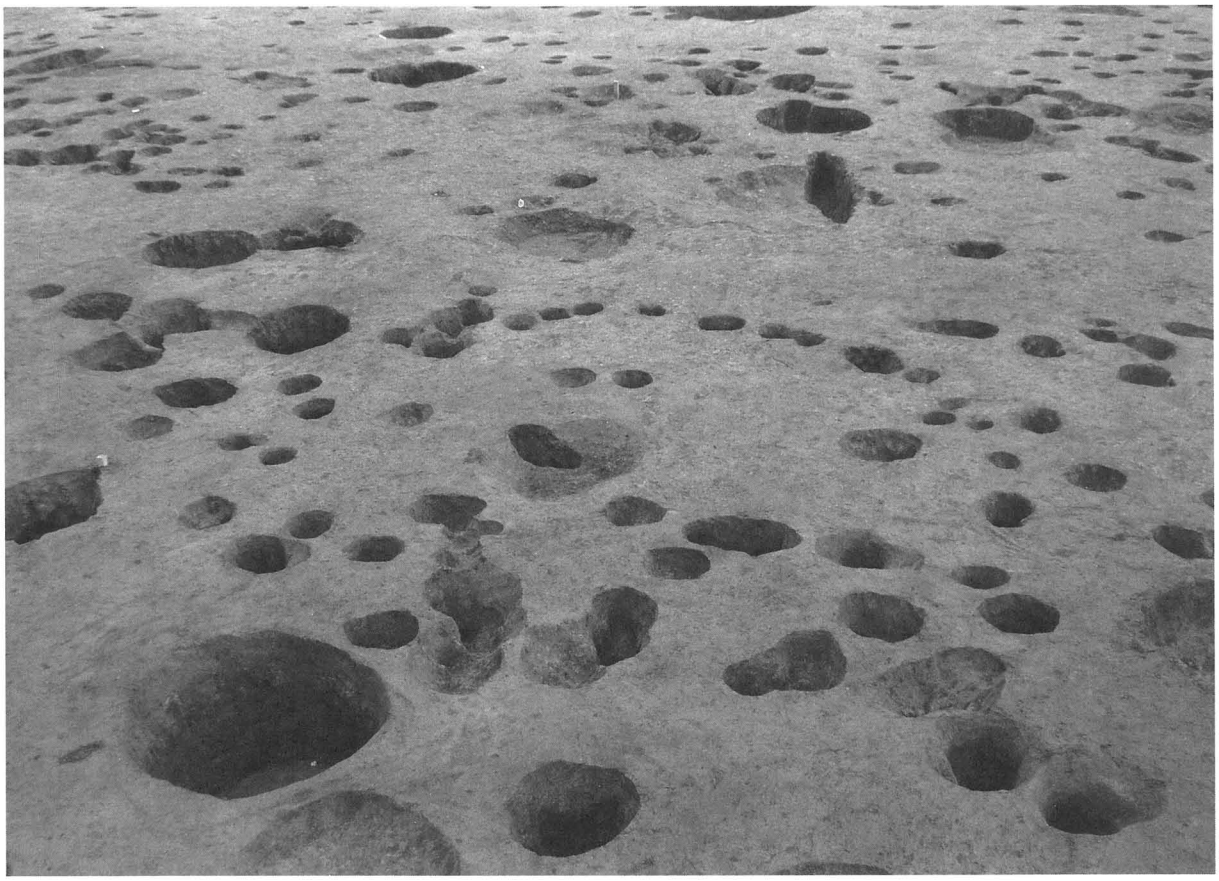


住居跡SI21炉跡

住居跡SI21遺物出土状況

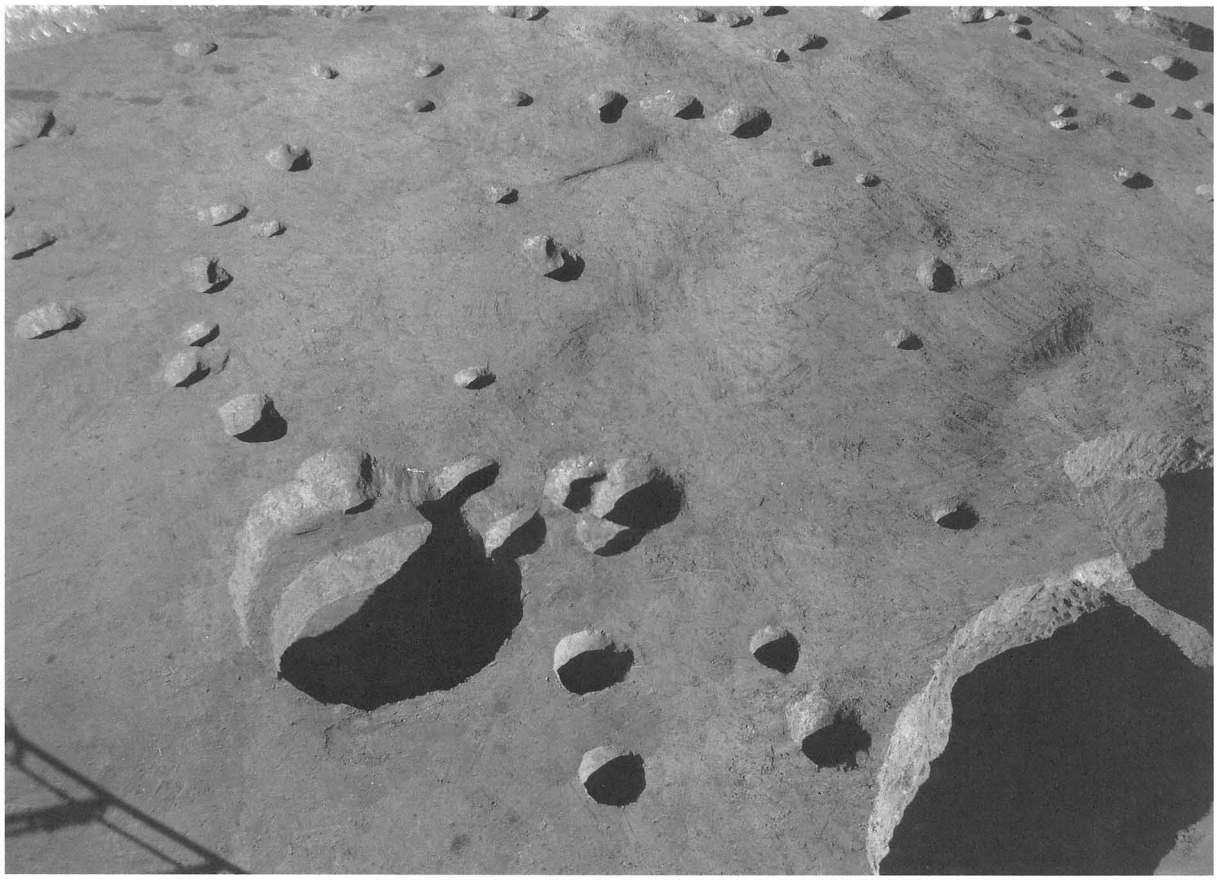


住居跡SI22完掘



住居跡SI23完掘

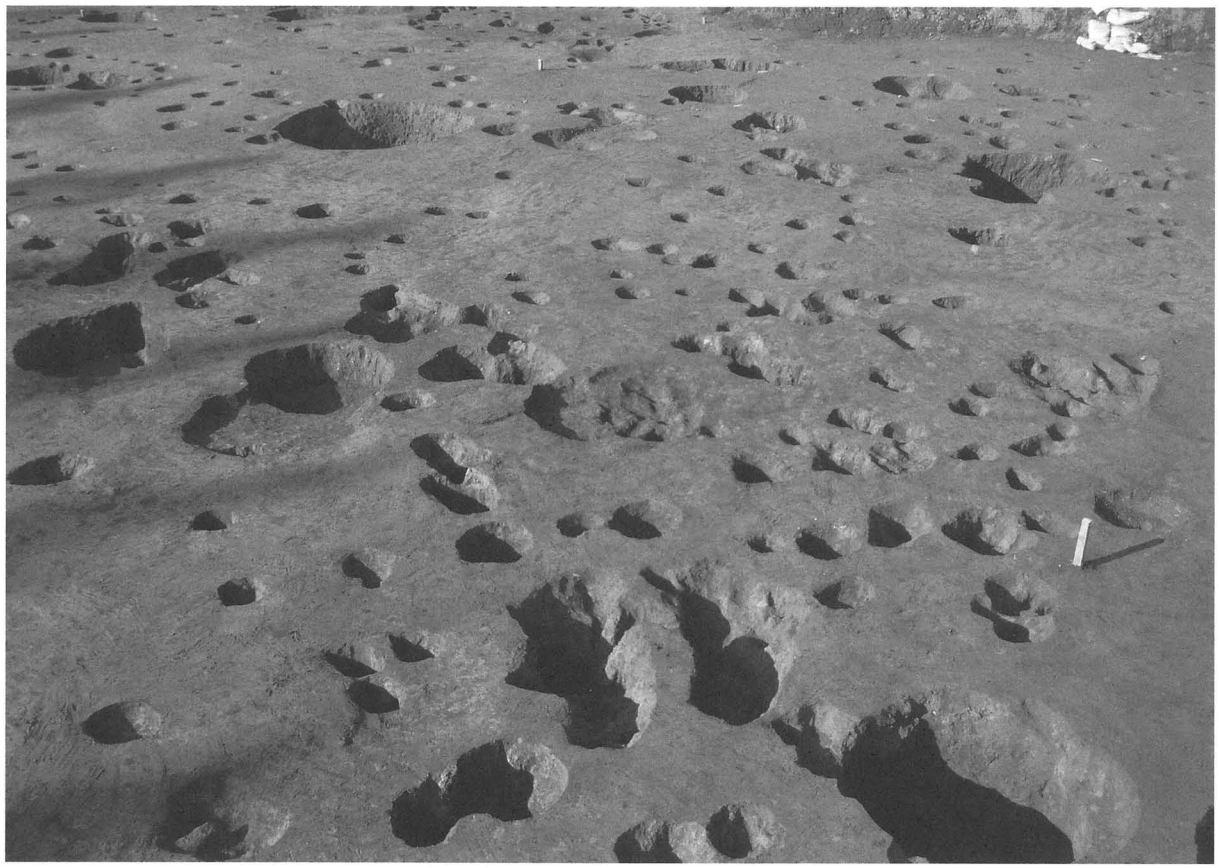
住居跡SI24完掘



住居跡SI25完掘

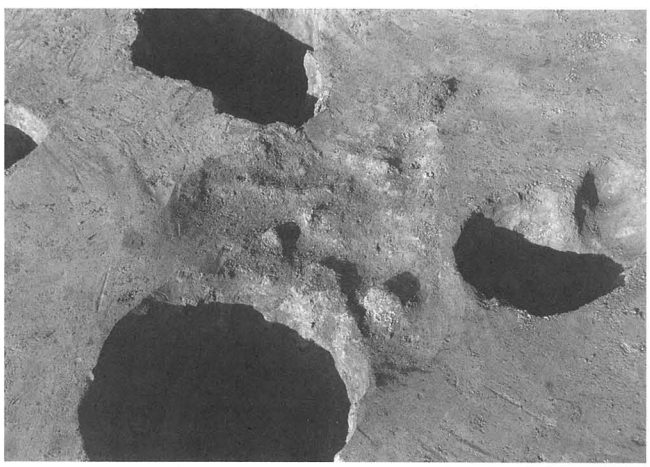
住居跡SI26完掘

住居跡SI27完掘



住居跡SI28完掘

住居跡SI28炉跡

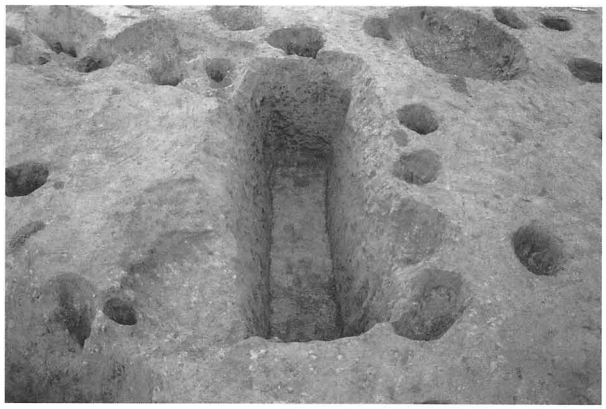


住居跡SI29炉跡

住居跡SI29完掘

住居跡SI30完掘

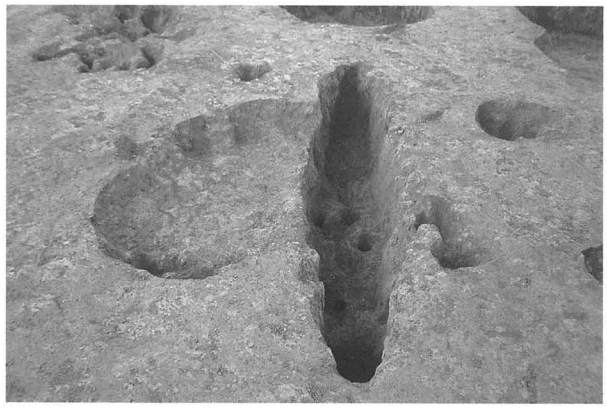
土坑SK89



土坑SK27

土坑SK41

土坑SK55

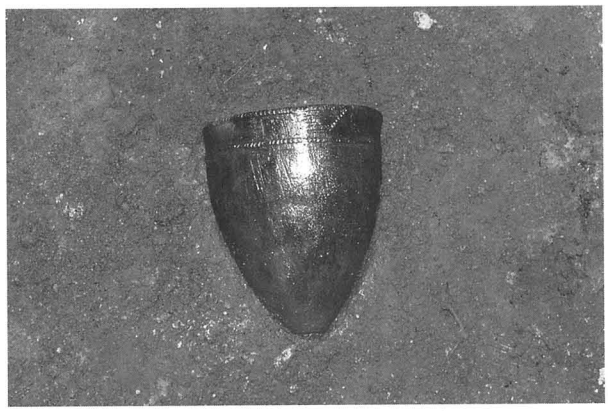


土坑ＳK135・137

土坑SK151・152

土坑SK162

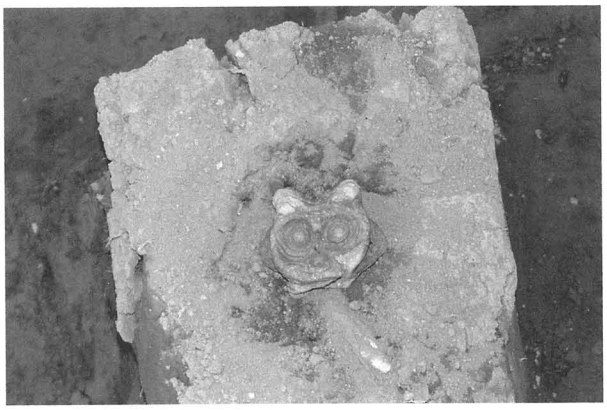
土坑SK155



土坑SK155遺物出土状況

土坑SK170

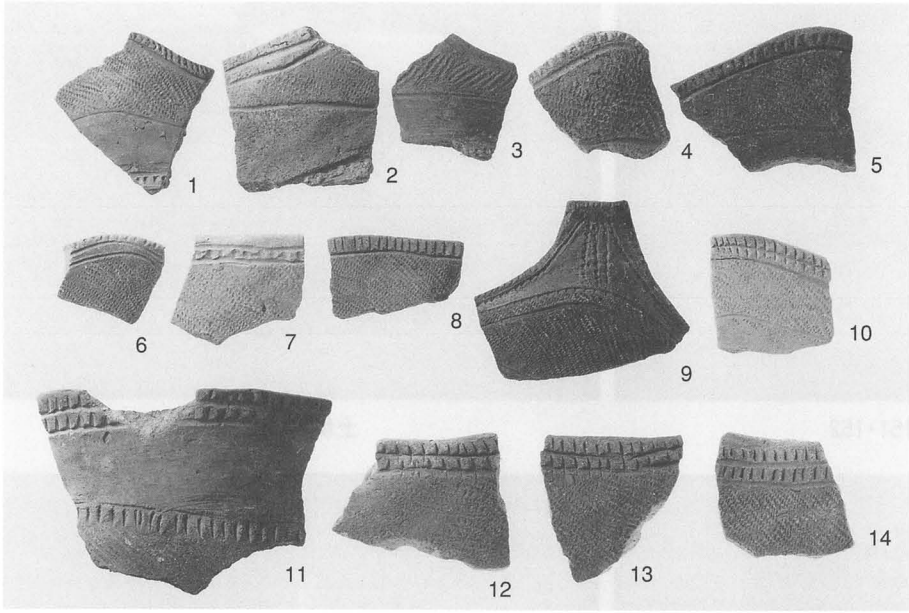
土坑SK173



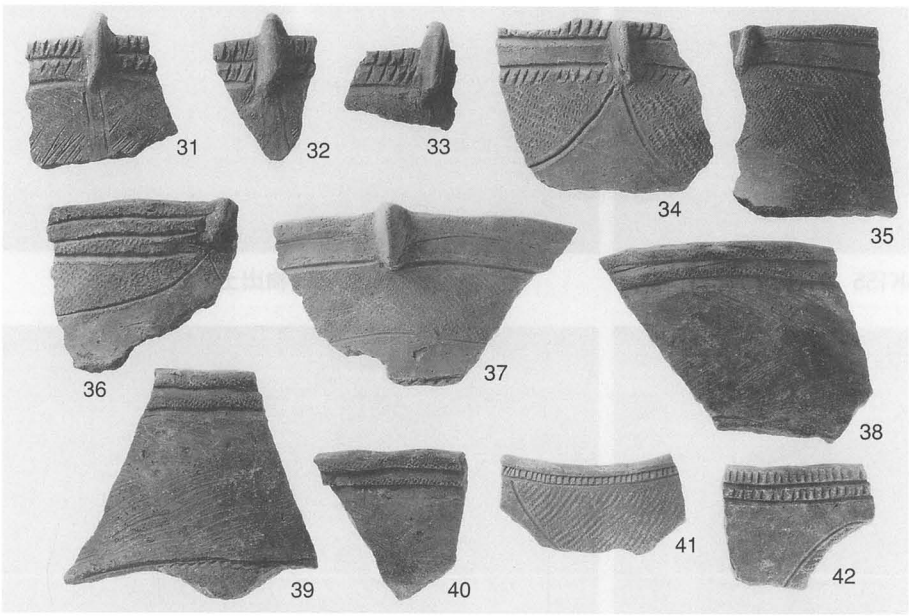
包含層遺物出土状況

包含層遺物出土状況

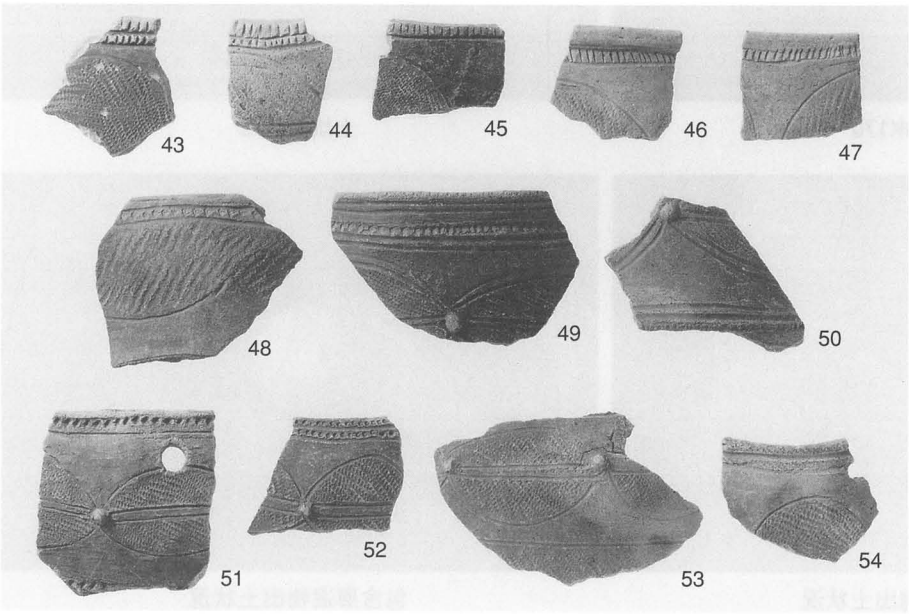
PL.20



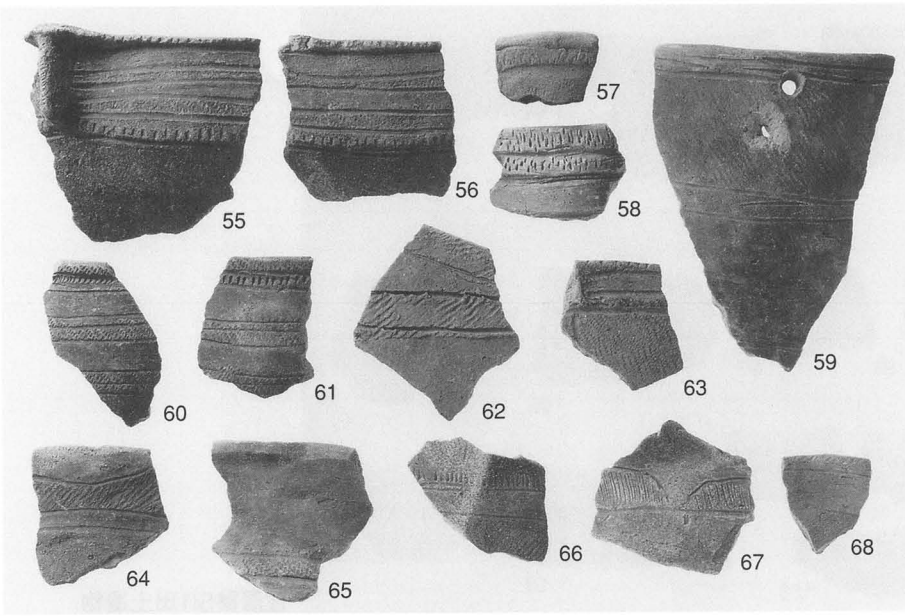
住居跡SI1出土遺物



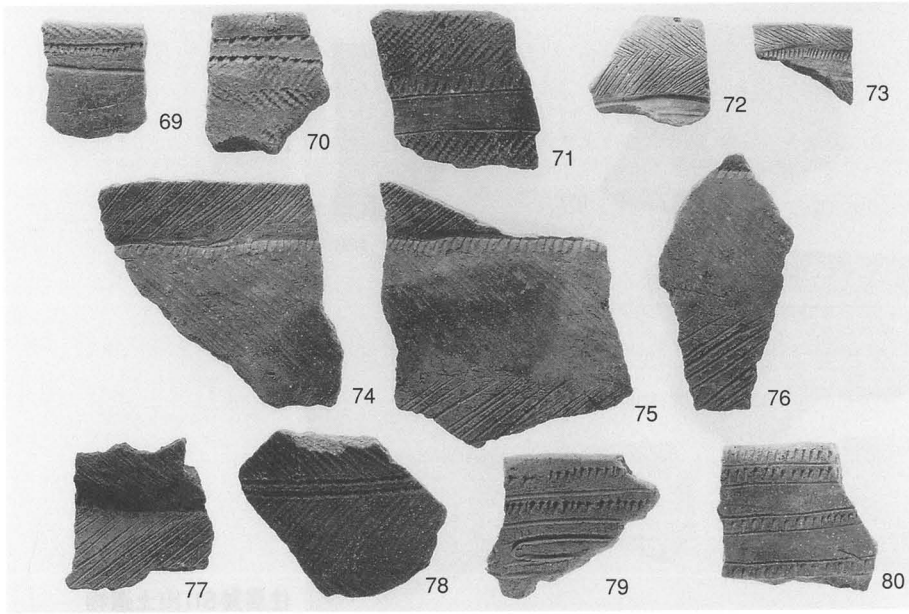
住居跡SI1出土遺物



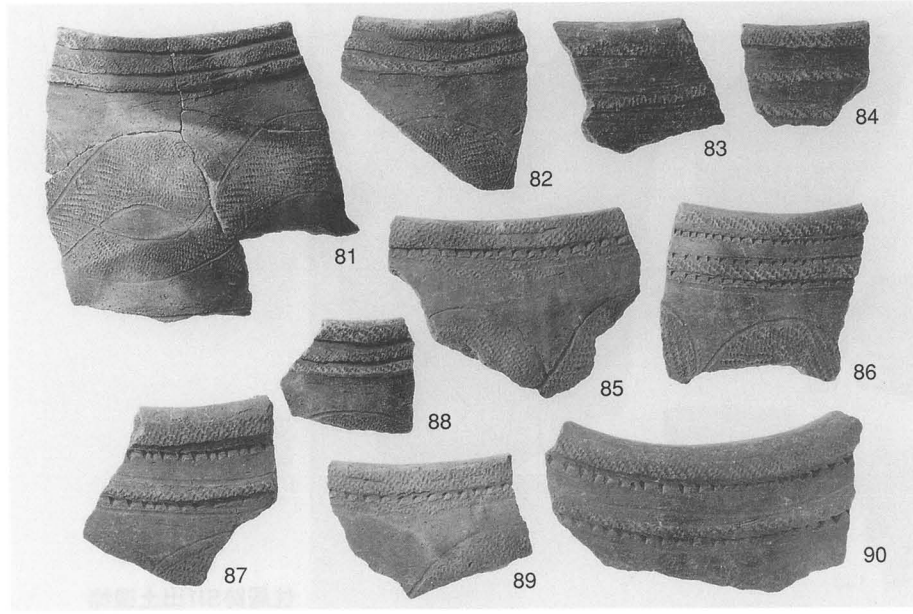
住居跡SI1出土遺物



住居跡SI1出土遺物

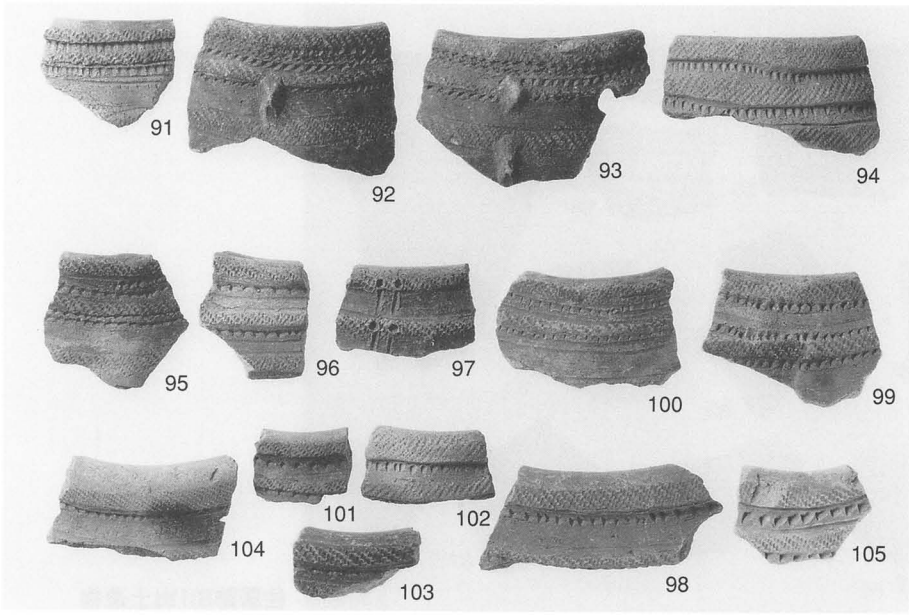


住居跡SI1出土遺物

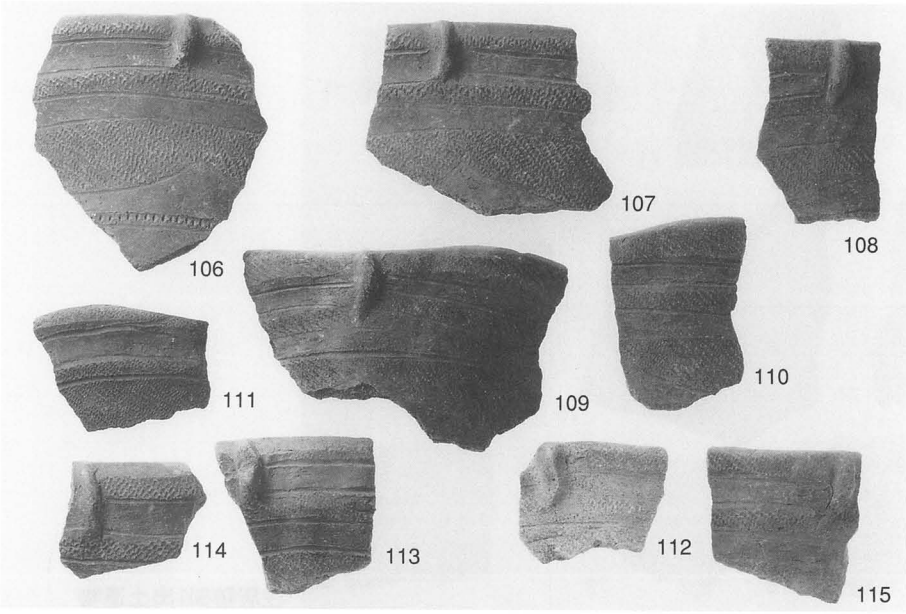


住居跡SI1出土遺物

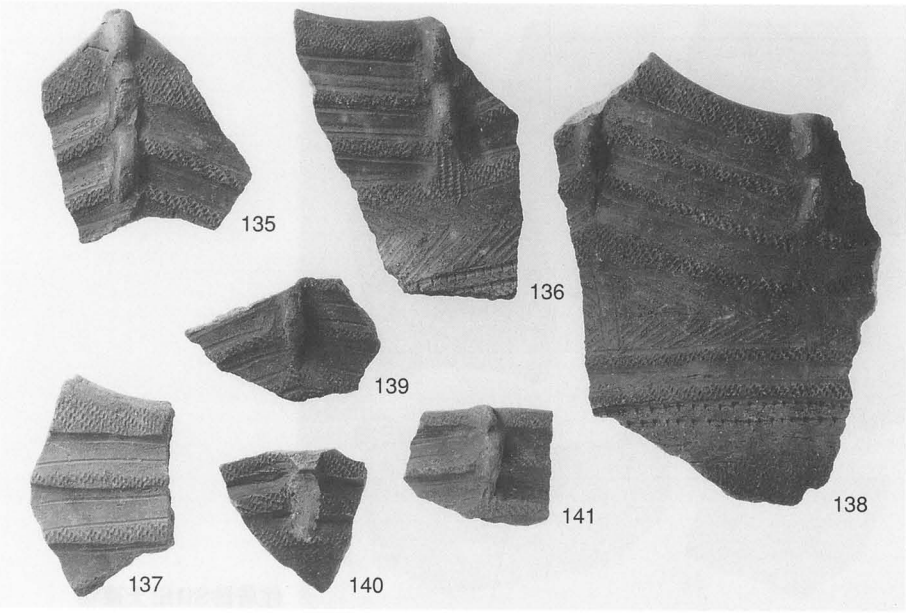
PL.22



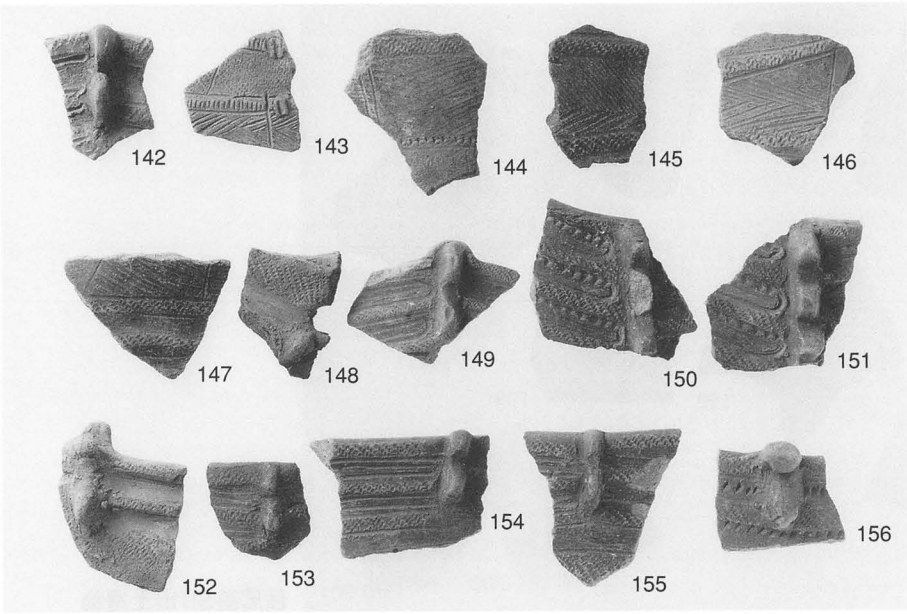
住居跡SI1出土遺物



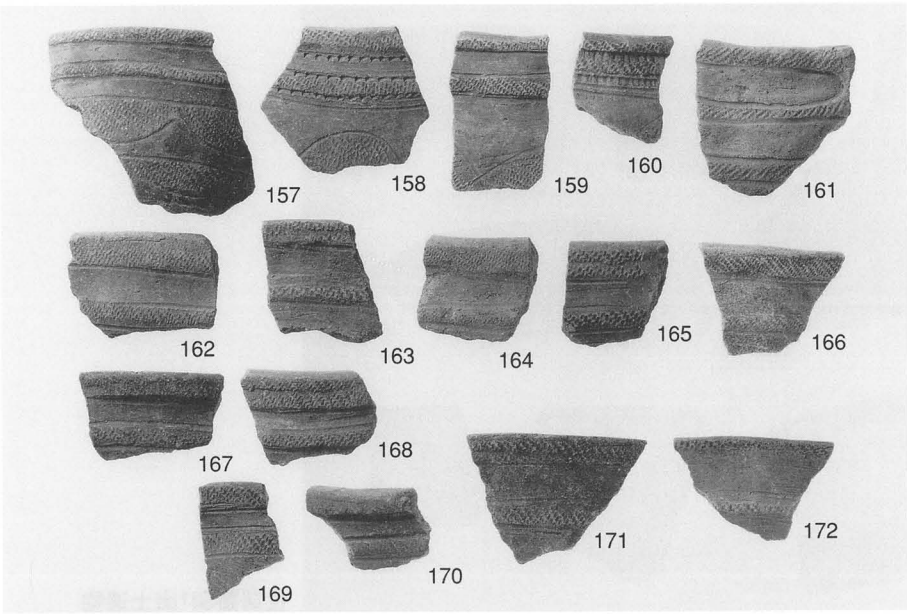
住居跡SI1出土遺物



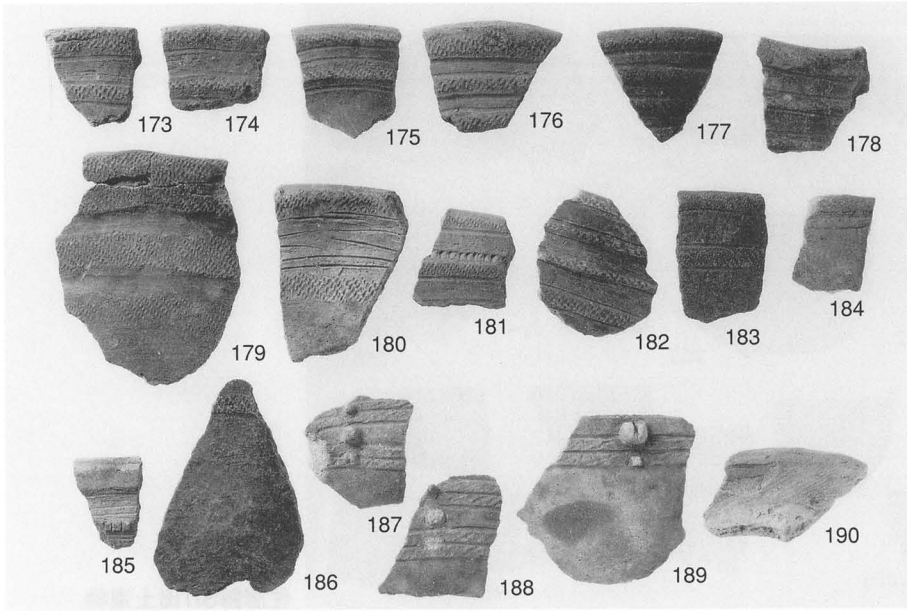
住居跡SI1出土遺物



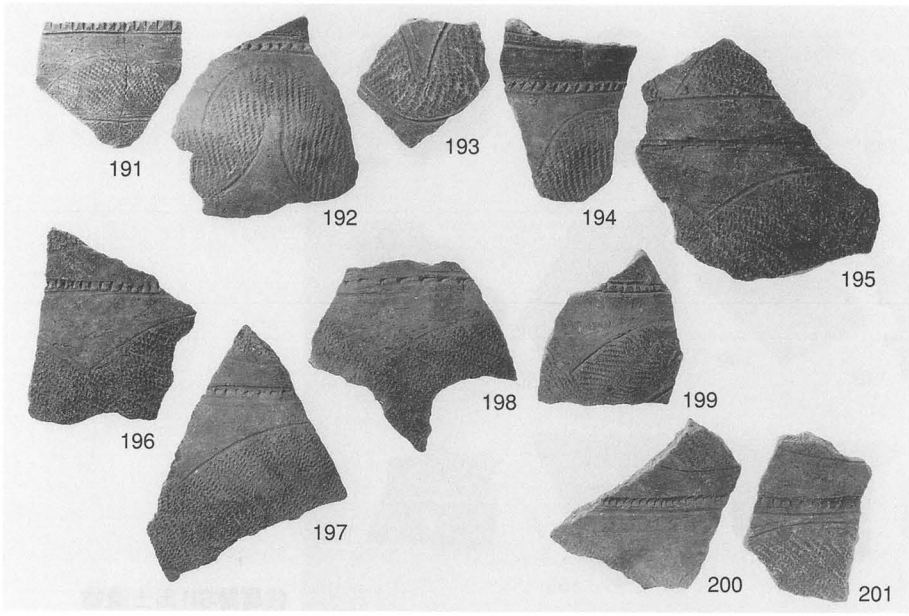
住居跡SI1出土遺物



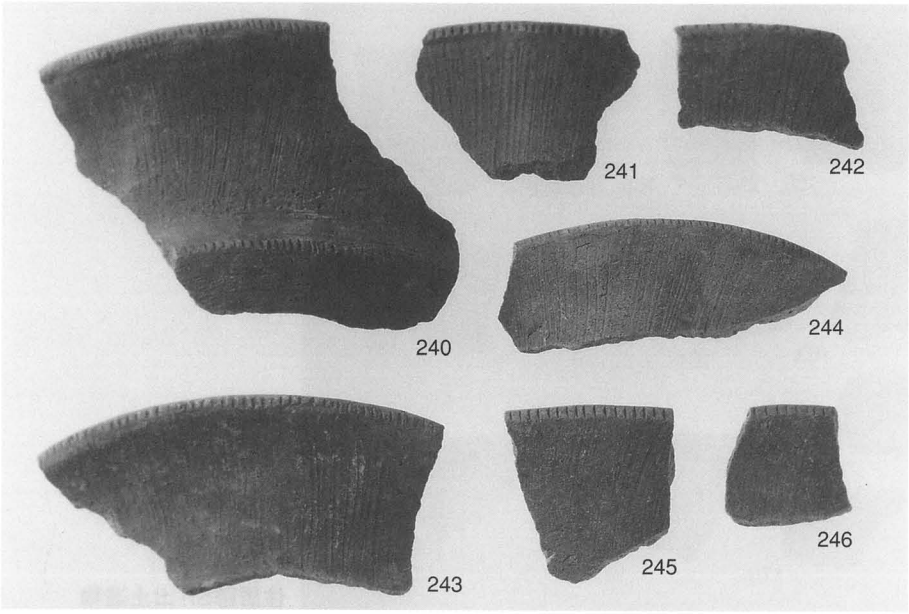
住居跡SI1出土遺物



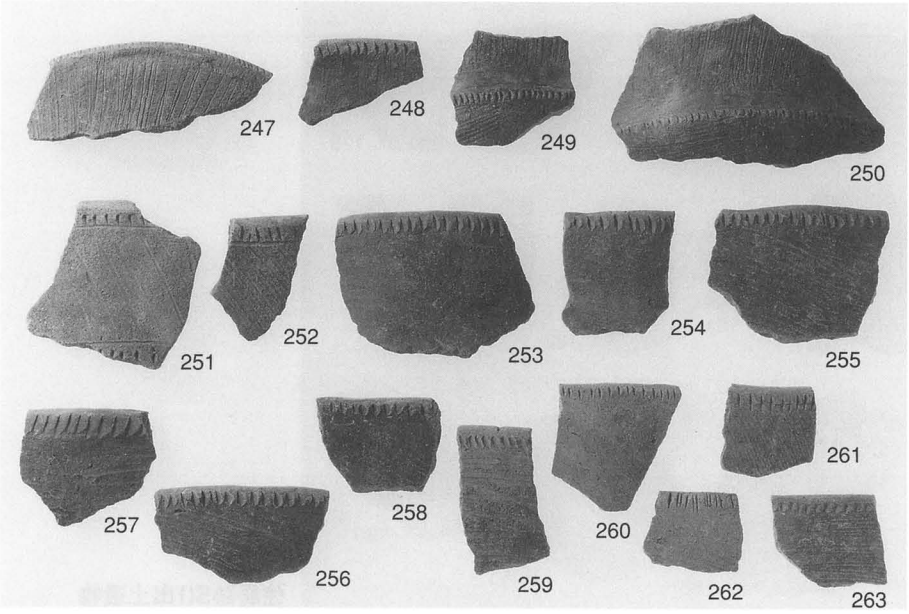
住居跡SI1出土遺物



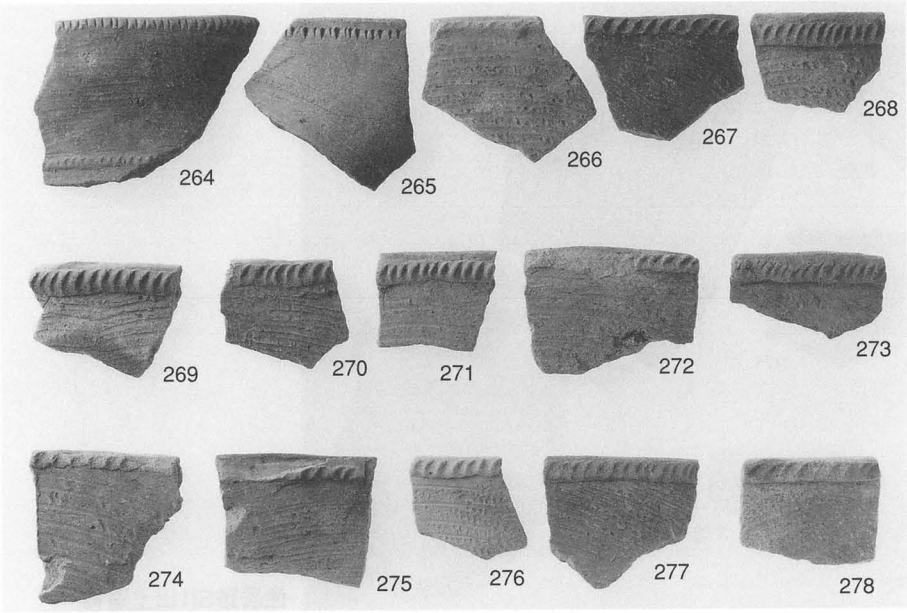
住居跡SI1出土遺物



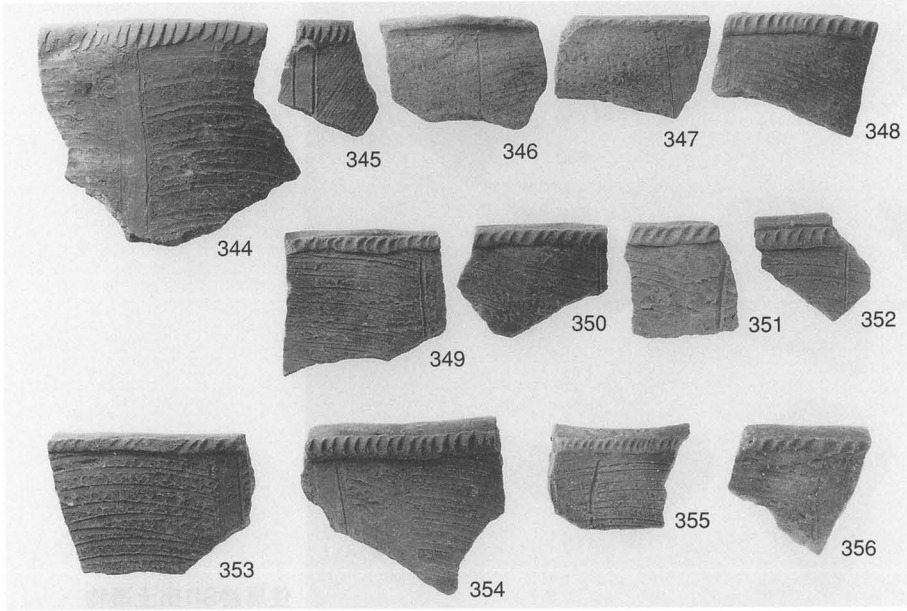
住居跡SI1出土遺物



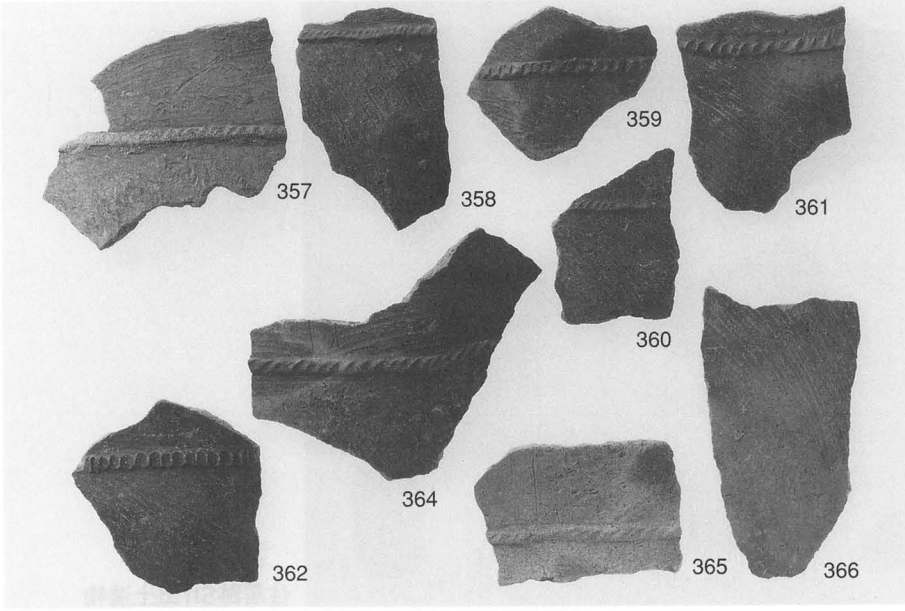
住居跡SI1出土遺物



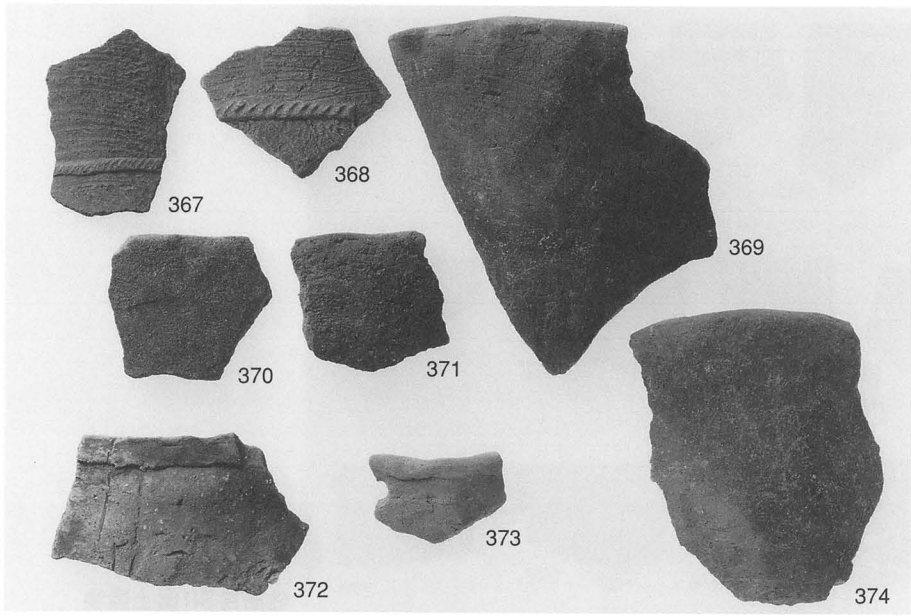
住居跡SI1出土遺物



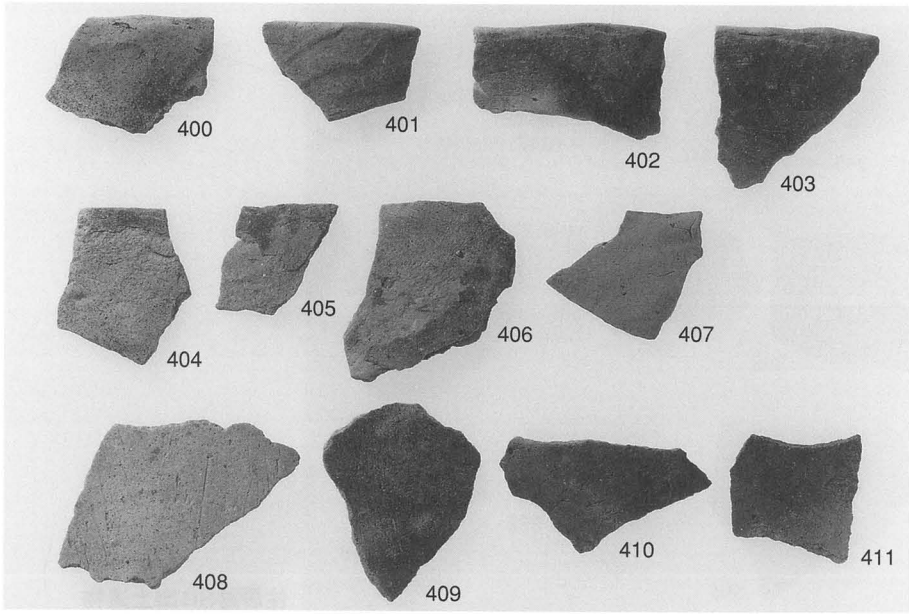
住居跡SI1出土遺物



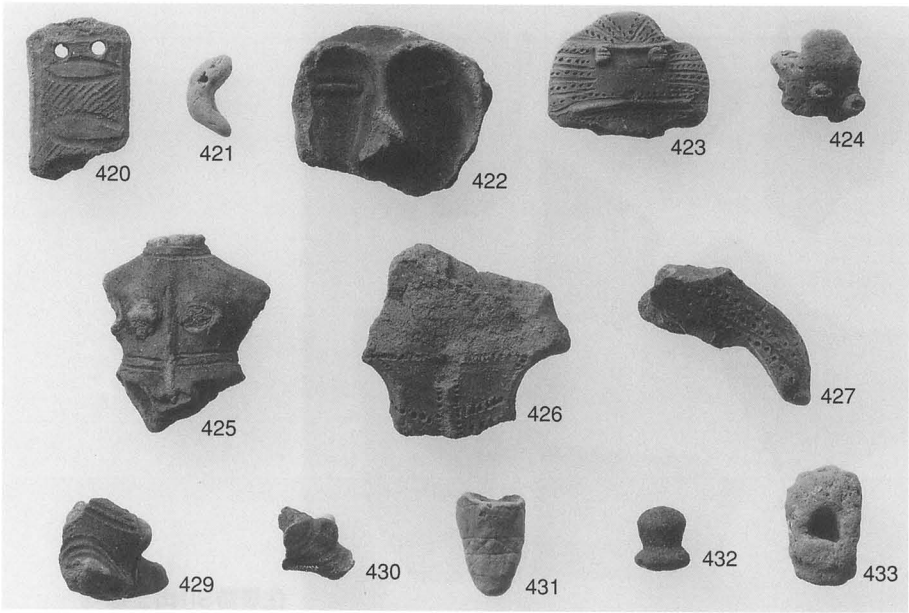
住居跡SI1出土遺物



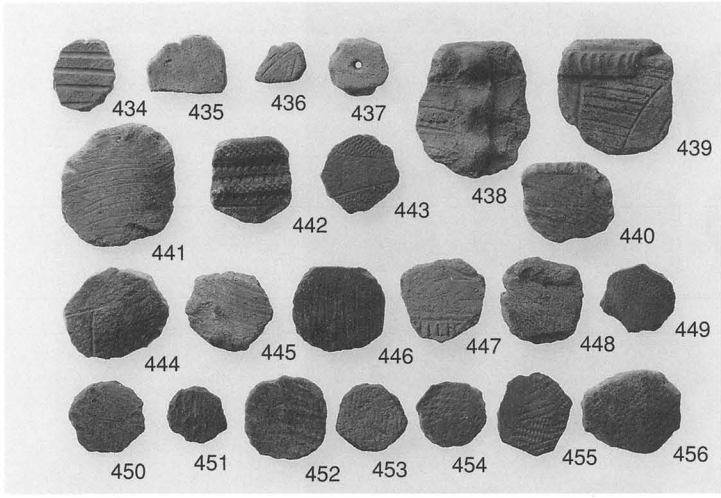
住居跡SI1出土遺物



住居跡SI1出土遺物

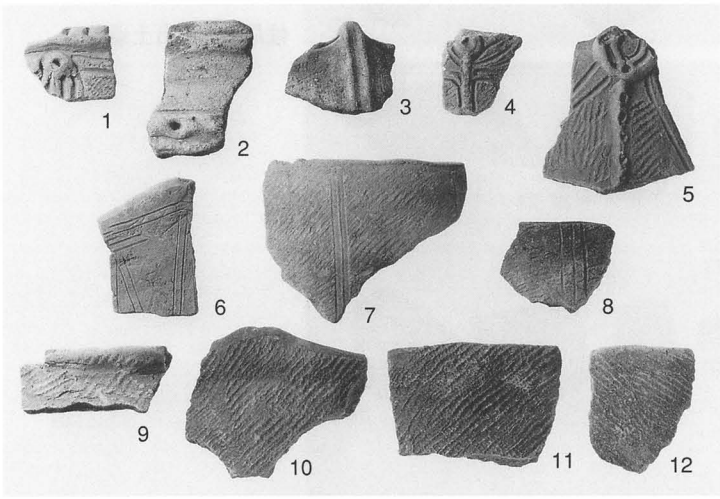


住居跡SI1出土遺物

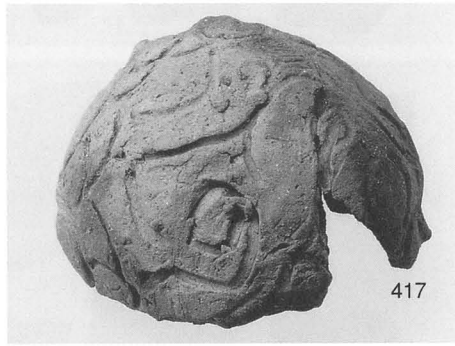


住居跡SI1出土遺物

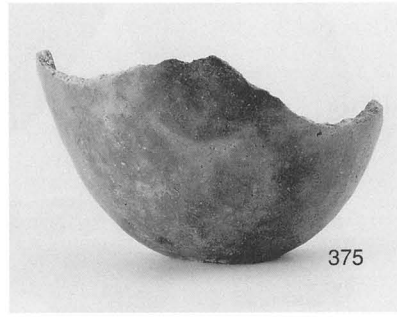
住居跡SI1出土遺物



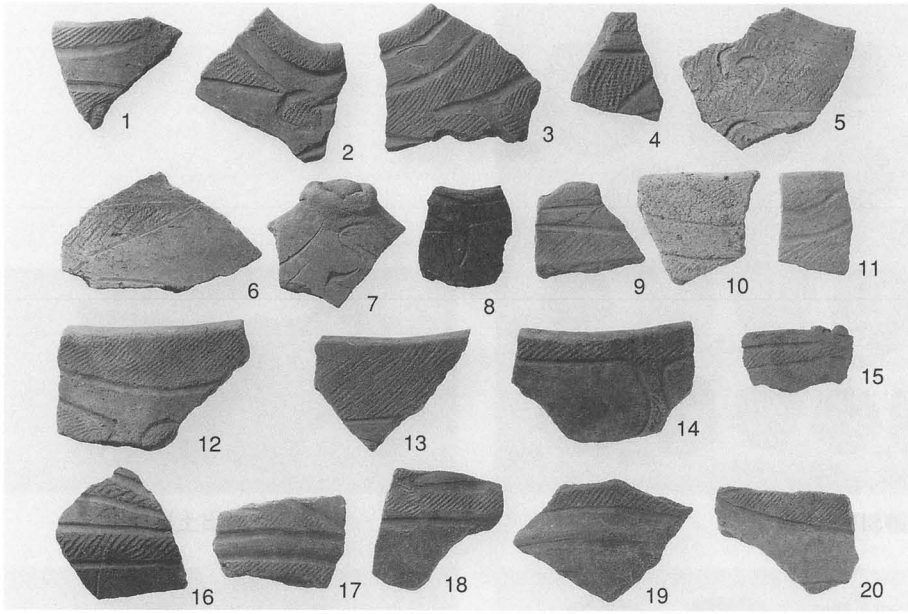
住居跡SI2出土遺物



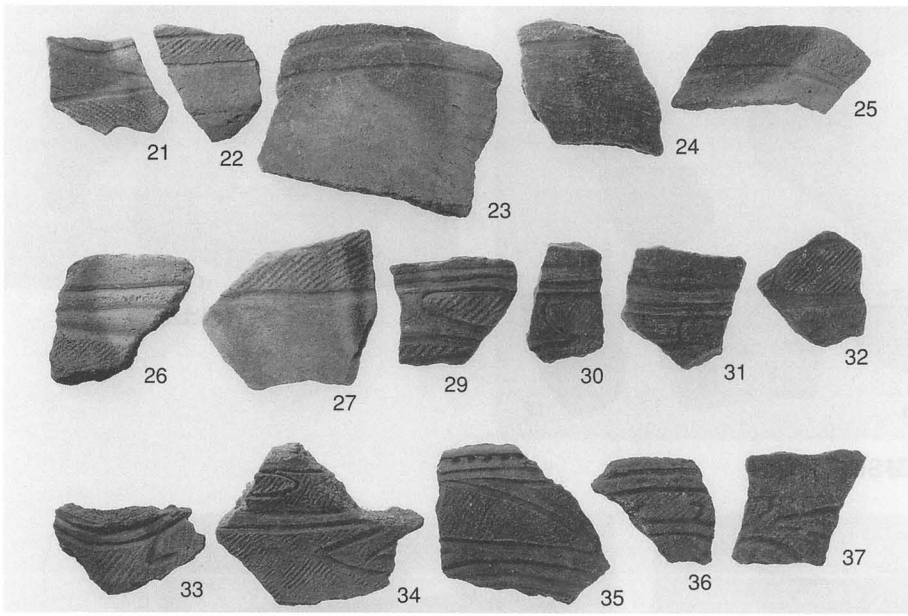
住居跡SI1出土遺物



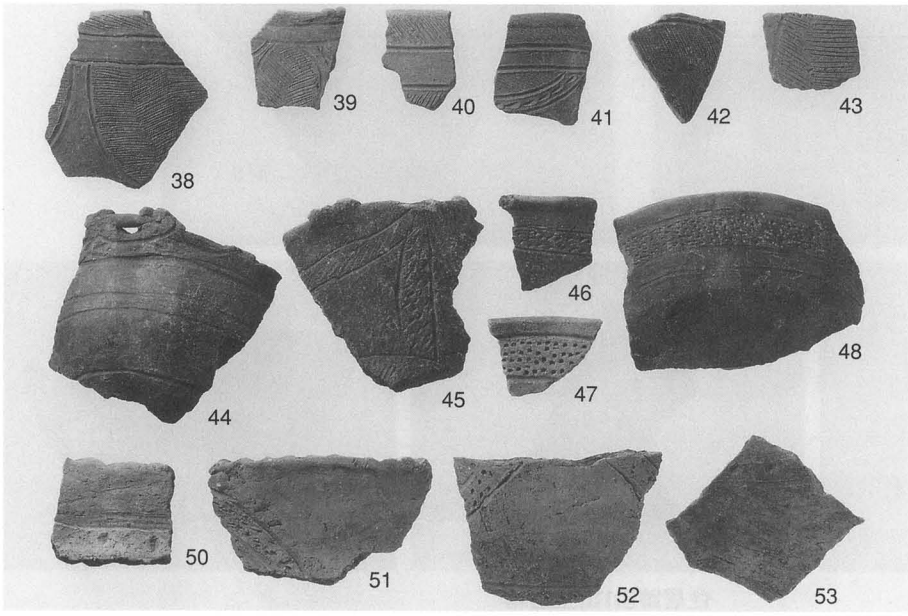
住居跡SI1出土遺物



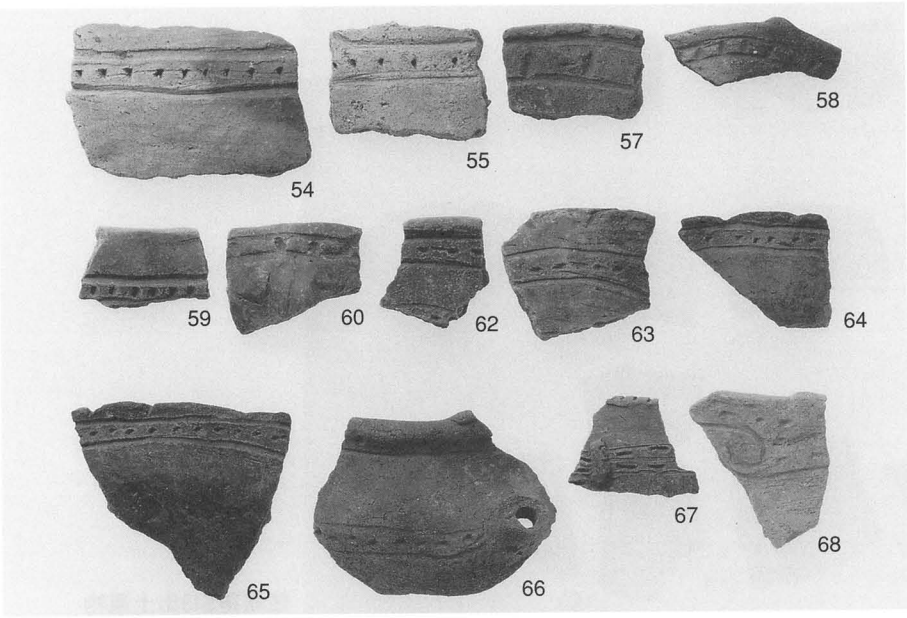
住居跡SI3出土遺物



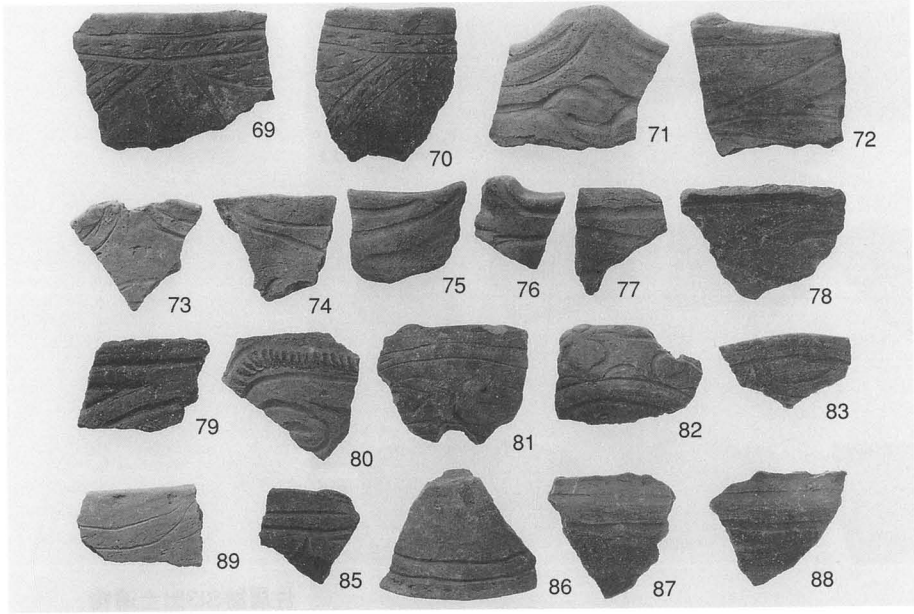
住居跡SI3出土遺物



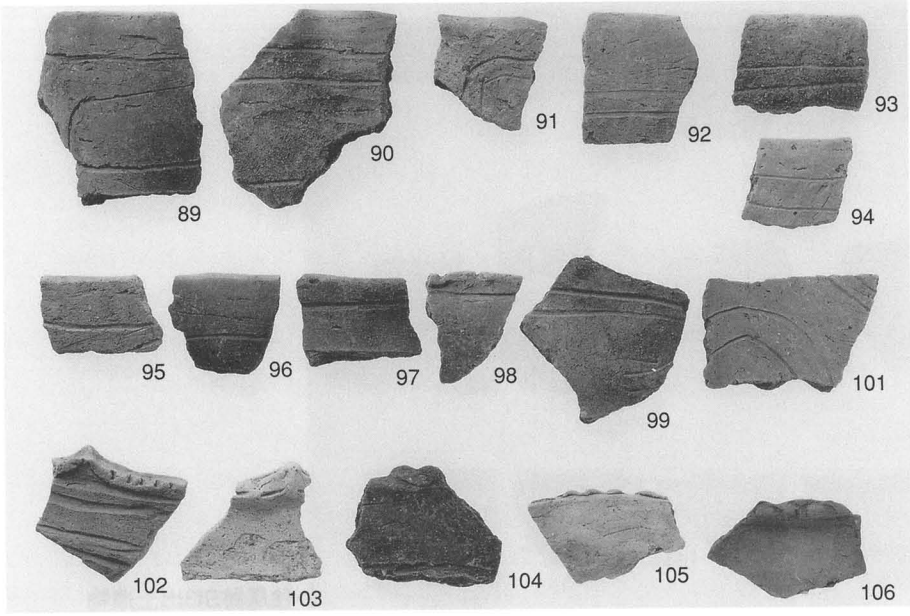
住居跡SI3出土遺物



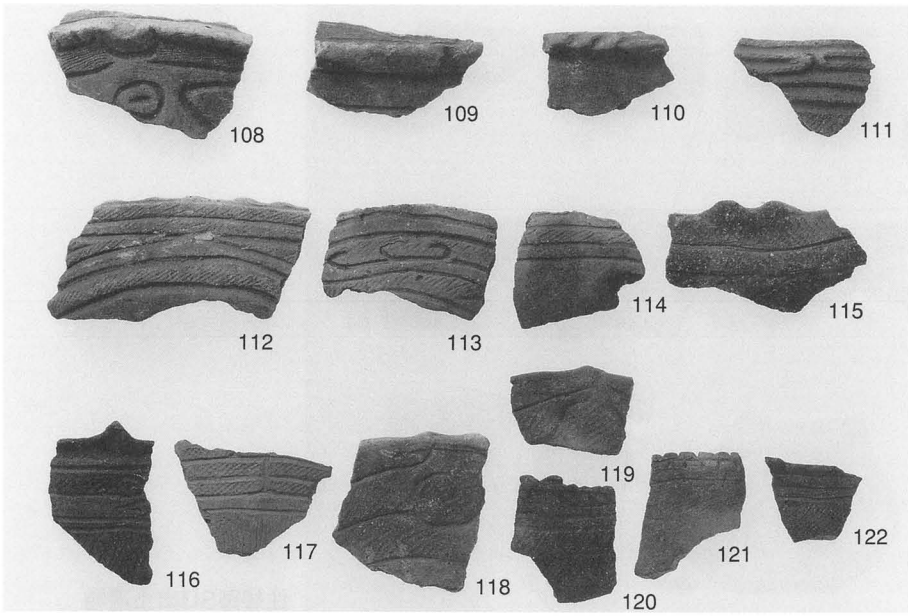
住居跡SI3出土遺物



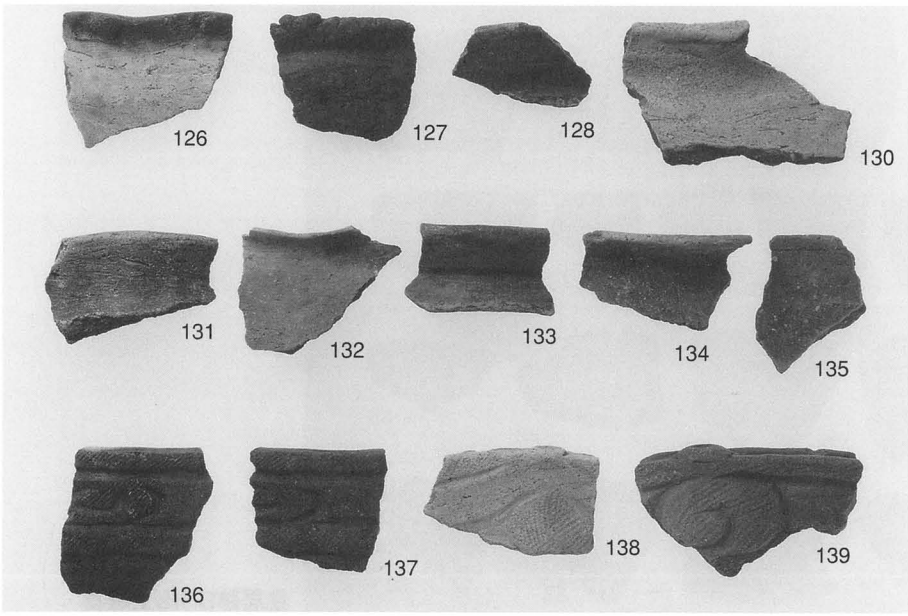
住居跡SI3出土遺物



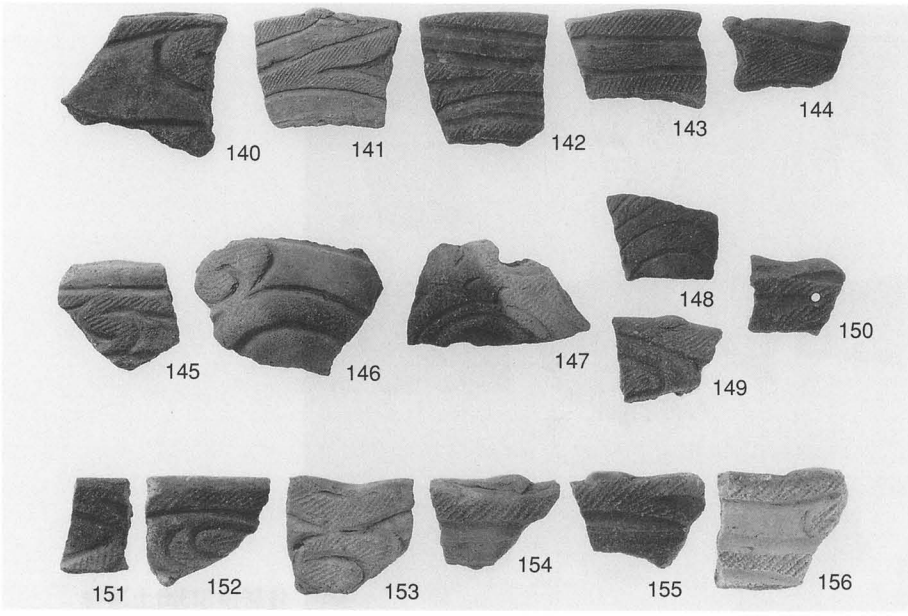
住居跡SI3出土遺物



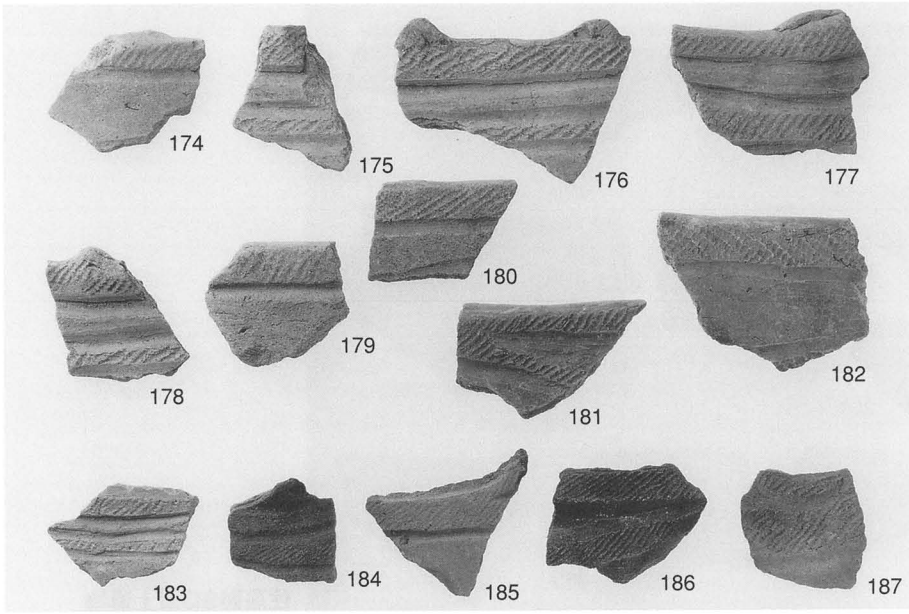
住居跡SI3出土遺物



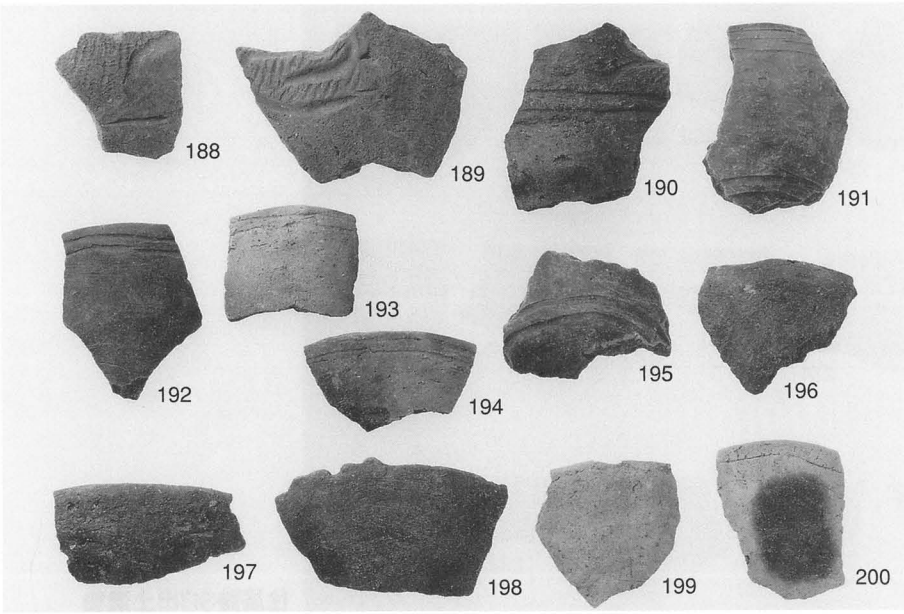
住居跡SI3出土遺物



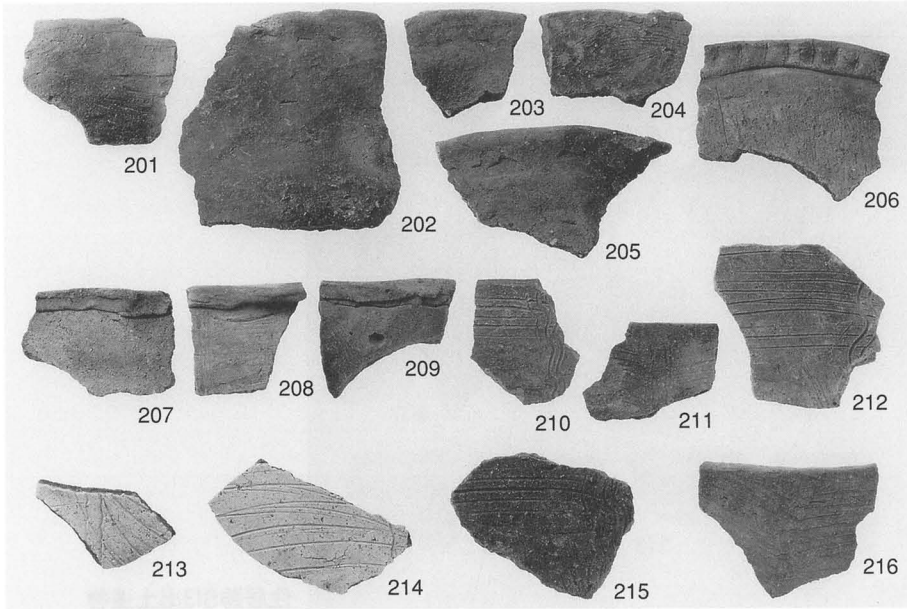
住居跡SI3出土遺物



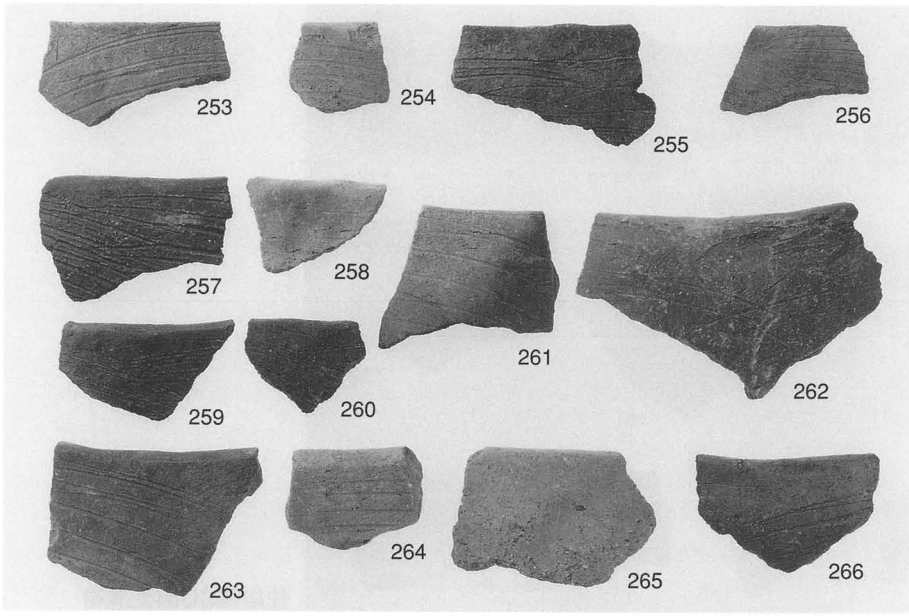
住居跡SI3出土遺物



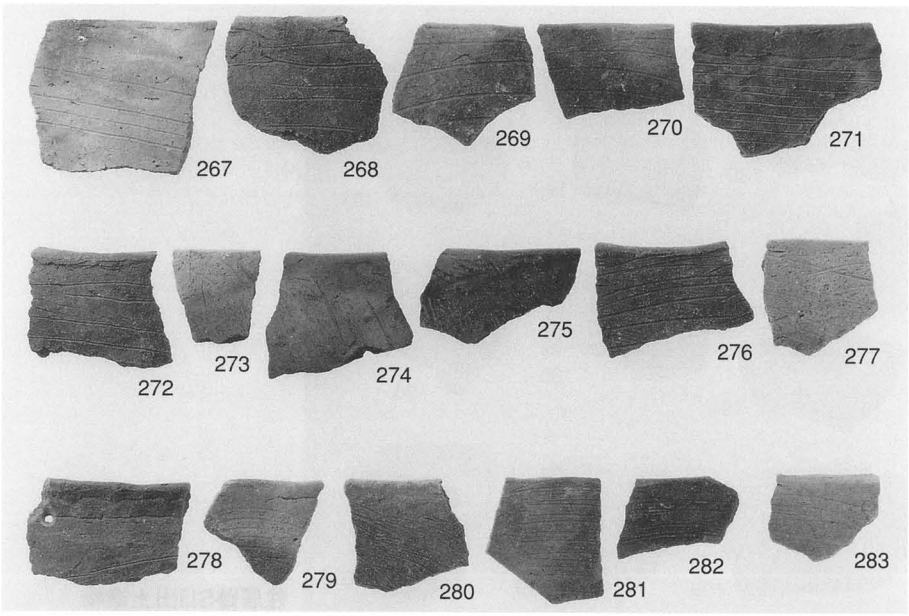
住居跡SI3出土遺物



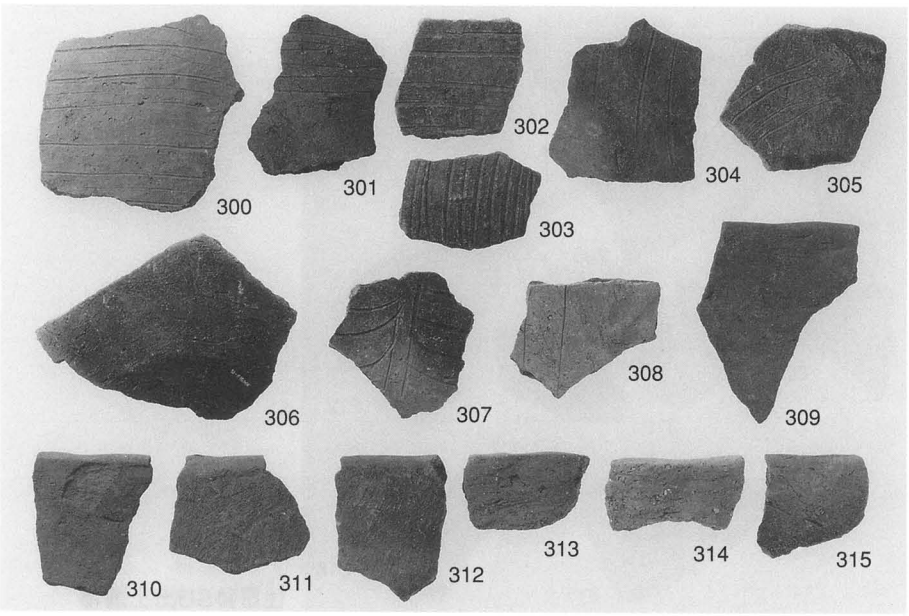
住居跡SI3出土遺物



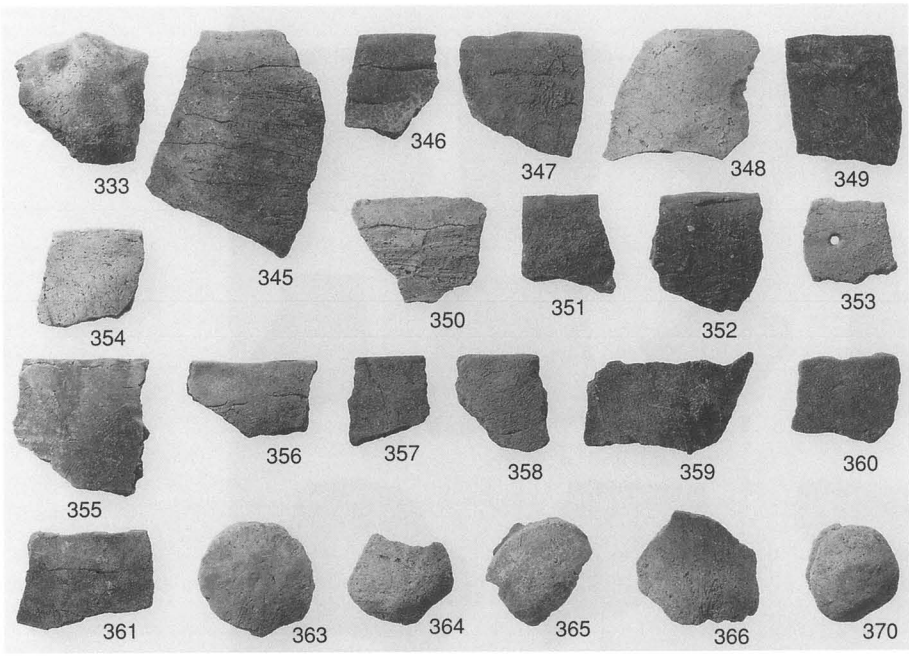
住居跡SI3出土遺物



住居跡SI3出土遺物

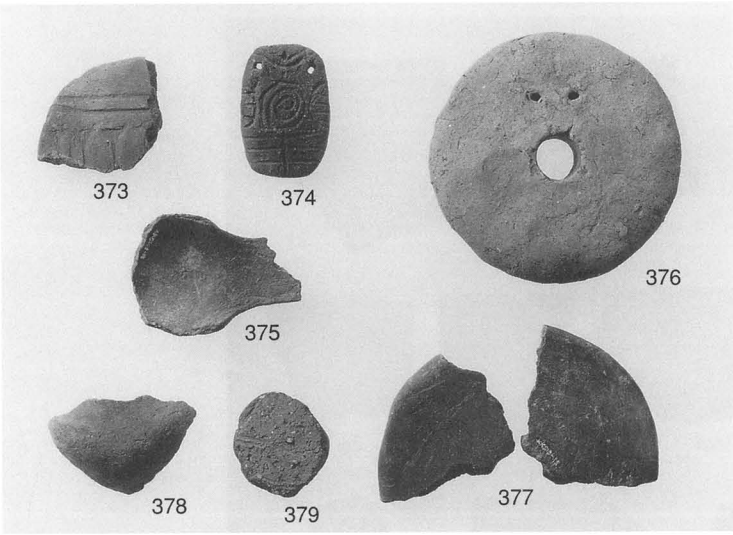


住居跡SI3出土遺物

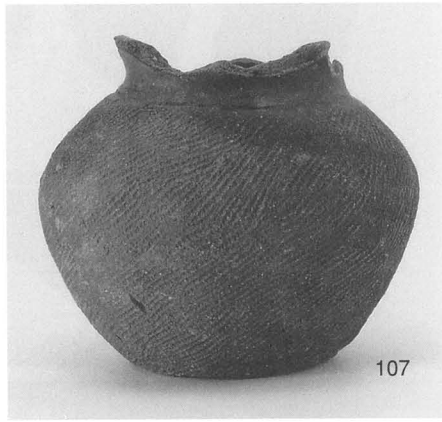


住居跡SI3出土遺物

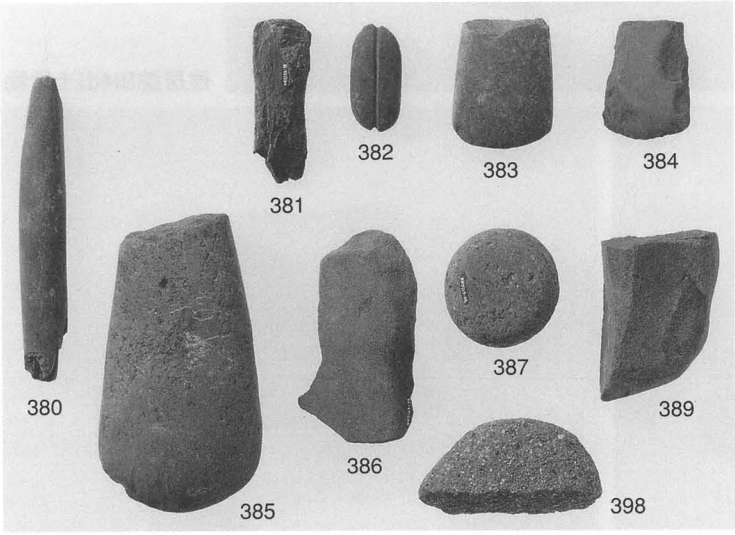
住居跡SI3出土遺物



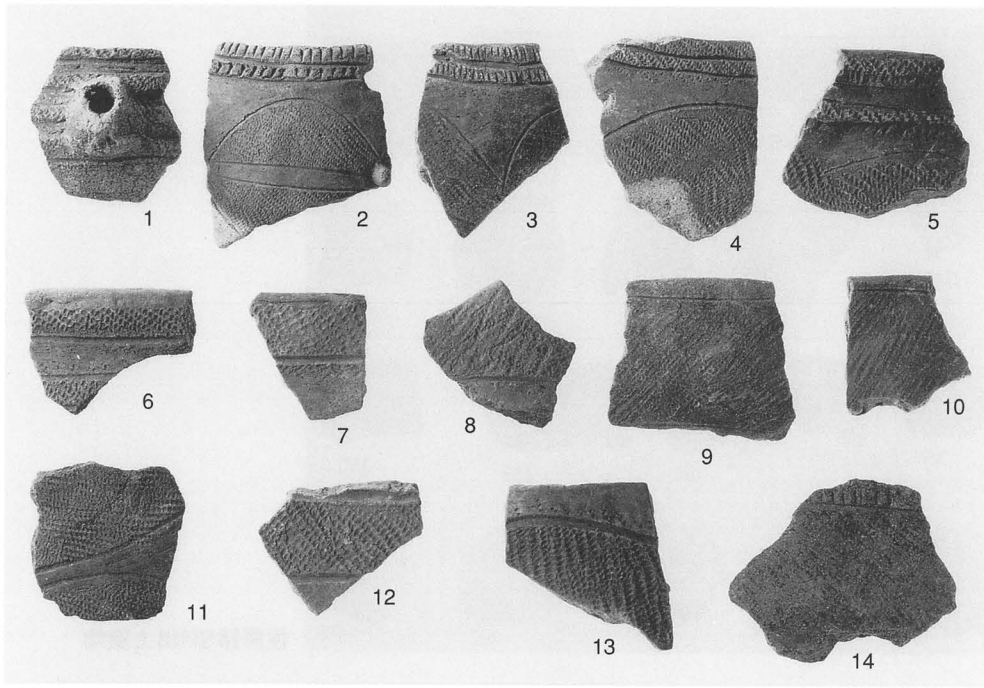
住居跡SI3出土遺物



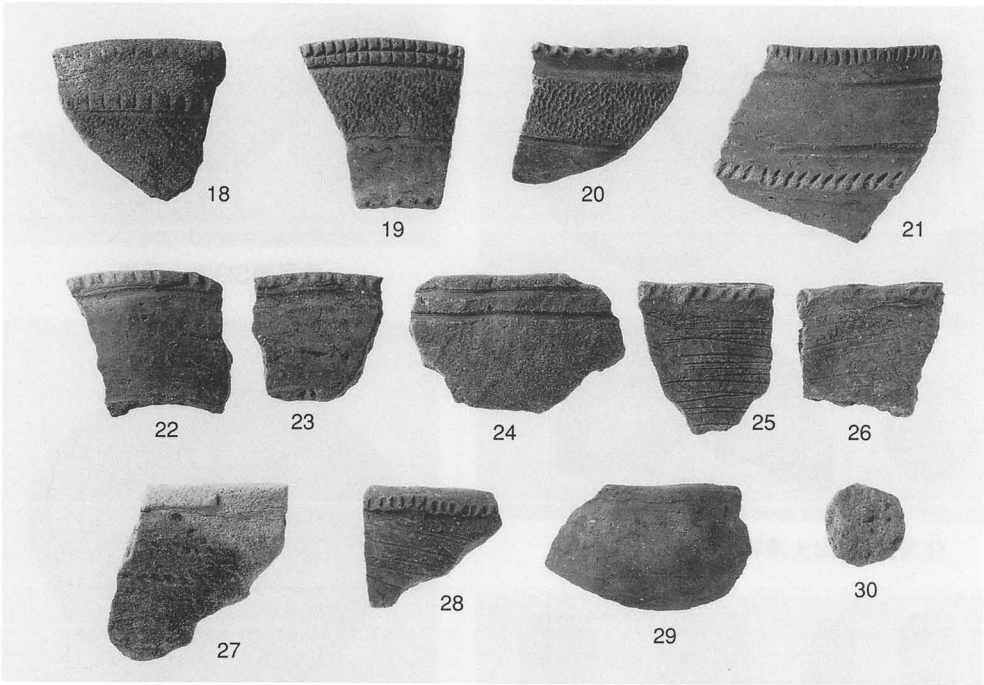
住居跡SI3出土遺物



住居跡SI3出土遺物

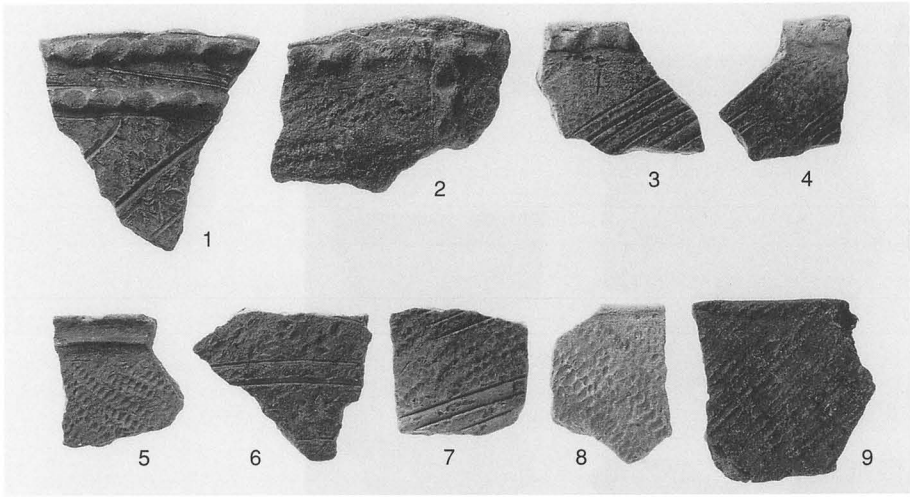


住居跡SI4出土遺物

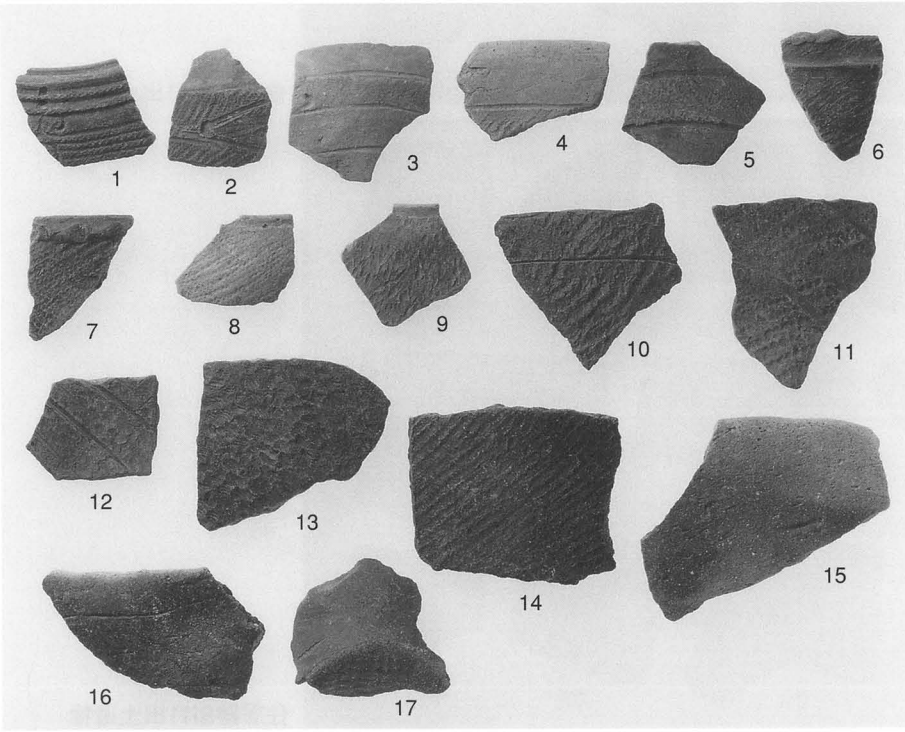


住居跡SI4出土遺物

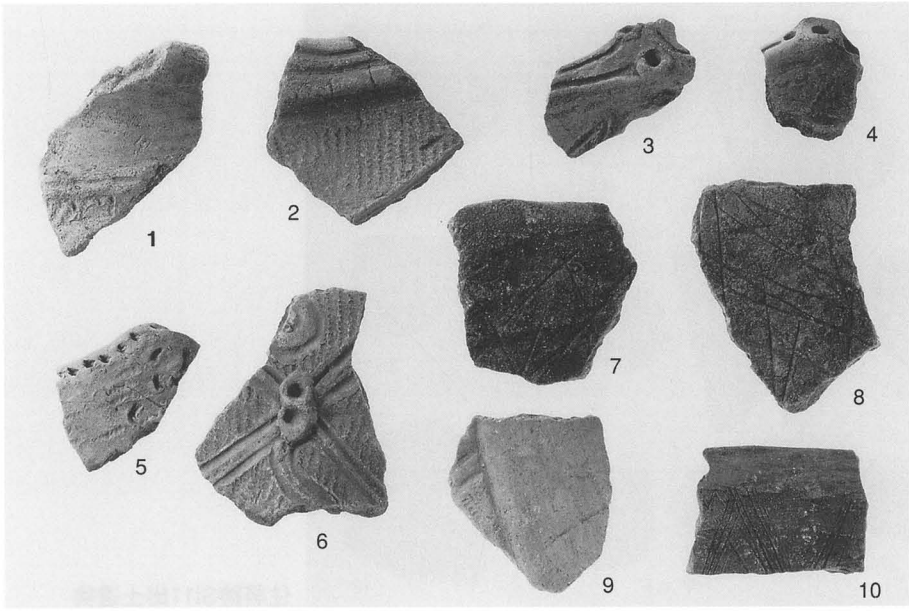
住居跡SI4出土遺物



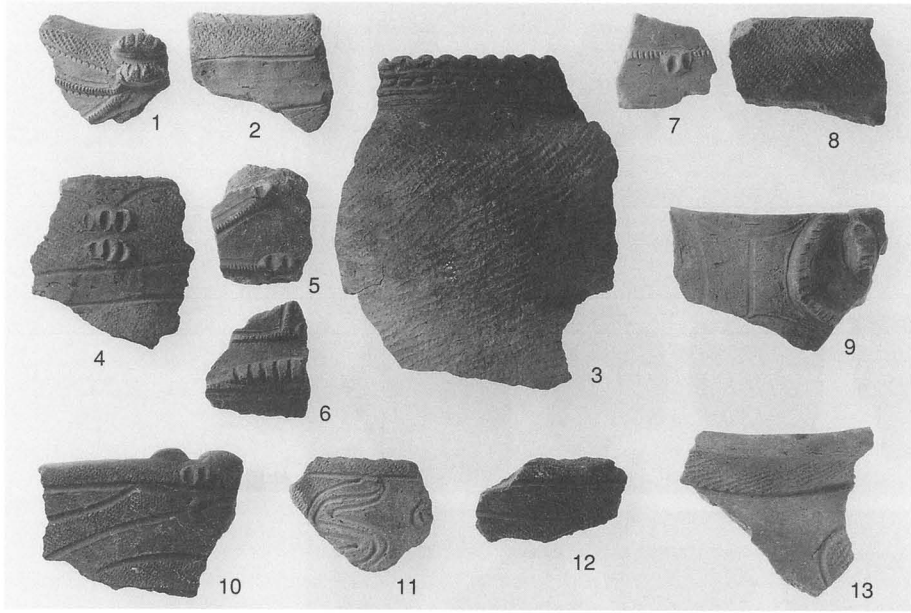
住居跡SI5出土遺物



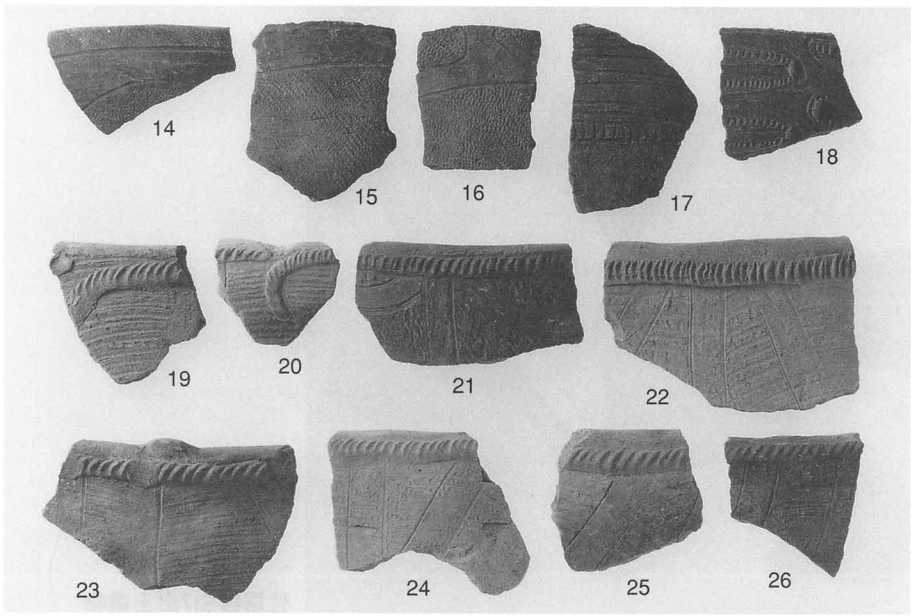
住居跡SI7出土遺物



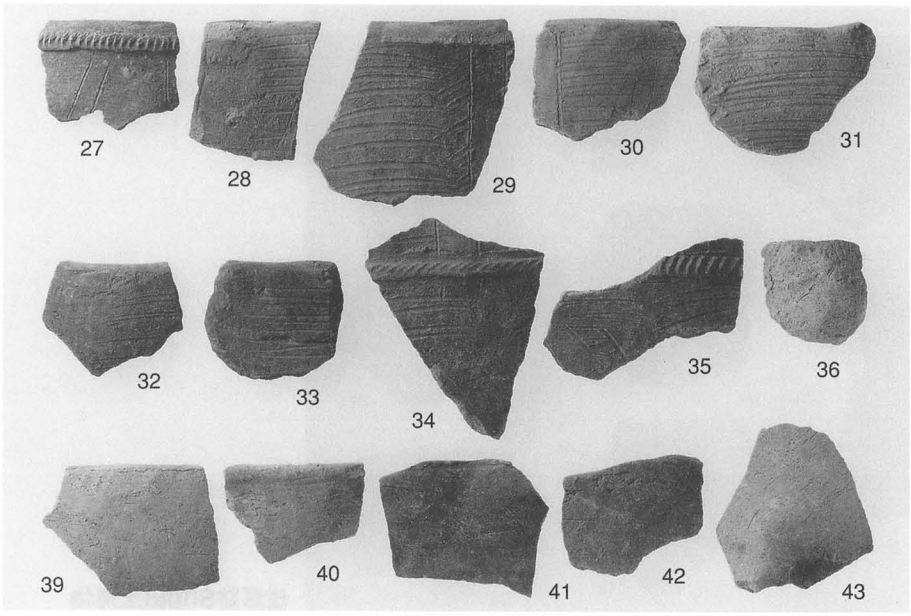
住居跡SI10出土遺物



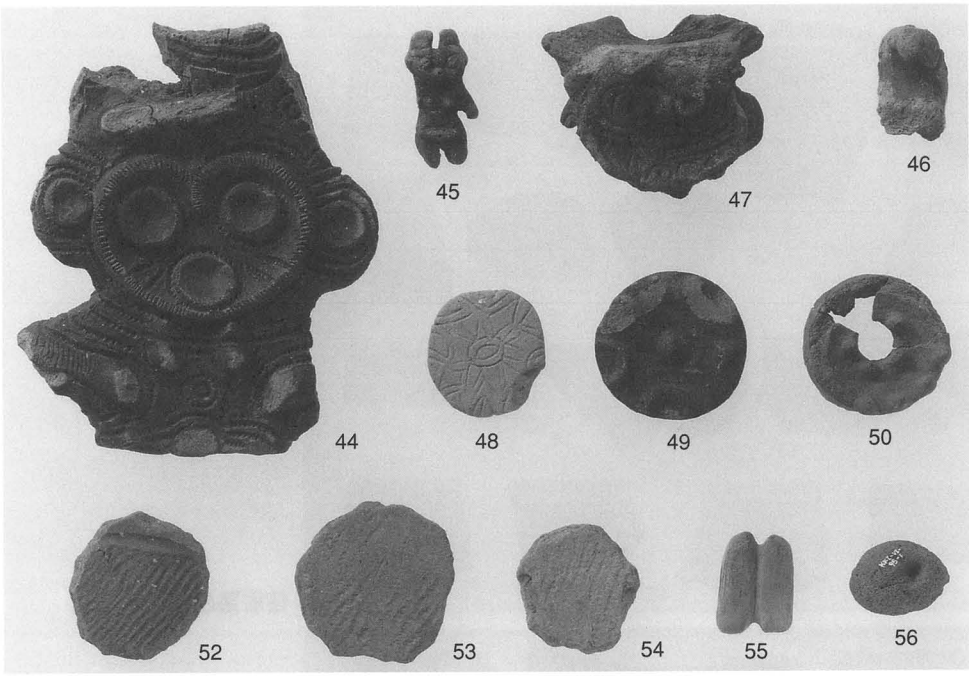
住居跡SI11出土遺物



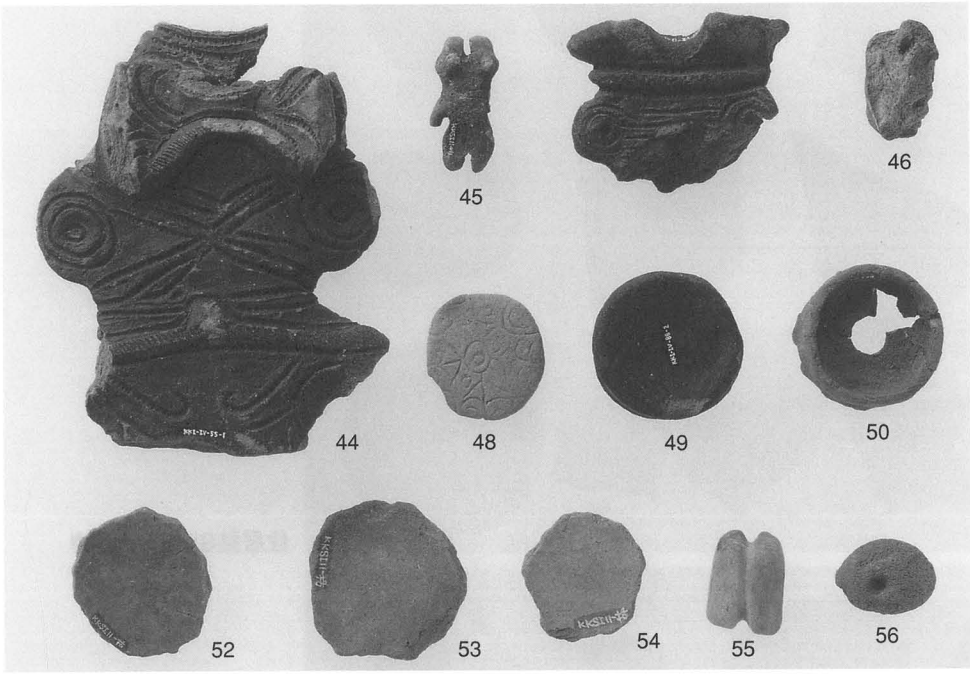
住居跡SI11出土遺物



住居跡SI11出土遺物



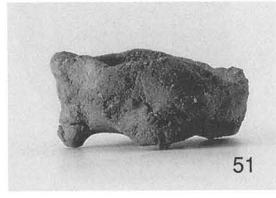
住居跡SI11出土遺物



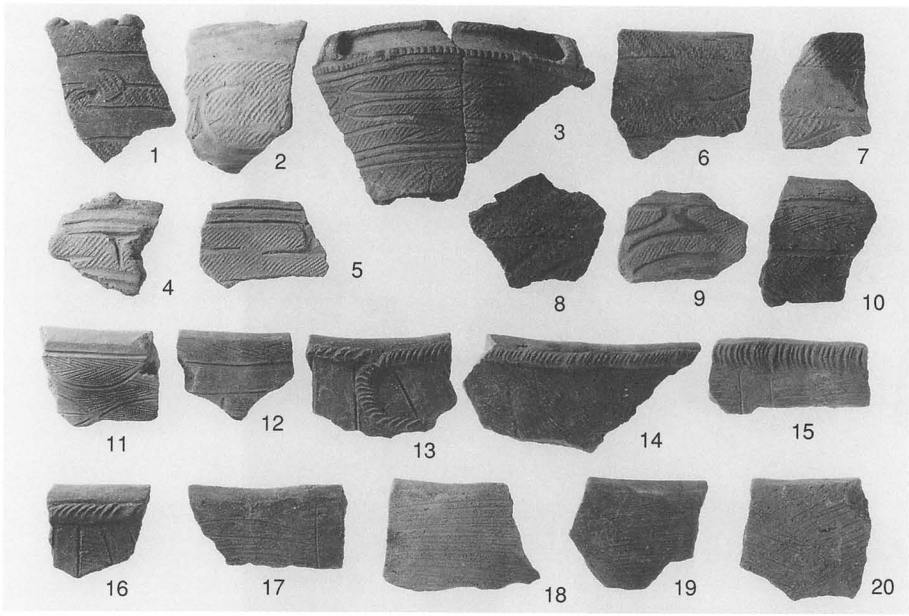
住居跡SI11出土遺物

住居跡SI12出土遺物

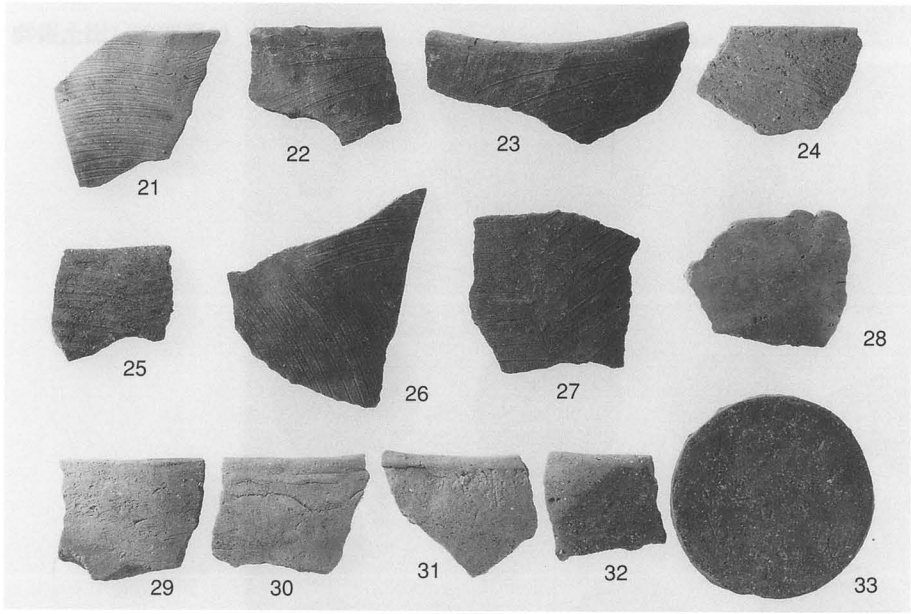
住居跡SI12出土遺物



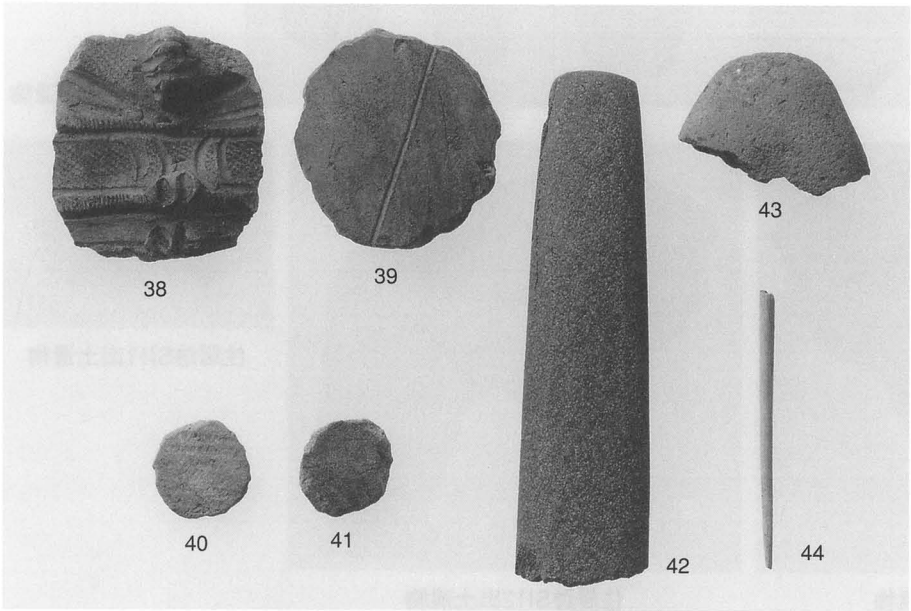
住居跡SI11出土遺物



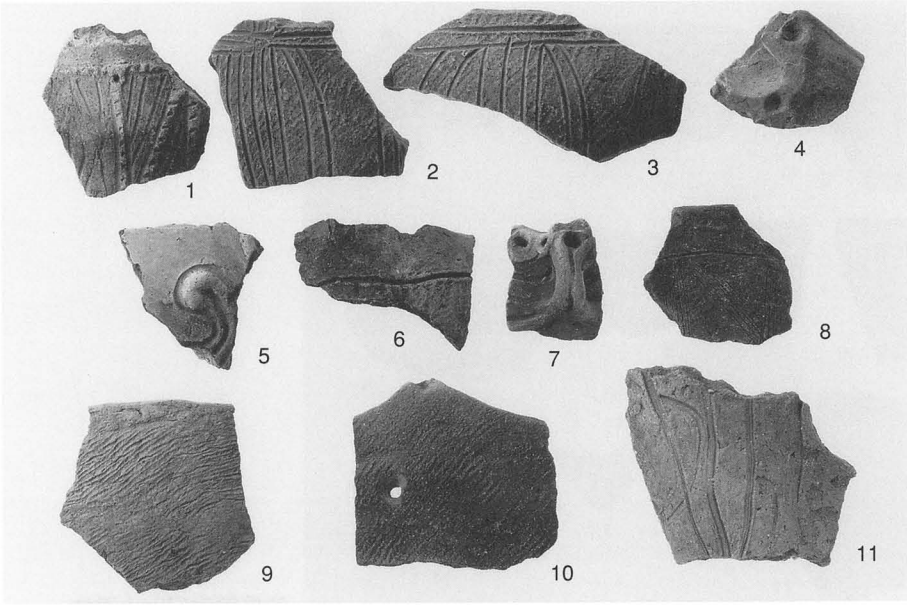
住居跡SI12出土遺物



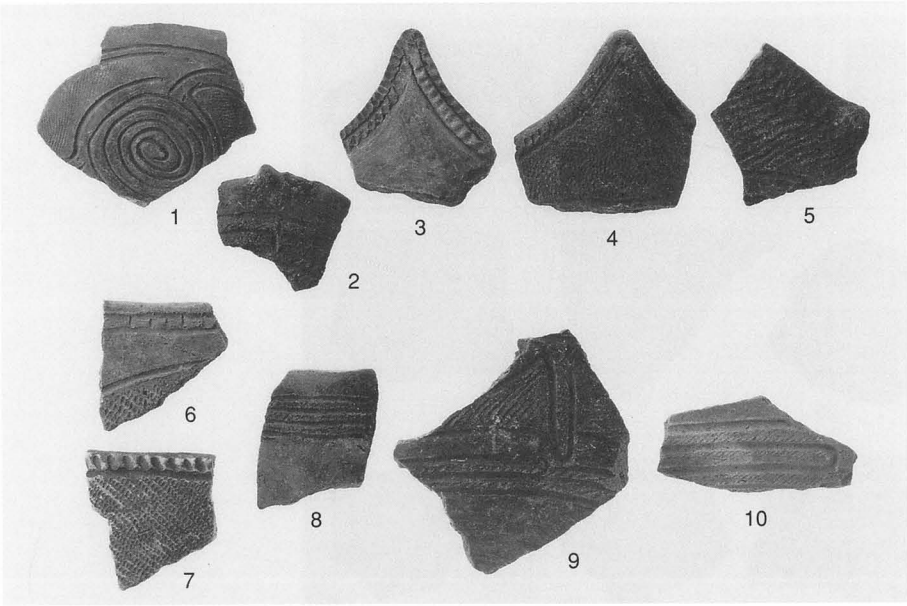
住居跡SI12出土遺物



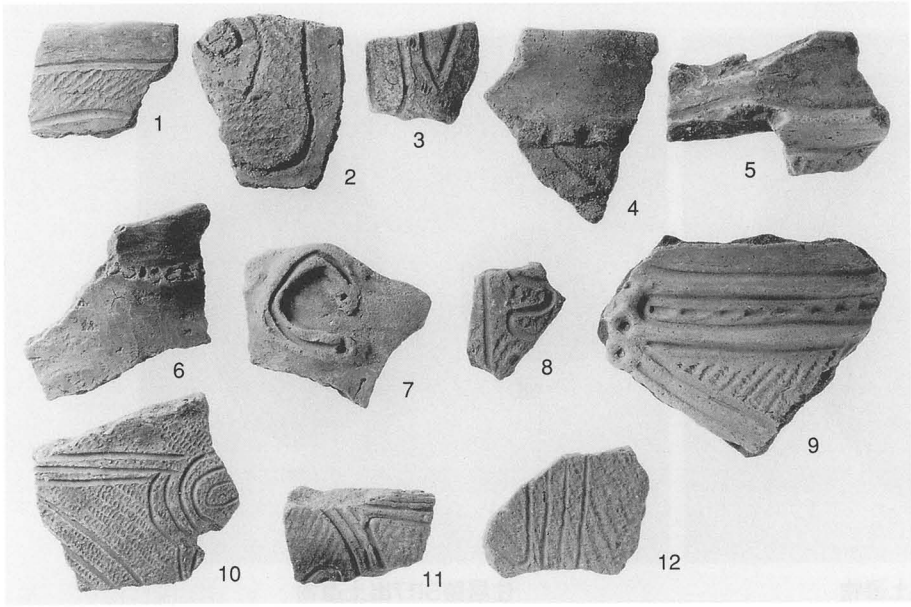
住居跡SI12出土遺物



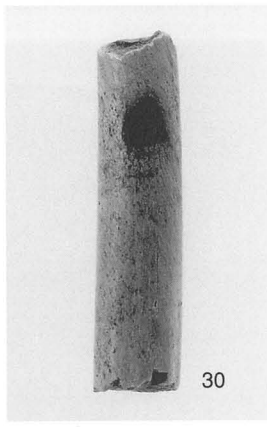
住居跡SI13出土遺物



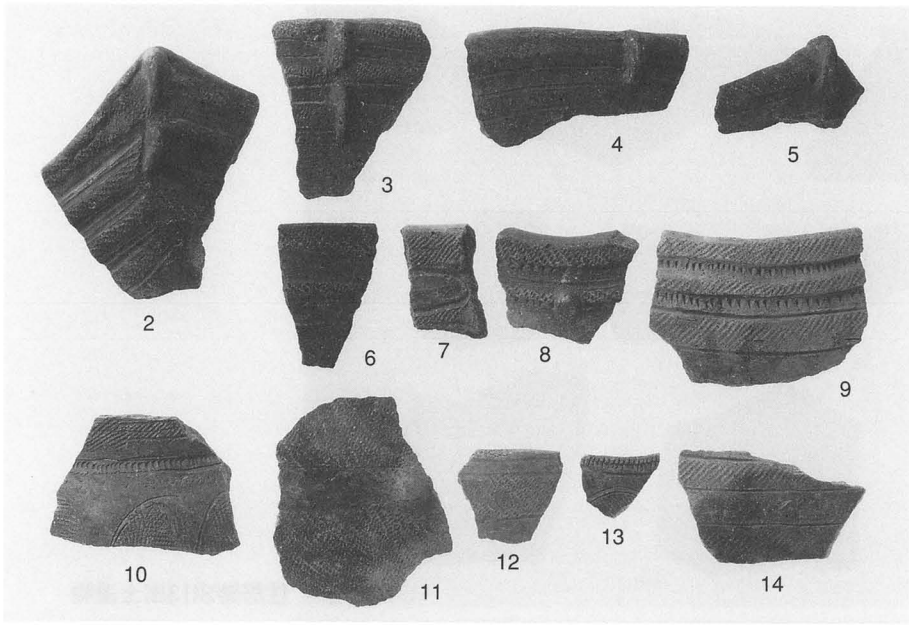
住居跡SI14出土遺物



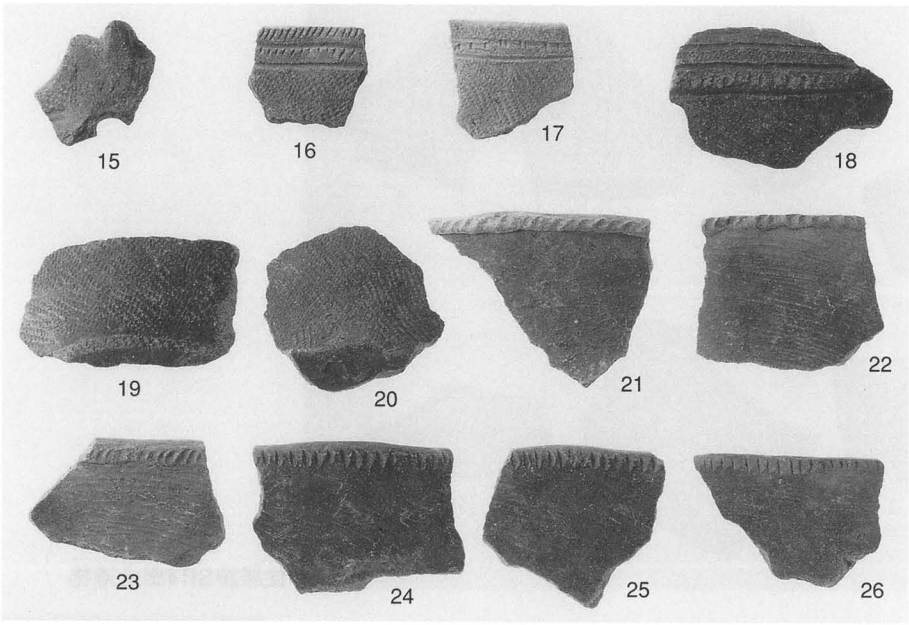
住居跡SI16出土遺物



住居跡SI16出土遺物

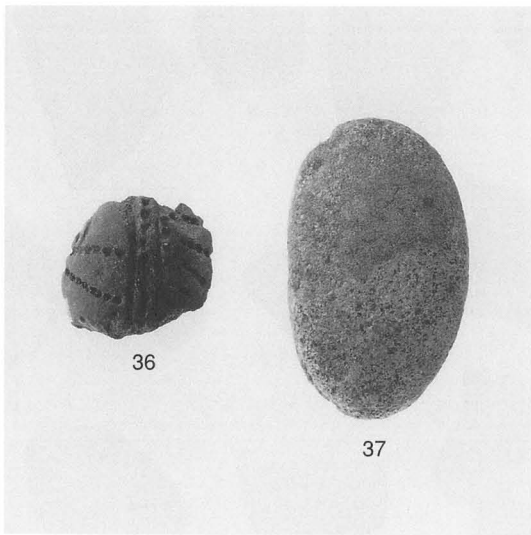


住居跡SI17出土遺物

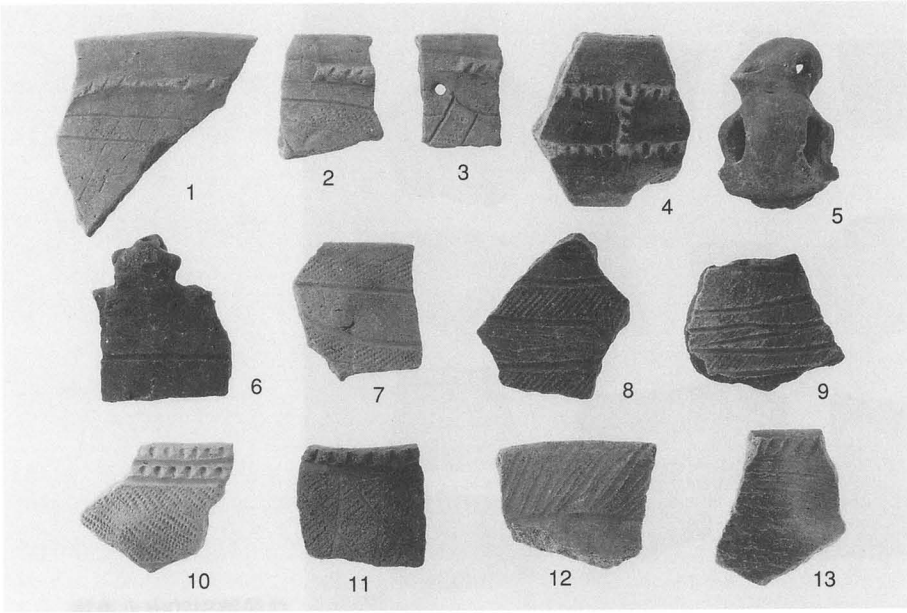


住居跡SI17出土遺物

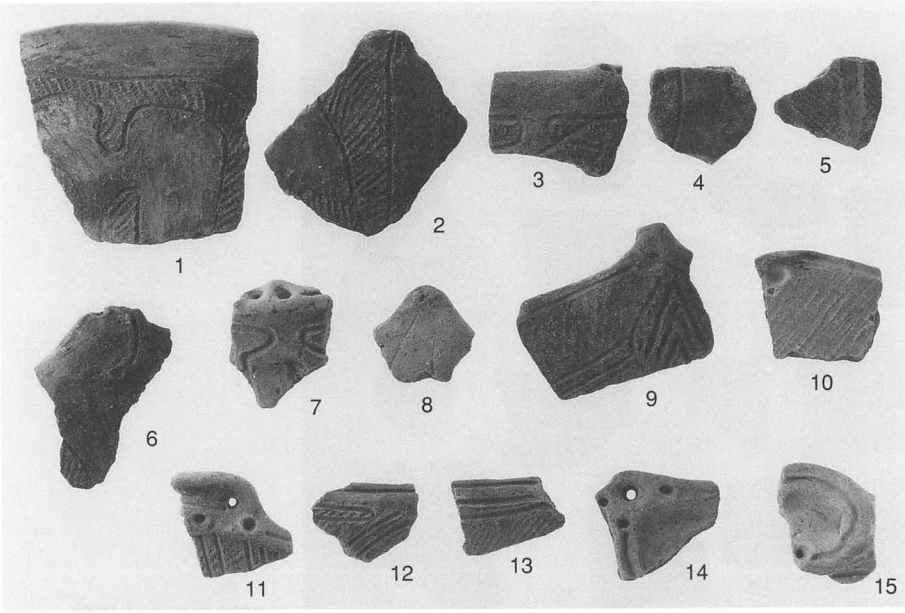
住居跡SI17出土遺物



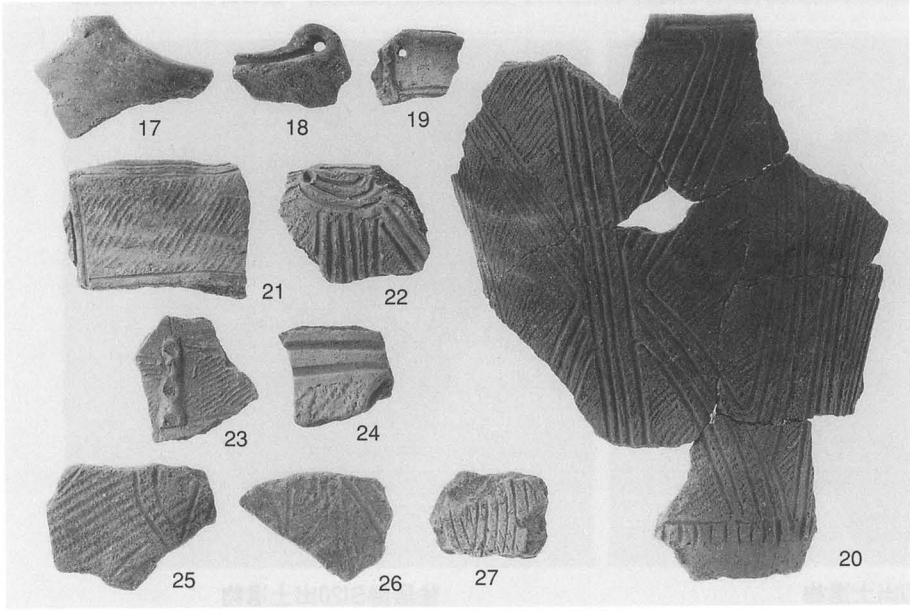
住居跡SI17出土遺物



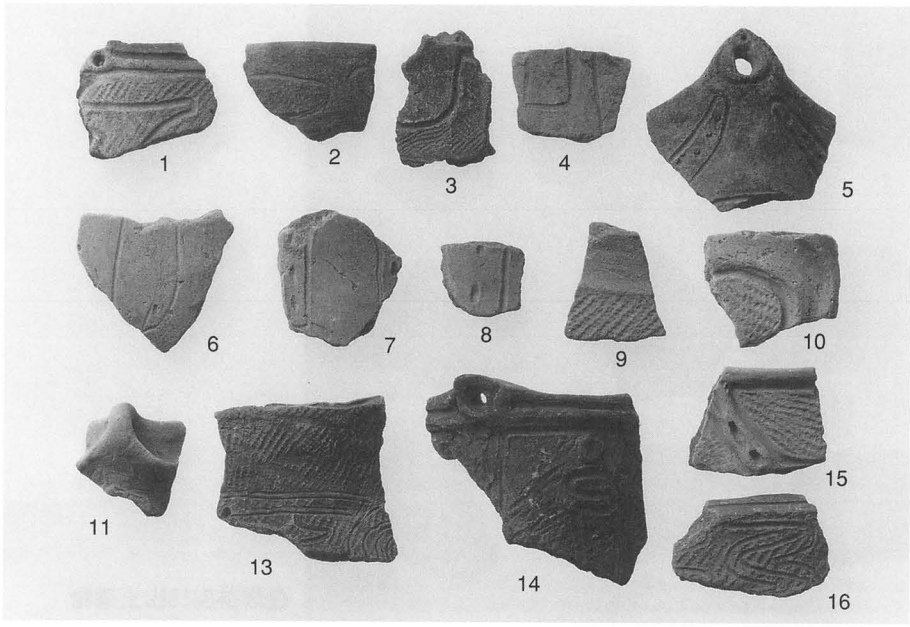
住居跡SI18出土遺物



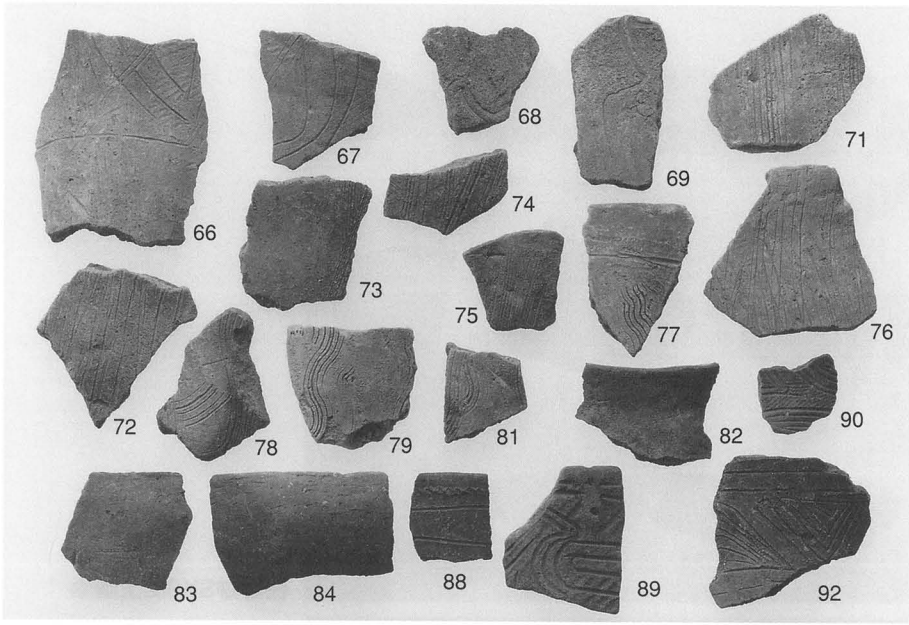
住居跡SI19出土遺物



住居跡SI19出土遺物



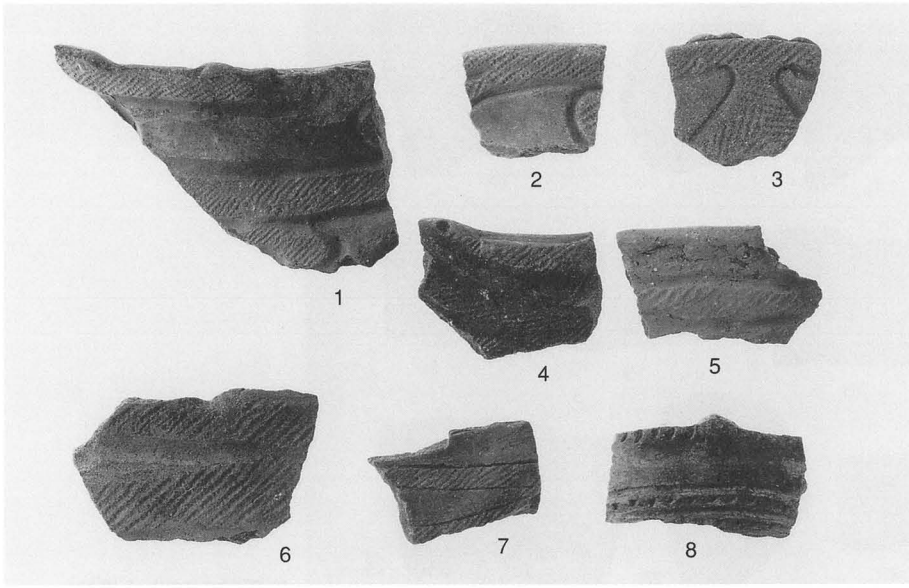
住居跡SI20出土遺物



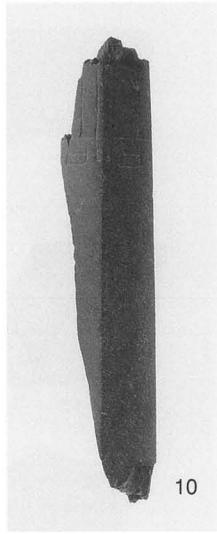
住居跡SI20出土遺物

住居跡SI20出土遺物

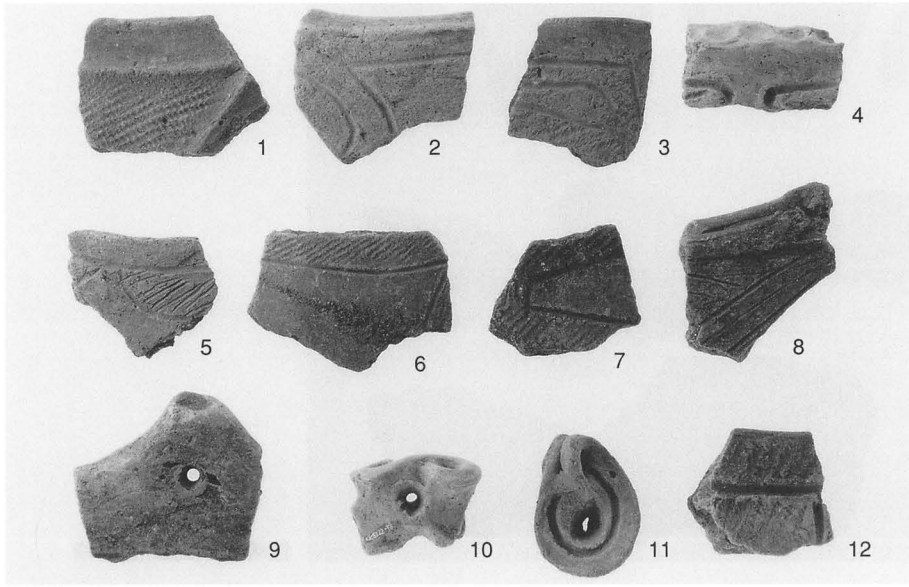
住居跡SI20出土遺物



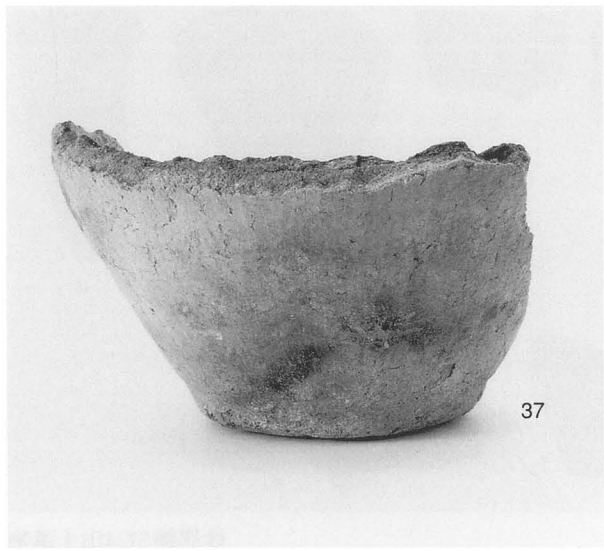
住居跡SI21出土遺物



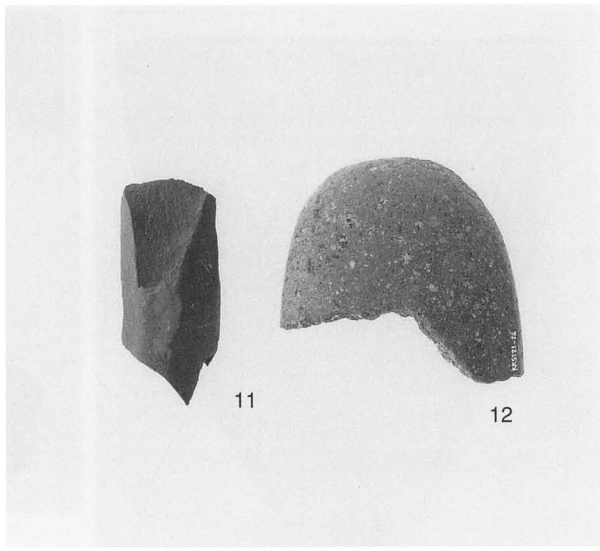
住居跡SI21出土遺物



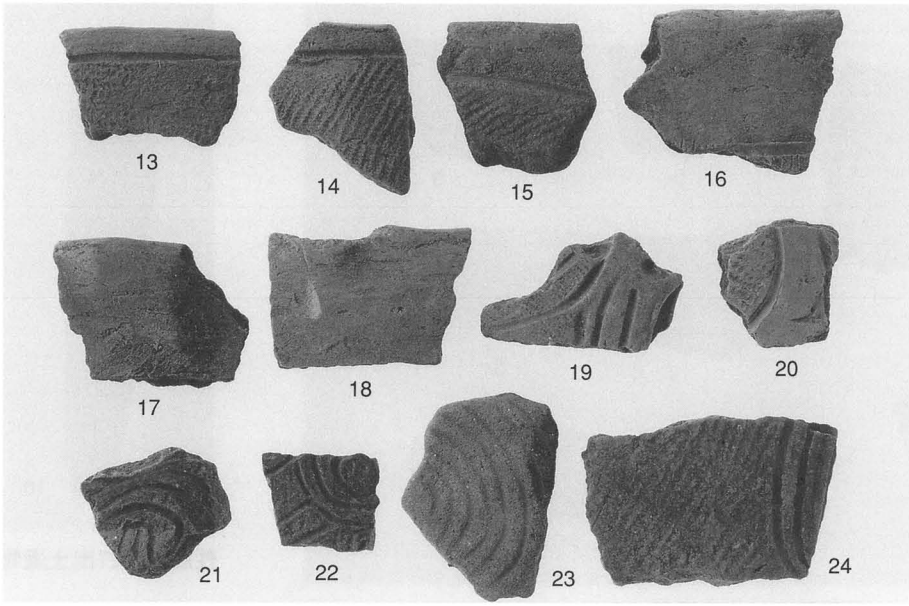
住居跡SI22出土遺物



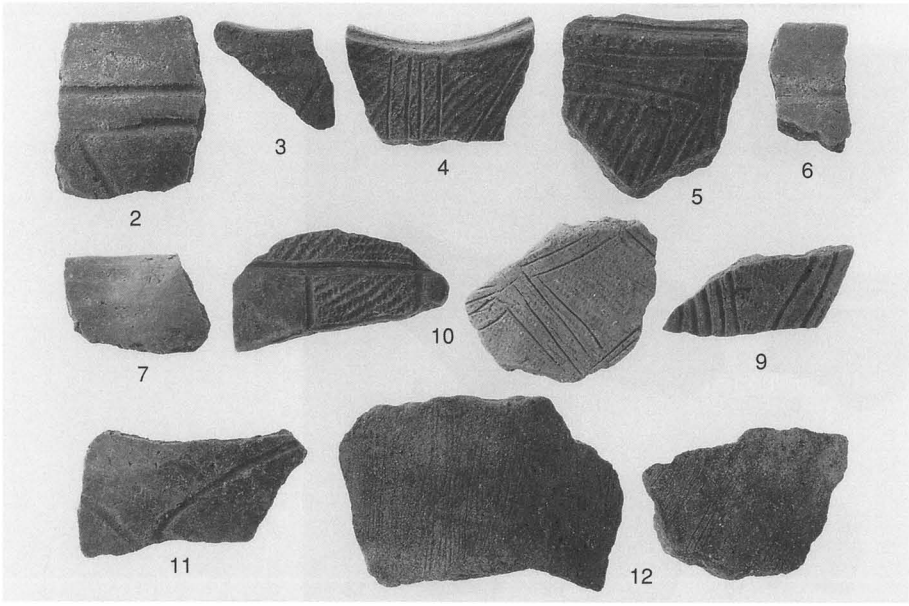
住居跡SI22出土遺物



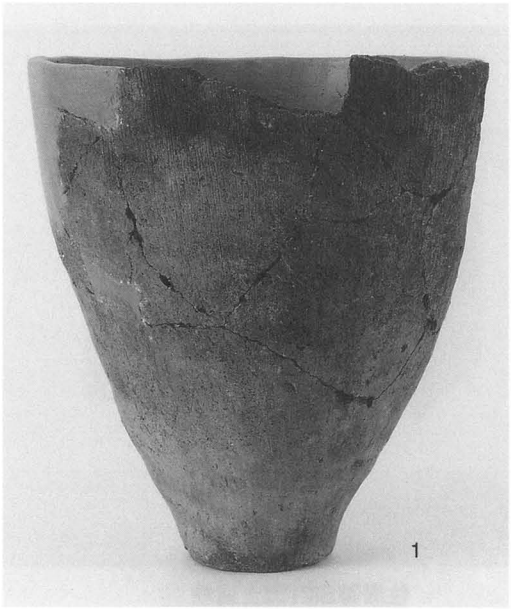
住居跡SI21出土遺物



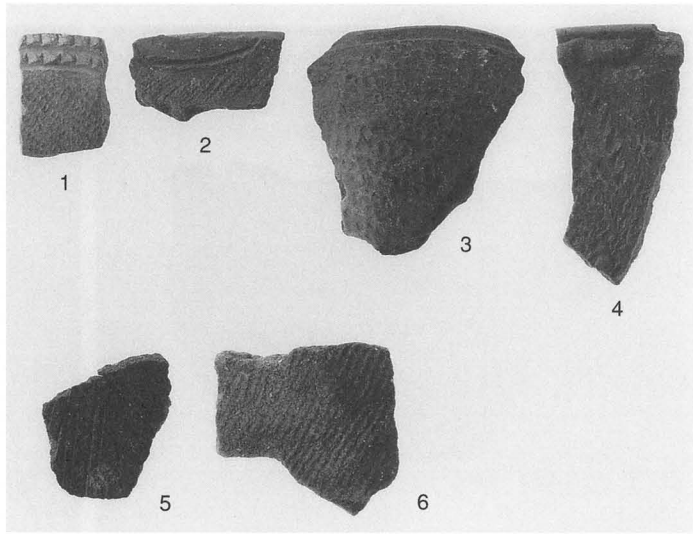
住居跡SI22出土遺物



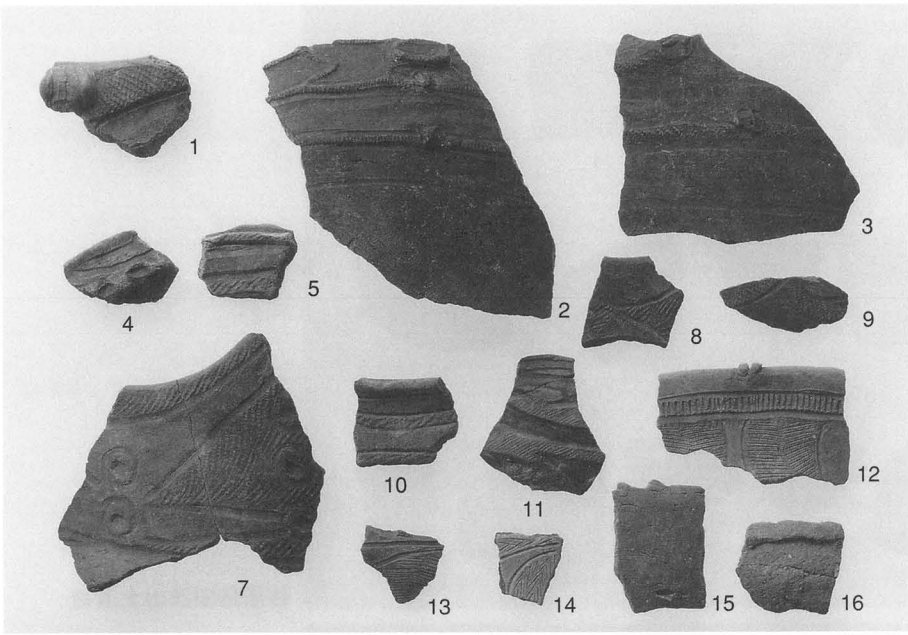
住居跡SI23出土遺物



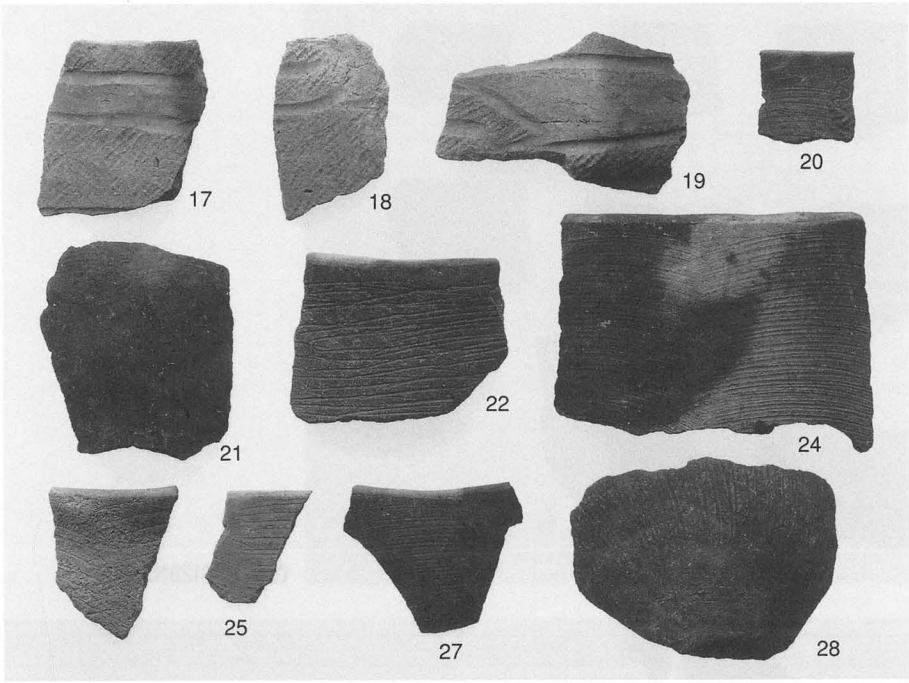
住居跡SI23出土遺物



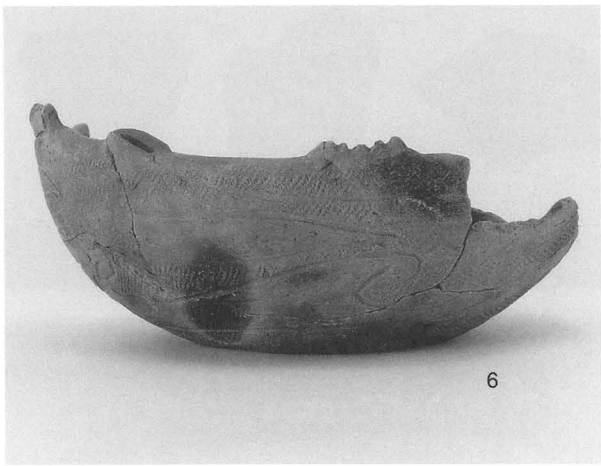
住居跡SI24出土遺物



住居跡SI27出土遺物



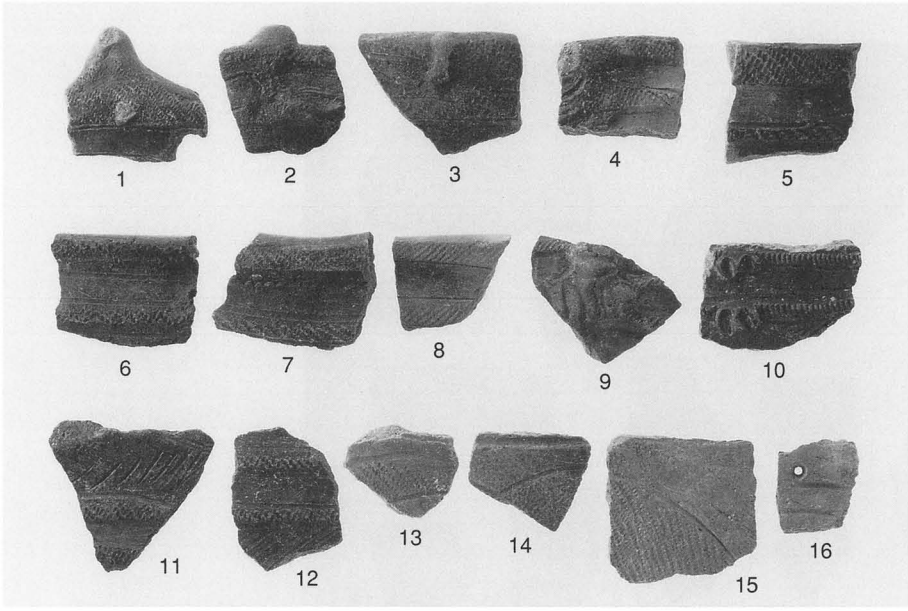
住居跡SI27出土遺物



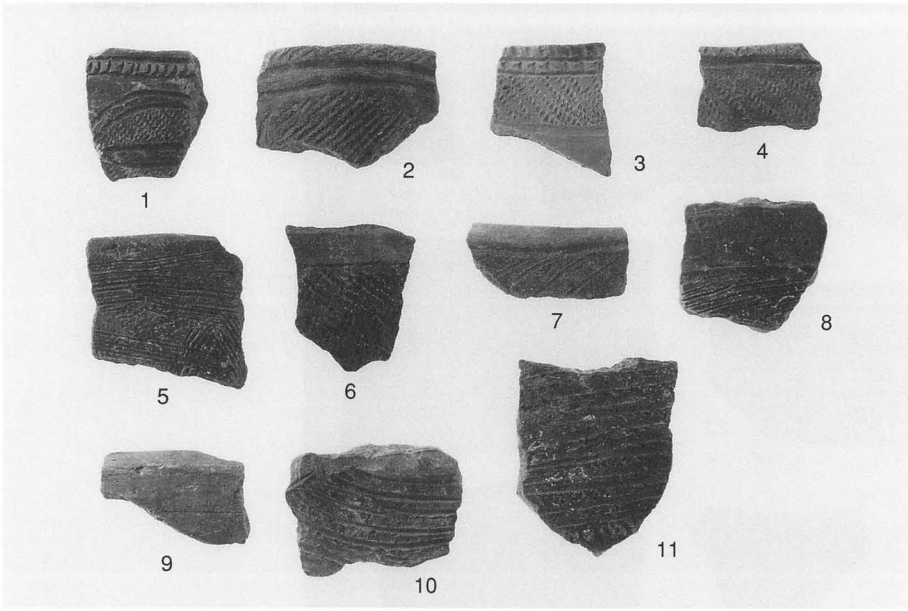
住居跡SI27出土遺物

住居跡SI27出土遺物

PL.46

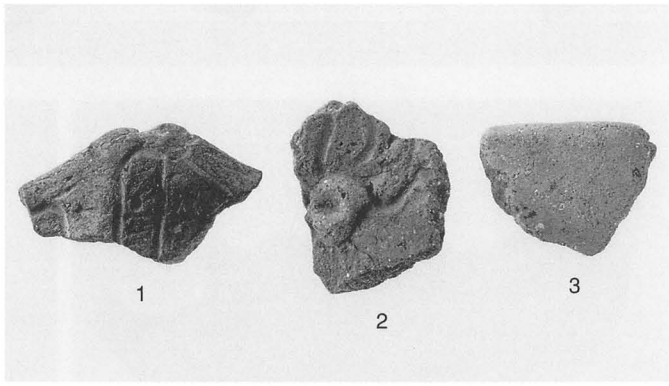


住居跡SI28出土遺物

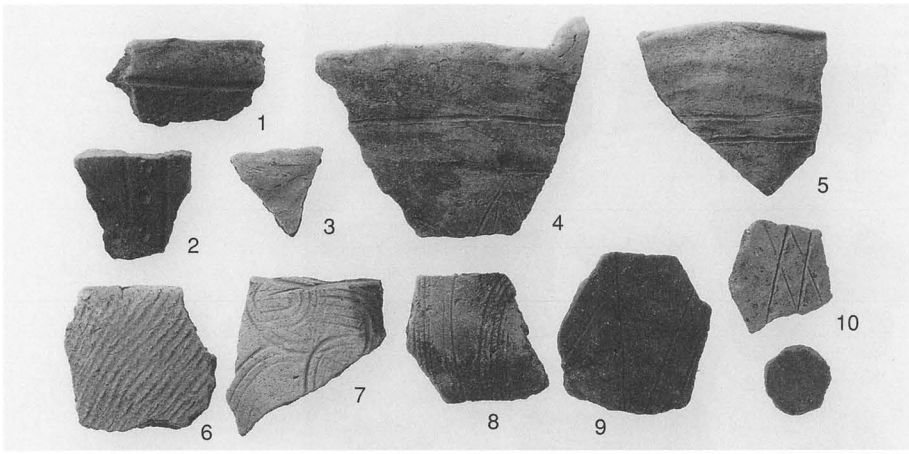


住居跡SI29出土遺物

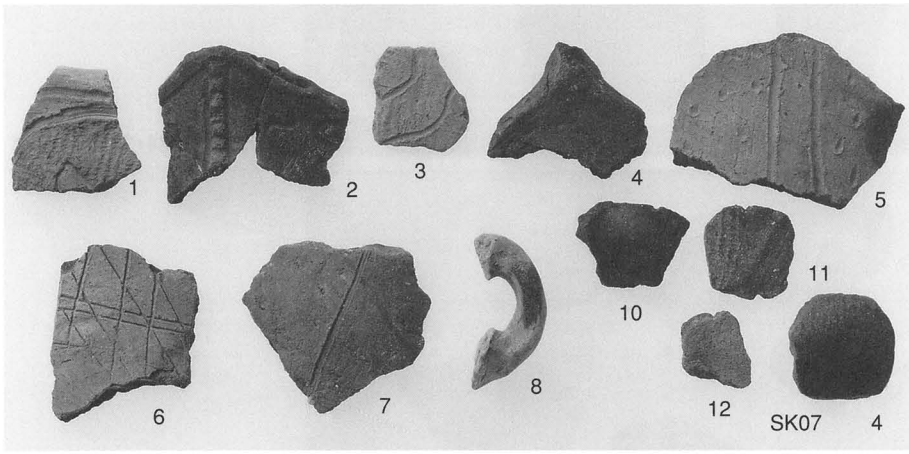
住居跡SI29出土遺物



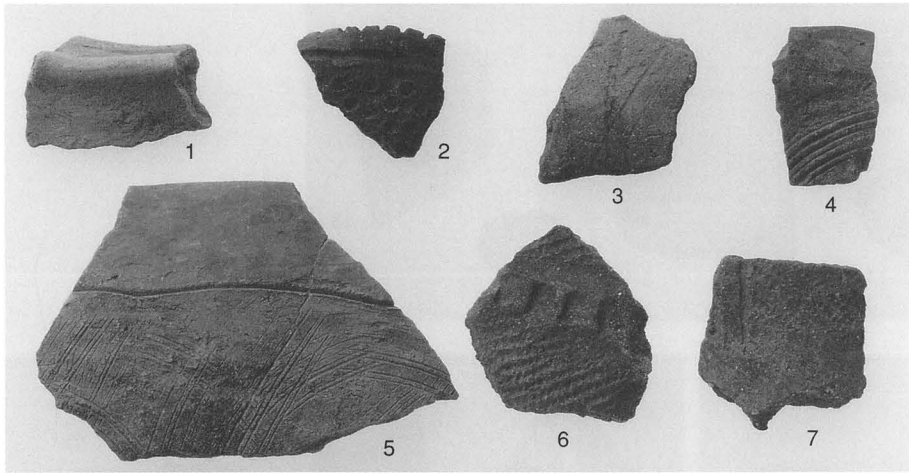
住居跡SI30出土遺物



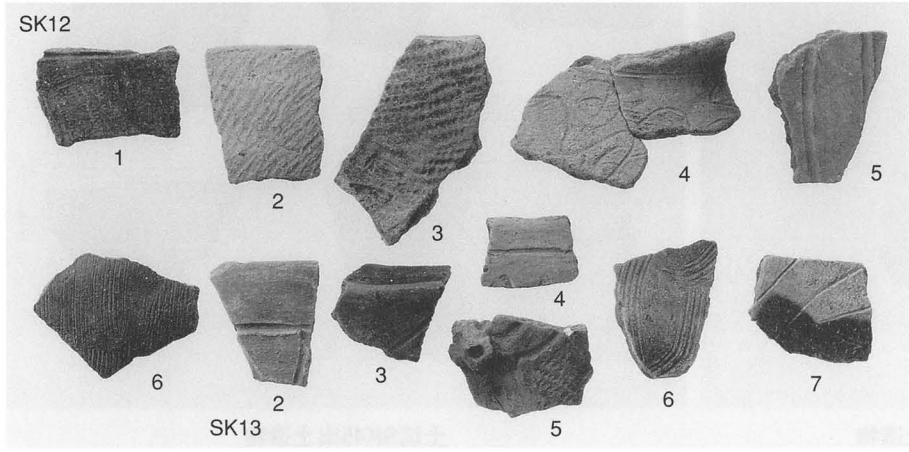
土坑SK1出土遺物



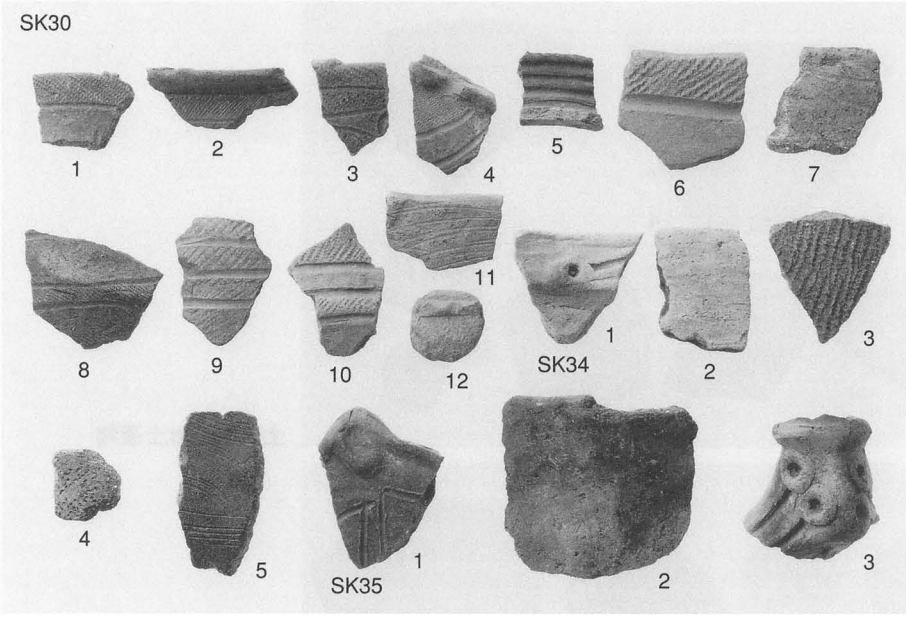
土坑SK6・7出土遺物



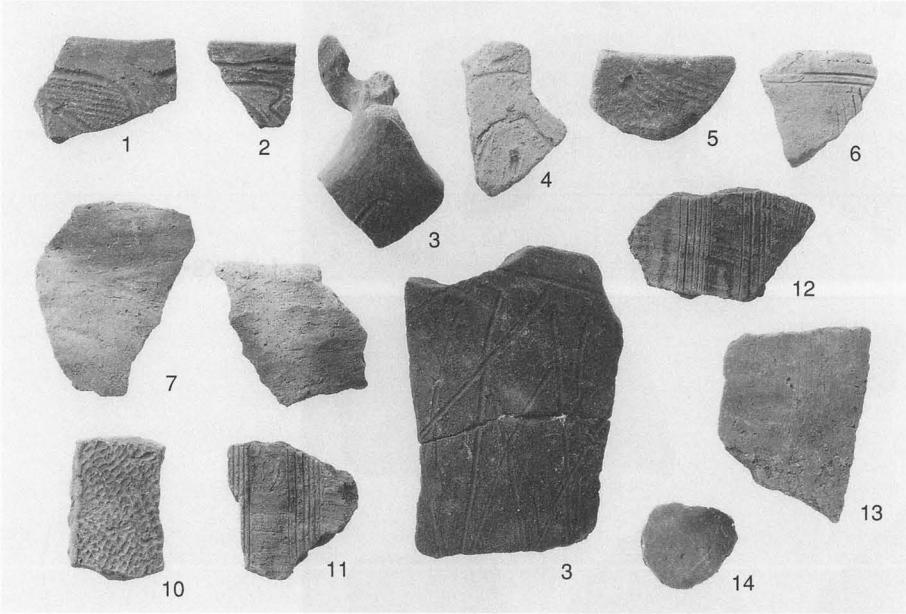
土坑SK8出土遺物



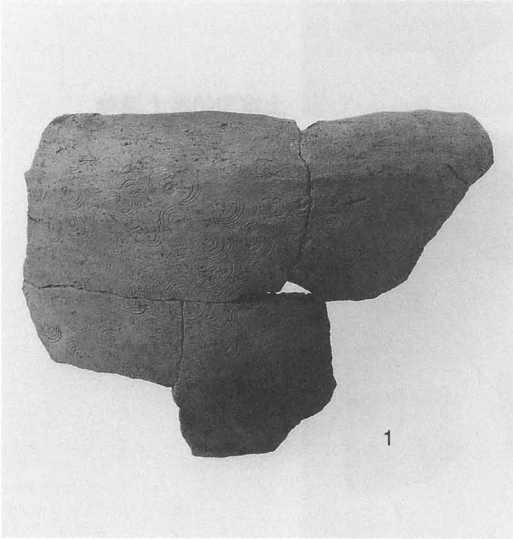
土坑SK12・13出土遺物



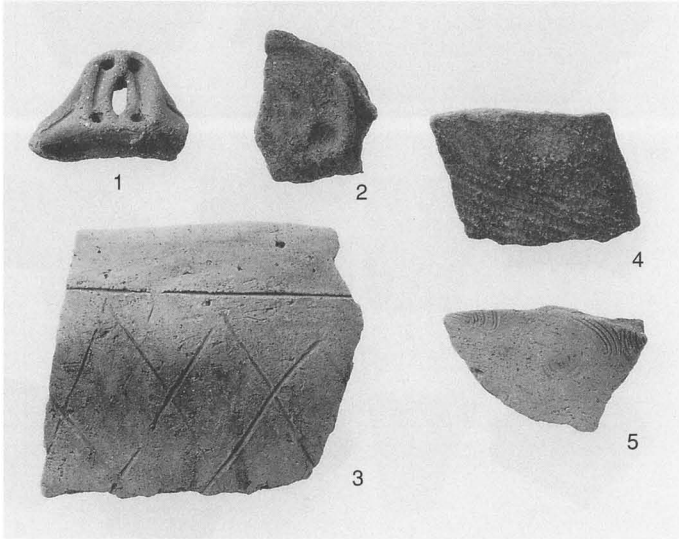
土坑SK30・34・35出土遺物



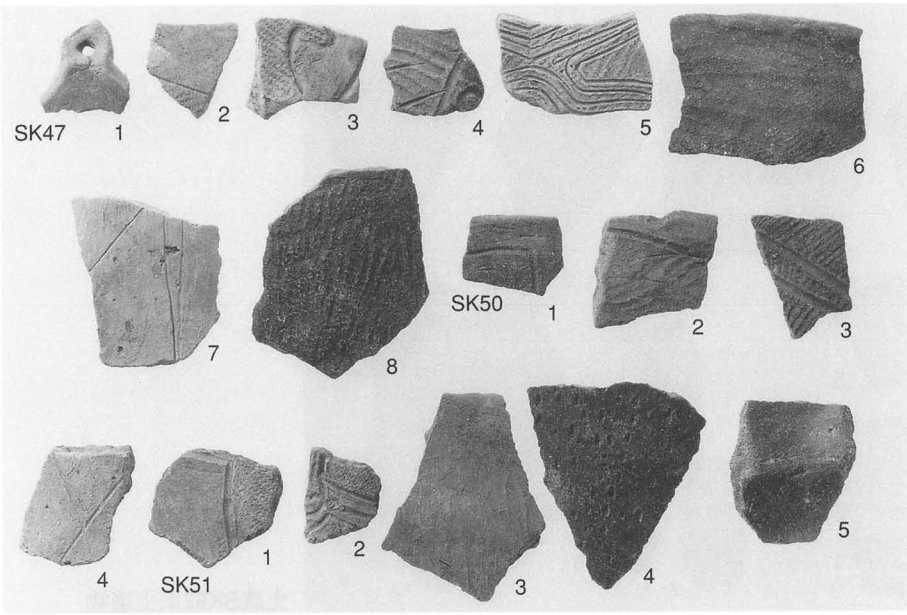
土坑SK46出土遺物



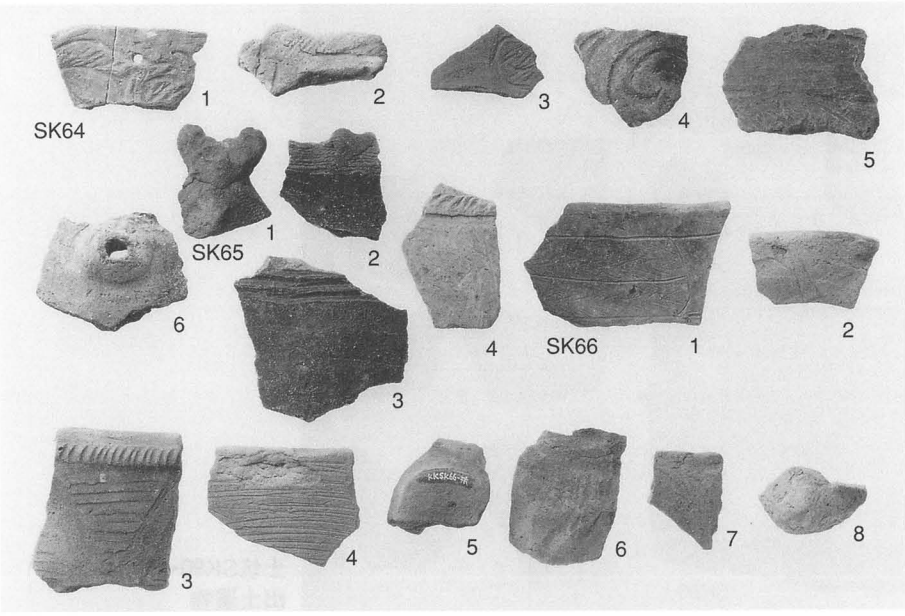
土坑SK13出土遺物



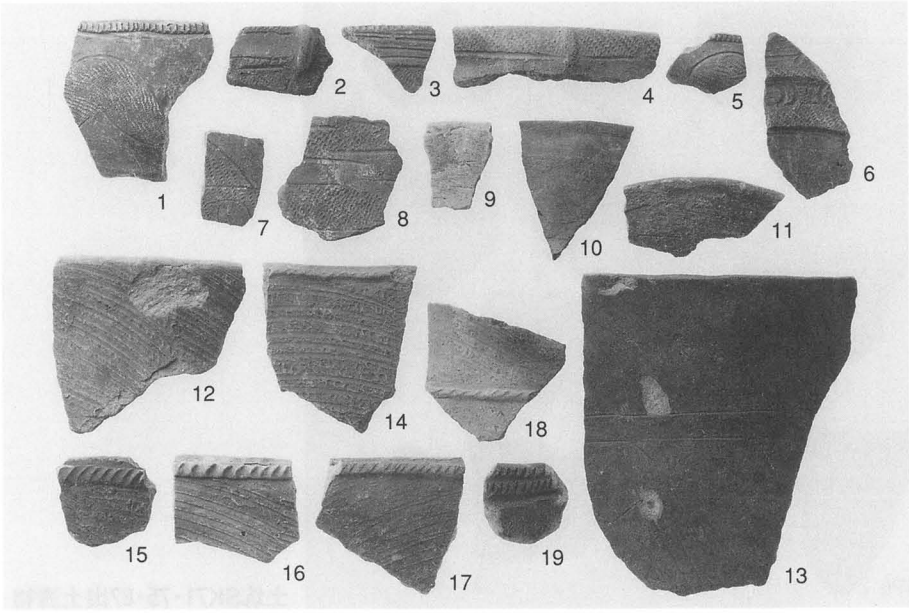
土坑SK45出土遺物



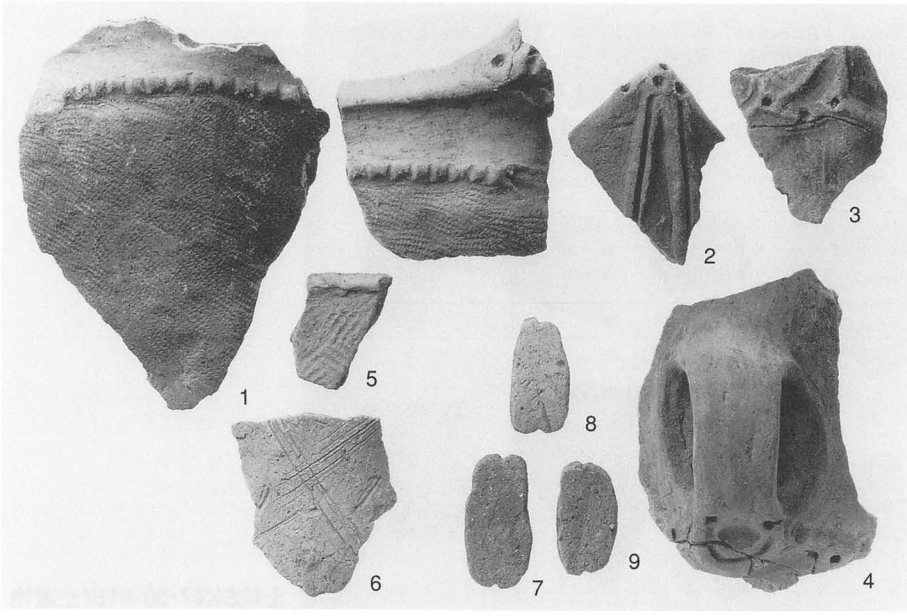
土坑SK47・50・51出土遺物



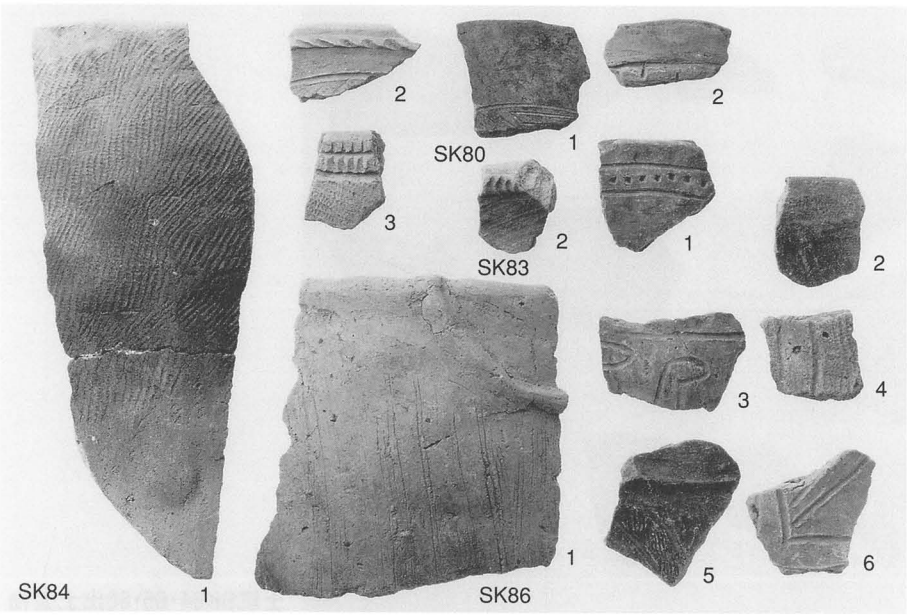
土坑SK64・65・66出土遺物



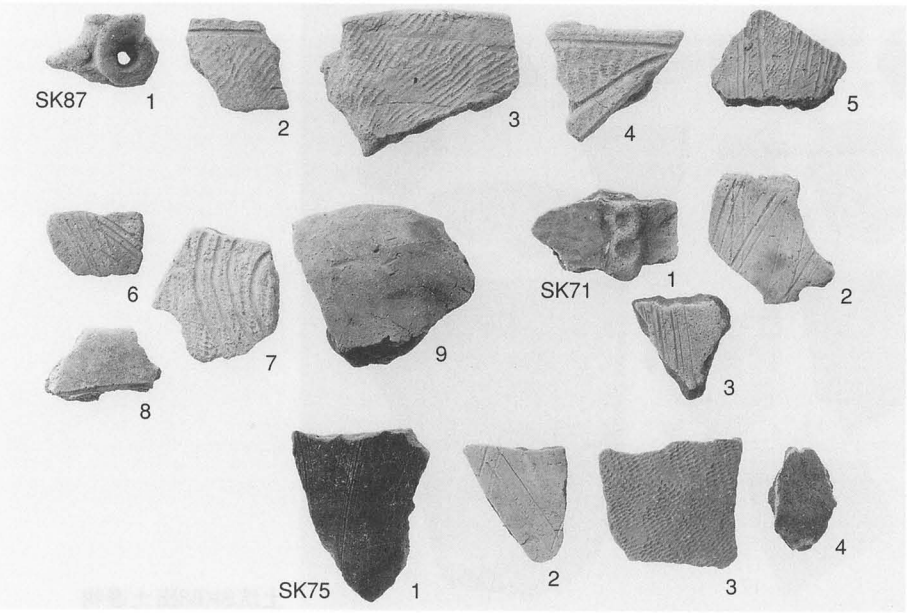
土坑SK68出土遺物



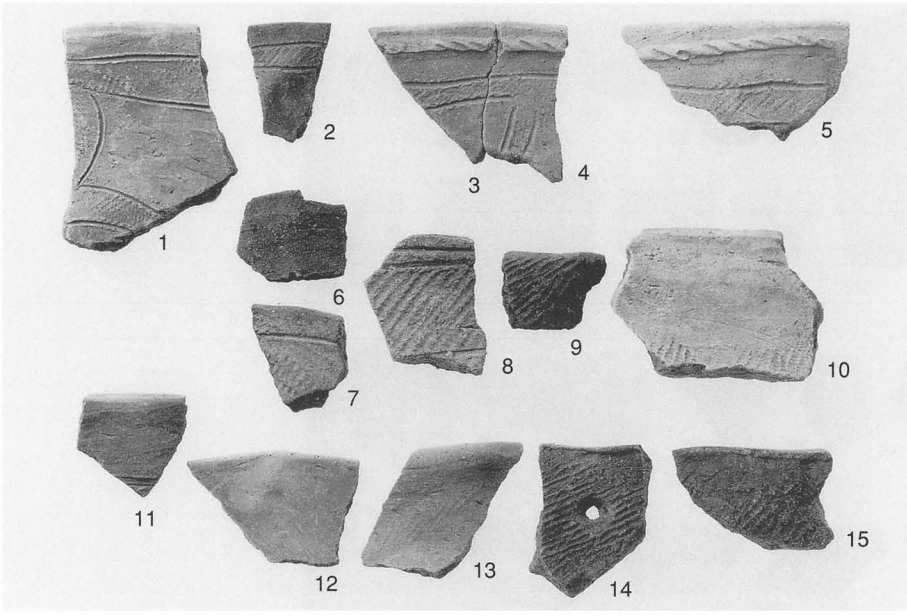
土坑SK82出土遺物



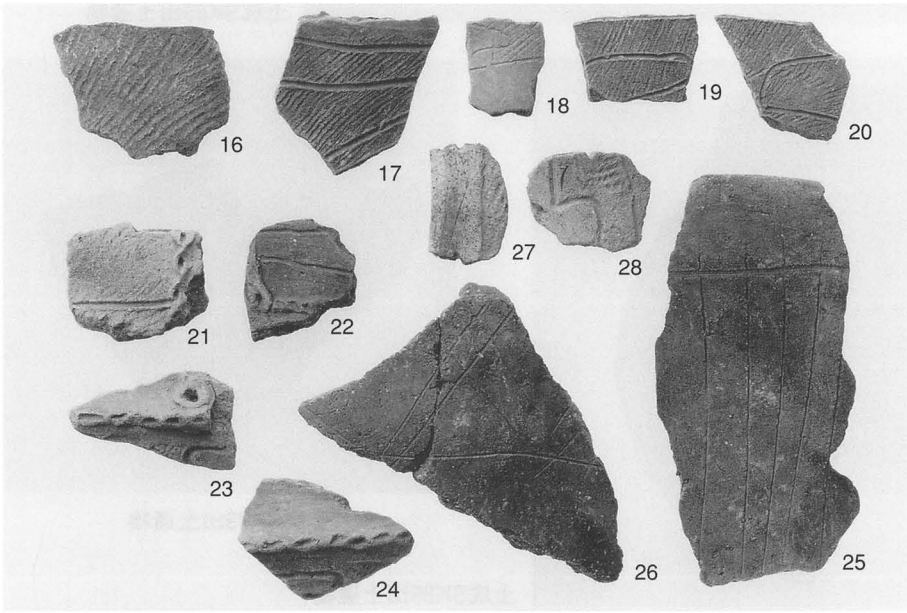
土坑SK80・83・84・86
出土遺物



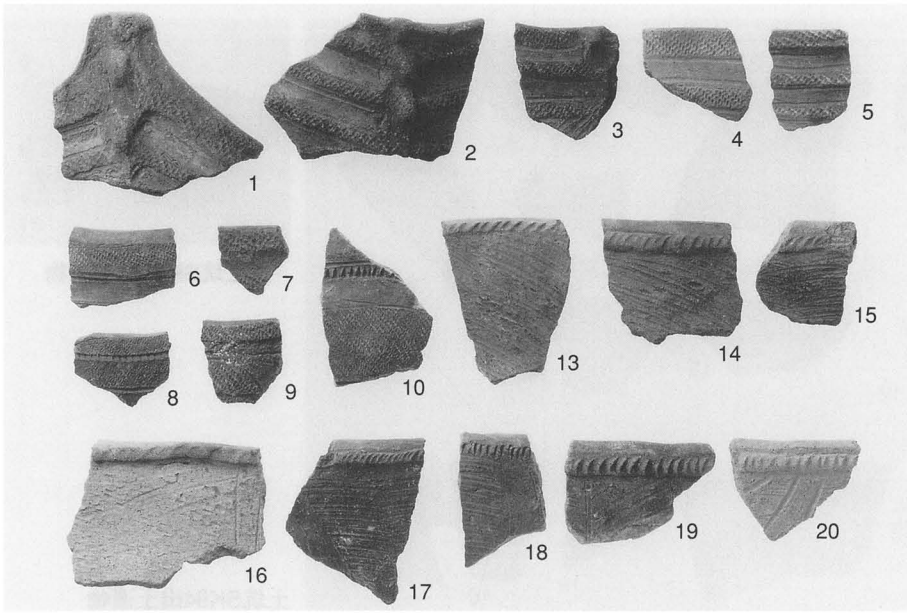
土坑SK71・75・87出土遺物



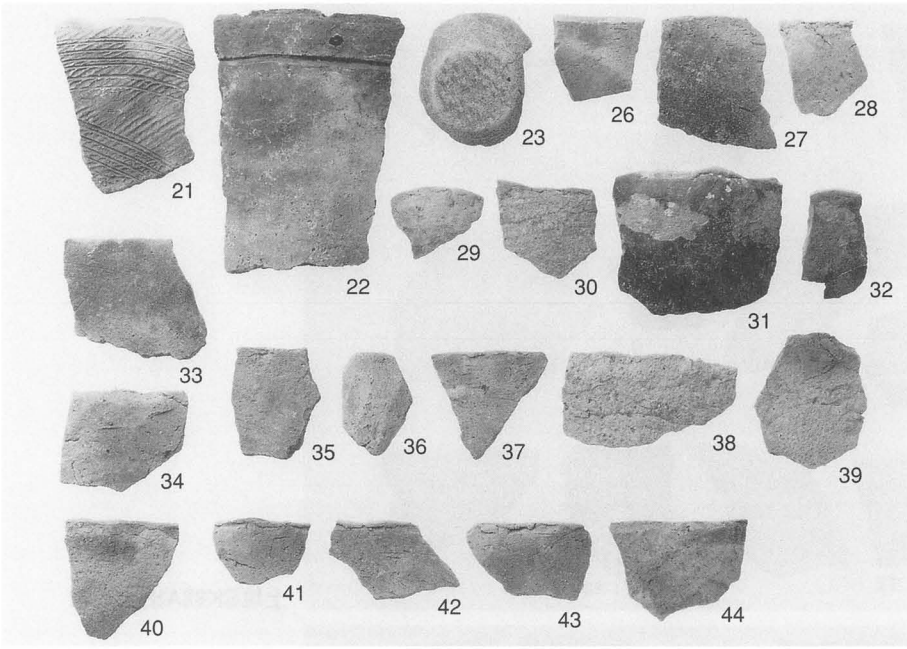
土坑SK88A出土遺物



土坑SK88A出土遺物



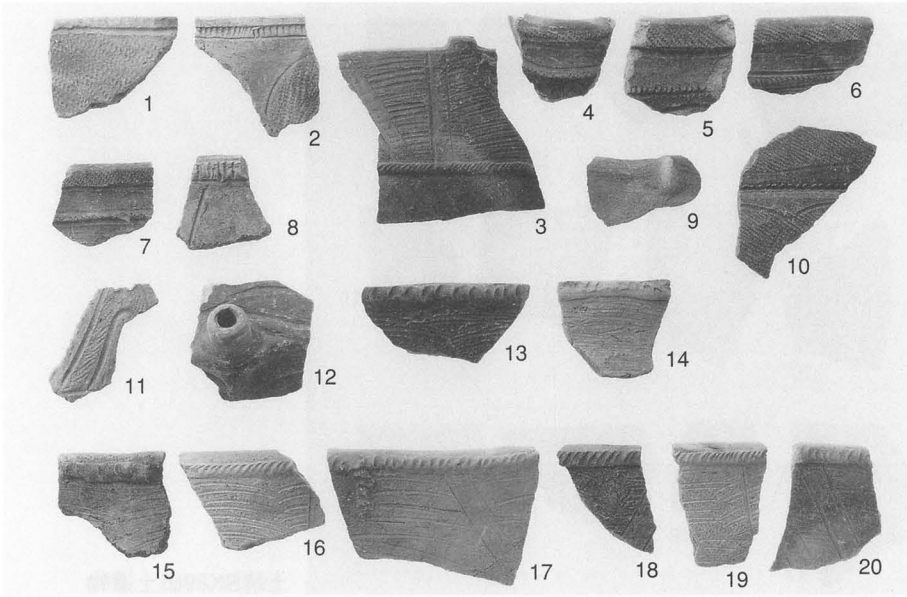
土坑SK89出土遺物



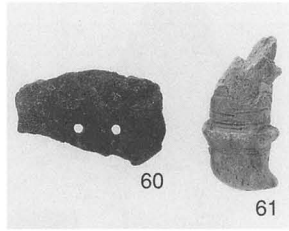
土坑SK89出土遺物

土坑SK89出土遺物

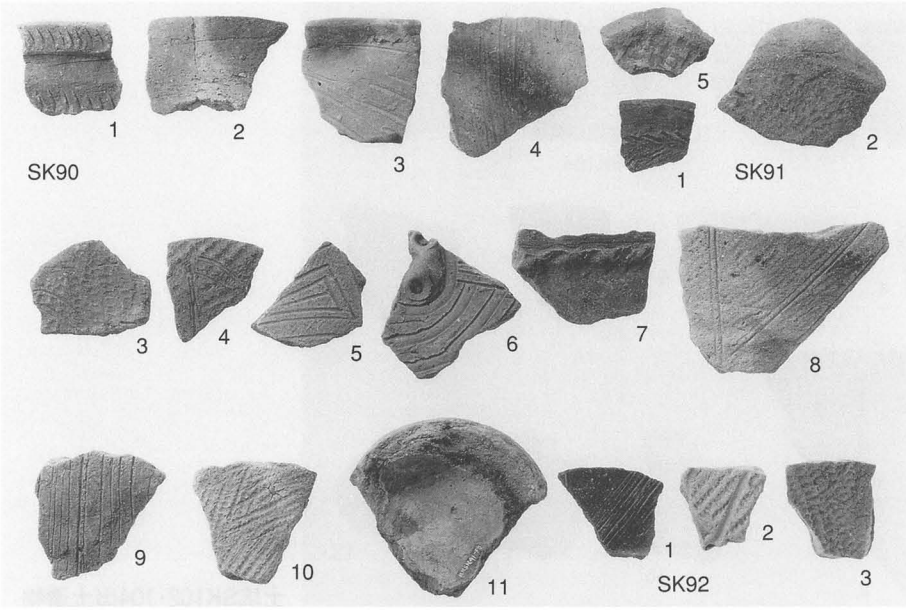
土坑SK89出土遺物



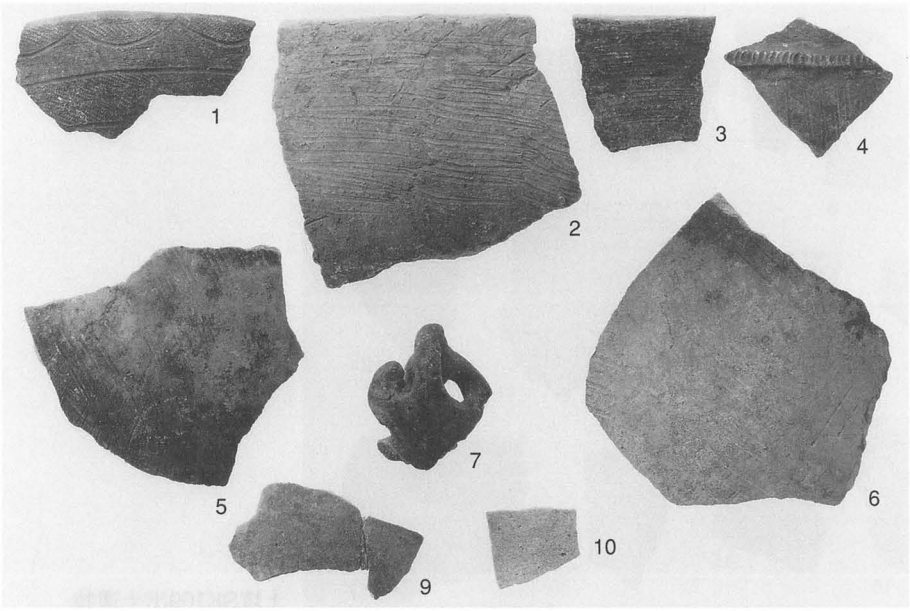
土坑SK94出土遺物



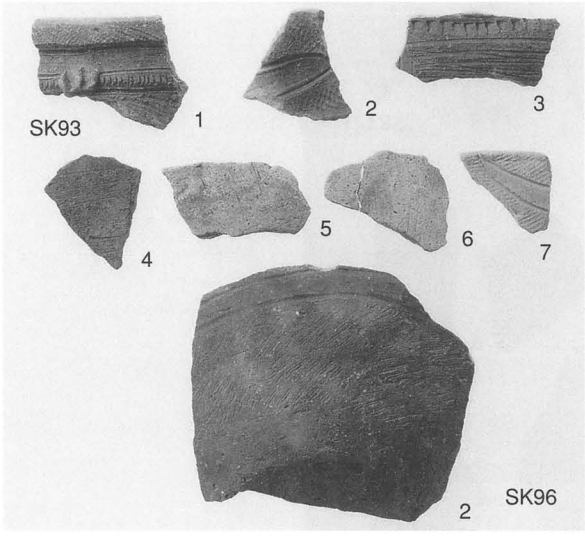
土坑SK94出土遺物



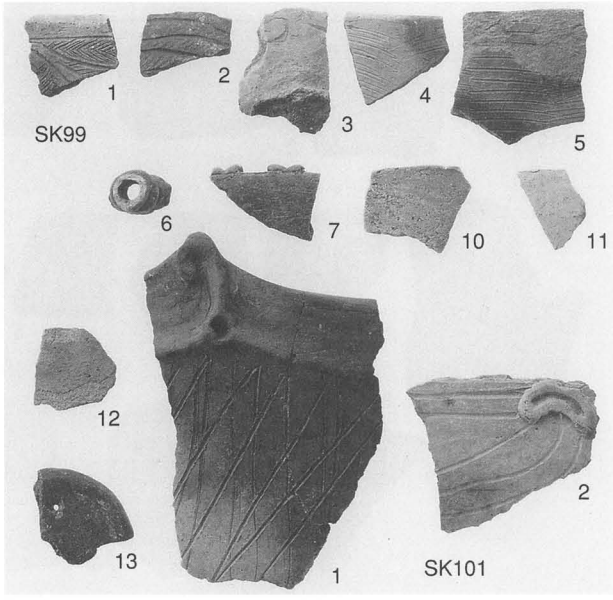
土坑SK90・91・92出土遺物



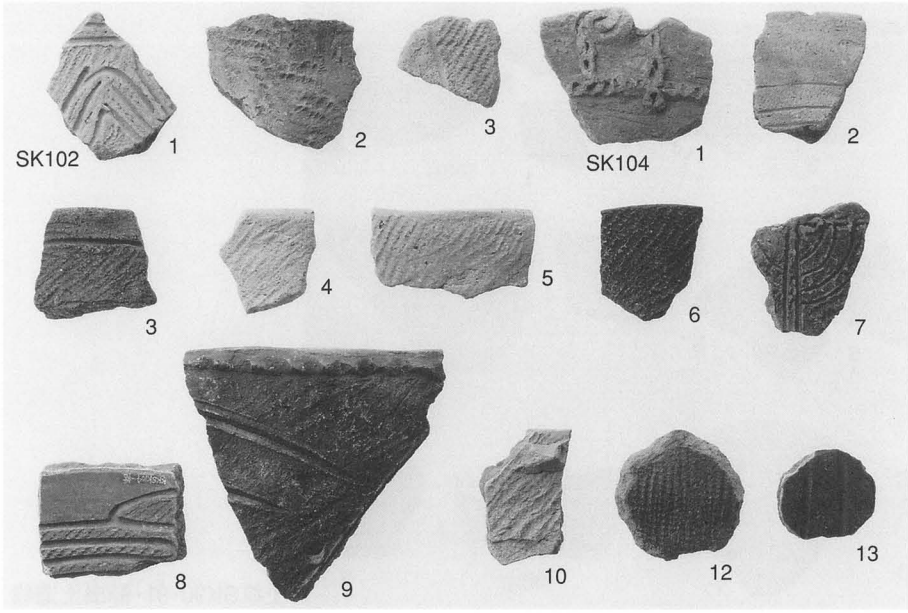
土坑SK97出土遺物



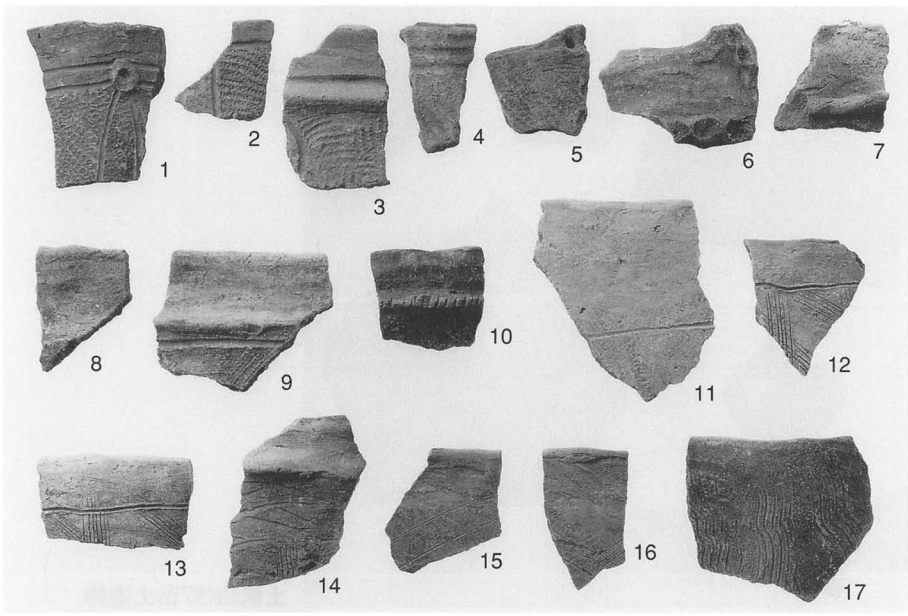
土坑SK93・96出土遺物



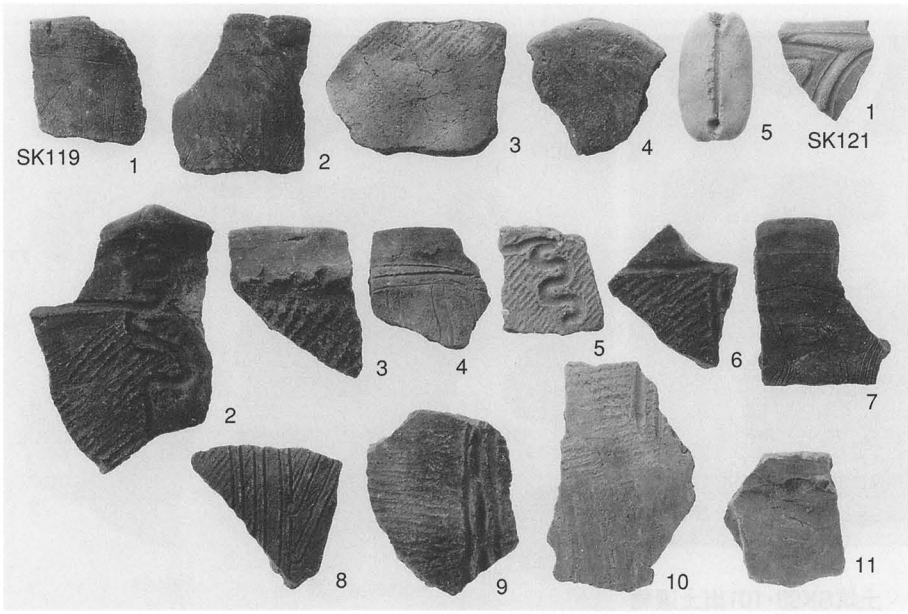
土坑SK99・101出土遺物



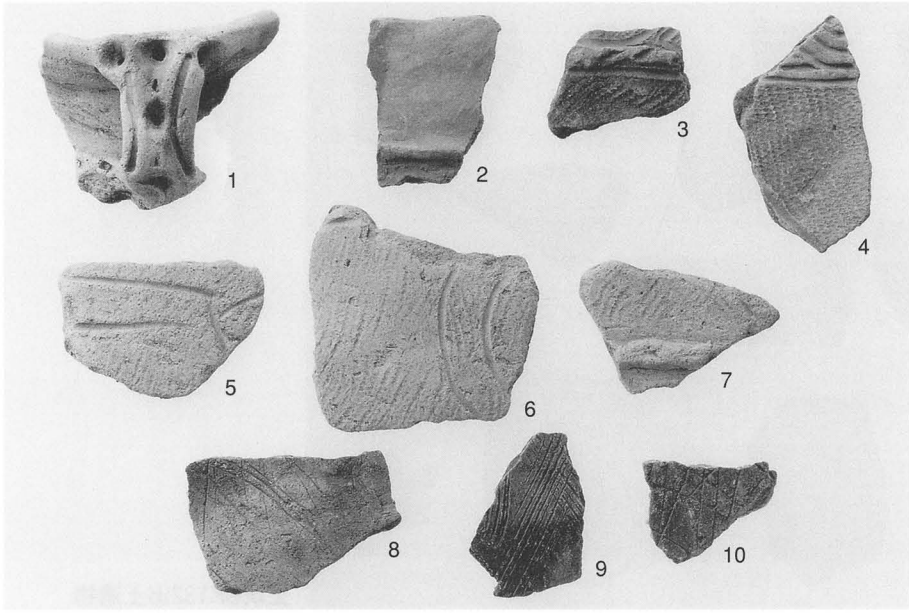
土坑SK102・104出土遺物



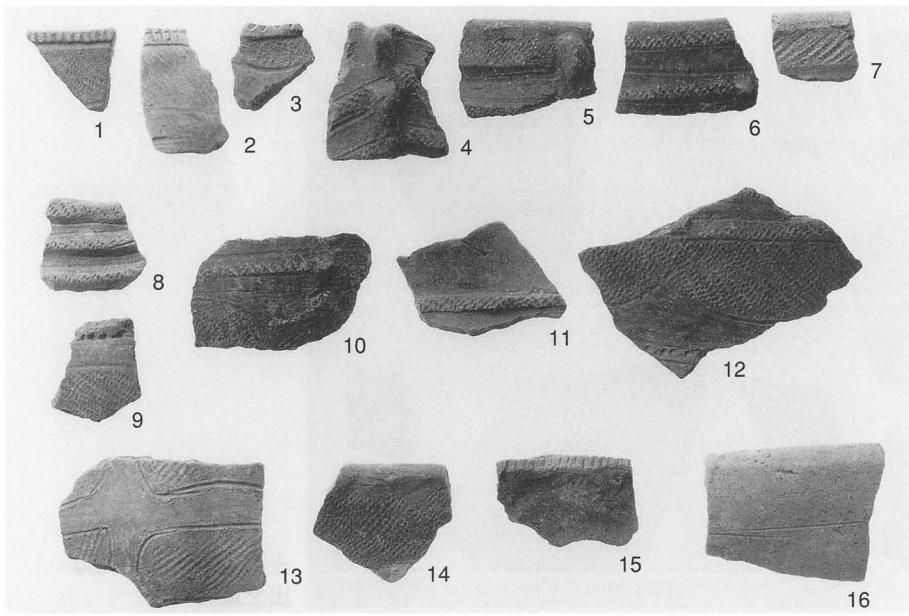
土坑SK109出土遺物



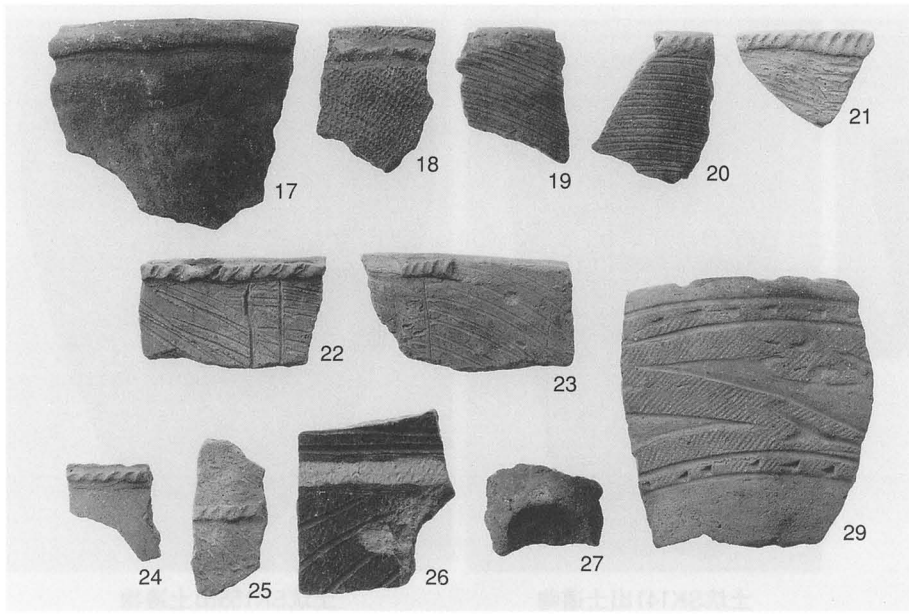
土坑SK119・121出土遺物



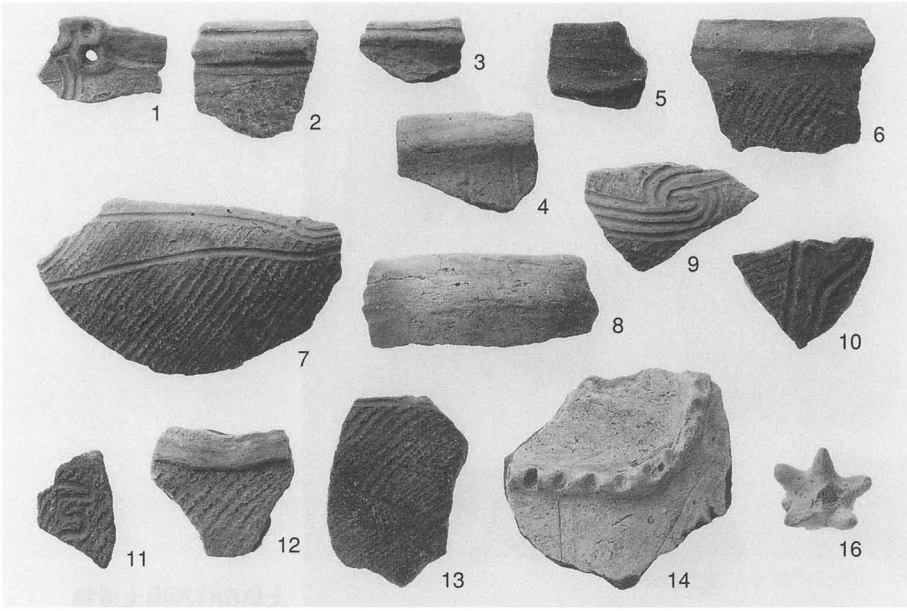
土坑SK120出土遺物



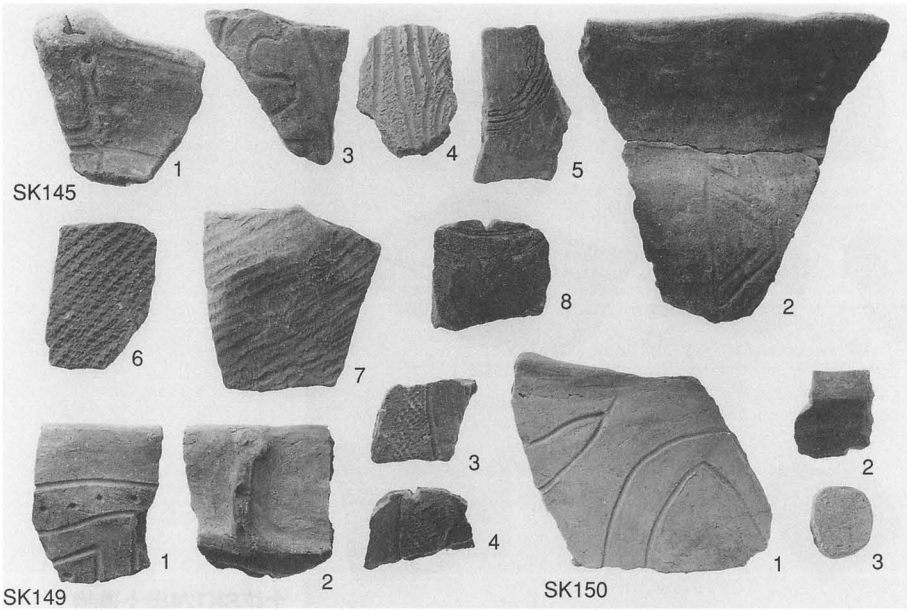
土坑SK124出土遺物



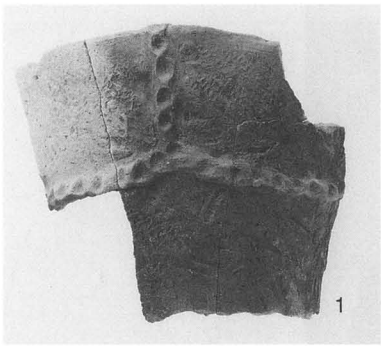
土坑SK124出土遺物



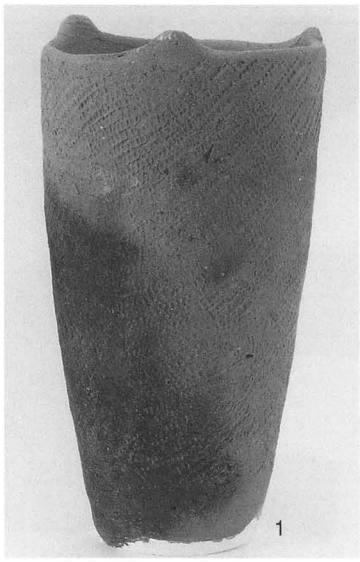
土坑SK132出土遺物



土坑SK145・149・150
出土遺物

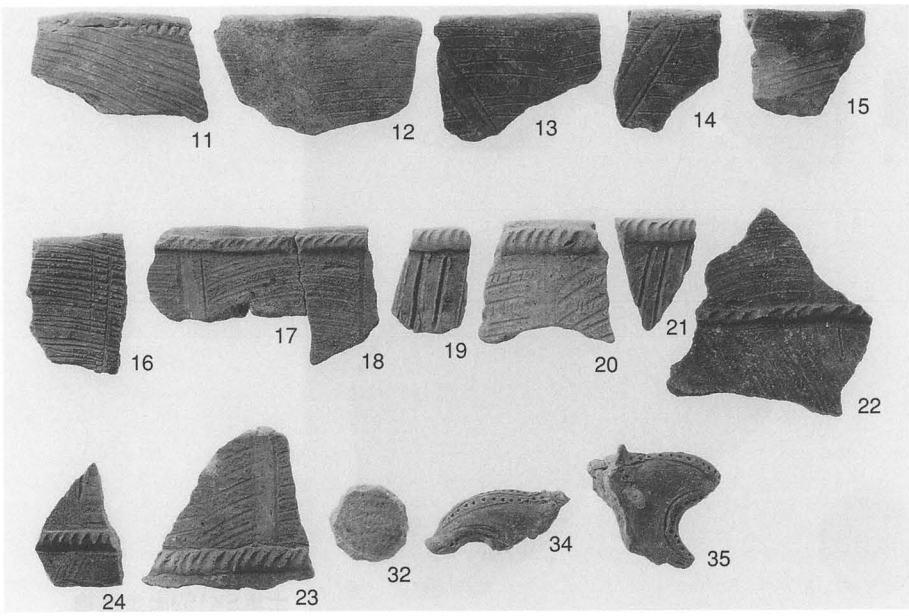


土坑SK129出土遺物

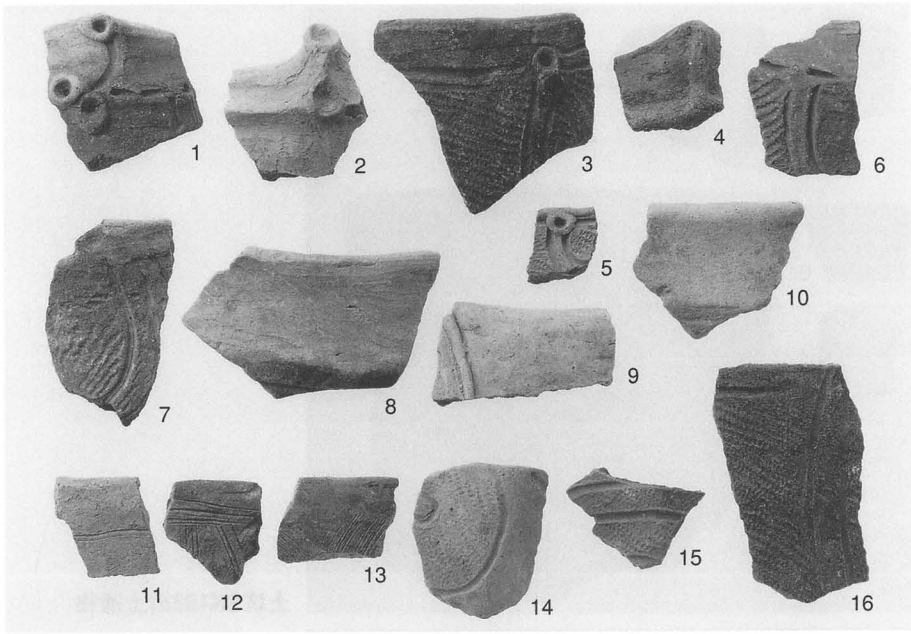


土坑SK141出土遺物

土坑SK155出土遺物



土坑SK155出土遺物

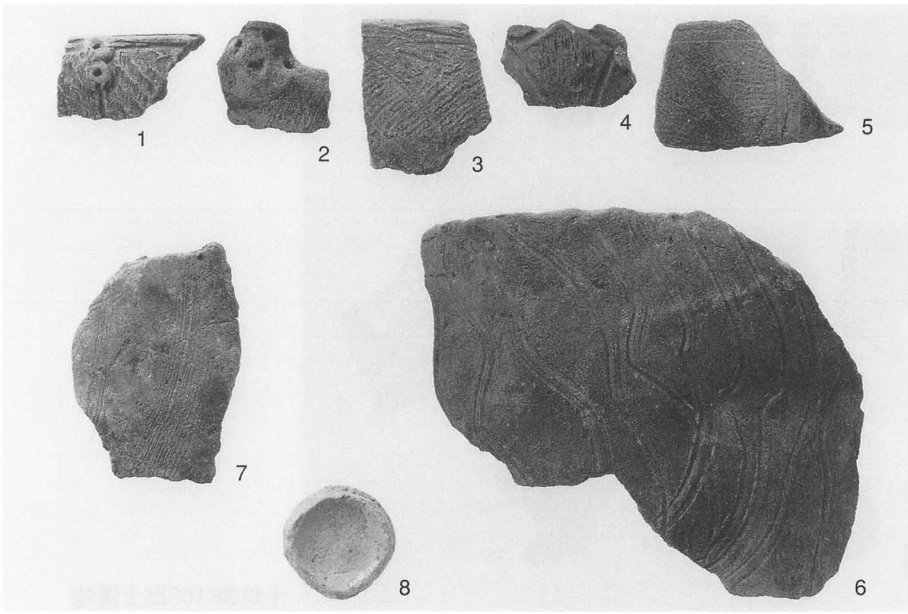


土坑SK157出土遺物

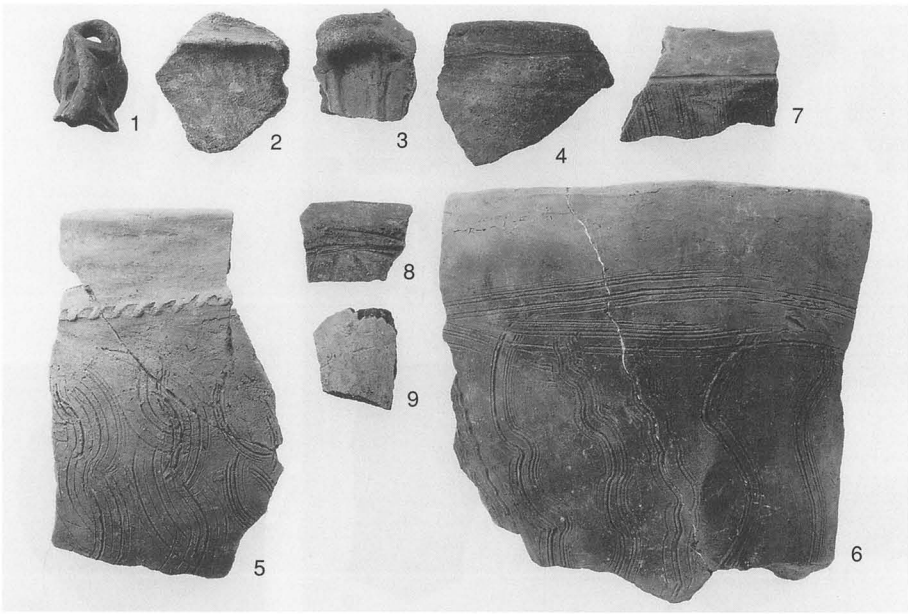
土坑SK157出土遺物

土坑SK157出土遺物

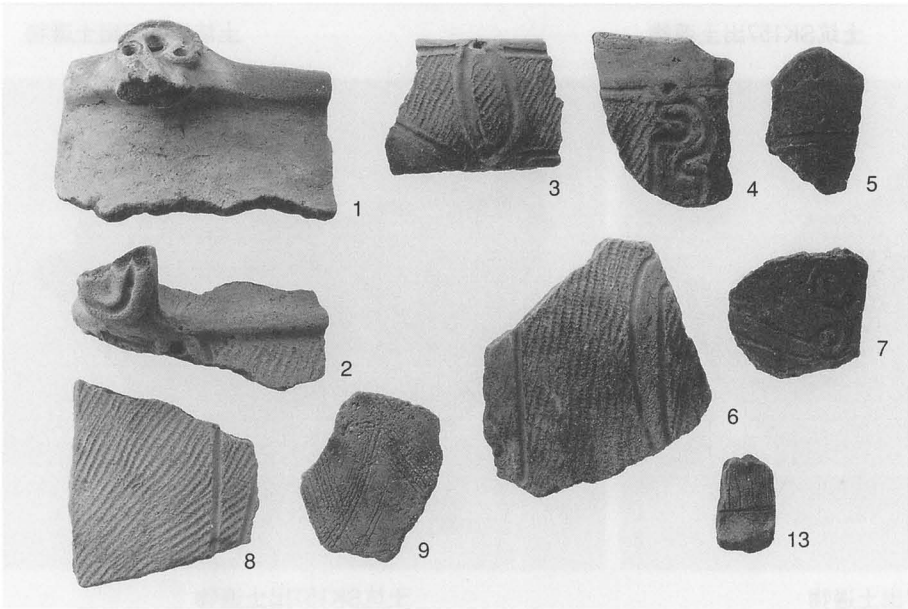
土坑SK157出土遺物



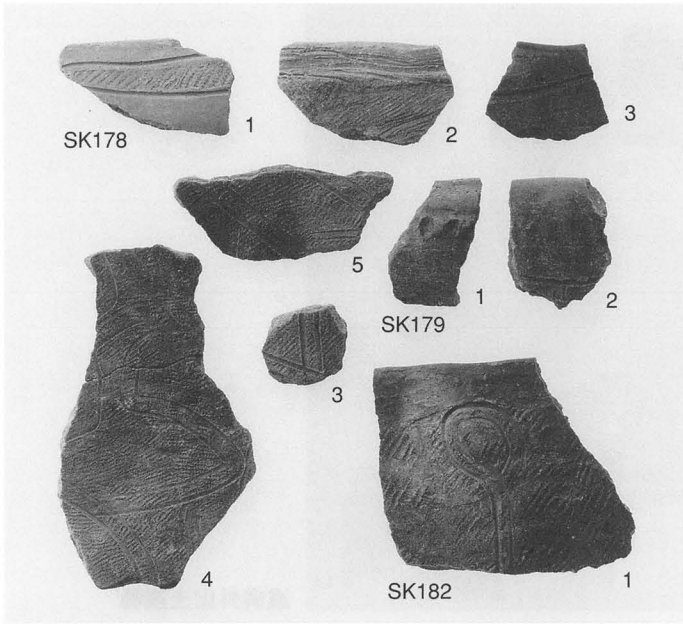
土坑SK159出土遺物



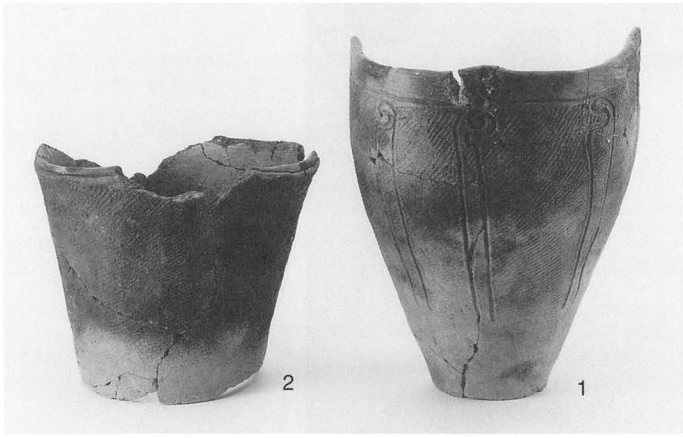
土坑SK163出土遺物



土坑SK166A出土遺物



土坑SK178・179・182出土遺物

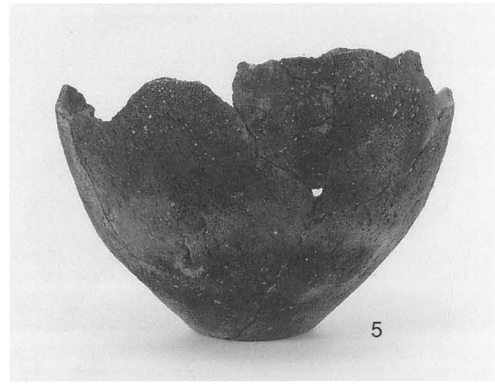


土坑SK180出土遺物

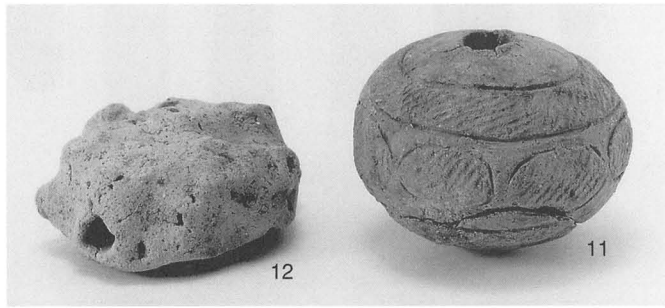
遺構外出土遺物

遺構外出土遺物

遺構外出土遺物

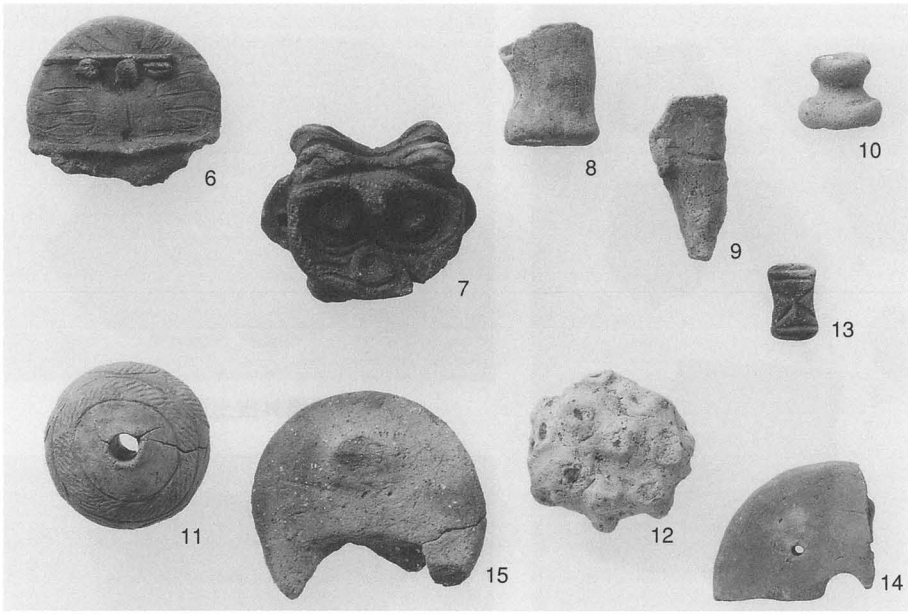


遺構外出土遺物

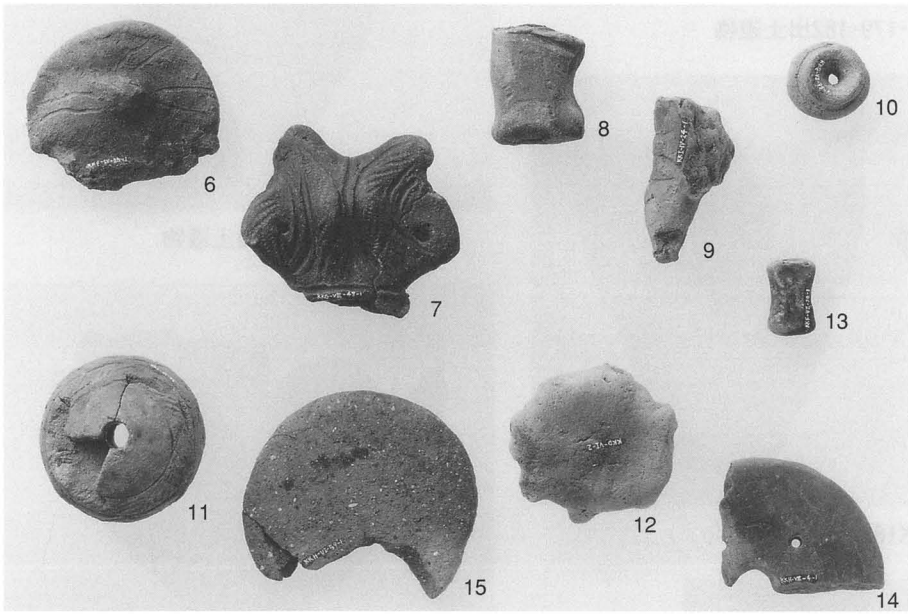


遺構外出土遺物

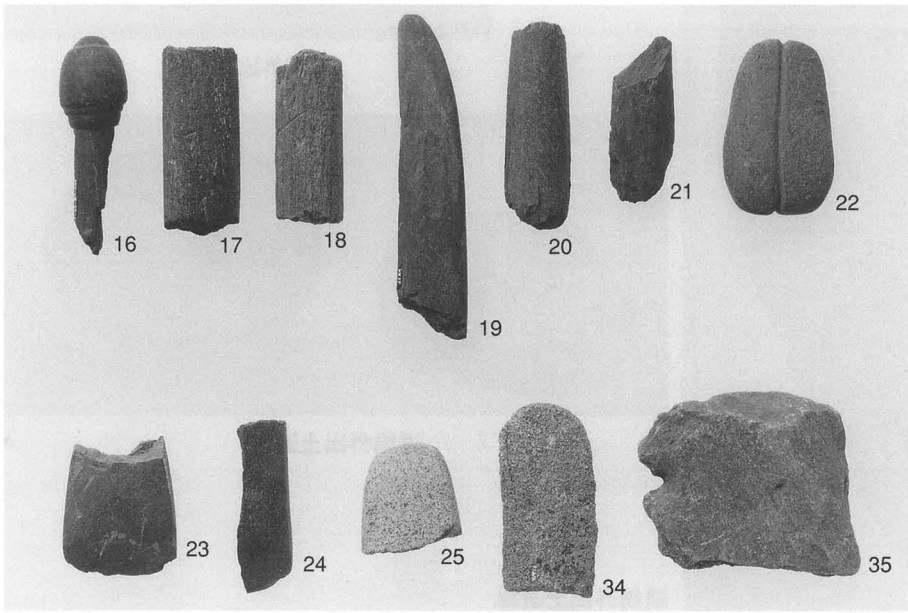
PL.60



遺構外出土遺物



遺構外出土遺物



遺構外出土遺物

報 告 書 抄 録

ふりがな	かんだつだいらいせき
書名	神立平遺跡
副書名	工場関連施設建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編者名	小川和博・大渕淳志・黒澤春彦
著者名	小川和博・大渕淳志・西本豊弘・小林園子・黒澤春彦
編集機関	神立平遺跡調査会
所在地	〒300−0811　茨城県土浦市上高津1843　上高津貝塚ふるさと歴史の広場内 TEL 029−826−7111
発行機関	土浦市教育委員会
所在地	〒300−4115　茨城県土浦市藤沢975番地
発行年月日	2009（平成21）年11月27日

所収遺跡	所在地	コード	北緯（新）	東経（新）	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
神立平遺跡（かんだつだいらいせき）	土浦市（つちうらし）神立町（かんだつまち）	08203446	36° 6′ 34″	140° 14′ 26″	20040803 〜 20041130	約3,800	工場関連 施設建設

所収遺跡名	種別	時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
神立平遺跡	集落跡	縄文時代 （中期〜 晩期）	竪穴住居跡30軒 土坑199基 ピット多数 貝ブロック 9箇所	縄文土器 （中期〜晩期） 製塩土器 土偶等土製品 石器（石棒等） 動物遺存体 （ハマグリ・サルボウ・シオフキ・イノシシ・シカ）	縄文時代後期から晩期の集落跡。 遺構の重複は激しい。貝ブロックも検出された。 遺物は縄文土器のほか、製塩土器、土偶、土製品、石器、動物遺存体などが出土した。

要約

谷の最奥部に面した台地上に立地する。縄文時代中期、加曾利E1式の土坑や土器がみられるが、集落が形成されたのは後期初頭の称名寺式期からである。晩期中葉の前浦式期までの集落が確認された。中心となるのは堀之内1式期から加曾利B式期である。土坑の多くは後期前半であるが、後期後半、曽谷式期から安行1式期の井戸状を呈する土坑も検出された。住居跡や土坑から貝ブロックが9箇所発見された。

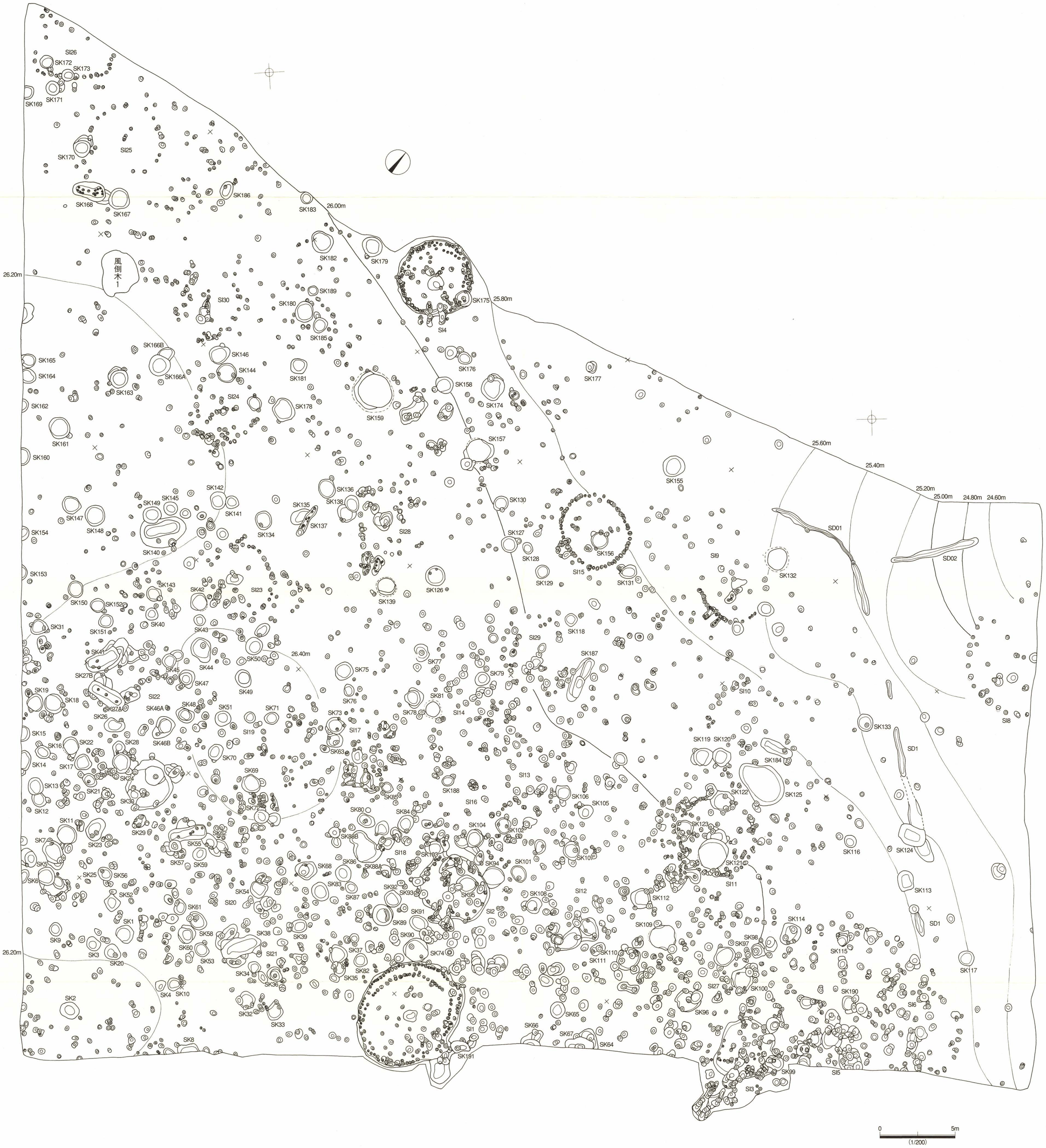
遺物では、縄文土器のほか、土偶、土版、耳飾り、土製円板などの土製品、石棒、石刀、石剣などの石器が出土した。土器では曽谷式期以降、製塩土器が目立つようになる。貝はハマグリ、オキシジミ、シオフキなどが主体で、動物ではイノシシやシカが多い。

本遺跡は後期から晩期にかけての中核的な集落と思われる。

神立平遺跡

工場関連施設建設事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

発行日　2009（平成21）年11月27日
編　集　神立平遺跡調査会
発　行　土浦市教育委員会
問合せ先　上高津貝塚ふるさと歴史の広場
〒300－0811　茨城県土浦市上高津1843
印　刷　いばらき印刷株式会社



0 5m
(1/200)

付図１　遺構配置図